



日本漢文史

籍叢刊

策中輯

政書

九



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

圖書在版編目(CIP)數據

日本漢文史籍叢刊. 第6輯, 職官等 / 粟品孝, 孫錦泉,
周斌主編 — 上海: 上海交通大學出版社, 2015

ISBN 978-7-313-13813-2

I. ①日… II. ①粟… ②孫… ③周… III. ①日本—歷史—
史籍—叢刊②典章制度—日本③官制—日本 IV. ①K313-55

中國版本圖書館 CIP 數據核字(2015)第 229494 號

日本漢文史籍叢刊 第六輯 職官等

主 編 粟品孝 孫錦泉 周 斌

上海交通大學出版社出版發行 北京人天書店有限公司經銷

(上海市番禺路 951 號 郵政編碼 200030)

電話: 64071208 出版人: 韓建民

江蘇鳳凰數碼印務有限公司印刷

開本: 889mm×1194mm 1/16

總印張: 912.75 總字數: 18367 千字

2015 年 10 月第 1 版 2015 年 10 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-313-13813-2/K

定價: 貳萬叁仟捌佰 圓(全二十八冊)

版權所有 侵權必究

告讀者: 如發現本書有印裝質量問題請與印刷廠質量科聯繫

聯繫電話: 025-83657309

統 籌 陳建華 施 維 劉邦權

責任編輯 陳建華 劉邦權

裝幀設計 陳燕靜

第六輯目錄

第一冊目錄（總第143冊）

職官

官制

職官志

（序、卷一—卷七、跋）

職原鈔

（上卷—下卷、補遺、後附）

職原略抄

（序、附錄、增補）

職原抄引事大全

（卷目、卷首、卷一—卷九）

職原抄支流

（目錄、卷一—卷五）

官職秘鈔

（卷上）

第二冊目錄（總第144冊）

官職秘鈔

續（卷下）

官職名

官職名問答

本朝官制沿革圖考

（序、目次、卷之一—卷之六）

補任

公卿補任

（目次、凡例、序、前編）

一

一二一

一八五

二二一

四四九

四九三

一

三一

四五

五九

一一一

延喜式 續(卷六、卷三十三) 一

第十四冊目錄(總第156冊)

延喜式 續(卷三十四、卷五十、考異卷一、卷五十、附錄) 一

御成敗式目 四二三

無刑錄 (序、目錄、序解、蘆東山傳、卷一、卷二) 四四三

第十五冊目錄(總第157冊)

無刑錄 續(卷三、卷七) 一

法曹至要鈔 (目錄、卷上、卷中、卷下) 九七

聽訟彙案 (卷一、卷三) 一六七

刑經 二二七

公用文例 頭書諸規則 二四五

典禮 通制 邦計

名目鈔 二九七

儀式 (卷一、卷十) 三二三

江家次第 (目錄、卷一) 四七三

第十六冊目錄(總第158冊)

江家次第 續(卷二、卷十五、卷十七、卷二十) 一

新撰姓氏錄抄 (卷一、卷三十) 三九七

內裏式 (卷上) 四九一

第十七冊目錄(總第159冊)

内裏式 續(卷中、卷下) 一

本朝改元考 十七

畿内治河記 二九

奥羽海運記 四一

邦交

善鄰國寶記 (序、卷上、卷中、卷下、跋) 五一

異稱日本傳 (序、目錄、卷上、卷中、卷下) 一〇七

元寇紀略 (序、書目、卷上、卷下、年表、跋) 四七一

第十八冊目錄(總第160冊)

鄰交徵書初篇 (序、凡例、卷一、卷二) 一

顯承述略 (序、例言、書目、卷一~卷九) 四九

顯承述略續 (題言、目錄、書目拾遺、卷一~卷十一、後序) 一二七

外蕃通略 一二一

筆話 雞壇嚶鳴 二四九

征韓雜誌 二九一

征韓偉略 (卷一~卷五) 三〇三

史評

国史論贊評点初編 (序、例言、卷上、卷下) 三八三

世皇朝史論 (序、凡例、目錄、卷之一~卷之四) 四二三

國史纂論 (序、凡例、姓名、卷一) 五二三

第十九冊目錄（總第161冊）

國史纂論 續（卷二—卷十、跋）

六雄八將論

讀史末議（序、目錄、卷上、卷下）

國史評林（記事、序、引、例言、目次、卷一—卷八）

澹泊史論（傳、目錄、卷上、卷下、附錄、跋）

第二十冊目錄（總第162冊）

史論（卷上、卷下）

新策（序、例言、總目、卷一—卷六）

新論（卷上、卷下）

中興鑑言

白石遺文 拾遺（傳、目錄、卷上、卷下、拾遺）

日本外史評論（例言、書目、卷一—卷七）

日本外史新論（序、自序、卷上、卷下）

日本外史纂論（序、例言、姓名、卷一—卷四）

第二十一冊目錄（總第163冊）

日本外史纂論 續（卷五—卷十二）

讀史贅議（序、卷上、卷下）

類書

拾芥抄（目錄、卷上、卷中、卷下）

類聚國史 (序、凡例、卷一—卷五、卷八—卷十一、卷十四—卷十六、卷十九、卷廿五、卷廿八、卷卅一—卷卅六、卷四十、

卷五十四、卷六十六、卷六十七)

二九三

第二十二册目錄 (總第164册)

類聚國史 續 (卷七十一—卷七十五、卷七十七—卷八十、卷八十三—卷八十四、卷八十六—卷八十九、卷九十九、卷百一、卷百七、

卷百卅七、卷百五十九、卷百六十五、卷百七十一、卷百七十三、卷百七十七、卷百七十八—卷百八十、卷百八十二、

卷百八十五—卷百八十七、卷百八十九、卷百九十、卷百九十三、卷百九十四、卷百九十九、考異上、考異中、考異下、跋)

..... 一

第二十三册目錄 (總第165册)

和漢三才圖會 (序、凡例、大目錄、後序、總目錄、卷一—卷十九、卷二十四—卷四十)

..... 一

第二十四册目錄 (總第166册)

和漢三才圖會 續 (卷四十一—卷五十一、卷五十三—卷七十二)

..... 一

第二十五册目錄 (總第167册)

和漢三才圖會 續 (卷七十三—卷百四)

..... 一

第二十六册目錄 (總第168册)

和漢三才圖會 續 (卷百五)

..... 一

和漢名數大全 (正編)

..... 十九

和漢名數大全 (續編)

..... 八五

和漢名數大全 (三編)

..... 一六一

倭名類聚抄 (凡例、序、卷一—卷二十)

..... 二二五

箋注倭名類聚抄 (序、凡例、卷一)

..... 四七七

第二十七册目錄 (總第169册)

箋注倭名類聚抄 續（卷一—卷五）……………一

第二十八冊目錄（總第170冊）

箋注倭名類聚抄 續（卷五—卷十）……………一

附錄

日本紀年表……………五〇五

日本幕府將軍表……………五一

《日本漢文史籍叢刊》總目錄……………五三

第九冊目錄（總第151冊）

大寶令新解	續（目次、第三卷、第四卷）	一
大寶令新解	續（目次、第五卷、第六卷、第七卷）	一〇五
大寶令新解	續（目次、第八卷、第九卷、第十卷、附錄）	二二七
類聚三代格（弘化本）	（卷一、卷三、卷四、卷五）	三四七

陸美昌保著

大寶令新解

二

越中 橘井堂藏

大寶令新解第二冊目次

第二卷

第九篇 田令

一	田租條	二五
二	口分田條	二五
三	位田條	二五
四	職分田條	二五
五	功田條	二五
六	非其主人條	二五
七	官位解免條	二五
八	應給位田條	二五
九	應給功田條	二五
一〇	諸國公田條	二五
一一	別勸賜田條	二五
一二	寬鄉田條	二五
一三	來鄉田條	二五

目次

大

一五	給田地條	二五
一六	課桑課條	二五
一七	宅地賣買條	二五
一八	因王事沒落外	二五
一九	舊條	二五
二〇	賃租條	二五
二一	從便近條	二五
二二	六年一班條	二五
二三	公田返還條	二五
二四	班田條	二五
二五	授田條	二五
二六	田有交錯條	二五
二七	官人百姓條	二五
二八	官戶奴婢田條	二五
二九	水害條	二五
三〇	荒廢田條	二五
三一	論田條	二五

三一	在外諸司職分	二五
三二	田條	二五
三三	田條	二五
三四	田條	二五
三五	田條	二五
三六	田條	二五
三七	田條	二五
三八	田條	二五
三九	田條	二五
四〇	田條	二五
四一	田條	二五
四二	田條	二五
四三	田條	二五
四四	田條	二五
四五	田條	二五
四六	田條	二五
四七	田條	二五
四八	田條	二五
四九	田條	二五
五〇	田條	二五
五一	田條	二五
五二	田條	二五
五三	田條	二五
五四	田條	二五
五五	田條	二五
五六	田條	二五
五七	田條	二五
五八	田條	二五
五九	田條	二五
六〇	田條	二五
六一	田條	二五
六二	田條	二五
六三	田條	二五
六四	田條	二五
六五	田條	二五
六六	田條	二五
六七	田條	二五
六八	田條	二五
六九	田條	二五
七〇	田條	二五
七一	田條	二五
七二	田條	二五
七三	田條	二五
七四	田條	二五
七五	田條	二五
七六	田條	二五
七七	田條	二五
七八	田條	二五
七九	田條	二五
八〇	田條	二五
八一	田條	二五
八二	田條	二五
八三	田條	二五
八四	田條	二五
八五	田條	二五
八六	田條	二五
八七	田條	二五
八八	田條	二五
八九	田條	二五
九〇	田條	二五
九一	田條	二五
九二	田條	二五
九三	田條	二五
九四	田條	二五
九五	田條	二五
九六	田條	二五
九七	田條	二五
九八	田條	二五
九九	田條	二五
一〇〇	田條	二五

八	封戶條	三六
九	水旱蟲霜條	三六
一〇	逃竄圖條	三六
一一	驅役免役條	三六
一二	四季驅役條	三六
一三	渡口給侍條	三六
一四	寬狹移居條	三六
一五	沒蕃外蕃條	三六
一六	公使歸朝條	三六
一七	孝子順孫條	三六
一八	三位以上條	三六
一九	舍人史生等條	三六
二〇	除名未叙人條	三六
二一	一年驅役免除條	三六
二二	雇役下條	三六
二三	差科條	三六
二四	丁匠名額條	三六
二五	丁匠欠身條	三六
二六	役丁匠條	三六
二七	大醫道條	三六

一八	丁匠在役通喪條	三六
一九	藥製條	三六
二〇	斟量功條	三六
二一	丁匠往假條	三六
二二	丁匠死以條	三六
二三	晝作夜休條	三六
二四	車牛人力條	三六
二五	諸國貢賦條	三六
二六	立牌坊里條	三六
二七	令條外雜條	三六
二八	仕丁條	三六
二九	親屬國免庸條	三六
三〇	博士助教條	三六
三一	大學生條	三六
三二	釋奠條	三六
三三	學生爲序條	三六
三四	明經教科書條	三六
三五	教授正業條	三六
三六	大經條	三六

第四卷

八	紙書通讀考儀條	三八
九	分經教授條	三八
一〇	考課等級條	三八
一一	通二經條	三八
一二	講說文才條	三八
一三	算經條	三八
一四	國郡司解縣條	三八
一五	習字學生條	三八
一六	學生請暇條	三八
一七	飯不得使學生條	三八
一八	無音樂雜戲條	三八
一九	學生忌服條	三八
二〇	田畝授衣服條	三八
二一	被退校條	三八
二二	令範儀式條	三八
二一	叙位大別條	三八
二	驅役條	三八
三	選叙令	三八

三	任官大別條	三六
四	驅役條	三六
五	兼任官條	三六
六	行守條	三六
七	將近親採用條	三六
八	在官死以條	三六
九	來判遺役條	三六
一〇	計考應遺條	三六
一一	散位條	三六
一二	考滿應叙條	三六
一三	郡司條	三六
一四	舍人史生叙任條	三六
一五	郡司軍國條	三六
一六	帳內賁人條	三六
一七	本土死以條	三六
一八	以理解者條	三六
一九	帳內勞滿條	三六
二〇	官人赴任條	三六
二一	老人辭職條	三六
二二	處勞條	三六

二三	類狂酒亂條	三六
二四	散位庇匿條	三六
二五	位記紛失條	三六
二六	位記錯誤條	三六
二七	國博士條	三六
二八	隨國則補條	三六
二九	秀才進士條	三六
三〇	秀才出身條	三六
三一	兩廬出身條	三六
三二	養嗣子條	三六
三三	贈官條	三六
三四	授位條	三六
三五	祿皇親條	三六
三六	考滿應叙條	三六
三七	除名應叙條	三六
三八	五位以上子出	三六
三九	身條	三六
四〇	第十三篇 禮制令	三六
四一	親王諸王條	三六
四二	三位以上相續條	三六

三	定五位以上請	三六
四	子條	三六
五	王妻親王條	三六
六	第十四篇 考課令	三六
七	內外官條	三六
八	官國行狀事跡條	三六
九	第一善備義條	三六
一〇	第二善備慎條	三六
一一	第三善公平條	三六
一二	第四善修勤條	三六
一三	最條	三六
一四	神祇官條	三六
一五	納官條	三六
一六	辨官條	三六
一七	中務條	三六
一八	式部官條	三六
一九	治部官條	三六
二〇	民部條	三六
二一	兵部條	三六
二二	刑部條	三六

二 大

一	給季禮條……………四三
二	四季分給條……………四六
三	內舍人給祿條……………四九
四	行守給祿條……………四九
五	給祿停止條……………四〇
六	初任官給祿條……………四二
七	養祿條……………四三
八	兵衛給祿條……………四三
九	宮人給祿條……………四三
一〇	食封條……………四三
一一	皇親條……………四三
一二	頻以上條……………四三
一三	功封條……………四三
一四	寺不給食封條……………四六
一五	介條外特封條……………四六

第十五篇 職令

一七	大藏條……………六四
一八	宮內條……………六四
一九	彈正官條……………六五
二〇	京職條……………六五
二一	主膳官條……………六五
二二	新府條……………六五
二三	雅樂官條……………六五
二四	主事官條……………六五
二五	主計官條……………六六
二六	主税官條……………六七
二七	馬寮官條……………六七
二八	兵庫官條……………六七
二九	侍從條……………六八
三〇	監物條……………六八
三一	內舍人條……………六八
三二	次官條……………六八
三三	褒貶必當條……………六九
三四	判官條……………六九
三五	廣官條……………六九
三六	主典條……………七〇

二七	文吏條……………七〇
二八	內記條……………七〇
二九	博士條……………七〇
四〇	占候將卜條……………七〇
四一	曆師條……………七〇
四二	市司條……………七〇
四三	解部條……………七〇
四四	太宰條……………七一
四五	國司條……………七一
四六	國攝條……………七一
四七	防司條……………七一
四八	國司條……………七一
四九	分番考試條……………七一
五〇	兵衛考第條……………七一
五一	衛門考第條……………七一
五二	國郡司考課條……………七一
五三	國郡司保戶口……………七一
五四	國郡司功條……………七〇
五五	官制附屬條……………七〇

五六	官員犯罪等級條……………七二
五七	內外初位條……………七二
五八	任二官條……………七二
五九	大貳以下條……………七二
六〇	內外官人條……………七二
六一	應考官條……………七二
六二	官人犯罪條……………七二
六三	殊功異行條……………七二
六四	家令條……………七二
六五	考外官條……………七二
六六	考郎司條……………七二
六七	國博士條……………七二
六八	考帳內賣人條……………七二
六九	考賣人條……………七二
七〇	秀才條……………七二
七一	明經條……………七二
七二	進士條……………七二
七三	明法條……………七二
七四	貢舉人條……………七二
七五	貢人條……………七二

大寶令新解 第二卷

第九篇 田 令 凡參拾漆條

田畠の法令なり、

田 ○田は、義解に、五穀を植る地也とあり、説文に、穀を樹るを云ふ、爾雅に、樹す處を田と云ふ、周禮に、穀は五種に宣し、鄭玄云く、黍、稷、粟、麥、稻とす、五穀の諸説は略す

右五字は其種別の總稱と看なして可也、但は水田、火田の二種に大別す、

第一條

段町條

凡田、長三十步、廣十二步、爲段。十段爲町。段租稻二束
二把。町租稻二十二束。

凡て田地の長さ三十間、廣さ十二間則ち三百六十坪を一段とす、二十六百坪を町とす、一段の税は一斗一升にして、一町の税は一石一斗とする也、

段 ○束は、十把にして一把の米が五合見積りなり、○步は、長さ六尺、幅し五尺の時もあ

大寶令新解 第三卷 第九篇 田 令 二四一

凡田租、准國土收穫早晚、九月中旬起輸、十二月三十日以前納畢、其春米運京者、正月起運、八月三十日以前納

第二條 田租條

凡田租、准國土收穫早晚、九月中旬起輸、十二月三十日以前納畢、其春米運京者、正月起運、八月三十日以前納

凡給口分田者、男二段、女減三分之二、五年以下不給、其地有寬狹者、從鄉土法、易田倍給、給訖、具錄町段及四

第三條

口分田條

大寶の時代にては、日本全國の地處は、悉皆官有にして、今の如く個人私有の地所なし、依りて、男には一人當り二段則ち七百二十坪、女は其三分の二則ち四百八十坪宛終身給はりて耕作

至

大寶の時代にては、日本全國の地處は、悉皆官有にして、今の如く個人私有の地所なし、依りて、男には一人當り二段則ち七百二十坪、女は其三分の二則ち四百八十坪宛終身給はりて耕作
出來得る事になりてありしなり、但し五歲以下の小兒は此割當の恩には浴せざる也、而して、
國郡により、人口の疎密ありて其田地に自然適利不足を生ずる譯となり、故に田地多き則ち廣
き國郡にても二段より餘分には渡すべからず、又は不足則ち少なき時は二段の内さし渡して
宜しい、又た瘠地にして年々耕作出來ず隔年に耕作する地所は、二段の一倍則ち四段を給へよ
と云ふ、總て給渡方の始末は給渡次第第一々其田地の境界迄をも録し置けと也、
○口分田は、各人に給渡の田地なり、○寛狹は、廣さ狭きなり、一畝地處の面積狭きも
田地多ければ寛とするなり、地處廣きも、田地少なれば狹とす、○郷土法は、其所のキマリな
り、○易田は隔年に作る田なり、○四至は、其田の四方の界を云ふ、

第四條

位田條

凡位田、一品、八十町、二品、六十町、三品、五十町、四品、四十町、正一位、八十町、從一位、七十四町、正二位、

六十町。從二位、五十四町。正三位、四十町。從三位、三十四町。正四位、二十四町。從四位、二十町。正五位、十二町。從五位、八町。女減三分之二。

本條は、五位以上の有位の人に給はる田地なり、

第五條

職分田條

凡職分田、太政大臣、四十町、左右大臣、三十町。大納言、二十町。

本條は、役科則ち役扶持にして、今の職分とか云ふ如く、職務に就て給はる田地なり、但し解官し或は辭職等すれば、今の休職の如く、半減となる也、

第六條

功田條

凡功田、大功世世不絕。上功傳三世。中功傳二世。下功傳子。大功非謀叛以上、以外非八虐之除名、並不收。

本條は、國家に勳功ありし人に賜はる田地にして、凡て免租地なり、大功勳の家は永代傳とせ

り、上功は本人共四代の子孫まで給はり、中功は本人共三代の子孫まで、下功は其子まで給なり、但し大功の人は、謀叛以上の大罪を犯されば勳位褒章功田沒收の事なし、中功以下の人は、八虐の犯罪に非れば、功田沒收せらるゝ事なしと云ふ也、
○功田の例として、最も多大の恩典に浴せしは、光明皇后の祖父なる、藤原鎌足公が此田百町を給はりしにあり、八虐は、名例律に、謀反、謀大逆、謀叛、惡逆、不道、大不敬、不孝、不義の八罪也、而して功田の始末は、例之功勳ありし父が没するの後、其子の兄弟姉妹四人あれば、四人共均一の分配給與となる也、

第七條

非其土人條

凡給田、非其土人、皆不得狹鄉受。勅所指者、不拘此令。
田を給ふは、其土地の人でなければ、狹き郷土にて受くる事はならぬ、則ち歸化人、又は位田、職田の如きは、皆寛き郷土にて給與となるなり、但し勅命に依りて指定さるゝは此限に非ずと云也、

第八條

官位解免條

凡應給職田位田人、若官位之内有解免者、從所解免追。

其除名者、依口分列 若有賜田者亦追 當家之内、有官位及少口分應受者、並聽廻給、有乘追收

凡て職務料や、位階料を給はり居る人が、若し解職免官となれば、右の料は取上げざる事勿論であれ共、取り上げの後三年を無過せば、先きの位階より二等を下げて給出せよと云ふ也、例之は、正三位の位田が四十町、故に此人免官となれば三年後に二等を降して、正四位上に叙して、二十四町を給はる也、解官も亦同断とす、而して除名となる人は、一般人民に同じく、口分田即ち一家内の男女各人に當る分だけ給はる而し、若し在官中特に賜りたる田地ある事なれば、其賜田は前項位田の例の如く追賜せよ、但し口分田は一般人民の六年に二廻宛ある班田の年と云ふて其班田の廻り来る年を待て給へよ、而して、此追給に於て萬一過剰に給與したるならば、ソレは檢見次第取上げよと云ふ也、

○解免は、解官と、免職也、○除名は、官位奪奪也、○賜田は、特別の恩賜の田也、○當家は、其家の戸籍と云ふ如し、○廻給は、班田の年を待也、有乘追收は、過剰の廻給は後日徴收すると云ふ事、乘は剰の如し、

第九條 應給位田條

凡應給位田、未請、及未足而身亾者、子孫不合追請、

位階料として給はるべき田地を、種々の都合にて給はりの過ぎ時とか、又た不足して給はる本人死じするとかの場合に於ては、其遺族の子孫が之を追願して請くる事はならぬと云ふ也、

○合はマク也、○應も亦マク也、

第十條 應給功田條

凡應給功田、若父祖未請、及未足而身亾者、給子孫

本章第六條の如き功勤ある人が、功田を給はるべき等の職務々の都合にて、其給はりの遅れたとか、又た給はらぬ間に本人死じせば、子孫に給與せよと云ふ也、

○功田、は前述の如く、免租の田地なれ共、耕作人に於ては所有者即ち功田を有する家へは一般田租又は附帶する調及庸等の義務はするけれ共、所有者に於ては政府へ租税は納めぬ事である、

第十一條

諸國公田條

凡諸國公田、皆國司隨郷土估價賃租、其價送太政官、以定雜用

諸國の公田は、皆々地方官に於て、各地方の時價を以て農民に一年限りの契約を以て貸し知せしと云也、而して其作徳等は太政官へ送れ、太政官は之を雑用の費に充つる也。

○公田は、單に公田中の剩餘田とすべし、口分田、位田、職田、等皆公田とす、○估價は、皆直段と云ふ如し、○買とは、耕作の前則ち春期に於て、前金に税に當る分を取るを云ふ、租は一般の租と同じく、秋時收穫の上、一反に付き二束二把と云ふ如く租を收むるを云ふ、此一年限りの知し田を稱して地子と云ふ也、

第十二條

別勅賜田條

凡別勅賜人田者、名賜田。

○賜田は、特別の勅命に依りて賜はる田なり、例之は、日本紀略に延暦十七年九月乙丑の條にある如く、嵯後の國の田地二百五十町を、三品朝原の内親王に賜ふ、又た、三代實錄、元慶二年六月二日内貢の條に、三河國播磨郡の荒廢田、一百町を孟子内親王に賜ふて一身田と爲すとある如し、

第十三條

寬鄉田條

凡國郡界内、所部受田、悉足者、爲寬鄉、不足者、爲狹鄉。

凡て一國一郡の内にて、農民が受作する田地が充分あり餘る程の郡をば、廣き郷とせよ、其不足する地方をば、狹き郷とせよと也、

第十四條

狹鄉田條

凡狹鄉田不足者、聽於寬鄉逋受。

前條の如き田地不足の狹き郷に於ては、隣郡の廣き郷にて受作する事を許せと云ふ也、

第十五條

給園地條

凡給園地者、隨地多少均給、若絕戶還公。

桑や漆を栽培する地所を給はる事は、地面の多少に隨て各人均一に給へよ、若し一家斷絶の地合は、其地所を管轄廳へ返還させよ、但地所をば絶戸前に於て、自家が作れなくなりて他家へ賣り渡し則ち代作さして居る者や、又た一戸内にて一人にても存在する時は返地するに及ばぬと云ふ也、地處相當の數畝は下條を參考すべし、

○園地は、桑漆を栽ゆる地所、但し宅地も含有する者も看做すべし、

第十六條

課桑漆條

凡課桑漆、上戸、桑三百根、漆一百根以上、中戸、桑二百

根、漆七十根以上、下戸、桑一百根、漆四十根以上、五年
種畢、郷土不宜、及狹郷者、不必滿數、

家族の最も多人数の家には、桑の本三百本、漆の樹百本以上、中等人数の家には、桑二百本、漆七十本、少數家族の家には、桑百本、漆四十本以上を五年の間に於て、豫て分配しある園地に植せよ、若し其地方に由て、土性適濟せざるとき、或は地所の少き郷にては必ずしもコレだけ植ふるには及ばぬと云也、

○上中下戸等は、法文に其戸級九等は見へざれ共、上の上、上の中、上の下と云ふ如くに九級ある者として、植樹も亦其數に等級あるものと推知すべし、凡て臨時人口調査の事は、郡吏等に於て定むる也、第二編六十八條條津職、第十四篇考課令の第五十一、五十二、五十四條等参考して可也、○課は、コ、ではオスとす、負債と云ふ如し、

第十七條

宅地賣買條

凡賣買宅地、皆經所部官司、申牒、然後聽之、

凡て宅地を賣買する時には、所轄の役所に届出て後に許せ、今の登記所の如し、後日爭論を生ぜざら令むる爲也、

第十八條

因王事沒落外蕃條

凡因王事沒落外蕃不還、有親屬同居者、其身分之地、十年乃追、身還之日、隨便先給、則身死王事者、其地傳子、

公用にて、外國に往きて還らず、其生死不明の者、或は其家に親屬が同居して居るとか云ふ時には、其本人に當り有りし日分川、又は位田とか、賜田とか云ふ田地は、十ヶ年に滿たざれば奉還するな、又た本人歸國したと云ふ曉には、便宜成るべく早く給與せよ、若し戰爭等の場合にして、此の如き事あらば、其田地は其子供に傳へよ、本人一人にして家族なく、親屬同居の時、五等親以上の者ならば、其子の代りに親屬に與へよと云ふ也、

○王事は、朝廷の御用し、戰爭の用とを含めり、第八篇、戸令の第十六條にある外蕃に沒落云々の法文とは、其意を展にせり、戸令の方は普通人の普通事とすべし、

第十九條

賃租條

凡賃租田者、各限一年、園任賃租及賣、皆須經所部官司、申牒、然後聽、

本條は、第十一條と十七條を併合したる如きの條なり、凡て公田中の餘剩田を賣し作らする時

は、皆一年極めとすべし、桑湊を植ゆる圃地は、既に耕作し居る者より隨意に他人に小作又は賣渡してよろしい、然れ共皆其所轄の役所に出願したる後に許せし也、

第二十條

從便近條

凡給口分田、務從便近。不得隔越。若因國郡改隸、地入他境、及犬牙相接者、聽依舊受本郡、無田者、聽隔郡受。

各人に割當給與の田地は、或べく本人住居附近便利の地を以てせよ、若しく離隔するな、若し國郡廢合區劃改正等の事あり、他府縣他郡に入りしとか、又た餘りに入會地同様犬牙錯雜するならば方めて舊地を耕作するやうにさせよ、又た田地不足或は無き時は隣郡にて給せよと也、
〔改隸は、管轄區畫改正也、○犬牙は犬の牙の出入たる如きを云ふ、○隔郡は、隣郡を云ふ、

第廿一條

六年一班條

凡田六年一班、神田、寺田、不在此限、若以身死應退田者、每至班年、則從收授

凡て班田地は、六年毎に一回改め渡すのである、但し神領及び寺領の如きは素より免租の田地

故に、此班田の規則外とす、若し口分田割當を得て居る人が、六年の始めに於て死去する共、次回の班田則ち分田期までは其家族は其家にて耕作し居らるゝと也、

〔班田は、口分田でも其他免租田に非ざる田地は大抵此法則に洩れぬ、其下々調食等の事は地方官にて悉皆整理すれ共、官府より、班田使と云ふ役人を巡察する也、○退田は、田を返上するを云ふ、法文にある如く作人等死去せば、返上する也、但し班田の翌年死入するも次回班田の年迄は返上せざる也、故に男女の子供が六歳になれば口分田を給はるのであれ共、班田の年に五歳なれば、次の班田期までは給はる事の出来ないのである、○收授は、死入者の口分田を取り上げ、又た新たに給はるべき六歳以上の男女に授け與ふるの義也、

第廿二條

公田返還條

凡應還公田、皆令主自量、爲一段退。不得零疊割退。先有零者聽。

前述の如く凡て給り居る、口分田と云ふものは、一家内に數人若くは十數人もあるのであるから、其内チ一定の年限に於て官府へ返さねばならぬ田地が出来てくる、其時には、家主自ら測量して一段／＼に纏めて返せ、必ず零碎なる坪數にせぬやうにせよ、但し先前より零碎の田地にて

ありし處は致方がないと云ふ也、

○退は、返還也、○寄還は、寄は一位以下の數にして、差はアサコら加算するを云ふ、○例退は、フリ返す也、

第三三條

班田條

凡應班田者、每班年、正月三十日內、申太政官、起十月

一日、京國官司、預校勘造簿、至十一月一日、總集應受

之人、對共給授、二月二十日內使訖

凡て田地を班ら給はるは毎六年の更正であるが、班田年の前年の十月一日より、十一月一日迄、凡て三十日間にて、京都及び地方當局者が、豫め分田帳や戸籍を調代して新帳を作り、之を正月の三十日迄に、太政官に申達する也、而して十一月一日より翌年一月の二十日迄に給はるべき者共を其村々へ集め、當局者が出張して直接に授け終ると云ふ也、但し他方に於て戸籍簿の更正は、此分田年より一ヶ年前に調査しする事にしてある也、

第三四條

授田條

凡授田、先課役、後不課役、先無、後少、先貧、後富

凡て分田を授くるに先後を心得よ、例之は、課役を出して居る家に於て田地無き者を第一とせよ、又た課役を納め居るも、法規通りの田地を作らず甚だ少なき者を第二とす、又た課役を納め居るも、其家貧なる者を第三とす、次に課役を納め居て家富める者を第四とす、又た課役を納めざる者に於て田地なき者を第五とす、又た不課役にして田地少なき者を第六とす、又た不課役にして一家貧困の者を第七とす、同く不課役にして一家富裕の者を第八とす、と云ふのである、

○課役は、人頭税共云ふべき税にして、成年の男子が毎年十日宛官府用に身體を使役する、を云ふ、若し之を免れたときは其代りに調の品物則ち租や麻布等を以て代納する也、委くは、第十篇賦役令に違ふ、

第三五條

田有交錯條

凡田有交錯、兩主求換者、經本部、判聽除附

凡て田地の耕作人が、相互に地所耕作上錯雜して作る事あり、互に不便なるを以て、耕作者同士に於て、交換せんと欲せば、其山を村長に届出でよ、届を受たる村長は、其田を反別帳に録し直けと云義也、

大寶令新州

第三卷

第九篇

田令

二五五

凡官人百姓、並不得將田宅園地、捨施及賣易與寺、

第廿六條

官人百姓條

凡て官員及び人民に於て、自分所有の田園宅地を寺院に施し、又は賣易て寺に寄附する事はならぬと云ふ也。因に續日本紀、天平十八年五月庚申の條に、總ての寺院が人民の墾田、及び園地を觀買して永く寺の所有とする事を禁ずとあり、但し奴婢牛馬は此限に非る也、
○捨施は、布施の如し、○賣易は、賣却及び賣易也、

第廿七條

官人奴婢田條

凡官人奴婢口分田、與良人同。家人奴婢、隨鄉寬狹、並給三分之一。

凡て役所に使ふ處の官戸及び奴婢下婢は、隸民籍の者なれ共、良民則ち公民に同く、一人所の男子には二段宛の分田を給へ、而して公民が使役する處の家來及び奴婢は、郡村の廣狹に由れ共、先づ三分の一則ち二百四十坪宛給與せよと云ふ也、但し官の奴婢等の分は不税なれ共、民家の私用奴婢等は否らず、不税田は神田寺田の如し、尙ほ等々の奴婢には給與するに及ばぬと也、第二條職員令第四十九條官奴司第八篇戸令の第卅五、卅六條參看すべし、

凡田爲水侵食、不依舊派、新出之地、先給被侵之家。

第廿八條

水害條

凡て田地が洪水の爲に侵食破壊せられたる時に、舊派則ち被害の河岸に依らず、對岸に新たに地所が出来て、其地所が耕作する事の出来得るならば、六年目の分田期年を持たずして被害者に給與せよ、但し對岸地は、管轄邊の地ならば出来ぬと云也、
○食は、乗力、及び實戰の切にして音戰也、駕が乘乘を喰ふ形らに基きたる意にて、日食、月食の食の如し、○舊派は、舊支流と云ふ如し、

第廿九條

荒廢田條

凡公私田荒廢、三年以上、有能借佃者、經官司判借之、雖隔越亦聽。私田三年還主、公田六年還官、限滿之日、所借人口分未足者、公田則聽宛口分。私田不合、其官人於所部界內有空閑地、願佃者、任聽營種、皆解之日還公、本條は、新開及び荒廢地開拓の法令なり、凡て公田として、墾田、功田、又た私田として、位田、墾田、口分田、墾田等の三年以上も荒れ果て居る田地がありて、ソレをば借りて耕作せんとす

大寶令新解 第三卷

第九篇 田令

一五七

もあらば、富強官廳に肩け斷ちして貸せよ、若し甲郡の者が、乙郡の荒廢田を耕作せんもならば是を許せ、但し私田は、三年にて一ト先づ漸持主に還せ、公田は六年にて是亦一ト先づ官に還らせ、然して耕作中に班田の年が廻り來るも、期限内なれば取上る事はならぬ、其代りに地子として、小作米則ち作總米を納めさせよ、サテ滿期に至り、耕作人の給るべき口分田が不足の時あらば、其公田は口分田に宛てる事を許せ、然れ共私田は否らず、又た地方官員及び人民が居住附近に於て不毛未開の地所を開墾せんと願へば、隨意に開拓を營ませ、耕作して穀類を種させよ、是等は永代私田として取扱へと也、但し現耕作人が廢業に着らんとする日には、其筋へ還らせよと云ふ也、

田 ○田は、作り田也、○隔田は、隔り起るにて則ち郡違ひと云ふ如し、○官人は、國及び郡の官員也、○空閑地は、未開の明々地也、○墾種は、開墾を營爲し、穀物を植ゆるを云ふ、

參考として、續紀九卷十一張の右、養老七年(紀元三八三)夏四月辛亥、太政官の奏に云く、此頃人民より田地の不足を告るから、願くは全國に布令して、田園の開墾を勸禁せしめ、其新に墾沼用水等を新墾して、開墾を營む者には三代の開給はり傳へしめよ、若し從來有る處の舊に墾沼用水等に依りて開墾した者には、一代の開給よとあり、此他開墾の詔勅は、則ち、續日本紀、天平元年十一月癸巳の條、同十五年五月乙丑の詔書、同書天平神護元年三月丙申の詔書

等故事に遵はしとす、

墾種條

論田條

凡競田、判得已耕種者、後雖改判、苗入種人、耕而未種者、酬其功力。未經斷決、強耕種者、苗從地判

本條は、論田を裁判する法令也、サテ論田を斷り得て既に耕作し居る者が、後に裁判上、敗訴となりたる時は、其作總米は現耕作人に渡せ、正税は勝訴者へ渡せ、勝訴者より其筋へ納むるものとす、又た辨訟のみして未だ辨決せざれば、其勞力費を渡せ、又た未だ判決を斷ずして、強に耕作し居れば、其作總米は地所に從て何決せよと也、

田 ○競田は、論田にして、爭ふ田と云ふ事也、改判は、再審判と云ふ如し、○苗は、小作米則ち作總米と看做すべし、

參考として、法曹至要抄卷之中、第四第十四條、及び裁判至要抄の第四條、外に法令備考に續日本紀廿三卷三丁左天平寶字四年八月甲子の條を引證しあれ共、本條に適當ならすと思ふ也、

第卅一條

在外諸司職分田條

凡在外諸司職分田、大宰帥、十町。大貳、六町。少貳、四

町 大醫、少醫、大判事、一町 大工、少判事、大典、防人正、主神、博士、一町六段、少典、陰陽師、醫師、少工、算師、主船、防人佑、一町四段、諸令史、一町 史生、六段、大國守、二町六段、上國守、大國介、二町二段、中國守、上國介、一町 下國守、大、上國様、一町六段、中國様、大、上國目、一町二段、中、下國目、一町 史生如前。

凡て京都外の諸役所の諸官員の職俸田は、太宰の帥に三萬六千坪を給せらる、以下之に准じて特に解を要せず、但し官名は第三篇職員令の各條を參看すべし、
備考としては、源段國史の第八十四卷、延暦十七年六月乙酉の勅、主税式の國司處分公麻彦法
の條、或は民部式の遙授國司不給公麻田の條、或は、紺紀天平寶字二年夏五月丙戌太宰府の言
上等あり本法文の實行史實の沿例に遵ざれば茲に略す、

第卅二條

郡司職分田條

凡郡司職分田、大領、六町、少領、四町、主政、主帳、各二

町、狹郷不須要滿此數。

凡て郡長始め、郡書記等の職務料は、郡長に二萬一千六百坪、以下之に準じて給はるなり、然
れ共、小郡則ち田地瘠き所は、必しも此數量を滿すに及ばぬと云ふ也、

○大領は、郡長、小領は次官、主政は判官、主帳は書記の如し、

參考としては三代實錄、貞觀七年八月己酉太政官の布達あり、

第卅三條

驛田條

凡驛田、皆隨近給。大路、四町。中路、三町。少路、二町。

諸道各驛補助の爲に驛料として田地を給付せらるゝが、皆其驛の附近に於てせよ、而して最も
往來の頻繁なる驛には、一萬四千四百坪、中等の往來驛には、一萬八六百坪と云ふ也、

○驛田は、驛田より收獲する米を以て、驛家則ち驛に關する役人の給料驛家の費用、驛
馬の購買費、人足賃、等に充つる爲なり、大、中、小路は、今で云へば國道、縣道、郡道の
如し、然れ共、は皆國道也、委くは、第三篇縣政令の第十六條にあり、

第卅四條

職分田交代前後條

凡在外諸司職分田、交代以前種者、入前人、若前人自辦

未種、後人酬其功直、闕官田、用公力營種。所有當年苗子、新人至日、依數給付。

地方官の職伴田は、交代以前に挿秧したる物ならは、前任官に納め、若し前任者自ら耕作して居るので、耕した計りにて、未だ挿秧せざる時ならば、後任者より其工手間を渡すべし、又た練員にして本田の主なき時は、官府に於て僱役として官府人足を以て耕作させ、併し其年の收穫米の地子は、新任官の着任の上月數によりて割當せよ、但し後年の正月に新任着任せば、前年の作價は給與すべからずと云ふ也、

○交代は、昔の地方官は、四年とか六年とか年限一定ありし故此の如く云へり、但し郡官は否ず、○商人は、前任者也、○功直は、シオトの價也、○公力は、官府の人足、○營種は、コ、では單に耕作權付とすべし、○闕官田は、給與すべき官員の缺けたる時の職田也、○苗子は、作價米なり、

參考として、杜氏通典卷二、食貨田制の下に皆の闕元分を引用し、故事要略五十三卷に交替式に、太政官の布達に在外官員に職田及權を給ふの條、及び續紀天保十一年秋七月甲辰の詔書等あれ共、新解上の必要を認めざれば掲載を略す、

凡外官新至任者、比及秋收、依式給權。

第卅五條

外官新任條

新任の地方官が、任所に到着し、其時期秋前ならば、米の收穫時迄公額を給與せよと也、例之は、府縣の知事の職田が假りに二町とすれば、此收穫稻一千束則ち米二十五石なり、六月赴任せば、其年内の六ヶ月分則ち拾貳石五斗を給せらると云ふ如し、

〔考釋〕外官は、京都以外の官と云ふ如し、故に今俗云ふ所の地方官の如き也、○比は、頃也、○式は、細則にして今詳かならず、○權は、權也、今云ふ飯米也、

參考として、石川本集解 十二の廿八張左より廿九張の右にある、和銅五年五月十六日の格を抄録せんに、長次官の如きは、毎日の給與として、米二升、酒一升、麴飯は米一升、酒八合乃至五合とある、寶龜三年六月廿日格、又た大同三年六月六日格、延暦廿四年三月廿四日令、又た令抄に私記に云くとして、養老八年の格とあり、共に前卅四條と參照すべし、昌保云、養老八年二月神龜と改元す、則ち聖武天皇即位の月也、

第卅六條

畿内置官田條

凡畿内置官田、大和攝津各二十町、河内山城各二十町、

毎一町配牛一頭。其牛令一戸養一頭。謂中中以上戸。

本條は、供御の食米を作る田地に就ての法令也、五畿内にて、大和攝津各三十町、河内山城に各二十町、宮内省御用の官田を置き、二町毎に、一戸に牛一頭宛飼養せしむ、但し飼養の家は、中の中以上にして、富裕の家を選任すと也、作人は雜徭と云ふ、人税則ち一年數十日使はる、を免せらるゝ事とす、

○畿は、圻也、圻也、説文に、天子千里、地遠近を以て之を言ふ時は畿と云ふ、正畿、邦一、九一等いへり、古は王國千里を王畿と云ふ、之よりサキは五百里毎を一畿とすともあり、皇城に近接と云ふ如し、○官田は、宮内省の御用田にして、租税を納めざる長田なり、御稻田共辦して供御の食料を造る田也、

凡官田、應役丁之處、毎年宮内省、預准來年所種色目、及町段多少、依式料功、申官支配、其上役之日、國司仍准。

役月開要、量事配遣、其田司、年別相替。年終、省按量收獲多少、附考褒貶。

本條は、供御の食料田に種る品目、反別の數量、當局の事務、年末賞與等に係る法令にして、凡て此供御田を耕作するに就て入用の農夫を使役するに、宮内省に於て、翌年の播種々目、及び反別の多少に準じ、別式に依りて人工を料り官に申達して支配すべし、其作人の業を採る日は、地方係り官に於て、月の繁閑に准じて、見計ひの上配置し遣せと也、此等を直接に監視するものは、宮内省中の下級にある使部の内にするのであるが、此役人は毎年取替へよと云ふ也、年末に至れば、本省に於て、當年收穫の増減多少を調査して、成績の良品に依り、保りの者共に賞與し或は一方ならざる不成續不都合の事あらば、貶さるゝ事もありと知るべし、

○役丁は、雜徭の農夫を云ふ、○色目は、種又は品目の如し、例之は稻、稗、何々稻を云ふ、○式は、今はなし、○功は、勤也、○上役は、仕事に上る也、○役月は、シヤトの月を云ふ、○開要は、閑暇と多忙の如し、例之は、閑月は、正、二、十、十一、十二にして、要月は、三、四、五、六、七、八、九月也、○田司は、大抵宮内省の雜使にて務むると云ふ、○按量は、調査の如し、

大寶令新解 卷之三

第十篇 賦役令

凡參拾玖條

本篇は、年貢及び義倉、獻上物に關するの法令也、

凡 賦役の賦は、ナカラと訓み、税の事也、故に田賦を田力と云ふ、民の力より出しに因る、正税、一名大税をオホナカラと云ふ、主税をもナカラと訓めり、物成、年貢、收納、租税、大賧、ミツギ等皆異名同義と看做して可なり、説文に欲也、尙書禹貢に、厥賦は惟れ上の上類れり、傳に、其土地に生産する所の物を天子に供するを謂ふとあり、役は、使役にして、差役、無償、兵役の類身體を以て年貢として使はるとなり、

第一條

諸調條

凡調、絹、緇、緇、絲、綿、布、並隨郷土所出。正丁一人、絹、緇八尺五寸、六丁成匹。長五丈二尺、廣二尺一寸。美濃、緇、六尺五寸、八丁成匹。長五丈二尺、廣同絹、緇。絲八兩、綿一斤。

布二丈六尺、並二丁成紬屯端、端長五丈二尺、廣二尺四寸、其望陁布、四丁成端、長五丈二尺、廣二尺八寸、若懸雜物者、鐵十斤。鰍三斤、每口三斤、鹽三斗、鯪十八斤、堅魚三十斤。烏賊三十斤、螺三十二斤、熬海鼠二十六斤。雜魚五十斤。楚割五十斤、雜臠一百斤。紫菜四十八斤、雜海藻壹百六十斤、海藻一百三十斤。滑海藻一百六十斤。海松一百三十斤、凝海藻一百二十斤。雜脂六斗、海藻根八斗、末滑海藻一石、澤蔴一石二斗、烏蔴一石二斗、鯪鮓二斗、貽貝鮓三斗、白貝菹三斗、辛螺頭打六斗、貽貝後折六斗。海細螺一石、棘甲羸六斗、甲羸六斗、雜鱗五斗、近江鮓五斗。煮鹽年魚四斗。煮堅魚二十五斤。堅魚煎汁四升。次丁二人、中男四人、並准正丁一人、其調副物、正丁一

人、紫三兩、紅三兩、茜一斤、黃連二斤、東木綿十二兩、安蘇木綿四兩。麻二斤。熟麻十兩十六銖。菜十二兩。黃燧七斤。黑葛六斤。木賊六兩。胡麻油七勺。麻子油七勺。荏油一合。曼椒油一合。猪油二合。臘一合五勺。漆三勺。金漆三勺。鹽一升。雜脂二升。堅魚煎汁一合五勺。山薑一升。青土一合五勺。橡八升。紙六張。長二尺。廣一尺。篋柳一把。七丁、席一張。苦一張。鹿角一頭。烏羽一隻。砥一顆。二丁、簀一張。三丁蔴一張。十四丁、樽一枚。受三斗。二十一丁、樽一枚。受四斗。三十五丁、樽一枚。受五斗。京及畿内、皆正丁一人、調布一丈三尺、次丁二人、中男四人、各同一正丁。正丁ある家に、賦課さるゝ正丁の數に依て、多少を異にす、又た該税は、國々の土地により、

實際一定の物品を上納する譯には參らず、故に山村ならば、山年貢として、則ち染料、藥品、食料菜蔬、漁村ならば、海年貢として、則ち藻苔、魚介の類、村里ならば、畑年貢として、園圃の菜蔬、工業家ならば、工作品則ち梓、漆の類、其數量の標準は、總て絹、綿、糸、布に則り、一人前の男子は如何程と云ふ數量の額を定む、例之は絹で納むる正丁二人、家にあるとすれば、其家の園が年額絹一丈七尺とす、更に中男、水丁則ち老少の男女あらば、夫々積算して納むる也、故に山海の村落民家は、皆悉く前記の標準額物、絲、綿、布に比較算定して上納するもの也、而して此他に、正丁則ち一人前の男子而已に課する、今で云へば、附加税の如き、調の副物なる物を上納する規則である、本條法文中にある如く正の調に准せり、但し京都と畿内式けは、特に末文に別記せり、本條は一々句項を逐て新解を連續するより、字解として、要點を摘載する方が便利と思へり、但し度量衡の如きは第卅篇、雜令の第二條に述ぶ、

租 調は、成形成置令之六に、古今原始を引き時に租庸調の法を定む、田あらば租あり、身あらば庸あり、戸あらば調あり、と故に調は今云ふ戸別割別ち軒別割にして、ツギ又は貢調ち御調と訓む也、○絹は、キヌ、又たカトリ(繰)と訓すれ共、其實調、絹、梅、錢、等の文字の如く音便の轉用なり、キヌは音ケン(の)轉なり、故に竹取物語にキヌと云へり、本條の絹は、繅らざる白羽二重とす、而して生絲の細き太き總の左右聖調、緯文の種々、彩色絲の如何に由

りて、種々の名稱文字を展にする也、○綿は、アラキヌ、又アシキヌ或はフイヤヌにて今俗に云ふ綿、又はフイヤ綿と云類也、○絲は、今の生糸也、○絹は、今云ふ真綿也、○布は、麻布及び木布なり、○兩は、現今の約拾文目にして八兩は半斤則ち八十目也、○斤は、今の百六十目、○絢は、生絲に稱よる一斤を云ふ也、○一屯は、綿に稱よる名にして、一斤則ち三百二十目也、○端は、昔は絹に稱せず麻布木布だけの稱へにて、絹には匹のみ稱へり、五丈二尺を一端とす、此法は各時代にて差異あるなり、○望陀布は、上總國望陀郡の產出する木布麻布なり、○織は、今俗クベと云へ共、其實織にして、昔は今のクベはなし、恰も今の大工が使用する織の如く、今の織は三百年來の型にて、使用の際は手元へ奉くなり、昔の織は、俗に云ふ遺織とて、向ふへ押し遣る也、故に古代は押遣りの器の多かりしに、今は手前へ引く器も出來たり、但し構造の上に少差ある而已、○三口は、三挺三人前と云ふ如し、○毎口三斤は、一人に就て、織用の原料なる織四百八十目と云ふ也、○數は、アベにて、一名數、一名石決明、尚異名多し、○端は、端本にツビと傍訓し、義解に、縣(給)の屬とす、蚌の俗字にして給なり、ツビは、桑蠶類の總稱と看做して可なり、○度海鼠は、一名海參、一名海男子、一名くろ物、一名無鰭、ナマコを一夜煎熟して乾燥したる物なり、今ほ串にさしたるを串コと云、コは海鼠の略稱也、(老)鰐は、谷川土清の菜に由れば、スエワリのエヲを反したるものとせり、後世文字に依て

世俗ソニアと云ふ、魚肉を堅削りにして乾したる物をいへり、吾妻鑑に、佐々木家綱が越後
 の國を領せし時に、源頼朝に鮭のヌハラを進呈せしに、頼朝自(みづか)ら、鮭を折敷に採ひたり、
 其圖詩に、待居たる人の情もすはりのわりなく見ゆる心さし哉と咏せり、(鮭圖は、今の乾
 魚の如く、九千、又は二枚に削りて干したる物也、(煮鮭は、今の津草海苔の模範にして諸國
 に産す、○鮭海藻は、種々の布の類の總稱也、(海藻は、苧布とす、今は志摩や、鳴門の絲り
 カメを上等とす、○清海藻は、アラノ也、○海松は、水松にてミル也、○凝海藻は、心天草、
 名心太、又た魂天草共かく、○凝脂は、鳥獸の乾肉也、○海藻根は、今云ふメクラにして、海
 藻類の根莖なり、之を乾燥し粉末にして、俗に若布トロロと云ふて實味す、○天滑海藻は、俗
 に塊布と書す、荒布に形似す沿海諸國に産す、今は越州相良産を以て上品とす、久略に増ゆる
 性質あるを以て、偏克氣種の用に供せり、悉くは岡山枳椇の有用藻類の第十四號に載せたり、
 ○藻類は、ノビルとす、○島藻は、アサヅキとせり、懸技するに此藻類中には今云ふツクヤナ
 クもチヨウロギモあらん、(鮭鮓は、アベノスシ也、懸技するに、此鮓に載する凡てのスシ
 は、現今田舎人の所謂ナマスシにして、三府人の云ふスシに非ず、三府人のスシは田舎人は大
 抵之を早鮓と稱す、延喜の民部式、宮内式等にあるも亦推知すべし、○鮓貝鮓は、イカヒ、一
 名黒貝、一名濃藻、一名東海夫人、俗言オマシヨ目にして、女陰に酷肖す、キノコは男勢に

酷似するを以て海男子の名を借せしと同一なり、○白貝鮓は、白き蛤の内に、赤處のアマ皮の
 乾燥末又は子實を伍して腹にて漬たるものにして粘滑的古スリ宜からじ、○羊螺頭打は、
 ミシのカフチ、イカヒのシリヲリ、カフチは串子の類ならん、シリ折は貝尻に穴を穿ち貝を兩
 ながら作るなり、○海細螺は、シタタと訓せり、伊勢のゼン貝との説あり、笑螺又はニシ貝の
 細小なる物の如し、○蜆甲藻は、ウニ(雲丹)也、○蜆藻は、ウニのキモ也、○雞鮓は、種々の
 スシ、鮓は鮓也、鮓、年魚、鮓、鮓等のなれ鮓の類、○煮鹽年魚は、鹽煮の年魚なり、○
 煮堅魚は、今のナマリ節の類、(堅魚煎汁は、今のセンジなり、以上圖の動物)、○紫は、藥草に
 て紫根なり、(紅は、紅花なり○苺も亦苺根を採取して、染料とする也、(黃連は、陰歷に
 生じ藥用とす、)東木綿は、綿花纖維にて紡績したる現今の金巾の如き物に非ず、今云ふ、木
 布の如くカチの木板の木則マダの木類等の木纖維を以て織たる物なるべし、○熟麻は、ニヲと
 訓みて、麻苧を煮たる練麻を云ふ、(莖は、ケムシと訓す、今俗カラムシと云ふ、○黃蘗は、
 キハタにて山中大木多し、染藥兩用品なり、(黒烏は、ツバと訓せり、漢防已にして青ツバ
 と云ふ、皆藤蓂類也、今俗使用する咄したるマケヒカヅラの提籃用にする如く今は櫛垣用の類、
 土瓶の釣、土瓶敷、等に應用せり、(木賊は、トナサにて藥工用に供す、○麻子油は、アサの
 ミの油、(曼椒は、ホソキの油と訓めり、犬山椒の實より採取したる物也、○麻は、漢解に、

輸

凡調庸物、毎年八月中旬起輸、近國十月三十日、中國十一月三十日、遠國十二月三十日以前納訖。其調糸、七月三十日以前輸訖。若調庸未發本國間、有身死者、其物即還、其運脚均出庸調之家。皆國司領送、不得做勾隨便雜

第三條 調庸條

○兩頭は、兩端也、

凡て調の品は、皆其郡内或者々々にて纏め、絹、綿、木布麻布の如きは、兩端を袋に入れ、絲や綿は空く袋に入るべし、而して其袋には、某國某郡某村戸主何誰及び年月日を記すべし、各國郡にて調の印を押接せよと也、但し二百合納の際は、一戸の姓名等記入する事、餘の雜品も之に準ずる者とすべし、

主姓名、年月日、各以國印印之

凡調皆隨近合成、絹、綿、布兩頭、及絲、綿、囊、具注、國郡戸

第二條 調皆隨近條

行恣に、宮中の樹七圓以上十六枚を抜くとあり、故に一枚は、一本又は一個に同じ、實は、蓮又は竹にて造るヌノコ也、○緯一枚の、枚は、アイ又はバイの音にて个也、前漢書五は一具と云ふ如く兩翼也、疏一頭は、延石一個なり、○疏は、コモにて、疏の條の如し、て造りて、舟の屋根及び屋根の腰板に供す、○鹿角一頭は、鹿の角二本を云ふ也、○鳥羽一隻とす、○席は、ムシロと訓み、兩又は稻の葉、蒲類の葉、等にて織りし物也、○舌は、茅類に俗云ふ骨折柳にして、昔は壹圓ち三方、折敷等を製り今は爲簾、籠、行李等の器具を作る原料也、○六疊は、今俗六丁と書く、共に六葉又六枚の事也、○蚊帳は、ハコナヤと訓じ、今ツルベと訓じクヌヤ開ら開栗也、大抵衣服の染料用とす、蓋し「クンニン酸」含有するを以てと訓じ、ソニはもと青色の鳥なりと、依て名づけたる也、其鳥未詳、染料の土とす、○線は、樹皮を採取して食色に塗り、以て裝飾又は銅鐵器具の飾止とすとあり、○青土は、ソ馬の脂燭とわれ夫、多くは鹿の脂味噌と云ふ、○金漆は、コシ油と訓して、金色染料とせり、

凡て調庸の品物は、毎年八月中旬より上納させ、京都附近の國々は、十月三十日、中國は十一月三十日、遠國は十二月三十日以前納訖。其調糸、七月三十日以前輸訖。若調庸未發本國間、有身死者、其物即還、其運脚均出庸調之家。皆國司領送、不得做勾隨便雜

月二十日、遠國は十二月三十日迄に納了させ、其内國の糸だけは、七月三十日限り上納、これは奉還而已飼養時代の事故に、釐米製了次第の時期を計りし也、若し税品が納人の本國より、未だ發送せざる内に、納人死じせば、税品をば納人へ返付してやれ、但し發送し途中にある時は否らず、總て税品は、納人より郡役所へ送り、郡役所より縣廳へ送り、縣廳より京都の大藏省へ納むる也、其運送費用は、一切納人等の各自負擔たり、又た、地方官に於て、本人納税品の代りに、代物を納人より請取りて便宜上納する事はならぬ也。

○輸は送る也、○近國は延喜式廿二卷、民部省の上を見れば左の如し、伊賀、伊勢、志摩、尾張、參河、丹波、因幡、備前、阿波、紀伊、讃岐、近江、美濃、若狹、但馬、播磨、淡路の十七國を近とし、遠、豆、相、信、駿、甲、飛、雲、備前、越前、越中、備中、備後の十四國を中とし、兩總、二毛、武、奥、羽、左、渡、石、防、長、土、佐、美、陸、越後、兩豐、二筑、兩肥、日、薩、隅、壹岐、對馬の廿六國を遠とす、昌保云く、此國名及び文字は、讀易からしめん爲め、故意に今代の通用文字に従へり、然して斌令の第十三條に、遠中近の三流弊の圖別とは稍異なるものとす、○却還は、返付の事、○運脚は、運送人足の事、民部式に依れば、此脚夫の手當は上りは、一日に米二升、鹽二匁、歸途は、其半額とせり、○運勾の、鐵は、實也、マツ也、勾は取る也、故に地方當局が、人民に代り、人民に代り、人民より代納料を取りて送るを

云ふ、(譯は、入よね、又は買よねと訓む文字にて、こゝでは單に購買と看做して可也、

本條近國の事は、義解に解釋なし、石川介の刊行本、卷十三の五張左に、古記に云ふ國答に、民部省式に近國十七とありて十六國を記せり、圖書刊行會第三回刊行に係る、三通同行校訂令彙解(四一七頁)卷十三に式を刊本に成に作り、今宮崎道三郎の原本に據りて改じ、又た七は依するに六歟、云々とあり、尤もの事なれ共、七は愚按にては、六に非ず、やはり十七を宜とす、如何となれば、古記云々が民部省式を引用しあれば也、同式は數本を照合せされ共、余羅の藏せる本は、普通坊間にも在する、慶安元年戊子に戸部法印道春の跋を書きて、明暦三丁酉仲秋吉旦、書坊林和泉樓板行、松栢堂印としてある、(延喜式數ヶ刊本中最も謬多き本也)延喜式卷二十二、則ち民部省の上卷には、城、和、河、泉、堀、伊賀、伊勢、志摩、尾、參、江、濃、若、二丹、但、因、播、作、備前、紀、淡の廿二國を掲げり、故に古記圖答は思ひ違したものか又たは誤刻謄傳寫の他ならざらと思ふ、加之、彼圖にして志摩を脱せる事は、誰人も疑ふの餘地なきか、是等の類枚舉に遑あらず、

第四條

正丁歲役條

凡正丁歲役、十日、若須收庸者、布二丈六尺、一日二尺

六寸、須留役者、滿三十日、租調俱免、役日少者、計見役日、折免、通正役、並不得過四十日、次丁二人、同一正丁、中男、及京畿內、不在收庸之例、其丁赴役之日、長官親自點檢、并閱衣櫃、周備、然後發遣、若欲雇當國郡人、及道家人代役者聽之、劣弱者不合、卽於送簿名下、具注代人貫屬姓名、其匠、欲當色雇巧人代役者亦聽之

凡て一人前の男子は、一年の課役が十日間也、若し此十日間役さるゝ課役の代りに、品物にて代納せんとらば、一人一日に付麻布又本布貳尺六寸、十日合計貳丈六尺とす、十日間も正役の外に、尙餘絹留役志願して、三十日勤むれば、一人當り別ち口分田貳畝の田租二斗二升及び圓の絹八尺五寸共に免ずと也、若し勤務日數少なれば、現役日數を算し差引勘定すべし、尙勤続したくも正役を通計して、四十日より超過はできぬと也、次丁は二人にて一丁與とす、中男は京都及び畿内の者共には、庸物を取る可からず、庸役の正丁、役に赴く日は、地方長官は自ら點檢して往復に要する衣服、食糧を給し然る後に發見させよ、若し又た家來或は郡内に

於て他人を雇ひ、代動さん事を願へば許可すべし、但し餘り身帶虚納にして役に堪ざる如き者は庸役を免せよ、免した時には、其旨送丁帳にある、姓名の下に其理由を記入すべし、又た代人の時は、代人の本籍姓名を詳記すべし、又た大工職人の如き者共にて、同業中の者を雇ふて代人たらしめんとらば、是亦許可すべしと云ふ也、

代納 庸は、前述の如く、人身に係る年貢に於て、爾雅に勞也とあり、代納は布に限りたるに非ず、其土地に產出する物を以て貢ぐなり、布は只其例證の例を示したる而し、○見役は現役也、○折免の折は、曲也、恠也、斷也、又た分拆にも通じて、分つの義あり、○ギ又ははゞギの意とす、○京は、第二篇六十六條左京職を參考すべし、○丁は、一人前の男子、○家人は、家來及奴婢をも含む、○劣弱は、體格下等にして虚納を云ふ也、○不合は、べからずと訓じ也、○具注は、細かに記せ也、○貢納は、本諸の如し、○匠は、大工職人を云ふ、○當色は、同職を云ふ、

第五條

計帳條

凡毎年八月三十日以前、計帳至、付民部、主計計庸多少、宛衛士、仕丁、采女、女丁等食、以外皆支配役民雇直及食、

九月上旬以前申官。

毎年八月三十日まで、庸物の帳簿が中務省へ來たるから、省は之を民部省に交付せよ、民部省此帳簿を受けて、所管の主計寮として、庸の多少等を計算し、以て宮城内の番兵、小遣、給仕、女の小遣等の食料に充てよ、餘分は、庸役者不足の際の屋手當及び食料に配當すべし、是等の事は、九月上旬中に太政官に申達すべしと云ふ也。

○計帳は、計算帳、○直は、手當ならん、

第六條 義倉條

凡一位以下、及百姓雜色人等、皆取戸粟以爲義倉、上上一石、二石、上中戸、一石六斗、上下戸、一石二斗、中上戸、一斗、下中戸、八斗、中下戸、六斗、下上戸、四斗、下中戸、二斗、下下戸、一斗、若稻二斗、大麥一斗五升、小麥二斗、大豆二斗、小豆一斗、各當粟一斗。皆與田租、同時收畢、

親王家を除く外、上是一位より下農民及び諸職業者人共の各戸に就て、租を收納させて、四年

氣歳の用に供する穀を義倉米となす、其各戸の納米は、上上の家は年額二石、中の中の家は八斗、下下の家は一斗とす、而して稻の租は二斗、大麥は一斗五升、小麥は一斗、大豆は二斗、小豆

は一斗で、各粟の一斗に當て、皆々田租と同時に納了すべしと云也、

○雜色は、一名雜戸、一名品部、一名件部友部と云も殆んど同斷なり、則ち諸商賈人

とか諸商店とか、諸職業者とか云ふ如し、業には色を稱へ、家には戸を稱へ、仲間には部を附し、

件部は群部の如し、例之は雜戸と云へば、紙戸、百濟戸、樂戸、散樂戸、工戸、雜工戸、鼓吹

戸、船戸、鷹戸、馬戸、船戸、染戸、樂戸、乳戸、箱吹戸、酒戸、鍛戸、國戸、泥戸、大炊戸、

水戸、宮戸、等あり猶爾后に至りては、輸車戸、守山戸、驛戸、細戸、燒鹽戸、造餅戸、紙御

服絹戸、及び銅工、鐵工、金作、甲削、弓作、鉾削、鞍作、鞍張、柳作、羽結、爪工、紙縫、

織作、泥障、葦張、飛鳥沓縫、吳牀作、藍縫、大宮縫、錦絨縫、吳服部、絳染、藍染、衣染、

綿制、江人、綱引、等枚舉に達なし、斯の如き者等を云ふ、粟も、亦諸説多き故に、愚按に

ては、其處々或は諸書にて今俗所謂米とするあり、又た黃色の小粒なる物を云ふ處あり、又た

一般穀物を指す處あり、則ち説文に、米は粟實也と有り、周禮地官の注に、九穀六米とありて、

其六米は、黍、稷、豆、粱、苽、大豆とあり、又た爾雅釋草の注に於ても亦變也、爾雅の説

毎條にある如くなれば是は別に考證論説として、々々に述べる、故に本條の粟は、今俗所謂

粟又は正米として可也。○鎌倉は、富を分ちて貧を賑はし、其情は誠に達へりと云に因るもの誠解也。上上戸、以下九等の家数にも和漢年代によりて各少差あり、今其一例を擧て推知す可する事とせん、和創二年二月十九日の格に、資財百貫以上を上上戸、六十貫以上を中の中、四十貫以上を下の下、(中略)一貫以上を下の下とせり、此保曰く右は布達になりし法にて實行は出来なかつたと思ふ、故に二年の後、和創八年には、百貫が二十貫と低率則ち下落せられたり、此實は鎌倉時代に於てさへも、百貫が賣高千石に當れり他は推て知るべし、但し田令十六條の家等按則ち人口の多寡を標準とせしとは異也、○稻は、東稻にして關西稻と云ふ如し、○粟は下文では米ならん、

第七條

土毛條

凡土毛臨時應用者、並准當國時價、價用郡稻。

凡て土産より生産する物品にして、臨時人用の時には、其生産地の時價に准し其地の郡稻の價を算して用に應せよと云也、

○土毛は、地表の草類にして獸類の外表に毛を覆ふ如きを云ふ、ケはクサと訓む、主に五穀及び桑を指せり、公羊傳宣公十二年の條に、不毛の地を饋ふとあり、注に不毛は五穀を生

やざるといへり、○郡稻は、田租則ち正税中の一郡を割きて、各郡に稭にて貯へ置き、推用に充つるものとす、
按するに、續日本紀卷之五の末に、元明天皇和創五年(紀元六七四年)八月庚子、太政官の處分に諸國の郡稻を少して給用の日饑乏を致す事あらば、國の大小に准じ、正税則ち大税を割きて郡稻に充つべし、實て貸米の利息米を互相通じて用ゐるを、尤分に取置き必ず缺乏せしむる事勿れ、自今以後永く恒例となせよとあり、農政に御心を盡し給ひし一端を敬仰すべし、

第八條

封戸條

凡封戸者、皆以課戸充、調庸全給、其田租爲一分、入官、一分給主。

封戸とて、位田、職田、位祿、手祿の他に、位階高き、官職重き人達に、課税の有る戸口を給はり、其射別、丁役は全給にして、正税則ち田租を二分し、其一部は官府へ納め、一部は自分

に給はると云ふ也、

封戸は、總稱にて、食封あり、職封あり、親王、内親王に給ふを品封と云ひ、諸王諸臣の三位以上に給ふを位封と云ふ、又た備四位五位の人にてても、特殊の勳功ありて給はる事ある

り、之を功封といふ、共に封戸と稱す、其給額には、各表等あり、

左表の如し、後世減戸せり、

第十五卷職令の第十條に本文あり、

封戸
品一 八戸
品二 六戸
品三 四戸
品四 三戸
無品 百五十戸

位*
正一 三戸
位一 一戸
正二 二戸
位二 二戸
正三 三戸
位三 三戸
正四 四戸
位四 四戸

職*
大政大臣 三千戸
左右大臣 二千戸
大納言 八百戸

第九條 水旱蟲霜候

凡田、有水旱蟲霜、不熟之處、國司檢實具錄申官、十分損五分以上、免租、損七分、免租調、損八分以上、課役俱免、若桑麻損盡者、各免調、其已役、已輸者、聽折來年、

田品の作物に、洪水、旱損、蟲害、霜害等を來したる不作の田品は、其地方當局者に於て、實地檢分の上、記して太政官に具申すべし、而して、五分作以下ならば、田租を免せ、三分作ならば、田租の他に野別調へ調をも免せ、二分作以下ならば、課役も共に免せ、若し桑麻に大害

を被りて、糸及綿、麻布等の調を上納する程に至らざれば免せ、又は既に臨時の庸役及び糸の上納等を済ました後ならば、翌年に於て免すべしと云ふ也、

○租は、不作と云ふ如し、一課役は、本條にては、課は田租及び調、調物をも含みあるものとすべし、役は、庸及び雜徭をも含めり、但し課戸と課徭の國の匠人は免役せざる也、

折は、第四條に解せし如くなくれ共、租、庸、調、全部免税ならば、來年を待て免すべしと云ふ法文にすれば宜いけれ共、田租、或は調等の一二部分を免するのである、故にヘズとか、差引とかと云はねばならぬ文義となる也、本條の例證等は、諸令備考又は鑑解にあり、第八卷戸令の第四十五條參照すべし、

第十條

邊遠國條

凡邊遠國、有夷人雜類之所、應檢調役者、隨事斟量、不必同華夏、

邊隔邊鄙の國で、則ち薩、隅、奥、羽等の如き雜種未開人の居る所にては、調や庸役の品を納めざるには、斟酌すべし、必ずしも大和附近の中國と同例にするなかれと云ふ也、

○夷人雜類は、義解及び集解共に今日としては、鑑當の解とは認め難し、故に余は單に

大政令新附 第三卷 第十條 賦役令 二八五

外國人とせり、末文の華夏に對して行文上の勢を以て此の如く文飾せたるらん、併し大抵は張亮人を指す如し。○華夏は、支那にては自國の自稱代名たる國名なれ共其は我國奈良周圍の近國を概稱したるものとすべし。

第十一條

課役免除條

凡應免課役者、皆待_レ**獨符至**、然後注免、符雖未至、驗位記、灼然實者亦免。其難任被_レ解懸、附者、皆依本司解時日月、據_レ徵、

凡て課税を免除する者は、當局に於て、免税の通知書が到來して後に見逃すべし、併し通知書が來らず共、本人位階を賜り、其位記を改め見しに事實明了にして疑點なきは免せ、又た之に反して、難任として、宮城の宿衛人、即ち舍人とか、或は實人とか又は兵衛、衛士、仕丁の如き者等が解任せられて、原籍に復歸する者は、皆各役所の解任せし月日に依て課税を徵收すべし、但し當局が怠慢の爲め解任通知書が途中に於て延滞すれば、解任書の日附に従ふて追徵すべしと云也、徵收の方法は、大條にあり、

○獨は、音_{トク}又主、徵_{トク}調あれ共、爰ては除、の意也、符は別符の符圖と看做すべし、

は、禮也、改の義也、○灼然は、明了と云ふ、○難任は、舍人貴人の類、○附は、原籍に復するを云ふ、○本司は、務め居たる各自の役所、據徵は追徵をも含ひ、

第十二條

四季課役條

凡春季附者、課役並徵。夏季附者、免課從役、秋季以後附者、課役俱免、其詐冒隱避、以免課役、不限附之早晚、皆徵當發年課役。逃亡者附亦同。

解任になる舍人や衛士は、春の末則ち三月(癸卯のま)に原籍に復歸すれば、課役則ち調も庸も共に徵收せよ、六月ならば半分則ち庸役だけ勤むると或或は品物で上納を致させ、九月以後ならば、調の物も、庸役も俱に免せ、但し、詐偽隱蔽して課役を免れ居たる者は、原籍に復歸の早き晚きに關せず、皆解任年の分より徵收せよ、逃亡者の復歸するも亦同断である也、

○春季は、太陰曆の春三月也、夏季以下之に準ずべし、詐冒隱避、本條にて、詐は原籍に復するを詐る也、冒は父祖のお蔭によりて位階と云ふ位を賜り居る者であるかと偽り犯す也、隱は本籍に附かずして隠れ歩行く也、遁は虚偽の疾病を稱ふる也、

第十三條

課口給待條

凡課口、及給侍老疾人死者、限十日内、里長與死家、注死時日月、經國郡司印記、

課役のある者、及び既定の看護人を給し居る老人又は病者が死にせば、十日以内に、村長と死者の家とにて、死亡の月日を記し捺印して當局へ届出べしと也、但し不課の人死にせば、告朔（毎月一日の事）及び計帳の時にて宜しと云ふ也、
○課口、及給侍は戸令第四條第十一條にあり、告朔は、昔は毎月一日に天子太極殿に出御あり一切の進奏を聞召さるゝ式日にして其日迄則ち一ヶ月間に届けて差支無との事也、

第十四條

寛狹移居條

凡人在狹郷、樂遷就寛、去本居路程、十日以上、復三年、五日以上、復二年、二日以上、復一年、一遷之後、不得更移。

田地少き狹き郷村に居て、勝地多き廣き郷村に移住せん事を出願せば、原籍地を距る事路程十日以上三十日間も費す處ならば、免稅三年とすべし、五日以上九日も費す處ならば二年、二日

以上の里程の處は、一年の税を免除すべし、但し一回移住の上は、更に他處へ移住はならぬと云ふ也、戸令第十五條參照すべし、

○復は、免稅也、職員令第廿一條民部省參照すべし、

第十五條

沒落外蕃條

凡沒落外蕃得還者、一年以上、復三年、二年以上、復四年、三年以上、復五年、外蕃之人投化者、復十年、其家人奴被放附戸貫者、復三年。

戸令第十六條に述し如く、難船又は掠奪等に逼るゝ外國に往き居る者が歸朝したれば、一年以上居る者は、三年間免稅すべし、一年以上の者は、四年、三年以上の者は五年免稅也、又た外國人にて我國へ歸化した者は、免稅十年とす、而して國民及び歸化人の家來奴僕が本籍に歸入すれば三年間免稅すべしと云也、

第十六條

公使歸朝條

凡以公使外蕃還者、免一年課役、其唐國者、免三年課役、

大寶令雜律 第三卷

第六篇

賦役令

二八九

外圖へ參用して在きたるもの歸納せば、一年の課役免除たり、支那へ往きた者は三年の免稅である也、

○公使は、有位の使臣に祿屬附隨する處の水夫以上課役の義務を有する者を云ふ、(外蕃は爰では隣より近き國、○唐國は、今の支那及び南洋と看做すべし、

第十七條

孝子順孫條

凡孝子、順孫、義夫、節婦、志行關於國郡者、申太政官奏聞、表其門閭。同籍悉免課役。有精誠通感者、別加優賞。

孝行の子供や孫、又は忠臣義僕、或は貞女烈婦等絶て意志行狀の一國一郡に聞へたる者あらば、太政官に奏聞して、其者の家の入口、又は其厨村の入口に標札、若くは土を高く築り、櫓柱を建立し、之に孝子の門と歟、貞女の村とか家とかと題記し表彰すべし、但し本人の一家は悉皆賦税を免除せよ、其内、孟宗竹林に哭すれば、深雪の中に笥を抽くと云ふ如き精誠の意、鬼神に感通せしやうの事あらば、特別に賞典を加ふと云ふ也、

○孝子順孫等は、別に定義範圍等一定せず只古來の慣法等に依るのみ、○國は、説文に、

里門也、國境に、五家を比とす、五比を國と爲とあり、故に廿五軒を里と云ふ、

第十八條

三位以上條

凡三位以上父祖兄弟子孫、及五位以上父子、並免課役。

月主が三位以上であらば、其人の父、祖父、兄、弟、子、孫、及び五位以上の人の親子も皆課席の税を免除せよと云ふ也、(第八箇月令第五條參照すべし)

第十九條

舍人史生等條

凡舍人、史生、伴部、使部、兵衛、衛士、仕丁、防人、帳内、資人、事力、驛長、烽長、及内外初位長上、勳位八等以上、雜戶、陵戶、品部、徒人在役、並免課役、其主政、主帳、大穀以下、兵士以上、牧長帳、驛子、烽子、牧子、國學博士、醫師、諸學生、侍丁、里長、貢人得第未叙、勳位九等以下、初位及殘疾、並免徭役、其防長、價長、免雜徭。

本條の所文は、調と庸役を免除せらる、中程の者は、庸だけ、本文の者は、雜徭の役を免除せらるる也、名稱の解は、職員令、及び軍防令、又は戸令に大抵解せしも、爰に一言宛附する事

とす、

寄附 ○舍人は、中務省所管の左大舍人寮に連べし如く、宮城内の宿衛則ち列の高き番兵の如く者、○児生は、諸役所の書記也、○伴部は友部とて一名とモノミヤツテありて、群部と云ふ如し、○使部も小遣長の如し諸省寮司の本文にあり、○兵衛、衛上は、共に宮門内外の宿衛士也、職員令兵部省の條又は同く衛府の條、或は軍防令に出づ、○付丁は、ツクヒヨホロと謂みて、白丁小遣なり、○防人は、大宰府支配の邊海軍衛の兵卒也、サキモリと謂じ、是亦職員令大宰府の條及び軍防令にあり、○帳内は、宮城の舍人と異名同意にして、親王家へ給はる宿衛を云ふなり、○資人も、帳内に同じく、臣下へ給はる宿衛なり、軍防令四十八條に委し、○専力は、地方官に給はる小使の如し、(軍防令五十一條參照)○驛長は、驛の長なり、○烽長は、信號の火又は狼煙を上げる長なり、軍防令に詳述す、○初位は、内、外九位の長と云ふ如し、○難戸は本篇第六條に出せり、○陵戸は、御墓守、○品部も、難戸の如し、○徒人は、刑に處せられたる者、○主政は部の判官、主帳は、部の書記、○大數は、軍國長、○牧の長帳は、牧場の長、○驛子は、驛の屋、○烽子は、信號火の屋、○牧子は、牧場の常雇、○侍丁は、給仕の如し、○里長は、村長なり、○貢人は、地方學校の卒業者、則ち進士とも云ふ如し、○得第は、及第なり、○殘族は、耳、目、指、の一部欠損したる者の類也、○坊長は、町長にして、○僧長は評價人長の如し、

第二十條

除名未叙人條

凡除名未叙人、免役輸庸。願役身者聽之。其應收庸者亦不在難徭及點防之限。

原簿民籍を除かれて、未だ叙位なき人は、身體を以て庸とする事を免して、物品を代納させ、但し本人身體を以て庸役を務めんと願へば許せと也、而して其庸物を收納すれ共、正役十日の他に、難役或は、兵士、衛士に取る事はならぬと也、**字訓** ○難徭は、難役の如し、主に京都の人にて務むる也、○點防は、兵に簡點呼すると云ふ如し、

第二一條

一年流役免除條

凡遭父母喪、並免期年徭役

兩親の喪に逢へば、一年間の流役を免除せよと云ふ也、

第二一條

流役丁條

凡雇役丁者、本司預計當年所作色目多少申官。錄付主

計、覆審支配、七月二十日以前奏訖、自十月一日、至二月卅日內、均分上役、一番不得過五十日、若要月者、不得過三十日、其人限外上役欲取直者聽、國司皆須親知貧富強弱、因對戶口、則作九等、定簿預爲次第、依次赴役

人夫を雇使するは、宮内省の木工寮に於て、當年に行ふべき経緯等の薪賃、瓦葺、倉庫杯に如何程入用なるかと云ふ事の多少を豫算し、帳簿に計上して太政官に申達すべし、太政官は其申達簿を録して、民部省の主計寮に交付す、主計寮再審調査して太政官に返還する也、太政官に於ては各役所への支配をするに云ふ也、此事は、毎年七月一日より三十日まで、に調査終了して、農家秋收の多忙時期を終りたる十月の一日より、聖春農家耕耘前の二月二十日まで、に均一平分して、順次使役に附かせよ、第一回に上る者は、五十日を超過するなかれ、若し要月と云ふて、四月五月の如きは、三十日より超過はなからしめ、其入夫の既定員數、既定の勤務外に、賃を取りて雇はれんと云ふ者あらば戒めく聽せ、此等の入夫は、其初の地方當局者に於て、悉く親しく其家の貧富の度、入夫身體の強弱を調査精知して、其家其入夫に對して、大約貧富強弱の等級を九等に分ちて帳簿を編成して順次役に赴かしむ可しと云ふ也、

○本司は、木工寮を稱す、○色は、其稱と云ふ如く、ギアキ瓦葺の稱、目は倉庫廳舎の稱と云ふ也、○多少は、人工の多少を云ふ、○覆賃、再び改むるを云ふ、○上役は、勤勞又は役、にノボルと云ふ如し、○要月は、賃はカナノと謂ひて肝要と云ふ如し、是はモト農は國の本也と云ふに基き、百姓の最も肝要なる月を云ふ、則ち三、四、五、六、七、八、九の七ヶ月を指す也、○九等は、第九箇田令第三十六條官田の條、及び本篇第六條、美倉の條に貧富の等級を擧げたる如く上の上、上の中、上の下と定むるに同じ、

第廿三條 差科條

凡差科、先富強、後貧弱、先多丁、後少丁、其分番上役者、家有兼丁者、要月、家貧單身者閑月。

正當の役の者及び雇人夫の者をば、前條の如く使役するには、富者及び親戚者より順次貧者及び貧弱者の者と云順に採れ、又た一家に入夫になるべき者の多きを先きにし、少なきを後と題はしにせよ、其交代して使役に就かするには一家内に於て、立替人夫のある者を要月に使へ、貧家にして是ノ單身者ならば、閑月に使役せよと云ふ也、

○差科は、正役雇夫の稱也、兼丁は、兼丁にして立替人と云ふ如し、○閑月は、十、

十一、十二、正、二の五ヶ月を云ふ、要月に對する語なり、

第廿四條

丁匠名簿條

凡丁匠赴役者、皆具造簿。丁匠未到前三日、預送簿太政官分配。其外配者、便送配處。皆以近及遠、依名分配。作

具自備。

本條は、前廿一條の農民の丁と同様にして、則ち農民の十月より翌年一月二十日までに大郡分の工事を爲すのであるから、其時期を人夫と同時に利用するのでありて、又工人の名簿の如きは、素より製目に戸簿が納めあるから、其詳細の工匠名簿は、大工ならば、木工の寮、金工ならば、鍛冶所に於て編成して、ソレを工匠等が到着前三日までには太政官に送帳して分配するのである、外に配らねばならぬ者共が出来れば、便宜に従ふて配り遣すべき場所へ送れ、皆何れも先着順を以て先番到着の者を近所へ配り、遅着の者は順次遠所へ配り遣す也、又金工木工等の科によりて分配すべし、而して丁匠等の製作したる器具は總て備へ置けと也、

〔附〕○丁匠赴役は、各科の職工が、職を以て庸役を務むるに赴く者を云ふ、○具選擇は、詳細の名簿を造れ也、○便送配處は、便宜配。遣す所、則ち諸役所、又は大和、紀州等に赴き木工事ある所へ送るを云ふ也、○依名は、金工、木工等の科別名也、○作具は、製造の器具と云ふ

如し、則ち斧、鋸、鐮等外種々の器を云ふ、

第廿五條

丁匠欠功條

凡丁匠赴役、有事故不到闕功者、與後番人、同送陪功。若故作稽違、及逃走者、所司則追捕決罪、仍專使送役處陪功。則給雇直

職工の庸役に往くに方り、兩親又は自己疾病等の事故に、移動すれば、後番の者と同時に、送りて仕事を致させ、片し心得違杯し、逃走すれば、地方當局に於て追捕處罰せよ、則ち應使を以て仕事の場所に送り附けて仕事を致させ、其罪期の水ききには、庸賃を給與すべしと云ふ也、

〔附〕闕功は、仕事を、仕事を缺かす也、陪功は、陪に助也、缺動の多少に隨つて補充助するを云ふ、故は、特更也、○稽違は、考ひ違ひと云ふ文字なれ其俗に云ふ心得違の如し、所司はこゝでは國司に二期、地方官也、決罪は、捕囚令第一條の仕丁違に准據して云へば、徒刑以上なれば差し替ふると也、懲按するに該役の爲め單に逃亡而已の罪ならは當時の答刑似

凡役丁匠、皆十人外給一人、充火頭。疾病、及遇雨不堪執作之日、減半食。關功令陪。唯疾病者、給役日直。雖雨、非露役者不在此限。

第廿六條

役丁匠條

軍又は職軍側に處分するを應當なりと思ふ、

職人を使役する時は、十人に付き一人の炊事男を給與すべし、但し日給は職人と同額也、若し工匠が病氣とか、或は雨天の時戶外作業杯出来ぬ折は、半給である、又た全く一日乃至數日の缺勤する丁匠は、何れの日にか填助せしめよ、但し病氣丈けは、役日の通り工資則ち日給を與へ、併し雨天と雖も、露役に非ざれば、此限に非ずと也、

○火頭は、職丁とて一名ツカヒビト共いへ共、今云飯焚にして、火を扱ふ人則ち火ツキと云ふ如し、○減半食は、日給は米、鹽である故に此名稱を掲げ出せし也、○露役は、ホシ店を露店と云ふ如く、青天井下、則ち屋根なき處の仕事也、

第廿七條

大營造條

凡在京有大營造、役丁匠之處、皆令彈正巡行。若有非違、隨事彈劾。

京都内に於て大設計の工事ある場合は、彈正達の役人をして巡廻觀察せしめ、官民共に不法の事あらば、事に隨て札彈すべしと云ふ也、

○大營造は、五百人以上の人を使役する工事を云ふ、○非違は、官民共に禮儀服色の違はは勿論、不法の工事如何を云ふ、

第廿八條

丁匠役還養條

凡丁匠在役遭父母喪者、皆國司知實申役所、卽給役直放還。

職人の役に就職中、所親則ち父又は母の喪に逢ひし時は、原籍の地方官より就職の役所へ申達すれば、勤めただけの賃を供與し放免して還せと也、

第廿九條

藍藍條

凡供京葉藍雜用之屬、毎年民部預於畿内、料量科下。

京都に入用の葉染料、繩、紙、酒、炭等雜用の類は、毎年民部省が豫め畿内に於て、見計らひて申付る也、是は畿内人民は庸、又は雜徭に役使されざる代りに、始終此類の雜品を上納せよ

と也、

凡役丁匠、皆斟量功力、均課輕重、日滿則放。其主當官司、不加檢校、致失功程者、節級推科、仍附考殿。

第卅條

斟量功力條

職人を使ふには皆其仕事の度を測り力めて偏らざるやうにさせ、例之は五日間は難事の工業をさすれば、五日間は輕易の仕事と云ふ如し、而して制定の日數に達せば放免すべし、若し、當該官更が、職人等の仕事を檢閲せずして、工業程度を失ふ如きあらば、當該官更は其共謀であるも無とに關せず、定期の考課に於て貶罰せよと云ふ也、

〔附〕 一 功力は、シエトの程度、一 主當官司は、今云ふ當該官也、一 檢校は、檢閲又検査の如し、一 節級推科は、其謀の有無に關せず定期進級又は賞與の時に至りて推定處分さるゝと云ふ如し、一 考殿は、最劣等の成績にて貶降さるる事なり、委しくは第十四篇考課令の第四十八條及五十五條に連ぶ、

第三十一條

丁匠往役條

凡丁匠往來、如有重患不堪勝致者、留付隨便郡里、供給

飲食。待差發遣、若無糧食、則給公糧。

役に就きて、往復する職人が、若し途中に於て大病に罹り目的地に到る事遂さる者は、發病若しくは、發病の郡村に付して官費を以て飲食を供給し、を快を待て發程せしめよ、又な糧食なきは是亦官給にて糧食を給與せよと云ふ也、

〔附〕 不堪勝致、勝は任也、致は至る也、言ふ心は到着地に病苦を忍耐して往く事出来ざるとの語也、一 隨便郡里は、便宜に隨ふ郡村なり、一 差は、屬郡に病除也、集議に極也とあり、戸令第卅二條に患損とあるも亦同意義也、

第三十二條

丁匠死亡條

凡丁匠赴役身死者、給棺。在道亡者、所在國司、以官物作給、並於路次埋殯立牌、并告本貫。若無家人來取者燒之。有人迎接者、分明付領。

就役中の職工が死亡せば、棺を給與せよ、途中に於て死亡せば、其所の地方官が官費を以て棺を給與し、路の邊りに於て、假りに埋葬して木標を立て、併せて原籍へ報知せよ、若し家族の者にて受取りに來らざれば火葬せよ、又な受取りに來らば、丁匠分用に下げ渡し引取らせよ

大寶令新解 第三卷 第三十條 賦役令

三〇二

と云ふ也、

○路末は、道の邊又は路傍或は路邊、又は路頭と云ふ如し、○所は、カリモガリと稱して假許の義歟と云へり、爰では字書に所謂埋没の意にて俗に云ふ假埋解なり、○迎接は、引取りに來たならばと云意也、○付領は、俗言に受取らせなれ共、付は係り吏員に係る交付にして則ち下げ渡し、領は受取人に係る語の收領なり、

第三十三條

書作夜休條

凡役丁匠者、皆晝作夜止、其六月七月、從午至未、放聽

休息、要須役者、不在此例

職工を使ふ時は、晝晝間は作業をさせて、夜間は止めよ、而して一年の内、六七の二ヶ月（今七月八月）は正午より午後二時まで休息をさせ、然れ共冠、婚、葬、祭、其他萬止むを得ざる場合には、必ず此例に非ずと云ふ也、

○午は、正午にして、○未は、今の午後二時通に當る、○要は、必ずなり、

第三十四條

車牛人力條

凡爲公事須車牛人力傳送、而令條不載者、皆臨時聽勅

百姓勞擾

差科之日、皆令所司量定須數行下、不得令在下有疑、使

公事の爲めに、車や牛や、人夫等入用の事ありて、何處へか傳送せんと云ふ事は、本法分の定むる所に非ざる件は、皆臨時の勅令を奉せよ、而して正當庸役人及び雇人夫等徵募の期日の事は當局者をして、入用の數を量り定めて、達し行はしめ、被募者に徵募期日を早く知らしめずして、唐突に徵募を達し人夫等をして狼狽心勞さする事はならぬと云ふ也、

○公事、假令は、外國の賓客來朝の際に於て、必用の車、牛、人夫等の類、○差科の日は、本篇廿三條の如く、正役人夫、又は臨時雇人夫の徵募の日を云ふ、所司は、假令は、外國客ならは、治部省や蕃寮を云ふ、○行下は、達示の如し、

○在下は、下司と云ふ如くにて、本條の被募者を指す、

第三十五條

諸國貢獻條

凡諸國貢獻物者、皆盡當土所出、其金、銀、珠、玉、皮、革、羽、毛、錦、蜀、羅、縠、紬、綾、香、藥、彩色、服食、器用、及諸珍異之類、皆准布爲價、以官物市宛、不得過五十端、其所送

之物、但令無損壞穢惡而已、不得過事修理以致勞費、

諸國より貢獻する物は、皆其國々に生産する品とせよ、則ち金銀、珠玉、皮革、羽毛、織物、香料、藥品、染料、食物、器具等、種々の珍奇の類は、皆布を以て價の標準を採り定め、官賣を以て買ひ求め、但し一ヶ國にて市に充てて五十端を超過すべからず、其送品は破境又は汚穢せぬやうに荷造りすべし、併し餘り鄭重に布帛等を用て荷造りするは、無益の費であるから、

藍や縫包みで充分であると云ふなり、

【譯語】○諸國の下に、前令則ち眞の大寶の介には朝集使の三字あると義解に載せたり、必ずしも朝集使のみ携帯し上京するに非ず、幸使に附して貢する也と云へり、(當土は、ソノ國とか其郷土とか其土地とか其處とかと云ふが如し、○金銀の内、銀は天武天皇の白鳳三年(紀元三三四)三月七日對馬の國司、忍海造、大國初めて朝廷に獻上す、其後天平廿一年(紀元二四九)二月丁巳に、陸奥の國よ、金を獻上せり、是れ我國に真金産出の始めとして世紀に載たり、是時大伴家持が越中の守として越中射水郡の國廳の官舎に於て、呂佞の餘り、長歌二首、反歌三首を詠みたり、載せて萬葉集卷の第十八卷にあり、(珠玉は、支那産で文字を注せば、珠は水中より採取する物なり、珠には龍珠あり、類に擬すと、蛇珠は口に、魚珠は眼に、鮫珠は皮に、鮫

珠は足に、蚌珠は腹に云々、又た作用よりいへば辟塵珠、辟毒珠、夜光照藥等ありと明の方以智の遠雅卷の四十八、八丁に載たり、異珠は蛤蚌を始め蚌等産貝にあり、我國にては玉は神代よりも貴重せられ、異珠の如きは、前記家持が熊産産の蛤の異珠を多く取寄せて、奈良の都に空圖を守り居る夫人の許へ贈りし事も萬葉集に其歌等あり、又た皇子玉と云て紫琉璃、碧バリ、紺バリ、青、黄、紅、白等の人造の擬玉あり、其製造の古き事は出雲の玉造りを始として、奈良朝に於ては玉作り都あり今も東大寺の寶庫に種々の玉を藏せり、此玉をフキダマ一名ヒイトロダマ一名御富貴玉と云ふ、古社の寶藏物とする處あり、又た古墳より出る事等あり、(則是フキイ、毛氈の類、○麗は、ウスメノと云ふて、今の絹や紗の類とす、)霞は、今云ふ京羽二重の如き細絹の絹也、○緯は、木ト絲の絹にして俗にフキヌと云、(緯は、絹の文ある物、○香は、樟腦の類、麝香、龍腦、沉香、丁香などは南洋諸島より舶來したるものとす、但し是れより前、推古朝に淡路島へ因太の沉香本漂着したると傳ふ、)藥、施藥の使用多し、委しくは醫疾介に違ふ、○服食は、今云ふ嚙り喰の如し、吉備の饅、朝鮮の乾肉(圖々ん)の類なりと義解の説なり、○器用は、下野の甕、陶形の饅の類と云ふ、(官物は、郡稱則ち正夜の香部を指す、

圖に、續日本紀に云く、元明帝の和銅五年(紀元三三三)秋七月壬午、賜、尾、三、鰒、豆、江、

越前、丹波、但馬、因、伯、雲、播、三備、美、紀、阿、美、諸の廿二國に始めて綾、錦を織

らしむ、とあり、又た高麗集第四に吉備の酒を載せり、

第三十六條

立牌坊里條

凡調物、及地租雜稅、皆明寫應輸物數、立牌坊里、使衆庶

同知、

賦稅即ち租、調、庸の上納、參勤則ち上日すべき數をば、當局則ち京ならば京職、地方ならば郡役所にて調査し、明細に其各町村の入口の制札^{チョウ}地に揭示して、一般の人民に知らしめと云ふなり、

○恩賜物は、土納品、○牌は、高札、○坊里は、町村、○桑庶は、人民也。

第三十七條

令條外雜徭條

凡令條外雜徭者、每人均使、總不得過六十日。

本法令外に使ふ雜役は、人毎に平均に使役せよ、總て六十日を超過すべからずと也。

○舊は、役と訓す、正丁、次丁並役の日數は本篇第四條に明文あり、則ち雜徭に至では令條外と稱して爰に法文を起せり、調庸の外、國中の諸事大小を論せず、總て雜徭として公用

に供す、其使役方法は、次丁は正丁の半減、中男は、次丁の半減とす、
第三十八條
仕丁條

凡仕丁者、每五十戶二人、以一人宛廩丁、三年一替。若本
司籍其才用、仍自不願替者聽、其女丁者、大國四人、上國
三人。中國二人。下國一人。

仕丁は、五十戸則ち一村に一人宛上るなり、内一人は炊事用を務む、皆三年交替なれ共、使ふ處の役所が當人の間に合ふ才をかりて尙勤^{シヨウキン}續させたまは、當人の意向次第、勤續希望なれば聽せと云ふ也、其女の小使は、大國に四人、上國に三人、中國に二人と云ふ割合に採用せよと也、
○仕丁は、ツカヒヨボ^{ツカヒヨボ}との古訓なれ其今俗は現在の裁判所の使丁と音讀する類なり、
廩丁は、前廿六條の火頭と同じく飯炊也、女丁は婢女の如くにして采女の如く貴からず、
○大、上等の國別名稱は、職員令の七十條以下に解せり、

第三十九條

飛廩免庸條

凡斐陀國、庸調俱免、每里點匠丁十人、每四丁給廩丁一人

一年一替。餘丁輸米、宛匠丁食。正丁六斗。次丁三斗。中男一斗五升。

飛騨の國は、唐も、唐も共に地産である。其代りに五十戸に就て大工十八宛を出さねばならぬ。大工四人に銀錢一人宛を給し、交替は一年なり。大工に弄さる者共は、米を越りて大工の食料に施すも、但し一人前の男は年六斗にして、次の者は其の半額、中男は又其半額なり。

附言、字解は前々數篇に散連せり、會說考證は爰に記載せず。

大寶令新解 第三卷

第十一篇 學 令

凡貳拾貳條

本篇は、學校の法令にして、廿二條より成る。

○學は、説文に、覺悟也とあり、一字の理を云へば餘らん、義解に、教化の言の總名とす、増補に、教を受け、業を傳ふるを云ふ、又た增記に、學校の總名とせり、和訓、マナブ、ナトベ、ナラフ等あり。

第一條

博士助教條

凡博士助教、皆取明經堪爲師、書算亦取業術優長者。

教官は、解學に通じ德行高くして師範とするに足る人を採れ、書算や算術の教員は、其業術技術の勝れたる人を採用せよと云ふ也、猶し本法文中に、音博士等を入れざるも、自ら此内に含じものならん。

博士は、日本紀に儒の字をハカセと訓めり、又たアト(文)ヨミ、讀(博士)人(其

凡大學生、取五位以上子孫、及東西史部子爲之、若八位以上子情願者聽、國學生、取郡司子弟爲之、大學生、式部補、國學生、國司補、並取年十二以上十六以下聰令者爲之、

第二條 大學生條

大學の學生には、五位以上の子弟、及び代々學術教養の家の子弟を採用せよ、若し八位以上の子弟にして情願する者あらば聽許せよ、而して國郡の學生には、郡官の子弟を取れ、大學生は、式部省、國の學生は、地方官に於て管掌すべし、各自の年齢は、十三歳以上十六歳未満の者に於て、耳聰、目睛の鋭敏、精神の伶俐なるを採用すべしと也、

○五位以上、の内には、親王は入らず、親王は、別に文學あり、第五爲家令職員令を石るべし、○東西を、ヤマト、カンチと訓ませる事、神祇令第十八條に述べり、○史部を、フビトへと訓び、文部と云ふ如し、古へ支那、朝鮮より歸化したる學者の末孫の家々なり、神祇令十八條に既述せり、○國學生は、義解に音讀點を施せしも、今人は國學の生徒と誤讀するの處

れあるを以て、クニの學生と調點をなせり、○郡司、國司は廣く地方官員を指す、○郡は、明也、察也と義解にあり、令は、善也、とあり、善良の子弟にして伶俐なるを云ふ、

第三條

釋奠條

凡大學國學、每年春秋二仲之月上丁、釋奠於先聖孔宣父、其饌酒明衣所須、並用官物、

大學校又は、國々の學校に於ては、毎年春は一月、秋は八月共に各上の丁の日に、先聖なる孔子を祭れ、其供ふる神饌、神酒は勿論、關係人の袷服の製造、總て官費であると云ふ也、

○二仲之月は、大陰所の春は正、二、三、秋は七、八、九の三ヶ月の各月中の月を云ふ、○上丁は、仲春（二月）、仲秋（八月）、の第一のヒノトと云ふ日なり、此丁の日を採用せしは、一説に丁寧の縁に由ると、又、丙丁は火の象ち故に文明の義を採用すも、又た丁は壯盛盛事と、人をして勇壯長盛ならしめんとの説もあり、釋奠は、セキランと云ふ、兩説に含莫とせり、釋は釋菜又た含菜とも云ふ釋は解也、散也、放也、消也、潤也、廢也、とあるを以て、トク、スツル等の訓あり、禮記の禮器に、同々スツ、（釋）美質を増すとあり、同は邪辟也と註せり、故に幾何が此意味を含みて新るの氣味あらん、奠は、マツリ、又は幣也、説文では此字の義も

は、凡上に酒を置きたる形ちとせり。爾ち神位にミヤを八脚上に供へたる形狀也。釋奠の始より、緒紀に大寶元年二月丁巳(十四日)と單簡に記せり。(孔宣父は、孔子の徽號にして、支那では、魯の襄公の十六年爾ち孔子卒せし時より、元の成宗帝迄に十四改め越せり、我國にては、神慶曆癸二年七月朔日、太政官の達しを以て自今以後、孔宣父を改めて、文宣王と號すべしとあり。此兩年、大學の助教鄭の大丘の達言に由りて也。國改號は略の玄宗帝の改號せしなり。○饌酒。饌は言振にして酒はメク、又はメクラン、或はクヒモノナンベ、と訓ひ。饌酒に酒食あり先生に饌すと、論語にては先聖に供ふることとす、本條文では主にミケ爾ち御食を云ふ、朋友は、無服なり、論語にモノイミ(遊する時には、必ず朋友あり、爾ち淨友なり、附言 緒紀に因れば、養老四年二月乙酉に釋奠の器具を造らめられたり、又た祭禮の數は我國では大抵孔子に配享するに十哲とす、支那では此外に七十二弟子及び丘明、孔安國等廿二名をも配享せし事あり、又た式としては、供物の内ち三牲として、支那では牛、羊、豚の九氣を以てするも、我國にて、大鹿、小鹿、家とす、若當日が國、韓、秦祭等の前に當れば、三牲に代はるに、五寸以上の鮓、鮓を用ふと、延喜式卷之廿大學式に詳か也、因に國神、韓神は、宮内省に饌庫すと、古事記舊事記にては、甲は南に在り、乙は北に在り、一祝に無正饌、神寶朝饌と、式の卷一には國一鹿、韓神二鹿とせり、

凡學生在學、各以長幼爲序、初入學、皆行東脩之禮於其師、各布一端。皆有酒食、其分東脩、三分入博士、二分入助教。

生徒は、學校に在りては、年齢の少長を以て順序を立て、入學の際は、皆各學生が、師とすべき先生達に東脩の禮を行ふべし、其物品は生徒一人にて布十端、酒一樽とす。此酒にて師弟契約の小宴を開く也、布は、七分して博士一人に三分、助教二人に國分爾ち助教は一人に付る二分宛分取せよとの法訓也。

○東脩は、其始め支那にては、初對面を請ふ時に今云ふ進物を呈するので、身分に依りて各差等があり、例之ば、天子に遇するには玉を以てす、卿大夫には羊や鴈を、士族には雉、鹿人にはアヒル、工商人には鰯と云ふ事より轉用して、師と頼むべき時に此東脩の禮を用ふ也、本條の品は、其内にて最も輕少の物品を撰用すと云へり、論語の述而篇に孔子も之と云へり、其は十束脚と云ふて、鹿等の乾肉を如何様の如何程なる束か未詳なり共、乾肉十束を上つるとある也、

第四條

學生爲序條

凡經、周易、尚書、周禮、儀禮、禮記、毛詩、春秋左氏傳、各爲一經。孝經、論語、學者兼習之。

第五條

明經教科書條

本條は明經用法二科の教科書目を示したる條にして、厥中では、易經、書經、周禮、儀禮、禮記、詩經、左傳を一經とし、孝經と論語は、生徒は兼習せねばならぬとなり。

○周易は、今の易經を云ふ、其初め伏羲氏が、横の棒二本だけを畫したるをケ、又はフ（卦）と云ふ、其後之を解釋して文字に顯はしたるは、周の文王及周公と孔子、故に周の易と云ふ也、而して易と云ふ語は、交代變易を云ふ、故に覆返間雜萬象の變化を究め、則ち世の治亂盛衰安危存亡、天地地異、人の榮枯浮沈死生に至るまで、其故あるを審にするの標準書となせり、○尙書は、今の書經を云ふ、尙は上古の意とす、而して書として、此書が最古の書である故に尙書と云ふ、後世支那にては、立法行政の軌範となせり、○周禮以下二禮の禮は、皆クイと讀む、合稱して三禮と云ふ、周禮は周の官制職掌を記せり、儀禮は、周代の禮儀則ち坐作進退の品節を記せり、禮記は以上二禮に載せざる儀式制度を攝攝するものなり、○毛詩は、今の詩經を云ふ、毛扆と云人の注釋本（傳と云ふ）が最古の注故に此人の姓を冠して毛詩と云

ひ習はしたる也、支那の上は帝王より、下も田夫野婦に至るまでの歌を記せり性情の眞を見るもの此書にしくはなきなり、○春秋左氏傳は、今左傳と云ふ、魯國の歴史にして春秋と云ふ書也、左丘明と云ふ人が注解を加へたるを以て、左傳と云ふ也、○孝經は、第二に兩經に考行するより身を立て道を行ひ名を後世に傳ふるは孝の終也と云ふ等考を考たる書也、○論語は、孔子代の言行錄也、

第六條

教授正業條

凡教授正業、周易、鄭玄王弼注、尚書、孔安國鄭玄注、三禮、毛詩、鄭玄注、左傳、服虔杜預注、孝經、孔安國鄭玄注、論語、鄭玄何晏注

本條は明法、明經二科の學生の教科書目とす、此科の生徒には、易經ならば、鄭玄が王弼の注本、書經ならば、孔安國が鄭元の注本、三禮と詩經は、鄭元の注、左傳は服虔が杜預の注、孝經は孔安國が鄭元の注、論語は鄭元が何晏の注本を教授せよと云ふ也、

○周易注、十卷、鄭玄、國史經籍志、唐書藝文志、共に周斷、王弼、韓康伯の注亦同じる也、故に張之洞の書目答問上冊三張の左三行に、周易鄭注、十二卷、丁傑の候補にて、陳

春秋、湖海樓藏書本あり、外に種々あり、各同又た四庫目を參照すべし、以下の鄭書も亦然り、
○鄭玄の玄は、又元の子とも書く、後漢書列傳廿五に載せり、鄭玄、字は康成、北海高密の人、
博通にして六藝に通じ、終身官宦に就かずして農桑の間に匿跡すと雖も、晩年には、數千人の
門弟が雲集すと云ふ、古書として注解を施さざるは殆んど無きが如しと云ふ、○王雱は龜八の
一、○古文尙書十三卷孔安國の傳本、石經鄭玄の尙書八卷、尙書正義廿卷等あり、○孔安國は、
孔子の末孫にて、南渡武帝時代の人也、○三禮と詩經、周禮十二卷、儀禮十七卷、禮記廿卷、
毛詩攷卅六卷、以上四部鄭玄の注本、○左傳解卅一卷、服虔の注、春秋左氏經傳集解卅卷、
杜預の注也、○服虔は、後漢書の列傳六十九に、服虔字は子慎、初の名は貢、又威とも云ふ、
後ちケン（虔）と改む、河南滎陽の人也、少にして清言を以て大學に入學して義を受く、雱才
あり、苦く文論を著し、後ち九江の太守となりて病歿せり、○杜預は、晉書列傳の四に、杜預
字は元凱、杜陵の人なり、經籍を耽讀す、殊に左傳癖の名あり、○春秋は、孔安國の古文孝經
一卷、鄭玄の注本一卷、○鄭玄の論語注十卷、何晏の集解論語十卷、あるといへり、○何晏は、
三國志の魏の列傳の九に、晏は何進の孫也、秀才を以て知らる、老子や莊子の言を好んで隨處
論を作り、其他著述數十篇と云へり、
附言、孔安國の古文孝經は、支那にして亡佚したりとて、太宰春彥の古文孝經を日本より連れ

りと云ふ、

第七條

大經條

凡禮記左傳、各爲大經、毛詩周禮儀、各爲中經、周易尙
書、各爲小經、通二經者、大經內通一經、小經內通一經、
若中經、則併通兩經、其通三經者、大經中經小經各通一
經、通五經者、大經並通、孝經論語須臾通。

本條は、明經用法二科の學生の學則と見做すべし、九經を大別して大中小の三經とし、則ち禮
記と春秋左傳と大、詩經と二禮と中、易と書經と小經とす、二經を兼古する者は大經にて一部、
小經にて一部とす、若し小の代りに中經ならば二部を稽古させ、又大中小全通せんとするも
のは、二經中各任意に一部宛を採用せしめて稽古させ、又大五經を稽古する者は、大經則ち
禮記春秋の二部は、是非稽古をさせ、且つ孝經と論語は必ず兼學さすべしと云ふ也、

○介經は、本文の外、延曆十七年三月に、開代の爲羊と云ふ人の作傳せし春秋と、開代
の殷梁と云ふ人の著作せし春秋の二傳を兼小經として加へられたり、○五經は、禮記、春秋、
詩經、易、書經とす、尙委細書目を見んと欲せば、四庫書目、及び汲之洞の書目各同が便利で

ある、

第八條

經濟通讀譯義條

凡學生、先讀經文通熟、然後講義、每旬放一日、休假。假前一日、博士考試、其試讀者、每千言丙、試一帖三言。講者、每二千言丙、問大義一條。總試三條。通一爲第、通一、及全不通、斟量決罰。每年終、大學頭助國司、藝業優長者試之、試者、通計一年所受之業、問大義八條、得六以上爲上、得四以上爲中、得三以下爲下。類三下、及在學九年、不堪貢舉者、並解退。其從國向大學者、年數通計。服闋重任者、不在計限。

本條は、ヤハリ、明經用法二科の學生の義讀、講義、試験、及蕃館、在學年限等の事を制定せし令條なり、

生徒は授かる處の經書を素讀し、然る後に意義を解せよ、毎月十日に二日の休暇を致させ、其

休暇の前日は、教習に於て小試験をせよ、先づ素讀の方にては、千字に就き三字の筆答を出す

せ、講義の方では、二千字に就き要點一ヶ條、總計三題を讀して筆答をさせ、其内二題の出来

た者を及第とし、一題しか出来ず又は三問共筆答出来ざる者には、鞭撻を以て罰せよ、鞭を以

て撻つゝの多少は、教官に於て斟酌せよ、而して年末に至らば、大學寮の長次官、及び國の學生

ならば、地方官が、其學生中の優等者を撰拔試験せよ、試験官に於ては、學生が其年授かりし

科程を計算して、其内より要點八ヶ條を試問し、内ヶ六題の解答者を甲とし、四題以上を乙と

し、三題以下を丙とし、三年間續いて丙點を得たる者と在學九年にして、及第の望み無き者と

をば退學を致させ、但し國々より、大學に舉げ送る學生の内に於て、就學年限中に兩業の並履

に達よて、休學して居たる者は、其休學月數は九ヶ年外に功方ある者とすべしと云ふ也、

附註 (一) 休暇の假は暇に同じ、(二) 考試の考は義解に校也とあれ共試験と有做すべし、委くは考

課令に違ふ、(三) 千言は千字也、一帖の帖は答と看做すべし、委くは考課令第六十九條以下に

違ふ、(四) 決罰は、笞打の罰を指す、(五) 貢果は、貢は貢人と云ふて、國々の學生より採用する及

第者也、舉は舉人といふて大學育ちの學生より採用する及第者也、(六) 解退は退學の事、(七) 服闋

責任は、突終りて又た學校に出ると云ふ事也、因は格と訓む、

第九條

分縣教授條

凡博士助教、皆分經教授學者。每受一經、必令終講、所講未終、不得改業。

教官は、各自各科を分擔して學生を教授せよ。一經を授くる毎に必ず講義を終はらしめよ、一書の講義終了せざれば、他書に移りて授け授かる事はならぬと也。

第十條

考課等板條

凡博士助教、皆計當年講授多少、以爲考課等級。

教官に對しては、教官が當年授けし學業の多少を運算して、以て教官等の升級の事をせよと云ふ也、考課令三十九條(四十二條の内)及び六十七條國博士の條を參看すべし。

第十一條

通二條條

凡學生、通二經以上、求出仕者、聽舉送。其應學者、試問大義十條、得八以上、送太政官。若國學生、雖通二經、猶情願學者、申送式部、考課得第者、進補大學。

學生が二經以上に通達し、出て官に仕へんと求めば、太政官へ舉げ送る事を許す、猶れ其情願

には、既に研究したる二經以上の内にて要項十題を課して試問せよ、八題以上の解答を得ば、

太政官へ送れ、又た國々の學生の二經に通じ、尙其上研究を情願せば、式部省に申し送れ、省に於て試問の上及第せば大學生にしてやれ、若し落第せば本國に還せと云ふ也、委しくは第二十

四條考課令の第六十九條以下を參看すべし。

第十二條

講說文才條

凡學生、雖講說不長、而閑於文藻、才堪秀才進士者、亦聽舉送。

學生は其講義説明に於て及第點に至らざる共、其文章が美麗なるに於て、才、秀才進士の二科に堪ゆると見込まば、舉げて太政官なり、式部省なりへ送れと云也。

○不長は、及第點に非ざるを云ふ、閑は、爾雅に習也とあり、荀子の勸學篇には、多

見を習とす、故に習熟と云ふ如し、職員令左馬寮の閑とは其義差へり、○文藻は、文章と云ふ如し、藻は水草にして、潤澤美文あるもの、故に文章の美なるに喻ふ、○秀才、進士は、明經、

明法の二科と合して我國の古代に於る四科の及第業といふ内の二科にして、委しくは、第十四條考課令第六十九條より以下に於て述ぶ、

第十三條

算經條

凡算經、孫子、五曹、九章、海島、六章、綴術、三開重差、周髀、九司、各爲一經。學生分經習業

數學、天文の書は、孫子等外八種の書をば、各二卷とせよ（同一九經也）、學生は、經を分て修業せよと云也、

附註 ○孫子は、人名を其て、算術書目にせし事、老子、莊子と云ふ如し、隋及び唐の經籍志

にては、孫子算經二卷或は三卷とす、○五曹算經、五卷、是亦人名を冒せり、○九章算經は、

周公の作也と、諸令備考に、後漢書鄭玄の注に又た外に算學啓蒙の序に曰とあれ共、四庫書目

に、何人の所傳たるを知らずとあり、九章一名九數とせり、九篇あり、一に方田、二に粟米、

三に差分、四に少廣、五に商功、六に均輸、七に方程、八に盈不足、九に傍要也、○海島算經、

一卷、○綴術、五、或は六卷とせり、○六章、六卷、三開重差、隋志に九章重差圖一卷、唐

志に劉向の重差一卷とせり、○周髀のとはそ、（殷）と云ふ字にて音と也、下を稱するの代名の

如し、併しコレは天文書の出、一、又は二卷あり、續紀十一、天平三年三月乙卯の制、及び式

部式の上に凡算得業生、不解周髀者應得及第、不須敘位、但聽留省、○九司、一卷、

第十四條

國郡司解經義條

凡國郡司有解經義者、則令兼加教授、若訓導有成、則可進考、

地方官中に學力のある者有りて、經書の意義を知る官吏があらば、國博士の補助に、博士等の手傳へをさして、國の學生に教授を加へさせよ、若し手傳として、其訓育見る所あらば、其官

更に對して升級せよと也、

附註 ○訓導は、教へ導也、

第十五條

習字學生條

凡書學生、以寫書上中以上者聽貢、其算學生、辨明術理、然後爲通、試九章三條、海島、周髀、五曹、九司、孫子、三開重差、各一條、試九、全通爲甲、通六爲乙、若落九章者、雖通六猶爲不第、其試綴術六章者、准前、綴術六條、六章三條、試九、全通爲甲、通六爲乙。若落經者、雖通六猶爲

不第。其得者叙法、一准明法之例。

書道の學生は、文字を覺ゆるを主とせず、只書寫せる字形筆跡の巧麗優秀なるを以て本とす。故に其書寫せる筆跡が上又は中等以上ならば、及第の進士として官途に就かしむる事を免せしめ、其數學生は、算術の理を辨明し、而して後に通解したしせば、九章等經の内に三題、海島算經以下にて、各一題宛則ち合計九問を試驗せよ、九題共に、明瞭の解答を致したる者を甲とし、六題解答を乙とし、萬一九章に落第する者は、外の六題が出来たとしても及第ではない、又た綴術と六章經の試問を受くる者は、前項に准じて綴術が九題、六章で三題、合計九問とせよ、九問解答すれば、無論甲となし、六題解答を乙とし、若し六章の三題が出来ずして、六問の解答を致しても及第に非ずとす、而して及第者の叙任法は、明法科の例に准ぜよと云ふ也、

附錄 ○書學生は、筆道の學生也、○聽貢は、貢人たるを許せと云ふて地方學生の式部省に上りて仕官するを云ふ、○落經は、宗とする所の經書に落第する也、○不第も亦落第と云ふ如し、○叙法は、第十二條選叙令の第廿九、卅條に委く違ふ、○明法は、上述の如く四科の一にして、是亦第十四條考課令の六十九條以下七十五條までの間に詳述す、

第十六條

學生請假條

凡學生請假者、大學生經頭、國學生經所部國司、各陳陳量給。

學生は、既定の休暇の外に、両親又は自分の病患等にて、臨時休暇を受けたき者は、大學生は大學の頭に届け、(論のみを含む)國の學生は、當局者に事情をば書面に認めて届け出せ、さすれば頭又は地方當局に於て見計ひて休暇を給ふと云ふ也、

附錄 請假のカの字は暇と同じ、○所部國司は、管轄地方官と云ふ如し、○陳陳は、學生自署の書面、○量給は、係官に於て見計りて日を與ふるを云ふ、

第十七條

極不得使學生條

凡學生、自非行禮之處、皆不得輒使。

學生をば、拜奠の時とか、又は入門則ち東階の禮を行ふ時とかの他は、極く使役する事はならぬと云也、

第十八條

禁音樂雜戲條

凡學生在學、不得作樂、及雜戲。唯彈琴習射不禁。其不率師教、及一年之內違假滿百日者、並解退。

學生は、在學中、音樂を弄し種々雜駁なる遊戲をする事はならぬ、併し琴を彈じ射術を學ぶは差支はない、尙正業を怠り、師の教に従はずして雜戲に耽り、而して制定の休暇外に、一年を通じて百日休業する者には、退學をさせよと也、

附註 ○雜駁は、舞踏遊蕩の類、○琴は禁なり、邪を無止して人心を正ふする也、五絃とせり風俗通に云く、長さ二尺六寸六分、廣さ六寸、上を池と云ひ、下を窰と云ふ、前廣く、後ろ狹きは、符箏を象る也、上圓く下方なるは、天地に法る也、五絃は五行（木土金水火）に象り、大絃を君となし、小絃を臣とす、云々等の說あり、射は仁の道也、正しきを自己に求め、己れ正しふして後ち發つべし、發して中らずと雖も怨みず、これに勝者は、己れより求めたる也、○禁の字を、イサメと訓み、是は天武紀に制の字をイサメと訓み諱諱の意を含めり、萬葉集に禁をイサメと訓み、又た天智紀に、禁斷をイサメとせり、又た新古今雜の下に、延喜の御時女真人内匠、白馬の節會見侍りけるに、車より紅の絹を出したりけるを、檢非違使の礼さんとしければ、いひつかはしける

女真人内匠

大空にても日の色をいさめては

あめが下には誰れかすむべき

と此女官が詠せし歌にて詞はなかりしと云ふ、○遠假は、一定の休暇に違ふと云ふ意也、

第十九條

學生衣服條

凡學生、年廿五以下、道喪服闋、求還入學者聽之。

學生は、廿五歳未満にして、両親の喪に逢ひ歸省し居て、再び學校へ入らんとする者は許可せしと云ふ也、是は在學滿九ヶ年になれば退學せねばならぬ法則であるに因る、故に十五歳で入學した者ならば、廿五歳の或月にて滿九年となれば也、併し親の喪は差引出来る也、又た滿九年になりても、今暫時在學させて置けば成業すると云ふ見込が教官等にある時は猶豫の出来得る規則となりて有る也、

第二十條

田假授衣服條

凡大學國學生、毎年、五月放田假。九月放授衣假。其路遠者、仍酌量給往還程。

大學及び國々の學生は、毎年五月に插秧の助けをする爲めに、兩親の許へ歸省をする休暇をやら、又た九月には、各將をモラヒに行く休暇をやら、其路程の遠近に依て日數を料酌して給へと云ふ也、

〔附〕○田假は、田植の休暇、○授衣は、詩經の國風に、七月流火、九月授衣、注に、九月霜始めて降り、婦功成り、以て冬衣を授くべしとて、則ち暑往寒來冬服モラヒに行くのである、

第二十一條

被退校條

凡學生被解退者、皆條其介解之狀、申式部、下本貫。其五位以上子孫者、限年廿一、以上申送太政官、准蔭配色。

學生中、退校せらるゝ者は、其事由を條項に分ち書面を以て、式部省に具申して本籍へ下せ、五位以上の子孫は、廿一歳を限りとして太政官に具申せよ、但し父祖のお蔭にこりて夫々職に就かせよと云ふなり、

〔附〕○解退は、退校、○條は條々也、○介解は、シテ、キと訓みて、退學とすべしと云ふ如し、○准蔭は、イニにシユンじてと訓みておかげに依ると云ふ意にして、一、二、三、四、五位等に准ずる也、○配色は、其種別々に職に就かせよと云ふ如し、第十七卷軍防令第四十六條

參看すべし。

第廿二條

令觀儀式條

凡學生、公私有禮事處、令觀儀式

學生には、公私の別なく、大中小等の禮、例之ば、元日、又は公卿大夫の葬禮等、其吉禮凶禮に關せず、見習はしむる爲めに、儀式を觀せしめよと云ふ也、右吉禮儀の嚴なる事、方今の比に非ざるを推察すべし、

大寶令新解 第四卷

第十二篇

選叙令

凡參拾捌條

本篇は、任官、敘位の法制也、

附 選は、選擇にしてエラフ也、左選の選と文字を異にせり、選は才を選みて官職を授くる也、敘は考敘也、勳務の成績を計上して位階を次第し賜ふ也、三十捌條は、何れの集解にも二十九條としてあるけれども、私に之を計ふればヤハリ義解の本にある如く三十八條しか計へられぬ、令抄に兩本相違ありとして一本舍人條を除きて三十八條とすとは何れの書を指せしか後查を要す、然して今余の假りに條數を付せしを以て抄出せば、第十四條に凡舍人、史生、兵衛云々を敘せん事はとある一條とすれば、該條は義解にも集解にも掲げあれば也、依て稿の義解本に従ふ、

第一條

應叙條

凡應叙者、本司八月卅日以前按定、式部起十月一日、盡

十二月卅日。太政官起正月一日、盡二月三十日、皆於限
内處分畢。其應叙人、本司量程申送集省。

本條は、奏任官の叙位、即ち六位以下の叙位の手續きにして、官、省、職、寮、司、署、裏、府、國郡、等官員の叙位すべき人々をば、各前年の八月一日より當年の七月三十日迄に定めて、文官は式部省、武官は兵部省へ其書類を送達すべし、式部及び兵部省は、十月の一日より、勘査して十二月三十日迄に太政官に送達せよ、太政官は翌年正月の一日より勘査し二月三十日迄に、右二省へ返附すべし、總て此期限内に於て處分し終らしめよ、而して叙位に預る人々を式部及び兵部省に集めて叙位式を行へ、但し五位以上は中務省の取扱にせよと也

〔考〕應叙は、叙すべきと訓みて六位以下の奏任官又は無役もある也、(本司は、諸多の役所、○量程は、各府縣の遠近を測るを云ふ、但し位記拜受には若一役所に於て多人數あれば總代として一人出頭して拜受する事もあると推知さべし、考課令の第一條、又は受附の日限等の事は、公式令の第六十二條を參看すべし、

第二條

叙位大別條

凡内外五位以上、勅授。内八位、外七位以上、奏授。外八

位、及内外初位、皆官判授。

本條は、勅、奏、及び判任官の位階を大別せし也、則ち外五位以上は勅任、内八位、外七位以上は奏任、外八位及び内外九位は皆判任とす、

〔附註〕○正、從、上、下、内、外、大、少の事、此階別は古代の位階にありしも今世は正從の外階となれり、(一)正從は正副の如し、外位はモト外官のみに授かりしも後は姓氏の卑凡なる人を外位に敘する事となりたり、内位より稍輕き階級とす、而して正五位上より、少初位下迄に外を附するも四位以上には外位なし、(二)大、少は初位のみに冠せし也、初位は九位の如し、(三)勳位は古代は武官のみに賜りし位階にして其相當は、六等以上は勅任の人に、十二等以上は奏任の人に賜ひし也、方今の勳位は、文武共に賜はり、別に功として武官中戰功ある人而已に賜へり、昔の功は文武共に賜はりたり、故に今昔相反するなり、

以上二條は叙位の事にして以下は大抵任官の事を擧げり、古へは官より位階を尊重せられたり、

第三條

任官大別條

凡任官、大納言以上、左右大辨、八省卿、五衛府督、彈正尹、大宰帥、勅任、餘官奏任、主政、主帳、及家令等、判

任 舍人、史生、使部、伴部、帳内、資人等、式部判補。

三三四

本條は、勅、奏、判任の主なる任官を示したる也、古へは今の如く親任官なる名無なし、故に大納言以上大臣とても勅任とせられたり大辨及び八省の長官、衛門、左右衛門、左右兵衛、合計五个の衛府の長官、彈正左の長官、大宰府の長官も亦皆勅任也、其餘中央地方諸役所の主典以上及び郡長、軍毅則ち軍團の長等皆奏任たり、主政、主帳及び諸家の家令等は判任官とす、但し内舍人は有位の人なれ共判任たり、舍人、史生以下皆式部省に於て準判任の辭命を交付せし也、

【字解】○官名は、職員令の諸條に既に述べり、○舍人は、第一卷第二篇職員令第三、第五條に既に解説す、○使部は、諸役所の雜用に驅使する人共を云ふ、○伴部は群部と云加し、○帳内は親王に給はる舍人にして、資人は臣下に給はる舍人ともいふべし、

第四條

應選條

凡應選者、皆審狀述、銓撰之日、先盡德行、德行同、取才用高者、用同、取勞功多者。

本條は、本任官を銓選還任する令條にして、先づ還任せんとする時は、皆各被還者の既往の行狀を手記し、之を調査し改め其人を銓衡する日に、第一に德義品行を査し、德義品行同等ならば、

【字解】○審は、審判、審査の審にして明かに改むるの義也、○狀は、行狀にして、既往則ち過去の一年若くは數年間の行爲を云ふ、述は昔績にして、モトは足の跡の跡の事なり、轉用して凡て功過の見るべき者を跡と云ふ、跡と同字にして、跡にも亦通せり○銓擬は、銓衡と云ふ如し、銓衡も衡も天秤の竿にして、測量する事なり、○德行は、德義品行を云ふ、德に就ては、其注釋殆んど際限なけれ共、周禮の六德を云へば、智、仁、聖、義、忠、和とせり、又た論語に由れば、溫、良、恭、儉、讓等諸善に依て其名少からず、行は、右等の德の行爲則ち行狀に類したるを云ふ、○勞功は、年功經驗を云ふ、

第五條

兼任官條

凡任兩官以上者、一爲正、餘皆爲兼。

本條は、兼攝官を云ふ令條也、二官以上數役に任する時は、一官だけを正とし、其餘は皆兼官とせよと云ふ也、

凡選令新解

第四卷

第十二篇

選職令

三三五

○正とは、官職と位階と相當するを正とす。然れ共若し皆相當せざれば、其内最高の役を正とすべしと也。

第六條 行守條

凡任内外文武官、而本位有高下者、若職事卑爲行、高爲守。

内外の文武官に任せられたる者、其官位相當則ち正三位の相當官は大納言である故に、此官位相當し有らば、正三位大納言何某と署名して宣しければ共、若し官位に高下あり、則ち從二位にして大納言の官なれば、從二位行大納言何某と署名し、之に反して正四位で大納言ならば、正四位守大納言何某と署すべしと也。兼官あらば其兼官を大納言の下に兼何々と署すべし、古は位階を上に記し官を下に書きしも、今は官を上に位を下に署する也、故に今は其署名の順序は、官、位、勳、功、爵、學位、姓名と云ふ順に署せり、
○内外は、内官は在京の諸官にして其餘は外官とす、○本位は、位を云ふ、○職事は、官職也、○行はモト在右兩足相交代に依て前び形もの字也、故に兩羅稱宮に、堂上に於ては行と云ひ、堂下に於ては歩と云ふとあるより轉用せし也、○守は、マモル、タモツ等の訓あり、

易の繫辭傳に、何を以て位を守る、曰く仁とある點に因れるならん、
第七條 禁近親採用條

凡同司主典以上、不得用三等以上親。

本條は、依怙^{ヒコ}貪^{コソ}貸^カ又は不公^{フコウ}、不正の事を豫防する令條にして、則ち同の役所内に於て主典以上にして、三等親以上の近き親屬を用よる事はならぬと云ふ也、
附 同司は、同じ役所、(五等親の解は、第十八篇、儀制介第二十五條に詳述す、

第八條 任官死入條

凡在官身死、及解免者、皆則言上、其國司、大上國介以上、中國掾以上並闕、及下國守闕者、皆馳驛申太政官。若大宰帥、及三關國、並岐對馬守者、雖獨闕、猶從馳驛例。其待報之間、大宰遣判事以上官人權攝、任託、馳驛發遣
本條は、官人死入又は辭職、解職、免職、退職等の時の取扱法也、
官人在官中死入し、或は兩親の喪の爲め、或は病氣等にて辭職等する者は、奏任以上ならば太

凡初位以上長上官遷代、皆以六考爲限。六考中中、進一

第九條

奏判進級條

○解免は、解職、免一、辭一、退一、等を含有せり、犯罪ありての免職にして、奏任なると云ふ也、
事則ち大小監に相當以上の官人を遣はして家務せしめよ、任官の晩は早打にて任地に赴かしめ
の長官が關官せば、是亦別仕立の早打たるべし、而して太政官の報ある迄は、大宰ならば、
と、大宰府の長官及び三關則ち關所のある伊勢、美濃、越前、或は壹岐、對馬、の如き邊塞國
官、中國の判官則ち據以上、及び下國の長官、關員せば、別仕立の早打を以て太政官へ申達せ
らば、判決を太政官に、何任ならば省寮職司に言上し、其報を得て解官せよと也○關別及三關
の事は、職員令の第七十條に既に述べり○曉諭は、早打の如し、○判事は、判官にて、八省な
らば大小悉なり、○權攝は、假りの兼職務と云ふ如し、權は權攝、一勢、一柄、一謀のことは
其義を異にし權の守、權の介、權妻の權と其字義同じ、攝は總也、愛也、假也、收め歟也、
整理、整頓の意なり公式令五十七、五十八條參看すべし、○訖は終也、

階叙。每三考中上、及二考上下、并一考上中、各亦進一
階叙。一考上上、進二階叙。其進加四階、及計考應至五
位以上、奏聞別叙。其考未滿而以理解、及考在中下以下
者、不在進限。若有上考下考、准折之外、仍有上考者、各
聽依法加階。則考未滿、從見任遷爲内外官者、並聽通計
勞。其六考之外有餘考者、通宛後任考。

本條は、奏任、何任の進級條例共云ふべき令條なり、九位以上六位以下の升叙に於ては、悉く
皆進級年限は六年であり、其六年間の功過成績が中の中ならば一階を昇せ、又た前三年間は中
の上で後一年は上の下、爾後の一年上の中ならばナハリ一階を昇せよ、又た一年の成績が上上
ならば一度に二階を進め昇せ、若し扳群等則ち非凡超超の成績にして、四階も進めんとあら
ば、其功績を能々勘査し、而して、此飛越をさすとして、若し五位以上即ち勅任に達する
様の事にならば、奏聞に達して、特別の取扱とせよ、又た進級の全年限則ち六考の勤務未滿に
して、止を得ざる爲めに、辭職或は解官ある者とか、或は成績が中の下以下ならば進級する

か能皇せん、因て悲歌二首を作りて、式て哀思の志を遺る、其詞に曰く

荒玉の年の緒長く相みてし

その心ひきわすらえめやも

いはせ野に秋はぎしぬぎ馬なめて

はつとがりだにせずやわかれん

右八月四日贈之(今の九月二日)

便ち大帳使に附きて、八月五日を取て京師に入るべし、此に因て四日を以て、國尉の儀を介、内藏の伊美吉繩原の館に設けて假す、時に大伴宿禰家持作歌一首

しなさがる越にいづとせすみ住て

たち別れまく惜しきよひかも

右の歌題では六年、歌にては五年、實際は、足かけ六年にして滿五年なり、尙茲前守山上憶良、藤原信にも此種の作歌あり略す、○階は、當代にては三十階ありし也、官位令にあり即ち正一位より從三位迄六階は正從のみにて上下なし、正四位より少初位下迄二十四階、則ち四位より八位迄は各正從上下あり、○以理解は、止むを得ざる解又辭職と看るべし例之は七十以上にて致仕及廢官の如し、○准折はナゾラベ、ヘメと云ふ文字にて差引折衷と云ふが如し、○見任は、

現職也、○内外官は、中央及び地方官と云ふ如し、○前勞は、前の勤功、○檢考は、餘分の功績と云ふ如し、

第十條

計考應進條

凡計考應進、而兼有上考下考者、並得准折。每一中下、得以一中上除之、每一中下、及一下上、得以一上下除之、下上、謂非私罪者。上中以上、雖有下考、則從上第。下考、謂不至解官者。公罪、下中、私罪、下上、雖有上下、仍從下考。

本條は、主^レに中の中以下^ノの成績者に對する法令にして、准折結階の法と云ひ、故に既定年數の功過を差引計算して、進級すべきんには、上考と下考あらは、之を混和し差引勘定すれば、中の中考に當る也、又た一の中の上考を以て、一の中の下考を除けば、二の中の中考を得、又た一の上の下考を以て、二の中の下考を除けば、二の中の中考を得、若し三考其上^ノの下にして、三考が中^ノの下ならば、三

其分番經二考以上。

本條は、休職等の人の缺位、又は再び現職に任せらるゝの法制也、
休職等の人が、現職に就かんとするも、議員がなければ、素より任官は出来ぬ、又は議員ある
しも其人其議員の職に適材ならざれば任せられぬ、故に六位以下の人は、古昔は、休職の人に
ても番目を立て出勤したもので、考選敘任に關する也、因て議員ある毎に各其本人の位によ
り其才を量りて任用せよ、牙番則ち休職中に、二考以上を解過し、最上則ち常務になる者は、
七考を以て限とせよ、若し一考經たる者はハハリ六考の例に同じ、其八考を經たる者、八考の
成績が中ならは、位一階を升進させ、又た八考の内、四考は上、四考は中ならは二階升進、又た
八考悉く上ならは三階升進、又は八考に満たずと雖も外國に使臣として其滞在が滿四年にな
りし者にて上考と下考とあらは、前例に依れ、又た別に勅命或は技術等にて諸役所の長にす
る時は、考選の期限、叙位の法は、職事に同断とせよと云ふ也、

【附】散位は休職の如し、職員令の第十六條、式部省所管の散位寮、及び公式令第五十五條
參看すべし○牙番上下は、代り交りに勤むるを云ふ、○四同は、四年、別勅は、別の勅命、
職事は、家令職員令第五條に述べり、
參考として、左に令抄を抄録す、

恩例。內分番入內長上二者以七考爲限。
內長上。六考。
外長上。十考。
內分番。八考。
外分番。十考。
外散位。十二考。

內分番經二考入內長上同六考例。
分番上一。長上中、上五、敘三階。
分番中一。長上中、上五、敘二階。
分番中一。長上中、中五、敘一階。
內分番經二考以上入內長上以七考爲限。

分番。上六。長上中上一。敘三階。
分番。中一。長上中上五。敘二階。
分番。中四。長上中上一。敘二階。
外散位經二考入外長上者同十考例。
經三考以上者以十一考爲限。

外長上經一考入內分番二者同八考例。
經二考以上者以九考爲限。
外散位經二考入內分番者同八考例。
經三考以上者以九考爲限。
長上出分番考敘法。
恩按、六位以下職事官辭其官則爲散位分番上下也。
比上經五考出分番者同六考例。
經四考以下者以七考爲限。
其經八考者。

恩按、內分番。以八考爲限者也。
八考中。進一階。四考上。四考下。進二階。
八考上。進三階。使。使四階。
分番三等。

小心謹。執一。當幹了者。爲上。
新上無違。供承得濟者。爲中。

補遺不_レ上_ニ執_一富虧失者、爲_レ下、

右は本文又は新解と照合すれば頗る重複の嫌あれ共、文簡にして差違するを以て特に抄出せり、又た分番三等は、考撰分の第四十九條の文なるを以て新解は其條に違ふ、右法文の別勅云かに就て、外散位等に叙位の事を史實に證せば續日本紀卷之八、元正天皇(女帝にして文武天皇の細妹)の養老二年二月壬申(元年十一月)に行幸あり、其時御通策造道敷國の國司及び外散位等に、各授位又は祿_ヲを賜へり、

第十二條

考滿應敘條

凡考滿應叙之人、有_レ高行異才、或尤達治體、皆聽擢以不_レ次。不_レ須限以_レ常條。

本條は拔群者を不時に採用する條也、

考滿ちて、敘位すべき人若し親に孝行とか、君に忠義とか、又は才藝に超越して居るとか、或は治國の大體に通じて居るとか云ふ者には、此規則に拘泥せず、不時に拔擢敘任せよと云ふ也、
○高行は、孝經に、孝は子婦の高行、忠は臣下の高行、或は孝悌忠信を云ふ、○異才は、文學、武藝、算數、射御、醫方に長じたるの類を云ふ、○治體は、大體四つあり、一に仁義、二

第十三條

郡司條

本條は、郡長、郡書記を敘任する條也、

凡郡司、取_レ性識清廉堪_レ時務者、爲_レ大領少領、強幹聰敏工_レ書計者、爲_レ主政主帳、其大領外從八位上、少領外從八位下叙之。其大領少領、才用同者、先取_レ國造。

郡役所の郡吏には、天稟多少の知識あり且つ清廉潔白正直にして、時務に堪ゆる人を採りて郡長とし、次に身體強壯にして伶俐、且つ書算に巧みな人を書記とせよ、其郡長には即日外從八位の上、少領郡長には外從八位の下を敘せよ、若し大領少領共、其才用同等ならば、先づ國造_ヲを取れと云ふ也、

○大領は、郡長、少領は次官、○強幹は、ツヨキ事、○聰敏は、カシユキ事、○書計は書_ノと算術也、主政は郡役所内の何事兼務の書記、主帳は、今の郡書記、○國造は、紀元一千三百五年、則ち孝德朝の大化革新前に在ては、一國の大名でありしも、大化後は、神職にして、其國々にある最大なる神社の神主となりて神に奉仕せり、該國造は、郡長杯に敘任せらる

のでありて、即ち神祇令の第十九條に、馬一疋を大祓に奉るの例としてある、

三五二

第十四條 舍人史生叙任條

本條は、舍人、史生等の叙任の條也、

凡叙舍人、史生、兵衛、伴部、使部、及帳内、資人、並以八考爲限。八考中、進一階。四考中、四考上、進二階。八考上、進三階叙。

左右大帳内、并に東宮、中宮の舍人、諸役所の書記、衛府の兵衛、伴部、諸官省の使部、親王家の帳内、大臣家等の資人は、八考を限りとす、八考が中ならば、位一階を進め、又た、四考が中で、四考が上ならば、二階升進せよ、八考全部上ならば、三階升せしめよと云ふ也、

第十五條

郡司軍團條

本條は、郡役所の役人、及び軍團の將校等を考敘する規則也、

凡叙郡司軍團、皆以十考爲限。十考中、進一階。五考上、五考中、進二階。十考上、進三階叙。兼有上考下考者、准

折並同八考例。其外散位者、分番上下。皆以十二考爲限。十二考中、進一階。六考中、進二階。十二考上、進三階叙之。相折同郡司。其分番一考、長上八考亦同十考例。若經三考以上者、並以十一考爲限。

郡役所の役人や、軍團の將校等を敘するは、皆十考を以て限とせよ、十考中ならば一階升進、五考が上で五考が中ならば、二階を進め、十考共上ならば三階升進、又た上考下考あは差引勘定八考の例に同じ、又た外散位の者は交代勘移せよ、コレは十二考を限とす、十二考中ならば一階升進、六考上にして六考中ならば二階升進、十二考共に上ならば三階を進め、差引勘定郡官に同じ、其分番二考で長上八考も亦十考の例に同じ、若し三考以上經過の後常任官とならば、十一考を以て限とせよ、

○郡司、軍團は、職員令七十四條、同七十九條等課令六十六條に出せり○考及推折は、前條にあり、○分番、及長上も亦前條に出せり、

本條を表にすれば左の如し、

軍司軍團 郡司以三十考爲限。(外長上也)

大寶令新解 第四卷 第十二篇 運使令

三五三

凡帳内賁人等、本主匹者、期年之後、皆送式部。若任職事者、則改入内位。其雜色任用者、考滿之日、聽於内位叙。若無位者、未滿六年、皆還本貫。若廻宛帳内賁人者、亦聽通計前勞。

帳内賁人等、其主人死ひせは、期年の後則ち一周年の翌月に其家來共を式部省へ送れ、但し考試は、主家則ち大臣家及び一位二位の家にてすべし、又た本主犯罪事故等ありて、解官免職となりし場合ならば、一ケ年を待たずして、取を遣はせ、若し又主人が他の外職か或は在京の官に任せられたるならば、舊帳内等も、内位或は外位に敘せらるゝと也、其雜業部族の人共が、任用せらるゝには、既に定めある考試の日限が、満る日、内位又は外位に敘する事を聽許せよ、若し無位にして六年に滿たざるならば、本籍へ還へせ、併し本籍へ還へるゝ内に、他の帳内(親王の家來)や賁人(二、三位の現在官の家來)に宛るとするならば、其時には前々既に動めたる年月

第十七條

本主死ひ帳

本條は、帳内、賁人、及び雜業部等の人共の身の振ひ方に就ての法令也

親王家及び大臣等へ給はりし家來中にて、其人材文武の及雜業に堪ゆる者あらば、地方ならは賁人とし、中央ならは舉人として、式部省及び太政官に擧げ送る事を許せよ、若し及第せは、内位に敘せ、落第すれば本の主家に還せと云ふ也、
○賁人、舉人は、考課令六十九條以下に委し、○得第は、及第、不第は落第なり、○内位は、在京官の位階、○本主は、本の主家を云ふ、

内位叙。不第者各還本主。
凡帳内賁人等、才堪文武賁人者、亦聽貢舉。得第者、於

本條は、親王家及び大臣家等の家來を貢うゝの法令也、

第十六條

帳内賁人條

十考中。進一階。五考中。進二階。十考上。進二階。十二考中。進一階。六考中。進二階。十二考上。進三階。軍司。進三階。軍副。

軍團以十二考爲限(外分番也)

勲等と指定して(原案の如く)置すべし他日考試の材料とする事にしてやれと云ふ也、

○(城内、貢人、職事等は家令職員令始め、考課令六十八條參照すべし、○期年之後は、

一週忌の翌月を云ふ也、

第十八條

以理解者條

凡長上官以理解者、後任日、聽通計前勞。其考解、及犯

罪解者、不用此例。雖以理解、而無故停私、過一年者、亦

除前勞。

毎日勤務の官員が、止むを得ざる理由ありて一旦解任し、後日再任の日には、前任期間の勤務を通計する事を聽許せよ、併し考試の爲に解任とか、又は犯罪事故の爲ならは此例を用られぬ。又解任故なく自己に役所に停る事一年ならば是亦前勞は採用ならぬと也、

第十九條

帳内勞滿條

凡帳内勞滿應叙、才堪理務、本主欲於內位敘者聽。

帳内が既定の勤務滿ちて敘位されん時、其才が書算作文等出來て、政事事務に堪ゆる者は、本

第廿條

官人赴任條

凡官人至任、若無印文者、不得受代。

官員が、任所に赴くには、印紙がなければ、受け代る事は出來ずと云ふ也、

第廿一條

老人辭職條

凡官人、年七十以上、聽致仕。五位以上上表、六位以下

申牒官奏聞。

官員は、年七十七歳以上にして、職を休むるを願へば聽許せよ、五位以上の者ならば、上表せよ六位以下の者は太政官に申すべし、而して太政官より奏聞せよと也、

第廿二條

處勞條

凡職事官、患經百廿日、及緣親患假滿二百日、及父母合侍者、並解官。其應侍人、才用灼然、要藉貳使者、令帶官侍、皆具狀申太政官奏聞。其番官者、本司判解。並下本屬、應

解者、申後則不得理事。其以才伎長上諸司者、若宛侍遣、
 喪患解者、侍終服滿、及患損之日、還令上本司。應宛侍

者、先盡兼丁。兼丁、謂中男以上。

現任の官員が病氣の爲め百廿日欠勤するとか、又た両親病氣の爲めに休むとか、或は両親祖父
 母が京都に居て自分は遠く地方に奉職し居り、其両親が老衰等の爲めに近侍有護せんとて二百
 日間も欠勤する如き者は解任にせよ、併し其人非常の才氣ありて役所に必用の人ならば、常官
 の儘近侍有護せよ、何れも皆其狀を本政官に具申して奏聞に達せよ、次に交代勤務の人達な
 らば、其役所々々に於て裁決をしており、解任すべき人は、具申後事務を取らずに及ばぬ、然
 れ共、技術を以て諸役所に勤務する人は、右の如く両親の看護或は疾に逢ひ、或は自分病氣の
 爲めに解任となり、其後看護も不用となり、或も明き或は病氣も全快したとならば、再び舊前
 任の役所に奉職させよ、若し前任の役所に於て、後任者の奉職し執務しあらば、交代勤務させ
 よ、總て看護に宛つく者は、中男以上の職務を果せよと也。

○患は、病氣也、○百廿日は、此中に制規の休日もある也、則ち今にして云へば日曜日
 をも通算しある也、コレは考日則ち二百四十日の半數に基づし也、○親患は、親の病氣、○假
 は假也、○合はベク也、○灼然は、明瞭也、○要は端の如し、○本司は、其役所と云ふ如し、
 ○長上は、帝務也、○患解は、病氣片付たる也、○患損は、全癒、○還は、復の如し、

第廿三條

癡狂酒亂條

凡經癡狂酗酒、及父祖子孫被戮者、皆不得任侍衛之官。

一同癡狂したるもの、又た酒を飲みて怒る癡のもの、或は父祖子孫犯罪ありて、刑戮に處せ
 られたるものは、皆々陛下に近づく官人にはする事ならぬと云ふ也、

○癡は、フ又は、也癡狂が過去にありて、現在になさを示せる也、○癡狂は、キナガヒ
 にして、素問の注に、喜笑常ならず、顛倒錯亂する也、而して、鑑別すれば妄りに多く真ぶを
 顛とす、惑りに多く怒を狂と爲すとせり、○酗は、音ク、醉甚也、酩酊して凶惡を爲す也、則
 ち俗稱怒り上戸とすべし、○被戮、戮は音陸、殺也、辱しめ殺さるゝ也、○侍衛之官は、侍從
 以上、内舍人、中務省の料官以上、内記、并に兵衛、又は兼令三十條にある如く總て御所内す
 の驅使にもする事はならぬと也、

第廿四條

散位庇護條

凡散位、身才劣弱、不堪理務者、式部判補諸司使部。

無役非役の人の内にて、身體虛弱、才智甚せずして政事の事務に堪ざる者は、式部省に於て、諸役所の下役の手續にせよと云ふ也、○吏部は、准判任にして、職員令各條末文に載せり、

第廿五條

位記紛失條

凡失位記者、於所在陳牒。本屬本司長官、推其失由、具狀申省、勘授案、申官更給。其注失落重給之狀。

位記を紛失したる者は、其所に於て書面を以て申し出せ、本屬役所の長官は、其紛失事由を推し、狀を具して式部省に申出せ、省は、是日に授與せし事等を校帳に照査して太政官に申渡のし、狀を具して式部省に申出せ、省は、是日に授與せし事等を校帳に照査して太政官に申渡の上再授せよ、而して紛失に就て再授せし事取をば、詳細に位記簿に控へ録し置けと云ふ也、

○位記は、位階の覆書、○陳牒は、審面にて申出、○失由は、紛失の事由、○勘授案は、既還再授を帳簿に勘査する也、○失落は、紛失、遺失と云ふ如し、○重給は、再授と云ふ如し、

第廿六條

位記錯誤條

凡位記錯誤、須改授者、五位以上奏聞。六位以下判改。並

注授案。

位記を誤記致した場合には、改めて授けねばならぬ、其時には、勅任ならは奏聞せよ奏任以下は其省に於て改めよ、共に校帳に記録し置けと云ふ也、

第廿七條

國博士條

凡國博士醫師者、並於部内取用。若無者、得於傍國通取。考限叙法、及准折、並同郡司。補任之後、並無故不得轉解。

國々の博士や醫師は、其地方官に於て、管轄部内の者の中にて才術ある者を選択採用して、太政官に具申し然る上は式部省より補任する也、若しサヤクの人材が自分管内になれば、近傍の國より採用せよ、而して被任者の考限の期限叙法、及び准折法等は、郡司に同断たるべし、補任の後は、故なく、則ち兩親の看護とか、又喪とか、又は病氣引き或は官職を以て代償する犯罪さへなくば、獨りに解職はならぬと云ふ也、

○博士は第十一篇學令に、醫師は第廿四條醫疾令に、又た考限敘法、及び准折の解は本篇或は考限令參看すべし、

第廿八條

隨調則補條

凡内外文武官有闕者、隨闕則補、不得愆替、

惣て官人中に欠員があらば補任せよ、總體を替ゆる事はならぬ也、

第廿九條

秀才進士條

凡秀才、取博學高才者、明經、取學通二經以上者、進士、取明閑時務、并讀文選爾雅者、明法、取通達律令者、皆須方正清脩、名行相副、

唐令の如く我國も亦四科、明法、明經、進士、秀才、明經、進士、明法の貢舉及第の業あり、其秀才には博く群經に涉りて高才ある者を採用し、明經には大經の内、禮記が左傳、小經の内、易經が書經の四部の中より二部以上に通じたる學力を有する者を取れ、進士には明かに時務に練熟し兼て文選と爾雅を素讀し得る者を取れ、明法科には、法律に達したる者を取れ、四科共に皆品行方正、意志清脩にして、名と行爲と相副ふ事を要すると云ふ也、

○四科及二經等の解は、第十四條考課令の第六十九條以下、第十一條學令の第五條、六條以下乃至第十五條を看るべし、○調は、習也、○調は、適合の如し、

第三十條

秀才出身條

本條は四科出身に係る敘位の法令也、

凡秀才出身、上上第、正八位上、上中、正八位下、明經、上上第、正八位下、上中、從八位上、進士、甲第、從八位下、乙第、及明法甲第、大初位上、乙第、大初位下、其明經秀才、得上中以上、有蔭及孝悌被表顯者、加本蔭第一階敘、其明經、通二經以外、每一經通、加一等、

秀才科出身の上上の及第者には正八位上、同く上の中からは正八位下、明經科の上上第には正八位下、同く上の中からは從八位上、進士科の甲の及第には從八位下、乙には明法科の甲第と同く大初位上、同乙第には大初位下、其内、秀才と明經の上の中以上を得たる者と、父祖のお蔭及び親孝行で旌表せらるゝやうの者あらば、本の階位或は本及第に二階を加へて叙位せよ、又た明經の者は、二經に通ずるの外、一經に通ずる毎に一等を加へよと云ふ也、

○出身は、父祖のお蔭によりて出ると、四科よりして出るとを云ふ、○蔭は、本蔭最末の第三十八條に述ぶ、○孝悌は、親に孝、兄に悌なれ共、こゝは親に孝にのみを取りて、兄に

條は成文上の裝飾たる一種の語勢と有做して可也○表願は、賦役令第十七條に、門閥に表せし
ある是也、○本條は本篇第三十八條にあり、○二經は、前條及び學令に出す、

三六四

凡兩應出身者、從高敘。

第三十一條

兩應出身條

父祖のお蔭と、及第の業よりの兩つの出身ならば、其高位に依て敘せよと云ふ也、

第三十二條

養嗣子條

凡爲人後者、非兄弟之子、不得出身。

養子にて相繼せんとする者は、兄弟の子則ち擬でなければ、庶子又は四科の及第業たる事は出
來ぬと云ふ也、此養子を取りたる後に、養父に男子が生れば、其子の敘位の時には、庶子の

敘位である、

附 〇後は、姪をモラフて嫡子とする事、

第三十三條

贈官條

凡贈官、死王事者、與生官同。餘降一等。

贈官は、戰爭又は王事に於て外國滞在中等に死したる時には其贈官は生前と同くせよ、又た其

子孫に贈位を授くるは、父祖生前に同法の位階を與へ、其餘は皆一等を下げて敘せよとなり、

例之は、一位の嫡子に正六位下を給ふ條位ならば、從六位上を授くと云ふ如し、本條第五八條

參看すべし、

附 〇贈官は、贈位に非ず官職を贈る也○王事は、集解に釋云くに戰場にて身死を王事に死

すと謂也とあれ其外國滞在をも含める如し、

第三十四條

授位條

凡授位者、皆限年廿五以上。唯以蔭出身、皆限年廿一以

上。

總て敘位は、年齡廿五歳以上とす、但し父祖のお蔭に因て出身する者は、二十一年以上とす

云ふ也、

第三十五條

蔭皇親條

凡蔭皇親者、親王子從四位下。諸王子從五位下。其五世
王者從五位下。子降一階、庶子又降一階。唯別勅處分、

大寶令新林 第四卷

第十二條

還敘令

三六五

不_レ拘_レ此_レ命。

皇族に降位を授けらるゝは、親王の子に從四位下、諸王の子に從五位下、其五代目の王には從五位下、嫡子は總て一階下、又た二三男は嫡子より一階下たとせよ、但し別に勅職にて賜はるは本令に拘はらずと也。

○親王は、天子の御兄弟則ち皇兄弟及び御子即ち皇子を云へり、○五世王は、天子より五代目也、第十三篇繼嗣令第一條に詳か也、

第三十六條

考滿應敘條

凡考滿應敘、若有蔭高者、聽從高。

考試が滿期になりて、敘位すべくに、若し蔭の高き者あらは、其高きに從て聽許せよと也、

第三十七條

降名應敘條

凡犯除名限滿應敘者、三位以上、錄狀奏聞聽勅、其正四位、於從七位下敘、從四位、於正八位上敘、正五位、於正八位下敘、從五位、於從八位上敘、六位七位、並於大初位上敘。

八位初位、並於少初位下敘、若有出身位高此法者、仍從高、免官免所居官亦准此、出身、謂籍蔭、及秀才明經之類、則才優擢授者、並不拘常例。

官位勳位の遷轉さるゝ犯罪ありしも、時効を得て再び敘位の恩典を蒙る時は、三位以上は狀具し奏聞して勅命を聽け、正四位の人は、從七位下に敘せよ以下本文の如し、若し出身の位階が再授法の位より高ければ、其高きに從へ、免官等も亦之れに準せよと也、
○犯罪名は、位勳機轉さるゝ犯罪にして、課役は本色に從ひ、但し滿年にて時効たり、
○免官は、免職也、三年の條に非ざれば再び敘位はならぬ但し敘位の時は先位より二等を降して敘せよと也、○免所居官は、官位勳位共に一階を除かるゝ也、委くは獄令廿八條に通ふ、其
他同一條、軍防令卅五條、考課令五十六條、等を參照すべし、○才優擢授は、非凡の才子にして拔擢の敘位は此法令に拘はらざる也、

第三十八條

五位以上子出身條

凡五位以上子出身者、一位嫡子、從五位下。庶子、正六位上。二位嫡子、正六位下。庶子、及三位嫡子、從六位上。庶子、

從六位下。正四位嫡子、正七位下。庶子、及從四位嫡子、從七位上。庶子、從七位下。正五位嫡子、正八位下。庶子、及從五位嫡子、從八位上。庶子、從八位下。三位以上上蔭及孫。降。子一等。外位蔭准內位。其五位以上、帶勳位高者、則依當勳階、同官位蔭。四位降一等。五位降二等。

五位以上の子の出身は、一位の長男には從五位下、二三男には正六位上、以下本文の如く、而して三位以上は其蔭位が遠近にも及ばせ、併し孫は子より一等を降せ、外位の蔭は内位に準せよ、又た五位以上の人にして官位より勳位の高きを帶する人あらは是等の蔭位は、其高き勳位に依て定むる事、官位の蔭と同じくせよと也、

○勳位高、以下云々は、例之は、古代の位勳相當は、官位令の初めにある如く、正三位は勳一等、從三位は二等、正四位は三等、從四位は四等と云相當等級であり、然るに四位の官人で勳一等を帶せば、其子の蔭位は三位の子の蔭位に同じく從六位下に從るべし、若し五位にして勳二等ならば、二等を下せと也、餘は皆之に準すべし、

大寶令新解 第四卷

第十三篇 繼嗣令 凡四條

本篇は、現垂代の皇室典範の如く、皇族方の相續を始の有位者及家庶の相續法なり、
 (續明、說文に繼は續也、書經に嗣は子也、集解に次云く嗣も承繼也、野は嗣に及はずと云へり、

第一條

親王諸王條

凡皇兄弟皇子、皆爲親王。女帝子亦同。以外並爲諸王。自親王五世、雖得王名、不在皇親之限。

天皇の御兄、御弟、御皇子を皆親王とせよと也、女帝の御子も亦同斷、此他は諸王とせよと、
 此親王より五代目は王の名を稱ふれ共、皇親の限に非ずと也、

第二條

三位以上相續條

凡三位以上繼嗣者、皆嫡相承。若無嫡子、及有罪疾者、

大寶令新解

第四卷

第十三篇

繼嗣令

三三八

立嫡孫、無嫡孫、以次立嫡子同母弟、無母弟、立庶子、無庶子、立嫡孫同母弟、無母弟、立庶孫、四位以下、唯立庶子、謂庶人以上、其八位以上嫡子、未統身亡、及有罪疾者、更聽立替、其氏宗者聽勅。

三位以上の相繼は曾長男を立て、長男無きか或は相繼人が酒亂癡疾者ならば、孫長男を立て、孫長男なくは、長男の同母弟を立て、ソレも亦無ければ三男を立て、三男四男等も無ければ、孫長男の同母弟を立て、ソレも亦なければ其下を立て、以下之に準ずる也、併し各氏の長だけは勅命をきけと也、
○罪疾は、次條にあり、○氏宗は、氏の長者にして、古昔は氏族を尊びし故此法文なりし也、

第三條 定五位以上嫡子條
凡定五位以上嫡子者、陳牒治部。驗實申官。其嫡子有罪疾、罪謂荒耽於酒、及餘罪戾、將來不任器用者、疾謂癡疾、不任。

承重者、申牒所司。驗實聽更立。

五位以上の人にして相繼人を定むる時は、治部省に届出、省は取調て太政官へ申達せよ、其相繼者が罪疾ありて祭事等行ふ事出来ざる者ならば、現奉職役所へ申出て實地檢分の上更立つる事を聽許せよと云ふ也、

○罪疾の罪は酒亂にて、疾は癡疾を云ふ戸令七條に哀通オシの類とせり委くは戸令を看るべし、○荒耽の荒は迷亂にして、耽は酒を樂むとあり、○餘罪戾は、徒利以上の犯罪、又た徒利程の罪に非るも應犯罪せし者、○不堪承重は、父に繼て親先祖を祭るは大切の事故にソレ等を承け繼ぎ營む事の出来ぬといふ事也、○更立は、改め立つる也、

第四條

王娶親王條

凡王娶親王、臣娶五世王者聽、唯五世王、不得娶親王。

大寶令新解 第四卷

第十四篇

考課令

凡漆拾伍條

本篇は、内外文武百官の毎年の功過を調査し、才學技能を檢閲して、褒貶黜陟を行ふ諸多の規定を示したる篇也、

○考は、校也、同也、功過を考校する也、○課は、試也、察也、理也、計也、才藝を課試する也、故に考課は單簡に云へば、一年間の事務及學術の成績を調査し試験すると云ふ、但し、以父を考といへ、賦役を課と云ふとは、同字にして意義稍相異れり、

第一條

内外官條

凡内外文武官初位以上、毎_レ年當司長官、考其屬官。應考者、皆具錄_レ一年功過行能、並集對讀。議其優劣、定_レ九等第。八月卅日以前校定。京官畿内、十月一日、考文申送太政官。外國、十一月一日、附_レ朝集使申送。考後功過並入_レ來

年。若本司考訖以後、犯罪斷訖、准狀合解及貶降者、仍則附校、有功應進者亦准此、無長官、次官考。

中央地方總て文武百官の初位に對して、各役所の長官は其屬官を毎年考試せよ、而して考試したる者をは、逐一に一年間の功過行能を録し、其調査書を以て會議を開き書記をして明瞭せしめて優劣を審議し、九等の次第を以て進級を定め、八月二十日迄に確定し、京官及畿内は、十月の一日迄に其書類を太政官に送達せよ、地方は十一月一日に毎年例として上京する朝集使に携帶せしめて送れ、又た考查後の功過は翌年の分へ廻せ、併し考查終了せし後と雖、式部、兵部の一省が未だ按定せざる前に、犯罪裁決等の事あらば、解官又は貶降すべし、功績ある者も亦之れに準せよ、若し長官不在ならば、次官に於て考查すべしと云ふ也。

○内外は、在京官と地方官を指す、○文武は、武官は、衛門、左右兵衛に、左右衛士の五ヶの衛府、軍國、及び諸多の帶仗者を云ふ、但し爰にては軍殺を除けり、如何となれば外武官は、別に四等の考第を設けめれば也(本置六十六條、選叙令十五條にあり)、文官は武官を除くべし、官は、別に四等の考第を設けめれば也(本置六十六條、選叙令十五條にあり)、文官は武官を除くべし、考を云ふ、○功過、功は上の中以上則ち職務整理の考績を云ふ、過は下の中以下の成績則ち公務廢欠を云ふ、○行徳、善惡には行と云ひ、才藝には能と云ふ、○集對調は、考績審査協議會

とも云ふべき會議を開き、次官以下列席し、書記をして調査書を明瞭せしめて長官は上中下等の次第を定むるを云ふ也、○九等第は、上の上、上の中、上の下則ち上三等、次に中三等、次に下三等を云ふ、○朝集使は、職員令第二條、太政官左大辨の項、同十三條式部省、同廿四條兵部省等に名あり、毎年十一月一日に、諸國の主典以上の官員が朝廷へ參集する使者なりと云ふ字義なり、支那にては隋の代に創りし役に於て、此御用は、各地方廳の政事を上申し、又た六考八考に當り居る屬官等の考選する書類を太政官に上る等此他序を以て貢獻物等種々の用を蒙稱して上京する役也、○校は、音カク、又ケク、檢也、考也、校校相通用す、

第二條

官員行狀事附條

凡官員景迹功過應附考者、皆須實錄、其前任有犯私罪、斷有今任者、亦同見任法、則改任、應計前任日爲考者、功過並附、注考官人、唯得述其實事、不得妄加臧不。若注狀乖舛、褒貶不當、謂景迹功狀高而考第下、或考第優而景迹劣之類、及隱其功過、以致昇降者、各准所失輕重、降、所由

官員の行狀功過の考査に附すべきものは、毎日の日記を彙め、總て實際を記録したるものに就
れ、則ち前一條に一年の功過行能を録すと云は是である、而して若し前任中に私己の犯罪あり
て、其裁判が現任中ならば、現任の法に依て處斷せよ、則ち改任し居らば前任の日を計算して考
査すべし、但し功又過共に同斷の事とす、考査官則ち長官は單に實迹を述るまでにて、敢て安
に長官一個の意見情實を以て善惡を加ふる事はならぬ、若し長官の具申が實際に違背して、其
褒貶不當則ち行迹功狀優等にして考第下等とか、或は考第優等にして行跡功狀下劣とか又或は
功過を隱匿して升降をしたとかの事あらば、其長官の過失の輕重に准じて、長官の考を貶降せ
よ、又た朝集使が上京の上、式部省なり又太政官に出頭して候り官より此考査に關して質問の
應ある時に答辨し得ざれば、朝集使の考をして貶降せしめよと云ふ也、

○景達、月令第三十三條の末、及び選發令第四條にあり、景達と云ふ如し。○實錄は、日記の總錄、○私庫は、本令第五十五條以下に委し、○改任は、同一役所内にも、甲局課より乙局課へ轉任、又は甲役所より乙役所へ、又た京官より地方官へ、或は升進、或は降轉等情改任とすべし、○注考官は、上條に集對讀の解の下に云へし如く、主典が考査文を明讀するを、長官一々其要點を筆記して上中下九段の等級を定むる役人を注考官と云ふ、勿論其當不在なら

は次官注考官となる。○臧否、臧は前漢釋詁に、善也^ニと訓す。不は音^ニ否、否也、アセキ^ニと訓す。又シイナ、或はシタラヌヲ云訓す、説文に否は不也、徐鍇の云ふには、不可^ニの意、可^ニばに見はる故に口^ニに從ふ字とせり。則ち王荊公の字義を解くに似たれ其道路には差つ可らざる理固ありとすべし。○乖舛、乖は骨怪、異也、戾也、^ニ背也、^ニ舛也、^ニソムクと訓す、舛は音^ニ乖、違背也、^ニ錯也、^ニ錯亂也、^ニ雜也、^ニ錯也、^ニタガフ、^ニソムキ、等の訓あり、○義証は、ホメオトスと云ふ訓にてアゲナゲに用ふ。

第三條

第一章 緒論

本條以下四十八條迄は、考課の主眼たる四善四十二最を示したる條にして、支那にては魏の孝文帝の時には、四善廿七最とし、唐代にては、四善七最とせり、只稍粗ある而已、

德義有聞者，爲一善。

總行、義氣の許有る者を、第一の善とせよ、

○鑑義は、賦役令第十七條、運送令第十二條に出す、鑑は得也、性高行を得る、齊節の洗鑑に三種の名あり、直、剛、柔とす、周禮の地官に六職の名あり、智仁忠義忠和とす、義は宜也、事物をして各宜しからしむる也、公共に於ては、義倉、義社、義田、義學あり、人にも

清慎顯著者、爲一善。

第四條

第二善清慎條

中泥澤甚たしき爲り、成役人が小車に乗りて其泥深き所に乗りて車を曳損して、頗る心配の體なり。○聞は、奏聞と太政官などに能く使ふ語なるが其時は、亦も申す、聞も申し上げると云ふ意なれ共、此令條の聞は、名聞の聞にして、果といふ義也。

りては、義士、義俠、義姑、義夫、義婦等あり、畜類にも義犬、義鹿あり、義解、義解に教節の例話を載せり其一二を抄記すれば、漢書循吏傳に、黃霸と云ふ人あり、今の上海より南に到る間に楊州と云ふ繁華の國あり、この刺史となりて政事を行へしに、庶民其德になつき、戸口増殖して、治績は天下第一とせり。其後潁州の太守となりて、八年居りしが國中益治まり、風風、神靈數國內に來り集りたりと、後に丙吉の後任となりて丞相に進めり、又た後漢書列傳六十九に、劉昆と云ふ人あり、此人、弘農の太守となりしに、豫て此國內には熾養荒蕪の地多くありて、猛虎の繁殖一方ならざるを以て、人民常に恟々として農作、旅行に苦み所りしが、劉氏知事となりて三年の間に仁政大に行はる爲にか、猛虎が幼虎を負て何れの深山幽谷かに逃げ入せたりと云ふ、是等は德の類なりと義解及び令抄にあり。同列傳十九に、鮑永と云ふ人あり、後漢は光武帝の建武十一年に、司隸の牧尉を拜命して赴任の際、霸陵と云ふ所を通過せしに、田園の中に、舊主の墓のあるを見認めたるを以て、田畠の中へ車を引き入れさせれば、從者諷むるに墓夫の叱責を以てし、若し犯罪人となりては面目なしと言ければ、永は縱ひ罪人とせらるゝも、舊主の墓邊を空しく通行し克わすと云ふて田園を荒して墓前に至り、拜哭拜泣哀を盡して去れりと、又た同書列傳廿一に、蜀の知事なる廉范と云ふ人あり、成時驛馬にて敬陵と云ふ所へ往きしに、遂

治廉潔白、謹慎靜肅の顯著なる者を、第二の善とせよ。清慎、清は潔なり、澄也、釋名に濁を去り、清を去り、清を去る也、慎は謹也、靜也、思也、假令は後漢書列傳第四十四に、楊震が暗夜人より金を贈りしを辭したる如し、又た晉書列傳第六十良吏傳に、胡威と云ふ學生あり、其父荊州の刺史として任務中、胡威京都より休暇を以て父の下に歸省せり、家貧にして車馬僮僕なし、偶驢を驅て單行する而已、歸校の際に方りて父より絹一疋を賜はり、胡威の云ふには、嚴君清廉の譽れある評判なりしに、此絹は何れより得られしかと云へば父の答ふるには、該絹は修祿の賜なり、依て長男の威受領して去れり、然れ共歸路途中にて

父の部下の者に施し行けりとも、胡威後年徐州の刺史となり、政務に長じ、風化大に行れ、時の武帝威に云はるゝには、卿の清廉と孰れが深なるも、威の答よるに、父は自身の清廉を人が知るを恐れましたけれ共、私は自身の潔を人が知らざるを恐れます、故に臣は父に及ばざる事萬々でまゝと云へりとも、是等の類を治とすとの事也、又た漢書列傳五十一に孔光と云ふ樞密院の重臣あり、其法規を守り、政事を修むる事一方ならず、退朝の後沐浴して兄弟妻子と燕語する事尋常人の如く、然して該朝廷の事に及べば、更に一言も語らず、威劉威の者、光に同ふに、長樂宮の溫室殿に、珍奇奇樹あるとの悉許なるが如何なる物あり乎と問へば、光答ふるに他談を以てして、故て御所内の事を一語も口外せずと、又た後漢書列傳廿二に樊宏と云ふ人あり、終身奉職中一日として朝夕出勤退職の時限を一分も誤りし事なしと云へり、是等を慎と云ふの類なるべし、

第五條

第三善公平條

公平可稱者、爲一善

公平無私の稱す可き者を第三の善とせよ、

○公平、私に背き、公けに従ひ、心を用ゑる事平直なるを云ふ也、假令は呂氏春秋第一、

去私篇に、祁黃羊と云ふ臣に、晋の平公が問はるゝに、南陽の知事が國宮であるから、誰がよからうやと、黃羊答ふるに解狐は彼地に適任ならんと、平公の云ふには、解狐は卿の怨敵であるではないかと、黃羊の云ふに、君は臣の敵をも尋ねになりしや、臣は只南陽知事の通否を答へまじし而已と、平公感服して羊の言の如く解狐を南陽の刺史に任せり、南陽の人民稱賀せざる者なし、孔子も之を聞て善美と稱せり、是類を公平と云ふなるべし、

第六條

第四善恪勤條

恪勤匪懈者、爲一善

細心の態度を以て事務に勤勵し、怠らざる者を第四の善とせよ、

○恪勤、恪は音カク、ツ、シムと訓す、爾雅釋詁に敬也とあり、勤は力を盡すを云ふ、呂氏春秋に、巫馬期なる人あり、單父の知事たり、朝たに役所に出るに尙ほ星を看て行き、暮に役所を退くに又た星を觀て出づると、是の如き類を恪勤懈らすと云ふなるべし、

第七條

最條

最條

最是總計四十二條あり、皆各四字宛二句を以て一條とせり、假令は、文選卷四の今の外郡省の

如き役所は、外客來らず共、齋僧尼道にかなひ、奉客所を得と云ふ如し、餘は之に準じて知るべし、但し方術則ち片候醫卜のみは、四字を以て成文せり、
○最は、苦也要也極也、通俗には惡にも使用すれ共、四十二ヶ條は極善に使用しある也、

第八條 神祇官條

本條は神祇官の少副以上に適用する也、
神祇祭祀、不違常典、爲神祇官之最。謂少副以上。
諸神の祭禮、常例の典禮に違はざるを神祇官の少副以上の最要とせよ、

第九條 納言條

獻替奏宣、議務合理、爲大納言之最。
善事を獻じ、惡事を替り、上へ申し上る事、下へ仰せ下さる事凡て道理に合ふを大納言の最とせよ、
承旨無違、吐納明敏、爲少納言之最。

第十條 辨官條

大ならざる勅旨を還み承はり、下よりの奏上等其取扱明敏なるを、少納言の最とせよ、

受付庶務、處分不滯、爲辨官之最。謂少辨以上。

本條は、既に職員令第二條、太政官の辨官の項に詳解す、

第十一條 中務條

侍從覆奏、施行不停、爲中務之最。謂少輔以上。

本條も亦職員令第三條に委し、以下曾大抵同令の各條を參看すれば了解し得らるべし、

第十二條 式部官條

銓衡人物、擢盡才能、爲式部之最。謂少輔以上。

品物を天秤に掛ける如く、人を權り、才學技能者を拔擢するは式部官の最とせよ、

第十三條 治部官條

僧尼合道、譜第不擾、爲治部之最。謂少輔以上。

僧尼は佛道に合ひ、治部は姓氏を掌り、解部は譜第の争訟を掌り故に此の如し、昌保云く、少

輔以上は行文ならん、委くは職員令に解せり、

第十四條 民部條

戶口不濫、倉庫有實、爲民部之最。謂少輔以上。

戸籍に脱漏冒名のなきやう、倉庫に租税の米の充實しある、民部省の官人の最とせよ、

第十五條

兵部條

銓衡武官、調充戎事、爲兵部之最、謂少輔以上、

武官を銓衡し、軍容を調習し、軍器を充實にするは、兵部官の最とせよ、

第十六條

刑部條

決斷不滯、與奪合理、爲刑部之最、謂少輔以上及判事、

裁判東斷與奪道理に通ふは、裁判官の最とせよ、

第十七條

大藏條

謹於修置、明於出納、爲大藏之最、謂少輔以上、

諸物品を修め置ことを鄭重に整頓し、出納を明了にするを大藏官の最とせよ、

第十八條

宮内條

堪供食產、催治諸部、爲宮内之最、謂少輔以上、

供御雜廩等、又宮田園池等の產物を供用上不足なきやうに出產得るやうにし、諸部則ち職、寮、

諸司を統治するを宮内官の最とせよ、

第十九條

彈正官條

訪察嚴明、糾舉必當、爲彈正之最、謂忠以上及巡察、

警察嚴明、檢舉糾彈必ず的當なるを、彈正真官員の最とせよ、

第二十條

京職條

興崇禮教、禁斷盜賊、爲京職之最、謂亮以上、

禮儀風教を取繕り、盜賊を斷絶するは京職の最とせよ、

第二十一條

主膳官條

監造御膳、淨戒無誤、爲主膳之最、謂亮及典膳以上、

主上供御の飲食物を監督製造調味し、清潔にして禁軍相戒むるを、大膳職、内膳司等の官人の

最とせよ、

第二十二條

衛府條

部統有方、警守無失、爲衛府之最、謂尉以上、

部下を統率するに方あり、警護失なきは、五衛府官の最とせよ、

第二十三條

雅樂官條

大寶令新編

第四卷

第十四章

考選令

三八四

音樂能諧、不失節奏、爲雅樂之最。謂助以上。

樂能く調よて、律呂奏節を失はざるは、雅樂の官人の最とせよ、

第廿四條

玄蕃官條

僧尼不擾、蕃客得所、爲玄蕃之最。謂助以上。

僧尼、今に背かず、遠來の外賓等初めて來朝したる時は、水土に慣れず、風俗に習はざるを以て、當局則ち治郡省所管の玄蕃寮の係り官等に於て煩瑣し不都合なきやうにするは、玄蕃官更

の最とせよ、

第廿五條

主計官條

支度國用、明於勘句、爲主計之最。謂助以上。

國費を貯へ量り、勘定を明了にするは、主計官の最とせよ、

○支度と勘句は職員令の第廿二條、主計寮に出づれば其詳解は本條に迷ん、支は貯へ也、

タケはヘカベル也、度の音に二あり、徒故、徒落の切とす、ヘカル、又はワタルと訓みて、渡と

通用するあり、前漢書の買道傳に、江河を度るに槩無が如しとあり、度支は支那の官名にして

府省百官志を抄略すれば、度志は、天下の租稅、物產豐約の宜き、水陸道路の利、歲計の出す

所を掌りて、之れを支調すとあり、則ち主計寮の如し、又度は古へ無制を法度と云へり則ち法

律法制と云ふ如し、勘句の句はコウと音讀して、句配の句にして曲りとも訓め矣、本條は勘に

弄す、止じとか局とか又は圖界とかと云ふ如し、故に勘定と解釋して可なるべし、

第廿六條

主稅官條

謹於蓋藏、明於出納、爲主稅之最。謂助以上。

全國に散在する所の官有米廩を整理し、謹嚴以て米穀を貯藏し、是れが出納を明了にするは主

稅官の最とせよ、但し在京は、主稅自ら検査し、地方は、稅帳に據て知る也、

○蓋藏、蓋は屋根葺及び閉鎖の意なり、藏はオサム也、參解第十九、六云く蓋は修め

蓋を云ふ、藏は修め藏也と、禮記月令に、孟冬百官に命じて蓋藏に謹むとあり、

第廿七條

馬寮官條

調肥閑馬、不脫飼丁、爲馬寮之最。謂助以上。

厩の馬を善良に飼育し、既係りの役人の戸籍等を脱漏せざるは、左右馬寮官の最とせよ、

字解は、職員令第六十三條に述べり、

第廿八條

兵庫官條

傾於曝涼、明於出納、爲兵庫之最、謂助以上、

兵器の燥乾し、太陽に干し風に涼して、出納を明すするは、兵庫官の最とせよ、職員令兵庫

の條參看すべし、

第廿九條

侍從條

朝夕常侍、拾遺補闕、爲侍從之最

不斷主上に侍從して、御遺忘を拾補し、御闕失を補益するは、侍從官の最とす、侍從の事は職

員令第三條中務省に既述せり、

第三十條

監物條

監察不怠、出納明密、爲監物之最

所藏の藏の取締を嚴重にするは監物の最とせよ、監物の事は、職員令第三條に既述せり、

第卅一條

內舍人條

勤於宿衛、進退合禮、爲內舍人之最

重勤宿衛、進退坐作禮儀に適するをクトネリの最とせよ、

第卅二條

次官條

職事修理、昇降必當、爲次官以上之最

職務を整理し、升降必ず的當なるは、諸役所の次官以上の最とせよ、

第卅三條

褒貶必當條

揚清激濁、褒貶必當、爲考問之最、謂式部兵部丞

清廉の人、下第に在らば、進級を致させ、貪濁の吏員上考にあらば貶して降せ、其褒貶的當な

るは、式部兵部二省の丞官たる試問官の最とせよ、

○激濁は、

淮南子に出せり、ベケマスの意にて貪濁人をして清廉の人になせんと奮激せし

めんとするを云ふなり、

第卅四條

判官條

訪察精審、庶事兼舉、爲判官之最

審問精練し、兼て庶事の舉がるは諸役所の判官の最とせよ、

第卅五條

諸官條

公勤不怠、職掌無闕、爲諸官之最

本校は四十二段中、其最目に官名のなき諸人等則ち主幹、典監及び諸長上官の類に適用する條

大寶令新解 第四卷

第十四篇

考課令

三八

にして、公務知らず、各自の職掌關かす事なきを最とせよと云ふなり、

第卅六條

主典條

勤於記事、稽失無隱、爲主典之最。

公事を密記し、稽失隱す事なきは、書記の最とせよ、職員令第一條以下參看、稽は治也、考の意に非ず、

第卅七條

文史條

詳錄典正、詞理兼舉、爲文史之最。

規則正しく詳錄し、文理兼ねて舉らば、太政官の史官の最とせよ、

第卅八條

內記條

明於記事、不失勅旨、爲內記之最。

御所の事を明記し、詔書勅旨を作成するに勅旨を失はざるは、中務省の內記の最とせよ、

第卅九條

博士條

訓導有方、生徒宛業、爲博士之最。

學生を教育訓導するに方法あり、生徒をして學業に満足たらしむは、博士の最とせよ、

第四十條

占候醫卜條

占候醫卜、効驗多者、十得七爲多、爲方術之最。

八卦占卜が十中七もの中し、醫の疾病も亦十中七八を全瘳すれば、方術家の最とせよ、

第四十一條

曆師條

推步盈虛、窮理精密、爲曆師之最。

月の滿ち缺を精測し、理を究むる事精密なるは天文曆數家の最とせよ、

第四十二條

市司條

市廛不擾、奸盜不行、爲市司之最。謂佑以上。

市場を設立するに男女を別ら、貨物を區分し奸淫盜賊、浮浪の徒をして、其亂行を鎮かせざるは、市校所吏員の最とせよ、

第四十三條

解部條

推轡得情、申辨明了、爲解部之最。

私闘其情を知得し、陳辨明了ならば解部の最とせよ、職員令第三十條刑部省參看すべし、

附註

○鞠は、音類、推同也、踞蹠也、

大正令新解

第四卷

第十四章

考選令

三九一

第四十四條

太宰條

禮儀興行、戎具充備、爲太宰之最。謂少貳以上。

禮節儀式を能く行ひ、兵器の設備充分なるは、太宰府の官員の最とせよ、

第四十五條

國司條

強濟諸事、肅清所部、爲國司之最。謂介以上。

諸事を強濟し、部屬する所を肅清にするは、地方官の最とせよ、

第四十六條

國祿條

無有愛憎、供奉善成、爲國祿之最。

風教兩方に對し愛憎偏頗なく、能く事を判斷するを地方判官の最とせよ、

○供奉、集席に稱云く、所屬に供奉也、禮記鄭玄の註に、承は列事の如し、下條四十九條によれば、上官の指麾を待て承け順ふを云ふなり、

第四十七條

防司條

防人調習、戎裝宛備、爲防司之最。謂佑以上。

サキモノに據り調習を致させ、兵裝充分に設備せば、防守の司との最とせよ、

防人

○防人は、第七卷、軍防令に詳解す、

第四十八條

關司條

識察有方、行人無擁、爲關司之最。

關察に方法あり、旅行者をして相擁らす事なきを關守の最とせよ、軍防令、關市令、關員令第七十條等參看すべし、

關司

○關は、關也、ソシツの意に非ず、關察又伺察とす、擁は、滯也、關司は、關守也、擁は、滯と義同じ、

一最以上有四善爲上上。一最以上有三善、或無最而有

四善爲上中。一最以上有二善、或無最而有二善爲上下。

一最以上有一善、或無最而有二善爲中上。一最以上、或

無最而有一善爲中中。職事粗理、最善弗聞爲中下。愛憎

任情、處斷乖理爲下上。背公向私、職務廢闕爲下中。居

官諂詐、及貪濁有狀爲下下。若於善最之外、別有可嘉尙

及罪雖成、殿、情狀可矜、或雖不成、殿、而情狀可責者、省校日、皆聽臨時量定。

何れの官員にても一最以上四善あらば上の上とせよ、一最以上三善あるか、或は最なくして四善あらば上の中とせよ、一最以上二善あるか又た最なくして三善あらば上の下とせよ、一最以上一善あるか又最なくして二善あらば中の上とせよ、一最以上或は最なく共一善あらば中の中とせよ、職務粗整理しても善最の評判無き者は中の中とせよ、愛憎を心に任せ、處断道理あらざるは下の上とせよ、公事に背き私事に向ひ、職務調動等を致せば下の中とせよ、官に居て詔ひ偽り、又た貪慾なる者は下の下とせよ、若し善や最の外に別に賞賛し得べき事あるか、又た罪が罰金刑に處せらるゝと雖、情狀の憐む可き歟、又た罰金に刑せられず其情狀に於て責むべき者等は、式部兵部の考査日に臨時に按定せよと也。

六十二條に解す、○矜は、憐む也、

第四十九條

分番考試條

凡分番者、毎年本司量其行能功過、立三等考第、小心謹

卓、執當幹了者爲上、番上無違、供承得濟者爲中、通達不、上、執當虧失者爲下、對定訖、具記送省。

本條は、交替勤務の官員の考試を云へし令條にして、則ち非役交代勤仕の者は、毎年其勤の居る役所が其者の行狀技能功過を量りて、三等の考試をせよ、小心にして謹み深く、職務勤勵に賢き者を上等とし、次に勤務時間等を達へず上官の指應命令を違率し事務を成す者の中とし、又次には既定の勤仕もせず、屢候勤の者を下とせよ、是等の考積を本人に聞せ終らは、式部兵部の一省へ具申せよと云ふ也。

〔附註〕卓は、竹角切、昔誅、タカシ、コエルの訓あり卓然、卓越の卓にて高く群を抜くを云ふ、○執當幹了は、事務敎勵と云ふ如し、敎當は執筆の如し、幹は強也、了は了也、強幹了と云ふ、能く事に堪ゆるを云ふ也、○供承は、上官の指應命令を達り順へるを云ふ、○得濟は、成し濟ますを云ふ、

第五十條

兵術考第條

凡兵衛、立三等考第、恭勤謹慎、宿衛如法、便習弓馬者、爲上、番上不違、職掌無失雖解弓馬、非是灼然者爲中。

違番不_レ上、數有_レ犯過、好請私假、不_レ習弓馬者爲_レ下。

兵衛にも、二等の考を立て、悉く慎重の態度を以て宿衛する事規則に背かず、射藝馬術を習熟する者を上とすべし、又た出動も既定通り、職務も過失なく、弓馬の術を知ると雖も殿候せざる者を中心とし、次は勤め方規則通りならず、厩過失あり、好んで佚動を致し弓術乗馬の技をも稱古せざる者を下とせよと云ふ也、

附四 ○番上は、出動、○解は、知ると云ふ如し、○灼は、之若、職略の二音の他之辱切あり、音酌又昭、共に頗々明瞭の意なるべし、○違番不上は、出動日に出動せざるなり、○私假は、自分勝手の休暇を云ふ、

第五十一條

衛門考第條

凡衛門門部、立三等考第、正色當門、明於禁察、監當之處、能肅奸非者爲_レ上、居門不怠、檢校無失、至於禁察、未是灼然者爲_レ中、不_レ動其門、數有_レ愆違、檢校之所、事多疎漏者爲_レ下。

本條は御所の衛門を守衛する衛士を統率する門部の考第を云ふ條にて、門部も亦三等の考とす、
正色嚴正にして門曲を爲さず、禁戒細察明敏にして、實際に能く奸非を諷める者を上等とし、
次は門に所て怠らず、檢校粗雑多からざる者、其禁察に至て優ならざる者を中心とし、其次は門を勤めず、厩過ちあり檢校の所に粗漏多き者を下とせよと云ふ也、

附四 ○正色は、顔色容貌嚴正を云ふ、○禁察の禁は制止警戒の如し○察は、普く視るを云ふ
則ち覆審の如し、○監當之處は、監察の場所、○前奸非は、規則違犯者又は惡る者其を亂し諷める也、○灼然は、明了の如し、○愆は、過也、○檢校は、檢査の如し、

第五十二條

國郡司考第條

凡國郡司、撫育有方、戸口増益者、各准見戸、爲十分論、加一分、國郡司謂格及少領以上、各進考一等、毎加一分、進一等、增戸、謂増課丁、率一丁、同一戸法、毎次丁一口、中男四口、不課口六口、各同一丁例、其有破除者、得相折之、若撫養乖方、戸口減損者、各准增戸法、亦減一分、降一等、毎減

一分、降一等、課及不課、並准上文、其勸課田農、能使豐殖
進一等、謂熟田之外、別能墾發者、其有不加勸課、以致減損
者、損一分、降考一等。每損一分、降一等。謂熟田之内、有
荒廢者、若數處有功、並應進考者、亦聽累加。

郡長以上の地方官は、管内の人民を撫育するに當る方法あり、其適否に依て戸口田圖の増減を來す也、其宜きを得て戸口増殖すれば、現在の戸口を十分して、其一分を増加せば、郡役所の次官以上を始め國の當該官吏に、各一等宛進級せよ、其上一分を増す毎に二等宛升進させ、此考課の計算法は、戸令にある如く、正丁一人を標準とし、次丁ならば二人、中男ならば四人、不課役の人ならば六人を以て各正課丁一人に相當する也、若し甲の地は増殖でも、乙の地は減損ならば相殺則ち差引すべし、若し又該河道に違背し、戸口減少せば、二分に付き一等宛降する也、又た産業を獎勵して收穫を豐饒ならしむるとか、或は古田の外に新開田を設るばやハ十分論を立て進級せよ、此場合は二分に付き一等宛とす、又た獎勵を怠るのふ

ならず、却て新開を減損し、或は古田を荒廢せしむる等あらば、一分に付き一等宛降すべし、若し數多の功ある者は進級を累加せよと云ふ也、

○見戸は、現在の家也、○熟田は、今云ふ古田或は上田と云ふ如し、

第五十三條

國郡司係戸口増減條

凡國郡以戸口増益應進考者、若是招慰、謂不從戸實而招慰得者、括出、隱首、走逃者、得入功限、折生者不合、若戸口入逆、走失、犯罪配流以上、前帳虛注、以致減損者、依降考例、沒賊、非人力所制者非。

管内人口の増加を以て、當局者に對して進級升級等可き者は、蝦夷人の如く戸籍に従ひ入ざる者を招きて耕作させたとか、或は戸籍帳に名なくして當局者に於て檢出した人民とか、或は無名の人民自ら來り耕して始めて顯れ知られたる者とか、或は慶日に既に逃亡して後々悔悟歸國したる者とか、又た浮浪人にて戸籍面消滅し居る者とか等の人民は、ナハリ當局者の功の中へ算入する事が出來得る也、併し分家則ち新家を構へる事は功の中へは入れられぬ、若し戸口速往に入り、或は逃亡し、或は、流罪及疊毒製造者の同居に連坐せし以上の犯罪者にして、

前任の當局者の時の戸籍帳に記載しありて、後任當局者がソレを其儘削除せざるとか、又た逆賊等の侵略に達ふて減損をして居らば、考を降すの例に依れとなり、但し人力にて抵抗制敵の出来ざる場合の逆賊侵略に達ひし者は此限に非ずと云ふ也、

○招慰は、招き安すめ也、○括出の、括は揃なり義解に戸籍帳に名無くして、官司據へ出す者也と云へり、○隱直は、隱匿の如く、首は顯る也、自首の首にして申し告るの義をも含めり、○折生は分ち生ずるの義にして分家とか新家とかを指せり、○蠱毒は、本文になし義解に記載せり、則ち蠱の毒を以て人を呪ふ也、東垣の食物本草第廿二卷に梁の陶弘景の蠱毒説を詳細掲載しあり、○前帳廢注は、死者或は逃亡者の戸籍を削らざるを云へり、則ち前任官の時

凡官人、因加戸口、及勸課田農、并緣餘功、進考者、於後事若不實、縱經恩降、其考皆從追改。

當局者に於て戸口を増加し或は農産を勸奨賣度し、又其他に功績等あらば、考を擧めて升叙せよ、併し後に至り其事實ならば、たとへ恩赦的下げをしても、叙任は追改すべしと云ふ也、

第五十五條 官員附殿條
凡官人、犯罪附殿者、皆據案成乃附。私罪、計贖銅一斤爲一負、公罪、二斤爲一負、各十負爲一殿、當上上考者、雖有殿不降、解謂非私罪、自上中以下、率一殿降一等、則公坐殿失應降、若當年勞劇、有異於常者、聽減一殿、其犯過失殺傷人、及疑罪微贖者、並不入殿限。

官員が、公又は私罪ありて、豫審終結の曉に、下の考となるものは、贖罪金を納了せざるも殿に附せよ、但し從來上上の考ある者は一殿あるも毆降するな、併し是は公事の爲めに生ずる犯罪の時に限る也、上の中より以下の考は、一殿に付き、一等宛を降せよ、若し公事に係る犯罪にして降さるゝと云ふ共、他に職務勲等の條あるは、一殿を減ずる事を許せし也、又た過失殺傷或は疑罪にて贖罪金を徴せらるる者は、並に殿には入れぬと云ふ也、

凡官人有犯、私罪下中、公罪下下、並解見任。則依法合、除免官當者、不在考校之限。並奪當年祿。本犯不至解除、而特解除者、不徵。其考解者、期年聽敘。

第五十六條

官員犯罪等級條

○殿は、掌筆切、音電、しんがりと訓す、徽符の義にして後軍の如し、之を轉借して、春秋家語に、考試の法九等あり、一を最とし、五を中とし、九を殿とすとむれば、下の下と云ふ事になる、即ち一殿は十負にして贖銅一貫六百目と三貫二百目を云ふ、前の第四十九條及び下の六十二條參看すべし、○案成は、今云ふ張蒼終結の如し、○贖銅一斤は、當時は黃金少なき故に銅を以てせり、一斤は唐目の百六十目也、度量衡の解は第卅肆條令にあり、○負は音婦にして、背也、荷也、擔也、恃也、懷也、恩に背きて德を忘るを云ふ、又た連及夏也の義あり依て説文的の解にては、人の負を守るに従とあり、是等より轉用して私罪ならば、銅一百六十目を一負とす、公罪の一負は私罪の倍にして三百廿目なり、之を十倍したる則ち私罪ならば一貫六百目、公罪ならば三貫二百目にして杖罪の一百叩きとす、徒刑の一年則ち杖の二百に當るを十負とす、十負は則ち一殿の事なり、○勞劇は、非常に職務勤勵を云ふ、

官人の犯罪中、私罪は下の中考、公罪は下の下等公私の殿を計算して、に至らば現任を連累せし、免官の方法は、官位親等、或は免職或は官職を以て罪に代よる官當と云ふありて、是等の者は考試の限に非ざる而已ならず、兼て當年の祿をも没す勿れと云ふ也、其本親は免職亲位に至らずして、時に有位除官に止むる者は、考試落第するも一年の後に於て叙任する事を認許せしと也、

○除は、官位親等にして、六年の後再び叙官する事あらば、先官より二等下級にて叙任せし、○免は、現官職を解く也、三年の後再任せば、ナハツ二級下たにて叙任せし、○官當は官位を以て罪を代償する也、○祿は次の第十五條條令に詳述す、則ち一年四季に賜はる穀物、絲、綿等を初め食封、職封を云ふ、實際は二季に賜りしなり、○考解は、考試の第に上り得られざるを云へり、(本條六十三條、置敘令三十七條、公式令八十四條、職令三十七條參看すべし)

第五十七條

内外初位條

凡内外初位以上長上官、計考前釐事、不滿一百四十日、分番不滿一百四十日、若帳内資人不滿一百日、並不考、分番者、若日有斷絶、欲於考前倍上者、皆聽通計、則先從公使、後

改官者、起補佐日、及任訖未上、便差宛使者、起差使日、並同在司
釐事法。若舊人被使、後得替者、替後使日、亦聽通計。其有功過
灼然、理合黜陟者、雖不滿日、別記送省。其分番與長上
通計爲考者、分番三日、當長上一日。每年考文集日、省
勘按、色別爲記。具顯功過。三位以上奏裁。五位以上、太
政官量定奏聞。六位以下、省按定。訖、唱示考第、申太政
官。若當下第、狀有不盡、量按難明者、附使勘覆。善惡待
後年懲定。若遇考之後、訴理不伏、應雪者、亦如之。

本條は、日勤及び交番勤務の一年間の日數に依て考試の如何を次第したる條也、内外初位以上
の現職、出勤の官員をば、考の前に於て事を盡めて二百四十日に満たす、又た交番出勤者なら
ば百四十日に満たす、又た親王家の帳内或は大名家等の貴人の如きは二百日に満たざれば、皆
考試せず、但し交番出勤の人が時々缺勤せし事ありて、考試前に其代價勤務をすればソレ等を
通計して宜し、又た先きに分番にして、後に本官に任せられたる者が、分番中に缺勤ありソレ

を本官になりし以上にて代價的に差勤き勤務はさしてもよろしい、又た分番が途中解任され、其
後再び使るる時にも亦舊の勤めたる日數を通計する事を允許せよ、而して功過頭書にして記録
すべき者あらば、既定の考試日に満たさずと雖も別に記して式部又は兵部省に送り、其交番勤務
と長上則ち毎日勤務とを通計して考をする時には、交番の二日は長上の二日に當つべし、而し
て毎年考試の舊類の集まる日に、武官ならば兵部省、文官ならば式部省が勘査して、種別に記
して具さに功と過を明すなりしめ、然して三位以上は奉裁を仰げ、但し右大臣以上は考外とす、
五位以上は太政官にて取り定めて奏聞せよ、六位以下は右の二者にて按合し定め、此事務終了
せば考第を示して太政官に申達せよ、

若し考が下第に當りて、行迹等尙感さざる處ありて、量按明了にし轉き者は、便宜の使者に附
して反覆再査せしめよ、併し此場合には、其善惡は後年を待ちて惣て定めよ、
若し又試験官に於て考試を過ちたる後に、被考試人より管理を以て出訴し、考試官の考に服従
せざる事あらば、明了にすべしと云ふ也、

附記 (一)初位は九位の如し、長上官は、毎日勤めの本官を云ふ、分番は、非役等の有位者
が隔日に役所へ勤めに出て居る者、帳内は親王家の家來にして舍人の如し、貴人は大名家
等の家來にして大臣家の舍人の如し、公使は、上述の非役有位者等の役所に公けに使はる、

を云ふ、○暗示は、マクシメヌ也、使は、便宜の使者と云ふ如し、○勸復は、反覆再査の如し、○雪は明也、アカスと義解に訓せり、ス、ク、洗ふ、拭ふ、消ひ等の諸訓あり其意大同少異なるべし、第廿九條訓令 第廿四條參照す。

第五十八條

任二官條

凡任二官以上、各依官考、省考按日、聽以功過相折、累從一高官上考若一官上犯私坐應解者、則並解、則一官去任者、聽廻所累考、於見任官上論。

本條は、一人に對して、一時に二官以上を任じ又た二官以上を現職とする人の法例也、二官以上を任する時は、各其官の考に依れと也、式部、兵部二省の考按日には、功過差引して累ねて一の高官の上に從ふて考査するを許せ、若し一官の上に私已の犯罪ありて解官せねばならぬ者は、有位階官とせよ、又た現職二官の内、一官は止を得ざる事由にて去る者は、累ぬる所の現職の考を廻はして、現任の官の上に於て立論するを裁許せよと云ふ也、

○省は式部兵部をいへり。○相折はアイヘイと訓み、折は分ち其ふの義、各語の差引といふ言葉の如し、第廿九條訓令第五十二條、及び第卅九條出舉の條等參照すべし。

第五十九條

大貳以下條

凡大貳以下、及國司、謂目以上、毎年分番朝集。所部之内、見任及解代、皆須知。其在任以來年別狀態、隨問辨答。

地方官としては、毎々四度宛使者として上京する役があり、第一に、大帳使と云て關西戸別年貢と、唐刺ち人に課する課役の豫算帳を携帯して上京する使と、第二には正税帳使一名大税帳使と云て、田租の決算帳を携帯して上京する使と、第三には、貢調使と云て、貢賦する物品を携へて貢獻する使と、第四には、朝集使と云ふて、管轄國內の政績、官吏の行迹等を上申する爲に上京する使と也、本條は其内第四の朝集使の心得也、

太宰府の大貳(次官)以下、諸國のサクラシ(目)以上に於て、毎年交代して、十一月一日迄に上京し、式部兵部の二省へ管内の政績官吏の行迹及び現職任免、或は在任以來の年別行狀等詳細に承知し居て、式部等の係官の問に應じて明答せよ、若し答旨に躊躇し或は明答し得ざる朝集使は解任か將た貶降かの考試の厄に逢ふ事と云ふなるべし、本篇第一條參照して可なり、

○見任は現任、○解代は、解任交代、

第六十條

内外官八條

大寶令新解 第四卷 第十四箇 考據令 四〇七

凡内外官人、准考應解官者、則不合釐事。待符報則解。

内外の官員中、考に准して解官すべく者には、大帳使や、朝奏使の如き御用は勤めする事はならぬ、何しろ太政官の達しに接したる上にて解官せよと云也、尙太政官の符報を待つ間は、兼て給與ありし家來及び職田は取上げられぬと也、

第六十一條

應考官條

凡應考之官、犯罪案成者、考日則附考狀。若他司人有功過者、錄牒本司附考。其在京斷罪之司、所斷之罪、九月三十日以前、並錄送省。

考試すべき官員、犯罪あり、釐事終結せば、考試當日に考に附けよ、若し他役所の人にして功過あるを認めは、其本人就職し居る役所に移讓して考に附けよ、併し在京の諸役所に於て判決したる罪狀は、殿に成ると否とを論せず、九月二十日迄に式部兵部の二者に具申せよと也、第二十九篇、獄令參看すべし、凡て犯罪人の裁判は、笞、杖、徒、流、死の五刑の内其杖罪以下は、諸役所の判官にて裁判し、徒刑以上は刑部省の裁判なるべし、

○案成は釐事終結○他司人は他役所の役人○省は式部兵部の二者を指せり、

凡官人犯罪、勅斷有輕重者、皆依勅斷附殿。若本犯不成殿、勅令附考者、依本犯附考。則別勅放免、及會恩降者、並不入殿限。本犯私罪斷徒以上、蒙恩免、當年考應居上者、亦准殿降。唯不得降至下第。若本犯免官以上、及贓賄入已、恩前獄成者、仍以景述論。貶考奪祿、並依常法。則非除免者、不解官。

本條は、官員の犯罪に對し、勅裁、恩免、恩降の關係を示したる令條也、

官吏の犯罪に對し、勅裁ある時は、其勅斷の輕重が、前役所の裁判の輕重に關するも、皆勅裁に依りて殿に附けよ、假令は、官人が私罪にて、杖罪一百を犯して敕罪銅十斤すべきは則ち一殿（銅三百斤）と爲り然るに勅斷にては、杖九十とあらば則ち敕罪銅九斤（二百八十斤）に爲るに依りて、一殿にならず、若し之に反して勅斷重くなりて、徒罪一年とあらば敕罪銅は二十斤（六百四十斤）となるに依りて一殿に附けらるゝと云譯也、若し本犯は殿に成らずして、勅裁に

於て考に附けらるれば、本犯に於て考試に附けよ、假令ば、犯罪が杖罪九十なるに、勅斷が二百と決せらるゝも、其贖罪銅は九斤に依て考に附けよ、若又た之に反して勅斷輕くして、杖七十の刑なるを勅斷に於て六十杖と決せらるれば、贖銅六斤を以て考に附けよと云ふ也、故に輕きに依つて決するの法也、』

又た特別の勅命に依て、放免、及び恩赦、恩降等に達ふ者は、殿の限に非ず、而して本犯私罪にして、其判決徒刑以上であるか、又た恩免等を蒙りし者にして、當年の考が、上に置く可き者は、殿に准じて降せよ、併し恩降しても、中の下以下下第に恩降する事はならぬと也、』
若本犯が、免官以上、或は收賄の差罪にて、恩赦等の恩命前に刑の執行相済み居たらば、仍ほ犯人の行狀事蹟を以て論じて、貶考、奪祿等の事は、前記の普通法に依れよ、而して官位復奪免職に非ざる者は、解官するなと也、』

○殿は本篇第四十九條第五十五條參看すべし、○恩降は、恩赦、恩免の如くにして只輕重の少差あるべし、○居上は、上位に置く也、○下第は、中の下以下を云ふ、○恩降は、賄賂とか苞苴とかを己に納むる也、則ち今謂ふ收賄に同じ、○其述は、本篇第二條にあり、○奪祿は前條五十六條及び第十五條應令第五條及七條を參看すべし、○除免は同前五十六條に既述せり、

凡毎年諸司得國郡司政有殊功異行及祥瑞災蝗戶口調役增減當界豐儉盜賊多少並錄送省

本條は、中央政府則ち在京諸省が、毎年地方の政績、地方官の功狀行蹟を調査して、考課の材料とするを示したる令條也、

中央政廳が毎年地方廳の政績、當局者の殊功特異の行蹟、及び管内に發する處の祥瑞、災害戶口及び年貢の増減、管内の豐凶、盜賊の多少、等具さに錄して關係の本省に送達せよと也、

○諸司は、太政官の辨官、民部、治部、刑部等の官省を指す也、○殊功異行は、功狀行迹の超倫拔群を云へり、○祥瑞は、麟鳳龜龍の顯れたる類にして、悉くは第十八篇、儀制令第八條、尙參考としては第二篇職員令第十六條治部省、且つ詳例を要せば延喜式第二十一卷治部省式の初めを參看すべし、○災蝗は、今云ふ蟲害なり、既に戸令の第四十五條に解せり、○當界は、其國其郡と云ふ如し、○豐儉は集解朱註に、田荒ざるを豐、荒たるを儉と云へり、送省は、殊功異行に關する書類は、太政官の辨官に、祥瑞は治部省に、戶口調役等の増減は民部省に、盜賊の多少は刑部省に書類を送するを云へり、

殊功異行に就て、史例略の一を舉れば、三國志は魏の列傳十六に、

鄭渾と云ふ人あり、博學の名儒たり、後に海郡の知事に命ぜられて任地に赴き見れば、其國は旱濕の地にして、洪水氾濫頻繁の爲めに、樹木は喬大ならず、果實結ばず、五穀豐熟せざるを以て、人民菜色を顔はし居るを目撃すれば、憂心忡々睹るに忍びず、日夜千思萬慮の結果、一方法を案出し、則ち河溝を開鑿して排水を墜んにせしに、國內の全土乾燥に轉じ、果木を栽て蕃殖となさしめ、喬木を植林せしめ、五穀は非常に豐熟して従來の幾倍に達して増收せしかば、人民大に富饒となり、其恐悅言語に堪たりと、從て租税の上納も亦充分に至りしと云へば、政府の満足も亦想像に堪ざる也、之れに依て縣民は、渾知事の大恩に浴して生命を拾ひ得たり、合して子孫長久家運繁榮の遺碑立せしめて其首府に一大頭領の紀念碑を建設して萬古不滅に後世に垂れて知らしめたり、尙中央政府に於ても其後は、渾知事の子孫をして階位的の高位高官に叙任しありしと也、次に後漢書列傳十九に

鮑永と云ふ人あり、南記渾知事と大同小異の史談なれば略す、

又た後漢書列傳六十六に、

仇覽と云ふ人あり、遺孀と云ふ處の長となりしに、其所に陳元と云ふ製不孝者が母と同居してけるに、母が覽の長となりて委任せし早々自身の長男元の不孝を訴へて懇請せしかば、覽之を

快諾し、早速に陳元の家に到て、諄々として孝行の大なる徳を勸め、傍ら多方面の之に關する勸善勸戒の實話實例を以てせしに、其説諭の尋常ならざる、覽の赤誠の感動に依りて、元が悔悟徹底直ちに孝行となりたれば管内一般の老若男女の言草に親を唯殺す爲が、親を養ふ反哺の鳥鴉と良化したりともて嘆せりと云へり、又た同書十五に、
卓茂なる人の傳あり、仇覽と大同小異の人物なれば略す、之れを我皇國に近き例を取れば、中江藤樹の如き、又は、
故乃木將軍の如きは、戦死したる兵卒の貧困遺族を訪問して金銀物品を惠贈し慰藉したるが如し、皆異行の類とすべし、但し甲は考課に附するものは考課に算せざる也、

第六十四條

家介條

凡家令、毎年本土、准諸司考法立考、嬪以上、及内親王家事、
隸宮内省、考訖、申省案記、准考應解者、同諸司法、
本條は親王家の文學、家介（イノケ）より、從三位までの家に給はりたる書記に至る迄の考課法にして、毎年主人に於て、諸役所の考試に準じて考せよ、考試終れば式部省に具申す、しと也、

又た解職する場合も同法に準じ諸役所の處置に同断たる可しとの令條也

○家令は、第五篇、家令職員令に述べり、但し四十二最に於ては文學、家令、家扶は諸官の最、家従は他役所の村官の最、書吏は諸役所の主典の最を得べきものとされたり、

第六十五條

考外官條

考外位

本條以下の二令條は、外官に對する考課にして、郡吏、軍閥、國博士、帳内、資人等の行狀功過を考査する法令也、

第六十六條

考郡司條

凡國司、毎年量郡司行能功過、立四等考第、清謹勤公、勘當明審之類爲上、居官不忘、執事無私之類爲中、不動其職、數有愆犯之類爲下、背公向私、貪濁有狀之類爲下下、其軍閥少殺以上、統領有方、部下肅整爲上、清平謹恪、武藝可稱爲中、於事無動、武藝不長爲下、數有愆失、

武用無紀爲下下。毎年國司皆考、對定。訖、具記附朝集使送省。其下下考者當年校定則解。

地方の注考官^{ツカサキ}則ち長次官等は、法令既定の四等の考第を以て、毎年郡長以下の行狀技能功過を校し、其清廉にして公務に勉勵し一切の調査明確精善なる者を上とし、執務怠らず、私なきを中とし、職務缺動、廢過失ある者を下とし、公事に遠背し私事を行ひ貪慾汚濁の行爲ある者を下の下とし、次に

地方にある軍閥にては、少數以上の者は、部下を統率するに力を得、傾軋整備したるを上とし、清廉公平、謹直嚴恪、武技稱可きを中とし、事務缺動武技に長ぜざるを下とし、數々過失あり、軍紀なきを下の下とし、

是等の考課は、毎年長官が本人に對して定めよ、考試終了せば、具に記して朝集使に附して式部省及兵部省へ其符類を送れ、但し下下の考は、右二省にては、當年内に校定し本政官に上申の上解職にすべしと云ふ也、

○貪濁は、本篇第六十二條及び四十二最の末條にあり、此他の文字は前數々條に散出しあれば爰に略す、○軍閥、少數は、第十七篇軍防令第一條十三條及び職員令の第七十九條にあ

り参照すべし、○無紀は、綱紀なし、○朝集使は、前記五十九條及び職員令の太政官、式部省等に既に述べり、

第六十七條

國博士條

凡國博士、立三等考第。居官不怠、教導有方、爲上。教授不倦、生徒宛業爲中。不勤其職、教訓有闕、爲下。其醫師、准効驗多少、十得七以上爲上、得五以上爲中、得四以下爲下。

本條は、學者と醫師の考試にして、他地方官は四等なれ共、本條と次條は三等の段とせられたり、特に新解を要する點もなき如く、簡單なる贅言を附す、
地方の博士は、毎年上中下三等にて考課とす、職務怠惰ならず、教育方法善良なるをとし、教授優まず、生徒に充分稽古を爲さしむるを中とし、職務欠勤教訓粗漏なるを下と爲す、
醫師は、痼疾患者の全快したる多少に依て得點を極め、十名の病人を七名迄全治させたるを上とす、以下之に準すべし、

○宛業は、充分稽古と云ふ如し、○醫師、昔の醫師は、方今一般に呼稱する醫師と異り、官條に師の字を附して、首座國藥寮を番人と稱せり、本令條は國の官番なり、詳細は條令同條、痼疾令に述ぶ、

第六十八條

考帳内資人條

凡帳内及資人、毎年本主、量其行能功過、立三等考第。恪勤不懈、清廉稱主爲上、祇承合意、產業不怠爲中、好請私假、數有愆失爲下。

從三位以上の人に給はりたる家來の考課は、毎年其主人に於て上中下三等の等級を立てて、行狀技能功過を以りて考第を定め、而して謹密にして勉勵し清廉正直等主人の心に稱ふ者を上とし、敬恭事をなし、產業怠らざるを中とし、欠勤を貪り、廢過失ある者を下とせよとなり、

○帳内、資人は、第十二篇選役令の第十六、第七條にあり、○恪は、ツ、シミにて敬也、○稱は、音シヤク、譽むる又協の義あり、○祇も亦ツ、シミ也、○假は、假也、○德は、過誤也、

第六十九條

考資人條

考貢人

本令條以下、六箇の令條は、在京大學及び國々の學校の卒業試験其云ふ可き法制にして、第十

大寶令新解 第四卷 第十回 考課令

大東合新解

第四卷

第十四篇

孝經論

四一九

凡明經、試周禮左傳禮記毛詩各四條。餘經各三條。孝經論語共三條。皆舉經文及注爲問。其答者、皆須辨明義理、然後爲通。通十爲上上。通八以上爲上中。通七爲上下。通六爲中上。通五及一經、若論語孝經全不通者、皆爲不第。

第七十一條

明經條

方略 ○方略、方は大也、略は要也、大事の要略と云ふ如し、○策は、陳打^{チンダ}、謀計^{モウケイ}の調^{テウ}められ共^キ、はフダ又はフミと云ふ訓義にて齊簡^{セイカン}（手紙に非ず）と云ふ一篇の書と看做すべし、○不第は、落第なり。

秀才科の卒業生には、其判策として、詩文に關する大事の要略二問題を課して答答せしむ、而して其文辭義理に理義高何なるものを上上とし、又た文辭義理なれ共、理義が凡なるは上の中とし、文理共に平凡ならは上の中とし、文詞も理義も粗達ならは中の上とし、文辭拙劣理義淺薄なるものは落第となせよと也、

劣理藩、皆爲不第。

凡秀才、試方略策二條。文理俱高者爲上上。文高理平、理高文平爲上中。文理俱平爲上下。文理粗通爲中上。文理

第七十條

秀才條

は法律と云ふ如くなるべし、
科、明法科の四つなり、恩按するに秀才は文士にして、明經は今云ふ哲學、進士は政治に明法居た事と稱へざるを得ざる也、四科は下條に於て逐條解説せん、則ち、秀才科、明經科、進士科の好む所に從ひて學ぶ也、現今の學制に照せば甚だ不完全の觀を免かれ共、如何せん一我國も亦唐國の唐代に於ける及第の業と同じく四科の學科の科目ありて、一般の學生が該四卒業生の事である、

べし、又た大學に更に入學するものもある也、此後の七十五條に、舉人とあるは、在京の大學のて卒業したる人共の大政官に送りて夫々の官途に就かしむる爲めにタラマツル人^{タラマツルヒト}と云ふ義なる**考**は、本篇の篇名なれば、篇首に既に解せり、○貢人は、國々の學校にて教育を受け一篇の學分は必要の參照とし、兼て職員令の第十三條式部省をも參看して可也、

四一八

通二二經以外、別更通經者、每經問大義七條。通五以上爲

通。

明經科の卒業生には、周禮、左傳、禮記、詩經の四部の内にて各四問、儀禮、易經、書經の内にて各三問、外に孝經と論語にて各三題を與へ、其問題は各書の本文及び注解文を採用せよ、其答辨が義理明瞭ならば通曉したものとせよ、而して採點の計算は總計十一點として、内、十點を得たる人は上上とし、八點以上を上の中、七點の人は上の下、六點は中の上、五點と四點にたるを中、若くは論語、孝經の二部をば全く知らざる者は皆落第とせよ、又は二經に通じたる外に別の經書を知る者は、其經毎に大義七ヶ條の問題を與へて試むべし、其内五問以上を明答せば及第とせよと云ふ也、

附註 (一) 周禮外數部の經書等は、第十一條學令の第五、六、七の三介條に既に詳解せば爰に贅せず、(二) 餘經は、儀禮、易經、書經也、

第七十二條

進士條

凡進士、試時務策二條。帖所讀、文選上帙七帖。爾雅三帖。其策、文詞順序、義理愜當、并帖過者爲通、事義有滯、

詞句不倫、及帖不遇者爲不。帖策全通爲甲。策通二、帖過六以上爲乙、以外皆爲不第。

進士科の卒業生は、治國の要務、假令は富國強兵の如き策二題と、振饒(エキヨ、キホ)の文選は上帙中にて七ヶ所、爾雅にて三ヶ所とす、策文は其文詞の順序井然、義理穩當にして、覺て帖の出來たる者を通曉とし、事義混淆、詞句亂雜且つ振饒の出來ざりし者を落第とし、故に作文振饒共に全通の者を甲とし、策は二に通じ、振饒は六ヶ所以上讀みたる人乙とし、其餘は皆不第にせよと也、

附註 (一) 時務は、國を治むるの要務を云ふ、(二) 策は、富國強兵等の術を云ふ、(三) 帖は、義解に安也、謂ふ心は字の上に物を安て讀誦するを云ふとあり、呂保誦書を按するに、帖音貼々(カキモノ)等の詞あり故に板則ち今人所謂ノレツ的の物なるを轉用して唐制の試帖、或は帖試或は帖經、帖誦、坏と使用せり、皆各紙片或は布片或は木板片等を以て三四字を覆置して讀誦するを云ふ、依て余今假りに明治以前に行れたる四書、五經坏の振讀は全く此帖に一致するものとして奉強を願ひず、帖を振讀と義訓せし也、(四) 帙は、音張書衣則ちツミコロモなり、(五) 惟は、音類コ、ロコクと云ふ訓讀の文字なれ非協又た穩の意を會有するものなるべし、

第七十三條

明法條

凡明法、試律令十條、律七條、令三條、識達義理、問無疑滯者、爲通。粗知綱例、未究指歸者、爲不。全通爲甲。通八以上爲乙。通七以下爲不第。

法科の卒業生には、律にて七問、令にて三題を課し、其答辨は問に對して義理を讀み、混淆なくは及第とせよ、粗大綱を知れ其眞の趣旨を究めざる學生は落第とすべし、全通の學生を甲とし、八以上の得點者を乙とし、七以下の點にては不第とせよと也。

○律は、大賈律にして、當時は名例律、新蔡律、斷獄律、戶婚律、厠庫律、捕盜律、賊盜律、斷獄律、詐僞獄、雜律、捕亡律、斷獄律の十二篇ありしものと雖も、今は僅かに名例、斷獄、賊盜、斷獄の四篇さへも殘欠となりて、遺存する而じ、令は、矢張大賈の令をいへり、

○指歸、指は旨也、歸は趣也、趣旨と謂ふ如し、

第七十四條

貢舉八條

凡試貢舉人、皆卯時付策、當時對舉。式部監試。不訖者不考。畢、對本司長官、定等第唱示。

本條は、貢人舉人の受檢當日の執行法なり、大學生及び國學生を試驗するには當日の朝、日出時に二題の對策問を與へて其日の内に答書させよ、監視には式部省の係り官を出張させ、若當日中に右二問畢らざる者は考試せざる事とせよ、對策了らば、式部卿に對して等級を定めて示せと也、

第七十五條

貢人條

凡貢人、皆本部長官、貢送太政官。若無長官、次官貢。其人隨朝集使赴集。至日皆引見辨官、則付式部。已經貢送、而有事故不及試者、後年聽試。其大學舉人、具狀申太政官。與諸國貢人同試。試訖、得第者、奏聞留式部。不第者、各還本色。

凡て國々の學校に於て卒業したる生徒は、其國々の長官より、太政官に送れ、此人共は毎年上京する朝集使に附隨せしめて上京させ、着京の上は太政官の辨官引見して、而して式部省へ達

すべし、但し上京はしたれ共、萬一止を爲さる疾病に罹りしか、又は其他止むを得ざる事故相疊せし事に、京都の試問を受ける事罷むざれば翌年へ廻せ、大學の卒業生は本政官へ具申して、諸國の貢人と同時に試験せよ、試問終了して及第せば、^ノ聞の上、式部省に留め置け、然る上所々の官を授けて職に就かしめよ、落第の者は、本國に還へして、本業に就かせと也、

大寶令新解 第四卷

第十五篇 祿 令 凡壹拾伍條

本篇は、文武の百官、及び皇族女官等に給はる俸祿の給額季節等の法令なり、

〔字義〕 ○祿は、廣谷切、音鹿、説文に福也、廣韻に俸也、集解釋云、鄭玄の周禮に、祿は今時の月俸の如し、陸云、官人に給ふ食料を云ふ也、禮記の曲禮に、士祿以て耕に代ふとあり、

第一條

給季祿條

凡在京文武職事、及大宰、壹岐、對馬、皆依官位給祿。自八月至正月、上日一百廿日以上者、給春夏祿。正從一位、施參拾疋、綿參拾屯、布壹百端。秋壹百肆拾口。正從二位、施貳拾疋、綿貳拾屯、布陸拾端、秋壹百口。正三位、施拾肆疋、綿拾肆屯、布肆拾貳端、秋捌拾口。從三位、施拾貳疋、綿拾貳屯、布參拾陸端、秋陸拾口。正四位、施捌

正、綿捌屯、布貳拾貳端、歟參拾口、從四位、綿漆疋、綿漆屯、布拾捌端、歟參拾口、正五位、綿伍疋、綿五屯、布拾貳端、歟貳拾口、從五位、綿肆疋、綿肆屯、布拾貳端、歟貳拾口、正六位、綿參疋、綿參屯、布肆端、歟拾伍口、正七位、綿從六位、綿參疋、綿參屯、布肆端、歟拾伍口、正七位、綿貳疋、綿貳屯、布肆端、歟拾伍口、從七位、綿貳疋、綿貳屯、布參端、歟拾伍口、正八位、綿壹疋、綿壹屯、布參端、歟拾伍口、從八位、綿壹疋、綿壹屯、布參端、歟拾口、大初位、綿壹疋、綿壹屯、布貳端、歟拾口、少初位、綿壹疋、綿壹屯、布貳端、歟伍口、家令降一級、唯文學不在降限、秋冬亦如之。

本條は、律疏中、季減と云ふ條にして、四季の内春秋二季に給與さるゝ物にて、綿、布、絹、

絹の四種なり、

凡て在京の文武百官、及び太宰府、宣統、對馬の官員等は皆其官職位階の輕重高下に依りて、給祿の次第を附したるなり、蓋し毎年八月一日より翌年正月三十日まで合計六ヶ月の中に、一百二十日以上上^シ月したる者には、春夏の祿を給ふ也、而して正從一位の人ならば、綿三十四、綿拾貫八百目、布百端、絹一百四十挺と云ふ給額にして、以下少初位の人迄順次減額給與さる事、本文の如し、

但し親王家や、大臣家等のお附きの職員は、本文の本官本位相當より、二等次級の額を給せよとなり、其内ら文學は給與の限に非ずと也、

秋冬の給祿も亦前の春夏の給祿の如く、二月一日より、七月三十日迄、都合六ヶ月の内、壹百二十日以上出勤したる官員には、前文の通り給與せよと也、

〔附註〕〇絶は、賦役令第一條に出せり、〇匹は、絹に呼稱する文字にして五丈二尺、布には綿と稱して匹をいはず、而して一端を五丈二尺とす、〇屯は、シエンの音讀にて二斤則ち三百二十目也、〇上日は、シトメたる日、〇口は、個の如し、〇絹は、和名抄及び楊氏漢語抄共にクハと訓ず、今時もクハと訓ずれ共古代は、劔^{ツルギ}なり、併しスキもクハも其構造及び作用に於ては、甚だ大差なし、其作用の如きは、今は使用者の手元へ來くをクハとし向ふへ押すをスキと

せり、構造は時代と各地方にて稍差異ある也、尙錄の詳説を要せば、考古學雜誌第四卷第五號に載てある田中作次郎の考證を參看して可なり、

第二條 四季分給條

凡祿、春夏二季、二月上旬給。以糸一絢、代綿一屯、秋冬二季、八月上旬給。以鐵二延、代鐵五口。

本條は、季祿を給ふ時期と代用品を示したる各條なり、
秋の給祿は、一月の上旬に、春の祿は八月上旬に給ふ、萬一綿不足の時ならば、糸を以て代給せよ、其時には、綿三百二十目の代りに糸ならば一百六十目を給へよ、鐵の代に、鐵を給はる時は、鐵五延に付鐵は三貫二百目とせよ、
○拘も、亦前條の匹、端、屯の如く賦役令第一條及び兼令の第一條に出せり、一拘は一百六十目、○一延は、鐵十斤にして壹貫六百目に相當す、

第三條 內舍人給祿條

凡內舍人、及以別勅才伎、長上諸司者、皆准當司判官以下祿。其位主典以上者、准少判官、以外並准大主典。

本條も亦前條の如く季祿を給ふ令條なり、
○內舍人、及び別勅に技藝ある者にて、諸役所に奉職する者は、當其役所の判官（第一番官令に據てし四分四事迄）以下の季祿に準せよ、若し其位階が主典（四事）以上ならば、少判官（三事）に準じ、其餘は、大主典（四事）に準せよと云ふ也、例之は中務省の大錄は正七位相當官にして、少錄は正八位相當なり、若し內舍人は正八位であるならば、省の少丞（少判官）に准じ、又た從八位以下祿無位ならば、省の大錄（大主典）に準せよと云ふ也、
○內舍人は、第二篇職員令第五條、中務省所管の左大舍人寮參考すべし、御所の給仕寮警官及び番兵兼役共云ふ如きの役也、而して此役は大寶元年六月二日の（受初）新設とす、（舊記）
○別勅は、特別の勅命と云ふ如し、○伎は、伎巧、伎能にて、才也、

第四條

行守給祿條

凡行守者、並依行守處給。若一人帶數官者、祿從多處給。
凡て、行と云ふて位階高くして官職低きとか、又た守と云ふて位階低くして官職高き人達に對しては、其行守に従ふて季祿を給へ、假令は、六位の人が七位相當の職を行じ居れば、七位に當る祿を給へ、又た七位の人が六位相當の職を守じ居れば、六位に當る祿を給へと云ふ類也、

若し一人にして數官を兼務する者は、其兼官中、最も多く當る官にて給與せよと也、

○行守は、第十二篇選敘令の第六條に解す、

第五條

給祿停止條

凡應給祿之官、若有負犯應除免官當、被推劾、科斷未畢、其祿停給。待斷訖、校定然後給之。其私罪下上、公罪下中、奪半年之祿。

凡て季祿を給ふべき官員が、贖罪銅十斤(三貫三百目)以上に當らふかと推想する、犯罪ありて、免職若しくは官位を以て罪を償ふ如き場合嚴しく杖罰せらるゝ時、恰も季祿給與の時期に際せば、裁判未決と雖も給祿を停止せよ、併し裁判無罪となりたる判決の後は給與せよ但し、私罪の下の上と公罪の下の中は、半年の祿を奪ふべしと云ふ也、

【附註】、負犯は、第十四篇考課令の第五十五條に解す、罰金刑の如し、(官當は、官を以て罪を贖ふ也、例之は一品以下三位以上は、一官が徒刑三年に當つ、五位以上は二年、六位以下は一年と云ふ如し、但し公罪の時は各一年を加ふる也、第十四篇考課令第五十六條、罰令廿七條等を參看すべし、○推劾は、推問糾彈と云ふ如し、

凡初任官者、雖不滿日、皆給初任之祿。

第六條

初任官給祿條

初任官は、其出勤日數成規の半箇年則ち壹百二十日未滿にても季祿を給へと也、
初任官に破格的季祿給與の事は、別に初任官の條例として遺存し非ざれば確證を知る能はず、集解に諸先輩の諸說紛紜を極む、其内ち大實より頗る後代なれ共、大同三年十二月二十七日日本政官の達しに、初任官の季祿は限月三分の二に滿たざれば、給せずとあるを見れば、大實又は養老後に遡んで、稱還給の弊にても發生せしや、本令發布後百年にして制限の嚴重なる官符の出しを思へば也、

第七條

奪祿條

凡奪祿者、徵半年、限六十日內輸畢。徵一年、限百廿日內輸畢。若限內遇恩、及別勅復任者、非免徵、則應給者、從復任日爲始計。

犯罪等不都合の虞ありて、半年の季祿を奪らるゝ時は、六十日以内に納めよ、又た一年の季祿を取り上げらるゝ時は、百二十日以内に上納し畢れよ、若し納期間にありて特に恩與等に浴す

大實合新解

第四卷

第十五篇

祿令

四三、

るか、又た別動にて偵察する者は微祿を免せよ、併し給與はするけれ共、復任の日より計算せよと也、

第八條

兵衛給祿條

凡兵衛、六月内、上日夜各八十以上者給祿、有位、准大初位、無位、准少初位、授刀舍人亦准此。

凡て禁裡守衛の兵衛と云ふ兵士は、六ヶ月の間に出勤日數壹夜各八十回以上ならば季祿を給與せよ、但し有位の兵士は大初位に准じ、無位の兵士は少初位に准じ、帶刀の舍人も亦之に准ぜよと云ふ也、

第九條

宮人給祿條

凡宮人給祿者、尙藏、准正三位、尙膳、尙縫、准正四位、典藏、准從四位、尙侍、典膳、典縫、准從五位、尙酒、准正六位、尙書、尙藥、尙殿、典侍、准從六位、尙兵、尙閑、准正七位、尙掃、尙水、掌藏、掌侍、准從七位、掌膳、掌縫、

准正八位、典書、典藥、典兵、典閑、典殿、典掃、典水、典酒、准從八位、自餘散事、有位、准少初位、無位、減布壹端、給徵之法並准男。

凡て御所内の官員に季祿を給はるは、尙藏（のろかみ）は正三位に准じ、以下の諸役人は本文の如しとせよと也、
而して無官の女官又は有位者にして現職なき人は皆少初位に准ぜよ、無位の人に對しては、布壹端を減すべしと也、凡て給祿法と徵祿法は男官に准ぜよと也、
予附 官職の名義等は、職員令の宮内省所管の諸寮職司、及び後宮職員令の十二司を參看すべし。

第十條

食封條

凡食封者、一品、八百戸、二品、六百戸、三品、四百戸、四品、二百戸、内親王減半、太政大臣、三千戸、左右大臣、二千戸、大納言、八百戸。若以理解官、及致仕者、減半、正一位、

大寶令新編 第四卷

第十五條 職令

四三三

三百戸。從一位、二百六十戸。正二位、二百戸。從二位、一百七十戸。正三位、一百三十戸。從三位、一百戸。其五位以上、不在食封之例。正四位、緇十疋。綿十屯。布五十端。庸布三百常。正五位、緇六疋。綿六屯。布三十六端。庸布二百四十常。從五位、緇四疋。綿四屯。布二十九端。庸布一百八十常。女減半。其無故不、上二年者則停給。中宮湯沐、二千戸。東宮一年雜用料、緇三百疋。綿五百屯。糸五百紬。布一千端。鐵一千口。鐵五百廷。

本條は、食封と云ふて、皇族方に給はる封祿中の封戸則ち食封を品封と云ふ、三位以上の人に給はるを位封と云ふ、四位五位の人に此封戸はない、其代りに位祿として絹や綿を給ふ、併し五位にても本條十三條の如く、特別の功勳ある人へは、功封と云ふ祿を給はる也、此條五位

以上の人には位田を給ふ、皇族には品田（品田は皇族の位を品に使用せり）を賜ふ、又た現に官職に在任の高官には、職封と云ふて官職相當の封戸及び職田を給へり、地方官には、職分田と名けて給はる也、田の委しきは第三卷第九篇田令の各條を參看すべし、而して其給額は、一品親王には八百戸、二品には六百戸以下本文の如し、而して四位五位は食封の限に非ずして、正四位には緇三貫二百目、布五十端、此數量は今云ふ處の丈にすれば約百端に當る也、庸の布と云ふて下等の布が二百四十常、女官は半額とせよ、而して故なく出勤せざる事二年ならば季祿給與を停止せよ、又た中宮の御化粧用として二千戸、東宮の一年の雜用御料として、鐵相三百匹、綿一千斤、糸五百斤、布二千反、鐵一千挺、錢五千斤也、

食封 ○食封は、集解に釋云土を起して塹を爲す之を封と云ふ、同禮に諸公の封地は所謂食邑の意也、跡云く、給地を封と云ふ也、○庸布等は、賦役令に既に述べり、○湯沐は、沐浴化班なるべし、○常は、釋名に長さ壹丈六尺を常と云へり、

參考としては、天武紀五年八月丁酉の條に、食封を給ふ事を載す、

續日本紀天平十九年五月戊寅、太政官の奏に封戸の事あり、同書延暦八年八月庚寅の條に正三位佐伯宿禰今毛人、致仕して參議の封戸を罷むるあり、同書慶雲三年二月の詔書、同二年十一月庚辰の詔、類聚三代格に大同三年十月丙寅太政官議奏應賜位封依令條事云々とあり、續紀天

平賀字四年十二月戊辰の勅に女官の祿の事あり、同書寶龜八年九月乙丑の勅にも亦女官の祿の事あり、其他略す、

第十一條

皇親條

凡皇親、年十三以上、皆給時服料。春、絁二疋。糸二綯。布四端。歟十口。秋、絁一疋。綿一屯。布六端。鐵四廷。其給乳母王者、絁四疋。糸八綯。布十二端。

皇族は、年齡十三年以上ならば、皆時服の料を給へ、其奉の料は、絁絹二匹、糸三百二十目、布は二十丈八尺、歟十挺、秋は絹二匹、綿六百四十目、布三十二丈二尺、絁六貫四百目、又た乳母を給はる王には、絁絹四匹、糸一貫二百八十目、布は二十四反也、
參考には、續紀天平十七年五月壬午の制、同書天平寶字三年六月庚戌の條、三代實錄卷の十、貞觀七年二月癸丑制の條、研究としては、集解釋云慶雲三年の格、延暦六年の格、同十七年間五月二十三日の勅、等諸令備考及び令集解に載せり、こゝには煩を厭ふて省きぬ、

第十二條

嬪以七條

凡嬪以上、並依品位給封祿。其春夏給號祿者、妃、絁廿疋。糸四十綯。布六十端。夫人、絁十八疋。糸卅六綯。布五十四端。嬪、絁十二疋。糸廿四綯。布卅六端。若帶官者、累給。秋冬亦如之。以綿代糸。

嬪以上は、品位に依て封祿を給へ、其季祿は妃に絁絹廿匹、糸六貫四百目、布百二十反、夫人は絁絹十八匹、糸三十六斤、以上本文の如し、若し帶官ならば累ねて給へ、秋冬も亦春夏の如し、但し綿を以て糸に代用せよとなり、
附註 ○女官名稱は、後宮職員令に解せり、(號祿は、男官に季祿といへり、女官に號の字を使用せられしは、周禮春官大祝の注に、號謂符其名更爲美稱、あるを以て授ふれば、美稱の意なるべし、

第十三條

功封條

凡五位以上、以功食封者、其身亡者、大功、減半傳三世。上功、減三分之二。傳二世。中功、減四分之一。傳子。下功不傳。

[illegible]

本令條の外、若し特に封議を給與し、又は増封する事むらば、皆別勅に依れども、

令條外特封條

○薩封の權は、權柄權勢、人種民權々謀等のケン字なれ共、此令條ではゾント音讀して、

寺は凡て食封を給ふ限に奉ず、併し若し特に別勅にて給へる時は、檀封檀封として本令に關係せず五

凡寺不在食封之例。若以別勅權封者、不拘此令。權謂五

寺不給食封條

す其子だけに給へよ、下功は本人限りとせよと也、

● 三、

窪美昌保著

大寶令新解

三

越中 橘井堂藏

大寶令新解第三冊目次

第五卷

第十六篇 宮衛令

一	門衛令	四九
二	環衛門巡檢	四二
三	身體檢査條	四三
四	關防門條	四三
五	未宣行條	四五
六	車駕出行條	四六
七	環衛門條	四七
八	兵車大藏條	四七
九	厚禮門條	四八
一〇	諸門條	四九
一一	宮牆條	五〇
一二	宿衛器仗條	五〇
一三	直衛條	五一
一四	車駕臨幸條	五一

一五	奉勅夜開門條	四五
一六	諸門關鍵條	四五
一七	五衛府條	四四
一八	儀仗軍器條	四四
一九	獻軍器條	四五
二〇	車駕行幸條	四五
二一	宿衛上番條	四六
二二	元日條	四六
二三	宮門內條	四七
二四	京路分衛條	四八
二五	諸門出物條	四九
二六	車駕出人條	五〇
二七	隊仗非違條	五〇
二八	宿衛近侍條	五一
二九	軍團編成條	五一
三〇	兵轉條	五二

第十七篇 軍防令

一	兵士簡點條	四三
二	衛士防人區別條	四四
三	將校書記區別條	四四
四	軍籍調整條	四五
五	兵衛勤番條	四五
六	苑兵士各種條	四七
七	須臾勤條	四七
八	大將授節刀條	四八
九	勅使慰問條	四九

一	兵士入營條	四九
二	宿怨預防條	四〇
三	軍門嚴戒條	四〇
四	衛士外出條	四〇
五	各軍兵員條	四〇
六	大新裁判條	四〇
七	軍將交代條	四〇
八	婦女攜帶禁止條	四〇
九	出征中發覺禁止條	四〇
十	病兵受療條	四〇
十一	軍功軍資條	四〇
十二	勳績條	四〇
十三	勳功次第條	四〇
十四	有勳者犯罪條	四〇
十五	軍人進退條	四〇
十六	兵衛考滿條	四〇
十七	兵衛采女採用條	四〇
十八	軍樂條	四〇

第六卷

第十八篇 儀制令

一	行在所條	五〇
二	皇后條	五〇
三	車駕巡幸條	五〇
四	文武官條	五〇
五	三位以上條	五〇
六	皇帝不視事條	五〇
七	祥瑞條	五〇
八	元日條	五〇
九	途中下馬禮條	五〇
十	遇本國司條	五〇
十一	在國會釋條	五〇
十二	儀仗條	五〇
十三	蓋傘條	五〇
十四	父母重病條	五〇
十五	五行器製造條	五〇

四	行軍中死亡條	四八
四一	器仗出納條	四八
四二	甲位損失條	四八
四三	軍器保存條	四八
四四	民有器仗禁止條	四八
四五	不任用器仗條	四八
四六	舍人採用條	四八
四七	六位以下嫡子	四八
四八	採用條	四八
四九	帳內資人給與條	四八
五	帳內資人患病條	四八
五一	地方官事力給與條	四八
五二	邊城門閉閉條	四八
五三	城障修理條	四八
五四	副所守備條	四八
五五	防人奴婢攜帶條	四八
五六	防人糧食條	四八
五七	防人代理禁止條	四八

一八	元日國司條	五八
一九	春時田祭條	五八
二〇	還重服條	五八
二一	凶服不入公門條	五八
二二	行路會釋條	五八
二三	官人真逆成張條	五八
二四	帳內資人條	五八
二五	五等親條	五八
二六	公文條	五八
二十九篇	本服令	五八
一	皇太子禮服條	五七
二	親王禮服條	五九
三	諸王禮服條	五〇
四	諸臣禮服條	五〇
五	朝服條	五〇
六	制服條	五〇
七	服色條	五〇
八	內親王禮服條	五〇
九	女王禮服條	五〇
一〇	內舍禮服條	五〇

五八	防人犯罪條	五四
五九	防人配罰條	五四
六〇	防人交代條	五四
六一	防人歸休途中	五四
六二	罹病條	五四
六三	防人耕作條	五四
六四	防人休日條	五四
六五	外人出入警衛條	五四
六六	人民域內住所條	五四
六七	置烽條	五四
六八	放烽區別條	五四
六九	賊徒來寇條	五四
七〇	烽長規定條	五四
七一	烽子規定條	五四
七二	火炮距離條	五四
七三	火中材料條	五四
七四	浪烟原料貯藏條	五四
七五	應火方向條	五四
七六	烽烟通報條	五四
七七	放烽差條	五四

一一	有位妃女朝服條	五三
一二	宮人朝服條	五三
一三	武官朝服條	五三
一四	武官朝服條	五三
第廿篇	儀制令	五三
一	計工程條	五三
二	有所營造條	五三
三	私邸宅條	五三
四	軍器營造條	五三
五	儲藏寸法條	五三
六	在京營造條	五三
七	解難巧作條	五三
八	貯器仗條	五三
九	須女功條	五三
一〇	瓦器傾損條	五三
一一	京內橋梁條	五三
一二	津橋道路條	五三
一三	官船所在條	五三
一四	官私船舶條	五三
一五	官船使用條	五三

第七卷

第廿一篇 公式例

一六 大河候……………五〇
一七 堤防候……………五二

一 第一習旨式候……………五五
二 第二習旨式候……………五五
三 第三習旨式候……………五五
四 第四習旨式候……………五五
五 第五習旨式候……………五五
六 第五習旨式候……………五五
七 初旨式候……………五五
八 勅旨候……………五五
九 勅旨式候……………五五
一〇 勅旨式候……………五五
一一 勅旨式候……………五五
一二 勅旨式候……………五五
一三 便奏式候……………五五
一四 便奏式候……………五五
一五 令旨式候……………五五

一六 令旨式候……………六〇
一七 啓式候……………六〇
一八 奉召坊啓式候……………六〇
一九 奉彈式候……………六〇
二〇 彈奏式候……………六〇
二一 規程式候……………六〇
二二 下式候……………六二
二三 上式候……………六二
二四 解式候……………六二
二五 移式候……………六四
二六 符式候……………六六
二七 雁式候……………六六
二八 辭式候……………六八
二九 勅授位記式候……………六九
三〇 勅授位記式候……………六九
三一 勅授位記式候……………六九
三二 計會式候……………六九
三三 官及諸國諸司……………六九
三四 諸國諸司官式候……………六九

三五 諸司應官會式候……………六九
三六 通所式候……………六九
三七 不出式候……………六九
三八 圖字式候……………六九
三九 不平圖候……………六九
四〇 印信候……………六九
四一 公文捺印候……………六九
四二 給驛傳馬候……………六九
四三 諸國給驛候……………六九
四四 京內巡幸候……………六九
四五 給隨身符候……………六九
四六 國內變事候……………六九
四七 國司使入候……………六九
四八 在京諸司候……………六九
四九 驛使途中醫病候……………六九
五〇 國有禍福候……………六九
五一 明集使候……………六九
五二 内外諸司候……………六九
五三 京官外官區別候……………六九
五四 位階區別候……………六九

二 水

五五 散官明參席順條……………六八
五六 令選同致仕之……………六八
五七 高位者條……………六九
五八 彈正別勅候……………六九
五九 兼攝官條……………六九
六〇 百官指直條……………六九
六一 京官上下條……………六九
六二 詔勅及急件條……………六九
六三 受付條……………六九
六四 追攝判問條……………六九
六五 陳意見欲封進條……………六九
六六 公文條……………六九
六七 料給官物條……………六九
六八 位任官日喚……………六九
六九 辭條……………六九
七〇 奉詔勅候……………六九
七一 奉機密事條……………六九
七二 諸司受勅候……………六九
七三 事有急遽條……………六九

七三 官人判事條……………六九
七四 詔勅宣行條……………六九
七五 詔勅頒行條……………六九
七六 下司申解條……………六九
七七 諸司奉事條……………六九
七八 須置候條……………六九
七九 受勅出使條……………六九
八〇 京官出使條……………六九
八一 貢返抄條……………六九
八二 案成條……………六九
八三 文案條……………六九
八四 任授官位條……………六九
八五 授位校勘條……………六九
八六 官人父母候……………六九
八七 外官赴任條……………六九
八八 官程候……………六九
八九 遠方殊俗候……………六九

五

大寶令新解 第五卷

第十六篇 宮衛令

凡貳拾捌條

本篇は、皇城の守衛、行幸啓の直衛に係る、五衛府の將校兵士及び舍人等の心得を始め、宮内卿出入する人の心得に関する法令なり。

宮 ○宮は、爾雅注疏卷の五に、宮也、屋の高く垣上に見ゆるを云ふ、故に殿堂の高大を標形したる也、依て後には、天子及び神祇の居給ふ所而已を尊稱する事とはなれり、衛は禁衛也、凡て左方は左衛府、右方は右衛府の衛る規則なり、

第一條 門 稱 條

凡應入宮閤門者、本司具注官位姓名、送中務省、付衛府、各從便門著籍、但五位以上、著籍宮門。皆非著籍之門者、並不得出。若改任行使之類者、本司當日牒省除籍、每月一日十六日、各一換籍。宿衛人准此。

凡て宮城は内中外の三郭より成る其閤門の他の諸門に入る可き人は、所屬の役所に於て、具る

に官職、位階、姓名を録して中務省へ差出し、省之を受取りて衛門府に交付し、衛門府は之を各人圖採用事のある諸門に對し、門籍則ち名簿を備へ置かしむる也、故に各人皆自身名簿の門に非ざれば通用する事能はず、若し地方官等へ遷任したる者ある時は、本人所管の役所は直ちに中務省へ通報せよ、然れば省にては従来の門籍を即日に削除せよ、此門籍の改正は毎月の一」と十六日の二回に行ふ事とせよ、宿衛の人も亦之に準すべしと也、

宮闕門、左右衛門の守る所を宮門と云ふ、左右兵衛の遷る所を闕門と云ふ、宮門は、四方各三門宛り合計十二門なり、此中には、内裡を始め、官省、職、寮、司、署則ち中央官府の諸官衙悉皆あるなり、而して十二門は南方の中央を朱雀門、其左(東)に東福門、右に皇嘉門、東方の中央を待賢門、其左に(北)陽明門、右に郁芳門、西方の中央に激壁門、左(南)に談天門、右に啟富門、北方の中央に、僊陰門、其左に(西)安喜門、右に達智門あり、門の外は禮廳なり、中邪に極密院が内閣とも云ふべき、朝堂院あり其中に太極殿、小安殿を始め、十四堂四樓、十一門の一郭あり、是等諸門は悉く衛門府の守衛とす、宿衛府考

闕門の閣は説文に門旁の戸、釋宮に小間或は閣に通じ或は便殿等の諸説あれ共、此令條では内裡則ち主に後宮を標榜して文飾上此字を採用されたるなり、今時所謂大奥とも云ふべき内裡則ち真正の禁裡ならん歟、該禁裡の諸門は明知する處はされ共、本條に記されざる諸門は左

右兵衛の兼衛する門也、以上は想像の爲め平安朝の宮門を借寫したるに過ぎざる也、

第二條

臨時門鑑條

凡無籍應入禁中、及請迎、輸送、丁匠入役者、中務省、臨時錄名付府、五十人以上、當衛錄奏、其有所輸送未畢、欲宿守物者、斟量聽留。

本條は、臨時宮域に出入する者等の爲に設けられたる門鑑取極りの心得共云ふ令條なり、

常に諸門に名簿の備なき商人等の城内より拂ひ下ぐる物品の受取、又は買上げ品の土納、或は職人等の役に就て出入すべき者共の名は、中務省に於て臨時に出入すべき者共の名を録して衛門府に交付せよ、其者共五十人以上ならば、衛門、兵衛の二府より奏上すべし、若し土納物品の一定期間に土納し能はずして城外の宿泊所に留め置き守護しながら納めんと申し出れば、中務省は二衛府と交渉の上酌量し許せよ、拂下げの物品も全部受領の終了せざる時も亦右に准せよと也。

請迎、請迎は、拂ひ下げ等を受取る事、輸送は、納め入る事、當衛は、衛門兵衛の二府と云ふ、

凡兵衛衛士上番、衛士上番、謂自本國初上者、皆須檢點正身、然後奏聞、

第三條

身體檢査條

本條は、衛士則ち番兵等の身體檢査規則にして、内裡諸門の番兵は、兵衛府の兵衛、及び諸國より法規の通り、勤めに上る衛士則ち兵士等に對して悉く身體の檢査を施して後ち奉聞に達せよ、但し衛士は初めて上りし時一回の奉聞而已に宣しければ共、兵衛は交代毎に奉聞に達せよと也、

衛士上番は、毎年諸國より徵兵士として上る者等を云ふ、之を兵部省に於て檢査の上五衛府に分配し送る也、點檢正身は、兵衛、衛士等の身體を檢査し、逐一名簿の上に照し、筆を以て墨の點を名の上に點し、以て應實有無を知るの符帖とせりといへり、奉聞は、二衛府各奉聞するを云ふ、

第四條

開閉門條

凡開閉門者、第一開門鼓擊訖、則開諸門。第二開門鼓擊訖、則開大門。退朝鼓擊訖、則閉大門。晝漏盡、閉門鼓擊訖、則閉諸門。

訖、則閉諸門。理門不在閉限、京城門者、曉鼓聲動則開。夜鼓聲絕則閉。其出入盜者、第一開門鼓以前三刻出。閉門鼓以後三刻進。則諸衛按檢所部及諸門。持時行夜者、皆須執仗巡行、分明相識。每旦色別一人、詣在直官長通平安。

本條は、諸門の開閉に就きての取觸り令條也、

諸門を閉閉するに太鼓を擊ちて相聞とし、其第一の開門太鼓は、日の出二時間前に擊ち鳴し、つを相聞に開門する也、第二の太鼓にて朝堂（現今廟堂と云ふ如し）の南門、則ち太極殿を始め、十四室四樓二十一門ある所の正門にて朱雀門の奥にある、世に云ふ應天門（*Yung-tien*）を開くのである、次に時刻は明記してなければ共、内閣諸臣の退朝の太鼓を擊ち鳴らせば、應天門（*Yung-tien*）の正門（*Ching-tien*）を開鎖せよ、而して、日沒時に至れば又太鼓を擊ち鳴し、鳴し終れば諸門を閉鎖する也、然れ共、夜間とても多く用事のあるものなるを以て、理門と云ふて今云ふ小門とか又は潜り門とか云ふ使利の門あり、此門は徹夜閉鎖せざるを以て此門に緣りて用向を辨せよと也、

大寶令新解 第五卷 第十六篇 官新令

四四三

京城門は後に羅城門と云ふ、此門は京城南端の中央にありて市街の端なり、此門は日出時

刻の太鼓の音を聴收して開く也、閉鎖は夜太鼓の響くとする也、

諸門の鍵の出し納れは、凡て閉閉より約一時間半計の前と後との事である、鍵の事は前記第二篇職員令の第六十二條、衛士府、後宮職員令の第九條開司（前門の司）を參看すべし、此開司に於

て出納する也、

門部、兵衛、衛門、衛士等を晝夜一定の回数を以て巡檢するは、五衛府則ち左兵衛は左側右衛門は右側、衛士府は中央及左右兩側の諸門に關し、此各府の主典以上の將校等は交代に擔任區域を巡察する也、但し夜間は護身防禦の仗を携へて巡行し、巡行中左右四役所（五衛府）の同僚相互に能く見知り合ひ置けと也、巡檢終らば毎半旦諸衛府より一人宛自身所屬の衛府の宿直官へ前夜の状況を通報せよと云ふ也、

附註 〇大門は、應天門即ち朝堂の南門をいへり、〇晝漏は、時計也、今の時辰儀と異れり、

理門は、便利門にして夜間の通用門なり、〇京城門は、羅城門にして平安城ならば朱雀の末にあり今猶遺跡を存す、諸令備考に乘烟鼓を引いて曰く、羅生と記せしは分明ならずとあり、拾芥抄に羅城と云ふ事は、郭と云事也、故に羅城門は郭門と云ふ如し、平安城の最なる時、四方に郭あり其南門也、唐書に高宗の時京師に羅郭を築くともり、通鑑に唐の懿宗紀の注に羅城

は外大城也、子城は内小城也、又た朝鮮の崔世珍が訓蒙字會に、郭を俗に羅城と稱すとあり、

此諸書の文にて其義明了なるべし、羅は周羅、網羅の義にしてヤハリ鳥の網の如き外を掩ふひ圍

じより轉用したるなるべし、〇鐘は、鍵也、鐘に同じ、三刻は、古は今の晝夜各十二時を各

六時間宛に刻み晝六時間夜六時間、而して之を十二支に配當して夜半を子の時とし、晝の正中

を午の時とし、日出を曉の六時、日没を暮六時として朝の六時が卯の時、暮の六時が酉の時也、

此各の一時間を四刻又は俗に上中下三刻に分ちしもあり、支那では大抵晝夜百刻として一時間

を八刻強とし上四刻下四刻とせしも、此令條法文の義解に依れば古の一ト時を四刻に分割しむ

る如く、故に三刻は則ち今の一時間と三十分相當するべし、〇所部は、煥齋の場所、

仗は、仗にも通ず、今所謂要心練の如くなれ共、第二篇職員令の兵部省又は第六十條左兵衛及

び軍防令の第四十一、二の條を參看すべし、軍事に兵仗といへ、儀式禮容には儀仗と云ふ、

色別は、種別又は役所別を云へり、〇平安は、無事と云ふ如し、

第五條

未宣行條

凡詔勅未宣行者、非司不得輒看、

本條は、詔勅勅旨の太政官に送らるゝ際其途中に於て中務省の少輔以上の他は衛門の司と雖

私が見る事はならぬと也、

詔勅 ○詔勅は、詔書及勅旨又は勅書なり、宣行は、中務省の長次官の署名をいへり、非

司は、中務省の少輔以上の他を云ふ、

第六條

車駕出行條

凡車駕出行、兵衛衛士先按行、及道邊隱暎處、檢察非常、前後呵叱觀人大言、登高者使下、若有所幸、皆先防禁門

巷、駢斥所不當留者。

本條は、京外に御幸の際、御通鑑の道路の取締規則とも云ふべき令條なり、

京外御出幸の時には、兵衛衛士の兵士等先づ道路を檢察し、路傍隱暎の處は一層注意して非
常を檢察し、前後觀人等の大聲を叱咤し、又た高き所に登り居る者を看留すれば直ちに降
らしむ、又京都内に於て御臨幸の時は、御通鑑の際丈には接近各町の小門小道の通行を暫時禁
止すべし、又停まるべき所に非ずして留まり居る者めらは其者を追捕へし、但し此警戒は風儀
乘輿を距る事約三百步則ち五十間程の距離迄の事たるべしといへり、

御幸 ○車駕は、天子の乗物を指す、○出行は、行幸を云へり、○按行は、ミツメテ闕ち考査察行

也○隱暎、或書其、或略にして隱暎不明也、オダクヤと云ふ如し○駢斥は、連ひ揃へをいへり、

第七條

理門條

凡理門至夜燃火。並大器貯水。監察諸出入者。

本條は、時間外の通行門則ち便門の取締規則なり、此門は、夜になれば火を焚きて相戒めるな
り、但し火災の患を防ぐ爲めに、傍らに大なる器に水を盛り貯へさせよ、而して出入の諸人を

監察すべしと云ふ也、

理門 ○理門は、便宜門にして前四條に出づ、大中臣能宣の歌に

御垣守衛士の焚火の夜は燃て

ひるは消つゝ物をこそ思へ

と吟せしは、愛媛縣志の意なるも、毛詩氣取に解せば賦比興の詩にて此番兵の勤務状況の一斑
を察して古昔を偲ばるゝなり、

第八條

兵庫大藏條

凡兵庫大藏院内、皆不得將火入。其守當人、須造食者、於
外造餘庫藏准此。

大藏令新條

第九卷

第十六回

宮衛令

四四七

本條は、内外の庫藏倉廩に對する番兵の心得なり、

兵器を納めある庫藏及び大蔵の正倉院の内へは、一切火を持て入る事はならぬ、而して此倉庫に直接關係する役人、番兵、小使に至るまで、總て食物を附近にて製造調理する事を免さぬ、炊事等の如きは、庫藏を距る學百間を隔つべし、餘の庫藏も亦之に准すべしと也、
○兵庫は、兵器を納めてある庫藏、○大蔵は、大蔵省にて、現今の同名省とは、同名異實にして、昔の本省は單に倉庫而已に關するが如し、國費出納の如きは、民部省の主計寮の管掌とせり故に、○院と云ふて、今猶奈良市に遺れる正倉院の如きは昔の内裡の後方にありて諸國より貢獻する調難物及び珍奇の品物を藏め有る寶藏なり、

第九條 庫藏門條

凡庫藏門、及院外四面、恒持仗防固。非司不得輒入。夜則分、時檢行。

本條は、各倉庫の諸門、及び正倉院の周圍には、常に帶劍の番兵を分配して守護せしめよ、係り役人の外は入るべからず、夜間は、時間を分け定めて番兵も將校も嚴重に巡察すべしと云也、
○持仗は、コ、では帶劍と稱做した方適當なるべし、仗の字の參考として各令條中に散

見しある所は本約左の如し、第二篇職員令第六十一條左衛士府及び本篇第廿七條に、隊仗なる語あり、又た第二篇左兵庫と本篇第十八條に、儀仗あり、又た第二篇左京職の儀庫と本篇第十ニ條、及び第十七篇第四十一條等に、器仗の名あり、又た軍防令第四十二條に、甲仗あり、本篇第四條に執仗、同九條に持仗同十三條に監仗同十九條に役仗、同廿條に單に仗、同廿七條に仗頭、第廿一篇公式令第五十二條に稍仗等の語を使用あり就て參考すべし、○院は正倉院、非司は當局者外をいへり、本篇第五條等他各條に同語あり。

第十條 諸門條

凡諸門及守當處、非正司來監察者、先勘合契。同聽檢校。不同執送本府。

本條は、番兵等が、諸門及び守護すべき場所に於て頗も知らぬ疑はしき監察官が來りて監察せんと欲せば、先づ監察官の攜帶すべき勘符の鑑札を檢査し、守護所に備ふる勘符に照し合はせる上符合いたせば監察を許せ、然らざれば其者を捕へて五衛府の内ち其場所所管の役所へ送れと云ふ也、

○守當は、守護の場所、○正司は、將當所管の役所、○合契、の契は符書なり、兩札を

實もて其側を割み合せて備と爲す者と云ふ。今時國上所の制符又は合ひれを推知すべし、五衛府は府別に合契を有すれ共、其契を給渡するの制規は令條に明文なし、只第十七篇軍防令第六條に合符を給へよとあり、尙第二篇職員令の大圖の條及び公式令第四十三條に關契あり、第四十四條に給契あり、皆合ふと云ふ意也、契は合なりと字書に云へり、

第十一條

宮 牆 條

凡宮牆四面道内、不得積物。其近宮闕、不得燒臭惡物、

及通哭聲。

本條は、宮城と市街との間にある道路に物品を推積する事はならぬ、尙禁裡に近き處に於て臭を發する物を燒却し或は御殿に達するやうな哭泣の聲等を擲ぐる事はならぬといふ也、
【字義】○宮闕は、宮或は御殿と云ふ如し、
天子の御居所にして、異稱別名抄からず、

第十二條

宿衛器仗條

凡宿衛器仗、若有人稱勒索者、主司覆奏、然彼付之。

夜番をする兵衛府の兵衛兵士及び内舍人等の着する器仗とは、壽命であるとして取上げんとする

如きやうなる事あらば、兵衛府及び中務省の判官以上の人に於て、念の爲め奏聞の上、遂出すべしと云ふ也、

【字義】○器仗は、劍及び要心棒の類第九條參看、○勒索は、求也、○主司は、兵衛府及中務省の判官以上の官人、○覆奏は、念の爲めに奏聞するを云ふ、

第十三條

幽 簿 條

凡幽簿内、不得橫入。其監仗之官、檢校者、得去來。

行幸の際、沿道の警護部隊の警戒し居る處の往來を横切る事はならぬ、併し警衛官の許可を得たる者は此限りに非ずと云ふ也、

【字義】○幽簿は、ミエキのツラと訓む和訓もあれ其今は一般にロボト云へり、幽は屑也、簿は帳簿也、天子車駕を出るゝ次第也、○監仗は、各本衛の巡察官をいへり、

第十四條

車駕臨幸條

凡車駕有所臨幸、若夜行、部隊帥、各相辨識。雖是侍臣、從外來者、非勅不得輒入。

本條は、臨幸途中の取締の一節也、市内の臨幸又は夜間の臨幸の節は、陪從の兵士隊長等は互

凡諸門關鍵管鑰、皆須牢固。

第十六條 諸門關鍵條

○奉勅は天子の命を承まはる也、宣送は、申し送りなれ共、凡て至急に關する所は古來の誡例又は使用文字に特例等ある事なれば、のたまひおくれと訓むといへり、詳細は第二十一篇公式令に述ぶべし、覆奏は、念の爲め申し上ぐると云ふ如し、第二十九篇獄令の第五條及び職員令中務省等奉行すべし、○違錯は、相違錯誤なり、○即執の執は之入又た質入切、普計、持也守也轉奏、轉奏、執行等の執にして即時執奏の義なるべし、

也、

宣下を受たる衛府は、念の爲めに奏聞して後に開門すべし、最令は口勅として御口上だけの勅命にて、夜中など開門する時は、勅命を改りし侍従が中務に宣送し、中務省は念の爲め折返し奏聞して衛府に宣告し、衛府も亦奏聞し、胡轉じて諸鍵を管理する所の後宮殿の預司に告げ、衛司も亦覆奏して然る後開門せよ、若し中務省と衛府との兩役所が、同時に勅命を改らば念の爲め奏聞には及ばぬ、又奉勅の人が、出入の人の名を誤らば、之れを衛府又は中務が奏聞せよと

本條は、勅命によりて夜開門する法令也、勅旨を奉じて、夜諸門を開くには、勅命を改りし侍従は、其さに關くべき門、并に出入する人の姓名を録し、中務省に宣送すべし、中務省より、其關く可き門を管する衛府に宣し送れ、其

凡奉勅夜開諸門者、受勅人、具録預開之門、并出入人名帳、宣送中務。中務宣送衛府、衛府覆奏然後開之。若中務衛府、俱奉勅者、不合覆奏。其奉勅人名違錯、即執奏聞。

第十五條 奉勅夜開門條

徒一年、
○部隊は、五十人を隊とす、五十人以上の長を主帥と爲せり、○侍臣は、少納言、侍從、中務省の少輔以上をいへり、
衛禁律に云く、車駕行幸の時、隊を衝く者は、杖一百、若し兵衛及び内舍人の杖を衝く者は、杖八十、
○部隊は、五十人以上の長を主帥と爲せり、○侍臣は、少納言、侍從、中務省の少輔以上をいへり、

に能く相繼居るべし、若し侍從、少納言或は中務省の少輔以上と雖も、始めより既定拜命の供奉の人に非ずして、新に途中より陪從せんと請ふも、勅命に非ざれば、容易く入るる事はなら

本條は、諸門の鍵は、屢重堅固にすべしと云ふ也、

〔字解〕門は、門を持する横木也と義解に云へり、俗に云ハクワンズキ也、門、鍵、屢共に同
じ又た今は關貫共書けり、鍵は、カギ也、管鑰も亦鍵也、俗稱鍵雄健に當つ、關鑰地官、
禮記檀弓の鄭玄注、正字通、名物六帖、等諸説紛々あり爰に略す、

第十七條

五衛府條

凡五衛府長官、皆以時按檢所部、糾察不如法

凡て右衛門府、左衛門府、左兵衛府、右兵衛府、衛士府の五役所の長官は、一定成規の時期に
所屬部下を巡檢し、規則通り勤め居るや否を糾察する也、但し右官以下及び將校等は、毎日交
代に巡察せよと也、

第十八條

儀仗軍器條

凡儀仗軍器、十事以上、出入諸門者、皆責勝門司奏聞、勘聽出入、其宿衛人常服用者、不拘此限、

本條は、何れの門よりにても、一時に多くの儀仗兵器を出し入れするを取締る令儀也、儀仗軍
器も多く出入する時は其門の門鑰を顯ひ、管轄長官が奏聞したる上にて許可せよ、但し宿衛

人の常用は此限に拘らずと也、

〔字解〕○儀仗軍器は、弓箭矛盾等の禮容用を儀仗となし、征伐用を軍器と爲す、○十事、弓一
張、箭五十本を一事とす、○責は、請ひ也、勝は門鑰の如し、

第十九條

獻軍器條

凡有獻軍器戎仗等、則令內舍人、隨獻人將入、

本條は、軍器類の獻上に關する心得也、弓箭、刀劍、矛所、或は陣太鼓、陣貝等の類を獻上せ
んとする者あらば、侍從の下役も申すべし內舍人をして其獻上人を附隨せしめて持参させよ
と也、

〔字解〕軍器は、弓矢刀劍矛盾の類、戎仗は、陣太鼓、陣貝、軍旗、軍証の類といへり、
將は、ヒキニ、又はモツ也、

第二十條

車駕行幸條

凡車駕行幸、則閉諸門、隨便開理門、其留守人者、各自
理門出入、此駕還仗至乃開

天皇何れの處へか、行幸ありて、御留守の門は諸門を閉鎖しておき、併し便宜便利の門をば開

大寶令新解

第五卷

第十六篇

宮衛令

四百五

け置き、留守居は各理門（第四條をす）より出入をいたせ、車駕還御、諸使至る時には則ち附らけ
と也、

第二十一條

宿衛上番條

凡宿衛人、應當上番、而有故不得赴、及下番須一日程以
上行者、皆於本府申牒、具注所行之處、若不滿一日程
者、聽暫往還。

本條は、宿直の兵衛等缺動に關する法令也、凡て宿衛の人は、出勤す、さ日に事故ありて出勤
せざるとか、又は休番の日とても、一日以上を費す權の處へても行くならば、其旨具さに申し
て所屬の衛府へ申陳せよ、但し一日に滿ざる處の往還は附けなく共許せと也、

第二十二條

元日條

凡元日朔日、若有聚集、及蕃客宴會辭見、皆立儀仗。

元日或は毎月一日の外に、特に公式の集會等ある時、或は外國來賓の爲めに關かるゝ宴會等に
は、皆儀仗を立てと也、

〔考〕（蕃客は、外國使臣及び來賓、○辭見は儀制令第六條職員令第十八條に出す、○儀仗、

の委しきは、少々年代後れ居れ共、延喜式後第四十五、左右近衛府、同四十六零左右衛門府、
同四十七零左右兵衛府の各々の零首に各二張内外宛を記せり、此に新解を下せば甚だ煩冗の様
あるを以て略す、儀仗は禮客用儀式時の威儀と看做すべし、

第二十三條

宮門内條

凡宮門内、及朝堂、不得酣酒、作樂、申私敬、行決罰。

宮門の門内、及び朝堂内に於て、各役所の長次官又は高等官等が、私已陳謝等の意を以て酒宴
を催し、歌舞音樂等を行ひ、又は宮社の刑罰等を決定する事はならぬと也、

〔考〕○宮門、に就ては荷田在滿は、宮闕又は宮閣に作るべき乎と云へり、又た御風は杖邪以
下は諸役所皆決行するから朝堂も亦然りとす云々、稻葉通邦は、諸説社撰とせり、如何となれ
ば、宮門は建禮等の諸門也、八省院は宮門外也、故に及び朝堂と云はざるを得ず云々、片保
前にも云へし如く斯の如き疑問を一一論難する時には集解にても更に解決つかざる條多々にし
て幾百幾千年を経過するも五里霧中に命條を暗滅する如し、故に第一條に諸門大略を舉し如く
宮閣門と假りに定めて置けば、本文解決容易なり、則ち單に宮門では朱雀門内と看做ざるを得
ざればなり第一條四條十一條を參考すべし、

大寶令新解 第五卷

第十六條

宮闕令

四五七

「申私敬は、自己が拜謝を陳ぶる也、

第二十四條

京路分街條

凡京路、分街立鋪、衛府持時行夜。夜鼓聲絕禁行。曉鼓聲動聽行。若公使、及有婚嫁喪病須相告赴、求訪醫藥者、勘問明知有實、放過。非此色人犯夜者、衛府當日放。應贖、及餘犯者、送所司。

京都市内の道路は、街毎に番所を立て、而して衛府の番兵等は、一定の時間に用心太鼓を擊ちて巡行し、人定更時共云ふべき時刻に至れば、擊鼓を停廢し通行を禁絶せしめ、次に城戸前の擊鼓にて諸人に市街道路の自由通行を許せ、然れ共若し役所等に關する公用、我は庶民の定婚、葬、祭、又は急病人等ありて醫藥の用向き等出来て深夜にても通行する者共に對しては、一々尋問して、其答辯の虚偽ならざるを認定せば、通過を快諾許可せよ、若又此種の人々に非ずして深更を犯して通行する者あらば、衛門に於て即決せよ、若し罰金刑及び其他の犯罪ある見込の者あらば、刑部省及び左京右京の市役所へ送致せよと也、

○鐘は、音聲又たまの音あり、門の金物、高ひ店、或は停まる等の調ひも、鐘解には街を

まもるの含とし、金抄には、道を守るの家とせり、和名額聚抄に辨色立成に曰く、助輪は和名小屋一名ヒタキヤ（大衆屋）として、衛士の家の如しとあり、併し和名抄にては助の一字を冠しあるを以て衛士の番小屋とせしは確實なるべし、○公使は、諸役所の使者、勘問は、尋問の如し、○此色は、此種の如し、○當日決放は、即決解放の如し、所司は、刑部省と京職を指す也、

第二十五條

諸門出物條

凡諸門出物、無勝者、一事以上、並不得出。其勝中務省付衛府、門司勘校、有欠乘者、隨事推較、別勅賜物、不在此限。

本條は、諸門より物品を出し納れする取締法也、何れの門よりにても門の通券なければ、一品以上の物を出す事はならぬ、門券は中務省より衛府に交付し、衛府より物品出入する者に下附せり、ソレを門番の司が勘査するに通券に記載の物品數と、實物とに其數量等相違あらば糾正すべし、但し別勅に賜はりし品は此限に非ずと也、

（附條）勝は、通券、○一事は、一物と云ふ如し、但し前十八條の一事とは其義異なる也、

大寶令新解 第五卷

第十六篇

宮衛令

四五九

缺乘は、過不足と云ふ如し、缺は缺損則ち不足の事なり、乘は音利にして餘計又は、過利と云ふ如し、推駁は、推し正すと云ふ、駁は音博、推駁のベクなれ共、ては駁駁のベクの意に
て解すべし、

第二十六條

車駕出入條

凡車駕出入、諸從駕人、當按次第、如兩簿圖、去御二百
步內、不得持兵器、其宿衛人從駕者聽之、

本條は、警護の令條也、

天皇の車駕出入ある時は、諸多供奉の八々を調査する次第は、行列帳簿の圖に照し、圖と相違なき様にせよ、而して風策を去る事六十間内には、兵器を携帯する者を踏込ま介むる勿れ、但し宿衛の人にして車駕に陪從する者は許せと也、

○當按は、列次の如し、言ふ心は、諸衛各當陣の列次を整へて、雜亂せざらしむるを云ふ也、○去御は、天子の車駕を距る事、○三百步は、第六條に解せり、

第二十七條

隊伍非違條

凡隊伍內有非違、彈正不辨姓名、聽至仗頭就主司問、

本條は、衛士、兵衛、內舍人の不都合を私す令條也、

隊を造りたる衛士、仗を執りたる兵衛、及び內舍人の内にて、無禮不法の振舞容儀ある者あらば彈正重の當局に於て、其不法者の姓名を知らざれば、隊長に就て問ひ合す事を許せと也、

○隊伍は衛士の陣、○仗は、兵衛內舍人の陣也、○非違は、不敬不法、○至仗頭は、隊列の處に至つて也、○主司は、各隊の長をいへり、

第二十八條

宿衛近侍條

凡宿衛及近侍之人、二等以上親、犯死罪被推劾者、推斷
之司、速遣專使、實牒、報宿衛及近侍之人本司本府、勿
聽入內、

本條は、宿衛者の近親中に、犯罪者を生じたる者の令條也、

宿衛及び近侍の人の内にて、二、三等親則ち父母兄弟姉妹以上の親屬中に、誰か死罪を犯して糾問せられ所らば、裁判の役所より早速應夫を以て通牒を宿衛及び近侍の人の所屬役所へもたらしめし、必ず本人をして入内をエラス事はならぬと也、

○宿衛は、兵衛、內舍人を云ふ○近侍、は少納言、侍從、中務の判官以上を云ふ也、○

推助は、推問乱彈の如し、還叙令第二十三條參看、推斷之司は、裁判の役所、○専使は、施夫、○賁は、租稻切音略、賁と同字也、モタラヌと訓ず、持ち賄の義、○本司は、近侍の人の奉職の役所を指す、○本府は宿衛兵士等の所屬の五衛府をいへり、○勿進人内は、近衛中に重罪人出来れば奉職の人を御所内へ入るゝ事を禁せよと云ふ也、

大寶令新解 第五卷

第十七篇 軍防令

凡漆拾陸條

本篇は軍制に關する諸令條なり、此内官制だけは、既に職員令の第廿四條兵部省、以下廿九條迄、又五十九條より六十九條、及び皇后職員令の第八條、東宮職員令の第十條にあり、

軍政の方針、軍團の組織、軍法の大略、徵兵の條令、兵士の教育、禮式儀式、演習行軍、召集徵發、進級叙勳、懲戒刑罰、軍人の風紀、主計糧食、兵器被服、論功行賞、衛生馬政、傳令條火、步、騎、弩、工、輜重、憲兵、屯田等の諸種兵、其時代に於ける需用は一として供給せざるもの無如し、然れ共現今の軍政諸法に比照せば、其内容多量ならずして、其名稱に至るも前記の如く判然表記せずと雖も、實質は更に脱漏なきが如し、實に簡にして洩さずの觀あると稱せざるを得ざる也、

附註（一）軍は、義解に軍士とせり、然れ共愚按にては廣狹二様に解する方穩當なるべし、（二）防亦防人^{さへ}とせり、愚按にては、汎く軍を以て攻守防禦の法とすべき廣義の解をも加へて可なるべし、

第一條

軍團編成條

大寶令新解 第五卷 第十七篇 軍防令

凡軍團、大毅、領一千人、少毅副領。校尉、二百人、旅帥、一百人、隊正、五十人。

本條は軍團編成の令也、凡て團別に軍團を組織編成し、一軍團に團長として、大毅一人を置き、一千名の兵士を統率せしめよ、該一團を分割統率するに、團長の下に、少毅二人を置き、各五百人宛、校尉五人ありて各貳百人宛、旅帥十人あり百人宛、隊正廿人あり五十人宛を統領せり、但し國の大、上、中、小に依りて兵士に多少の差を生ずるを以て六百人以上二千人に滿されば、大少毅は各一人宛にして、五百人以下の處は教官一人を置のみなり、

注 ○軍團の軍は音君、衆也、説文に兵車也、戰國策の注に屯也、周禮春官に師の駐する所を軍と云ふ、同書地官の注に一万二千五百人とせり、團は圓滿凝聚の意なるべし、○大毅は大いに武猛なる意義にして、其兵士の數より云へば、現今の聯隊長に及ばざれ共、人口の少き時代に何等を推想せば、旅團長にも相當するなるべし、少毅以下皆之に准じて推知すべし、○校尉は大隊長、○旅帥は中隊長、○隊正は、小隊長と比較假想すべし、尉は大抵武官の總名に附する文字とす、旅は説文に五百人と注せり、

第二條

兵種條

凡兵士各爲隊伍、便弓馬者、爲騎兵隊、餘爲步兵隊、主帥以上、當色統領、不得參雜、

本條は兵種區別の令條なり、凡て兵士は、各隊伍を爲り、射藝馬術の出来る者を騎兵隊に入れよ、其餘は步兵隊とすべし、少隊長以上校尉以下は各兵種別に統率せよ、必ず錯雜混成すべからずと云ふ也、

注 ○隊は、五十人、○伍は、五人也、○主帥は、隊長也、○當色は、步兵騎兵等の兵種を云へり、○參雜はマジリ、マシバルの字訓なる故に、一隊の内にて混雜すべからざるを云ふ、

第三條

兵士簡點條

凡兵士簡點之次、皆令比近團制、不得隔越、其應點入軍者、同戶之內、每三丁取一丁、

本條は徵兵の數簡點點呼の令條なり、凡て兵士の簡點點呼の次第は、皆其附近最寄の隣郡に於て分割集合せしめて、懸隔させしむるなかれ、其點して兵士とすべきは、同じ一戸内にて三丁毎に一人を徵せよと也、

○簡は、選擇、**○點**は、檢點也、**○比近**は、附近又は最寄、**○團**は、聚也、**○割**は、分也、**○隔越**は、タケバナ也、田令第廿條に解せり、三丁云々了解し易き爲めに、一家にして正丁多きを基として立文せるなるべし、若し一戸内に正丁少なき時は、地の多き丁の家より流用し徴せよと也、置し一國の正丁總數を三分して其二分を徴兵とする也、但し本篇第四十六、七條の如き徵集の資格自然になき者、及び倅子或は地方長官等に給はる從卒事力等の類を除きて三分する也、而して、隊長以上の地方將校は其國內に一採用任官するのであるが、これは下の十三條にある如くにて、其二分の一の内より採用する事とせり、

第四條 兵器簡閱條

凡國司、毎年孟冬、簡閱戎具。

地方官は、毎年十月、管内居住の軍人等の所有し居る戎具を簡探檢査せよ、

○簡閱は、簡探檢査、**○戎具**は、弓劍刀劍より現今にて云へばグレートゥル戰迄の類をいへり、下の七條に委し、義解に隨身云々とあるは、相將等に給はる、護衛兵の如き者にて之に屬するは、舍人、帳内、貢人、事力等の類にして、御所にありては舍人、臣下にありては事力、則ち今云ふ從卒の如くなるべし、下の第四十六條以下五十一條の處に詳かなり、尙職員令六十

二條左兵衛府、同六十九條太宰府、家令職員令、東宮職員令の舍人監、中務省、大舍人寮、卑令最終の條、等考看すべし、但し、職員令中、兵衛府、太宰府、家令の各條には明文なければ、本篇第四十九、五十一條にて瞭然たるべし、

第五條 輜重用馬條

凡兵士、十八爲一火、火別宛六駄馬、養令肥壯。差行日、聽將宛駄。若有死失、仍則立替。

凡て兵士は、五人を伍とし、伍二則ち十人を火とす、而して十人に付、輜重用の馬を六頭宛當てよ、該馬は、官設牧場の軍用に堪ふる者を取りて各團中の兵士の内にて、最も家計の富裕にして飼養に堪ふる家を擇びて飼養せしめて、肥肉強壯ならしめよ、必用の時は輜重用の馬に充るものとせよ、若し此馬死亡せば立替へよ、併し其死亡は病死又は止を得ざる災害ならば、其代りに官馬を下付すれ共、飼養者の過失より死亡せしめしならば、飼牧者に於て相當の馬を代償すべしとの義解也、

○差行の、差は俗語サシ出し、サシ遣すのサシにして彙て選擇の意を含有しあるものと看なすべし、

第六條 糧食條

四六八

凡兵士、人別備糧六斗、鹽二升、并當火供、行戎具等、並貯當色庫。若貯經年之久、壞惡不堪、則廻納好者。起十一月一日、十二月卅日以前納畢、每番、於上番人內取一人守掌、不得雜使、行軍之日、計火出給。

凡て兵士は、自辨を以て人別に糧六斗、食鹽二升、外に十人を二組としたる共同入用の戎具則ち紺の褌より銀までを設備し、其處の軍團の所藏に貯藏させよ、若し耐久の年月にて品質不良に傾くの兆を認めば、新を以て陳に代納せしめよ、其交換上納期日は、毎年十一月一日より十一月三十日までの間たるべし、但し毎勤務の中、上番人中にて二人宛守り掌らしめよ、此守掌兵は、守掌中他の用事に使用する事はならぬ、又た行軍の時は火別に兵士の數を點檢して出禁させよ、隊長以上も亦同断也、

○糧は、乾たる飯、供行は、行軍に供給也、戎具は、次の第七條に委し、○廻納は代り納むる也、○好者は、良品、

第七條

兵士必用品條

凡兵士、每火、紺布幕一口、着裏、銅盆小釜、隨得一口、鍬一具、剉碓一具、斧一具、小斧一具、鑿一具、鎌二張、鉗一具、每五十人、火鏟一具、熟艾一斤、手鋸一具、每人、弓一張、弓弦袋一口、副弦一條、征箭五十隻、胡籀一具、太刀一口、刀子一枚、礪石一枚、蘭帽一枚、飯袋一口、水桶一口、鹽桶一口、脛巾一具、鞋一兩、皆令自備、不可闕少。行軍之日、自盡將去、若上番年、唯將人別戎具、自外不須。

本條は、火別（十人、組）及び人別に必需の武器戎具、衣服食器等の數量を定めたる令條にして其物品の構造、製作の詳細なる事は、確説する能わされ共、現今に至るも名實の遺れる品は、千有二百年間に亘れたる時々の變革あるも、月數の大差はなき者と想像して可なるべし、故に大實の昔より約百年後の天長年間に勅撰の義解の文あり、夫より又百年後に延喜の式の編纂に依りて今尙大體を伺知する事を得らるゝとすべし、本朝軍器考、武藝考詩、或は春田永年の延喜

式工事解、同通解、同圖錄、及び古事類苑或は寺島良安の和漢三才圖繪等は至便の參考本とすべし、猶專門的に詳査を要する時は、殆んど無限の參考書ある事なるべし。

凡て兵士は、十八一組にして、紺の給糧一張、銅鍋大小一個宛、鍔一挺、草切一挺、斧一挺、手斧一挺、鑿一本、鎌二本、ヤツト一本、又五十人(二隊)に付き、火打一具、天切一斤、鍔一挺、右は十八共同の戎具にして、岡々の兵丁より交代に、京へ上る衛士や、九州に上る防人に行ぐ年には持ちて行くに及ばぬ也。

弓一張、弓弦の袋一個、豫備の弦二本、征箭五十本、矢箱一個、太刀一振、小刀一本、砥石一本、編笠一蓋、飯布一枚、水筒一個、鹽いれ一個、脚卮一足、靴一足、

右は兵士各自に自費にて所持すべし、必ず缺乏にすべからず、行軍の時には携帯して出發せよと也、

紺布幕、は紺染の木布又は麻布の裏附たる幕也、但し其巾と長きは今詳かならず、愚按するに一の小障幕にして野營の際ナント代料として其四壁の用ならん、故に十八同席の周圍とすれば、當時の半端則ち二丈六尺の長さにて幅は大抵六幅程か、屋根は附近の樹枝葉等を以て葺きしものが、朝廷にても八幅の品を用ゐられし影障ある事、和名銅聚抄卷の十四屏障具の筈に云へり、又た乳皮及び銅紐の寸法計數等詳ならず、後世に至りて天地陰陽五行卦八宿等種々

に集りたれ共、當代は質朴の事ならん、栗原信光の軍防令講義に圖あるも余は同意ならず、大藏式によれば今時の京間四疊半計を圍まよるゝ如し、別に出入する戸料あるといへり、○銅釜小釜は、今時所謂鍋と釜にして、耳及び足の有無にて構造外觀を異にするも、甲は同處達く、乙は深きの差別ある而已なり、介抄に甲を飲器とせり今も多くは鍋は飲器とす、○劉確は、楨本にクサキリと訓せり、介抄に馬槽用の草を切るもの也、今云ふ草刈鎌又押し切りの類なるべし、○鎌は、介抄に六箱に大鎌の柄長三七尺とあり、○鋸は今云ふヤツトコの類にして昔はカナ箸と云へり、○征箭は、衆に殺矢の義とあり、愚按するに征討用の矢の意なるべし、延喜式工事解卷之二に神祇式大神宮神寶の中に、征箭長さ二尺三寸鎌の長さ一寸五分云々とあり、矢の今より短きは皆の木製なる差異あれば也、○胡録は、矢袋、又た俗に矢箱或は矢筒と云へり、○太刀は刀劍にして、刀子はコガクナ也、○兩鞘は、黒の表の原料たる膚を以て、帽子又は笠を作り今云ふ編笠の類なるべし、○飯袋は近年の兵士も行軍等の際に、辨當の飯入に布片を用へし事あり、○水筒は、今も水筒と云へり、○鹽卮は、鹽入れなれ共オカズ入れと看做すべし、右二品大小方圓今詳ならず、○腰巾は、ハッキ則ち今云ふ脚巾也、○鞋はワラジ則ち草須、を楨本に、スベカラズと訓せり、然れ共用ゐずと訓讀するも可なるべし、

第八條

兵士上番條

凡兵士上番者、向京一年、向防二年、不計行程。

勤務に上る兵士の内り、京都へ上りて衛士となる者は一ケ年、太宰府に上りて防人となる者は

三ケ年、共に行程を計算せぬと也、

○上番、はツツメに上る也、

第九條

弓矢官費條

凡弩手、赴教習、及征行、不須科其弓箭。

凡て機關弓なるもの稽古をさする兵士には、征伐に行く時にても、前八條の如く弓箭をば自費負擔せしむべからずと也、

○弩手は、機關弓の兵士なり、弩は首窓、機關的仕懸のある大きな弓也、小中村等の

制度連に前賢故實の圖を載せり、延喜式工部寮卷之三、洞經類圖二百廿六卷、社會辭苑、和漢三才圖會等にもあり、○征は、行也、伐也、上下を伐也、○科は、課の如し、○征行は、大抵敵徒に對する行也、

第十條

弩手選定條

凡軍團、每一隊、定強壯者二人、分宛弩手、均分入番、

凡て各軍團の一隊中より、強壯の兵士二人を選抜して弩手とせよ、而して總隊の弩手を均分して上番稽古せよと也、

第十一條

衛士武技條

凡衛士者、中分、一日上、一日下、謂無事故日者、每下日、則令於當府、教習弓馬、用刀、弄槍、及發弩、拋石。至午時、各放還。仍本府試練、知其進不、則非別勅者、不得難使、

衛士は、凡二節日交替に勤務を致させ、其休番の日は、五衛府に於て、弓箭の射撃、乘馬の術、擊劍、槍術及び弩の練習、石投の稽古等を教習せしめ、但し正午限り放課にせよ、尚各衛府に於て試験し其の術の進否を知れと也、

右の諸兵は、別に勅命がなければ難使する事はならぬと也、

大寶令新解

第五卷

第七七圖

軍制令

四七三

○藩府は、五箇府の總稱にて、新門府、左右兵衛府、左右衛士府の五衛府也。上はツカへ、下はサカレ也。○槍は、木製にして兩端の尖れる者之の屬にして今云ふ稽古ヤリなるべし。○石投、は今の振り鞭での如き物なるべし。例は和漢三才圖會兵器の部にあり、

第十二條 衛士防人區別條

凡兵士、向京者名衛士、火別、取白丁五人、宛火頭、守邊者名防人。

京都に上ず兵士を衛士と云ひ、十八に五人宛の小連的なる白丁を取りて炊事にあてよ、邊海を守衛する兵士をサキモリと云ふ也。
○白丁は御免の法、仕丁に同じと義解にあるを見れば、出暮の米俵を宛せらるゝ者と見ゆ
○火頭は、賦役令の廿六條に出せり。炊事仕丁也。但し防人には、火頭を定ずと云へり。

第十三條 將校書記區別條

凡軍團大毅小毅、通取部内散位勳位、及庶人武藝可稱者宛。其校尉以下、取庶人便於弓馬者爲之。主帳者、取工

於書算者爲之。

凡て諸國の軍團長及び次長には、其國內に住居する六位以下若くは勳位七等以下の官人か、又は人民の内にて武藝に達したる者を採用せよ、其二百人長以下の將校は、人民中の弓馬に堪能なる者を採用せよ、書記は、書算算術に巧みな人を採用せよと也、

第十四條

軍籍簡釋條

凡兵士以上、皆造歷名簿一通。並顯征防遠使處所。仍注貧富上中下三等。一通留國。一通、每年附朝集使送兵部。若有差行、及上番、國司據簿以次差遣。其衛士防人、還郷之日、並免國內上番。衛士一年防人三年

大數、少數は、外武官であるから別に名籍あるを以て、コ、は兵士以上校尉以下の名籍編成にして、本帳は二通を作り、征討に行き居るとか、防人となりて居るとか、又は外國及び遠隔地方に就いて居とかすれば、其行先の場所をば詳細に名簿に記入し置き、尙貧富の程度をも亦上中下三等に分ちて記入し附け、而して一通は地方廳に留め、一通は毎年朝集使に附けて兵部

大寶令新解 第五卷 第十七篇 軍防令

四七五

省に送れ、若し何れの處へか兵士を派遣するとか、又は當番勤務に上京するとかの時、地方官は名簿に據りて、次ぎから次ぎと番々に差遣すべし、又た衛士防人が歸休の上は、一年勤のたる者は一年、二年勤めたる者は三年と云ふ鹽梅に庸役を免せよ、故に衛士は既定の法令にて一年の免役、防人は三ヶ年の免役と云ふ譯なり、但し志願志望にて一定の勤務以上、數年勤動續して歸休する者は、皆各前述の通り其勤積年數丈、庸役を免せよ也、

防遣 ○歷名簿、は校尉(二百人長)以下兵士の兵籍明細帳也、(征防、は征討防禦、○遣使は、朝鮮や薩隅、奥羽の如き及び外國或は遠國へ公用の使者を云へり、差行、差遣、は共にサシヤレ則ち差し遣せといふ如し、

第十五條

兵衛勤務條

凡兵衛使還者、經三番以上、免一番。若欲上者聽。

左又は右の兵衛府に籍のある兵衛が、外國又は遠國等へ使者となりて歸府せば、其者は其やうの務を三回までも續いて勤務し居たならば、次の一回は休ませよ、併し本人に於て四たび續勤せんとせば聽許せよ、然して、三回勤務後、二三年を隔てゝならば、一回の休みはさるに及ばぬ也、

防遣 ○使遣は、使より遣らは也、使は遠使、征討、防人の部領、等に差遣せらるゝの類を云へり、○三番は、三回にして三度の勤務と云ふ如し、
職員令六十二條兵衛府、本篇第三十七、八條參考すべし、

第十六條

宛兵士各種條

凡差兵士宛衛士防人者、父子兄弟、不得併遣。若祖父母父母老疾合侍、家無兼丁、不在衛士及防人限。

凡て兵士を簡擇して、京都の衛士、大半の防人に充つるには、父子、兄弟、祖孫は同時に勤務する事はならぬ、而して、祖父母、父母が老衰等の疾病にて看護の必要なる場合にして、其家に正丁の代り人無きは、衛士及び防人を勤めとするの限に非ずと云ふ也、
但し其父子兄弟が數日に既に其居住の國を異にし居る者は此限りに非ずと義解にいへり、

差遣 ○差、はサシ遣はす也、

第十七條

須契勅條

凡差兵二十人以上者、須契勅、始合差發。

兵士廿人以上派遣する場合は、關所の在る國ならば勅契、其餘の國は勅符を待て始めて派遣せ

大寶令新解

第五卷

第十七條

軍防令

四七七

よと也、

符 ○契は、兩書同一のものを別とし也、符は、驗也、證也、令也、付也、符合、符節等の符にて、其始めは六寸の竹に文字等を印して兩割したるより變轉して今云ふツリ符の書となれるなるべし、

第十八條

大將授節刀條

凡大將出征、皆授節刀、辭訖、不得反宿於家、其家在京者、每月一遣內舍人存問、若有疾病者、給醫藥、凱旋之日、奏遣使郊勞

大將が征討に出る時には、天子節刀を授く、征討すりて凱旋し來るも勅命が下らざれば家に歸宿する事はならぬ、大將の邸宅が京にあらば不在中則ち出征中は、毎月一回、內舍人（侍從の一人）を遣して家族の安否を慰問せしめよ、若し病者あらば醫藥を給へよ、凱旋の日には、中務省より奏上し、使者を市外に遣して歡迎せよと也、

節刀 節刀は、令抄に古記に云く、又た諸令備考に三才圖會に周禮地官掌職に云く、凡て邦國の虎節、山國には虎節を用ゐ、土國には人節を用ゐ、澤國には龍節を用ゐず會金也、節は信也

行くもの執る所の信也、稱名に漢節は竹を以て爲り柄の長さ八尺、旄牛の尾を以て其旄（毛）に同じ）を作る三重、朱實裏に曰く、黑漆竿上圓盤を施し、周鑲紅絲拂八層、黃縷龍袋籠之云云、愚按するに今の聯隊旗を包みあるの觀をなす圖あり略す、山海經の第三北山經に、獸あり其形も牛の如し、四節毛を生じ、名けて旄牛と云ふ、不得反宿は、凱旋の上とても、勅命なければ自宅に歸られぬと云ふ也、○郊勞は、市外に歡迎するをいへり、第二篇第三條、中務卿の項、第二十一篇公式令第五十六條參看すべし、

第十九條

勅使慰問條

凡有所征討、計行人、滿三千以上、兵馬發日、侍從宛使、宣勅慰勞發遣、其防人滿二千以上、發日遣內舍人發遣

征討に行く事ある時には、其出征軍人を計算して三千人以上の時は、兵士馬匹發程の日に、侍從を勅使として、勅命を以て慰安勞問の上發遣せよと也、但し防人は、千人以上ならば、發程の日に內舍人を遣して發遣せよと也、

宣勅 宣勅は、勅命、○慰勞、慰は慰安、勞は勞問、

第二十條

兵士入營條

大寶令新解 第五卷 第十七條 軍防令

凡衛士向京、防人至津之間、皆令國司親自部領。衛士至京之日、兵部先檢閱戎具、分配三府。若有闕少者、隨事推罪。自津發日、專使部領、付大宰府。其往還、在路不得前後零疊使役。犯百姓、及損害田苗、斫伐桑漆之類。若有違者、國郡錄狀申官。統領之人、依法科罪。軍行亦准此。

本條は、入營途中の取締り心得也、

凡て衛士の京都に向ひ、防人の大阪に到る途中は、皆地方官をして親ら引率せしめよ、而して兵士着京の上は、兵部省に於て先づ兵士の身體及び携帯の戎具則ち弓箭、刀劍、磁石、飯簋、水筒、鹽入れ、脚絆、の類を檢閲し、衛士は衛門、兵衛、衛士の三府に分配せよ、若し不足員等あらば、引率都領し來れる兵事係りの地方官、及び不慮敵の兵士にも亦制裁を加へよと也、扱大阪より發程の時には、專屬の係り官防人を引率して太宰府に遣せ、但し一番數は船便に依るべし、其他は陸路數々隊伍を亂さず山陽道を遶らすべし、若し途中隊を亂し、伍を混じ、到るべし、沿道の人民を侵し、田畑を荒し、桑柘を伐り捨る等の振舞をする輩はならぬ、之に違犯の

者は、地方官に於て、具さに狀を錄して太政官に上申せよ、引率部領の官吏も亦法に依て罪科に處せよ、防人は此他の行軍にも亦之に准せよと也、

○蒲領は、一郡々々の支配、斯く假々擔任引奉と云ふ如し、○國司は、國守に奉ず一般の地方官を云ふ、○津は難波津にして今の大阪市の地とす、○零塵は、或はチラバラ、或はカクアリ重なると云ふ義也、(第九萬田令第二十二條にも此語あり、)

と往くは、(防人)を指す。汝のまな。(汝)行きてくみ。(は)彼、サガミは製を施したる(物)まさくも、早く到りて、大君の(か)ことのまにま(體意)ますらなの。心をもちて、おりに(行き)廻り(事)し終らば、つゝまはす。(まなく)歸り來せと、(酒)利(床)に(ま)ちて、(床)の邊に(する)白粉の、纏折り返し、ねは玉の、髪敷て、長き毛を、待かこひむ。(昌保拾遺傳人且つ今續傳名にせり)

返歌

ますら男の、ゆきとりおこて、いて、けけけ、別れな惜み。歌さ(舞津原。
鳥か鳴、吾是男の、お別れ。かなとくありけん。年の尻を食て、

右二月八日兵部少輔大作経國家持

第二十一條

宿怨預防條

凡將帥出征、有宿嫌者、不得配隸

大將及副將軍の出征するに際し、將軍と部下の將校兵士との間、又將校兵士相互の間或は宿怨、或は嫌惡する事故等の兆あらば、前同統率の諸隊に帥たらしめ又は隊長たらしめずして、配屬を更替せよと也、

○將帥は、大將、副將、宿嫌、宿は素也、嫌は心の不平也、モトのソオ、怨と云ふ如し、本條は公事を托し或は公事を兼ねて私怨を晴す者あるを豫防する爲めの令條也、

第二十二條

軍門嚴戒條

整備軍容、然後受勅

凡軍營門、恒須嚴整呵叱出入、若有勅使、皆先通軍將

凡て軍營の門には、平時と雖も規律を嚴重にして、軍門出入の者をば、一々誰何すべしと也、若し勅使あらば、皆先に軍將に通じ、軍容を整備して、後に勅を賜はれと也、
○呵叱は、二字共に通用語のシカリと云ふ文字なれ共、にては今人の所謂スカリ(誰何)と解釋する方適當なるべし、

第二十三條

衛士外出條

凡衛士、雖下日皆不得輒三十里外私行、必有事故、須經本府判聽乃去、其上番年、雖有重服、不在下限、下番日令終服

本條は、在京兵士の外出、及び喪服に係る令條也、
衛士は、非番の日と雖も皆各容易く五里以外の處に行く事はならぬ、止むを得ざる事故あらば、各兵士の本屬衛府に願ひ許可を得て往くべしと也、
其初めて入營したる勤務の年は、父及び母の重服の喪に逢ふも、歸休はならぬ、休番の日を以て、喪服に代算し終らしめよ、但し防人も同斷たり、併し炊事の白子は此例に非ずと也、

大寶令新解 第五卷 第七條 軍防令

四八三

○下日は、休番の日、○卅里は、五丁二里にして、此五丁は現今の六丁に當れり、○本府は、衛七府、及び左右の兵衛府と左右衛門府の五衛府也、○判聴は、許可、○重服は、父と母の服喪、○下限は、隱休の限り也、

第二十四條

各軍兵員條

凡將帥出征、兵滿一萬人以上、將軍一人、副將軍一人、軍監二人、軍曹四人、錄事四人、五千人以上、減副將軍軍監各一人、錄事二人、三千人以上、減軍曹二人、各爲一軍、每惣三軍、大將軍一人、

將帥出征の時、兵士一萬以上、一萬二千以下の時には、將軍一人、副將軍二人、軍監二人、軍曹四人、錄事四人、五千人以上九千人未滿ならば、副將軍、軍監各一人、錄事二人、三千人以上、四千人以下ならば、軍曹二人を減じて各一軍とせよ、三軍を率ふる毎に大將軍一人を置くとも也、

○軍曹は、他役所の大主典に當る、○錄事は、少主典に相當す、節度兼官位令に詳也、

○三軍、大軍は一萬人以上、中軍は五千人以上、小軍は三千人以上、

第二十五條

大將裁制條

凡大將出征、臨軍對寇、大殺以下、不從軍令、及有稽違闕乏軍事、死罪以下、並聽大將斟酌專決、還日、具狀申太政官、若未臨寇賊、不用此令、

大將軍出征し、賊軍に臨み、寇仇に對する時等に際し、大殺以下の將校等、指揮命令に従はずるとき、或は軍事に滯滞闕乏する事あらば、死罪以下は、大將軍にて斟酌の上裁制專斷し、凱旋の上、太政官に具申せよ、若し寇賊に臨まざる時は、此軍令は用られぬと也、

○稽違は、心得違ひ、賦役令第二十五條參照、

闕乏は、滯滞欠損にして、事を闕かす事、

第二十六條

軍將交代條

凡軍將征討、須交代者、舊將不得出迎、當嚴兵守備、所代者到、發詔書、勘合符、乃以從事、

軍將征討中、交代すべく、交代に當りて、後任の將、陣地に到達せんとする際、前任將は、出

大將令新解

第五卷

第七圖

軍防令

四八五

迎等はならぬ、兵を嚴にして、守備し居れ、後任の將到着の上は、痛す處の詔書を読み、命令を
勘査して然る後軍に従事せしむべしと也、

第二十七條 婦女攜帶禁止條

凡征行者、皆不得將婦女自隨

出征し行く時には、皆妻女、下婢等を隨伴せしむる事はならぬと也、

第二十八條

出征中發喪禁止條

凡征行、大將以下、有遺父母喪者、皆待征還、然後告發、

出征中大將以下兵士に至るまで、父母の喪に逢ふ事あらば、凱旋の後、喪を告げよ、則ち大將
軍は、節刀を奉還の上、兵士は持ち行さし官物を所屬役所に奉還の後とせよと也、

第二十九條

病兵受療條

凡士卒病患、及在陣被傷、皆遣醫療、軍監以下、親自臨

視、

凡て士卒疾病に罹り、又陣中に於て負傷せば、皆々醫療せしめよ、軍監以下は、大將親ら視察
せよと也、

凡大將出征、克捷以後、諸軍未散之前、則須對衆詳定動
功、并錄軍行以來、有所克捷、及諸費用、軍人兵馬甲仗、
見在損失、大將以下連署、軍還之日、軍監以下、錄事以
上、各赴本司勾勘、訖、然後放還、

本令條以下二十五條までの六ヶ條は、論功行賞に關するの令條也、

大將出征、凱捷の後、諸軍解散の前に、將校兵士に對して、詳細に勳功を認定し、並に出征以
來勝利ある所、及び軍費、軍人、馬匹、甲仗等の現在損失を録すべし、但し大將以下連署をせ
よ、

凱旋の日、軍監以下、錄事以上皆各所屬の兵庫、馬寮に赴き、出征の初め受けたる兵器、馬匹
と現在の物と對校勘査して返納を終了せよ、然る後解散せよと也、

〔附註〕○克捷は、勝也、○兼は、將校兵士を指す、○勾勘は、對校勘査也、第三爵職員令第廿
二條主計寮、及び考課令第廿五條參照すべし、

第三十一條

勳簿條

凡申勳簿、皆具錄陣別勳狀、勳人官位姓名、左右廂、相捉姓名、人別所執器仗、當圍、主帥、本屬、官軍賊衆多少、彼此傷殺之數、及獲賊、軍資、器械、辨戰時日月、戰處、并畫陣別戰圖。仍於圖上、具注副將軍以上姓名、附簿、申送太政官。勳賞高下、臨時聽勅

凡て勳功を申し立てるの根簿には、具さに陣別の勳狀、被勳者の官位姓名、左右兩方將校兵士の區別、引奉者の姓名、兵士持行きし弓矢の類、軍制、主帥、所屬、官軍賊徒の多少、彼我死傷の數、及び捕虜、兵器、牛馬、弓劍、甲冑等の分取、戰爭の時日場所等を辨別し、并に陣別の繪圖を添へ、猶圖上欄外に、大將軍副將軍等の姓名を記入し、附冊に附して、太政官に申達せよ、勳賞の高下は、臨時に勳を聴けと也、

○勳簿は、軍人の勳功調査の書冊也、○勳狀は、本文の首軍以下、月日戰場までの事を云ふ、○廂は、字書に、息良、思將切達音箱、説文に廂也、玉箱に東西序也、爾雅神宮に序を東西の廂とし、註に内外を序別する所以とあり、又た栗原柳菴の本令講義卷之五に、連甲式に

五十八を二隊と爲し、十隊を一廂と爲し、左右廂にして廿隊千人、とあれば軍に方と云ふと同じからず、古事記傳に、ソナタと訓みしは義解に、左右廂猶左右方といへるによりしなれ共、太勳臣安麻呂の古事記軍陣の條に用ひしは深意ありて然せしなり、輕く見べきに非ず、又た此文字等は、神田の阿禮が口傳せしに非ず、全く軍防令に據りしなり、と云へり昌保前讀説を綜合し熟考すれば、モトは殿堂に屬する左右の室或は藩垣城下等の如きを轉借して、軍營の兵舍に帖る兵士等の分列に借用して文飾を莊嚴にしたるものなるべし、○相捉、は引率統領の如し捉は持也、獲賊、は捕虜、軍資、は糧食馬牛の屬、○器械、は弓劍介冑の屬、

第三十二條

勳功次第條

凡行軍叙勳、定簿、每隊以先鋒者爲第一。其次爲第二。不得第一等勳多於第二、則勳色雖同、而優劣少異者、皆以次歷名。若不合全叙、則從後減退。

出征軍人に對し、終勳の大第を議定する事は、各隊其先鋒を以て第一とし、其次を次鋒として第二とし、第三、第四鋒が、第一先鋒同様にて、則ち次鋒より勳功多き時は次鋒として順序を立て、若し同等の勳功者多くして何れをも欲すべからざる時は、後の方より減退すべし、

〔先鋒〕先鋒は、兵の端也、

行軍一隊		先鋒		後鋒	
先鋒	先鋒	先鋒	先鋒	後鋒	後鋒
	五	五	五	五	五
後鋒	五	五	五	五	五
	五	五	五	五	五
先鋒		後鋒		先鋒	
先鋒	先鋒	先鋒	先鋒	後鋒	後鋒
	五	五	五	五	五
後鋒	五	五	五	五	五
	五	五	五	五	五

先鋒 甲乙 五級 次鋒 戊巳 五級
先鋒 丙丁 四級 次鋒 庚辛 四級

右の圖は、一條關白兼良の合抄に載するものにて、一目瞭然の觀あり、則ち當時の動功の一例を舉ぐれば、首五級を取りしを上動とし、四級以下を次動とす、假令は、先鋒の甲乙が斬首五級ならば無論上動なり、丙丁が斬首四級にして、戊巳則ち行軍の次鋒が斬首五級ならば、戊巳を第二と云ふ順にする也、陣列は昔は前順の如く先鋒の幡廿五人、次鋒の幡廿五人と云ふ譯也又た次鋒の動は一隊中三人より超過は出来ぬと云ふ制限なり、

第三十三條

叙動加轉條

凡叙動應加轉者、皆於動位上加。若無動位、一轉授十二

等。每一轉加一等。六等以上、兩轉加一等。二等以上、三轉加一等。其五位以上、加盡動位外、仍有餘動者、聽授父子、如父子身亡、每一轉賜田兩町、其六位以下、及動位、加至一外、有餘動者、聽廻授、不在賜田之限。

凡て敘動せんには、動位の上に於て加轉すべし、若し動等なさんならば、一轉に動十二等を授け、毎轉一等を加へよ、動六等以上の人ならば、二轉で一等を加へ、又た動二等以上の方は、三轉にて一等を加へ、又た五位以上の人にして動位を加へ盡して、猶授與すべき餘動あらば、其父か子に賜へよと也、若し父子共に死亡して此世に居なければ、一轉毎に田地二町宛を賜、而して六位以下及び動一等に加へ盡して尙其餘に餘動あらば、父子に授くべし、但し此には田地を賜ふの限に非ずと也、

〔考略〕(一)轉は、不定の意にして、假令は、元年の行軍には斬首十級を一轉と定めあるも、二年の行軍には五級を一轉とする類を云ふ、其定例なき故に、轉と爲す也、一賜田、は功田に非ざる也、

續日本紀卷の九に云く、神龜二年丙子月丁未、天智朝に臨み詔し、征夷將軍以上一千六百九十八人に勳位を授けず者あり、

正四位上藤原朝臣字令に從三位勳二事、(中略)外死八位以上、實定子爵職名第二十八に、并に勳六事出二所を賜ふ、とあり、

四九二

凡勳人、得勳後身亡者、其勳依例加授。若戸絶、無人承貫者停。

第三十四條

歿後叙勳條

彼勳する人、勳位を授かりし後、死じせば、勳位は例によりて加授せよ、若し後繼者なく、其家斷絶する時には加勳するに及ばぬと也、併し其一族中に、降すべき者あらば、其者に授與せよと義解にいへり、

○承貫は、本籍繼承と云ふ如し、

第三十五條

有勳者犯罪條

凡勳位犯除名、限滿應叙者、一等於九等叙。二等於十等叙。三等於十一等叙。四等以下於十二等叙。其官當、及免官、免所居官、計降卑於此法者、聽從高叙。

除名犯罪、勳位繼承の如き人は、其期滿免除則ち今所屬時効共云ふべき後、叙せしむべき者は前

に一等の者は九等に敘せよ、二等の者は十等に、三等は十一等に、四等以下は十二等に敘せよと也、而して、官職にて犯罪を代償するとか、或は免官、或は一官だけ解かれたる等の場合に於て、下級の者は、勳十二等以下に當りて勳位なき時は、則ち高きに依りて勳十二等の中へ算入し敘せよと也、

○官當、免官、免所居官は、貶令廿七、廿八條に詳解す、尙還從令卅七條、考課令五十六條等參看すべし、

第三十六條

軍人進退條

凡非因簡點次者、不得輒取人入軍、及放人出軍。其詐冒入軍、被認入賤、及有陸、合出軍者、勘當有實、皆申兵部、聽出軍。在軍者、年滿六十、免軍役。雖未滿六十、身弱、長病、不堪軍役者、亦聽簡出。

簡點點呼等の次第、帳簿に因らずして、輒く人を採りて軍に入れ、又軍隊中の兵士を免役し出したりする事はならぬ、又た詐偽にて軍に入り則ち眞の軍人の代人をしたり、或は認定にて賤民籍に入り、又五位以上の子孫、内八位の嫡子などとも稱へて、軍隊より出づべき者あらば、一

大寶令新解 第五卷 第十七篇 軍防令

四九三

々檢査の上、其實否を正して皆兵部省に申出て聽許すべき者はせよ、軍に在る人は凡て滿六十
年に達せざれば免役にはならぬ、然れ共、六十年に滿たざるも、身體衰弱、或は長病にて、軍
役に堪えざる者ならば、筋び出す事をゆるせと云也。

【附註】○簡點次は、エラビ、サス次第、○詐冒は、姓名虚偽、

第三十七條

兵衛考滿條

凡兵衛、毎至考滿、兵部校練、隨文武所能、具爲等級申
官、堪理時務者、量才處分、其年六十以上、皆免兵衛、則
雖未滿六十、若有尫弱長病、不堪宿衛、及任郡司者、本
府錄狀、并身、送兵部、檢覆知實、奏聞放出。

兵衛は、考試期年の滿つるに至る毎に、兵部省に於て檢査せよ、文武の才技に隨つて二等の等
級を爲りて、本政官に申達せよ、時務を處理する才能ある者をば、文武官に取立つべし、武才
あるも、時務の才なくば任用すべからずと也、而して年齢六十以上ならば、兵衛を免すべし、
但し考校の日に於てすべし、又た六十に滿たざるも身體虛弱となり、或は長病にして宿衛する
に堪ずして、郡吏に任用するとせば、兵衛府より其旨を錄して本人と共に兵部省に送れ、省再

查の上斷ならざれば、奏聞して免し出せと也、(考滿令五十四條參照)

【附註】○按練は、檢査の如し、○庭病は、檢査虚病の如し、○檢覆は、再檢査。

第三十八條

兵衛采女採用條

凡兵衛者、國司簡郡司子弟強幹便於弓馬者、郡別一人貢
之、若貢采女郡者、不在貢兵衛之例、三分一國、二分兵衛、
一分采女。

兵衛は、地方官及び郡吏の子弟中、強幹にして弓馬に巧みなる人を簡びて、郡別に一人宛貢せ
よ、然れ共、采女を貢する郡にては、兵衛を貢するに及ばぬ、則ち一國を三分して、其二分は兵
衛、一分は采女と云ふ比例也、假令は、一國三郡あるとせば、其内二郡は兵衛を貢し、一郡は
采女を貢する事と知るべし。

第三十九條

軍樂條

凡軍團、各置鼓二面、大角二口、少角四口、通用兵士、分
番教習、倉庫損壞須修理者、十月以後、聽役兵士。

土

凡行軍、兵士以上、若有身病及死者、行軍具錄隨身資財、付本郷人將還、其屍者當處燒埋。但副將軍以上、將還本

第四十條

行軍中死亡條

凡て圖々の軍團には、陣太鼓二面、今の喇叭の如き物、大形二個小形四個を備へ置け、共に各兵士の間流用して交代に稽古すべし、又た櫓や鹽の倉、及び兵器の庫が破損して修繕する時は十月より以後ならば兵士を使役する事を聴せと也、

○大角、小角は、後世の陣貝の代り也、根柢の南蠻別志に螺を吹くは角也、角は銅角とて、銅にても作り又た鐵角としてホウの貝をも用ひし也、萬葉集卷の二に、萬市皇子尊、益去し五へし時に、柿本人麻呂が悲傷の長歌あり、其句に、(前略)、鼓みのおとは、當ちの響と聞まで、吹たせる、小角のおとも云々、(下略)、略解に一に笛之音波、とあり、和名抄に楊氏連詔抄に、大角はヘウのフエ、小角はクダの笛とあり、谷川の桑にクダの笛は、管の笛の義にて形ち竹筒の如きか云々、講分備考の圖は漏斗の如し、或は牛角の斛度の其に低き象ちの如し、今は喇叭を用ふる也、因に大角の事は、寺島良安の和漢三才圖會第十八卷にて其大體を知らるべし、諸説の詳細は殆んど際限無が如し茲に省きぬ、

行軍に、兵士以上の軍人が、或は病に罹り、或は死にせる事あらば、其軍の係りにて、具るに其人の身に附け居る資財則ち物品等を錄し、同郷人を附けて、本國に運せ、若し重患にして本國に還る事能わざれば、途中何れの國郡にても其地の町村又は郡費を以て療養せしめよ、其取扱方は、賦役令第卅一、卅二條にある丁匠の取扱に准せよ、又た死にせし時は其取扱方も亦丁匠と同様にせよと也、

但し、副將軍以上は、別に專屬の使者を附して還せと也、

第四十一條

器仗出納條

凡出給器仗等、付領之日、明作文抄、行還、事畢、據簿勘納、如有非理損失、申官推徵。

兵器、儀仗等を支給せられ、領收の日には、帳簿を製し置きて、明細に記入し、事終り行軍より還り来らば、帳簿に對照して改め納めさすべし、若し理由なき破損或は紛失したらば、太政官に申して追徵せよと也、

○付領は、下付と領收、○文抄は文記の如し、○行還は、銀行、軍行、又た威儀に供す

るも同断、○推徴は、追徴の如し、

第四十二條

甲仗損失條

凡從軍、甲仗經戰失落者、免徵、其損壞者、官爲修理、不經戰損失者、三分徵二、不因從軍而損失者、皆准損失處當時估價、及料造式徵備、官爲修理、則被水火焚漂、非人力所制者、勘實免徵、其國郡器仗、每年錄帳、附朝集使申兵部、勘按訖、二月三十日以前錄進、

從軍の兵器等は、戰爭を経て亡失せば、徵收を免し、其破損品は官費の修繕とし、又た戰争せずして破損亡失せば、三分の二は軍人より徵收し、又た竊行、及び實食、或は樣式威儀等の時の破損亡失は、其亡失の品は時價にて新調し、式に准じて代り備へさせ、破損の部は官費を以て修理とす、然れ共、或は水難の爲に流失又は破損とか、或は火災の爲に燒燬毀傷せしとか等凡て人力の制禦し能はざるに因て生じたる損失は、其實否を取り食して徵收を免せ、其國郡の器仗は、毎年帳簿に改め記し、朝集使に附して兵部省に上申せよ、省、校勘し了らば、二月

三十日まで記して、進奏せよと也、

○甲仗は、兵器儀仗、○失落は、紛失、遺失、亡失なり、○官は、太政官、○損失は、破損と亡失、○估價は、時の賣買直段、○料造式は軍用料品の新調書式にして、式の變形今はなし、○徵備は、求め備へ、又徵收し備へ、或は代價し備への義也、○焚漂は、灰又た水にしたるが如し、則ち半燈燒失、流失をいへり、○朝集使は毎年十月中に京に上りて、地方行政の状況を申し上る役人也、

第四十三條

軍器保存條

凡軍器在庫、皆造柵閣安置、色別異所、以時曝涼、

軍器、兵庫に貯藏しあるを、皆各柵を設けて、正しく整理陳列し置け、種別に場所境界を異にし置かねばならぬ、尙毎年一回宛は、必ず風を通し乾し晒しサマシをさせと也、

○柵閣は、二字共にマナ也、柵音明、說文に柵也、博雅に閣也、又た矢藏也、閣は音各博雅に載也、玉篇に樓也、○曝涼は、サラシ、サマシにして、今云ふ、風入れ或は曬乾し、又は土用手也、職員令第六十四條、左兵庫、及び考課令第廿八條にも解せり、

第四十四條

民有器仗禁止條

大寶令新解 第五卷

第十七條

軍防令

四九九

隨て修れば、隨て破る。極めて功役を費せり、今車の中を爲る事未周にして、無久躬を費みて輕便なり、簡に中りて實き難し、其功程を計るに殊に亦成り易し、自今以後、諸國遠る所の年の料の甲冑は、皆宜く革を用ひ則ち前例に依て毎年輕を進るべし。但し前に造りし鎧甲も往に燻

らす可らず、三年を経る毎に舊に依て之を修めよ。

同く十月己未、征東使に勅すらく、今月二十二日の奏上を省て知れ、使等延遲して既に時宜を失し、將軍發起して久く日月を經、集る所の歩騎數萬餘人、加以ならず、賊地に入るの期、上をすする事度多し、計しらは曠し入て和賊を不け斃つべし、而して今來すらく、今年は征討す可らずとなれば、夏は草茂し、冬は凍乏しなど、縱横に巧言し、遂に稽留を成す、兵を懈へ、州を設くるは、將軍の爲す所也、而して集兵の前、準備する事を加へず、還て云ふ未だ城中の糧を儲けずと、然らば則ち、何れの月、何れの日か賊を誅し城を復せん、方今將軍、賊の爲に歎かれ、所以に緩怠して、此逗留を致せり、又た建子に及ばず、以て兵を擧ぐるに足れり、而して、勅旨に乖きて、尙待て入らず、人馬悉く埶せたらば、何を以て敵に對せん、良將の策豈此の如くならん乎、宜く教諭を加へ意を存して征討すべし、若し今月を以て賊地に入らずんば、宜く多寶、玉作等の城に居て、能く防禦を加へ、兼て戰術を練るべし、此德弘化刻本類聚三代格十二の上巻に、延暦六年正月廿一日壬午、太政官符あり、即ち譯文すれば左の如し。

陸奥の國按察使、王臣の百姓と漢俘と交關する事を禁斷す應き事。

右、右大臣の宣せ被るに觸く、奉勅、聞なしく、王臣及び國司等、爭ふて秋の馬、及び俘の奴婢を買ふは、弘羊の徒なる所以なり、苟も利潤を貪り、良を略し、馬を竊み、相賊ふ事日に深し、加ふるに無知の百姓なるを以て逐軍を畏れず、此國家の貨を賣りて、彼夷俘の物を買へば、給は既に賊の腹に着き、胃藏は亦敵の農器を造り、理に於て商賈するに害爲る事極めて深し、自今以後、嚴に禁斷すべし、如し王臣及び國司の此例に違犯する者有らば、物は官に沒し、仍は名を注して申し上げ、其百姓は、一ら故按察使從三位大野朝臣東人^{トウジン}の例法に依り事に隨ふて推決せよ、

第四十六條

舍人採用條

凡五位以上子孫、年二十一以上、見無役任者、毎年京國官司、勘檢知實、限十一月一日、并身、送式部、申太政官檢簡、性識聰敏、儀容可取、宛內舍人、三位以上子、不在簡限、以外式部、隨狀宛大舍人、及東宮舍人。

大寶令新條

第五卷

第十七章

軍防令

五〇三

凡内六位以下、八位以上嫡子、年二十一以上、見無役任

、第四十七條

六位以下嫡子採用條

史實の参照としては、内舍人が、大臣の長子たる例
 續日本紀に云く、天平神護元年十一月甲申、右大臣從一位藤原朝臣豐成（豊成は朝臣の意）を以て、兵部省の大丞
 は、平城朝の正一位贈太政大臣武智麻呂の長子也、養老七年に、内舍人を以て、兵部省の大丞
 を兼ね、神龜元年從五位下を授く云々、又た大舍人の例は、類聚國史百七卷、延暦十五年六月
 己酉の勅あり、又た東宮舍人の例は、同卷の大福元年七月壬寅に、白丁白人を以て東宮の舍人
 に補すを經し、永久例と爲すとあり、又た世繼物語に曰く、今は昔し、閑院のおとゝ冬嗣と申
 す人の御子内舍人よしかと申しけり、昔はやんごとなき人も内舍人も成給ひける云々、
 亦此に准せよと也、

五位以上の子孫、年齢二十一歳以上にして、現在奉職し居らざる者は、毎年、京及地方廳にて
 實地に調査し、其書類を十二月限り本人と共に式部省に送れ、省は太政官に申達して再び檢閲
 せよ、檢閲の上性質、智識聰敏にして儀容の取るべき者をば、内舍人に充て、三位以上の子孫は
 檢査簡閲の限に非ず、以外は、狀に隨て、大舍人及び東宮の舍人に充てよ、但し中宮の舍人も

者、毎年京國官司、勘檢知實、責狀簡試、分爲三等、儀容
 端正、工於書算、爲上等、身材強幹、便於弓馬、爲中等、
 身材劣弱、不識文算、爲下等、十一月三十日以前、上等
 下等、送式部簡試、上等爲大舍人、下等爲使部、中等送
 兵部、試練爲兵衛。如不足者、通取庶子。

内六位以下、八位以上の嫡子、年齢二十歳以上にて現在奉職し居らざる者は、毎年京官及び
 地方官にて實地調査し、實況を知り、狀を問ふて簡擇試験し、分つて三等とし、儀容端正にし
 て書算、算術に巧みならば、上等とし、身體強健にして武藝のある者を中等とし、身材劣弱に
 して、文事算術をも識らざる者を下等とし、十二月三十日まで上下兩等の人を式部省に送れ、
 省試簡簡擇して、上等を大舍人し爲よ、下等を使部とせよ、中等を兵部に送り試練して兵衛と
 し、如し不足を告ぐれば、人民中より採用せよと也、

〔附〕責は、償、だの二音あり、今せきの音を用ふ、又たセムル、ニシル、クツクツ等の訓
 あれ共、此處は、問ふと訓讀する方穩當なるべし、

大寶令新條 第五卷 第十七條 軍部令

五〇五

五〇四

凡帳内、取六位以下子及庶人爲之、其資人、不得取内八位以上子。唯宛職分者聽、並不得取三關、及大宰部内、陸奥、石城、石背、越中、越後國人。

凡て親王家に給はる家來には、六位以下の子、及び庶民より採用せよ、大臣以下に給はる家來は、内八位以上の子供を採用する事ならぬ、但し職分に充つるは聽許せよ、而して三關所の國、及び大宰の部内、陸奥、石城、石背、越中、越後の國の人をば採用する事はならぬ也、恩按するに、平時と雖も守備必用なるを以て、東西北の邊國には如此也、

〔考證〕 ○帳内、資人は家令職員令に、三關は、此下の五十四條、及び職員令七十七條大圖に、既に解せり、石城、石背は、今は磐城、岩代と書く、爾後史實の參照としては、續日本紀に和銅三年三月戊午、帳く畿外の人を取りて、帳内、資人に用ふるを制す云々、同五年九月乙未、三關國の人を取りて、帳内資人と爲す事を禁す、

同四年五月辛亥の制、同書養老三年十二月庚寅の制等大同小異なれば略す、

第四十九條

帳内資人給與條

凡給帳内、一品、一百六十人、二品、一百四十人、三品、一百二十人、四品、一百人、資人、一位、一百人、二位、八十人、三位、六十人、正四位、四十人、從四位、三十五人、正五位、二十五人、從五位、二十人、女減半。減數不_レ等、從多給、其太政大臣、三百人、左右大臣、二百人。大納言、一百人

凡て親王に家來を給與するは、一品に一百六十人、以下令文の如し、大臣等に給與の家來は二位に一人、以下令文の如し、從五位に廿人、女は半減とす、其數不_レ等ならば、多きに從ひて給與せよ、假令ば、正五位の家來廿五人、之を女として半減せば、女官の正五位の人には、十二人半となる、故に十三人を給へと云へる類也、太政大臣に三百人、左右大臣には二百人宛大納言に一百人と也、故仕の人は祿令第十條に准じて半減せよと總解にいへり、

史實としては、日本紀雄略紀の最首、同崇峻紀の最首、同升菴、持統紀の十年十月庚寅の條、

又た續紀和銅七年六月甲戌、太政官廳分の條、同書神龜五年二月甲子の勅、等全文を寫し出す

は、甚だ煩冗の極あるを以て略す。

第五十條

帳内賁人罹病條

凡帳内賁人、瘥疾應免仕者、皆申式部、勘驗知實聽替。

凡て親王、大臣等の官給家來にして、執事に堪ざる者、瘥疾等にて解職せねばならぬ者をば、皆式部省に申し出せ、省は勘役の上、其實否を取り査して、更替を聽許せよ、但し就職後六年に滿ざる者をば、本籍地に還せ、六年動寂したる者をば式部省に留め置けとの義解なり、

〔附〕

(一) 瘥は、音隆、老也、罷也、ツカマル也、老衰又は瘥疾の如し、

第五十一條

地方官事力給與條

凡大宰及國司、並給事力、帥、二十人。大貳、十四人。少貳、十八人。大監、少監、大判事、六人。大工、少判事、大興、防人正、主神、博士、五人。少典、陰陽師、醫師、少工、算師、主船、主尉、防人佑、四人。諸令史、三人。史生、二人。大國守、八人。上國守、大國介、七人。中國守、上國介、六

人。下國守、大上國掾、五人。中國掾、大上國目、四人。中下國目、三人。史生如前。一年一替、皆取上等戸内丁、並不得收庸

凡て太宰の官吏、及び各地方官にも前條親王大臣等に給與せし家來の如く、事力と云ふ家來をば身分に應じて給へよ、則ち太宰府の長官なる卿には廿人、以下令條の如し、但し此事力は毎年一回宛替へよ、而して事力は持中等以上の家の戸を取れ尤も庸をば收めざる事はならぬと也、

〔附〕 事力は、太宰及地方官への官給の家來也、賦役令第十九條に連べり、官名は官位令、職員令に委し、

史生の名額とは

續日本紀の案を五年六月乙酉の詔、

同書の案を七年秋八月壬子、太宰府の言上、

政事政平五十九條に、貴顯格に云く、國司の田を作るに事力を給する事を休むと云々、

同書に、

延暦三年十一月三日、太政官より命國に下す布達、

同書に、大同二年七月二十四日、畿内に下せる官符あり、

大寶令新條

第五卷

第十七條

軍防令

兵部式に云く、國司の事力管領丁十人別に六人を知つ云々。

第五十二條

邊城門閉開條

凡邊城門、晚開早閉。若有事故須夜開者、設備乃開。若城主有公事、須出城檢行者、不得俱出。其管鑰、城主自掌。執鑰開閉者、簡謹慎家口重大者宛之。

邊城門は、曉く開けて早く閉てよ。若し事故ありて夜間開放せねばならぬ場合には、充分に守備して開け、若し三關國の城を掌る國司は、公用等ありて城外に出ねばならぬ時には、各兵士に於ては俱に出る事はならぬ、而して門の鑰は、城主自ら掌れ、但し開閉をする者は、謹慎にして、家族の多き者を簡びて致させよ、存族多き者を簡擇するは、惡舉不都合をせざる爲めの川意なるべし。

釋 邊城門、は太宰府管内にある城門又は三關國にある城門をいへり、○城主、は城を掌る國司、管鑰、は鑰也宮衛令第四條、後宮職員令の國司の條參照すべし、鑰鑰同じ、○家口重大、は存族累り多き者をいふ也、○三關國、は下の第五十四條、尙邊城門の事は第六十五條參照すべし。

第五十三條

城陷修理條

凡城陷崩頽者、役兵士修理。若兵士少者、聽役隨近人夫。遂閑月修理。其崩頽過多、交關守固者、隨則修理。役訖具錄申太政官。所役人夫、皆不得過十日。

城郭崩壞の破損崩頽したるは、兵士を使役して修繕せよ、若し兵士少數にして、工事進捗せる見込ならば、附近より人夫を使役するを聽せ、但し農閑の月にしたがふて修繕せよ、而して崩頽過多其大にして、急遽守備の用に合さば、隨時修理せよ、工事竣成の時には、具さに錄して太政官に上申せよ、但し使役の人夫は、一人に付き、十日間施より通使する事はならぬと也、

釋 〇墮は、城池也、音貳、シロシタのカナボリと云ふ訓あり、字書に、水あるを池と云ひ、水なきを墮と云ふ。

第五十四條

關所守備條

凡置關應守固者、並置配兵士、分番上下。其二關者、設鼓

吹軍器、國司分當守固。所配兵士之數、依別式。

本條は、國所を固むる介條也、

國所を建造して固むる時は、皆兵士を配置し、其兵士はやはり交替に勤務させ、其内、伊勢の鈴鹿、美濃の不破、越前の愛發の三關所には、陣太鼓、陣貝、兵器等を備へ置け、而して其處の地方官は、之を分増して、堅固に守衛せよ、但し配置兵の數は、別式に依れとあれ共別式、今はなし、

〔附〕(三關、の内邊前の關に就ては、諸令備考に乘烟諱に曰く、越の愛發の關何れの所たる

を知らず、或は云ふ、江州鹽津、古へ越へ入るの道なりと、僅かならず、後ら義解の善本を見れば、愛は愛の字の誤なり、刊本の字誤れり、愛發と云は、アヲチと訓む點も付けてあり、越前荒乳山の事也、古へは北國に行くには、西江州より北にとりて荒乳の方を通るゆへ、此所に關あり、今に其跡ありと云ふ、又本朝譯字の例を考ふるに、アとチとの縁を取りて愛發と書るなるべしと、又た日本紀略に、延暦二十五年、帝崩じ玉へ、使を遣はして固く、伊勢、美濃、越前の三ヶ國の故關を守らしむ、とあり、往昔之を故關と云時は、上世よりの事にて、延暦の時分すら當時の緊要に非るやうに見ゆ、諸秘御抄の内にも、追討宣旨の下に、三國當國の諸關

弓矢を備し、追討使、宣旨を給はる云々、

續日本紀、延暦八年七月甲寅の勅にて右三關廢止せり、日本紀略亦同じ、

文鏡秘府に云く、天安元年(五百十七年)四月庚寅、始めて近江の國、相坂、大石、龍花等三處の關を置く、

第五十五條

防人奴婢携帶條

凡防人向防、若有家人奴婢及牛馬欲將行者聽。

ナキモリが九州の防備に行くに、家人、妻子、奴婢、及び牛馬を携帶引率しに行かんと欲せば聽せ、

昌保云く、法令には左程關係なき如くなれ共、文學士人情風俗慣習等にて取ては、頗る趣味の深き萬葉集卷の廿には、此ナキモリに關する長短歌一百餘首を載せり、今頃を厭ふ、爰には略す、第廿條參考すべし、

〔附〕の將行は、持ち行くにして、携帶と云ふ如し、

第五十六條

防人糧食條

凡防人向防、各尙私糧、自津發日、隨給公糧。

サキモリ、九州に行くには、各糧食旅費は大坂迄は自辨にて持ち付け、但し、大坂發足の日より一切官給とせよと也、
〔附〕 薪は、モトラシと訓みて、持也、付也、送也、遣也、行道用ふる所也、サキモリは關東諸州よりの徴兵なり、

第五十七條 防人代理禁止條
凡防人上道以後、在路破除者、不須差替

サキモリ、發程後、途中に於て死入又は逃入する事あるも、代り兵を差出すべからずと也、
〔附〕 破除は、死入又は逃入を云ふ、

第五十八條 防人犯罪條
凡防人將發、犯罪在禁、及對公私事非至徒者、隨則量決發遣、罪至徒以上差替、

サキモリ、國元を初めて出發せんとする時か、又は出發後途中に於て、犯罪以上の犯罪にて獄に在るとか、又は公私の事にて、徒刑に至らざる程の罪は、隨時酌量判決して本牢に遣せ、必ずしも律に依るに及ばぬと也、但し犯罪が徒刑以上に至らば、差替へよ、然れ共贖罪罰を出さ

は別に差替ゆるに及ばぬと也。

第五十九條 防人配置條
凡防人欲至、所在官司、預爲部分、防人至後一日、則共舊人、分付交替使訖、守當之處、每季交代使苦樂均平、

新サキモリが、九州各地に到る時には、各地の係り官に於て預め部分々に區別しおけ、而して到着の上は、舊サキモリ、則ち歸休兵となる者と共に器仗等分付し交替せよ、同サキモリに當り守る處則ち屯田耕作等の場處は、相互に苦樂平均の爲めに、毎季更の代へよと也。
〔附〕 官司は、サキモリの係り官、(部分は、事務簡捷の爲めに交代前に小區別をし)置くを云ふ、(分付は、シツケ也、(守當は、勤むる場所、(苦樂均一は第六十二條參考すべし、

第六十條 防人交代條
凡舊防人替訖、則給程糧發遣、新人雖有欠少不宛元數、不得輒以舊人留帖、

舊新サキモリ更替し終らば、歸休する舊防人に、旅費糧食を給與して、發足せしめよ、新サキモリ、欠員にして元の數に充たずと云ふ共、必ず舊防人を留め置きて、手傳補助はする事な

らぬと也、

○程類は、旅中の米にして今云旅費と看做すべし、延喜主税式に因れば、一日に米貳升
貳貳勺、酒八合といへり、○欠少は、欠員の如し、○留帖は、留め添へ助くるの義也、神社正
郡の説にては、帖は貼の誤ならむ、貼は正字通に他協切、音帖、説文に物を以て質と爲す也、
又神也、又依附、又黏置也、然則は、貼は添助の義と知るべしとあり、愚按するに、帖にした
として添助の義あり及第の案に帖括あり、廣韻に服也、書帖、畫帖、帖紙、或は字書にては同書
は服也、服はソクアル也、貼も亦ソクアルと訓す、帖の校本に、トメソクアルと假名を附せしも、ト
メソクアルとの意にするも敢て差圖なかるべし、則ち留めて服役といふ意義に解すれば當らざる
に非ず、

第六十一條

防人歸休途中罹病條

凡防人向防、及番還、在道有身患、不堪涉路者、則付側近
國郡、給糧并醫藥救療。待差堪行、然後發遣。仍移本貫、
及前所。其身死者、隨便給棺燒埋。若有資財者、申送兵部、

令將還本家。

新サキモリの防に向ひ、舊サキモリの歸休する途中、若し病患に罹り、歩行し難き者は、其附近
の國郡にて糧食、醫藥を給與して救療せよ、全快の上歩行の出來得るを待て、醫足させよ、則
ち歸休兵ならば、關東の本國へ、九州行の防人ならば太宰府へ移離し遣せ、若し途中に於て死
んせば、棺を支給して燒き埋めを致せ、但し攝津の國より西方ならば、火葬或は埋葬せよ、山
城の國より東方ならば、本國へ告げて引取らせよ、若し引取人來らざれば、火葬とせよ、又た
其身に資財則ち携帯の所持品等あらば、死狀と共に兵部省へ上申して、本國本人の家へ送附し
てやれと也、

○涉は、端本に、アルク駄、行くとかに訓ませり、○差は、恙なり、不治と確診せば素
より免役歸國するなるべし、○本貫は、本籍、○前所は、サキの所、則ち本宰府を指せり、
○燒埋は、火葬、埋葬の如し、○將は、幸使に附けてを云へり、

第六十二條

防人排作條

凡防人在防守固之外、各量防人多少、於當處側近、給空閑
地、逐水陸所宜、斟酌營種、并雜菜、以供防人食、所須牛

力官給。所收苗子、毎年錄數、附朝集使、申太政官。

防人、防にありて守り固むる外、防人の多少を計り、其同めの附近に於て、空地を給與して水陸の便を以て耕作させよ、而して雜菜は防人等の食用に供し、米は政府の公糧とす、使用の耕作物具牛馬は總て官給とせよ、收穫の種子類は、毎年數量を録して、十月中に右京する、太宰府内の朝集使に附して、太政官に申達せよと也。

〔附〕當處は、防人の居る處、(附近は、附近、)營種は、耕作の如し、牛力は、牛の功、則ち牛の手間といふ如し、因に、延喜主稅式、正稅諸條の本に、凡そ筑前、筑後、肥前、肥後、豐前、豐後等の國は、毎年穀貳千石を對馬の島に運送し、以て局司及び防人等の糧に充て、其部領の糧、船賃、挾抄(せうしやう、)水手、の功糧は、並びに正稅を用ふ、

第六十三條

防人休日條

凡防人在防、十日放一日休假。病者皆給醫藥、遣火内一人、專令將養。

ナキモリ、防にありては、十日に一日休暇を致させ、患者には醫藥を給與すべし、但し五人の内一人を附して、専ら看護に従事せしめよと也、

〔附〕○火内、一火は五人にして其内ち一人と云ふなり、本篇第十二條、賦役令第廿六條參看すべし、○將養は、看護の如くなるべし、

第六十四條

外人出入護衛條

凡蕃使出入、傳送囚徒及軍物、須人防援者、皆量差所在兵士遞送。

外國使臣の出入、又た囚徒及び軍用物品の運搬、或は人の防衛護衛をする等、皆夫々料附し所在の兵士を遣して、更送に送らしめよと也、

第六十五條

人民城内住居條

凡緣東邊北邊西邊諸郡人居、皆於城堡内安置。其營田之所、唯置莊舍、至農時、堪營作者、出就莊田、收歛訖、勒還。其城堡崩頽者、役當處居戶、隨閑修理。

東や北や西の邊鄙なる各郡の人家は、皆其所の域内に居住させよ、而して耕作する田園の場所

大寶令新解 第五卷 第十七條 軍防令 五二九

には、唯農業用の作小屋的の屋舎を置け、農作時に至りて、身體強壯の者は皆城外に出し作小屋に宿泊して耕作させよ、併し老人と小兒は城内に置きて留守居をさせ、秋至り、收穫終了せば、點檢して城内に還らしめよ、若し城保崩損等致せば、城内居家の人共を可成同時に使役して修理せよと也、

附 ○東邊は、筑前の國遠賀郡、岡の津より以北を指し、○北邊は、同國、宗像郡、崎の岬より糟谷郡灘の濱を云ふ、○西邊は、那珂郡より早良郡、志摩郡、怡土郡に至る迄を云ふ、此海邊には、凡て堡壘を築き、其中に人居を禁絶せよと也、と栗原柳菴の軍防令講義卷之八に云へり、

一保は、土を高くし以て堡壘を作りて賊を防ぐなり、守固の城に非ず、故に人民を使ふて修理する也、前の五十三條の城陷崩損と云へるは、守固の城なるを以て、兵士を役して修理するなり、彼と此とは同じからざるを以て、兩條を立たるなり、

保は、保也、保は特也守也、又た小城を保と云ふ、コ、は小城の意也、○營田は、作田の如し、營はツクリ又はイトナムと訓す、一莊舍は、田舎にして、田のイホリ也、○莊田は、團聖田と云ふ如し、莊はクサカサシナリの訓みあるを以て草切田の意義あり、鎌倉時代以來の莊園則ち、豪族の私有地もコ、に基因すとも愚考す、**收歛**は、ヲサム收ムにして收獲と云ふ如し、○勅は

音ブックにてシメスの訓あり、考試の意を含めり、

第六十六條

置烽條

凡置烽、皆相去四十里、若有山崗隔絕、須遂便安置者、但使得相照見、不必要限四十里、

本條より以下最終の七十六條まで、合計一十一條は、會圖に用ふる、トゾ火、とノロシに係る介條也、

諸國各地に、烽火の地所を設置する距離は、今の六、七里を以て通則とす、若し其間に山岳等重疊しありて、隔絶甚しき處は、便宜地處を探みて設けよ、但し照見させねばならぬ故に、必ずしも七里とは限らぬと也、

附 ○烽は、敷努切、音フ、又た戸東切、音洪、義同じ、トゾ火、ノロシの訓あり、史記の司馬相如傳の注に案隱に曰く、纂要に云く、烽は敵を見る時は舉ぐ、とあり、和漢三才圖會に

ある圖に本介條の烽火に符合せざれば其、其大體を想像知得する參考として可ならむ、

日本紀第七卷、天智天皇の三年（壬子三十四年）、其歲對馬、壹岐島、筑紫國等に、サキモリと烽を置く、

續日本紀に云く、和銅四年正月壬辰、河内國高安の峰を燒して、始めて高見の峰、及び大和國
作良の峰を置きて、以て平城に通すと也、又た出雲風土記に、馬見峰あり、烽火の事に就ては
徂徠の餘義委しきを以て諸令備考より左に轉載せん、

唐朝の法には、邊塞にては三十里(今の五里)に一樣あり、嶺萬峰の所に立つべし、若し山岡所經
して、地形便ならざるには、里數に拘はらず、兎角段々につきて、將の在所まで注進とする爲
也、邊塞にて烽火の周圍に城壁を築くとして城牆の如くする也、是を主る役人、烽帥一人、副帥
一人、あまたの烽を主る、一烽に烽子六人宛、内五人は時かほりに遠見する也、邊塞近き所は
弓弩を渡し置也、副帥は時々所々の烽場を巡回して吟味する也、烽子は二年交代也、合戰の時
節は守護の兵五人宛加はる也、烽の仕形、一所に土筒四ツ、其間に火發四ツ、煙の上に炬燵とて
炬を立つ材を立つる、四つの間、十五歩ヅ、也、山險く地狹ければ、ソレより内にもする也、
只四つの差別分明に見ゆるやうにする也、晝は煙を立て、夜は火を立るゆへ土筒は煙を立る爲
め、炬燵は火を立る爲也、土筒は高さ一丈五尺半より、下はふとる一丈二尺、上はと細くし、
外も内も泥にて塗り、煙の脱けぬやうにする也、上に瓦盆をかぶせ置き、煙を立てる時は取り、
煙を立てるとき時は瓦盆を竝にする也、下に烏煙壺とて、風呂のやうなるものを埒へ置く、其
口は地面より三尺上に、堅横壹尺五寸ヅ、あけ、蓋をして閉くやうにする、此烏煙壺は、木を

骨にして厚く土にて塗るべし、坎、烽筒の外まはりには、堀を掘るべし、烽煙の具は、木の枝、
わらよもぎの屬、草の節などを纏へ、(環套)環套を加ふ、右の品々は皆秋前に采りて貯へ置く其まわ
りにも壘をはり、野火つかぬやうにする也、烽如は、長さ八尺、但し脈の上五尺也、二尺まわ
りに束ねたる草の上を、わらにて巻て、まわりに肥木を立てて、如脈に纏り付る、此如を蓋ふ
所には上に屋根をし、下に架をして、雨濕漏のなきやうにする也、風爐の内には、常に羊裘を
置て火を持つべし、坎、東を受ける繼ぎノロシは土筒の口チを西へ向く、西をうくるは東へ向く、南
北も此通り也、平生無事の時は一時ヅ、立て、事ある時は、一日一夜立る也、敵五百人に満たさ
る時は、一筒一炬、攻め入らんとするならば二筒二炬、五百以上三千人に滿ざる時も同じ、五
百以上千騎に満たず其、攻め入らんとする時は、三筒三炬、三千騎以上も同じ、萬人以上は四
筒四炬也、一筒一炬は州縣まで續ぐべし、二筒より上は、京都まで續ぐ也、敵の來るを告ぐる
は、三筒三炬とて、三度立てて三度けすべし、敵退く時は、兩廂兩邊是れを平安烽と云也、
岡は、岡に同じ、高き處也、
春日野の、とふ火の野寺、出て見よ
いふ幾日ありて、若菜續茶舞

第六十七條 放烽區別條

大寶令新解 第五卷 第十七篇 軍防令

凡烽、晝夜分時候望。若須放烽者、晝放烟、夜放火、其烟盡一刻、火盡一炬、前烽不應者、則差脚力、往告前烽、問知失候所由、速申所在官司。

烽は、晝夜一定の時を定めて觀望せよ、晝は烟を放ち、夜は火を放ち、烟は一刻に盡し、火は一炬に盡せ、前烽若し應火せざれば、即時飛脚を遣して前烽に告げて應火のなかりし理由を尋問し、速に所在則ち應火せざりし烽所情の地方官に申うせ。

附註 ○候、はウカバツ也、○刻は、漏刻にて、今云ふ時計也、但し昔の時計は水の滴下を以てせし故に漏刻と云ふ、月令廣義に晝夜百刻とあるに據れば、一刻は現今の約十五分餘に相當す、炬は、束ねたる薪にして、今云ふ松明也、第七十二條に解す、○脚力は、今云ふ飛脚則ち脚夫也、○所在官司は、前烽を支配し居る國司則ち地方官也。

第六十八條

賊徒來寇條

凡有賊入境、應須放烽者、其賊衆多少、烽數節級、並依別式。

賊徒國境に入り來ば、其賊徒の人數の多寡によりて、烽數の節級は別式に依れと也、別式今詳かならざれ共、前六十六條に徂徠の鈴録を抄出せし末文の如き事と想察して可ならむ歟、延喜式廿八卷兵部式に云く、凡て太宰の部轄する所の國、放烽し明かに使船と認定せば、客主を問はず、舉烽一炬、若し賊と知らば、兩炬を放て、船三百艘以上ならば、三炬を放て、とある。

第六十九條

烽長規程條

凡烽、置長一人、檢校三烽以下、唯不得越境、國司、簡所部人家口重大塘檢校者、宛、若無者、通用散位勳位、分番上下、三年一替、交替之日、令教新人通解、然後相代、其烽須修理、皆役烽子、自非公事、不得輒離所守。

烽所には、烽長二人を置く、但し一國一烽ならば二人であるから、一烽地あるも四人と云ふ譯には非ざる也、長は三烽所以下を檢閲巡視し、但し所轄の國境を越る事ならぬ、烽長を採用するに、地方官は管内に於て、一家内の戸多く家宅大なる者にして巡視に堪ゆる者を簡擇して宛てよ、若し適任者なき時は、外六位、勳七等以下の散位、勳位の人を流用せよ、勳務は交替

にして、三年更代とす、交替の日は、新任の人に解し馬きやうに教へて後で代れよ、而して烽の修理すべきは、皆烽子を役せよ、公事に非ずは、容易に守る所を離るゝ事はならぬと也、

第七十條

烽子規程條

凡烽、各配烽子四人。若無丁處、通取次丁、以近及遠、均分配番、以次上下。

烽所には烽子四人宛置け、若し一人前の男子なければ、次丁を流用せよ、但し成るべくは附近の者を採用せよ、
交替は、勉めて二人宛に分につべし、而して、次丁採用の場合は、他の正丁採用の如く、半人前故に八人と云ふ事は、こゝではならぬと云ふ令條也、

第七十一條

火炬距離條

凡置烽之處、火炬各相去二十五步、如有山嶮地狹、不可得充、二十五步之處、但得應照分明、不須要限相去遠近、
烽を置く所は、火炬相互の距離は、二十五歩とす、若し山嶮にして、地狹く、酌量の距離なくは、或べく分明に應火の對照方法を採れよ、必しも成規の距離とは限らぬと也、

○廿五歩は、廿五間なるべし、

第七十二條

火炬材料條

凡火炬、乾草作心、草上用乾草節縛、縛處周廻、挿肥松明、並所須、貯十具以上、於舍下作架積着、不得雨濕。

火炬は、乾燥せる草を以て心を作り、其上乾したる草を以て節結びとし、結び縛りし處の周圍に肥大なる松脂の節多き松明を挿入し、而して貯藏拾具以上ならば、屋舎の下に棚を作りて積み置き、必ず濕潤する事はならぬと也、

第七十三條

狼烟原料貯藏條

凡放烟貯備者、須收艾葉生柴等、相和放烟。其貯葉柴等處、勿令浪人放火、及野火延燒、
ノロシを貯藏し、又は打ち上ぐる爲めの設備としては、ヨモギ、わら、ナマシバ、等を採取し相和して烟を放つべし、而して其原料を貯藏しある附近では、浪りに人に野火遊びをさして延焼せしむる事を禁ぜよと也、

【字解】 艾は、蓬にてヨモギ也、 葉は草の嫩名也、必ずしも稻の稈のみに非ず、生柴は、

人資令新解

第五卷

第七十七條

消防令

五二七

凡應火筒、若向東、應筒口西開、若向西、應筒口東開、南北准此。

第七十四條

應火方向條

ナマシバと訓みて、ナマの灌木、及び樹木の小枝等の總稱也、

應火の筒は、若し東向きならば、應筒の口が西向きに開くべし、若し火に應ずる筒西向きなりば應筒口東に開け、南北も亦此に准せよ。(三十二條參照)

第七十五條

烽烟通報條

凡白日放烟、夜放火、先須看筒裏、至實不錯、然後相應、若白日天陰霧起、望烟不見、則馳脚力、遞告前烽、霧開之處、依式放烟、其置烽之所、遠烽二里、不得浪放烟火。

白晝の放烟、夜間の放火は、先づ筒の裏を見て烟又火の錯違せざるに至りて後に應火せよ、若し白日、天陰^{テンイン}、霧^キ起^キ、望^{ノゾミ}烟^{エン}不^レ見^ス、則^レ馳^{ハシ}脚^カ力^{リキ}、遞^{ツギ}告^ツ前^{マエ}烽^{トウ}、霧^{キリ}開^{ケル}之處、依^{ヨリ}式^{シキ}放^{ハク}烟^{エン}、其^{ソノ}置^キ烽^{トウ}之^ノ所^{トコロ}、遠^{トウ}烽^{トウ}二^ニ里^リ、不^レ得^ス浪^{ナラ}放^{ハク}火^カ、烟^{エン}火^カ。

と、蓋し置烽の場所は、其周圍四方、約十二町以内の所にて、環りに烟火をせしむる事はならぬと也、
〔附〕烟火は、今所謂バナヒ(花火)に非ず、ノロシと火の二つ也、

第七十六條

放烽參差條

凡放烽有參差者、元放之處、失候之狀、速告所在國司、勘當知實、發驛奏聞。

放烽の際、無^レ懈^レ、則^レち多^ク放烽すべきに少し放烽したり、又た誤りて火事、野火等に依りて類焼^ル、
又他等に漏りたる時は、直ちに、所屬の地方官へ附け出させ、然れに依り官に於て、隨^レ處^ニ上^ニ其實^ヲを調査し、驛^ヲを發して奉聞に達せよと云ふ也、

〔附〕參差は、シシと音讀する也、マシヤ違フの訓あり、毛詩關雎の篇に、參差たる荇菜左右に流るとあるも、則ちフシロイ(不齊)と云ふ如し、

發驛は、職員令太政官少納言の下、及び公式令四十條より四十九條に詳述せり、飛驒式に公式令中にあり、

大寶令新解 第六卷

第十八篇 儀制令 凡貳拾陸條

本篇は、朝儀、法制の令にして、第十五條迄は朝儀に係り、第十六條より二十六條迄凡十一條は、法制に関する令條とす。

冠制 儀は、音宜、容也、法也、度也、威儀、容儀の儀にして、義解には朝義とせり、**制**は、音製、説文に裁也、正也、御也、檢也、造也、禁制也、前漢高帝紀に師古の注に天子の言を制書と曰ふ、制度の命たるを謂ふ、又た禮記の曲禮に、士は制に死す、注に、制は君命を謂ふ、士たるもの命を受けて死を致す也、然れ其義解にては、法制也とあり、今普通に稱する法制は廣く、義解は狭く解せりの差ある如し、儀解に唐令に云く、儀或は制は、制約非違也、

第一條

尊號條

天子。祭祀所稱。天皇。詔書所稱。皇帝。華夷所稱。陛下。上表所稱。太上天皇。讓位帝所稱。乘輿。服御所稱。車駕。行幸所稱。

本條は、天皇陛下及び父天皇等の諸方面に對して、其尊號を稱する區別を示したる令條也、然處

の時神祇に告ぐるゝに天子と。詔書には天子。内閣及び外國に對しては皇帝。臣民より上表には

陛下と稱し。御讓位の天子を太上天子。御乘物等を乘輿と稱し。行幸には車駕と稱し奉れども。

〔名〕 ○天子、皇御孫命、須明樂美御德、は異稱同義也、禮記曲禮に、天下に君たるを天子と

曰ふ、又た天を父とし、地を母とす、又た天の爲に命せられ、下民を子養す、文苑英華四百七

十一卷に異稱日本傳に主明樂美御德とあり、天皇は統る尊の義にして、春秋左氏傳に、諸夏

に施す天王と稱し、皇帝は、蔡邕獨斷に、漢天子の正號を皇帝と曰ふ、自稱して朕と曰ふ、

臣民之を稱して陛下と曰ふ、唐六典に凡そ華夷の通稱、天子を皇帝と云ふ、至符も亦同じ、

華夷、華は自國にして、夷は外國を云ふ、陛下の陛下は説文に高きに升る階也、玉階に天子の

階也、とキクハシと訓す、蔡邕獨斷に、天子必ず近臣あり、兵を執りて階側、に立ちて以て不虞

を戒じ、群臣天子と言ふ、敢て指斥せず、故に陛下に在者を呼んで之に告ぐ、卑に因て尊に達

するの意也、太上天皇、太上は極尊の稱、皇は君也、天子の父故に號して皇と曰ふ、國を治む

るに與からず故に帝と言ざる也と師古の説也、後世略して上皇と稱す、○乘輿、凡て物、王者

に御するを皆乘輿の御物と云ふ、假令は乘輿の御馬、乘輿の御食、乘輿の御書等の類也、以上

諸多の尊號に就ては、公式令の第卅七、卅八條參照すべし、

第二條

行在所條

凡赴車駕所、曰詣行在所

風聲の所に赴くを、アンザイ所に詣るといへ、

〔名〕 ○行在は、天皇行幸、巡幸の途中、駐蹕、御休泊ある所を行在所と稱ふ、アンは古音に

て今唐音にてはハシと發音す、行宮、行燈、行脚、行火(臥棚香爐)に皆アンと發音せり、

第三條

皇后條

凡皇后皇太子以下、率土之内、於天皇太上天皇上表、同

稱臣妾名、對揚稱名。皇后皇太子、於太皇太后皇太后、率

土之内、於三后皇太子上啓、稱殿下、自稱皆臣妾。對揚稱名。

皇后、皇太子以下、百官等より、大内、太上天皇に上表する時には、臣某、妾某と稱せよ、併

し御面前にて申す時には、臣某、或は妾某と申さずして、單に某と自身の名而已を稱せよ、又

た皇后、皇太子より、太皇太后、(皇后の祖母に當る)皇太后(皇后の母に當る)、に對せらるゝと、又

た臣下より三后、皇太子に上啓する時には、殿下と稱せよ、自稱の時は臣、妾と云へ、對面し

て言ふ時には、名を稱べよと也。

〔名〕 ○皇后は、キザキ共稱す、君幸の義也といへり、皇は天也、后は君也、天に皇天と曰ひ、

凡車駕巡幸、及還、百官五位以上辭迎、留守者不在辭迎之限。若不經宿者、不用此令。

第四條

車駕巡幸條

地に后土と曰ふ、故に天子の嫡妻則ち妃后を以て稱呼と爲す、(奉土は、詩經小雅北山篇に奉土之流は主臣に非る所とありて、土地を奉ゆると書くを以て、則ち各國とか全土とか云ふ如し、太皇太后等は、下の廿一篇、公式令に解せん、然れ共、太皇太后、皇太后より天皇、太上天皇に對し、及び太皇太后、皇太后、皇太子、等、各様の間柄に於て、相互に稱へらるゝの辭は、合條に見へざれば爰に新解する能はず、二后は、太皇太后、皇太后、皇后也、

天皇巡幸の時、及び還御の時には、百官の内、五位以上の人は、奉送奉迎せよ、但し留守居の官員は奉送迎の限に非ずと也、若し御一泊なき巡幸には本令を用ゆるの限に在らずと云ふ也、
〔字解〕○辭迎、辭は令抄に名請とあり、名朝を係り官に差出し、係りに於て奉送官人の名請を圖製して、上殿に供し、後講見を賜はるならむか、義解に奉見とあるは、池頭を拜し奉れと云ふ意ならび、迎は還御の時の奉見也、○經宿は、御宿泊を云ふ、

第五條

文武官條

凡文武官初位以上、毎朔日朝、各注當司前月公文、五位以上、送著朝庭案上、則大綱言進奏、若逢雨失容、及泥潦、能停、辨官取公文惣納中務省。

文武の官人初位以上の人は、毎月一日には、各自擔任の公文を携帯して朝庭に參奏すべし、五位以上の官人は、朝庭の案上に置き、然して大綱言に於てソレを進奏せよ、若し雨天にて容儀整へ難きか、又た道路泥濘、水溜りある杯の時には停止して順延すべし、辨官其公文を取りて、中務省に納めよ、

〔字解〕○毎朔、は毎月の一曰、支那にては、古昔毎朔廟を祭れり、我國にては昔し毎朔に、前月の故事の公文を天子上覽あるなり之をヤハリ告朔と云ふ、日本紀天武帝五年九月内寅朔、雨ふり告朔せず云々告朔の字初めて此に見はる、祝告を只コクと而已訓むは秘傳なりと年中行事歌合に云べり、則ち名目抄に、祝告朔の祝は訓ますとせり、正月だけは二日か四日に行はる、除の月には其雨泥濘なざる限は執行さるゝと也、(當役所、泥潦は、道路泥濘水溜、

第六條

三位以上條

凡文武官三位以上、假使者、去皆奉辭、還皆奉見、其五位

以上、奉勅差使者、辭見示如之、則外官三位以上、以理去任、至京者亦奉見

現任文武官の内、三位以上の人で、休暇を賜はりたり、又た何處へかお使に出行とがする時は、皆お別れを奏し奉れ、還りたる時も亦前（前）の如く龍顏を拜し奉れと也、而して五位以上に勅使として行く時も亦暫時お暇に天顔を拜して往けと也、又た外官中に三位以上の人、止むを得ずして轉任等する時に、京都に至らば、亦天顔を拜せよと也、

【字義】

假使、假は休暇也、使は使者也、辭見は、お暇のヲ挨拶に參内して謁見を玉はる事

○奉見も亦還りたる時、參内謁見を賜ふを云ふ、前條參考、

第七條

皇帝不視事條

凡大陽虧、有司預奏、皇帝不視事、百官各守本司、不理務過時之罷、皇帝一等以上親、及外祖父母、右大臣以上、若散一位喪、皇帝不視事三日、國忌日、謂先皇崩日、依別式合庶務者、二等親、百官三位以上喪、皇帝皆不視事一日、

日使は、陰陽寮より前以て奏上し置け、日使には天皇政務をみそなはさず、百官は各自の役所に事務を取らずに守り居れ、日使相濟まば家に歸れと也、天皇が天皇の二等親以上の親族、及ぶ外祖父母、右大臣以上、若くは非役の一位の八等の喪には、天皇三日間、政務をみそなはさず、又た國忌則ち先帝崩御の日、或は三等親の御方、或は百官の内、三位以上の喪には廢務な

さる事一日と云ふ也、

【字義】

○大陽は、日、一有司は、陰陽寮、一罷は、集解に釋云く、廣雅に歸也、則ち役所を止

めて家に歸るを云也、五等親の事は此条の廿五條にあり、喪服の事は、假令第三條、喪葬令第八條等に解す、○國忌は、集解に、云云く張云く、天子七代の祖の崩御日を國忌と爲すは律に別式あるべし、又た釋云ふ、國忌日とは、七廟の忌日を謂ふ也と、延喜式廿一卷、治部式に、天智帝外五帝と三皇太后、合計九名を記せり、併し大寶養老等の時代は右延喜の如くならざる事、續紀等にて何はる、○廢務は、然秘抄の下に、廢朝は諸司の政恒の如し、天子一人朝政に臨まず、廢務は諸司政せずとあり、拾芥抄に、廢朝、廢務の事、中略、廢務は一日有はる可き也、數日に及ばざるは、是れ萬機の政、數日棄て置かるべからざる故云々、仍て一日を限り、廢朝は諸役所の政事恒の如し、但し天子朝に臨み玉はす云々、續日本紀に云く、大寶

二年十二月甲午の、勅に曰く、九月九日、十二月三日、先帝の忌日也、諸役所是日に當りて、

宜しく禮務を爲すべし焉、本文本注にある別式は、今詳ならす。

第八條

祥瑞條

凡祥瑞應見、若麟鳳龜龍之類、依圖書合大瑞者、隨則表奏、其表唯顯瑞物色曰、及出處所、不得苟陳虛餽、其事浮詞上瑞以下、並申所司、元日以聞、其鳥獸之類、有生獲者、仍遂其本性、放之山野。餘皆送治部。若有不可獲、及木連理之類、不須送者、所在官司、案驗非虛、具畫圖上。其須賞者、臨時聽勅。

凡て祥瑞が顯るれば、其表隨處に於て、其祥瑞が麟、鳳、龜、龍の類の如き大瑞に一致せば、時期を矯はず奏上せよ、併し奏上の手續きは、先づ其瑞の色彩、名稱、出現地等を錄して、獵りに虚飾の彩色、誇大浮花の詞を使用すべからず、而して上瑞以下は官の外に治部省へ申し送れ治部は當年分の中、下瑞等一と纏めにして元日に奏聞に達せよ、而して鳥獸の如き生きたる者とは、若し生捕にしたならば、其生物の性質に隨つて、山林原野、河海湖沼に放て、又た飼

養し馴れたる如きものは時候を見計ひて放て、其餘は治部省に送れとも也、但し雲の如き捕獲すべからざるもの、或は連理の樹木の如きものは送る事能はざるを以て、其所の役人検査して虚偽ならざれば、具さに繪圖に認めて奉れ、賞すべきものは、臨時の勅を聽けとも云ふ也、

附註 祥瑞は、大寶令より二百年計りも餘なる延喜式の廿一卷治部式を以て想像首肯するすれば、大瑞五十四計り、上瑞三十六、中瑞三十、下瑞十四目程あり、唐書の百官志にも大瑞六十四、上瑞三十二、下瑞十四とあり、其大の内にては、慶雲、麒麟、鳳凰、神龍、神馬、天鹿、夜光珠、山祿萬歲、金中、玉馬、醴泉、玉樹、等、上瑞にては、白狼、赤狼、赤兔、九尾狐、白狐、玄狐、白鹿、赤鹿、玄鶴、甘泉等、中瑞にては、白鳩、白鳥、白雉、蒼鳥、五色雁、赤豹、白兔等、下瑞にては、嘉禾、芝草、人參生、竹實滿、神雀、白鵲等の如し、以聞は、奏し上せると云ふ如し、○遂は、釋也、順也、○木連理は、對生の枝が其モクム、葉、梢等寸毫の差異なき如き物を云ふ、白氏長慶集の長恨歌に、在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝とあり

第九條

元白條

凡元日、不得拜親王以下、唯親戚、及家令以下、不在禁限

若非元日有應致敬者、四位拜一位、五位拜三位、六位拜四位、七位拜五位、以下任隨私禮、

本條より以下十一條迄は、禮禮を悉せし令條也、

元日には、親王以下に參賀する事なり、但し其家の別當とか家介けさけとか如きは、此限に非ずとす、若し元日でなくとも、萬止むを得ざる場合ありて參禮すべきは、四位の人ならば一位の人に、五位は三位に、六位は四位に、七位は五位に參拜せよ、併し元日の外に必ず拜せよと云ふに非ず、餘は任意私禮に隨へど假令ば、卑幼の五位以上は、皆長の六位以下の人にも拜伏すべき類也、

附 親戚、親は父方の親族、戚は母方の親族也、致敬、致は音讀、説文に送詣也、參拜、參禮、訪問拜禮の如し、○任はて、にも訓みて任意、或は隨意也、

日本紀天武天皇八年正月戊子の詔に曰く、凡て正月の節に當り、諸王、諸臣、及び百寮は、兄姉以上の近親及び氏の長を除く外は拜する莫れ、其諸王は母と雖も王姓に非ざる者には拜する莫れ、凡て諸臣も亦た母を拜する莫れ、正月の節に非ずと雖、復此に准ず、若し犯す者有らば專に隨ふて之を罪す。

續日本紀に云く、文武天皇元年閏十二月庚申、正月拜賀の禮を往來し行ふ事を禁ず、如し違犯者あらば、淨御原朝廷の制に依りて決罰す、但し祖、兄及び氏の^を上を拜するを聽す、同齊長と五年春正月戊申朔も亦右に大同小異也、

故事聖略六十九卷、弘仁格式に云々、神龜五年三月二十八日、延喜御正式も亦致敬禮は、右本文を敷衍したる如し、

同書儀式に云く、凡て御所及び中宮、東宮には稽首、餘は皆な跪拜、但し頭の高下は、人の貴賤に隨ふ、とあり、

第十條

途中下馬禮條

凡在路相遇者、二位以下遇親王、皆下馬、以外准拜禮、其不下者、皆歛馬側立、雖應下者、陪從不下、

本條及び次條は、途中下馬禮の法制也、

途中にて、三位以下の人、品の有無に關せず、親王に遇へば、皆下馬せよ、併し無品の親王が有品の親王に遇へば下馬するに及ばぬ、餘は前九條に准ず、又た下馬せざる時は、馬を駐め、歛めて路傍に佇立せよ、併しコレは、多くは二位以上の人が親王に遇ふた時か、三位の人が二位に逢

ふた時の場合とす、又た六位の人にて、地方へ公用に出た時に、其府縣内にて四位以上の地方官に遭遇すとも下馬するに及ばぬ、又た地方官が管内にて、公使とか勅使とかに遭遇せば同位以下にても下馬せよ、而して百姓が自國でなき國にて、習使等に遇へば下馬するに及ばぬ、然れ共自國なれば下馬せよ、又た位階から云へば、下馬せねばならぬ者にても、車駕の陪從等の者は下馬に及ばぬと、三后則ち太皇太后、皇太后、皇后、皇太子の陪從も亦同斷との義也、

第十一條

遇本國司條

凡郡司遇本國司者、皆下馬、唯五位、非同位以上者不下
若官人就本國見者、同位卽下 若應致敬者、並准下馬禮

郡吏は、本國內外を問はず、敬管の地方官に遇ひは皆下馬せよ、但し五位の者は、同位階以上に非ざれば下馬するに及ばぬ、併し初位若くは、無位の國廳の史生にても、五位の郡長等に逢へても下馬するに及ばぬ、若し在京の官人主典以上の人、地方に行きて其國の地方官に遇はば地方官は同位と雖も下馬せよ、又た致敬すべくは前條の下馬禮に准せよと也、

諸令備考に、續日本紀に云く、神龜五年三月二十六日の勅に、諸國の郡司五位以上にして、當

國の主典以上の者に逢はば、貴賤を問はず、皆悉く下馬せよ、云々、
十訓抄の上に、

丹後守保昌、任國に下向の時、與謝の山にて白髪の武士一騎に逢たりけり、木の下に打入りて笠を傾けて立たりけるを、國守の邸等云ふ、老翁何んぞ下馬せざるや奇怪なりと、答め下りすべしと云ふ、爰に國守の云ふには、一騎當千の馬の立やうなり、只者に非ず、やむべからず、と制して打過る間三町ばかり下りて、太夫右衛門尉政綱、數多の從類を引して來りしに遇ひたり、取なはして、國守に會釋し、政綱云ふ、さきに一人の老翁に逢來りて候ひつらん、あれは、惣父平五太夫にて候、堅固の田舎人にて仔細を知らず、定めて無禮を顯はし候つらんと云ひけり、政綱過後、國守さればこそ、政綱にて有けりと云けり、此黨は賴信、保昌、維衡、政綱とて、世に勝れたる四人の武士なり、兩虎戰ふ時は共に死せすと云事なし、保昌彼が振舞を見知て更にあなづらず、邸等をいさめて無爲なりけり、いみじき高名なり、

第十二條

在廳會釋條

凡在廳座上、見親王及太政大臣、下座。左右大臣、當司長
官、則動坐、以外不動

一竿。

本條は、大納言以上太政大臣の儀式用の笏の法制にて、平時任意に使用はならぬ、先づ笏を用ふる時に而已使用せよと也、

〔考〕笏は、儀式用時の笏也、笏解に平頭の戟とあり、威儀に用ふ故に笏戈と曰ふ、

第十四條

版位條

凡版位、皇太子以下、各方七寸、厚五寸、題云、其品位、非漆字。

本條は、座席の標札の制也、

皇太子以下の票は、各七寸四方にして厚五寸、黒漆を以て各自の品位を記せし也、纂解に或は燒き字に作りたる事もある如くに記せり、

〔考〕版位は、へムと訓みベンキと訓まぬ讀例なりと名目抄の雜物篇に云へり、延喜の木工

格式には方八寸版位七枚元日朝拜料とあり、天長十年清原の夏野等が料簡收拾したる、弘仁内

裡式の上に、(前略)中務は、皇太子の版位を中階の南拾次に置く、又た西の方二丈を去る處に、

奉賀の版位を置く、奉賀の位より東へ、丈を去る處に、皇太子の諸者版位を置くといふ支那に

凡儀戈者、太政大臣、四竿、左右大臣、各二竿、大納言、

第十三條

儀戈條

延喜式の第十八卷に稍詳なれ共、煩冗なるを以て省きぬ、

式部式に、朝堂の座に在りて親王及び太政大臣に見えは皆燈析して立てとあり、此座次の事は

政事要略六十九卷に本令條を出せり、

朝臣總、勅を奉じて、從五位上行式部少輔兼文章博士加賀權守菅原道真を喚云々、

續日本紀天平寶字五年二月丙辰朔の勅あり、三代實錄元慶八年五月二十九日、左大臣正二位源

日本紀持統天皇四年七月甲申の詔あり、

史實の例としては、

司長官は、主計寮の頭も、民部省の卿も共に長官の名を冒すなり、

〔考〕禮は、凡て政事を扱ふ役所にして、朝堂院を始め、諸官省の官司も亦然かいへり、(常

座席を立に及ばぬと也、

見えは座を立て、又た太政大臣が親王に見ゆるとか、親王より太政大臣に見ゆるとかは、共に

役所の長官には座を動け、其餘は座を動くに及ばぬ、而して左右大臣が、親王及び太政大臣に

朝堂の席上に在りて、親王及び太政大臣に見えは、座を離れて會釋せよ、左右大臣及び其役所

ても、通典百入卷禮の六十八雜制部に、版位の制を載す、其注に、皇帝方尺二寸、厚三寸、

て皇帝の位とあり云々、

第十五條

蓋傘條

凡蓋、皇太子、紫表、蘇方裏、頂及四角、覆錦垂總、親王、紫大纈、一位、深緑、三位以上、紺、四位、纈、四品以上、及一位、頂角、覆錦垂總、二品以下、覆錦、唯大納言以上垂總。此宋

裏總用同色

本條は、皇太子より大納言までのキスカサの合條也、

皇太子のキスカサは、表は紫にして、裏はスベウなり、イタベキと四隅には錦をカゼて錦のフサを垂れよ、親王は、紫の大形のシボリ、一位の人は、濃き緑り、三位以上は紺色、四位は淺黃色、四品以上及び一位までは、やはり頂と隅とに錦を覆ひて錦のフサを垂れ、二位以下はフサを下げられぬ、但し大納言以上はフサを替げよ、併しカサの裏は朱色にしてフサも亦朱色を用へよと也、

〔考〕一蓋は、紺の傘也、延喜本神宮式に同宮の發束のキスカサを載せて、表用の薄紫の縫三

丈、裏は緋の綾三支云々、出口延經の頭書に、長旛官府に云く、方五尺七寸、柄の長さ一丈三尺、骨八本長さ各四尺、云々とあり懸持するに今の世にも神社祭禮の節などに神官に長柄の傘をさし掛け行くは此遺風ならむ以て想像すべし、こ色彩と染料の事は、次の衣服令に新解す、○纈は、エハタにして俗に云イハタ帯のイハタに非ず、古來先輩の諸説紛々たり、然れ共谷川の案に、結構なり、又た卷き染とも云ふ、今云ふ絞りにして、定れる色と形ちはあるべからず、と此説最も穩當なるべし、尙ほ字義等の事は、次篇衣服令に解す、

第十六條

父母重病條

凡祖父母父母患重、及在同閭者、不得婚嫁、若祖父母父母、有命令成禮、不得宴會

祖父母、父母が大病又た囚獄等に在監し居るとかの間は婚姻は出来ぬ、若し祖父母、父母の申し付けにて婚姻するも、表向きに宴會はならぬと也、

〔考〕○患重は、大病又は重病と云ふ如し、○同閭は、今の監獄にして、昔の牢屋なり、

第十七條

五行器製造條

凡國郡、皆造五行器、有事卽用之、並用官物

大寶令新解

第六卷

第十八篇

條制各

五四七

諸國諸郡には、官費を以て五行の器具を製造し置き、事ある時に使用せよ也、
〔字解〕五行器は、木、火、土、金、水に因みて總稱せし名也、即ち漆の類を土用に、火鈎
を火熟用に、斧やノミの類を木工用に、鉗や金槌を金工用に、盆や桶の類を水の用にと云ふ類
なり。

第十八條 元日國司條

凡元日、國司皆率僚屬郡司等、向廳朝拜、訖、長官受賀、
設宴者聽、其食以當處官物及正倉宛、所須多少從別式、

本條は地方官の新年進拜及び宴會の制定也、元日には、地方長官は、風俗、及び郡長郡吏等を
率ひて、京都の朝堂則ち大政廳の方に向つて朝拜則ち進拜せよ、進拜すれば、長官は年賀を受
けよ、アトで新年宴會を開催する事を聽せ、其會費は地方税の如き國々の郡司の内か、又は國
税にて宛てよ、使途の多少は別式によれと也、別式今詳ならず、
〔字解〕國司は、地方官にて國守に非ず、長官なくば次官に於て賀を受ける也、正倉は、正
税の事也、

第十九條 春時田祭條

凡春時祭田之日、集郷之老者、一行郷飲酒禮、使人知尊
長養老之道、其酒肴等物、出公廨供、

毎年春朔の田祭には、其郷土の老人を招きて一郷の宴會を開けよ、是は人々をして、尊長、養
老、尚齒の道を心得さする爲である、酒肴等の費用は公費則ち郡費を以てせよと也、
〔字解〕郷飲酒禮には六十の者は坐し、五十の人は立侍するは尊長の所以也、六十の人に三
豆とて今云ふ三菜なり、七十には四菜、八十には五豆、九十には六菜とす、是は養老の意を明
す所以也、給仕は其郷土の少壯年者にして、國郡の官吏は唯其監視をするのみ也、公廨は、
郡稻國稻を指す、

第二十條 遣重服條

凡遣重服、有奪情從職、並終服、不弔、不賀、不預宴

例之ば、父と母の喪服の重なりたる時に、強て哀傷の情、解却して職に從事する事あらば、服の
終るまでは、吉事に賀せず、兇事に弔せず、又た公然の宴會にも列席はならぬと也、

第二十一條 凶服不入公門條

凡凶服不入公門、其遺喪被起者、朝參處示依位色、在家

依其服制。

喪中、喪の衣服を着して、宮城門は勿論、奉職役所及び諸役所の正門にも亦入る事はならぬ、然れ共、喪中と雖も拜命等の事にて、止むを得ず参内等をする場合には、位階の衣服を着用せよ、自宅に在りては喪服の定めに従ふべし。

○公門は、宮城門及び諸役所の正門也、○朝参は、参内なり、位色は、當時は衣服の色彩が位階に依りて各區別あるを以ていへしなり、詳細は式篇衣服令を参看すべし。

第二十二條

行路會釋條

凡行路巷術、賤避貴、少避老、輕避重

本條は、道路を往來するに、行違ふ人にヨケル法制也、

大中小何れの道路にても、人に行き逢へば、賤は貴によけ、少壯者は老人によけ、又は身輕の者は重荷を擔ふ者によけ、然れ共本條の精神は、賤は貴に避ける主眼、故に假令老人が重荷を負ふて居るも、眼上の人に遇へば避け、少年重荷を擔ひ居るも老人に避くべしと云ふ也、

○巷術は、里中の小道也、○行路は、道路、

第二十三條

官人莫逆威張條

凡内外官人、有恃其位陰故違憲法者、六位以下、及勳七等以下、宜聽量情決答。若長官無、聽次官應致敬者決、其諸司判官以上、及判事、彈正巡察、内舍人、大學諸博士、文學等不在決答之限。

本條は、莫逆に官員等のカラ威張を警しむる法制也、

中央及地方官、又は非役有位有勳の人にて、自分の位階身分、又は父や祖父等の高位高官等を待みて、虎の威を借る狐的に、暴威暴行を振舞、憲法に違反する者あらば、六位以下、勳七等以下の者にして、多少の枉罪を犯したるもありとも、情狀を酌量して答罪ですましてやれ、併し、徒罪以上ならば、律に照して從減例減するに及ばぬ、若し長官なくば、次官にて裁判せよ、然れ共、諸役所の判官以上、及び刑部省の判事、彈正臺の巡察、宮内の内舍人、大學等の諸博士、親王家の文學等は、答を決するの限に非すと云ふ也、

○位階は、位の階、○憲法は、律令格式と看做すべし、○致敬は、前九條にあり、

第二十四條

帳内資人條

凡帳内資人、雖有陰位、不稱本主者、杖罪以下、本主任決

四位以下、唯得決答。

本條は、親王及び大臣家の家來衆に保も裁判の令條也、

親王及び大臣家の家來則ち令云ふ別當、家令、家扶等の如き人は、父や祖父の庇蔭にて、位階を有すと雖も、何か不都合の事ありて、主人の意に應はざる人にて、枉罪以下に當る者は、主人に於て任意に裁判せよ、但し四位以下は管州の裁決だけよりならぬと云ふ也、

第二十五條

五等親條

凡五等親者、父母、養父母、夫、子、爲一等、祖父母、嫡母、繼母、伯叔父姑、兄弟姉妹、夫之父母、妻妾、姪、孫、子婦、爲二等、曾祖父母、伯叔婦、夫姪、從父兄弟姉妹、異父兄弟姉妹、夫之祖父母、夫之伯叔姑、姪婦、繼父、同居夫前妻妾子、爲三等、高祖父母、從祖祖父母姑、從祖伯叔父姑、夫兄弟姉妹、兄弟妻妾、再從兄弟姉妹、外祖父母、舅、姨、兄弟孫、從父兄弟子、外甥、曾孫、孫婦、妻妾前夫子、爲

四等、妻妾父母、姑子、舅子、姨子、玄孫、外孫、女賀、爲五等。

本條は、親族を五等に階定したる令條也、

一等親の内には、本文の他に養子をも含む、

二等親の内には、子供の妻をも含む、

三等親の内には、妻妾の子をも含む、

○從祖祖父姑は、祖父の兄、弟、姉、妹を云ふ、從祖伯叔父姑は、從祖祖父の子にして則ち父の從父兄弟姉妹なり、○再從兄は、從祖伯叔父の子を云ふ也、○舅は、母の兄弟也、○姨は、母の姉妹を云ふ、

第二十六條

公文條

凡公文應記年者、皆用年號

公文に年を記入せねばならぬ時には、皆年號を記入せよと云ふ也、

大寶令新解 第六卷

第十九篇 衣服令

凡壹拾肆條

上皇太子より、下庶民に至る迄の衣服の制度也、

〔注釋〕 衣は、説文に、上を衣と曰ひ、下を衣と曰ふ、禮記玉藻に、衣は正色、裳は間色、色

は以て外を飾る、裳は以て内を飾る、衣は依也、介抄に白虎通に曰く隠也、裳は隠也文彩の織

物に依りて形體皮膚を隠蔽する也、國八コロヒと稱するは、着物の約言也、(服は、音伏、ッ

ケルと訓む字にして、衣裳に倒稱する也、凡そ身體に服用の物品、冠帽、履舄をも含みあふ事

とす、

本篇には、衣服の地質、色彩、文織等の原料の要領を解するに止めて、右用の次第沿革等は、

有職故實に係る群籍に就て調査を要す。

支那にては、尚書の益稷に、日月星辰、山龍華蟲、火宗彝、藻粉米黼黻、とありて、天子の製

束等の幟を示せり、日、月、星辰の三章をば旌旗の章とし、山、龍、雉、虎の五章を

は衣の章とし、藻と、米と、刀劍、斧鉞の四をば裳の模様とす、我朝にては、古代の天皇は、

大寶令新解

第六卷

第十九篇

衣服令

凡壹拾

鳥

皇太子禮服 禮服冠 黃丹衣 牙笏 白袴 白帶 深紫紗褶 錦襪 烏皮

第一條 皇太子禮服條

同三年閏十二月八日に衣の袖口に袴の寸法制限の布達あり。
彈正式に、貂の皮衣は、參衣以上に着用を equal すべき。

左太史多米朝臣國小
中辨源朝臣 道方 本

長保元年七月二十七日
同二年六月五日、再び同禁制を布達せらる。

本政官符、兼事十一ヶ條の内に男女道俗異服を着する事を禁制せり。
春常奉云々。

故事聖略六十七卷に、衣服の制度を定められたるあり、齊衡三年二月、十六日、左衛門大尉紀
彈正式に云く、袖口の潤さ一尺二寸云々。

六位以下は八寸、女は此に准ず、如、改正せざれば、違勅を以て論せん云々。

同書に、寶龜二年閏三月十九日の勅あり、(前略)其他の袖口の廣さ、五位以上は、八を限とす
故事聖略六十七卷に、弘仁雜格に云く、絶衣匹を以て限と爲云々、神皇正統四年九月四日。

同書寶龜元年九月壬戌の令旨に、絶衣は匹を以て限と爲す云々。

同書天平十二年春正月戊子朔、(前略) 人更に絶袴を着す。

續日本紀、和銅元年八月丙申の制に、自今以後、衣の袖口潤さ八寸以上、八以下云々

史實の例としては、

云へり、

當時着御の袍は、黃檗染と樹藍の二種の色にて、竹、州、瓜、瓜、鼠、鼠等の草であつたと諸書に

五五六

元日其他大禮の時に、皇太子の着御になるは、禮冠則ち玉の冠り。アウツツ染の袍、象牙のシ
ヤク、白き袴、白き帶、深き紫の紗の上袴、錦の足袋、黒皮作りの苜等也。
禮服は、不斷のお召に非ず、こゝは殊に大禮用而しの事也、○黃丹衣、黃丹染は縫
殿寮式にて大體を想像首肯するとすれば、綾一匹に、紅花六十斤八兩(今の、八百九十斤)支子一
斗一升(今の約五升)、酢一斗(今の四升五才)、鉄五升(今の二升二才)、右四品にて染む、兼四圍二圍は今
より、と知として、各田永年の延喜式「事通解」に依りて、一貫二百斤計り也、新二百八十斤、一斗大として今の百八十
大實合漸解 第六卷 第十九篇 衣服合 五五七

十丁)にて製すと云ふ、(衣は、袍を謂ふ、牙笏、彈正式に、五位以上は、牙の笏と白木の笏を通じて用ふと、其構造は、前誦後直として、首は圓く下は方形、六位以下の人は、木にて前誦、後方と云へり、禮記玉藻にては、天子の笏は珠玉、諸侯は象牙、大夫は鯨の鬚々、文飾せし竹、士人は竹、木云々、笏音忽、今シヤクと云ふ、其初の庶民も之を帶せりと、今は一種算車區別の禮飾の如くなれ共、以前はツレは偏忌鐵板にして、君前にて君命等ある時には此れに録して偏忌とせりと云へり、(白袴、音庫、急就篇の注に厭衣也、釋名に跽也、兩股跽別也、ハカマはハカマの義なり、(深紫、紗褶、此紫色の染料として、縫殿寮式に、紫草十五斤、耐三合、灰四斗六升、漸白廿斤とあり、然は襟、裳の二音あり、婦人の裳に似て、袴の上覆なり、禮服中の裳と深紫裝束抄等に云へり、(錦襪は、ニシヤのタビ、(烏皮烏は、黑き皮の鼻高の沓と云ふ、烏は思積切音昔、履也、釋名に其下を履ぬるを烏と云ふ、烏は脂也、禮を行ふ久立、地或は泥濕故に其跟の下を履ねて免踏ならしむる也、古今注に、烏は木を以て履の下に置く、乾脂して泥濕を畏れざる也、天子赤烏、詩經の兩風に赤烏凡々、傳に赤烏は人君の盛履也、小雅の疏に、烏に三等あり、赤烏はヒ、白烏、黑烏は次也、假名裝束抄に、衣は朱塗、裏は錦、赤糸の緒を附けり、とあるは稍後世の事ならむ、裝束圖式、和漢三才圖會等他諸書に圖を載せり。

日本歴史卷第二十八に、嵯峨天皇、弘仁十一年二月庚戌の朔の朝に曰く、(朝時皇太子は、配りに従ひ、表の元正朝賀には、表給九章を服すべし、朝賀朝に入り、元正には、群官若くは公卿の賀を受け、及ん人かの所會には、貴丹の衣を服すべし、裏に常服する所の者は、此例に拘らず。

第二條

親王禮服條

親王禮服

一品、禮服冠、四品以上、毎品各有別制、深紫衣、牙笏、白袴、深綠紗褶、錦襪、烏皮烏、佩綬玉珮、

一品親王の禮冠等別制あり、袍は深紫色、笏は牙にして、袴は白、帶は今云ふ紺サナダの如きか、ヒラミは深緑の紗、足袋は錦にして、黒色皮の高袴を用ひ、綬、玉珮を佩用すべしとなり、(每品別制、延喜式十九卷式部式元正朝賀の條を借りて解すれば四品以上は深の地、黃金裝、水晶三顆、琥珀三顆、青玉五顆を以て、冠の頂に交へ置く、白玉八顆を以て幘形の上に立つ、紺の玉甘頰を以て前後の押釧の上に立つ、其微は額上に立つ、一品は青龍の尾は上り頭は下り右より出て左に順、二品は朱雀の右より出て左に順、三品は白虎の尾は上りて末は毫、

大鏡令新解 第六卷

第十九條

衣服令

五五九

頭下二右に向へり、四品は玄武が螭の爲に纏結せられ並に右に出て左に順たり、但し立玉は衣

あり座あり、居玉は座ありて無なし、

一條帶、條は音紹、又た條に連じ、説文に扁結也、義解には、糸を扁中に編たる者也、太極（糸はもと下着の略服なり）の上にべる帯にして、存在に申せば、今云ふ、紺裏田の帯の如し、こ

綬玉佩、綬は音受、絨綬也、佩玉を貫く所以也、和名クミ組のすくもと、佩、は玉を帯へる也

天子の佩は白玉、公侯の佩は白玉と云へり、令抄及び撰應製束抄に、應劭の漢官儀に曰く、綬

の長さの一丈二尺は十二月に法り、廣さ三尺は大地人に則とり、是玉佩の組也、綬は左方の孔

下に、糸針を以て付け、玉佩は右方に掛け、膝に當り歩行に隨ふて聲ある者也、

續日本紀大寶二年春正月己朔、

天皇太極殿に御し、朝を受け玉ふ、親王、及び大納言以上、始めて禮服を着し、諸王臣以下朝

服を着す、

第三條

諸王禮服條

諸王禮服

一位、禮服冠。五位以上、每位及階各有別制。諸臣准此。深紫衣。

牙笏。白袴。條帶。深綠紗褶。錦襪。烏皮烏。二位以下、

五位以上、並淺紫衣。以外皆同一位服。五位以上佩綬

三位以上加玉佩。諸臣准此。

五世の王は、令條内の法として此内に入らず、諸臣の服を着すべき也、

一位以下、五位以上の諸王は、位階の高下に依り、禮冠は各別ある也、諸臣も之に准じよと也、

衣冠は禮紫、笏は牙、袴は白、深綠紗の上袴、錦の足袋に、黒皮の沓、一位より五位までは

は淺紫、此外は皆一位の服に同じ、但し五位以上は綬を佩じ、三位以上は玉佩を加へ、諸臣も

亦此に准せよ也、

附記

禮冠は、諸王一位は、式部式に依れば、淺紫の衣冠、赤玉五顆、綠玉六顆を以て冠頂に

交へて居へ、黒玉八顆を以て櫛形の上に立つ、綠玉廿顆を以て前後押釧の上に立つ、二位は白

玉二顆、綠玉五顆を以て冠頂に交へ居へ、赤玉八顆を以て櫛形の上に立つ、自餘は并に一位に

准ず、三位は黃玉八顆を以て櫛形の上に立つ、自餘は并に二位に准ず、四位は淺地、櫛形、櫛

形、押釧、玉座皆金装、自餘は銀装、赤玉五顆、綠玉六顆を以て冠頂に交へ居へ、白玉十顆を

以て前の押釧の上に立つ、青玉十顆を以て後の押釧の上に立つ、櫛形の上に立つ、正五位

は條の地に銀裂り、黒玉十顆を以て前の押釧の上に立つ、青玉十顆を以て後の押釧の上に立つ、自餘は四位に准ず、其微は、鳳は三位以上にして、正位は正しく立二頭を仰むけ、從位は正しく立て頭を低る、正四位上階は左より出て右に向ひ、下階は右より出て左に向き、從四位上階は左より出て左に顧み、下階は右より出て右に顧み、五位は四位に准ず、續日本紀卷之二、大寶元年三月甲午、新令則ち眞の大寶介に依りて、位官、冠衣の制を改定して、親王以下諸臣の冠服の制あれ共、コに引用すれば、いろはに假名を限するの煩元あるを厭ふて略す。

第四條

諸臣禮服條

諸臣禮服

一位、禮服冠、深紫衣、牙笏、白袴、條帶、深縹紗褶、錦襪、烏皮舄。三位以上、淺紫衣、四位、深緋衣、五位、淺緋衣以外並同一位服。大祀大嘗元日則服之。

本條は、一位以下五位以上の諸臣の禮服にして、前三ヶ條の如く大祀、大嘗會、元日に着用すべしと也。

冠、前條字解に同じき、式部式に、諸臣の一位は、紺の玉八顆を以て櫛形の上に立つ、自餘は并に玉の一位に准ず、玉色交せ居こゝこと玉色各異り、二位は綠の玉五顆、白玉三顆、赤黒の玉三顆を以て冠頂に交居ゆ、赤玉八顆を以て櫛形の上に立つ、自餘は一位に准ず、三位は黃玉八顆を以て櫛形の上に立つ、自餘は二位に准ず、四位は赤き玉六顆、綠の玉五顆を以て冠の頂に交せ居へ、自餘は玉の四位に准ず、五位は綠の玉五顆、白玉三顆、赤黒の玉三顆を以て冠の頂に交せ居く、自餘は玉の五位に准ず、其微は、正從出向皆諸王に准ず、衣の深、淺紫、深淺緋の染料等は縫殿式にあり略す、深縹は、フカキバナガと訓せり、縹は説文に青白色、博雅に蒼青、釋名に縹の如く淺青色、廣雅に青黃色、又淺青色、碧、天、翠イロハ等の語あり、縹は今所謂アサギ色と看て大差なかるべし、大祀大嘗、大嘗は神祇介に解せり、尚委しくは大嘗會に關する群籍を見るべし、荷田任源は、大祀大嘗の四字は連續して、事に非ずと立説せり、

第五條

朝服條

朝服

一品以下、五位以上、並皂羅頭巾、衣色同禮服、牙笏、白

大寶令新編 第六卷 第十九章 衣服令

五六三

袴、金銀裝腰帶、白襪、烏皮履、六位、深綠衣、七位、淺綠衣、八位、深縹衣、初位、淺縹衣、並皂纓頭巾。木笏、謂職事。烏油腰帶、白袴、白襪、烏皮履、袋從服色、親王、綠絳絳緒。一品四結、二品三結、三品二結、四品一結、諸王二位以上同諸臣、正四位、深絳、從四位、深綠、正五位、淺絳、從五位、深縹、結同諸臣、諸臣、正位紫緒、從位綠緒、上階二結、下階一結、唯一位三結、二位一結、三位一結、以緒別正從、以結明上下。朝廷公事則服之。

本條は、一品親王より初位までの通常禮服とも云ふべく衣服の令條也。

○朝服は、朝廷の公事參内する時に着用する服也、論語鄉黨篇に、吉月には朝服して朝すとあるを見れば、古くよりの名稱也、孔安國は吉月は月朔也と云へり、○皂纓頭巾は、クロキウスモノのトキンにて、令物に今世の冠り是也とあり、彈正式に云く、凡て朝服并に參議以上の半臂、五位以上の纓頭を除くの外は、羅を着するを得ずし、○帶は、金銀を鑲めたるもの

○深縹は、縫殿式に、烏皮は貫布一疋に、藍十圍（三十丁）、却安大二斤（百六十丁）、灰斗（六十丁）、新（五十丁）、新一百廿斤（六百八十丁）、○淺縹は、烏一疋に藍半圍、黃裳大二斤、○淺綠は、烏一疋に藍半圍、黃裳大二斤、○淺縹は、烏一疋に藍十圍、新一百廿斤、○淺縹は、烏一疋に藍半圍、新卅斤を要す、

○皂纓頭巾は、クロのカトリノトキンと云ふ、綬は文なき紺を云ふ、故に無文の冠にして、羅を用へず絹を用ふる也、○木笏は、職事官用、○烏油腰帶は、黒の帶にして、油字或は袖に作れり、○烏皮履は、黒革の沓、○袋從服色、袋は給日本紀天寶元年十一月戊申、諸王卿等に袋を賜ふ、同書第七卷、靈龜二年冬十月壬戌の條にも此名あり、文獻通考百十二に、唐の高宗五品以上の隨身に銀魚袋を給ふ云々、五雜俎十二に云く、五品以上皆魚袋を賜ふ、飾るに銀を以てす云々、又た魚袋は古の算袋にして、魏の文帝が、易ふるに銀袋を以てせり、唐に至りて魚袋に改めたりと、集解に宋云く、位袋あり無位袋あり、宋に三位以上は金魚袋、五位以上は銀魚袋、長さ三寸幅一寸、木板に二作り四方を裁の皮にて包み、長に鮫の如き魚六尾並に一尾を金象眼にす、大禮の時に右帶の右方に佩ふ第、の寶石の右方に付く、荷田有満の案に、即ち納むる袋かと云へり、服色以下は、凡そ三色三結の色を以て身分を區別せり、親王は、綠と縹の二色の組にて、一品親王は四ツ結ひ、二品は三ツ結ひ、以下本文の如く、併し諸臣の正位は紫の組、從位は綠の組、上階は二ツ結ひ、下階は一ツ結ひ、二位は三ツ結ひ、

二位は二々結び、斯の如く緒を以て正徒を別ち、結びを以て上下を明かす也、

懸疣するに、魚袋は其の初め裝飾のみならず、必ず多少實用を兼たるものなるべし、今は眞の慣用飾の類なり。此物に、近世親雅庶人の腰に懸たる印籠的の用なほとせざるものに相違なるべし、即ち腰り針囊なり故り、途中の用に供せしものと懸惟さる。

第六條 制服條

制服

無位皆皂纓頭巾。黃袍。烏油腰帶。白襪。皮履。朝庭公事則服之。尋常通得着草鞋。家人奴婢、橡墨衣。

本條は、無位の人より奴婢に至るまでの衣服の法制也、

無位の官員及び人民は、皆、黒の無文の相の頭巾に、黄色の袍とし、其裁又縫の體制は朝服の如し、黒染の帯に白足袋、皮の沓にて、朝廷の公事に服用せよ、通常の時は草鞋を穿て、家人奴婢はツルベミ染の衣として、ボングリの實を以てカトリを髹染にしたるキモノを着よと云ふ也、

法文に白き袴のなきは文を省略したるもの也といへり、

附略 〇朝服は、無位以下の者は參内する事なきを以て朝服とは云はぬと也、〇袍は、日本紀

卷の三十、持統天皇七年正月朔辛卯、壬辰是日詔りして、天下の百姓をして黃染の衣を服せし

じ、顯日本紀和銅五年閏十二月辛丑の制に、無位の朝服は自今以後、皆濡を著けたる黃衣とし、

濡の濡さ一尺二寸以下云々、

品保護するに、襪は上衣にして、其地質、色彩、綢文、絨織等に多少の差異ありと雖も、其衣の實理を一考すれば、襪と云ひ衣と云ひ直置、大袴、水袴、蓑袴、袴衣、小足衣、十握、道服、等は今世流行の羽織と假りに推察すれば記載し易からし、襪は此の襪に襪に袴を掛けたる如くにするものと云ふ、襪は、團栗にして、縫殿式に、帛一定を染むるに、ボングリー一斗五升（今の六升餘）西大二斤（三百六十リ）灰五升（升餘）、絹二百廿斤（八斤一斤は百八十リに當る）、住滿の説にては、最真黒色と凶服用の橡染の淺黒色とは同じからずと、愚按するに後世は五倍子に鐵漿を混して染色せり、團栗も亦稀酸に富めるを以て化學上同理ならじ、上等には紺下クロとか、藍下、黒とか、又は檳榔子染と近頃稱ふるも、ピンコロもボングリーも果實にして含有丁寧の性質成分に幾許かの差ある位ならじ、

第七條 服色條

凡服色、白、黃丹、紫、蘇方、緋、紅、黃橡、纈、葡萄、綠、紺、標、桑、黃、摺衣、葵、柴、橡、墨、如此之屬、當色以下、各條得服之。

し二帖とあり、花をば寫し花と云ふ流へは落る故に下。繪の用に供す、又た瘡癤としては、蛇
夫の咬傷に採液を塗布して功あると云へり、花の形は珊瑚色の風仙花とも云ふ如し、其形狀
は風賦の口に似たるを以て、風嘴花の名あり、又翠竹に酷似したる點あるとして、竹青の名あり、
又た近くは化學者の間に合せに青色試験紙を裂す、則ち酸性の液に逢へば紅變する也、尙此餘
に種々の摺衣を爲る草木の花子皮葉あらじ、續日本紀十五卷、天平十五年正月壬子五位以上に
摺衣を賜ふ、又た弘仁内裡式、正月十六日路歌の式の條に、延暦以往、路歌罷らは、健甕
京より榛の摺衣を賜ひ、群臣摺衣を着して路歌し語りて、共に庭中に跪けは、酒一杯絹十疋を
賜ふ、云々(下略)伊勢物語に曰く、其男しの上摺の袷衣をなへきたりける、春日野の、若葉の
摺衣、しよの亂れ、限りしられず、昔は奥州忍國所の名物なりとて、忍ずりを多く奪りし事
なり、今は秋田にツキ(歟)摺の名物なる手前、風呂敷等あり、
(素は、原本にハリゾメ、立野本にはハリゾメと假名を附せり、古來諸説紛々なれ共、契沖、真洞、
官長等皆ハリゾメ(赤楊)とせり此説最も穩當ならじ、萩(かき)の說にすれば、素だけを摺付く
るより他に故方なし、只古人多く種々の咏吟に萩の花香と摺衣とを混用せるより後人の迷惑を
して一層濃厚ならしめたると思考す、群田伴存の古名錄には色素の説少し、只北野秋芳の秋野
七神考が該ハリゾメに對しては、數百の本草物産とか博物とか種物とかの書より詳細ならじ、

此ハリゾメ(赤楊)も摺衣用又は浸漬する染料にも使用せん、
柴は、柴薪の柴にして、檉葉、枝葉、等日本紀や和名抄に舊けり、一の植物を限りたるに非
ず、諸多の樹木の小枝の葉グミ附きたるものを云ふ、柴山と云ふ處は小蓬木の叢生して叢の
如き處にて、我等の國の山にては、農人が燃料用として柴刈に山行する也、其本は一定せられ
共、主に樺科或は忍斗科に屬する山ハシノキ、ハシノミ、ホクソ、クヌキ、(かなら)の灌木然
として年々刈り切れ居る物也、故に愚按するに柴染はホクソやドンヅリ等種々の物にて摺る
が又は煎煮して染色するか也、(檉は、ドンヅリとす種々の色を出すものとすべし、(素は、
ハリゾメにて黒き色也、(常色は、緑、緋、紫、靑を云ふ、

第八條 内親王禮服條

内親王禮服

一品、禮服寶琴、四品以上、毎品各有別制、深紫衣、蘇方深紫
紵帶、淺綠褶、蘇方深淺紫綠綢裙、錦襪、綠烏、飾以金銀、
本條は、皇女方、禮服の介條にして、一品内親王は、男の禮冠の代りに、寶琴なる金銀珠玉を
以て裝飾せる物を用ゐる、各品の階級に依りて別制あると云ふ、併し寶琴だけは品別あれ共、

其以下の女、帶、釵、釵、釵に至りては區別なし、

寶髻は、義解に金玉を以て髪^{カミ}の緒を飾りたるものと云へり、説文に髮青、結に通ずとあるを以て考ふればハナリ今の元結の事にて昔は絹糸紐又は綾羅錦繡にて迫りし紐に種々の飾りを施せしものならむ、時代の變遷にて時は當然する能はざるも、今世の前飾とが花飾と云ふ土地によりては、前髪^{カミ}ら前飾りなど云ふ禮節時に盛衰する金珠珠玉を施せし物は是の遺風ならん、平時と雖も此節幼女のリボンと云ふ布帛の小片を以て髪^{カミ}の飾の一とするも亦此類なるべし、延喜式四卷、太神宮式の度會^{タカヒ}の宮の装束の條に、髮結^{カミ}の紫の絲四條各長三丈、太神宮の條では八條長さ五尺、月夜見の宮、外敷神の條では皆長さ四尺、その數尺と云ふなり○紙帶ノへオビと諸本に傍訓あれ共ソヒならむ、紐は次の十條内命婦の義解に、傍に作を^{ナニ}と爲す也とあるを正とすれば、今云ふ處の腰帶又帶止めの靚^{カミ}がすれ共、サマ、は眞の帶なる名稱装束の文なし、故に此は爾雅釋言に、首飾、飾也、故に飾り装束の帶と看做す方可なうん、必ず傍又は添の意は疑かならず、愚按するに、ソヒは和名抄に魚狗^{イナ}則^{ノチ}川せり、名物聚にして其羽毛の異なる點を轉用してソヒ帶とは稱へんか、この紐は、太神宮式等に、來紐をエハタと訓せり、今所謂シボリなり、近くは友禪染と云ふ物も紐の進化したるものなるべし、釵は、上袴にして、結は下、袴なり、

女王禮服

第九條

女王禮服條

一位、禮服寶髻、五位以上、每位及階、各有別制、内命婦准此、

深紫衣、五位以上、皆淺紫衣、自餘准内命婦服制、唯裙同、

内親王

第十條

内命婦禮服條

内命婦禮服

一位、禮服寶髻、深紫衣、蘇方深紫紫紕帶、淺練裙、蘇方深淺紫綠纈裙、錦襪、綠舄、筋以金銀、三位以上、淺紫衣、蘇方淺紫深淺綠纈裙、自餘非准一位、四位、深緋衣、淺紫深綠紕帶、烏舄、以銀筋之、五位、深緋衣、淺紫淺綠紕帶、白餘皆准上、大祀大嘗元日則服之、外命婦、夫服色以下任服、

朝服

第十一條

有位婦女朝服條

一品以下、五位以上、去寶髻及翟鳥、以外並同禮服。六位以下、初位以上、並着義髻、衣色准男夫、深淺綠紕帶、纁纁紕裙、初位去纁、白襪、烏皮履、四孟則服之。

本條は、一品内親王より、初位までの女子の参内する時等に着用する衣服の令條也、

五位以上の婦女は寶髻及び上袴、翟の足袋又は袴を着くるに及ばぬ、其餘は禮服の節に同じ、

六位以下初位以上の婦女は、寶髻に非ざる衣を着けよ、衣服の色は章主に准すべし、又た帶や

裳は初位の裳などはシホリの染模様が用られぬ、又た白足袋と黒度の袴は、年四度の一日に用

ひよと也、

名釋 義髻は、頭髮にある髻ひを義髻と云ひ、衣服にある飾りを義飾と云ふ、人に義飾、義

足のある如く、他の元結を以て、自身の髪を髻をを義髻とす、○四孟、玉篇に、孟は始め也、

四孟は四、の始めにして、四季各始の月を、孟春、孟夏、孟秋、孟冬と云に同く、太陰曆の正、

四、七、十の四ヶ月を孟月と云ふ、孟月は孟春の月、孟秋の月と云ふべきを約稱したる也、故

に此月の朔日を孟初と云ふ、撰歴契東抄に、四孟は、孟月の朔日也とあり、

制服

宮人、深緑以下兼得服之、紫色以下、少少用者聽、綠纁紺纁及紅裙、四孟及尋常則服之、若五位以上女、除父朝服以下色者、通得服之、其庶女服、同無位宮人。

本條は、上、内親王より、下、庶人の妻女に至るまでの、制服の令條也、

内親王を首め、一般宮中に仕ふる有位の女官より、下、無位のお米に至る迄、紫と紺等の如き

禁止色にソレンソレ制規のあるなれば、其淺綠色以下は兼て着用は差支ぬ、但し紫色でも細帯位の

些々たる品物にあるならば用ても差支ぬ、又た綠色及び淺黃に紺の三色を以て織りたる紅の裳

袴は、四孟及び通常用にしても差支ぬ、若し五位以上の令嬢達は父の参内服の色彩以下の色彩な

らば着用せよ、又た庶人の妻女の衣服は無位の女官と同斷であると也、

大寶令新附

第六卷

第十九篇

衣服令

五七五

武官禮服

第十三條

武官禮服條

衛府督佐兵衛佐不在此限以下准之。並巳羅冠、巳綾、牙笏、位襖、加繡補襦、兵衛督雲錦、金銀裝腰帶、金銀裝橫刀、白袴、烏皮靴、兵衛督赤皮靴、錦行膝

本條は、高等武官の禮服にして、次條は一般軍人の朝服の制也、

兵衛府の次官を除く他、五衛府の長官、三衛府の次官は皆黒絹の冠りに黒の老懸、象牙の笏に、無繡、結飾なき、關腰（カマエ）の位襖に、袖々施したる繡打（カキ）を戴ね、但し左右兵衛の長官は云形の錦を用ゆ、金銀作りの腰帶に、金銀装りの太刀はきて、白き袴に、黒革の靴を穿ち、兵衛の長官は、赤皮の靴とす、錦のグートルを看用すべしと也、

兵衛佐は、正六位の下が相當位階であるからタト、五位に敘せられあへども、長官や衛門、衛士の佐官（次官）等と同装束はならぬ、別に次條の朝服の制に依てサクラン（志）以上に准じて、錦のウチカケを看用の事と義解に注せり、
巳綾、皇は黒也、綾は音綾、冠の飾り也、オイカケと云ふて、軍人而して一装飾とす、老懸は士清の采によれば、其初めは、老人の髯髪

薄くして外鬚揚らざるを以て、老を隠したるより輔用の語となれり云々、抄に今は老少を問はず武官全體之を用ふと、古今厚菲等の異あり、故非違使の別當は厚老懸を以て吉とす、大臣大將は、袴を備せず俵て老懸なしとぞ、續古今集に、
櫻花、老かゝるやと、かざしても、

かみのいかきに、身こそふりぬ戦

などもある也、
麒麟部則ち兩耳前上に馬車馬（ウマクルマ）に見カクシ的に當るもの、（位襖は、位相當の衣袍にして脇さわけの仕立と云へり、）
繡襦は、ウチカケと云ふて今世婦人盛装時のカイドリと同名にして、袖なし服と想像して可ならぬ、文字を分折して見れば女を以、兩方、當ると云ふ形になり、故に義解にも、一片は背に當て、一片は胸に當つるものと云へり、（行障の襦は、音響、ムカベキと訓す、毛詩小雅に、邪幅下に有り云々、幅は留也今の「行障也、脚を包みて跳躑輕使なる可き」を訓ふ、故に今の軍人の脚絆にして庶民の穿てる脚絆の如し、

横刀は、古事記、日本紀共にミチと訓せり、埃塵抄に、ムカベキと訓す、後世の書は金作太刀に作る、唐六典の注に、横刀は佩刀也、兵士佩る所にして、名亦隋より起ると云へり、金華又た爲装の横刀は、刀身頗る精練にして、秋水湛然と云ふの觀なりと、

第十四條

武官朝服條

大寶令新解

卷六

第十九篇

系圖

五七七

朝服

衛府督佐、並皂羅頭巾、位襖、金銀裝腰帶、金銀裝橫刀、白襪、烏皮履、其志以上、並皂纓頭巾、皂綾、位襖、烏油腰帶、烏裝橫刀、白襪、烏皮履、會集等日、加錦兩褶赤脛巾、帶弓箭、以鞋代履、兵衛、皂纓頭巾、皂綾、位襖、烏油腰帶、烏裝橫刀、帶弓箭、白脛巾、白襪、烏皮履、會集等日、加挂甲、帶弓箭、以鞋代履、主帥、皂纓頭巾、皂綾、位襖、烏油腰帶、烏裝橫刀、白脛巾、白襪、烏皮履、會集等日、加挂甲、帶弓箭、以鞋代履、並朝廷公事則服之、衛士、皂纓頭巾、桃染衫、白布帶、白脛巾、草鞋、帶橫刀、弓箭若槍、會集等日、加朱末額挂甲、以皂衫代桃染衫、朔節日則服之、尋常去桃染衫及槍、其督以下、主帥以上、袋准文官

本條は、前條と大同小異なれば、法文中其異なる裝束等を列舉すれば、冠の代りに頭巾、無文の墨絹の頭巾、金作銀作りの代りに黒作りの佩刀、兩褶に刺繍せず、赤キゲートペ、皮各の代に糸及び布片の鞋、白キ脚胫、ウチカケ甲、槍、紺の襖、等朝廷の公事に服用とす、衛士は桃染の單衣、白の帛紗帶、白キ脚胫、糸鞋、太刀、弓矢、槍を帶し、會集等の日には、赤キツツカフをしてウチカケ鎧を着け、是裝束は朝日などに服せよ、平時は桃染の單衣と槍は用ふるなかれ、其長官及隊長等の魚袋は文官に准せよと也、

【字詁】○鞋は、糸成は布片のフラスジ、○白脛巾は、白の脚胫、○挂甲は、ウチカケヨロヒと訓み、延喜式工事解卷の三に、挂甲二頤、札八百枚云々、ウチカケ(補綴)に似たる甲ならしめて、和名抄に釋名、三代實錄元慶八年二月廿一日の條、江家大弼御即位の筈、軍器考、滿佐須計(雅亮)裝束抄二卷の末に、中少將の甲さるやうの條に、冠り常の如し、卷綴をして毛懸す、大口に汗取をさる、表の袴をきて云々中路、甲をさる、頸髪などを形色して、袖もなクウチカケのやうなる草摺はあり、其上に太刀を帶く、小緒を前に結ふ事常の如し云々(下略)更に附(附を添ふるも後世の制とす、春田永年が藏する正應古寫本の「挂甲」圖は、延喜の古式に一致すと云へり、欽明紀に甲二頤とあるを、釋日本紀にフクツリと訓せり、

○白布帶は、白キ布の帛紗帶か又は縫合せありしか今詳かならず、○桃染衫は、桃の葉や木の皮

大寶令新解 第六卷

第二十篇

營繕令

凡京拾漆條

本篇に、土木建築、兵器々仗、造船雜器、綾物等の營繕製造、補繕修増等の工事及び服役する丁匠等の大功に關する法令也。
營繕、營は營造也、繕は修繕也。
古昔土木の工事を起すには、力めて農業閑散の時節を選ばせり、則ち秋時收穫終りより、春耕未殖の内とす、蓋隣支那にても、彼春秋左氏傳莊公廿九年にある如く、上功龍見れて務を繼る云々は、農事終りて土木工事に使役すると云ふ也、龍は星の名にして、蒼龍九月に見はるゝ星也、又左毛詩鄘風の定之方中篇に、定の方に申する建宮を作るし、夏正十月定と云ふ星が南方に申する時より御殿を建築すると云ふ義也、此星の見はるゝより、宮室を造営するから此星を營室星とも云ふ、此星は廿八宿中の室と云ふ星也、同じ秦漢以來は時節を選ばぬ事にならたり、

第一條

計日程條

人皆合新解 第六卷 第二十篇 營繕令

五八

等にて染めたるものとは思はれず、今人所謂桃色の單衣相なるべし、(朱末頭は、赤きマツカンと訓み、宋に本朝式に、今云鉢鉢也、皆の頂上に當る所をしか云ふ、異向の義に非ずと也、
附記
紅鉢鉢は琉球人の頭を纏ふ赤きもの也、呂宋曰く越上の市販に印度人の巡賣の頭面を見れば赤き布片一、不續狀に頭面を覆包せり、是に附すと見ゆ、宋にもかき(朝頭)に延壽式、江家衣範等に、本に青服也と、通典に古の人は附して鉢す云々、これを轉用して軍の鉢に掛る物の名とせり也、清少納言見ゆ、鮮なるものと云へくは見也、鉢笠錦を於に頭面ともかきり、木引の事也、即即位に紫衣殿に就きりて、西宮記、尋常の御儀を續く、鈍色の細布を以て、端の頭面を見たり、白雲天の時に、錦袍殿高座と錦を用ふる頭也といひ、天井に冠り縁その下方より、即居の上より而、則ち傍に云ふ、この所を、種々發展せる繡物を以て袂と襟を繋り冠する、繡とも云ふも此れより轉用せしむべし、

五八

凡計功程者、四月五月六月七月、爲長功、布一常得四功、二月三月八月九月、爲中功、一常得五功、十月十一月十二月、正月、爲短功、一常得六功。

本條は、工事に要する職工の功手間に關する大體の例を示したる令條也、
工手間を計算するには、今の曆にすれば、五、六、七、八の四ヶ月は、最も永日、故に長功と云ふて餘計に住擧の出來得る月とし、三、四、九、十の四ヶ月は、中等の日永なる月故に中功とし、十一、十二、正、二の四ヶ月は、最も短日故に短功とすと定められたる也、
功、古紅切音公、勞を以て功を定むるを功と云ふ、故に長、中、短日の仕事を平均して算定したるを一功とせり、則ち古への此法を標準一定したるは、一人前の人は五日を以て布を一丈三尺織るものとし、依りて一功は一尺六寸と定めたり、由て本文にある如く長日は四功則ち四日にして一丈三尺、中は五功、短日は六功とある也、但し價直の事は、各地に於て差異あるものとす、賦役令の第四條、廿二條參看すべし、一常は義解に一丈三尺なりと、釋名には、八尺を袴とし袴を倍して常とすと云へり、時代の變遷にて一丈三尺が相當する如し、

第二條 有所營造條

凡有所營造、及和雇造作之類、所司皆先錄所須總數、申太政官。

凡て別物にて造營する所、又賃金支拂の雇人を以てするとかば、諸役所にて、先づ請求すべき總數を計録して、太政官に申達せよと也、
○和雇は、アナヒ、ヤマトと訓して、庸役にて不足の時には、賃金を以て僱入るるを云ふ、其功直は、時期と土地に因りて差異あるものとす、

第三條

私第宅條

凡私第宅、皆不得起樓閣、臨視人家、宮內有營造及修理、皆令陰陽察擇日。

官公立に非る私己の家屋をば、一階作り以上の高堂を築造して、他家の室内を望觀する如き事はなからぬと云ふ也、又た御所内に建築及び修繕等の工事を營む時には、皆陰陽寮をして吉日良辰を選択せしめよと也、

第は、甲乙の次第ある故に第と云ふ、樓閣、樓は重屋前より二階以上の作り也、閣も亦然り、

凡營造軍器、皆須依樣、令鐫題年月及工匠姓名、若有不可鐫題者、不用此令。

第四條

軍器營造條

兵器を製作するには、皆恰好に依るべし、製造年月、及び製作人の姓名を彫り附け置けよ、若し右の銘を入れざる品あらば、偽物とせよと也、
附 樣は、有樣、則ち樣體又た容體或は形體と云ふ義也、人を敬稱するにサヤを用ゐしは康富記に、恭裡サヤ、國大將に公方サヤ、清豐の榮へし時に、六波羅サヤと云ふ事不家物語に出づ、
附 鐫題は、彫り付ける也、(關市令第六條を照すべし)

第五條

錦羅寸法條

凡錦羅紗殺綾袖褙之類、皆闊一尺八寸、長四丈、爲匹

附 一節、ニシキ、一羅、ウズモノ也、二紗、シヤ、一綾、ウズキ細シ、絳、アヤ、一袖厚キツムギ、一紵は、調布にて手作りの布、一調はヒロサ也、

第六條

在京營造條

凡在京營造、及貯備雜物、毎年、諸司總料來年所須、申太

政官、付主計、預定出所科備、若依法、先有定料、不須增減者、不用此令、其年常支料、供用不足、及支料之外、更有別須、應科折者、亦申太政官

京都に築城でもするとか、又は安居と云ふて、信徒の炎暑時の修業則ち夏行一名解夏、夏經、結夏、の供養でもせんとする計畫等あるとか、又は諸役所が、來年工事をせんとする所あらば總計して七月三十日限り、太政官に申達せよ、官之を民部省の主計寮令の人蔵者に當らしめに交附して、豫め各地物產の出額を豫算豫定して備へよ、若し法令上の數量一定しあるものは、其増減は本令條を用ふるに及ばぬと也、又た毎年の經常費を支給して不足を生じ、或は臨時不慮の支出則ち、較給にても新調するとかの際、他の剩餘を以て流用補給等の事をせんとせば、太政官に申達せよと也、

附 貯備雜物は、營造の外に、別に貯藏設備を云ふ、假令は安居の供養に僧侶は若干、飲食の原料、器具等若干の如し、一科折は、流用と云ふ如し、(賦役令廿一條參照)

第七條

解雜巧作條

凡白丁有解雜巧作者、每年計帳之次、國司簡試、附帳申、

自了の内に、種々自らの技術に關する、技術の出來得る者あらば、地方官は毎年試み、諸帳簿整理の際に別冊として帳末に附記して本政官に申達せよと也、

第八條

貯庫器使條

凡貯庫器仗、有生澁綻斷者、三年一度修理。若經出給破壊者、並隨事料理。在京者、所須調度人力、申太政官處分。在外者、役當處兵士及防人、調度用當國官物

兵器の庫に備へある器械に錆を生じ、或は綻び、或は破れ、等するから、三年に一回宛は修理せよ、若し破壊不用の物あらば、隨時新調せよ、併し京都は所用の調度人力等は、太政官に申して處分せよ、地方は地方にある兵庫内の器具は、其地方の兵士、防人を使役して修繕せよ、但し調度は其國々の官物を用ふと云ふ也、

〔考〕

〇生澁は、錆を生じ、〇綻斷は、ホコロビ、タチ、キレ也、

第九條

須女功條

凡在京營造雜作、應須女功者、皆令本司造。若作多、及軍事所用、量謂不濟者、申太政官、役京内婦女。京都内にて造營に伴ふ雜物の製作中、女子の手を要するものは、縫部の司をして遣らしめよ、若し要する所の物品夥多なる時則ち軍事官に人用の場合の品は、人少で出來ぬ時は、太政官に申せ、京内の婦女を使役するも工賃を支給するに及ばぬと也、

〔考〕

本司は、縫部の司、不濟は、ナルマシタ、又たヌマズ或はナラズ也、

第十條

瓦器損條

凡瓦器經用損壞者、一年之内、十分聽除二分、以外徵填。同瓦器の類は、一割の損壞を免ぜども、其他餘計の破損は、徵填したる者、又は其保りに辨償せよと云ふ也、

〔考〕

一瓦は、坏、罍、甃の類也、一徵填は、取り宛て也、

第十一條

京内橋梁條

凡京内大橋、及宮城門前橋者、並木工寮修營、自餘役京

内人夫

京都内の大橋、及び宮城門の前の堀に架しある橋は、皆木工にて修繕せし、其他は京内の人夫則ち難儀を便役せよと也。

○宮城門は、(宮御令に附す)

第十二條

津橋道路使

凡津橋道路、毎年起九月半、當界修理、十月使訖。其要路陷壞停水、交廢行旅者、不拘時月、量差人夫修理。非當司能辨者申請。

津灣建渡、道路橋梁は、毎年十月の中旬より修繕工事を始めて、十一月中に落成せよ、惡路破損回陷等を生じて、水溜りを生じ其爲め交通杜絶する如きあらば、時日に關せず人夫を督勵して復舊工事をせよ、又た管轄役所に於て處辨し能わざる程ならば、中央に上司に申請せよと也、

○交は、立野及び堀の坂本に、ハカと訓せり、(斎司は、其處の役所、即ち富國の司、

第十三條

官船所在條

凡有官船之處、皆遂便安置、並加覆蓋、量遣兵士看守。隨壞修理。不堪料理者、附帳申上。其主船司船者、令船戶分番看守。

官有船船のある所、則ち攝津及び大宰の主船司の外は、便宜の場所に岸根をして置き、各番兵をして警護せしめよ、破損次第修繕せよ、若し腐朽して用に堪ざらば帳簿に附けて上申せよと也、而して主船司の船は、船戸をして交代に看守せしめ、大宰府の主船も亦同斷とせよ。

○覆蓋は、(覆蓋は、岸根也、

修理は、修繕と云ふ、

第十四條

官私船舶條

凡官私船、毎年具顯色目勝受斛斗破除見在任不、附朝集使申省。

凡て官私の船は、毎年其種別及び用に堪るや否、又た積載數量、増加減少等船籍に係る一切の事を録して朝集使に附けて民部省に申せと也、

○色は、杉、樟等の材船を云ふ、

○目は、船もが艇とかを云ふ、勝は、堪也、受は、

大寶令新解 第六卷

第二十篇

船籍令

五八九

船也、即ち船腹に容れ受る多少也、破除は、滅失也、任不は、用と不用と云ふ如し、

第十五條

官船使用條

凡官船行用、若有壞損者、隨事修理、若不堪修理、須造替

者、預料人功調度、申太政官

官船を使用するに、若し破損しあらば、隨事修繕せよ、修繕の價額をきき認定したる船は造り替へる事にせよ、併し造り替へる時には、前以て其新造に要する經費則ち人功、調度を豫算して太政官へ申達せよと也、

第十六條

大河條

凡近大水、有隄防之處、國郡司以時檢行、若須修理、每秋收訖、量功多少、自近及遠、差人夫修理、若暴水汎溢、毀壞隄防、交爲人患、先則修營、不拘時限、應役五百人以上者、且役且申、若緊急者、軍團兵士、亦得通役、所役不得過五日

大川湖海に連接し、隄防設備のある堤防は、地方官郡吏等は、平時時々巡視せよ、若修繕を要する場所あらば、秋穫後直ちに工事に着手せよ、但し人功の多少を豫算して近き所より遠き所に及ぼし、若し洪水汎溢し、堤防決壊せば、時限に拘らず、人家に害のある所より先きに修繕せよ、併し五百人以上を要する工事は、且つ役し且つ上申し、若主念を盡せば、軍團の上番兵士をも通じて使役してもよからしい、然れ共一人五日間より過使はならぬと也、

第十七條

堤防條

凡堤内外并堤上、多植榆柳雜樹、充堤堰用

堤、はこしらへて秋蠶なり、職員令四十條、職役令一條の類に用ふるべとは異なる也、堤は、貯水用也、

大

寶

令

新

解

第七卷

第二十一篇

公 式 令

凡捌拾玖條

本篇は、公文の式法也、

字源

「公式、講令備考に荷田在滿按し、公式は開始めてあり、唐之に因り、律に篇目なし、

明に至りて、公式律あり、明律釋に上官堂云く、公共體式と爲すこと皆是也、公文式様は解に

反す、

徂徠の明律國字解に云く、公式とは、公けの式法と云ふ意なれ共、古來の用ゐる方背公文の式法

を云ふ、夫故に本篇には文書印信の事を載たり、蓋し大體を舉ぐる耳也、

第一條

詔書式條

詔書式

本條は、詔書認め様の式法也、内外大中小單の五種を左に列す、

附註

（一）詔書も勅旨も同く論言也、但し臨時の大事を詔と爲し、尋常の小事を勅と爲也、唐六
典卷の一に云く、上の下に逮す其制六あり、曰く、**制、勅、冊、命、敕、符**、則ち天子に制、

大寶令新解

第七卷

第二十一篇

公式令

五九三

勅、冊と云ひ、皇太子に令と云ひ、親王に教と曰ひ、尙書省(文政堂)より州に下し州は縣に下し縣は郡に下す之を曰と云ふ、又天下より上に達する所六あり、曰く、表、狀、牒、啓、辭、露、之れなり、天子に上表、皇太子に啓と云へ共、上表の他は今は混同せり、此他、關、刺、移、解等あり、下條所載に至て解す。

第二條 第二詔旨式條

明神御宇日本天皇詔旨、云々咸聞

該式は、大事を以て、外國使臣に宣ふ辭也、日本紀廿五卷、孝德天皇大化元年三月、五月七月丙子、高麗國又百濟國の使臣に詔ふ玉ふ例あり、

第三條

第二詔旨式條

明神御宇天皇詔旨、云々咸聞

該式は、中等の事を以て、外國使臣等に宣ふ語言也、

日本紀廿五卷、孝德天皇、大化二年二月戊申、日安箱、日安錦とも云ふべき物を新設し玉ふ時の詔書例あり、

第四條

第三詔旨式條

明神御大八洲天皇詔旨、云々咸聞

該式は、朝廷の大事、則ち立后、立太子、及び元日に朝賀を受け玉ふ類の式なり、

第五條

第四詔旨式條

天皇詔旨、云々咸聞

該式は、中事に用らるゝので、則ち、左右大臣以上を任せらるゝの類也

第六條

第五詔旨式條

詔旨、云々咸聞

年月、御畫日

中	中	中	中
務卿	務大輔	務少輔	位
位	位	位	位
臣	臣	臣	臣
姓	姓	姓	姓
名	名	名	名
宣	奉	行	行

太政大臣位臣姓

大寶令新解 第七卷

第二十篇

公式令

五九四

左大臣位臣姓
右大臣位臣姓
大納言位臣姓名等言、
詔書如有、請奉
詔、付外施行、謹言
年月日
可、御書

右御書日者、留中務省爲案、別寫一通、印署、送太
政官、大納言覆奏、並可訖、留爲案、更寫一通、請
訖施行、中務卿若不在、則於大輔姓名下注宣、少輔
姓名下注奉行、大輔又不在、於少輔姓名下、併注
宣奉行、若少輔不在、餘官見在者、並准此

本條は、小部に用らるゝの辭にして、則ち五位以上を授け玉ふの類也、而して、年月の字より
可御書の字迄は、書式にして、以上五ヶ條の詔書には皆同様の事とす、右御書日はの字より、
並准此の字迄は、詔書作成の手續とす、此手續文にては稍了解に苦む處あるを以て、多少重複
の嫌あれ共、主に内禮式と禁秘抄を參取抄録して新解に代へんとす、

詔書を制作し出さるゝには、中務卿が勅命を奉け、卿は部下の内記をして作らしめ、或は内理
より直接内記に命せて作らしむるあり、又た内記不在ならば、大臣勅を奉じて太政官の辨官を
して作らしむるありと云ふ、出来上らば大臣、或は上卿がソレを宮に入れて、大納言(參議若
くは内記、内侍をして、御所に進ら介む、天皇御覽ありてヨイと思召さば、年月の下の御書日
とある所に墨黒に目を最書なされて中務卿に渡させらる、卿は式官へ傳宣する時に自分姓名の
下に宣の字一字を自署して大輔に傳宣し、次官も亦卿の傳宣を奉けて姓名の下に、奉の字一字
を自署して、少輔へ下す、少輔は太輔より來れるを太政官へ送る役儀故に、姓名の下に行ふと
かヤルとか訓む字一字を署して太政官へ送らしむ、故に宣奉行と曰ふ也、但し宣筆文字のあ
る書は中務省に留めて少輔自ら一通を寫して太政官へ其贈しを送る也、
中務省より右詔書の寫が太政官に到らば、太政官の外記に於て能く勘査の上、太政大臣以下、
年月日までを認め、此間に於て、念の爲に大納言より何ふを覆奏と云ふ、而して外記の奥付し

たるを天子の御覽に入れば、天皇に於て、最終の年月日の向つて左の肩の上一寸餘の所に可
 の字一字を短筆ありて、太政官へ下ける、官之を留めて案をなし、更に一通を寫して施行す
 る也、
 但し中務卿不在の時は、大輔の姓名の下に宣し書し、少輔の下に、奉行と署す、大輔も亦不在
 ならば、少輔の下に宣奉行と署する也、尚又少輔も不在ならば、大、又は少丞に於て宣奉行と
 注せと也、
 大判言は四名ならば、最末の名の下に、等言の文字を寫すべき事無論なり、

第七條

勅旨式條

勅旨式

新儀式第十項によれば、大臣命を受け、内記をして起草し呈せしむ、消着して所司に下す事二
 三品階に同じ、但し御覽日の事なし、又だ後日中務省内侍に附して覆ふす、御覽可なし直ちに
 下す、

第八條

勅旨條

勅旨云々、

年月日

中務卿位姓名

大輔位姓名

少輔位姓名

奉 勅旨如右、符到、奉行、

年月日 史位姓名

大辨位姓名

中辨位姓名

少辨位姓名

右受勅人、宣送中務省、中務覆奏訖、依式取署、留
 爲案、更寫一通、送太政官、少辨以上、依式連署、
 留爲案、更寫一通施行、其勅處分五衛、及兵庫事

者、本司覆奏、皇太子監國、亦准此式、以令代勅、

本條は、其施行の法、一に第六條の詔書式に同じ、無秘抄によれば、上卿之を奏し、主上事に
より日を宸筆ある由、例之は後世の事なれ共南北朝の時に、皇子二人を源氏と爲す勅書には御
實日なけ共、平安朝時代の承平元年、良信公の上表に勅答有りし時に御書日あり、又だ、天曆
十年九月の論々の勅答にも亦御書日あり、

奉勅旨と云ふより、少辨位姓名と云ふまでは、皆辨官史の注す所なり、

右勅を受玉はる人、中務省に宣傳し送れ、省は念の爲めに伺ひ奉し、更に一通を寫して太政官
に送れば、官の少辨以上速署して留め一案となし、更に一通を寫して施行せよと也、而して其
勅に五衛府及び兵器庫の事を處分しありば、五衛府又は兵庫の役所も亦中務省と同じく念の爲
めに奉聞せよと云ふ也、併し中務と衛府と俱に同一時に勅を奉せしならば、一方の役所は覆々
するに及ばぬと也、皇太子が天皇の御留守をなさる時には、此式に准じ、皇太子命を以て勅に
代へよと也、

注釋、○監國は、天子巡行等ある時に、皇太子御留守せらるゝを云ふ、第十四條に同文あり同
断なり、

第九條

論奏式條

論奏式

無秘抄論奏の條に、太政官論奏を修む、公卿連署し大臣名字を加へ、上卿御所に就て主上に奉
す、可の字を畫し給ふ、其様詔書の覆本に同じ、
應和三年七月、公卿舊録の并行する事を停めて、新録を用ふる事を詔ふ論奏、及び康保二年三
月、同く聞の字を畫て返し給ふ、又だ延喜四年正月廿六日、立太子の論奏に、可の字を畫玉へ
けり、凡て可の字聞の字兩説か、多くは聞の字也、尋て勘ふべし、
上卷の式は、此末種々あり照考すべし、

第十條

論奏式條

太政官謹奏、其事

太政大臣位臣姓名

左大臣位臣姓名

右大臣位臣姓名

大納言位臣姓名等言、云々、謹以申聞謹奏

年月日

聞御畫

大納言位姓

右大祭祀、支度國用、増減官員、斷流罪以上及除名、廢置國郡、差發兵馬一百匹以上、用藏物五百端以上、錢二百貫以上、倉糧五百石以上、奴婢、十人以上、馬五十匹以上、牛五千頭以上、若勅授外應、授五位以上、及律令外議應奏者、非爲論奏、畫聞訖、留爲案、御畫後、注奏官位姓、

本條は、主に正税則ち國費に關係する事務に就て上奏するので、主上御覽になれば、年月日の左肩に聞の字一字を書きて返し玉ふ、其事條と云ふは、前記本文の如く、臨時の大祭とか、年の豊饒に准じて、年貢の入り不足等を來すを以て、用度を加減するとか、官員を増減するとか、

か、又た流罪以上及び除名等の犯罪を裁斷するとか、國郡の新置廢合とか、處は、兵馬百疋以上を差立てるとか、藏の物品則ち百端以上、又た錢二百貫以上、或は倉糧五百石以上、或は奴婢廿人以上、或は、馬五十疋以上、或は、牛五千頭以上、を使用する際とか、又た勅任官の他五位以上に叙するとか、又た律令の外に凶年飢饉等の如き時に賑給復給等に係る議事の上奏とか、の如き等は、皆悉く此論奏式に依りて作爲し、天皇の御覽に入るれば、天皇ヨイ（可）と思召さば、聞の一字畫きこ返し玉ふ、ソレを留めて案となし、御裁斷の後（左）に奏官の位階姓を注す也、

附 其事は、正税を用ふる事と云へるの類也、（聞は、上條の可の字の如く、年號より一寸位上げて、御裁筆になると云ふ、

第十一條

奏事式條

奏事式

諸役所の官員等が、上役所に向つて申し立てる事務が、本聞に達せねばならぬ事であるとして、ソレを本政官より上奏する時の式なり、

第十二條

奏事式條

太政官謹奏

其司位姓名等解狀、云々謹以申聞謹奏

年月日

太政大臣位臣姓

左大臣位臣姓

右大臣位臣姓

大納言位臣姓名

奉勅依奏 若更有勅語須附者、各隨狀附、云々

大納言位姓

右論奏外、諸應奏事者、並爲奏事、皆據案成乃奏

奉勅後、注奏官位姓、若少納言奏者、加名

第十三條

便奏式條

便奏式

本式は、前奏式の人の代りに役所の差ある而して小事に用ふる也、其例式條の如し、

第十四條

便奏式條

太政官奏

其司所申、其事云々謹奏

年月日

奉勅依奏 若不依奏者、則云、勅處分、云々、

少納言位姓名

右請進鈴印、及賜衣服鹽酒菓食、并給醫藥、如此小

事之類、並爲便奏、其日奏者並准此例、奉勅後、注

奏官位姓名、其皇太子監國、亦准此式、以奉勅代啓

令。

大寶令新條

第七卷

第二十二條

公式令

六二五

皇太子命令式三后亦准此式

本條は、皇太子の命せを認むる式法の令條にして、三后則ち三宮とも申す、皇后、皇太后、太皇太后も亦此式に准據せよと也、
多々羅圖答に、親王、並に各宮のをば、令旨と申し候哉、勿論に候、とあり、
式例次條にあり、

命令云々

年月日

奉令旨如右、令到奉行

亮	位	姓	名
大夫	位	姓	名

右受令人、宣送春宮坊、春宮坊覆啓訖、留置日爲案。

更寫一通施行

本條は、皇太子の命せの書式例にして、令を受主はれる人、東宮職に宣傳し送れば、職にて念の爲め何ふ事上記の勅旨式の如し、人子弟を御重きあるを案とし、更に一通を寫して施行せよと也、則ち寫を太政官に送るか、或は被替の諸役所に下す也、
條解に、年月の下に重日あるを懸察すべし、
續日本紀の寶龜元年八月庚戌の條に、人子弟、令旨を以て、道鏡を下野園樂師寺の別當に任せらる、又た
同書同年九月壬戌の條に、令旨を以て、令條外に設けたる無益の官省官位を撤止したるの例あり、

啓式三后亦准此式

本條は、東宮職より、主上に啓し上る書式にし、三后も亦此式に准ぜよと也、其式本條の如し、

春宮坊啓

其事云々謹啓

年月日

大夫位 姓名

亮位 姓名

奉令依啓若不依啓者則云令處分云々

亮位 姓

右春宮坊啓式奉令後注啓官位姓

第十九條

春宮坊啓式

奏彈式

本條は、太政大臣を除く他、親王以下、五位以上の人にて、大なる犯罪あると認めたる人に對し、奏聞の上礼問すべき上奏の舊式にして、其舊式等は次條の如し、

彈正臺謹奏其司位姓名罪狀事

具官位姓名貫屬

右一人犯狀云々

劾上件甲乙事狀如右謹以上聞謹奏

年月日彈正尹位臣姓名

聞御畫

右親王及五位以上太政大臣不在此限

有犯應須糾劾而未審實者並據狀勘問不須推拷

委知事由事大者奏彈訖留臺爲案非應奏及六

位以下並糾移所司推判

彈正の尹則ち長官不在ならば、判官以上にて奏上するを得、と上せば、其年月日の左の如し、

大寶合新解 第七卷 第二十二條 奏式合

六二九

天皇が關の一字を改竄ありて返し玉ふ、此奏上は、太政大臣を省く他、親王及び五位以上の人の犯罪ならば、本人被管の役所へ移して糾問成刑せよと也、

附註、○其司位は、何役、何位と云ふ如し、○其官位は、數官兼務を責處すと云ふ、○實屬は、本籍と云ふ如し、○勅は、胡蝶切音漸、説文に法有聲也、玉篇に推勅也、廣韵に罪人を推窮する也、數種の訓あれ共トフと云ふ訓は穩當也、獄令第卅條に其勅に推被ばとあるを參考すべし、○事大は、例之は無品親王にては、徒罪以上に當るを事大也とす、○非屬奏、は例之は、無品親王が杖罪以下を犯し、及び五位以上にては、解官に至らざるを云ふ、○糾^{きう}移^し所^{しよ}司^し、は例之は獄令の第一條に、斷府にて糾し捉へたる罪人は、京に本族籍の無き者は、皆刑部省に送り、則ち京に在籍の者は、京職に送る也、餘の役所へも亦之に准じて送れと也、

第二十一條

飛驒式條

飛驒式

本條は、早打、及び公用の旅行に要する、鞍鉤、騾馬、傳馬、騾子等を給はる禮券の番式にし

て、上下一機の例は次條にあり、委しくは、新儀式第五の廿五條又た本條第四十一條より五十條まで、及び第二意職員令第二條、太政官の少納言の項、或は、同篇六十九條太宰府、七十條大國の處を參看すべし、

第二十二條

下式條

下式

物、其國司官位姓名等、其事云々、勅到奉行。

年月日辰

鈴刺

昔は騾側に重きを置きて、特に鄭重の取扱取給りのありし事は、本條四十一條以下各條を參照すれば首肯が出来る、

本條は、緩又急なる御用のある地方官等に勅すら、其事云々にて、勅使到らば施行せよと、其證券とか鑑札とか共云ふべき此書を早打に下付あり、年月日時及び騾鈴の數、騾馬人足の微發等の數を注し込みあるもの也、但し一面より愚考すれば、騾勅使等の豫防の爲もあらう、

附註、國司は、地方官と云ふ如し、一人に非る也、○辰は、時刻也、○鈴刺、鈴は騾鈴にて、

上式

其國司謹奏

其事云々、謹以申聞謹奏

年月日守位姓名上

鈴刻

右飛驒上下式、若長官不在者、次官以下、依式署
其非國司、別從軍所上者、副將軍以上並署。

本條は、地方官、又は將軍、或は太宰府より早打を以て奏上に及ぶ書式なり、
右飛驒の上下兩式は、若し長官不在ならば、次官以下にて署名すべし、地方官に非ずして、軍所
よりならば、副將軍以上並署せよ、太宰府も亦此に准じ、少貳以上並署せよ、本文中、年月
日の下に時を記せざるは略せる也、又た姓名の下に上の字を録す事は、何れも同斷なりと也、

第三十四條

解式條

解式

式部省解申、其事
其事云々、謹解

年月日
大錄位姓名
大丞位姓名
卿位姓名

大輔位 姓名 少丞位 姓名
少輔位 姓名 少錄位 姓名

右八省以下、内外諸司、上太政官、及所管、並爲解、其非向太政官者、以代謹。

本條は、本文の如く、八省以下内外則ち中央地方の被管諸官衙が、所管の諸官衙に上る形式にして、太政官に上つる他は、謹解の謹の字の代りに以の字を使用せよと也。
例之は、仁明天皇の承和元年十二月十八日、太政官の達に、應選・定令・律問・答私・記事と題して、右得^二彼省^一（式部省）解^二、大學寮解^二、明法博士外從五位下額田國造今足解^二、云とある如く、今足が大學寮へ建議し、大學寮は被管の式部省へ上申し、式部は太政官へ上申した處が、採用ありて、遂に符^二太政官^一の達となりて出てしが如し、

第二十五條

移式條

移式

刑部移式部省

其事云々、故移。

年月日 錄位 姓名
卿位 姓名

右八省相移式、内外諸司、非相管隸者、皆爲移、若因事管隸者、以代故。其長官署准卿、長官無、則次官判官署、國司亦准此。其僧綱與諸司相報答、亦准此式、以移代牒、署名准省、三綱亦同。

本條移式は、令抄に同輩の禮也とあり、故に被管所等則ち管隸に非ざる同等的の役所同上の贈答書式にして、此に准ずるもの本文の如く、刑部省より式部省に移隸するを示して、年號の書下^二だしに錄位^一姓名を注し、年號の左肩に長官の官職位階姓を注す也、若し事柄に依り管隸する者、假如ば文官の式部に於ける、武官の兵部に於ける類の場合、故移の故の字の代りに以の字を用ふる也、而して五位以上の諸役所の長官は、其署名、卿の如く年號の左肩たり、或は略名すべきも、判官、主典にて五位を節するものは、略名は出来るが、左の肩には書せられ

符式

太政官符其國司

其事云々。符到奉行

大辨位 姓名 史位 姓名

年月日 使人位 姓名

鈴 剋、傳符亦准此

右太政官下國符式、省臺准此。若下在京諸司者、不注使人以下。凡應爲解向上者、其上官向下皆爲符

署名准辨官、其出符、皆須案成、并案送太政官檢

勾。若事會計會者、仍錄會計、與符俱送太政官

本條符式は、上の役所より下の役所へ下す達し若くは布達等の書式なり、則ち前條解式に對し、太政官より國廳に符するを示せり、准據等は本文の如し、

八省及び彈正等も所管役所へ下すには此式に准ずる也、但し在京の諸役所に下す如きは、使人以下を注さず、署名は辨官に准ず、

八省及び彈正並より符を出す時には、太政官に向つて内印の捺印を請ふ、官廳も其案を錄して出符を檢査し差闕なさと認定せば、内印を押捺して請求したる役所へ送還する也、若し其事柄が多岐多件に亘りて總計すべく者ならば、總目録を作りて符と俱に太政官に送れと也、

〔附〕鈴剋、前にあり、傳符、は傳馬發券の證券なり本篇四十二條に委し、會計、は其式三十二條より卅五條までであり、假令は、刑部省が輻輳の食品を徵收する爲に、諸國に出符する符外に別に總目録の一巻を造り出してついでにも内印を請求するの類にして、此目録は太政官に留め置くなり、之を會計と謂ふ、〇勾、は音達、本句に作る、玉篇に〇也、言語の章句也、又詞絶也、種々の訓あれ共、コ、ではサリシ(授)の意義の如し、一、賦、は職員令三十一條、

試令第二條以下處々に出せり、

れ、年號と平等たり、又た六位の長官は年號より左肩に署するを免せ共、略名は出来ぬ、長官職員又は不在なる時は、次官、判官(三等)にて署せよ、地方官も亦此に准せよ、其僧綱(僧尼令參照)の諸役所と書面の遣り取り取も亦此式に准じて移を以て釋式に代へよ、但し署名は省に准じて、律師一人、卿の所に署し、佐官は月日の下に署する也、三綱も亦同斷とす、

牒式

第二十七條

牒式條

六八

牒云々。謹牒

年月日其官位姓名牒

右内外官人主典以上、緣事申牒諸司式、三位以上去

名、苦有_レ人物名數者、作人物於前

本條は、本文の如く、在京地方を論せず、主典(四等)以上、若くは内舍人、才伎の長上或は僧尼等が、諸役所に申牒する時の書式也、但し三位以上は名を記すに及ばぬ、(官位姓だけ記す)、若し多人數多物件ある時は、牒す云々の前に八名を連記し、後に(左)物件を連記せよと也、
○牒は、説文に牒也、書板也、簡を牒と云ふ、通牒、移牒、申牒の語は今尚官衙の間に頻用せり、僧尼令第十四條參照すべし、件は、シラホと讀せり、乾の上聲、説文に分つ也、

第二十八條

辭式條

辭式

年月日位姓名辭、此謂雜任初位以上、若庶人稱本屬

其事云々、謹辭

右内外雜任以下、申牒諸司式、若有人物名數者、作

人物於云々前

本條は、雜任及び一般人民より諸役所に申牒する書式にして、前條に似たり、

第二十九條

勅授位記式條

勅授位記式

中務省

本位姓名、年若干、今授其位

年月日

中務卿位姓名

太政大臣位姓、大納言加名

大寶令新撰

第七卷

第二十二篇

公式令

六九

式部卿位姓名

右勅授五位以上位記式。皆見在長官一人署。若長官無、則大納言、及少輔以上、依式署。兵部亦同。以下准此。

本條は、勅任官の位記の書式にして、本文の如く、現在の長官則ち太政大臣、中務、式部の卿、の署名たり、若長官なくば、大納言及び二省の少輔以上にて署名せよと也、但し兵部省も亦同所、以下凡て此れに准せよと也、運使令第二條參照すべし、

【附】授は、クマツ(賜)と訓せり、

第三十條

奏授位記式條

奏授位記式

太政官謹奏、

本位姓名、年若干。其國其郡人、今授其位
年月日

太政大臣位姓、大納言加名、

式部卿位姓名

右奏授六位以下位記式、

本條は、奏任官の位記の書式則ち六位以下の位記式也、運使令第三條參照すべし、

第三十一條

判授位記式條

判授位記式

太政官

本位姓名、年若干。其國其郡人。今授其位
年月日

大納言位姓

式部卿位姓 少輔以上加名、

右判授外八位、及内外初位位記式、

大源令新解 第七卷

第二十、職

公式令

本條は、判任官に關はる位記の式にして、選叙分第二條の合條文の如く外八位、及び内外の初位の位記の舊式にして、大納言等は名を去りし也。

第三十二條

計會式條

計會式

本條は、計へ食す則ち事務を惣計する帳簿の舊式と看做して可ならん。次條は、太政官の惣計帳式、其次は地方廳の惣計帳式にして、太政官の惣計帳に應じ合すべきもの、次の卅五條は、諸校所が太政官の惣計帳に應じ合すべき式也。

附註 計會、鄭玄が周禮の註に、會は大計也、又曰く、月の計を會と云ふ、歳の計を會と云ふ、故に余は計へ食すと訓せしなり、次に帳簿と解せしも今の如く綴じたる冊子に非ず、數紙を綴接して一枚則ち一軸の長卷としたるもの也、

第三十三條

官及諸國諸司式條

太政官會諸國及諸司式

太政官

下其國、省臺亦准此

合諸卿若干。條別顯注云、爲其事。若有人物名數者、則件人物於前。

合官符若干。准前顯注。

右凡是追徵科遣、送納人物、物謂官物。人謂流徙移配及捕獲逃亡之類、除附蠲免、及解職官位、追徵位記、皆色別爲會云、其年月日下國其符、其月日付使人其官位姓名。若得返抄者、云得其官位姓名其月日返抄。若非官處分、而國司應送人物、向京及他國者、送處領處亦准此爲會。

本令條の第一行は、本條より第卅五條までの標題にして、第二行太政官とあるより以下は、太政官より諸國及び八省等に下せし詔勅の寫し若干を條別に綴じ、若し多數の人名とか、多數物

其國

合詔勅若干。准前注。
合官符若干。准前注。

右被官其年月日符下、追徵科造等事、其符、其月日到國、依符送其處訖、獲其位姓名其月日返抄、受納之司、亦依見領數爲會、若兩國自相付領者、亦准此爲會、送官對勘。

本條は、地方廳より太政官へ上る一年間の事務の總計帳の書式なり、前條を參看すれば了解せん、
〔圖〕(一)受納之司、司は地方廳也、一見は、現の如し、兩國云々は、各地方廳相互の領收、對勘は對照勘合、

諸司應官會式
第三十五條

諸司應官會式條

長次令新附 第七卷 第二十一條 公式會

六二五

諸國應官會式

第三十四條

諸國應官會式條

條別的に領せと也、
右は追喚、徵收、科備、造作、流罪人、徒罪者の移し置く事、或は逃亡者の捕獲、或は官より貸附米の免除、或は官吏の解官、位記返上等、種別に總計を作成し、或は地方廳に下せし官符の年月日附、或は某官位の某に持せて遣したとか、其返番が某官位の某より送り來たとか、又太政官の處分でなくて、地方官の處分にて、流罪人や官物を京都或は何處の國へ送つたとか、送り届けた所の役所にて受取たとか云ふ種梅に、々此に准じて、總計帳を爲れと也、三十五條の手續き書を參看すべし、
〔圖〕(一)詔勅は、素より原本に非ず、寫也、○顯注は、現し録す也、○送納人物は、人と物品の二にして、人とは流利人の移し配置を云ふ、物とは常陸の觸敏を陸奥に運送するの類也、追徵科造、追は追喚、科は科備、徵は徵收、造は造作也、流徒移配は、流罪徒利人又は僧侶を彼是の地方に移し配り置くを云ふ、委くは職令第十二條より廿三條及び五十六條或は僧尼令第十三條を參看すべし、(一)除附調免は、無利子にして官より貸附たる米及び課役等を免除する也、職員令第廿一條民部卿の項、賦役令第十一條參看すべし、返抄は、返書の如し、

其省臺及餘司皆准此。

令詔勅若干。非有人物者則不會。

令官符若干。准前注。

右被官其年月日符令納。其月日得其國解送、依數納

訖

以前應會之事、以七月三十日以前爲斷。十月上旬

勘了。被管諸司、皆於所管勘校。自餘諸司、各本司勘審、並無

漏。然後長官押署、封送太政官、國司亦准此。附朝集使、送

太政官、分遣少辨及史等、惣集諸司主典及朝集使、

對勘。若有詐僞隱漏不同者、隨狀推逐。其脫漏應附

考者、以五分論。每漏一分、降考一等。所管通計被管

爲考。辨官條錄、送式部附唱。其應會之外、公文須

相報答者、在京諸司、過一月不報。諸國、計程外、過
一季不報。每年朝集使來日、並錄送省。對唱附考。

本令條は、八省、彈正者等の諸役所が、太政官へ差出す總計帳の形式にして、大抵前條に同じ、
只地方廳則ち前條に異なる點は、各地方廳等より、毎月解送あるを辨めて上づる也、假如ば、
民部省（今云内務省の如し）が、太政官の達しを得、ソレを諸國に命令して、自米を造宮司に納
めさせ、地方官之を納め終らば、民部省此式に依て總計帳を爲るの類也、
手帳書の以前應會之事とある以下は、計會式全體に亘る手續を書なれば、前條及び前々條に必
要の文とすべし、

前年分の總計は毎年七月卅日限とせよ、勘食終らば十二月上旬までとせよ、而して被管の諸役
諸司の總計は、所管の本省に續めて、總計せよ、自餘の諸役所は其役所にて審代して脱漏なき
に至らば、所管の長官は、計帳の奥に印署し封じて太政官に送れども亦此に准じ、
歳末年始を變たる朝集使に附托して太政官に送れ、ヌレば太政官にては、少辨及び史官を分
遣して、諸役所の主典、及び朝集使を集めて對照審査せよ、對照の上、會帳に作簡、隱匿、
脱漏、不同等あらば、狀に隨て質問せよ、其脱漏して考に附すべき者は、五分を以て論斷せよ、

一分を脱漏する毎に考一等を降せよ、所管の役所は該管を通計して考を爲せよ、辦官は速に一紙して式部省に送り示せ、又た總計すべき外に、公文にて相報告すべき者は、在京諸役所は一月に過ぐる迄に報せず、諸國は道程を計ふる外に一年に過ぐるまでに報せず、毎年朝使使の上京に併記して本省に送り、然れば對し示して考に附けよと也、

○断は、限の如し、勘了は、勘査終了、朝使使は、職員令十三條式部卿の項等に解す○考は、考課令に詳也、五分は、假令は官符一通に、十件の事を載すべきに、八件しか載せて二件を脱漏せば、考二等を降すの類を云ふ、若し分に満たざれば、考を降すべからず、唯止のて最を除けと云也、(是は、考試令の邊の條を照す)○唱は、示すの如し、

第三十六條

過所式條

過所式

其事云々、度其關、往其國

其官位姓、三位以上稱卿、資人、位姓名、年若干、庶人稱本屬、

從人、其國其郡其里人、姓名、年、奴名年、婢名年、其物若干

其毛牡牝馬牛若干正頭、

年月日主典位姓名
次官位姓名

右過所式 並令依式具錄一通、申送所司、所司勘問、
則依式署 一通留爲案、一通判給

本條は、關所を通過する通券の書式也、

何々の用にて、何々の關所を超て、何々の國に往く何官何位姓と記するが、五位以上の人に渡す手形は、國名と官位姓と連駢の行に認むれ共、平出(一字上げ)には認められぬ、又た、三位以上には卿と書くべし、大臣家の家來衆等に渡す通券は、位階姓名を認むべし、但し位階を稱せざる者には、無位とせよ、一般人民には、本籍を記入し、從者僕婢及び附屬攜帶の物品馬牛等の認め方等は、本文の如し、蓋し通券は二通を爲りて所管の役所に申し送れば、保り官檢食の上、印署して一通は役所に留め、一通は本人に下付せよと也、

○過所は、關所の通券也、戰時の際に軍陣の將校兵士が、廿人以上一時に關所を通過する等の場合には、關契と云ふて、木製の札に捺印をした物を二ツに分割して其一片を過所の代りに下付する也、關市令、第一條より五條まで鑒看すべし、

因に、萬葉集卷第十五に、勅断にて陸前へ流されたる従六位上中臣朝臣老守の歌に
過所なしに 國飛越ゆる 郡公郡公

我が身にもかもやますかよはむ。

とありて、過所をフミ(文)と訓ませある也、度は、越る也、平出は、次條に委し、

第三十七條

平出式條

皇祖

皇祖妣

皇考

皇妣

先帝

天子

天皇

皇帝

陛下

至尊

太上天皇

天皇諡

太皇太后

太皇太妃、太皇太夫人同

皇太后

皇太妃、皇太夫人同

皇后

右皆平出。

本條は、上書等の如き正しきものを告ぐ時には、天子、皇后、及び天子の父母、祖父母等の内
ち一人の尊稱を指摘する時に、平頭より一字だけ上げて舊けと云ふ法を令されたる也、

皇祖

皇祖、皇祖妣は、天子のデヂ、ババ機にして、平出は曾又は高祖父母に及さずと云ふ

也、(考妣は、説文、又た禮記の曲禮では、存命中は父母と云ひ、死後には考妣と云ふと生死の
別を立つれ共、爾雅の釋親にては、其區別なし、天皇以下の各尊號は、既に條制例の初めより

三條まで詳解せしを以て、未解の事而已を爰に解せん。○蓋は、御存命中の行迹を累ねて、崩御後の稱號と爲るを云ふ、則ち天地を經緯し玉ふを文と爲し、亂を治め、正に還すを武と爲すの類也。○太皇太后は、天子の祖母の后位に登り玉へたる稱にして、妃位に居玉ふ時は、太皇太妃と稱し、又た夫人の位に居玉へば、太皇夫人と稱す、然れ共、平出する事は同斷にせよと也。○皇太后も、亦其例前の如し、(儀制令第一條參照)

緒日本紀、神龜元年二月丙申の勅に、正一位藤原夫人を尊んで太夫人と稱す云云、

第三十八條

圖字式條

大社 陵號 乘輿 車駕 詔書 勅旨 明詔 聖化
天恩 慈旨 中宮 御 闕庭 朝庭 東
宮 皇太子 殿下

右如、此之類並闕字

本令條も亦、前條の如く一社一人を指摘するに非ざれば闕字するに及ばず、例之は明神、御宇の如きは闕字に及ばず、而して、此闕字すべきの稱、行の上に當らば、闕字にせずして前條の如く平出せよと也、

○大社は、延喜式の九、十の兩卷に依れば、一百九十八箇所にして三百四座、○陵號は、世々の天子の御墓の稱、(乘輿は、儀制令に既に解す、一車駕、前に同じ、但し闕字の法は儀制令に言洩せり、詔書、勅旨は、本條第一條以下七條にあり、明詔は、詔りを尊稱せし也、(聖化は、天子の御撫さを敬稱せし也、天恩は天子の鴻恩の顯れし也、慈旨は天子皇后等の博愛の御意、)中宮は、後世皇后宮の專稱にすれ共、其實は、皇太后、太皇太后の三宮の總稱也、職員令第四條參照、因に緒日本紀卷之九、養老七年春正月丙子、同壬午、同癸神龜元年春正月戊辰、同十一月庚申及び天平寶字二年五月乙未の條等に、天皇中宮に御して諸官員に、御酒及び祿を賜ふ云々とある中宮は、皇后等を稱するに非ずして、但く宮中と云ふ文字を逆に看做して可也、(御は、四海の内を統御するに取る如し、)闕庭、朝廷、共に宮廷の一名也、

第三十九條

平闕條

凡況說古事、言及平闕之名、非指說者、皆不平闕

本令條は、博く古今の事を論說記述するに當り、其言平闕すべき敬稱辭に及ぶも、特に指摘被稱するに非ざれば、平闕するに及ばぬと也、假令は、上書しても、凡人君は、天を父とし地を母とす、故に天子と曰ふと云ふ如きは、全く一人の主上を指摘し言ひしに非ず、博く人君を云

この類皆平調に及ばぬ也、

第四十條

印 璽 條

天子神璽、謂踐祚之日壽璽、寶而不用。內印、方一寸、五位以上位記、及下諸國公文則印。外印、方二寸半、六位以下位記、及太政官文案則印。諸司印、方二寸二分。上官公文、及案、移牒則印。諸國印、方二寸。上京公文、及案、調物則印。

本條は、天子御印より、諸國の國印迄の寸法及び使用の憲法也、

本條の冒頭に、凡の字を用ひざるは、唐令にも平調の上には、此字を用へず、故に此令にも亦凡の字を以て平調の字の上に加へず、但し喪葬令第二條、第三條に、凡天皇本服二等以上の親の喪の爲めに鉤紼を服す云々、又た、凡先皇の陵には、陵戸を置きて守り命めと云々とあるは、本勅撰者の遺失誤謬にして、別例と爲すべからずと義解に云へり、

神璽は、三種神器の一也杯と云説は非也、愚按するに、天子の御印の總稱とす、璽、斯氏、璽氏の一切あり、并に言徒、説文に王者の印也、釋名に璽は徒也、物を封じ轉徒すべくして發すべからざら令むる也、又た信也、古は符與共にすれ共、秦漢以來唯玉璽のみに稱する事

と爲す、蔡邕獨斷に皇帝は六璽とあるを見れば、支那の天子は六璽を使用せられたと見ゆ、後漢

書輿服志に、璽は皆玉璽、虎紐、文に曰く、皇帝行璽、皇帝之璽、皇帝信璽、天子行璽、天子

之璽、天子信璽、の六類にして、外に大璽田玉璽なる物あり、文に曰く受天之命皇帝壽昌、と

刻せり、唐に至りて璽を寶とせり、我朝の天皇ひ御印は幾類あるか草莽の微軀等は固より伺知

するを得奉らざれ共、世に璽影の遺存とて、天平勝寶八歳七月八日、及び天平寶字四年七月二

十三日の勅書所印は、内印にして、方三寸、文に曰く天皇御璽、と朱色陽字の篆文也、又た外

印は、方二寸半にして、文に太政官印とあり、貞觀九年 月官牒、十八年 月 日官符所印は、

サハ、陽字の篆文也、因に古代の印文には陰字なし、**神璽**は、本注の如し、神祇令十二條參照

すべし、内印は、後宮職員令第五條藏司、藏員令二條、太政官の少納言の項等を參照する必

要あり、内印は、五位以上の位記、及び太政官より下す、詔書勅書、諸國に下す公文、官員の

増減、僧尼の得度還俗、驛傳を遣し、驛鈴を下し、新任、國司、兵部、器使出納、正税の使用

課役の蠲免、調庸物色を輸し、官物、公地、封貢、雜田を賜ひ、收税、或は都府の營造、罪料

の裁斷、賤民開放して良民とする事等、類には該印を捺せりと云ふ、外印は、本文の如し、

諸司は、八省、一寺、一坊、六藏、五府、諸寮、司、署を云ふ、

因に、明治維新に初めに於ては、古式に則られしが、後に至りて、内印外印の稱を廢し、御璽

大寶令新解 第七卷

第二十條

公式令

六三五

及び國號の二額と爲す、二額共に方三寸にして、御璽は専ら朝廷の大事に御用ひ、國璽は、外國に對する時に多く用ひらる也、其文には大日本國璽とあると、森野、小中村の日本制度通に

國璽の記録を引用す、

參考として、賊盜律に、神璽を盜む者は絞と、

續日本紀、和銅四年六月丙申太政官廳分、

同養老四年八月丁亥詔、

同年五月癸酉太政官奏、

同書大寶元年、夏六月己酉、新令布告、新印頒付、

同靈龜元年五月、京職印、

同二年五月、僧綱及び和泉監印、

同書靈龜元年夏四月、鍛冶司をして諸國印を鋳らしむ、

同和銅七年四月辛巳、多岐が島に印一箇を給へり、

同養老三年十二月乙酉、諸省に印を充つ、云々

第四十一條

公文捺印條

凡行公文、皆印事狀物數、及年月日、并署、縫處、鈴傳符

冠數

本條は、凡て公文を作り行ふ時は、事の件々、物の數、年、月、日、及び紙の接ぎ目、厩鈴の符、傳馬の齎付、皆其馬の數だけに捺印せよと也、

第四十二條

給驛傳馬條

凡給驛傳馬、皆依鈴傳符冠數、事速者、一日一驛以上、事緩者、八驛、還日、事緩者、六驛以下、親王及一位、驛鈴十冠、傳符三十冠、三位以上、驛鈴八冠、傳符二十冠、四位、驛鈴六冠、傳符十二冠、五位、驛鈴五冠、傳符十冠、八位以上、驛鈴三冠、傳符四冠、初位以下、驛鈴二冠、傳符三冠、皆數外、別給驛子一人、其六位以下、隨事増減、不必限數、其驛鈴傳符、還到二日之内送納

本條は、親王より初位以下に至る迄、人、公用を以て旅行する時に驛馬傳馬を給はる法令也、

凡て驛馬傳馬を給はる事は、其驛馬の鑑札、傳馬の鑑札に記し現はしたる數に依れ、急用ならば、一日に十驛以上、不急用ならば八驛、又た歸途は、事緩なるは六驛以下四驛以上の遠方とせよ、而して其人馬の數等は、親王及び一位の人には、驛馬十四、傳馬卅四、三位以上に八匹と廿匹、以下本文の如し、但し東道として、身分の高下を論せず、騎馬せし驛夫二人を附け、又た馬の口取り等は無諒附隨する事とせよ、又た六位以下八位以上は、事に隨て増減せよ、必しも數を限らぬと也、次に御用相濟み歸宅せば、二日の間に驛給及傳馬の鑑札は還納せよ、若し遲滞還納せざれば、一日百五十、毎二日一等を加へ、其十日に至る者は徒一年、傳符は三等を減ず、と律の殘條篇にあり、

附例 刑數、の事等上記の飛驒式に出せり、一驛は版牧令十四條に、每卅里に一驛と制せり、今の五里也、同十六條に驛馬は、大路に一驛廿四、中路十四、小路五匹の設備たり、委くは同篇參照すべし、一驛給十刻、傳符卅刻とあれば、如何にも給の數が十箇で、傳馬札が三十枚のやうに見ゆれ共然らず、皆各其鑑札面に記入の馬の數を云ふ也、驛子は、嚮導人也、

第四十三條

諸國給鈴條

凡諸國給鈴者、太宰府、二十口、三關、及陸奥國、各四口、

大上國、三口、中下國、一口、其三關國、各給關契二枚、
並長官執、無、次官執

本條は、各地方廳にて公用の爲め旅行する官員に、必用の驛鈴等を給渡さるゝ令條にして、何れも其府其國の長官に於て、給契を掌管せよと也、

附例 一口は、前條の卅刻と異にして、給の數廿箇也、三關は、職員令七十條、大國の守の項の本註、軍防令五十四條にあり、則ち伊勢の鈴鹿、美濃の不破、越前の荒乳、一説に江州逢坂の關と云へども此時にはなし、一關契は、關所通券の本製のものにて二つに割り、其一是關所に備へ、一は必用時に文武の官吏兵士に下渡する也、其構造は次の四十五條の隨身符の如く別式ありと義解に云へ共、今其製を詳にせず、只一種の符節と想察するの他なし、職員令七十條、後宮職員令五條藏司、尙藏の項の本註、軍防令十七條等參照、長官は、太宰帥、及び諸國の國守を云ふ、長官不在及び缺員ならば、次官にて掌管せよと也、

日本紀大化二年春正月甲子朔の詔、
續日本紀慶雲二年夏四月辛未に、太宰所に飛驒鈴八箇、傳符十枚、長門國に鈴二口を給ふ、
同書神龜三年八月乙亥、太政官の處分に、新任の國司、赴任の日、伊賀、伊勢、近江、丹波、

凡車駕巡幸京師、留守官、給鈴契、多少臨時量給。

第四十四條

京内巡幸條

同書養老四年三月乙亥に、按察使の上京巡回等に乘傳給食あり、
同年五月乙亥に、豆、鹽、伯の三國に、三刻鈴各一を給ふ、
國の例に依りて供給すと云へり、
但し、太宰府并に部下の諸國の五位以上の者には、傳符を給すべし、其餘家來共の親や船は諸
播磨、紀伊等の六ヶ國には、食、馬を給せず、志摩、尾張、若狹、美濃、三河、越前、丹波、
但馬、美作、備前、備中、淡路等十二ヶ國には并に食を給す、其餘の諸國には皆傳符を給す、
但し、太宰府并に部下の諸國の五位以上の者には、傳符を給すべし、其餘家來共の親や船は諸

凡親王、及大納言以上、并中務少輔、五衛佐以上、並給隨

第四十五條

給隨身符條

本條は、天皇が市内巡幸等ある時に、皇太子がお留守を遊ばさる、此お留守中に、火急の出来
事にてもあるかといふ、騾鈴、圓契を給はる也、鈴契の數は臨時の見込にて給へよと也、
留守官は、皇太子を云ふ、但し皇太子不在ならば、餘の官をして留守官とせよと也、
本條第十四條、便奏式の手續き文中監國とあるを參照すべし、

身符、左一右一。右符隨身。左符進内。其隨身者、仍以袋盛。
若在家、非時別勅追喚者、勘符同、然後承用。其左符、勘
訖封印付使。若使至無符、及勘有參差、不得承用。其本
司相追喚、不在此例。

本條は、親王、及び大納言以上、并に中務省の少輔、五衛府、佐官以上の人に、非常時用の合
札を給ふ法令也、

右の人達に、合札三枚宛を給へ、内一枚は袋に入れて、肌に附け、一枚は御所又は各所貼官衛
に納むる如し、是は非常時則ち出勤時間外、夜中杯、別勅等にてお召になる時に勅使に持參さ
して、其招喚の應答ならざるを證せしむる爲にして、勅使が札を持參すれば、能く調査して正
札ならば承引する也、其持參せし札は自身の札と對査して相違なければ、封じて使に付し返へ
せよ、若し使の者が、札を持參せざるか、又は對査して不齊の應あらば承引するな、併し所
屬役所よりの召喚は此例ではないと也、

隨身符は、如何なる構造なるか今詳ならず、惣括の合鑑札とか、單近の辭にすれば合
札と想像するの他なし、

但し參考としては、

桃華葉の太刀契の條に、(上略)契は、親王、大臣及び諸衛の契符也、とあれ共是亦其製詳かならず、

令抄に、唐の公式を引用して、隨身魚符の名を載すと雖も要聞を得ず、公服令第五條にある諸臣朝服中の魚袋に混同せるの處あり、諸公備考も亦混同の記載をなせり、關白兼良も、建武四年壬寅に、天德記に見ゆと云へ共確かならず、

五雜俎卷十二に、隨身魚符は、今の京官の牙牌に似たかと、京官は宰輔より小官に至るまで俱に之れあり、

左一、右一は、詳ならず、懸按するに、一枚の符に左右を證し、三分せしものか、
進内は、内裡に納めと云ふ事か、

盛は、入る、容るの如し、○退は、スズ(召)と義解に關係已一の假名ある也、○差差、は不揃、則ち不齊也、○承用は、承知、承引の如し、

第四十六條

國內總事條

凡國有急速大事、遣使、馳驛、向諸處相報告者、毎年朝

集使、且錄使人位姓名、并注發時日月、給馬正數、告事
由狀、送太政官。承告之處亦准此。太政官勘當有不應發
驛者、隨事推科。

本條は、國々に於て、大事件有て、隣國等に早打を仕立て報告したならば、毎年其使したる人の位階姓名、發足の月日、驛馬傳馬を給與せし馬數、及び事由を詳記し、歲末年頭使の上京に附して太政官に上申せよ、報を承けたる比隣の國々も亦同く官に上申せよ、然れば太政官に於て、其報告則ち上申書を調査し、早打を仕立なすも亦同く事に早打を仕立たなれば、其事に隨て處分せよと也、

推科は、處分の如し、

第四十七條

國司使人條

凡國司使人、送解至京、十條以上、限一日申了、二十條以上、二日了、四十條以上、三日了、一百條以上、四日了、

地方官が、願、伺書等を携帯して、上京する時は、其事柄十件以上は一日に申し終れよ、併し

上可に於て調査訪問等ある場合は此限に非ず、廿件以上は二日に、以上本文の如し、
【附】 二解は、上連廿四條にあり、

第四十八條

在京諸司條

凡在京諸司、有事須乘驛馬者、皆本司申太政官、奏給

本條は、在京諸役所の官吏が、驛馬に乗りねばならぬと云ふ御用、例之は、神祇官の幣帛、宮内省の御覽に依る如きの額を取扱ふ時は、其役所より太政官に上申せよ、然れば太政官より上して驛馬徴發の切符等を給與せよと也、

第四十九條

驛使途中輟病條

凡驛使在路遇患、不堪乘馬者、所有文書、令同行人送前所、若無同行人、令驛長送前所、國司差使遞送

本條は、征伐に行く軍人、及び勅使に非る使者にして、途中に於て父母の訃音に接し又は自身大病に罹り、乘馬に堪へざる者は、攜帶の御用文書をば、隨行の人に托して、目的地に送達せしめよ、若し隨行者なくば、發病地の驛長が、又は其地方廳に於て驛送りにせよと也、
【附】 前所は、行先の藩府所、遞送は驛送り、

凡國有大瑞、及運機、災異、疫疾、境外消息者、各遣使馳驛申上

凡て何れの國にても、大瑞として驟風、神龜、隄害等が顯れたとか、運機として祥災を發するの兆とか、或は災異として天火、水旱、怪變、又た流行病の類とか、或は管轄外の飢饉坏にて救濟等を請求し來たと云ふ類の非常なる變動のある場合には、何れも早打を仕立て、上申せよと也、
【附】 大瑞は、條制令第八條に既に述べり、

第五十一條

朝集使條

凡朝集使、東海道坂東、東山道山東、北陸道神濟以北、山陰道出雲以北、山陽道安藝以西、南海道土佐等國、及西海道、及皆乘驛馬、自餘各乘當國馬

本條は、毎年各地方廳より、歳末、年始を兼ねて上京する、朝集使なるものに、國の距離に依る大體令新解 第七卷 第二十二萬 公式令 六四五

りて、驛馬徴發の許可を示したる令條也、其屬々は本文の如し、

〔附〕○朝集使は、職員令一條太政官の左太辨の項にあり、坂東は、今云ふ箱根山の東、山東は信州と上州の界にある碓氷嶺の東、神濟は、義解に依れば、今の越中、越後の堺にある堺川の如くに見ゆれ共、愚按するに今の堺野と糸魚川^{イトイカハ}の間に、今之共^{トモニ}英雄神河か、又はシナノ川かもしれぬ尙後を要す、因に續紀、文武帝の大寶二年三月甲申、越中國四郡を分ちて越後の國に屬すとあり、頸城、古志、三島、魚沼、の四郡の如し、兼倉國馬は、寶鏡を出して民間の馬に乗れ、必ず驛馬を徴發する事は出来ぬと也、

延喜の雜式に、國司は、驛馬傳馬に乗られぬ、但し正税大帳使、朝集使は、驛馬に乗るを許す、國司新任の時は傳馬を許すとある也、

故事要略五十七卷に、貞觀雜格に、則ち承和十二年正月廿五日の格に、大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣放請、にて陸奥出羽及び美濃の三ヶ國よりの解にては、高等官を以て上納使等に充てありし所、各驛負擔に當みよするから、自今は四度使の外は、初位以下の子弟を差^{サシ}免られん事を請ふ云々とあり、

第五十二條

内外諸司條

凡内外諸司、有執掌者、爲職事官、無執掌者、爲散官。五

不、在武限、自餘非爲文、

衛府、軍團、及諸帶仗者、爲武、太宰府、三關國、及內舍人、

本條は、百官を大別して、文、武、現職、散官を別たる令條也、

中央地方を問はず、現任職掌を有する者を、職事官とせよ、現職なざるものを、散官と爲よ、又た五衛府、及び國々の軍團、又た帶劍者を武官とせよ、但し中務省の少丞以上、及び三關國の役人、又は內舍人等は、帶劍すれ共武官とならぬ、其餘は皆文官とせよと也、

〔附〕○職事官は、現任、又現職官と云ふ如し、家令職員令第五條一、散官、は職員令第十五條散位條にあり、

五衛府は、左、右衛門、左、右兵衛、衛士府の五ヶ處、職員令第五十九條條散位條にあり、

乃至六十二條一、帶仗は、帶刀の如し、三關國は、伊勢、美濃、越前、の三ヶ國、本條四十二條、職員令七十條、軍防令五十四條一、內舍人は、職員令三條、祿令三條、宮衛令の第十二條等に既に解せり、

第五十三條

京官外官區別條

凡在京諸司、爲京官、自餘皆爲外官

在京にある悉くの役所の役人を皆京官とせよ、其餘は凡て外官と爲よと也、

大寶令新解

第七卷

第二十二條

公式令

六四七

考課令第一條に、凡そ内外文武官とある處の義解に此文を使用しあり、

第五十四條

位階區別條

凡應敘親王、四品、諸王、五位。諸臣、初位以上。其令條
內稱階位者、正從上下各爲一階、率二階爲一位、其三位
以上、及勳位、正從各爲一位、餘條稱等者、亦與階同

本條は、親王、及び諸王、諸臣に至る階位、勳位の區別を示したる令條也、

則ち親王には四品以上、諸王には五位、諸臣には初位以上を授け、而して令條内に階位と稱す
る者は、正、從、上、下、を各一階と爲し、二階を纏め稱して一位と爲す、其内、三位以上、
及び勳位は正、從を各一階とす、餘の條文に等と云ふものは、亦階に同じと也、

字義

○親王、諸王、は繼嗣令第一條に、○階位、勳等は、官位分の各條、率は、纏の如し、
アトメと訓む、計の義ある也、

第五十五條

散官朝參席順條

凡文武職事散官、朝參行立、各依位次爲序、位同者、五
位以上、則用授位先後、六位以下以齒、親王立前、諸王諸

臣、各依位次、不雜分列、

本條は、親王を始め、諸官員の參内したる時の席順を示されたる條令也、

凡て位階に依て順序を爲よ、同位なれば敘任の先後に従ひ、但し六位以下は、年長順とせよ、
親王は、前列の最も前にて、馳道を夾みて西に立ち、諸王は其後ろに位階順を以て整列せよ、
諸臣は、一段下がりにて西側に立ち是亦位階順とせよ、共に雜然たりずして分列行立せよと也、

○職事、散官は、前五十二條、家令職員令五條及職員令十五條にあり、○齒は、昌里切

音は、爾雅釋詁に「は齒也、釋名に始也、少長の別此に始る也、又年也、又列也、禮記文王世子

に、古は年齡を謂ふ、ヨベヒと訓す、○馳道は、本文に非ず、本註の義解文也、名目抄に「一

は南庭にあり、江家次第、七日節會篇の首書に、馳道は駘路なり、南階の庭中なるべしと也、

前漢書、元帝本紀の註に應劭曰く、馳道は天子行く所の道なり、今の中道の如し云々、

第五十六條

令巡問致仕之高位者條

凡諸王五位以上、諸臣三位以上、致仕身在畿內、每季、

五位以上、毎年、並令內舍人一巡問、奏聞安不

本條は、五位以上の官人たりし者の、隱居してお殿下は勿論、五畿内に居る者に對し、中務省

の内各人として三位以上には年四回、五位以上には一回、其安否を訪問させて、卒園に達するの令條也職員令第三條中移卿の項、考問の處、軍防令第十九條等參照すべし、

不は、否に同じ、

第五十七條

彈正別勅條

凡彈正、別勅令權檢校餘官者、不得仍知彈正事。

彈正春の少佐以上の官員が、特別の勅に依りて、假りに暫時他の官職を兼務すれば、其間は彈正の事務等は知らぬともよいと云ふ如の令文也、

權は、官職名に用へしは唐名を以て始めとす、字書に攝官を云ふとあり、還敘令八條の本註參照、**檢校**は、檢食の如き字なれ共、コ、では兼務を含むものとすべし、次條を參照すべし、

第五十八條

兼攝官條

凡内外官、勅令攝他司事者、皆爲權檢校。若比司者、則爲攝判。

本條は、勅にて他役所の事を兼務する名稱の令條也、

内外の諸官員をして、勅にて他役所の事務を兼攝せしめば、皆權檢校と云へ、假令は式部の大又た少丞が、兵部省の大又た少丞を兼攝せば、式部丞、正、從、兼位權檢校兵部の丞姓名と注すの類也、若し又た同一所管の内にて兼攝せば、攝判と爲よ、假令は、主計の助が、主税の助を兼ねるを判とす、兩京共に同一なる兵部省の所管なれば也、故に主計助、正、從、兼位判主税助謹某と注すの類也、

攝は、兼の如し、權檢校は、還敘令第八條參看すべし、比司は、同一被管の諸役所を云ふ、例之ば、民部省の主計、主税の二京、兵部省ならば兵馬、造兵二司等の如し、**攝**判は同被管内の甲乙の役所の兼務を云ふ、

第五十九條

百官宿直條

凡内外百官、司別量事閑繁、各於本司、分番宿直。大納言以上、及八省卿、不在此例。謂尋常時。

本條は、宿直の法令也、則ち大納言以上、八省の卿の他は、皆尋常は番々に宿直せよと也、

第六十條

京官上下條

凡京官、皆開門前上、閉門後下。外官、日出上、午後下。

大寶令新解 第七卷 第二十二篇 公式令

六五二

務繁者、量事而還。宿衛官、不在此例。

附註 本條は、官人の升進退職時間を示したる法令也。

附註 上は、葬れ也、前上は第二兩門太鼓の前にツガンを云ふ、下は、退け也、官衛令第四、五條參照すべし、

第六十一條

請勅及案件條

凡詔勅、及事有促限、并請給過所、若輸受官物者、不在假

限

本條は、促急を要する、請勅、及び顧問等の自時に關する法令也。

附註 促限、促は迫也速急の如し、故に時間に限るを云ふ、過所は、前に式あり、圖所の手形也、不在假限、假は假令の假の字にして假の字と同じ、故に休日もかまはぬと云ふ也、

第六十二條

受付條

凡受事、一日受、二日付畢。其事速、及見送囚、隨至即付。

少事、五日程。謂不須檢覆者、中事、十日程。謂檢覆前案、及

有所勸問者、大事、二十日程。謂計算大簿帳、及須諮詢者、獄案

四十日程。謂徒以上辨定須斷者、其文書受付日、及訊囚徒、

並不在此程限。若有事速、及限內可了者、不在此例。其判

召者限三日。若不至判待。待後二十日不至、主典檢發、

量事判決。則事有期限者、不在此例。太政官施行詔勅、

案成以後頒下者、給寫程、五十紙以下、一日程。過此以外、

每五十紙以上、加一日程。所加多者、惣不得過三日。其

敕書、計紙雖多、不得過一日。則軍機急速、事有促限者、

皆當日出了。若本司人少、量程不濟者、並聽充比司人協助

本條は、事物の大小小に依て、諸役所の受け及び付くる日限を制定したる令條也、

假令ば、太政官の辨官が、事を受けて係り役所へ頒付するに今日受くれば、明日に遣りてしま

へ、其事柄軍機に關して急送を要するか、又た現に、囚人杯を送り來りし等ならば、到來毎に係り役所へ送付せよ、而して、小事は五日間、中事は十日、大事は廿日、訴訟に對する斷案は四十日、

但し文書を受け授けるの日、罪人尋問等致し居らば、右日限でなく共よ、併し軍柄嚴達を要するか、或は是非其既定日限内に終結せねばならぬ事は是亦此限に非ずと也、又た軍情の爲め、原被を召喚する日限は三日間を限れ、三日を経過して出廷せざれば、廿日間は待てやれ、廿日間経過し、尙出廷せざれば、係り主典に於て缺席裁判を致せ、然れ共其事、期限あらば此例に非ずと也、

太政官の施行せんとする、詔書、勅書の文集成るの後、謄寫する日限は、五十枚以下は一日とし、以上は五十枚毎に一日宛を加ふと雖も、總て三日間より過す事はならぬ、又た大赦に關する書類は、紙數多きも一日より謄寫に費すべからず、又た軍事上嚴達を要する書類は、即日に出して終へ、若し係り役所の役人計りにて、手不足ならば同所管の役人等をして手傳はしめよと也、

附録 受付は、太政官の辨官が、事を受けて諸役所に頒付する也、付は下付とか頒付とか又は授くの義也、職員令二條、太政官辨官の項參照、○見は、現、○送因は、職員令第三十條刑部卿の項、職員令第一條の末項則ち在京の諸司、徒以上は刑部に送れと云處を參考すべし、○小

事は、職員令十六條、治部卿の項、儀制令第八條の祥瑞の如き検査を要せざる類也、○中事は、主税寮の青田を調査せし帳簿を檢査する類、大事は、正税大帳を精査計算し、出賃問を要するの類、賦役令第五條參照すべし、○賦案は、民事刑事の判決原本其云ふ如し、職員令三十六條治部省、大解部の項、同州條刑部省の大解部の項參照すべし、出了は、イダシ終り也、比司は、同所管の役所、估助、估は詩經に估特としてくゝミたのびの調あり、ハは、俗言手傳或は助手の如し、

第六十二條

訴訟條

凡訴訟皆從下始、各經前人本司本屬、若路遠、及事礙者、經隨近官司斷之、斷訖訴人不_レ服、欲上訴者、請不理狀、以次上陳。若經三日內不_レ給聽訴人錄、不_レ給官司姓名以訴官司准其訴狀、則下推不_レ給所由、然後斷決、至太政官不理者、得上表。

本條は、訴訟に關し、第一審則ち初審より、第三、若くは第四審迄訴、上告するを得、尙其

上へ上表する事を得るを示せる令條也、

凡て初審は、官吏ならは現奉職の役所、人民ならは郡役所、若し遠隔其しきとか、何か故障あるとかならば、本人現住最近至便の役所へ訴へ、判決宣告の上は、訴人に於て不服にして上訴せんとせば、其不服の理由を申し立て、上訴三日間を過ぎて、初審の役所が取次を怠らば、係り官の姓名を致して上訴すべし、然れば受訴役所(第二審廳)は、前の係り官を札問の上裁判する也、此の如くにして太政官の裁決を仰がるゝなり、若太政官の判決を不條理と思はば、上表せしめたり、特に本令條に至つては威泣せざるを得ざる也、

〔考〕 訴訟、訴は冤を告ぐるを云ふ、冤は附地杜曲也、訟は、財を争ふ也、 從下は、人民ならは郡役所へ第一に訴へ、次に國廳、次に刑部省、次に太政官と云如し、但し京都は京職よりする故に、地方より一役所少なき譯となる也、 路遠とは、一日旅行以上を指す、則ち宮衛令廿一條の下番の兵衛、及び斷獄律の囚人を移す條等皆一日間行く道程を以て遠路とせり、事礙は、障害なり、

第六十四條

追捕對問條

凡訴訟須有追捕對問者、若其人延引逃避、兩限不赴對者、

聽越次上陳、則爲推治、

本條は、前の六十二條と稍重複的の故ある令條也、

本條は、追捕喚、對決するに、其相手方は逃げ隠れをして延引し、三月乃至廿日間厭過するも出廷せざれば、前六十二條の主典が缺座裁判すべき筈なるに、是亦さうされば、又々上訴をせよ、然れば受訴の役所にて札問し治めよと也、

〔考〕 追捕は、追捕喚の如し、(所限は、六十二條にある二日二十日の事を云ふ、推治は判決の猶し、

第六十五條

陳意見欲封進條

凡有事陳意見、欲封進者、則任封上、少納言受得奏聞、不須開看、若告言官人害政、及有抑屈者、彈正受推當理、奏聞、不當理者彈之、

本條の意見書は上表に非ず、然れ共忠志忠正にありて、國家の利害を披陳して、太政官に封進す

る也、封進書を少納言開封せずして奏聞に達せよ、若し其封書の意見が、官人の惡政壓制等を陳述しあるならば、彈正等に於て札問し、條理當然と認めば奏聞し、不當理ならば彈劾札問し、事

刑徒罪以上と認めば刑部省へ送れども、第十九條参照式參考すべし、

〔任〕は、隨意の猶し、○受推、は受理顧問の如し、(不當理は、今附々報告の如し、

彈は、私彈、

第六十六條

公文條

凡公文、悉作眞書。凡是簿帳、科罪、計賊、過所、抄勝之類、有數者、爲大字。

公文等は凡て楷書にかけ、帳簿或は手形の類は大字に書けども、

〔眞書〕は、楷書、科罪は、宣告書の如し、計賊は、贓品帳の如し、過所は、過所

の通券○抄勝、抄は返抄則ち返書の如し、防は門標即ち標札類の如し、

第六十七條

科給官物條

凡科給官物、上抄之日、具載匹丈斛斤兩數、供給之處官司姓名。

凡て官品を給與下付の時には、帳簿記載を嚴にし、具さに其數目及び供給する處の役所の役人の姓名を記載しおむとも、

○上抄は、書きのぼす、即ち記載の猶し、

第六十八條

授位任官日喚辭條

凡授位任官之日喚辭、三位以上、先、名、後、姓。四位以下、先、姓、後、名。以外、三位以上直稱、姓。若右大臣以上稱官名、四位、先、名、後、姓。五位、先、姓、後、名。六位以下、去、姓、稱、名。唯於太政官、三位以上稱大夫。四位稱、姓。五位、先、名、後、姓。其於寮以上、四位稱大夫。五位稱、姓。六位以下稱姓名。司及中國以下、五位稱大夫。

本條は御所に在りて授位任官の際に、其高下に依りて召さる辭と、各官衙にありて、各官を稱呼する詞ばを示したる令條也、

〔授〕先、名、後、姓とは、假令は喚んで、秦の萬呂の宿禰と云ふの類、四位以下は、五位以上

を云ふ也、○直稱、名は、秦の宿禰と云ふ類也、○先、姓、後、名は、秦の宿禰萬呂と云ふ類也、

去、姓、稱、名は、直ちに秦の萬呂と云て宿禰を稱せざる也、以上は授任の日及び其他の日にも

通じて稱ふ也、○寮は、藩役所也、官位、職員の一令にあり、○司も、亦前の如し、○大夫は、

西鑑類函九十七卷等に諸説あれ共、こゝにては略と看做す方適當なるべし、

横日本紀卷八、元正天皇養老五年（千三百八十一年）、冬十月癸未に太政官廳分すらく、考を唱

ふの日、三位は卿と稱し、四位は姓を稱し、五位は名を先きにして姓を後にす、自今以去永く

恒例とせよ、

源氏物語に、只今殿上に誰々かト問はせ給ふに、中務のみこ（親王）も、つきのみこ（上野の

皇子）中納言源朝臣などさむらふ（侍）とさうすこゝ（花鳥餘情に（上略）御前にて人を召す

時は、其人の官姓尸を本する事なり（詔令備考）

第六十九條

奉詔勅條

凡奉詔勅、及事經奏聞、雖已施行、驗理、灼然不便者、所

在官司、隨事執奏、若軍機要速、不可停廢者、且行且奏、

則執合、理者、量事進考、知而不奏、及奏不合、理者、亦量

事貶降、

詔勅を奉じてとか、又た奏聞に達してとかして、何事をか施行せんとか、したとかと雖

も、其事柄を思考すれば不都合の處あるとか、又た實際不都合であるとかならば、所在の役人

に於て隨事執奏せよ、若し軍機上機密に具りて驍速を要するとかして、停止、廢止の出來ざる

場合は、一事實行して一事をば奏せよと云事に致せ、而して其執々々道理に協へば、事を就

りて考進せしめよ、又た之に反し、不都合の處あるを知らながら執奏せぬとか、或は執奏する

も條理に適はざる不都合の執奏は、其事を量りて貶降せよと也、

【考】 驗理は、道理を考ふる也、灼然、は明瞭の猶し、（油は、執々、進考、貶降、は

考課令にあり、

第七十條

軍機密事條

凡驛使至京奏機密事者、不得令其人語、其蕃人歸化者、

置館供給、不得任來往

早打が軍機及び秘密の事柄を携へて京に至り來せば、人と共に言葉を交へかほさするな、又た

外國人が歸化せば、別に家屋敷を設け、ソレに住居させよ、隨意に内國人と往來するなと云

ふ也、

第七十一條

諸司受勅條

大波合新解 第七卷 第二十二篇 公式合

六六

凡諸司受勅、不經中務徑來、及宣口勅者、不得承用。若奉口勅案物者、不須經中務、所司承勅則進。仍附狀奏。

六三二

本條は、諸役所が直接的に勅を受けまはりし事に就ては、中務省を經由せずして直ちに御所へ還事に參れ、併し口勅を以て、一旦中務へ宣へし事に就てならば、中務省を飛越す事はならぬ、又た口勅を奉じて、物を索ひるの如きは、是亦中務省を經由するに及ばぬ、直ちに御所へ還れ、而して奏聞の後ち太政官に上申せよと也、
○諸司は、諸役所、○口勅は、天子の命せ、○所司、指定の役所、
第七十二條 事有急速條

凡事有急速不合出勅旨、若事緣太政官恐遲緩者、中務先移所司、其正勅後行。

本條は、勅旨を出す正式にする暇のなき非常急用の生じたる時の勅旨の手續也、
假令は、急速に急徵等を用ふべき事あらば本篇第八條の勅旨式の手續を履行せねばならぬ法なれ共、左様致せば、事機を失するの恐れあるを以て、中務省より、太政官を經由せずして、直ちに大藏省に移展する類にして、其アトで正式の勅旨式を行へよと也、

凡官人判事案成、自覺不盡者、聽舉牒追改。

官人判事條

凡て官吏は、事を裁判し、文案を編成したる後に至りて、尙慮ざる所あるを自覺せば、追改する事を許せと云ふ也、
○舉牒は、上げ記すの猶し、
第七十四條 詔勅宣行條

凡詔勅宣行、文字脫誤、於事理無改動者、勘驗本案、分明可知、則改從正。不須覆奏。其官文書脫誤者、諸長官改正。

本條は、詔書勅書の宣行を始め、太政官の文書等の文理文字の脫誤に就て改正するの介條なり
○宣行は、本篇第六條に、(脫誤、例之ば、中務省を中省、甲申を甲由と記せし如し、
○覆奏、詔書は太政官覆奏す、勅書は中務省覆奏す、
第七十五條 詔勅頒行條

凡詔勅頒行、關百姓事者、行下至郷、皆令里長坊長巡歷

部内、宣示百姓、使人曉悉。

詔、勅書を頒行あるに、其事人民に關せば、町、村長をして部内を巡廻せしめ、其趣旨をば言
く人民に説き聞かして曉く合點せよと也、

第七十六條

下司申解條

凡下司申解、雖無理、及事不盡、皆爲受取、以狀下推其
事理實盡、安有盤下、及有理抑退者、聽越次申請、則上
符理有不盡、亦聽執申。

本條は、下級官廳、官人より、上級の官廳へ申請、上申する事例が、特に理由もなく又た事意
の盡さざる處ある共皆各受理せよ、然る上其事柄に依て待問せよ、而して其事理既に盡しある
に、尙安りに不必要の文字を臆列しめるとか、又た道理を抑へ退けあるとかの類は、他日改め
て再び差出さるを許せよと也、則ち上級官廳よりの達し、及び布達文も亦其理を盡さざる點
あらば、修正等をする事を申し上げるを聽許せよと也、

附例 ○下司は、下級官廳、官人、下推は、尋問の如し、(盤下、盤は盤桓不達の意也、○
上符は、上級官廳の達、布達、○執申は、執事と上申或は申達の如し、

第七十七條

諸司奏事條

凡諸司奏事、皆不經長官、不得轉奏。若有機密、及論長
官事者、不在此例。

諸役所、諸役人より事を奏するには、必ず所屬長官の手を経ざれば奏上する事はならぬ、然に
共、事、軍機に關し、秘密に係るとか、又たは所屬長官の事を論する如きの申奏は、此例に非
ずと云ふ也、

第七十八條

須貢保條

凡須貢保者、皆以五人爲限

入り百姓の類を請求せば、皆五人を限りとせよと也、

附例

保、は戸令九條十條及び獄令第二十三條、四十條にあり、(貢、は請ふ也、

第七十九條

受勅出使條

凡受勅出使、辭訖、無故不得宿於家。

本條は、勅命を蒙りて使者に出るに、事故なくして自家に宿する事はならぬと也、軍防令の十
八條とは其意相異なる也、

大寶令新解

第七卷

第二十二篇

公武令

六六五

六六四

京官出使條

第八十條

凡京官以公事出使、皆由太政官發遣、所經歷處符移、辨官皆令便送、還日、以返抄送太政官、若使人更不向京者、其返抄付所在司。附便使送、則事速者、若專使送

京都内の官員が、費用を以て使者として出る時は、并太政官に附けて出發させよ、而して、八省、彈正臺、五衛府、兵庫、諸寮、諸司等より、各地方廳に下すべき移牒等は、皆太政官の辨官に送りて、内印を請求し、便使に附して送り下すべし、使者歸京の上は、各地方廳より領收したる返書を太政官に送れ、若し使者が片使りにして、歸京せざるの場合は、其返書は到り留まる所の役所に附し、便使に托して送らしめよ、若し事至急を要せば應々使者を差立てよと也、
附 ○符移は、本篇、二十五、二十六條にあり、○内印は、同四十條にあり、○所在司は、到り留る所の國廳を云ふ、假令は、陸奥の守又は介に任せられ、其赴任の際に、通行の各地方廳へ、中央官府の諸役所より送する文書を托されて、路次配り附けて返書を得て任地に往き、新任地より京に送る、此等を片使りと云ふ也、○專使は、ワザ使、

第八十一條

責返抄條

凡諸使還日、皆責返抄、

本條は、種々の使者が、地方へ出て、御用先きの國郡司に返書を乞へよと云ふ也、
附 ○責返抄、は返書を乞ふ也、

第八十二條

案成條

凡案成者、具條納目。目皆安軸、書其上端云、其年其月其司納案目、每十五日、納庫使訖、其詔勅目、別所安置、本條は、太政官に於て、諸官衙より来る處の書類を一々區別して、其各軸の最も見易き處に目安を注して搜索に便ならしむるを示したる介條也、他し詔書、勅書、目録は、別の處に附けよと也、
附 一條納目、は藏むる處の目録を一々區別するを云ふ、○安軸、一日に一軸を附けて置くを云ふ、軸の上端に、收納の役所、年月を表記する也、但し毎月二回（十五日毎）宛納庫と云ふ、安は附ける也、
因に、其の字をば、立野春節本には、某年と板刻して、下文二ヶ處は其月、其司とあり、書入本には皆悉く其を某にせり、端本は皆其の字を用ふ、全介條中に某の字を使用せし處殆んどな

きが如し、故に大賀、養老の時代には某の字は使用せざりしものと見ゆ。

第八十三條

文案條

凡文案、詔勅奉案、及考案、補官解官案、祥瑞、財物、婚、田、良賤、市估案、如此之類常留、以外年別檢簡、三年一除、之、具錄事目爲記、其須爲年限者、量事留納、限滿准除、

本條は、高敞の書類の保存期限を豫示したる令條にして、詔書、勅書、上奏、及び考第、補任、解任、祥瑞、財物、五位以上の妻妾の戸籍、田籍、田圃、良民、賤民、市估物價、等の書類は留め置くを要すれ共、其他の書類は毎年檢閱選擇して、三年に一回宛反古にせよ、但し反古にする時には、何々を反古にしたとして、其條目を具に録し遣こせよ、又た年限の満ちたるものは皆夫々に法規に従ふて遺留し納め置けよ、而して年限滿れば、前記手續の如くにせよと也、

○詔勅奉は、本篇の初め、及び職員令三條中務卿等の項を參看すべし、考は、考課令を參看すべし、○祥瑞は、儀制令の八條にあり、○市估、估は、公戸、果五、公土、並に香古、市税又は物貨を論ずる也と字書に云へり、唐書の陸長源傳に、鹽價を高くし、市估を賤くす、云々、アタヒ、ツルの調あり、職員令六十六、七條京廩、市司の條、並に關市令の十條以下を

參看すべし、

第八十四條

任授官位條

凡任授官位者、所任授之司、皆具錄官位姓名、任授時年月、貫屬年紀、造簿、其任官簿、除貫屬年紀、官人連署印記、若有轉任身死、及事故以理去任者、則於簿下朱書注之、其有考解、及犯罪除免者、解免之司、亦錄解免之狀、准前造簿、仍錄報元任授、除注簿案、若除解人得敘用者、敘用之司、錄報解處所司除簿、則未敘之間、在本貫身死者、申刑部注除、其餘色、依職掌應造簿者、並准此

本條は、敘任する所の官階に於て、被任者の官位、姓名、年齡、任時年月日、屬籍等を詳録したる帳簿を調製し置き、係り官に於て各人の下に捺印し置き、若し係りの者、轉任、或は死去或は辭任の場合には、其帳簿に其事を朱記し置けよ、而して考第に落第し、爲めに解司則と解任、又た犯罪の爲に免職等の時も亦其解免の事狀を詳録す事、前帳簿の如し、則ち元の

官位を録し報して、帳の消し入れせよ、若し又た、解任者が、更に任用されるば、任用の役所より、翌日に解免したる役所へ報告して帳消しをさせよ、又た再任せざる内に死去せば、刑部省或は太政官、或は式部省へ申告して、官籍位籍を除けと也、其他の者は、職掌に依りて、官員名簿を翻製する事は、右に准じて造れよと也、

〔解説〕 〇解免之司、解司は式部省を云ふ、免司とは刑部省を云ふ、假令は考第に依りて、解任すべし、式部省が其狀を録して太政官に具申し、官の達しを待ち得て解済を造る也、又た犯罪の爲め、除免すべき者は、刑部省が断定して太政官に上申し、奏上の報來りて則ち免簿を造るを免司とせり、但し五位以上は、式部省に於て其考第を定むる事はならぬ、故に此時には、太政官を解司と爲す也、職員令の同名官省、及び考課令を參考すべし、役用之司、用司は太政官、録司は式部省也、假令は、考解の人を更に復任せしめんとか、又た除免の人が時効を得て復役する等の時には、太政官より式部省に報じ、式部省より刑部省に報するの類也、

第八十五條

授位按勳條

凡授位按勳之類、應須惣奏、而有勘當未盡者、隨見盡者、奏之、不得停待致令擁滯。

授位、按勳の類は、總て奏上すべし、若しソレに關して調査の精進さる所あらば、現在に依りて奏上せよ、必ず延引擁滯せしむる事はならぬと也、

〔解説〕 〇勘當、的當の檢食と云ふ辭し、〇見は、現也、〇擁滯、サヘギル、トベコホルと訓ず

第八十六條

官人父母條

凡官人父母、病患危篤者、不得差延遣使。

官員の父母が病氣に罹り、危篤の際等には、其官更をして遠方へ遣す使者等には差延る事をするなどの令條也、

第八十七條

外官赴任條

凡外官赴任、子弟年二十一以上、不得自隨。畿内任官、不在此限、其須觀問者聽。

地方官に住せられて、地方に赴任するに、子、孫、弟、姪等の年齢廿一年以上の者を攜帶しはく事はならぬ、但し畿内の赴任は此限に非ず、併し暑寒見舞等の如き訪問に赴せとの令條也、**〔考案〕** 親問、現は、渠者、具各切、並に普儀、下たる人の上つゝの人に比ゆる也、

第八十八條

行程條

大寶令新解 第七卷 第二十二篇 公式令

六七二

凡行程、馬日七十里、步五十里、車二十里。

1152

第八十九條

○所在官司は、初めて著く上陸地の係り官を云ふ、○處所は方國所在の處也、○風俗、

[illegible]

陸美昌保著

大寶令新解

四終

越中 橘井堂藏

大寶令新解第四冊目次

第八卷

第廿二篇 倉庫令

一	倉庫建築條	六四
二	受地租條	六四
三	米品出納條	六五
四	倉品量出條	六六
五	倉藏給用條	六七
六	雜品出給條	六七
七	稻穀支防條	六八
八	置公文倉儲條	六八
九	現正巡察條	六九
一〇	國庫等物送京條	六九
一一	事務引繼條	七〇
一二	不足品辨償條	七〇
一三	賦負官倉條	七一
一四	官物缺失條	七一

目次

第廿三篇 既收令

一五	隱藏貨用條	六二
一六	割取交易物直條	六二
一	馬丁馬槽條	六五
二	馬戶調草條	六五
三	脂藥療病條	六六
四	牧長採用條	六七
五	牧員制定條	六七
六	牛馬飼養條	六八
七	牧員賞與條	六八
八	馬牛死奉條	六九
九	馬牛亡失條	六九
一〇	馬牛籍調製條	七〇
一一	牧草地保護條	七〇
一二	牧馬校印條	七一
一三	軍馬養成條	七一
一四	每驛馬數條	七二

第廿四篇 置集令

一五	驛長條	六七
一六	諸道驛馬條	六八
一七	水路船舶條	六九
一八	驛傳馬總替條	六九
一九	軍馬調習條	七〇
二〇	驛傳馬檢査條	七一
二一	驛傳馬乘用條	七一
二二	傳馬手當條	七二
二三	逸失馬牛處分條	七三
二四	逸失畜類届出條	七三
二五	馬牛籍送達條	七四
二六	死亡馬牛處分條	七四
二七	乘用中馬牛死	七五
二八	亡條	七五
二九	馬牛途中發病條	七六
三〇	驛傳士採用條	七七

一	出關條	去
二	關津出入順序條	去
三	向使關條	去
四	乘馬通關條	去
五	丁匠等度關條	去
六	兵器條	去
七	外國人入關條	去
八	官司交易條	去
九	禁物條	去
一〇	關門開閉條	去
一一	市場條	去
一二	市場整理條	去
一三	官私交易條	去
一四	權衡度量條	去
一五	權衡用法條	去
一六	奴婢買賣條	去
一七	賣品條	去
一八	應買高價條	去

第廿七章 關市令
關所通券下付

一	醫生等採用條	去
二	醫針生受業條	去
三	實地練習條	去
四	專門醫學生條	去
五	試檢制度條	去
六	選古知新條	去
七	專門科年限條	去
八	醫學生受職條	去
九	東條行禮條	去
一〇	散官教授條	去
一一	代診條	去
一二	式部省考試條	去
一三	按摩咒禁學科條	去
一四	難檢禁止條	去
一五	女醫養成條	去
一六	諸國醫生條	去
一七	諸國醫官教授條	去
一八	國醫生試驗條	去
一九	藥園條	去
二〇	製藥條	去

第十卷

一	逃亡人追捕條	去
二	盜賊追捕條	去
三	罪人追捕條	去
四	人畜貨物亡失條	去
五	捉盜給賞條	去
六	姓名不明死人條	去
七	逃亡奴婢捕獲條	去
八	送捕獲奴婢條	去
九	賞與條	去
一〇	逃亡奴婢犯罪條	去
一一	逃亡奴婢償直條	去
一二	奴婢訴良條	去
一三	賭博條	去
一四	奴婢墾子條	去
一五	拾得物條	去

第廿八章 捕亡令
市場定價條

第九卷

一	給休罷條	去
二	定省假條	去
三	遺喪給假條	去
四	無服假條	去
五	師經受業條	去
六	改葬條	去
七	開喪哀條	去
八	給喪假條	去
九	喪日開始條	去
一〇	官人擔任條	去
一一	所服條	去
一二	探藥師條	去
一三	御藥調劑條	去
一四	供御藥餌試驗條	去
一五	五位以上給藥條	去
一六	配藥條	去
一七	煎診救療條	去

第廿五章 假事令

一	風雨於祀神地條	去
二	符咒徒逆條	去
三	再審條	去
四	覆囚使條	去
五	大辟罪三覆奏條	去
六	斷罪行刑條	去
七	大辟罪決行地條	去
八	大辟罪監決條	去
九	無親戚囚人死	去
一〇	亡條	去
一一	有位者犯罪	去
一二	未決中死亡條	去
一三	流罪人到配所條	去
一四	流罪三等條	去
一五	流罪人官量配條	去
一六	返送死囚條	去
一七	流罪人給釋假條	去
一八	流罪人終身罰	去

第廿九章 職令

一	外官任監條	去
二	外官使人問責條	去
三	外官任監條	去
四	在京官三位以上條	去
五	在京官三位以上條	去
六	在京官三位以上條	去
七	在京官三位以上條	去
八	在京官三位以上條	去
九	在京官三位以上條	去
一〇	在京官三位以上條	去
一一	在京官三位以上條	去
一二	在京官三位以上條	去
一三	在京官三位以上條	去
一四	在京官三位以上條	去
一五	在京官三位以上條	去
一六	在京官三位以上條	去
一七	在京官三位以上條	去

第廿六章 吏職令

七	陰陽家斷生條……………八七
八	秘書條……………八七
九	無山私掩條……………八七
一〇	異實異本條……………八七
一一	材木深失條……………八七
一二	取水源田條……………八七
一三	要路津清條……………八七
一四	五位以上給牀席條……………八七
一五	主典以上給坐席條……………八七
一六	因使得開條……………八七
一七	訴訟期限條……………八七
一八	不得私買家長物條……………八七
一九	以財物出舉條……………八七
二〇	以稻粟出舉條……………八七
二一	利物給札人條……………八七
二二	得宿藏物條……………八七
二三	吉產寄人條……………八七

一七	流寄人再仕官條……………八七
一八	遷徒配居役條……………八七
一九	流徒入居作條……………八七
二〇	桂流囚在役條……………八七
二一	流寄人控中分……………八七
二二	親族刑條……………八七
二三	流寄人控中連……………八七
二四	姪婦在職條……………八七
二五	死罪婦人產子條……………八七
二六	父祖犯罪條……………八七
二七	官人參配條……………八七
二八	除免官當條……………八七
二九	親屬官人不得入內條……………八七
三〇	職狀廢職條……………八七
三一	未斷決違格改條……………八七
三二	告官人解條……………八七
三三	報告條……………八七

二四	興販條……………八七
二五	私用旅行條……………八七
二六	文武官進新條……………八七
二七	進新檢査條……………八七
二八	給炭條……………八七
二九	番使往還條……………八七
三〇	犯罪被戮條……………八七
三一	官戶奴婢死亡條……………八七
三二	奴婢休暇條……………八七
三三	奴婢宛役條……………八七
三四	奴婢給衣服條……………八七
三五	親屬賓客條……………八七
三六	外任官人條……………八七
三七	公解雜物條……………八七
三八	僧籍條……………八七
三九	作盜罪條……………八七
四〇	節日條……………八七
四一	大射條……………八七

外附錄十六頁

三四	以誘引人爲徒……………八七
三五	召條……………八七
三六	誤四條……………八七
三七	死罪訴冤枉條……………八七
三八	罪四條……………八七
三九	義四條……………八七
四〇	重入請刑條……………八七
四一	重刑條……………八七
四二	文條……………八七
四三	五條……………八七
四四	五位以上犯罪條……………八七
四五	奉使持攝條……………八七
四六	男女所條……………八七
四七	長官條……………八七
四八	地方監獄條……………八七
四九	重罪人發賣條……………八七
五〇	忌選中簡條……………八七
五一	位記職條……………八七
五二	國有財產條……………八七

五二	贖死刑條……………八七
五三	獄官給馬馬條……………八七
五四	獄囚疾病條……………八七
五五	獄囚給衣糧條……………八七
五六	樂條……………八七
五七	流罪人給官糧條……………八七
五八	官物毀損條……………八七
五九	放廢條……………八七
六〇	資財入官條……………八七
六一	辨證已定條……………八七
六二	偽損報告條……………八七
六三	利具及拷訊條……………八七
六四	度量衡衡條……………八七
六五	度量衡衡條……………八七
六六	度量衡衡條……………八七
六七	度量衡衡條……………八七
六八	度量衡衡條……………八七
六九	度量衡衡條……………八七
七〇	度量衡衡條……………八七
七一	度量衡衡條……………八七
七二	度量衡衡條……………八七
七三	度量衡衡條……………八七
七四	度量衡衡條……………八七
七五	度量衡衡條……………八七
七六	度量衡衡條……………八七
七七	度量衡衡條……………八七
七八	度量衡衡條……………八七
七九	度量衡衡條……………八七
八〇	度量衡衡條……………八七
八一	度量衡衡條……………八七
八二	度量衡衡條……………八七
八三	度量衡衡條……………八七
八四	度量衡衡條……………八七
八五	度量衡衡條……………八七
八六	度量衡衡條……………八七
八七	度量衡衡條……………八七
八八	度量衡衡條……………八七
八九	度量衡衡條……………八七
九〇	度量衡衡條……………八七
九一	度量衡衡條……………八七
九二	度量衡衡條……………八七
九三	度量衡衡條……………八七
九四	度量衡衡條……………八七
九五	度量衡衡條……………八七
九六	度量衡衡條……………八七
九七	度量衡衡條……………八七
九八	度量衡衡條……………八七
九九	度量衡衡條……………八七
一〇〇	度量衡衡條……………八七

第三十篇 雜令

大寶令新解 第八卷

第二十二篇 倉庫令

凡拾陸條

本府は、重遠久しかりしを、堀保巳一、續日本紀、類聚三代格、政事要略、令集解、等に引用しあるを校讎し集めて鑑み、然し古本に復する能はざれ共以て其概を見るべしと云へり、本篇は、倉庫に關する法令也、因に、信友が比古選衣に考證するに據れば、素に已に河村秀根等の抄録、及び高田興清の昧求所藏の寫本にて既に此缺篇を補ひあると也、

圖、○倉、千岡切、音倉、説文に穀藏也、○庫、苦故切、苦の去聲、説文に兵車藏也、象形より云へば、車が下^レに在るといふ文字なり、蘇詩車句に、車庫、兵^一、祭^一、樂^一、賓^一の五名稱の藏あり、皆器具を納藏せしめ也、○廿二箇條は、官位令集解に記載しあるを以て、本篇の條數を知ると雖も、其全條上記の如く散逸しあるを以て、今稿の編集したる條を連算し、假りに十六條と爲し、讀索に便ならしめんとす、但し職員令第三條中移動の項、同七條内觀察、同廿二條以下民部省、主計主税の二寮同三十三條大藏省、同卅九條宮内省及び大膳頭、同六十條左京職以下、東市司、大宰、大國等の條項、其餘延喜式の十二卷中悉省、十五卷内觀察、

廿二、より廿七番迄民都省及び主計主税の二寒、三十番大蔵省、三十一、卅二宮内省、大蔵卿、四十二番左京職、東西市司等を參考す可、

第一條 倉庫建築條

凡倉、皆於高燥處置之、側開池渠、去倉五十丈内、不得置館舍。

凡て倉庫は、高燥の地に設けて周圍に池渠を開け、他の建物に倉を距る事百間以内には立られぬと也、則ち防濕、防火、盜難預防の爲めなるべし、

出處は、政事政略五十四卷、凡の字は食積問答に據りて補ふとせり、

第二條

受地租條

凡受地租、皆令乾淨、以次收勝、同時、者先遠、京國官司、共輸入、執籌對受、在京倉者、共主稅按檢、國郡則長官監檢、

地租の稻を受取るには、皆な乾燥清潔ならしめ、一々納め人の札を取れ、又た遠近同時に來り納むる時は、遠方の者の分より先きに納めさせ、京都市の役人は、納人と相對して算盤を執りて受取せよ、又た京都内にある倉の分は主稅官と共に檢査せよ、地方は國守郡長にて檢査せよ

と也、

●收勝、^{カブツ}牌を收むる也、牌は、納額及び名を記したるもの、(勝は、算也、音ツツ、カズ又たカブツと訓す、

●考、政事政略五十三卷に、受の字なし、職員令集解の主稅并に左京の條に、在京以下十六字并に子注と爲す、按檢を檢校に作れり、賦役令第三十六條圖の物及び地租雜稅皆明に曉すべく云々を参照すべし、

第三條

米品出納條

出給者、毎出一倉盡、乘者附帳、欠者隨事徵罰、藏亦准此。

凡て倉庫より穀物、圖の物等を出す時は、一倉毎に出し盡すべし、若し納入時の額と藏出しの時の額と差を生じ、剩らば帳簿に記せ、不足ならば係りの者に辨償させ、他の藏も亦皆此に准せよと也、但し兩三倉一時に出す時、甲の倉に過剩あり、乙の藏に不足あると疑之を通知算用する事は許されぬと也、

●乘、音マ、剩の如し、宮衛令第廿五條に缺乘の字あり、

政事要略五十九卷、同五十四卷には、出給の上に倉の字あり、

第四條

倉品量出條

大藏、准一季應須物數、量出。羽別貯隨用出給。其内藏者、則納一年須物。毎月別貯出用。並乗者附帳、欠者隨事徵罰。

大藏は、春夏秋冬の四季に、諸役所、諸役人に渡すべき物の數に應じて一年四回支拂ひ出せども、特別貯藏の物品等は、隨時入用に隨ふて支出せよ、しかし、内藏は、一ヶ年の入用品を納れて、毎月別貯を支出せよと也、右は何れも剩餘したれば帳に附記せ、不足したる時は事に
よりて保りに辨償せよと也、

本條出處、

政事要略五十九卷、職員令集解内藏條、

羽、一季、は一年四分一、○頂は、用ゆ、○羽は恐衍、或云當作用字而屬于上句、○曉、
缺は、過と不足、○徵罰は、懲罰に非ず、辨償するを云ふ、

第五條

倉藏給用條

倉藏給用、皆承太政官符。其供奉所須、及要遽須給、并諸國依式合給用、先用後申。其器物之屬、以新易故者、若新物到、故物並送還所司。年終兩司各以新故物計會。非理欠損者、徵所由人。

倉藏内の品物を使用する時は、皆太政官の許可又は達しを受ねばならぬ、然れ共、御所の御用とか、早急の必用とか、又た諸國にても毎年度例使用し居る物等は、用後太政官へ申告すればよいと也、即ち今所謂事後承諾とす、而して器具の類にして、新舊入れ換ゆる物等の如きは其新器到來せば、故品は皆所屬役所へ返還し、年末に至り、右還受兩役所に於て新故品の付き合せを致せ、若し理由なく破損等せば、關係人により徵收せよと也、

第六條

雜品出給條

凡倉藏貯積雜物、應出給者、先盡還年。其有不任久貯、

大藏令新條

第八卷

第三十二條

倉庫令

六七七

六七八

及故弊者、申太政官、斟量處分。

倉藏内に貯蓄しある種々の雜物を支出するには、先づ故き物より出せ、即ち永年の貯へは出来ぬ、甚しく古びたる物か或は破損したる物は、太政官に上申して料酌處分せよと也、
本令條は、額聚三代格卷第八の調庸の條にある、承和十三年十一月十六日の太政官符は是に據りし也、

第七條

稻穀支貯條

凡貯積者、稻穀粟、支九年。

貯藏の穀物は、九年間支るやうにせよと也、本令條に基きて、官符となりしは、天平十二年八月十四日、同寶字七年三月廿五日、及び大同三年八月二日等（額聚三代格卷第八の上）

第八條

置公文倉鑑條

置公文庫領鑑者、長官自掌。若無長官者、次官掌之。

書類を納めある、庫の鍵は其役所の長官自ら掌れ、若し長官なくは次官にて掌れと也、
右本文は、政事要略六十一卷、職員令集解太政官の少納言の項、後宮職員令集解内司の條に據れり、

在京倉藏、並令彈正巡察。在外倉庫、巡察使出日、則令按行。

第九條

彈正巡察條

京都内にある官倉は、直接係り官の他に、彈正事の役人をして巡察をさせ、地方にある倉庫は巡察使の巡察に出たる時に巡回検査せしめと云ふ也、
附、按行、検査しに行く也、宮衛令第六條に此語あり、參考すべし、
本文は、職員令集解彈正事の條より出す、

第十條

調庸等物送京條

調庸等物、應送京者、皆依見送物數色目、各造簿一通。
國明注載進物色數、附綱丁等、各々送所司、各送所此號門文、須任門文全進納。

調、庸等の收納品、京都に輸送すべく物は、皆現在物品の品目數量に依て帳簿を造れ、國別明細に記載し綱丁に附けて各役所に送り、該綱丁を門文と云ふ、凡て門文に任して納めよと也。

○調産物は、貳役令第一條に、○色目は、品の名、○色数は、品數、○調丁は、ツナヨ
ギ、○各各、の内一字は前田本の類聚三代格に無し、○^〱の三字は衍なりべし、
○門文、の出所後查に譲る、

右本文は、第二篇職員令第三條中務省の卿の項にある義解、及び集解同項、類聚三代格零の八
寛平八年閏正月一日の太政官符に據る、

第十一條 事務引繼條

倉藏、及文案孔目、專當官人、交代之日、並相分付、然後
放還。

倉藏及び書類の目錄は、專屬役人交代の時に、仕分け引繼ぎして交代せよと也、
○孔目、孔は空の上聲、設文に通也、楊子本玄經に、孔道表如、註に孔道は通達也、と
故に通目と云ふ如し、唐六典卷之九に、孔目官あり、
本文は、續日本紀卷第廿一、天平寶字二年九月丁丑の條より出せり、選叙令第廿二條、職掌官
惣目廿日を經云云の處參看すべし、

第十二條

不足品辨償條

倉藏受納、於復出給、若有欠者、均徵、給納之人、已經
分付、徵後人。

上納の物品を受納し、後日其品を支出する際に、不足あらば納時の際の係り官より徵せよ、既
に仕分けし出した後ならば、後役所の係り官より徵せよ、(本文は、政事要略五十四卷)
○欠、不足也、○徵は、取又は辨償の義也、(分付、仕分の如し、

第十三條

欠負官倉條

凡欠負官倉、應徵者、若分付欠損之徒、未離任者、兩本
倉、已去任者、聽於後任、及本貫便納。

官倉の物品不足しあらば、係り官に代償せよ、本人尙交代せずして任にあらば、係りの倉に
納めさせ、若し交代し去つて居たらば、後任者及本人の本籍地に於て便宜納入する事を許せし
也、本文は、類聚三代格卷之八、類聚國史八十四卷より拾載すと、但し欠負を欠損に作れり
○欠負は、官員官物を費消して欠損を生じたるを云ふ、(政令五十二條參看すべし、

第十四條

官物欠失條

凡欠失官物、勾獲合徵者、並依本物徵填。其物不可備、及鄉土無者、聽准價直徵送。則身死、及配流者、並免徵。

凡て官物を損失せば、辨償の出来得る品ならば、其異物と同様の物を取りてあてよ、又た其物なくば、代償を以て償はする事を許るせ、若其人死亡し居る歟、將た流罪に處せられ居たなら

ば全く免除してやれと也、

○句讀は、限り及び難め得るの義ならじ、○徵は、取、○徵填は、取り充つる、

(政事要略五十四卷、引之而無失字、今據法曹至要抄補)

第十五條

隱截賃用條

隱截賃用、不限在任去任、納京。

國司等の内に於て、稅帳外に租稅を取り立て、賃用しあらば、其者任地に居る居らざるに拘は

らず、凡て京にある刑部省所管の藏贖司に沒收せよと云ふ如し、(職員令集所藏贖司條)

「隱截は、非理不正の取立、又は俗に云ふ「ホマナ」の如きなるべし、

第十六條

割取交易物直條

割取交易物直者、同隱截罪、剩徵田租、過收地子等罪、

准非法。臧歛入官、坐臧論。入私者、准犯法可論之。

交易物品の價をハツテ取らば、前條の隱截罪と同斷にせよ、又た過剩に田租を取り立、或は地代を餘分に取り取る等の罪は、非法に準せよ、若其臧收、官に入らば、坐臧論とし、私に入らば犯罪に準じて論せよと云ふ也、(政事要略五十九)

大寶令新解 第八卷

第二十二篇

厩牧令

凡貳拾捌條

本篇は、馬、牛一切に關する法令也、

厩牧、古來の讀例は、吳音にてク、モク、リヤウと讀也、厩は馬の舍也、牧は飼養する處也、左馬寮に既述せし如く、一棟の馬舍は馬二百十六匹の飼にして、牧場は其數に制限なき如し、

第一條

馬丁馬糧條

凡厩、細馬一疋、中馬二疋、駑馬三疋、各給丁一人、獲丁每馬一人、日給細馬、粟一升、稻三升、豆二升、鹽一勺、中馬、稻若豆二升、鹽一勺、駑馬、稻一升、乾草各五圍、木葉二圍。周三尺爲圍。青草倍之。皆起十一月上旬飼乾、四月上旬給青。其乳牛、給豆二升、稻一把取乳日給、

大寶令新解

第八卷

第二十二篇

厩牧令

第六條

本條は、馬丁、馬槽の制儀にして、良馬一疋、中馬二疋、下馬三疋、皆各六頭にして、一人宛七付し、草刈も一疋に付一人宛とす、毎日の食料として、良馬に粟一升、秬三升、豆二升、食鹽二勺、中、下馬は本文の如し、而して上、中、下の別なく乾草は一疋に付五擔、木の葉は二擔へを給すべし、但し生の青草は右に倍とせよ、毎年四月十一日(今の五月)より十一月十日迄は青草を與へ(延喜左馬寮式に從ふ)、冬春は乾草を與へ、乳牛には、乳汁搾取の日だけは、特に豆二升、稻二把を給與せよ也、

附註、○縹馬は、上馬を云ふ、則ち良馬或は善馬と云ふ如し、縹馬の字は、唐代に始まりし如く、太平記にも縹馬の字を使用せり、一説に精縹の意に取りしと雖も懸注にては、良馬は其脚足中の一局處に(四肢)縹き部ある故に名付けたらんかと思ふ、(縹馬、とは下馬を云ふ、○匹には諸説ありて一定せず、則ち昔し馬一頭の價直が絹一疋にてありし故と云ふ、又た俗説に馬液を行くは前後五、六丈を見るを以て名くとも、又た布帛の二端則ち一匹は此に基く共云へり、因て體前二丈八尺、體後二丈八尺、二端合して五丈六尺と云ふもあり、品字箋に四丈とせり、○覆丁は、草刈男也、○圍は、周圍三尺を以て限りとすと唐六典に云へり、衣服令第一條、職員令六十三條左馬寮を參照すべし、延喜式四十八卷、左馬寮の條を假借すれば、馬槽としての乾草は一日二束半、牛は二束、一束は十斤二兩とあり、約一貫六百八十目程なるべし、延喜式

工事通解にある一圍の半量と看做して可なるべし、○稻は甲は稻にて、乙は麥稈ある者、○乳牛、良馬式に、良馬寮所管の馬の房の牧場にては、強壯の乳牛は藥園の耕作及び父牛、死にせば牛皮等を賣却して寮の修繕費に充つ、供御の乳汁は毎日九升四合五勺、乳牛、哺牛各七頭宛にして、食料は豆、秬毎日各二升宛とす、尙擅取用の雜具等詳細記載しあり其茲に略す、**第二條 馬戸調草條**

凡馬戸、分番上下、其調草、正丁、二百圍、次丁、一百圍、中男、五十圍、

馬飼戸は、當番を立てゝ勤務せよ、其調にて来る草は、成年の男子は二百束、次は百束、中男は四分一則ち五十束とす、但し洪水、旱魃等の爲めに牧草凶歉ならば、飛騨の國の匠丁の例に准じて免ぜよと也、

附註、○馬戸は、馬を飼養する家、職員令第六十三條左馬寮の飼部の戸口を參看すべし、延喜式四十八卷馬寮の條に、飼戸、山城國六圍、大和國四十圍、河内國一百八圍、美濃國三圍、尾張國九圍、云々右は左馬寮の諸屬にて、右馬寮略す、○分番、は交番の如し、○上下は、上は勤め下は休みの如し、○正丁、○次丁、等は賦役令第一條にあり、○圍は、前後及衣服令にある

り、但し懸按にては一貫六百八十目とす、○水旱の事、賦役令九條に、水旱の例は、同令九條にあり、

第三條

脂藥療病條

凡官畜應請脂藥療病者、取司預料須數、每季一給、

官畜則ち左右馬寮の隸屬に係る飼養馬牛の疾病を治療する爲に應用の藥品を本政官に稟請し、官は春夏秋冬毎季に一回宛下付せよと也、

○官畜は、馬寮飼畜の馬牛也、○脂藥は、油ら藥にして、今云ふ膏藥類の如し、左馬式に、每季胡麻油一斗二升五合、檳榔油六升二合五勺、猪脂三升二合五勺、硫黃一升六合とあるを以て大寶とは未差なかるべし、ホソキは犬山椒なり、賦役令一條にあり、○所司は、馬寮也、

第四條

牧長採用條

凡牧屬長帳者、取庶人清幹堪檢校者爲之、其外六位、及勳位、亦聽通取、

本條は、牧場の長及び書記採用の令條也、官設牧場の長、及び書記等は、人民中にて最も清麗にして強健且つ馬牛を監護するに堪ふる者を採用せよ、但し外官の初位以上六位迄、又た勳七

等以下の者をも通じて採用するを許せと也、

○帳は、書記の如し、○清は、潔白、幹は強壯、

第五條

牧員制定條

凡牧、每牧置長一人、帳一人、帳一人、每群牧子二人、其牧馬牛、皆以百爲群、

牧場には、長一人、書記一人、牧子若干を置け、而して馬牛は總て老幼牝牡合計百匹を以て一群とせよと也、

○群は、牝牡合計百匹を云ふ、唐の厩庫律疏條にては、馬牛は一百二十頭を一群とす、疏及び疏は各七十頭、羊は六百二十匹を一群とせり、延喜左馬寮式則ち四十八頭に、甲、武、信、上の四ヶ國にて三十二ヶ所の牧場を設定せり、毎年年貢として、御馬を貢するが、甲州六十匹、信州八十頭、武州、上州は各五十匹とある、續紀文武天皇四年三月丙寅、諸國をして牧地を定めて馬牛を放たしむ云々、

第六條

牛馬飼養條

凡牧牝馬、四歲遊牝、五歲責課、牝牛、三歲遊牝、四歲

大寶令新解 第八卷 第二十三篇 馬牧令

六八九

責課、各一百、每年課駒、牝各六十。其馬三歲遊牝而生、駒者、仍別簿申。

牧場の牝馬は四歳にして交尾を營ませ、五歳より産駒の姪姪税を課せよ、牝牛は三歳より交尾を營ませ、四歳より産駒の姪税を課せよ、而して牝馬牝牛各一百に付き駒牝各六十匹を毎年課税せよと云ふ也、其發育成長の抜群なる牝馬は三歳にて遊牝、四歳にして駒を擧げ、牝牛は二歳にて遊牝、三歳にして駒を擧ぐる事あらば、別冊の帳簿にて上申せよと也、

○遊牝は、交接の如し、○責課、責は音窄、求る也、取る也、課は税の如し、母税する駒牝を上納するを云ふ也、○一百は、前條の一群と異り、牝母のふ一百を云ふ、○駒牝、駒は一歳又た二歳の子馬也、牝は子牛也、

第七條 牧員責與條

凡牧馬牛、每乘駒一疋、價二頭、各賞牧子稻一十束、其收長帳、各通計所管群賞之。

本條は、牧場の駒牝増殖に因りて牧子に賞與を給はる令條也、

○乘は、刺也、増殖と云ふ如し、

第八條

馬牛死率條

凡牧馬牛死耗者、每年率百頭論除十。其疫死者、與收側私畜相准、死數同者、聽以疫除。

本條は、牧場に於る馬牛の減少によりて保り官等を罰するの根拠を定めたる令條也、

牧場の馬牛以失減少するに就て、毎年百分算の比例を以て算定せよ、若し馬疫牛疫等の流行に於て意外の死凶あらば、牧場附近の個人私畜の馬牛の疫死に比較して、其死凶率を取り、以て牧子等の罪の有無輕重を定めよと也、假令は、官私各百匹あり、内各五十頭宛疫死せりとすれば別に論するに及ばざれ共、官畜八十頭死凶して、私畜の方が五十頭の死凶ならば、牧の役人等は厩庫律に依りて推よ、然れ共其馬牛の年齢、體格、體質產駒の多少、首從等の關係あるを以て所其罰に輕重の差を來す事申す迄もなき事とす、義解及び政事要略廿二卷、律逸卷之四、に據れば、牧の馬牛除く所に准じて外に死失せば、一人の牧子各笞廿三に二等を加ふるの類也、

○耗は、俗言へりにて減少と云ふ如し、○疫は、ハヤリ病と云ふ如し、

第九條

馬牛以失條

凡在牧失官馬牛者、並給百日訪覓、限滿不獲、各准失處

當時估價、十分論、七分徵牧子。三分徵長帳。如有闕及身死、唯徵見在人分。其在厩失者、主帥准牧長、飼丁准牧子。失而後得、追直還之。其非理死損、准本畜徵填。

六九二

本條は、官設の牧場及び馬屋等に於て、馬牛を放失し或は損傷死ハを致すれば、係りの人を
して辨償させよとの令條也。

牧場にて馬牛を放失したらば、百日の内に尋ね求めよ、若該期間中に搜し得ざれば、放失當時
の時價を以て辨償させよ、辨償法は、價額を十分し、七分は牧子、三分は牧長及び書記とすれ
共、放失の首從定の變之時は、牧場の係り一同にて均一に辨償させよ、若し放失前に於て既に
缺畜しありし歟、又た放失したる首者が既に辭任し居て牧場に居らざれば辨償するの限でな
い、併し放失の首者が死ハしたとあらば、現任則ち首者の後任者に追納させよ、又た馬屋にゐ
りて放失したるならば、馬寮の係は牧長に准し、飼馬丁は牧子に准せよ、然れ共、放失死損の
所由を知らざれば、唯考課の最を除けとも也、又た若し後日に至り、數日の放失馬を搜し得ば追
償の價を返却してやれ、又た馬牛に疾病等あるを認知し厩ながら療養を加へずして、死ハせし
めたる等の如き事あらば、ヤヘリ辨償させよ、但し其係りの者、不用ならば牧場全體の者をし

て均一に辨償させよと也、

○訪覓、尋ね求む也、○估價、賣買の價直、○長帳は、牧長と書記、商の四條にあり、○
主帥、職員令新門府の門部使部の如く、馬部の當番の役を指す、職員令六十三條左馬寮の馬部
六十人の項を參看すべし、○飼丁、馬飼部の馬飼役也、一書に飼丁の上に償者の二字あり、又
た後得の後の方を復に作るあり、

○徵填は、取り充つ也、倉庫令十四條にあり、

本條に關する制裁の委さは、厩庫令にして、假令は官私の牛馬を故殺したる者は往一年、云々
と法曹至要抄に出せり、

第十條

馬牛籍調製條

凡在牧駒犢、至一二歲者、毎年九月、國司共牧長對、以官
字印、印左髀上。犢、印右髀上。並印訖、且錄毛色齒歲、
爲簿兩通。一通、留國爲案、一通、附朝集使、申太政官。

本條は、子馬、子牛の籍を編成して、毎年太政官に申告せよとの令條也、

凡て牧場に飼養する駒犢は、年齡二歲に至らば、其年の九月、牧場所在の地方官が牧長と立會

して、官の字の焼印を燒さて、駒ならば左側後股の外上部、横ならば右側の外上部、駒ち俗稱の琵琶股に捺印すべし。尙毛色、齒數を詳載したる簿冊二通を認め、内ら一通は圖に留めて原本とし、一通は毎年年末年始に上京する朝使使に附して太政官に送れと也、

○官字印は、弘仁格、兵部の下に依れば、其大テ一寸廣テ一寸五分以下とあり、又た續日本紀卷之三、慶雲四年三月甲子に、鐵印を板津、伊勢等廿三國に給へて、牧の駒價に印せしめ、たとあるを以て推考すれば、大寶、養老と雖も鐵の印材にして其大さ大差なからひ、但し印の方圓文字等今詳ならず、然れ共琵琶股に捺せし故に琵琶式の橢圓形ならむかと按ふ、此捺印の事は、支那にては、唐六典卷卅に依れば、驛馬には驛の字の印を左府に印し、州名印を項左に印すともあり、合せ稽ふべし、○驛は、音と、觀文に股也、釋名に、車也下に稱也、昌保扶、貴醫所謂大驛筋部にして、驛曰驛筋、一名大股驛筋、又驛骨曰部に相當する所なり、○齒數、馬は齒を以て年齡を診定するを得べし、居家類聚全書卷廿八、郵政部の末、驛馬篇の口齒論に三十歳までの齒數を載せり、同く口齒口訣に、一歳駒齒二、二歳駒齒四、三歳駒齒六、四歳駒齒二、五歳成齒四、六歳肉牙生、七歳角四峽、八歳齒區如一、云々、

第十一條

牧草地保護條

凡牧地、恒以正月以後、從一面以次漸燒、至草生使通、其郷土異宜、及不須燒處、不用此令。

本條は、牧草の繁茂、保護を計る令條也、
凡て牧地に於ては、毎年正月後に至り、一方より漸次に野火を施し枯草を燒さて牧草の肥料として繁茂を計れ、但し地方に依て寒暖に運違あり、又た竹木等の森林ありて燒く處はざる處は本命を用ひずと云ふ也、

第十二條

牧馬按印條

凡須按印牧馬者、先盡牧子、不足、國司量須多少、取隨近者充

本條は、毎年九月、牧場に飼育し居る處の駒價に焼印を押すに牧子のみにて手足らぬ時には、地方官の意見にて、牧場附近より相當入用の人數を豫算し、雜徭の者等を駆り集めて手傳はせよと也、

第十三條

軍馬養成條

凡牧馬應堪乗用者、皆付軍團、於當團兵士内、簡家富堪養者充。免其上番、及雜駈使。

本條は、牧場の飼馬中にて、體格上等馬を筋骨還ましくして乗用に足るべき馬を悉く軍團の用に充てよ、則ち其牧場所存在國の軍團中の兵士の内にて、資産豊かにして、飼馬に堪ふる者を擇びて飼養せ、但し飼養者には、雜徭の驅役を免除せよと也。

○簡は、擇ぶ也、職員令廿五條兵馬司の條項を參看すべし、

第十四條

每群馬數條

凡諸道須置驛者、每二十里置一驛。若地勢阻險、及無水草處、隨便安置。不限里數。其乘具及簑笠等、各准所置馬數備之。

諸道の驛の設置は、五里毎に一驛を置き、若し道路險惡なるか又た牧用の草なき處は、里數に關せず便宜に隨ふて設置せよと也、重し乘馬用の鞍具類、及び簑笠等は、各飼置く處の馬數に準じて設備し置けよと也、

○丹里は、公式令四十二條、同廿二條及び職員令二條太政官の少納言の項、國會六十六

條より七十條等にあり、驛長更迭の際、馬及び乘具缺乏しめらば、前任者より徵收せよ、但し乘具は官給にして、簑笠は馬子等の私費負擔せよ、

置驛の事は、續日本紀和銅四年正月丁未の條に、山背、河内、攝津、伊賀に設く、又た同書寶龜七年冬十月壬辰の條に、美濃飛驒にも設置す、又た出雲風土記にも驛を記載せり、

第十五條

驛長條

凡驛、各置長一人。取驛戸内家口富幹事者爲之。一置以後悉令長仕。若有死老病、及家貧不堪任者、立替。其替代之日、馬及鞍具欠闕、並徵前人。若緣邊之處、被蕃賊抄掠、非力制者、不用此令。

本條は、驛長に關する令條也、

驛には驛長一人を置き、驛長は驛内にて資産豊かに且つ事務に堪能なる者を採用せよ、一旦任用の後は、悉く永久勤務せよ、若し老衰し、或は死に、或は零落して任務に堪ざらば、更迭せよ、更迭の際、馬具等不足しめらば、前任者より徵收せよ、但し邊土則ち外國人の侵襲を避けるに、一驛の力にて抵抗する能はざる如きの驛は本令を用へずと云ふ也、

凡諸道置驛馬、大路、二十匹、中路、十匹、小路、五匹、使
稀之處、國司量置。不必須足。皆取筋骨強壯者充。每馬各
令中戸養飼。若馬有闕失者、則以驛稻市替。其傳馬每
郡各五、皆用官馬。若無者、以富處官物市充。通取家富
兼丁者、付之。令養以供迎送。

○幹事は、事務を採るに強く速き也、○前人は、前任の如し、

第十六條

諸道驛馬條

本條は、全國諸道各驛に驛馬傳馬の數を制定したる令條也、
諸道の各驛に驛馬を置け、大路には每驛廿匹、中路に十匹、小路に四匹宛とせよ、御用使者の
往復稀少の處は、地方官に於て斟酌設備せよ、必ず充分なるを要せず、而して驛馬は筋骨還し
き者を採用せよ、又た馬は皆各中の中なる養をして飼養せしめ、若し馬の數に不足を生ぜば、
驛田より收獲する所の驛稻を以て購入せよ、又た傳馬は、各郡各五匹宛とし、是皆官馬則ち軍
國用の馬を以て充てよ、若し調格の馬無時は其地方郡を以て市にて買ひ入れ充てよ、而して

此馬を預け飼はしむる傳戶則ち傳馬飼養の家は、相當資産を所有する家にして、覺て馬士たる
者に付け養はして、官吏往復の迎送用に供せしめよと云ふ也、

○驛、傳馬は職員令六十八條より七十一條及び公式令廿二、四十二條參照すべし、○大
路は、山陽道にして、西海道則ち九州は小路とす、○中路は、東海、東山の二道にして、其他
の諸道は皆小路とす、○中中は、賦役令第六條參照すべし、○驛稻は、驛田より收獲する稻に
て、驛費支辨に充る也、賦役令廿三條等參照すべし、○官物は、郡稻を指せり、

第十七條

水路船舶條

凡水驛不配馬處、量閑繁、驛別置船四隻以下、二隻以上、
隨船配丁。驛長准陸路置。

河海江湖に枕みし驛にて、驛馬傳馬を要せざる驛にては、往來人の繁閑を量りて、驛別に船四
艘以下二艘以上を設備し置きて往來人の便に供せよ、舟夫は船の大小に應じて配置せよ、但し
水陸を兼たる驛は、船馬共に併置せよ、驛長は前條に准せよと也、

○四隻、隻は之石切音、物の單を云ふ、四艘の事也、○船丁、舟夫、則ち水夫の如し、

第十八條

驛傳馬總務條

凡乘驛及傳馬、應至前所替換者、並不得贖過。其無馬之處、不用此令。

驛馬又は傳馬に乗らは、次の（則ち前さ）驛に於て乗替ゆべし、必ず乗り超しはならぬ、併し次の驛に馬なき處ならば此限に非ずと也、
釋 ○前所は、次の驛を云ふ、○贖過、贖は贖解に通なり、集解の釋云に非也、一說に贖超也、

第十九條

軍馬調習條

凡軍國官馬、本主欲於鄉里側近十里內調習聽、在家非理死失者、六十日內備替。則身死、家貧、不堪備者、不用此令。

軍國の馬は、飼主の兵士が、自身居住の附近二里以内に於て調馬練習等を欲めば聽許せよ、若し預り飼ふ中、公事に因て死んぜば、官にて立替すれ共、理由なく死んぜば、六十日以内に於て飼養者が立替し置け、但し飼主が死なしたとか、又は家貧にして備ふる事の出来ぬ者には本令

を用へずと云ふ也、

附 ○本主は、預り飼ふ兵士を指す也、

第二十條

驛傳馬檢査條

凡驛傳馬、每年國司檢簡。其有大老病、不堪乗用者、隨便貨賣。得直若少。驛馬添驛稻。傳馬以官物市替。

驛馬、傳馬は、毎年地方官に於て檢簡し、大老又は大病にて乗用に堪ざる者は、便宜賣却せよ、其賣得金少額にして、代りの馬を購ふに不足金を生ぜば、驛馬は驛稻を以て補へ、傳馬は郡稻を以て市場にて買入れよと也、
附 ○驛稻、官物、前の十六條にあり、

延喜式第廿六卷主税の上の卷末に、驛傳馬直段は、畿内國は、上馬二百五十束、中馬二百束、下馬一百五十束、伊賀外全國皆甲乙あり略す、其傳馬の價は、各遞減五十束とす、又化死馬の皮の直は一張五束也、一束は今の玄米五升に當れり、

第二十一條

驛傳馬乘用條

凡公使須乘驛及傳馬、若不足者、則以私馬充。其私馬因

公使致死者、官爲副替。

御用の使者、驛馬、傳馬に乗るに際し、馬の不足を生ぜば、私人の馬を以て充てよ、若し個人
の馬が使者に因て死亡せば、官にて副ひ辨へよと云ふ也、

第二十二條

傳馬手當條

凡官人乘傳馬出使者、所至之處、皆用官物、准位供給、

其驛使者、毎三驛給、若山險關遠之處、毎驛供之、

凡て官員が傳馬に乗りて使者に出る時は、其費用に至る先き先の驛^{しき}稻を用へよ、其多少は官
位の高下に隨て從者の多少あれば、ソレ相應に供給せよ、又た驛使ならは、驛稻の支辨にて三
驛毎に給與せよ、若し道路險惡か、或は廣漠たる原野ならは、驛毎に供給せよと也、

○官物、驛稻、前にあり、

○驛使、軍防令七十六條、公式令、廿一、廿二、廿三、四十二、四十九條を參看すべし、

第二十三條

逸失馬牛處分條

凡國郡所得閑畜、皆仰當界内訪主、若經二季無主識認、

者、先充傳馬、若有餘者出賣、得價入官、其在京、經二季、

知實、還其本價。

無主識認者、出賣、得價送贓贖司、後有主識認者、勘當

國郡にて放れ馬を捉へ得たる時は、其飼主を當國及び當郡内に於て尋ねよ、若し六ヶ月を経過
するも飼主見當らずば、其馬を傳馬にせよ、若し傳馬に剩餘あらば、賣却の上賣得金を官に納
めよ、但し京都府内は二季（二季は六ヶ月也）を過せば、直ちに賣却して其價金をは贓贖司に
納入せよ、併し納入後に至り、飼主出れば、飼主なるや否を取り存して虚偽ならざるを認定せ
ば賣得金を返付してやれと也、

○聞は、

説文に失也、義解に安也、馬牛の自ら逸して主の知れ難を聞畜と云ふ、職員令三
十一條贖贖司及び六十六條より七十條又は捕込令第十五條等にあり、

第二十四條

逸失畜類届出條

凡閑遺之物、五日内申所司、其贓畜事未分決、在京者、

付京職、斷定之日、若合没官出賣、在外者、准前條。

凡て放逸の馬牛、及び遺失の物品を拾得したる時は、五日以内に該管の役所に届出よ、而して、
竊盜及び賄賂等に係る畜類物品にして、未だ判決なき間ならば、京都内は京都市役所に差出し、

役所はソレを奪取り畜類ならば雜役に使用しおれよ、判決の上にて官に没收すべき物は、賣買却せよ、地方の處分は前條に准せよと云ふ也、

附註 (國遺、國は前條にあり、遺は遺失物也、捕囚令第十五條に詳也、○贓は、盜み物、又は賄賂品の如し、職員令第三十一條贓贖司、獄令五十二條參看すべし、

第二十五條

馬牛糞送達條

凡官私馬牛糞、毎年附朝集使、送太政官。

京都を除く他の官私の馬牛糞は、毎年朝集使に附して太政官に送れ、太政官はソレを兵部省に下す也、職員令第廿五條兵馬司の正の項にある公私の馬牛云々を參看すべし、

第二十六條

死亡馬牛處分條

凡官馬牛死者、各收皮腦角膽。若得牛黃者別進。

官馬官牛が死亡せば、各、皮、腦、角、膽を採取して上納せよ、若し牛黃を得たらば、特別に得るに隨ふて進つれと也、

附註 ○皮腦、皮は馬及び牛の皮、腦は腦解に馬の腦と單に註すれ共、愚按にては牛の腦髓も併稱せしとす、如何となれば圖多の本軍書に牛の腦髓も藥用に供しあれば也、○膽は、俗にヤ

モ又たキー稱する物にて、肝臓の裏面に附着しある一の臓腑にして、最も苦き液を含むする腑にして、熊膽、猪膽、猿膽の如し、○牛黃は、ヤクワクと音讀せず、古來ゴフクと鼻音の讀例也、羅旬 *Reser* にて、李東璧の本草綱目第五十卷に、金光明經に、之を照底折蟬と云ふ、本草別錄に牛黃は、牛膽内に之を得るとあり、今の醫人は之を膽石とす、其性質功用大小、形狀、各動物の比較解剖、實際の鑑別、及び雜話等は茲に詳述するの要なし、

第二十七條

乘用中馬牛死亡條

凡因公事、乘官私馬牛以理致死、證見分明者、並免徵其皮穴、所在官司出賣、送價納本司。若非理死失者、徵陪。

公用に因て、官私の馬、或は牛を乘用中、若し其馬、牛の死亡に偶然逢へば、尋常の死亡ならば、辨償するに及ばぬ、其皮や肉は、其處の役所に於て賣却致せ、價金は管轄廳へ上納せよ、私人の馬牛と雖も皮肉は役所に上納せねばならぬ、若し、乘用者の不都合にて、死亡した事ならば、辨償せよと也、

附註 ○證見は、證據顯然の如し、

大寶令新解 第八卷

第二十四篇 醫疾令 凡貳拾漆條

本篇も亦倉庫令に同じく散逸久かりしを、堀保巳一前記諸書より集めて編せしと也、醫術、醫學、治病、針術、按摩、咒禁に關する法介也、

第一條 醫博士採用條

醫博士、取醫人内法術優長者爲之。按摩咒禁博士亦准此。本條は、醫學博士にするには、醫人中の最も學術に優等なる者を採用せよ、按摩及び咒禁博士も亦此に准せよと也、

〔名釋〕○醫人は、醫者全體の總稱にして、醫師は當時にありては官院に非ざれば稱する事のない名稱也、職員令四十四條典藥寮及び下の十二條十三條廿七條參看すべし、(政事要略九十

第二條 醫生等採用條

大寶令新解 第八卷 第二十四篇 醫疾令

七〇七

當處公用。

官有の馬牛が途中に於て病氣に罹り進行に堪ざる者は、其隨近の國廳、及び郡役所に付して飼養救療せしめよ、馬糧及馬藥は總て官給とせよ、全療の日には專使を以て、本の役所へ送り還せと也、若し死臥せば、皮肉等は其處の公用の費に充てよと云ふ也、

〔名釋〕○前進は、サキヘス、と也、○草は、馬糧と云ふ如し、○所司は、モトの役所、

凡官畜、在道羸病、不堪前進者、留付隨近國郡、養飼療救。草及藥、官給。差日、遣專使、送還所司。其死者、充

第二十八條

馬牛途中羸病條

○官は、肉の字也、○官司は、其畜の死臥地の役所、○本司は、其畜籍のある所管の役所、○微陪は、微收^{ミコウ}填充の如し、

やつ六

醫生、按摩生、咒禁生、藥園生、先取藥部、及世習、次取庶人年十二已上、十六已下、聰令者、爲之。

本條は、醫學生、按摩生、咒禁學生、藥學生等は、代々斯業を繼ぎ居る家の子弟を採用せよ、若しソにて所定の應募學生不足ならば、一般人民の内に於て、最も伶俐なる者にて、年十

三歳以上十六歳以下の子弟を採用し就學せしめよと也。

○藥部は、其姓藥師と稱する者にして、則ち蜂田の藥師、奈良の藥師の類なり。○世習は世襲の如し、三代醫業を習ひ、相繼ぎて名家と爲る者を云ふと義解に云へり、學令第二條參考すべし、(政事要略九十五、職員令集解藥業の條、及び國博士の條)

第三條

醫針生受業條

醫針生、各分經受業。醫生、習甲乙、脈經、本草。兼習小品集驗等方。針生、習素問、黃帝針經、明堂脈決。兼習流注、偃側等圖、赤烏神針等經。

本條は、醫學生、針學生は、各習ふべき書籍を區別して習へよ、則ち醫學生は甲乙經十二卷、

脈經二卷、新條本草廿卷、小品十二卷、集驗(則ち先輩名醫の治驗録とも云ふべきもの)十二卷、を覺學せよ、鍼學生は、素問三卷、黃帝針經三卷、明堂三卷、脈決二卷、流注經一卷、偃側圖一卷、赤烏神針經一卷を習ふべしと也、

○偃側圖は、人體の俯仰、橫臥位置の解剖圖なり、

(政事要略九十五、考課令集解)

第四條

實地練習條

醫針生、初入學者、先讀本草、脈決、明堂讀本草者、則令識藥形藥性。讀明堂者、則令驗圖識其孔穴。讀脈決者、令遞相診候、使知四時浮沈澹滑之狀、次讀素問、黃帝針經、甲乙脈經、皆使精熟。其兼習之業、各令通利。

本條は、醫、針學生が、初めて入學せば、本草及び脈決、明堂を讀ましめ、本草書を讀習せば藥物の產地、形狀性質、及び眞贋の鑑別、醫治功用、中毒作用等を知得させよ、針學生ならば明堂を讀ましめば、針穴、灸穴等のある經絡を首肯する事が出來得る、脈決を習はしむれば

甲乙二人の學生、相互に診脈して、春夏秋冬各別々四季折々の健康時の脈狀を知らしめ、例之は春の脈は滑脈にして、夏期は浮脈、秋は澁脈、冬期は沉脈と云ふ如し、次に醫人の歴典として居る所の素問等を素讀し、後に講義をさせ、能々精密に熟知せしめ、問答習の業までも通曉せしめよと云ふ也、

附註 ○枋熟は、學令第八條にあり、(政事要略九十五)

第五條

專門醫學生條

醫生、既讀諸經、乃分業教習、率二十、以十二人學體療、三人學創腫、三人學少小、二人學耳目口齒、各專其業。

本條は、醫學生は一般醫學書を讀習せば、其止は分科して教習せよ、一回の羣集學生を廿人とし、其内十二人は内科、外科と小兒科は各三人宛、耳目齒科は二人と云ふ比例にて、各其業を専門的に研究せよと也、

附註 ○廿は、職員令第四十四條、興藥寮の終に醫生冊(四十)とあるに照せば稍矛盾の如くなれば檢査を要す、但し羣集も亦毎年なりしや否是亦同斷也、○體療は、今云ふ内科○創腫、創は瘡字と相通ずれ共、愚按にては、此二字を現今に活用さすれば、創傷腫瘍と通微し、則ち

外科を云ふ也、○少小、小は六歳以上、少は十八歳以上を云ふ、故に今の小兒科、一名幼科

或は單に見科又嬰科と云ふ如し、年齡の名稱は、戶令第六條參看すべし、又た婦人科、產科、

經骨科の如きは、本篇第十六條參考すべし、(政事要略九十五卷)

第六條

溫古知新條

醫針生、各從所習、鈔古方誦之、其上手醫、有療疾之處、令其隨從、習知合針灸之法、

醫、針生は、各修業したる所に從つて、古來ある處の處方の書籍、及び秘傳等の悉曉に至るまで、成るべく讀過せよ、然れ共先輩等の名方と云ふても亦悉曾良方面已に非ざる者なれば、其内健功のあると思惟する點を抄記披求して記憶せよと、又た老練圓熟の妙手あり、巧みに疾患を治癒せしむる奇術を展施す醫人あらば、其先生に就て醫學研究せよ、醫人たる者は、方今の支那醫の如く、仲景、弘景や、扁鵲、倉公の方面已を固守するな、必ずや各時代の進歩に鑑み、世をして濟生、長生の福祉に達せしむる方法技術を講究せよと云ふのが本令條の精神也、(政事

要略九十五)

附註 ○鈔は、全く寫取らざるを云ふ、○古方は、往古の藥方にして、律に今古の藥方と云ふは

是也、

第七條

試験制度條

醫針生、博士一月一試。典藥頭助、一季一試、宮内卿輔、年終惣試、其考試法式、一准大學生例。若業術灼然、過於見任官者、則聽補替。其在學九年無成者、退從本色。

本條は、醫、針學生等の試験は、教官たる博士に於て毎月一回宛試験せよ、典藥寮の長次官は一年四回則ち春夏秋冬に各一回宛試験せよ、又た年末の學年試験は、宮内省の長次官に於て試験せよ、而して試験の方法は、學令にある大學生に准じて、上、中、下、三等の採點を用よ、其下點而已を三年間續くれば退校をさせよと也、若し學術優等にして、現任の醫師等よりも其成績善良ならば、其人を採用して任官せよ、其代りに現任中の不成績なる醫師を退職せしめよと云也、又た之に反して、三年に一回宛の下點を得て、滿九ケ年も在學し居ても尙卒業し得ざれば、其學生をして就學前の本來に従事させよと也（政事要略五十九卷、職員令條所典藥條）

附 ○考試は、試験と云ふ如し、○灼然、灼は音酌、明也、昭也、○本色は、モトの職業と云ふ如し、

第八條

専門科年限條

學體療者、限七年成學。少小及創腫者、各五年成學。耳目口齒者、四年成。針生、七年成。業成之日、令典藥寮業術優長者、就宮内省對丞以上、精加按練、具述行業、申送太政官。内科學生は、七ケ年にて卒業、外科、及び小兒科は各五年、耳目口科は四年、針科は七年、愈卒業の曉には、侍醫寮の醫官中にて、最も學術に長じたる醫官として宮内省に就て、當局官の立會を以て、精密に試験せよと也、其問題は、既に修學せし科目中の要項十題を撰し、其内八問以上明答したる者を以て上上として、ソレを官擧を採用する事にして、太政官に具申せよと也、（政事要略九十五卷）學令第十一條參照

附 一、按練は、試験の如し、○行業、行は品行の事にて、方正清修の如し、業は、事學治練を云ふ、

第九條

初學生受驗條

有、私自學習解醫療者、投名典藥、試驗堪者、聽准醫針生

例考試

本條は、今の成規受験醫師の如く、官立校に入學せしめて、私立校若くは醫學を以て、醫家の學術を學習したる輩の醫師を希望する者があらば、前條醫針生の例に准じて試問を受ける事を聽せ、則ち典藥の試問を宮内省に具申し、省は更に試問して太政官に具申すると云ふ手續也、

(政事要略九十五)

第十條

東條行禮條

醫針生初入學、皆行東條禮。一准大學生。其按摩咒禁生減半。

(政治要略九十五)

本條は、昔の東條の禮にして、當時の醫針生が初めて入學する時は、酒一壺、乾魚十束、布一端、按摩及び咒禁生は半額とす、該物品を三分し、其一分は學長にして、二分は講教授に分配すと云ふ也、

〔附註〕○東條は、師弟の約を結ぶ儀式時に納むる物貨、

學令四條及び職員令十四條大學寮等參考すべし、

第十一條

教官教授條

教習本草、素問、黃帝針經、甲乙、博士皆案文講說、如講五經之法、(政事要略九十五)

本條は、新修本草、素問等を素讀し終了せば、爾後は、師匠より諸經の講釋をして聞かせよと云ふ也、其講義の體裁は、儒官の五經を講義すると同様の方法でせよと也、

〔附註〕○案文は、文に依ると云が如し、

第十二條

代診條

醫針師、典藥量其所能有病之處遣爲治療、毎年宮内省試驗其識解優劣差病多少、以定考第。

本條は、醫師及び針師、則ち典藥寮の醫員は、常に五位以上の家に患者あらば、典藥の頭の代診として患家へ遣はして診療させよ、其診療に依て冬瘥したる多少と、經過頗るなる帳簿を寮に供へ置きて、毎年一回宮内省に差出し、省の當局一覽の上、其優劣を検明して、升級の材料とせよと云ふ也、

〔附註〕○定考第は、典藥寮にて既に定めたる所の考第を宮内省が檢閱する迄にて、宮内省が考第を定むるに非る也、

第十三條

式部省覆試條

醫針生、業成送官者、式部覆試、各十二條、醫生、試甲乙四條、本草、脉經各三條、針生、試素問四條、黃帝針經、明堂、脉決各一條其兼習之業、醫針各一條。問答法式、並准大學生例。醫生全通、從八位下敘。通八以上、大初位上敘。其針生、降醫生一等。不第者、退還本學。經雖不第、而明於諸方、量堪療病者、仍聽補醫師。

本條は、醫、針學生卒業せば、太政官へ申告せよ、官はソレを式部省に下し省に於て再び試問を執行せよ、問題は醫針兩學生共各十問にて、醫學生ならば、甲乙經にて四問、本草と脈經にて各三問、針學生ならば、素阿にて四題、針經、明堂、脈決の三書にて各二問とす、此他兩學生共に、兼習科にて各二問宛置せよ、問答の式は、受験の經書の本文、又は註を奉て問を發すれば、學生に於て、其問題の義理を明瞭に十問共解答すれば、ソレを全通とせよ、該成績を得

たる者は、從八位の下に敘して、缺員醫師のある處へ任せよと也、針醫の方は、醫生より一等下級の任官とせよ、若し落第せば、本の學年に還せ。

又た對問の醫經、則ち學說試驗に於て不合格であるとも、實地の處方及び治療技術に於て、優等の成績ならば、醫師則ち侍醫等に補任する事を許せと也、(政事要略九十五、考課令集解)

○官は、太政官、○覆試は、復試の如く即ち改めて試験するなり、二字亟なるべし、甲乙、本草、脈經の問題數に一致せず。

第十四條

按摩咒禁學科條

按摩生、學按摩傷折方、及判縛之法。咒禁生、學咒禁解忤特禁之法。皆限三季成。其業成之日、並申送太政官。

按摩學生は、人體の筋肉の起始停止等の部を按摩し、或は牽引し或は舉上等を爲みて體血を散せしめ又は打撲の瘡法、或は針を以て瘀血部の瘀血を刺し散し、或は綯帶等を爲す方法等を學べと也、咒禁學生は、或は杖、或は刀劍を持て咒文を唱へて、猛獸、毒蟲又は妖怪、或は盜賊等の爲に世人が侵害を被らざるやうに咒詛の方法を學べ、是等の修業は、皆各三季を以て卒業させ、卒業の曉には、ナハリ太政官に申告せよと也、(政事要略九十五)

〔按摩は、ナデ、サスリの調にして、導引則ち身體速和を成せし時に、肢體の筋骨を引きたり、伸ばしたり上げたり下げたり、揉みたり、抑さへたり、して昔人の所謂邪氣を散盡せしむる法也。○傷折は、イタミ、ヲヲ、の字調にして、今云怪我にて、醫士の所謂損傷打撲の類也。義解に折は跌也とあり、跌は音重にして跪くとか、或は足の傷みとか云ふ文字も誤蹶の熟語あり。○判斷、の判の字をは原本には各字音に見當らざる文字則ち判の字を記すれ共、判の誤りと知るべし。ペンバクとは鍼を以て損傷の部の瘀血則ち瘀血を刺して出すを判と云ひ、重き件我は綱帶し按摩引して快復せしむるを縛と云ふ、則ち今云ふ脫臼等も此中に含むものとす。縛は綱帶の事也。○解作持禁、解作は、邪逆を解除するを云ふ、持禁は、杖又は刀を持て呪文を唱へ、法を作りて邪氣則ち惡魔を禁退するを云ふ、例之は猛獸則ち虎狼、魑魅魍魎毒蟲、姦賊等の爲めに侵害を被らず、又は呪禁を以て、身體を固めて、出火、刀刃に傷けられざるを持禁と云ふ也、

第十五條

雜使禁立條

醫針生、按摩呪禁生、專令習業、不得雜使

本條は、總ての學生等をして、専ら斯業を習はしめよ、必ず種々の用事に使役する事はならぬと也、但し旬暇といふて十日に一日宛、田畠と云て星月の休暇、授衣暇と云て、冬の禮服の用

章休暇等は大學生に准せよと也、(政事要略九十五、學令廿條、程事令等參考すべし、)

第十六條

女醫養成條

女醫、取官戶婢、年十五以上、二十五以下、性識慧了者三十人、別所安置。教以安胎產難、及創腫傷折、針灸之法。皆案文口授。每月醫博士試。年終內藥司試。限七年成。

本條は、女醫養成の令條にして、女醫は、宮仕へ等の女子の年齢十五歳以上、廿五歳以下の内に、性質伶俐、記憶強大なる者卅人を採用し、内藥司の傍らに寄宿舎を設け、其處に置きて産科、外科、整骨科、針灸科等の法をば、各科の醫者に依て、各科の博士が口授せよ、則ち讀書をさするのではなく、教官の講話に留めて、聞覚え、見覺へさする而已である、例之は、妊娠試験は毎月一回博士にて行ひ、年末の學年試験には、中務省の内藥司にて執行せよ、修業の年限は、七ケ年とせよと也、

〔例〕○官戶婢、宮仕中の身分高からざる女、(職員令四十九條官奴司、及戶令等參考すべし)安胎、胎兒の誕生、(產難は、難産、(創腫、傷折は、前條及び本篇五條にあり、(案文は、

十一條にあり、(内務司は、職員令十二條にあり、此女將は、主に五位以上の家の夫人令選遷の疾病を診療する爲と云へり、
本條貳拾七ヶ條中、二十三ヶ條の冒頭に凡の字なきは、恐くは脱せしなるべし、

第十七條

諸國醫生條

凡國醫生學術優良、情願入仕者、本國具述藝能、申送太政官。

本條は、各地方の醫者中にて藝術優良なる者が、官廳を出願せば、各國の國守に於て精練に學術を調査して太政官に申達せよと云ふ也、(職員令集解、攝津の條)

第十八條

諸國醫官教授條

凡國醫師、教授醫方、及生徒課業年限、並准典藥寮教習法。其餘難治、行用有効者、亦兼習之。

國々の醫師(則ち官醫)が、其國の醫學生を薦薦養成せよ、生徒の課業年限等は、典藥寮の教授の法に准せよ、其餘治術に於て功有る事は皆に習へよと也、(職員令集解、國博士の條)

○醫師は、上述の如く今の醫師と云ふとは異にして官醫を云ふ、凡て當時の國と云へば、大、上、中、下の四階級あり、何れも國博士、國醫師各一人宛あり、醫學生は、他の諸大學の學生五分一の制にして、則ち大國の各料生徒の數は總計五十人なり、上國は四十人、中國は卅八、下國は廿八、此五分の一が醫學生と云ふのであるから、大國の醫學生は十人と云ふ數となる譯也、但し其募集は毎年か、將又卒業と交代に入學するのかわ査を要すれ共、本條文末に依れば、卒業と交代に慕るが如くに考らるゝ也、

第十九條

國醫生試験條

凡國醫生、毎月醫師試、年終國司對試、並明定優劣、試有不通者、隨狀科罪、若不率師教、數有愆犯、及課業不充、終無長進者、隨事解黜、則立替人。

本條は、國々の醫學生は、其國々に於て、醫師則ち教官が毎月一回試問し、年末には地方官廳の上試問して、其優劣を明了に定め、又た試問せしに既に卒業したる學術をば更に覺へ知らざる生徒をば、相當の罰に處せよ、若し教官の命に従はざるか、又た陳規則を犯せしか、或は缺席頻繁等にて、兎角進歩の見込みなき學生ならば退校を命ぜよ、而して退學をすすれば其補

凡藥園令師檢按仍取園生教讀本草辨識諸藥并採種之法隨近山澤有藥草之處採握種之所須人功並役藥戶。

第二十條

藥園條

〔附〕國司は、地方官、〇愆は、過誤の如し、

缺の學生を替り入らしめよと也、(職員令集解、國博士の條)

本條は、藥園には、藥園師を置て、園内一切の事を檢閱處理せしめ、兼て藥學生を採用して、本草學を教授し、以て諸藥の形狀色味、採取播種移植等は勿論、製藥の方法等を辨識せしめ、又平時は、近き山野沼澤に藥草產出せば、之を採取せしめて園内に移植を計り、一部は製藥せしめよ、凡て入用の人功は採藥する家の者共を使役せよと云ふ也、(職員令集解、典藥の條)

〔附〕〇人功は、人工の如し、〇藥戶は、採藥御用世業の家也。

第二十一條

製藥條

藥品施典藥年別支料、依藥所出、申太政官散下、令隨時收採。藥品は、典藥寮にて支料して、藥品の產出する所に依て、太政官に上申し、配布すべき醫役所

に散下せよ、又た臨時採收せしめよと也、(賦役令集解雜徭條、則ち石川本の第十四冊の十五張の左七行、又た政事要略五十九に之を引けり、施の字聲の字に作れり、料の字舊は斷に作り、之を改むと増本に従ふ、)

第二十二條

採藥師條

諸國輸藥之處置採藥師。令以時採取。其人功取當處隨近

〔下〕配文。

本條は、藥品を產する國々には、常に採藥師を置きて、採取すべき各時節に採取させ、人夫は產出する場處に最も近き土地の者を使役せよと云ふ也、(政事要略五十四、并に石川本の賦役令集解第十四冊十三張の右十二行、及び十五張の左九行に之を引けり、國の字舊は脱せり、今之を補ふ、と増本に従ふ、)〇〇の字當に衍なるべし、

第二十三條

御藥調劑條

合和御藥、中務少輔以上一人、共内藥正等監視。

本條は、陛下、殿下、殿上等へ上る藥劑を調合する時には、中務省の少輔以上の一人が、内藥司の正等と共に監視せよと也、(職制律條)

餌藥之日、侍醫先嘗、次內藥正嘗、次中務卿嘗。然後進御。其

第二十四條

供御藥餌試飲條

中宮、及東宮准此。

本條は、主上に藥餌を參らする日は、第一に侍醫がお毒味を申し上げ、其次に内藥司の正がお毒味申し、次に中務省の大臣がお毒味申し上げて然る後に進御せよ、皇后宮及び東宮も亦此に准せよと也、(東京職員令及藥事主務省の條)

第二十五條

五位以上給藥條

五位以上病患者、並奏聞遣醫爲療。仍量病給藥。致仕者亦准此。

本條は、五位以上の人、病氣に罹らば、宮内に申し出て、輕症は省にて處分し、重症と看做は、宮内省より太政官に申達せよ、然れば、太政官が奏聞に達し、醫師を派遣して診察せしめ、病症を量りて藥劑を給與せよ、但し是は在京の官員而已の事なり、併し畿内在住の官吏、及び辭職した者も亦此に准せよと也、(政事要略九十五、又た職員令及藥所典藥の條に之を引けり、病患の病の字を疾の字に作れり)

典藥寮、每歲量合傷寒、時氣、瘧、利、傷中、金創、諸雜藥、以擬

療治、諸國准此。

本條は、典藥寮に於て、例年機型的にある諸病を目標として豫測の藥劑を調合し、諸官省に配藥し置き發病の時に服藥させて治療に擬せよ、諸國も亦此に准せよと也、恰も今賣藥人の配藥の觀あると云べし、(政事要略九十五)

○傷寒は、諸國の方言限りなき如し、今云ふチヌ也、○時氣は、疫氣と云ふ、流行病と推知すべし、瘧は、今略はマラリヤ又た間歇熱病と云ふ、俗人は字音のギナクを通稱とせり、利は、病冠りを冒らすも同じ、今云ふ腸カタル又た赤痢、白利をも古へは混稱せり、傷中は、義解にては、膈臟に病有る者を云ふ也とあり、愚按するに、傷食、中暑の類ならむ、(金創は切り疵の事なれ其外科の大部を云ふ如し、

第二十七條

廻診救療條

醫針師等、巡患之家所療。損與不損、患家錄醫人姓名、申宮内省。據爲黜陟、諸國醫師亦准此。

大寶令新解

第八卷

第二十四篇

醫藥令

七二五

大寶令新解 第九卷

第二十五篇

假寧令

凡壹拾參條

本條は、醫師も針醫師も患家を巡廻して診療せよ、診療の復ち、疾患に對しての損不損は、患家にて醫人の姓名を手帳に録し置きて後に宮内省に申告し、省は病家よりの申告書を更に皇親宮に下附して後日考狀に附せ令めて調所を爲し、諸國の醫師も亦此に准せよと云ふ也、（政事要略九十五）

○損不損は、功能の有無、多少及び治否等と云ふ、

本篇は、休暇に關する法令也、

○假は、古雅切音賈、休暇也、今は暇の字を用ふ、楊子方言等に從へば同字なり、ヤスミと訓す、寧は、歸寧也、今云ふ歸省の如し、ヤスミの訓あり、家に歸りて父母を慰むると云ふ、右讀はケオクシヤフと吳音に讀む也、

第一條

給休暇條

凡在京諸司、毎六日、並給休暇一日、中務宮内、供奉諸司、及五衛府、別給假五日、不依百官之例、五月八月給田假、分爲兩番、各十五日、其風土異宜、種收不_レ等、通隨_レ便給、外官不_レ在此限、

在京の諸役所は六日に一日宛の休暇を給與せよ、但し中務、宮内、供奉の諸役所、及び兵衛、

衛門、衛士府の五衛府、兵庫、馬寮は、一ヶ月間に一度に五日寛續けて休暇を給へ、又た百官の例によらず、五月と八月には、秋穫、播秧の休みを給へ、但し役人を二分して各十五日宛とし、コは其出身國の風土氣候同一ならざるに依りて自然に春耕秋收の遲速あるを以て如斯分番として休暇を給はる也、併し地方官は此限に非ずと也、

○五衛府は、左右の兵衛と衛門にて四府とし、ソレに衛士の一府を加へたる也、○五月、八月は、今の六月九月の如し、秋收播秧の期にして當時は役人も兵士も皆農業せしを以て此の如く田假と云ふ秋さつきの農業をさする爲の休暇を給へし也、○風土異宜は、土地により早晚あるを云ふ、田假は、春耕播秧秋收の休み、種收は、春耕秋穫と云ふ如し、

第二條

定省假條

凡文武官長上者、父母在畿外、三年一給定省假三十日。除程。若已經還家者、計還後年給

文武官中、日勤の人にて、兩親畿外に居住せば、三年に一回定、三十日の歸省休暇を給へ、往復路程の日數は右日限外とす、若し公用等にて、兩親在住の附近等に出張せし事あり、序を以て生家則ち父母の家に還りし事あらば、三年經過の上ならでは、歸省の休暇は給はずと也、

○長上は、日勤の如し還役令九條等にあり、○定省は、孝子親に仕ふるに、昏に定じ、
晨に省と云ふ是也、
幽暗に云く、人子の禮たるや、昏定而晨省、鄭玄曰く、定は其狀を安んずる也、省は其安否如何を問也、定は説文に安也、省は視也、又た兩雅釋詁に察也、又た定は昏訂、晨至是也、詩の鄭風に、定の正に中する楚宮を作る云々は魯結令の首めに既述す、通典百八卷禮の六十八、雜制部給假の條に殆んど同文あり、

第三條

遺喪給假條

凡職事官遺父母喪並解官。自餘皆給假。夫、及祖父母、養父母、外祖父母、三十日。三月服、二十日。一月服、十日。七日服、三日。

現職の官吏は、自身の病氣にて百廿日以上缺勤したとか、或は父母の喪に逢ひは解官せよ、其他は皆休暇を給へ、夫、及び祖父母、養父母、外祖父母には卅日、三ヶ月の服には廿日、一ヶ月の服には十日、一七日の服には三日、と云ふ也、

職事官は、現職と云ふ如し、還役令第廿二條に既述す、解官は、休職の如し、獄令第十條、廿七條參考すべし、○夫、以下云々は、服より割り出したる休暇なり、服は還役令十

七條に詳解す、

第四條

無服薨條

凡無服之薨、生三月至七歲、本服三月、給假三日。一月服、二日。七日服、一日。

生後三ヶ月より七歳までの小兒は死亡したとして只心中に薨をして憂に居る計りて、別に喪服を服せず故に無服とす、服三ヶ月ならば給假三日、一ヶ月ならば二日、七日の服には一日と云ふ也、前條及び喪祭令十七條參看すべし、

○薨、式羊、尸羊、并に音商、フカジニ、又たヒト、ナラズの和訓あり則ち未成年人の死を薨と云ふ禮喪傳に、年十六より十九までに死したるを長薨とす、十二より十五までに死したるを中薨とし、八歳より十一歳までに死したるを下薨とし、七歳以下を無服の薨と爲す、生後三ヶ月ならざるをは薨とせず、

第五條

師經受業條

凡師經受業者喪、給假三日。

教育を受けたる師匠博士の喪には休暇三日を給へと云ふ也。

名例律八度の第八不義の條の疏に云く、現に業を受くの師、謂心は、現に經業を受くる大學問學者、私學も亦同じ、若己に成業せし者先きに學を去ると雖も、并に現に業を受くる師の例に同じ、とあるを參考とすべし、

第六條

改葬條

凡改葬、一年服、給假二十日。五月服、十日。二月服、七日。一月服、三日。七日服、一日。

改葬せば、一年の服には休暇廿日、五ヶ月の服には十日、三ヶ月には七日、一箇月には三日、七日の服には一日と云ふ也、

○改葬は、集解四十卷六張の左初行に(石川本)、釋云く、舊屍を改め移す也、古記に曰く、改葬は、瘞埋したる舊屍の柩を改め移すの類、○假は、同前張に朱云く、長上、番上無別者類、同也、

第七條

聞喪舉哀條

凡聞喪舉哀、其假減半。有乘日者、入假限。

喪を聞て哀傷する時は、其休暇は半減とせよ、若し餘れる日あらば休みの日限に算入せよと也、

○國喪、假令は、官吏が祖父母の喪に遭はば、本假卅日なり、若し遠隔等に居て喪を聞て、其所にて哀を舉ぐるならば、年減して十五日を給へよとの類也、○乘は、剰の如し、假令は、三日の年減は一日半なれ共、二日を給はるの類也、

第八條

給喪葬假條

凡給喪葬假、三月服以上並給程

喪葬休暇を給ふに、三ヶ月以上の服には、喪假の他に往復の日を給與せよと也、

第九條

喪日爲始條

凡給喪假、以喪日爲始。舉哀者、以聞喪爲始。

喪の休暇を給ふに、死去の日を以て服日の始めと計算せよ、併し舉哀者は、喪を聞きし日を以て始めとせよと也、續日本紀卅六、天應元年十二月丁未（西四年癸巳）、太上天皇崩じ玉ふ、春秋七十有三、天皇哀號咽を擣きて自ら止むる事詔はず、百寮中外備哭して日を黑ねたり、云々、詔に曰く云々、仍て今月廿五日より始て諸國の郡司は廳前に於て哀を舉ぐる事三日、若し遠道の處は、符の到る日を以て始と爲て施行せよ、禮に三度と曰ふは、初日再拜兩段なり、但し神郡は此限に弄ず、

凡官人、遠任及公使、父母喪應解官、無人告者、聽家人經所在官司、陳牒告追。若奉勅出使、及任居邊要者、申官處分。

第十條

官人遠任條

官員奉職中、遠くの赴任及び用にて使者に出て居る際に方りて、父時の喪に遭ひて、解官すべからむに、案内及び告る人等の不便あらば、家族より現奉職若くは所管の役所へ届けよ、然れば、周を受たる役所にて幸便又は專使を以て通告せよ、併し此通告に一ケ年も經過すれば、聞喪の禮として、聞喪を以て始めとす、則ち解官、終服等皆喪則の如くせよと也、若し、奉勅にて出て居る使者とか、又た在任地が邊要ならば、太政官に具申の上處分せよ、則ち官は奉聞に達した上の事とせよと也、

第十一條

請假條

凡請假、五衛府五位以上、給三日、京官三位以上、給五

日。五位以上、給十日。以外、及欲出、畿外奏聞、其非應奏、及六位以下、皆本司判給。應須奏者、並官申聞。

諸職は、左右兵衛、同衛門、衛士の五衛府の五位以上の官員は三日を給へ、京官の三位以上は五日、五位以上は十日を給へ、此外にとか、又畿外に出んとせば奏聞せよ、又た奏聞に及ばぬ事し、六位以下は皆其役所々々にて裁決して給へ、併し奏上せねばならぬ時は、兵部、式部より太政官に申し、官より奏せよと也。

参考として、日本逸史卷十五、廿八張の左に、類聚國史第七十九卷、政理の部、一禁制の條に、大同二年二月己未朔（一四六七年平城天皇）勅し玉ふ、假令に據るに、五位以上、畿外に出んと欲せば奏聞せよ、然れば奏を經るに非るよりは外に出づ可らず、聞が如き或は私事に就て恣に畿外に赴く彼擧述を量るに、良に憲法に乖けり、今よりして後、内印を實に非んば、輒く出る事を得ざれ、若し違犯すること有らば、名を錄して奏し申せよ、或は國司阿容して申さずんば、共に違勅の罪を科せん、

第十二條

外官使人聞喪條

凡外官及使人聞喪者、聽所在館舍安置。不得於國郡廳

内舉哀

外官則ち地方官等、及び使命中、喪を聞かば所在の役所又は官舎に居る事を許せ、併し、急用の事柄ならば、再三哀を舉て發程せよ、但し舉哀は國郡の政廳にてはならぬと也、
○外官は、國守、將校等を云ふ、○使人は、勅使、官使等を云ふ、○舉哀は、慟哭にて、今も邊鄙の地方には、一升泣き二升泣きの風習ある由此遺風なるべし。

第十三條

外官任訖條

凡外官任訖、給裝束假、近國、二十日。中國、三十日。遠國、四十日。並除程、其假内欲赴任者聽之。若有事須早遣者、不用此令。舊人代至亦准此。若舊人見有田苗、應待收獲者、待收獲訖遣還。

外官任務終らば、裝束休暇を給へ、近國には廿日、中國卅日、遠國に四十日、并に道中の日數は之れに算入せず、但し此裝束假中に赴任せんと云へば許せ、若し事由ありて早く赴任させねばならぬ時は、本令を用へずと也、而して、前官には現に耕作地ありて、其收穫に近づき居た

らば收葬の終るを待ちて還せし也、

○装束假は、衣裳等の支度休暇也、○遠中近は、賦役令三條に既述す、○齊人は、前官と云ふ如し、○田苗は、耕作の如し、

參考として、高麗集卷十七に、大伴宿禰家持、天平十八年閏七月を以て(閏七月は誤也)越中の國守に任せられ、又天平勝寶三年七月十七日少納言に遷任し、八月五日平旦上道云々の事、同十九卷に載せり、皆此装束休暇に略一致するが如く也。

大寶令新解 第九卷

第二十六篇

喪 葬 令

凡壹拾漆條

本令は、死亡、葬禮、陵墓、忌服に関する法令也、

參考 職員令の十六條治部省、同十九條諸陵司、同廿一條喪禮司、同廿七條兵部省の諸政司、月令の四十二條、公式令の廿八條同四十條、舊制令の七條事、

○喪は、死屍の稱也、葬は藏也、義解なれ共、喪の字、素とは字書に由れば、哭の字の下に亡の字を書けり、故に死亡を哭するの義なるべし、

第一條

諸先帝御陵條

凡先皇陵、置陵戶令守、非陵戶令守者、十年一替、兆域内、不得葬埋及耕牧樵採、

代々の天皇の陵には、陵戶を置て守衛せしめよ、若し世襲的の陵戶に非ずして守らしめば、十年に一度更迭せよ、陵墓敷地内には、餘の埋葬をしたり、又は耕作、草刈、柴刈、伐木等にな

大寶令新解 第九卷 第二十六篇 葬禮令

七三七

らぬと也、

○凡の字は、公式令第四十條に述べし如く、平國の上に凡の字を加へたるは國名の誤りとす、○先皇は、先代以來の天子、陵は、天子の墳墓にして、山の如く陵の如く故に之を山陵と稱ひ、國氏はミサキと云ふ、御族、京城の義にして今所謂城郭の形よりして稱せし如し、續日本紀天平寶字四年、十二月戊辰の朔に、太皇太后宮、皇太后の御遷は、自今以後山陵と稱せよ、其忌日も亦國忌の例に入れて斎を設くの儀式の如くせよ、又た三代實錄に貞觀十三年十月五日、太皇太后を山城國宇治郡後山階陵に葬る、○陵月は、日本紀十一卷、仁德天皇の六十年（即元二一三）多十月、白鳥の陵守等を差して殺すに充つ云々とあるを、在滿が説にては之が陵守の名の始めとせり、同紀三十卷、持統帝の五年（二三五）十月己巳の詔に曰く、先皇の陵戸は五戸以上を置き、自餘の王等にて功ある者に三戸を置き、若し陵戸不足ならば百姓を以て其徭役を免せ、○光城、光は城也、東城と云ふが如し、孝經に其光城を定む、註に光は壁城を云ふ、杜氏通典に云く、周制家人、公遷の地を率り、其の光城を辨じて之れが圖を爲る云々、

第二條

天皇服錫紵條

凡天皇爲本服二等以上親喪、服錫紵。爲三等以下、及諸

臣之喪、除帛衣外、通用雜色。

天皇は、二等親以上の喪服には、喪服を着御せらる、三等親以上又ひ諸臣の忌服には、羽二重の外、諸種の品を衣服に着御せらるる也、

○凡、の字前條に同じ、○錫紵、錫は音セキまたナキ、又ナキあり、コ、にてはセキ也、細き練りたる麻絲の布にて淡き墨染と云へり、紵は音ナツ（寧）生の布にて則ち淡墨染とす、本服、儀制令第三項の解釋に、其子の城は、二等親と雖も、有服の者に非ず云々、

第三條

京官三位以上條

凡京官三位以上、遭祖父母父母及妻喪、四位遭父母喪、五位以上身喪、五位以下身喪、並奏聞遣使弔。殯斂之事、並從別式。

凡て京都内の官員にて、三位以上の人が、祖父、父母、妻の喪に遭ひ、四位の人、父母の喪に遭ひ、又た五位以上、五位以下の人、死にせば、其家より現に就職し居る所の役所、及び治郡省に届け、届けを受たる治郡省は、太政官に届け、太政官は天子に奏聞の上、治郡省に申し遣して、吊使を遣はせよ、入棺等の事は別式に依れし也、別式令詳かならず、

○殯飲、ヒンは必凡切音價、説文に、死して棺に在り、將に葬柩に遷さんとして之れを賓遣す、禮記の檀弓に孔子曰く、夏后氏は東階の上に殯し、(中略)殷人は南楹の間にヒンし、周人は西階の上にカリモガリし、飲は音廉、説文に收也、例之は、續日本紀二卷の末、大寶二年(三三六)十二月甲寅、太上天皇崩す、遺詔して素服して哀を舉ぐる勿れ、内外文武官、皆めを重むる事常の如くし居れよ、喪葬の事は務めて儉約に従へよ、同じく乙卯、二品禮積親王從四位上犬上王等外四名にて殯宮を作る役人と爲せり、(中略)丁巳に葬を四太寺に設く、辛酉に西殿に殯す、又た古文孝經廿二章、孔安國の傳に(中略)戸内に飲め、客位に殯す、庭に祖奠し、墓に送葬すれば、殯以て則ち遷くなる也、等を總合して按すれば、賓客の取扱の如し、

第四條

任官薨卒條

凡百官在職薨卒、當司分番會喪。親王、及太政大臣、散一位、治部大輔監護喪事。左右大臣、及散二位、治部少輔監護。三位、治部丞監護。三位以上、及皇親、皆土部示禮制。內親王女王及內命婦亦准此。五位以上の官員、奉職中に薨卒せば、其役所内の者共は、交代に會喪せよ、而して親王、及び

太政大臣、或は散一位等には、治部省の次官を以て喪事係りの長とし、左右大臣、及び散二位には、同省の少輔三位の人には、同省の大丞又は小丞を係り長とせよ、又た三位以上、有位無位の差別なく皇族方には、皆紫衣帶劍の土部を以て葬禮を助けさせよ、内親王以下内命婦も亦此に准せよと也、

〔考〕(薨卒、の制文は此末の十五條にあり、(散は、職員令十五條散位条、又た還彼分の廿四條等に委し、(監護、監は祝也、護は助也、○土部は、(中略)共訓み、土部人を造りて喪事に收めて殉死に代たる也、職員令十九條諸陵司、又た此末の八條にある遊部を參看すべし、

第五條

職事官贈物條

凡職事官薨卒贈物、正從一位、絶廿五疋、布一百端、錢八連、正從三位、絶廿二疋、布八十八端、錢六連、正四位、絶十六疋、布六十端、錢三連、從四位、絶十四疋、布五十六端、錢三連、正五位、絶十一疋、布四十四端、錢二連、從五位、絶十疋、布

四十端 綾二連六位、綾四疋。布十六端。七位、綾三疋。布十二端。八位、綾二疋。布八端。初位、綾一疋。布四端。皆依本位給。其散位三位以上、三分給二、五位以上給半。太政大臣、綾五十疋。布二百端。綾十五連。親王、及左右大臣、准一位、大納言、准二位。若身死王事、皆依職事例。其別勅賜物者、不拘此令。其無位皇親、准從五位、三分給二。女亦准此。減數不等、從多給。

本條は、諸官員等薨去の時に香典を賜はる法令也、
奉職中の官員薨去せば、正一位や從一位の人々には、粗絹疋疋、布一百廿端、錢十連、を賜物として賜へよ、以下位階の高下に因りて等差ある事本文の如し、其内ち非役の三位以上は現職の三分の二、但し別勅に依りて賜はる者は本令條に關せず、又た無位の皇族には、散位の從五位に准じて三分の一を賜へ、則ち例之ば散從五位に絹六疋ならば、四疋を給ふの類を云ふ、女官も亦之に准せよ、若し減數に於て不等ならば、多きに從ふて給へと也、

○贈は、符遇切音贈、親友に助也、王廬に財を以て喪を助く也、公羊傳に従へば、車馬には用といひ、貨財には贈と云ふ、義解には、官位に贈と云ふとあり、○連は、其量目錢算を要す、

舊唐書卷五十九卷に贈物に關する弘仁第一、貞觀第二、則ち甲は延暦八年八月十一日、乙丙は、天皇元年九月二日、開四年六月五日、の邊なり、

又た送實式廿一卷、治部省の下に、贈物ヲ給ふ數條あり、其要點は、京官にては散位院内に納めある物品を以て給はり、攝守府や太宰府内の官吏にては、當國の物にて給ふとある、但し無役の人には給はずと云へり、義解に依れば、本文には本位に依て給へとあるがら無位の役人及び勳位や帶する官位を帶せざる者には給はざる也と、同に綱鑑の承は、日本紀廿五卷、神武天皇大化三年三月甲申廿二日の詔を抄録せば、王以上の連は、内の長を九尺、闊を五尺、其外端は方九端、高も五尺、復(復エトコロ)一千人々七日に依て給へ、其賜る時の帳帳は白布を用へよ、帳帳あれば、上臣の連は、其内の闊を高の上に准じ、其外端は方七端、高も三連、復五百人々五日に依て給へ、帳帳は白布也、下臣は外端五端、高も一連半、復三百五十人々を三日に依て給へ、是等の幕穴等に一は納め、一は使用する爲めの幕なるべし、同詔全文後をすれば、思ひ中に通さん、

第六條 依職從位給贈條

凡賜物兩應合給者、從多給

香典は、位階と官職と何れにても多く給はらるゝ方にて給與せよと也、

第七條

給與數調度條

大寶令新解 第九卷

第二十六篇

義解合

七四三

凡官人從征從行、及使人所在身喪、皆給殯斂調度、

官吏、行軍征軍中、又は使者に出て居る間に死せば、香典の外に入棺等の調度品迄をも給與せよと也、

〔殯斂、前の第三條にあり、〇調度は、俗に云ふ支度の如し、〇從官行、

第八條

親王以下葬具條

凡親王一品、方相輜車各一具。鼓一百面。大角五十口。小角一百口。幡四百竿。金鉦鑢鼓各二面。楯七枚。發喪三日。發喪三日。一品、鼓八十面。大角四十口。小角八十口。幡三百五十竿。三品四品、鼓六十面。大角三十口。小角六十口。幡三百竿。其輜車鑢鼓楯鉦、及發喪日、並准一品。諸臣一位、及左右大臣、皆准二品。二位、及大納言、准三品。唯除楯車、三位、輜一具。鼓四十面。大角二十口。小角四十口。

幡二百竿。金鉦鑢鼓各一面。發喪一日。太政大臣、方相輜車各一具。鼓一百四十面。大角七十口。小角一百四十口。幡五百竿。金鉦鑢鼓各四面。楯九枚。發喪五日。以外葬具、及遊部、並從別式。五位以上、及親王、並借輜具及帷帳。若欲私備者聽。女亦准此。

本令條は、五位以上の葬禮の惡魔拂を始め、喪車及び行列用の幡、金、太鼓、笛、楯、等即ち葬具に關する法令也、

一品親王には、方相一人と之に要する具足、葬車一輛、葬禮太鼓一百、大形の大角五十口、幡の笛一百、幡四百竿、金鉦、鑢、鼓、各二面、楯七枚、發喪三日、と也、以下本文の如く身分に依りて給與に各差等あり、猶此餘の葬具、及び遊部は別式に従れと也、但し五位以上、及び無位の親王には、葬車、葬具、及び帷帳を貸與せよ、若し喪家私費にて辦せんと欲せば許せ、女官も亦此に准せよと也、

〔方相は、義解にては、熊の皮を被り、黄金の四目あり、立衣、朱、衣、戈を執り、

大寶令新解 第九卷

第二十六篇

喪葬令

七四五

轎を揚げて葬車を先導する也、愚按するに、**惡魔**と看做して可ならむ、○**轎車**、**轎車**に同
じく音ジ、説文に**喪車**也、釋名に輿棺の車を云ふ、

○鼓は、俗に云ふ葬禮太鼓なるべし、○大角は、和名抄に掛氏の漢語抄に、ミウのフエとせり
洞鑑類函卷二百廿八、武功廿三に説文に曰く、角の長サ五尺、形も竹筒の如く、本は細くして
末は大也、竹、木、又は皮にて造れり、寺島良安の和漢三才圖會卷の十八に、三才圖會に、
銅角は、古は木を以て爲る云々と、今の喇叭を伸したるが如きものなるべし、(圖略す)
小角は、シダの笛と漢語抄に云へり、杜牧の詩に、孤城吹角水茫茫、風引胡笳怨思長、驚起
暮天沙上雁、落門收取兩三行、と吟じ込たり、

○金鉦、鉦は、洞鑑類函卷二百廿八に、唐六典に金の制四あり云々、字彙に云く、鉦は鉦也、小
鐘に似たり、鉦は鈴に似たり大小の異なる而じ、淨土宗に鉦鼓とて叩く樂器あり、單にカネ共
云ふ、金鉦は此類と看做して可ならむ、鉦は、俗に云ふ銅鑼にして、其始め鉦鼓に基きて作り
出せしと云へり、銅鑼に似たり、又た佛家に用ふる樂器に、低き山高帽子の形をしたる銅鑼
の縁のある鉢式の糸尻の中央部に美麗なる総さの附たる長き絹糸の飾り紐を附けたる徑り一尺
計りの妙鉦又はキウヘチと云ふ物あり、ヤハリ此鉦の類なるべし、○竿は、本の如し、
○遊部は、アソビと云ふて、終身無職無業にて課役も免されテアラフ遊びてばかり居るから

遊部と云ふ也、養解の古記等の據に従れば、遊部は大和の國高市郡にあり、モイは止む事ける
身分の苗裔にて、天皇崩御の際、壇殿に供奉し、哭泣悲歌し、或は凶禍を鎮めて聖安を供する
等の如き者の由也、

日本紀の天武天皇十二年六月己未、大伴連望多受す云々、贈大紫位鼓吹鼓吹之葬之とあり、
第九條 葬埋條

凡皇都、及道路側近、並不得葬埋。

皇居の附近、及び大道則ち今云ふ國道の近接地には埋葬する事はならぬと云ふ也、
第十條 三位以上葬墓條

凡三位以上、及別祖氏宗、並得營墓、以外不合。雖得營墓。
若欲大藏者聽。

本令條は、墳墓の制度也、

三位以上の人、及び身分低からざる人の分家たる先祖、或は氏の長者の如きは、墳墓を營造
してよけれ共、其他は出來ぬ、若し其同の墓ならば聽許せよと也、

○別祖は、分家の先祖、○氏宗は、氏の長者の如し、繼嗣令第一條の末にあり、○大藏

は、其圖の如し、墳墓の制としては、日本紀卷廿五、孝德朝の大化二年三月甲申の詔、本篇第五條に一小部を抄譯せり、

第十一條

給送葬夫條

凡皇親五位以上喪者、並臨時量給送葬夫。

皇族及び五位以上の喪家へは、臨時に見量りて葬送用の人夫を給へよと也、

孝德紀の大化二年三月甲申の詔に、修墓の人夫として、王以上の墓は、内の長さ九尺、廣さ五尺、其外城方九尋、高さ五尋、人夫一千人、七日に仕上げ(中略)、大禮以下、小智以上の墓は皆大仁に准じて、人夫五十人、一日にしてしまひ、凡そ王以下小智以上の墓は、宜しく小さき石を用ふべし、云々、(本篇第五條參看)

第十二條

墓碑條

凡墓皆立碑。記具官姓名之墓。

墓には、石を建て、何官何某と記せと也、

○碑は石に刻む銘文也、○具官の具の字は、其、或は某の字の意なるべし、最按するに久年の間に於て誤寫を傳へしならんか、併し某としては公式令第廿八條に解せし如く、某の字は

當時代には殆んど使用せざる如し、集解云私某位字略文爲三位以上遺惠故也、昌保曰く官位姓名之事と記せといふ意なるべし。

第十三條

身喪戸絶條

凡身喪戸絶無親者、所有家人奴婢、及宅資、四隣五保共爲檢校、財物營盡功德。其家人奴婢者、放爲良人。若亡人存日處分證驗分明者、不用此令。

本條は、絶家にならんとする時の、財産處分の法令也、

戸主死亡して、其家に最も近き親族なく、絶家にならんとする時には、其家所有の家資、奴婢及び資産は、五人組にて調査し預り掛け、然し、傍系から名跡を継ぎ立ると名乗り出れば、四隣五保に附するに及ばぬ、但し家來と奴婢は放して良民の籍に入れよ、若し死亡者存命中に處分しありし證據分明ならば、本令を用ふるに及ばぬと也、

○身喪は、死去の如し、○奴婢、賣買さる、賤民也、○四隣五保は、五人組の如し、戸令廿三條參看すべし、○營盡功德は、死者の名跡を立てると云ふ如し、

第十四條

暑中給米條

大 令新解 第九卷 第二十六篇 遺惠令 廿四九

凡親王、及三位以上、暑月薨者、給米。

皇族及び三位以上の人にて、今の七、八月の間に薨去せば、米りを給へとも、

第十五條

薨卒名稱條

凡百官身亡者、親王、及二位以上稱薨、五位以上、及皇親稱卒。六位以下、達於庶人稱死。

本條は、臣民の死去の名稱に等級を立られたる令條也、

凡て文武内外の官員死じせば、其内、親王、及び三位以上には薨と稱せよ、五位以上、及び無位の親王には卒と稱せよ、六位以下庶人に達するまで死と稱せよとも、

第十六條

貴賤條

凡喪葬不能備禮者、貴得同賤、賤不得同貴。

厚資薄葬は、孝養の情也、故に貴は賤に同する事を得れ共、賤は貴に同する事を得ざれとも、

也、

第十七條

歷紀條

凡歷紀者、爲君、父母、及夫、本土、一年、祖父母、養父母、五月。曾祖父母、外祖父母、伯叔父姑、妻、兄弟、姊妹、夫之父母、嫡子、三月。高祖父母、舅、姨、嫡母、繼母、繼父、同居異父兄弟姊妹、衆子、嫡孫、一月。衆孫、從父兄弟姊妹、妹、兄弟子、七日。

本條は、忌服の期間を示したる令條也、天子、父母、及び夫、主人の爲めには服期は十二ヶ月とす、以下本文の如し、

大寶令新解 第九卷

第二十七篇 關市令 凡貳拾條

本篇は、關所、港灣、及び交易市場に關する法令也、

釋名 關は、和名抄卷の十、道路の類百十三に、蔡邕の月令章句に關古遠反、字亦關に作り日本紀私記に云く關門也、世岐度、境に在り以て出るを察し入るを禦ぐ所也、即ち今所謂關所也、

○市は、説文に買賣所也、特也(音市)言ふ心は交易して退り、以て留くせざる也、風俗通に神農氏、日中市を爲し天下の人を致せ、天下の貨を聚め交易して退へ、各其所を得るは蓋し諸を喧嘩に取しあり、へきくに、古成城苑城部の關津津海、產業部の貿易賣、及び酒能額面百廿四番政衛部の十三、同三百五十七番產業部の三、五市、兩賣の賣、又は、關所城成の第一方與賣關、第六經濟關等々をなして可也。

第一條 關所通券下付出願條

凡欲度關者、皆經本部本司請過所。官司檢勘、然後判給。

大寶令新解 第九卷 第二十七篇 關市令

七五三

還者、連來文申牒勘給。若於來文外更須附者、驗實聽之日別惣連爲案。若已得過所、有故三十日不去者、將舊過所申牒改給。若在路有故者、申隨近國司。具狀送關、雖非所部、有來文者亦給。若船筏經關過者、亦請過所。

本條は、關所寄渡を出入するに必要なる通券の下付の出願等に関する法令也、

他國へ出發せんとする者は、關所又は港を出入する爲めの通券の下付を本籍役所へ出願せよ、
願書を受領したる役所は、檢査の上過所を下付せよ、而して歸國せんとする時には、其滞在地の役所にて歸國の見留をせよ、併し別に歸國の爲めに手形をもらはねばならぬ場合は下付を願へよ、尤も滞在日數は凡て三十日の制限であるから、是以上を滞在する時には更めて歸國切手の下付を願へよ、又た萬一途中に於て不慮の事故を生じて、日限經過せば其處の地方官に申出で改めてもらひ、又た止むを得ざるか、或は至便の爲め途中にて行路を變じて航行など致したる時は更に手形を請へよ、

○度關、關を越る也、普通は手形を以て通行すれ共、若し法を犯し手形を持たずして越

るを俗に關破りと云ふて重罪の刑に處せられたるものである、關破りに三種あり、私度、越度、冒度也、私度は過所を所有せずして越るを云ふ、越度は、關所を過らす近傍にある間道より關破けをする也、則ち牢破りを越獄、禁制關へ行商するを越販と云ふ如し、冒度は、偽名則ち他人の名を借用して文引（過所）をもらふて通る也、新禁律に、過所なしの關破りは徒利一年、注に三關則ち不度、鈴鹿、逢坂は一年の徒なれ共、攝津と長門の二港の港破りは罪一等を減じ、此餘の關所は二等を減じ、又は越度は一等を加へとあり、因に今人の「しごこない」をラヂオと云ふ語は此律語より轉用したる也、續紀延暦八年秋七月甲寅の勅語等の史例は古事類苑に譲る、○本部本司、本部は本籍の如し、本司は現奉職の役所、例之ば大舍人は京都の原籍人なり、此人旅行の爲め關所切手の下付を出願するには、大舍人客則ち自身奉職の役所に申請すれば、客に於て與書をして京都の市役所へ出す也、地方及び庶民は管轄の役所へ出願する也、○過所は公式令卅六條に解せり○來文、到達地又は滞在地の當局にて云ふ處の語にして、出發地にて發局より下付したる過所を云ふ也、現今の外國旅行券の如し、○筏、音伐、海篇に云く、竹を編て水を渡るを筏と云ふ、楊子方言卷の九、舟の條に（前略）滑之を筏（音敷）と云ひ、種之れを筏と謂ふ、筏は秦竹の通語也、江淮にては穉中に家居するを鰲（音斜）と云ふ、和名抄に輕筏をよめり、輕鰲も同じ、イカダは鳥賊手の義なるべし、木製を桴とし、竹造を筏とすと云

ふ説謬當ならび、現今も臺灣にはナフバイと云ふ竹製の船あり、彼の類に近かし千五百番歌合に、後鳥羽院の御製として、

旅しのやみをものかぬみなれさるさすがに夏は月を待かな

又た關所と云ふに就ては、萬葉集卷第十八、天平成寶元年五月五日、撰東大寺之古聖地使僧平榮等、于時宇大伴宿禰家持、送酒僧一歌一首
度能多知乎（平をのにせしあり）刀奈美施勢伎爾、安須欲里波、毛利微夜里彌倍、伎美草等登米年、など枚舉に逸非ず、

第二條

關津出入順序條

凡行人出入關津者、皆以人到爲先後。不得停攔。

旅行者の關所や湊を出入するには、發着順によれ、必や停攔せられぬと也、

關津 ○津、音美、豆也、渡り也、今の港に當る、則ち坊の津、博多の津、安濃の津等の如し
繼令第十三條を參看すべし、○停攔は、怠慢遲滯の如し、

第三條

向他關條

凡行人度囚關圍者、皆依過所所載關名勘過、若不依所

謂別向餘關者、關司不得隨便聽圍其入出。

旅行者の關所や港に入らんとする時は、其所持の過所に記載しある關所の名によりて通過させ、若し手形面に記載しある關所にあらず、他の關に來らば、關守に於て調査の上便に従て出入を許可せよと也、○口印の三字は恐らくは衍文なるべし、

第四條

乘馬通關條

凡行人勘過所、及乘驛傳馬、出入關者、關司勘過錄白案記。其正過所、及驛鈴傳符、並付行人自隨。仍驛發傳符、年終錄目、申太政官惣勘

旅行者、關所の手形を所持し、驛馬又は傳馬に乗りて關を通過せんとせば、關守に於て其手形等を調査の上白紙に附録し、附録終らば、手形及び驛鈴、傳馬帳等を本人に還附せよ、驛鈴及び傳馬帳等は年末に至り其目録を記して朝集使に付して、太政官に申達せよと也、

字詁 ○驛は、モクラスと訓み持ち到る義也、○過所は、關所手形、○驛傳馬、公式令第廿一冊六、四十二條等に委し、○關司は、關守の如し、○錄白は、白紙に附録して朱印を押捺せよ

と、

名詞 (一)蕃客は、外國の客人也、(二)當客官人は、領客使を云ふ也、○所司は、治部省を云ふ、
地の地方官に於て、關守同断の檢閲をせよと也、
な、然れ共、上陸地の當局に於て、外客の到達せんとする地迄に一の關所もない譯ならば、上陸
但し、上陸地及び既に通過し來りし關所にて一回檢査しあらば、其後の關所に於ては檢査する
及び外客(則ち本人)と立會にて檢閲し、其品を具さに記して治部省に申達せよ、
外客來朝の際、初めて關所に入らんとする時に、其携帶品一箇以上ならば、關守に於て地方官
本條は、外國人の内地旅行の携帶品を檢査するの法令也、

准此。

凡蕃客初入關日、所有一物以上、關司共當客官人、具錄
申所司。入一關以後、更不須檢。若無關處、初經國司亦

第七條 外國人入關條

を設置する事はならぬと也、管轄令第四條參看すべし、
弓矢は勿論、其他種々の兵器は、總て外國と交易はならぬ、又た東端及北邊の國には、鑛工所

治。

凡弓箭兵器、並不得與諸蕃市易、其東邊北邊、不得置鐵

第六條 兵器條

○元來は、初め來る也、○年紀、年齢と云ふ如し、
條より四條迄に既に解せり○歷名は、律の總歷と義同じ、即ち元め來りし姓名年齢と云ふ、
圖 ○丁匠役、賦役令廿四條以下數條參看すれば明了也、○唐圖の脚(ヨゴ)は、賦役令一
に名簿に照査して通過させよ、其唐役を勤めたりて歸國の時、先の名簿に照して通せよと也、
者等の關所を通過するは、隨て各地方廳より關所へ廻しある名簿に據りて、引率の地方官と共に
飛脚の大工木挽等の役に就く時、及び唐役の者、又は調の代りに體役を奉ずる爲に上京する

勘度。其役納畢還者、勘元來姓名年紀、同放還。

凡丁匠上役、及庸調脚度、關者、皆據本國歷名、其所送使

第五條 丁匠等唐圖條

る事、○譯給傳符は、公式令廿一、廿二、四十一、四十二の條にあり、

第八條 官司交易條

凡官司未交易之前、不得私共諸蕃交易。爲人糾獲者、二分其物、一分賞糾人。一分沒官。若官司於其所部捉獲者、皆沒官。

役所が交易を致さぬ前に、個人が私かに外國人と貿易はならぬ、若し本法を犯して貿易せし事を他人に証れたる時には、其物品を二分し、一分は密告者に賞與し、一分は官に沒收せよ、但し官吏而已にて、違犯者を捕へたる時には、貿易したる物品は、全部官に沒收せよと也、

○賞は、原本にタマへの假名を附せり、これば、密告、又は証の如し、

第九條 禁物條

凡禁物、不得將出境。若蕃客入朝、別勅賜者、聽將出境。禁制の物品は國外へ出す事はならぬ、然れ共、入朝の外國人に對し、特別の勅命を以て下賜にたりし品は此限に奉ずと也、

○禁物、名例律第廿五條に、犯禁の物は則ち沒官せよ、既に云く、謂心は鼓吹、佛帳、及び寶書、璽印之類、私家に有る處からざる者、是を犯禁の物と名づくともあり、○禁は、持携

の如し、

第十條

關門開閉條

凡關門並日出開、日入閉。

關所の門は、太陽出て開け、太陽が没して閉鎖せよと也。

第十一條

市場條

凡市恒以午時集。日入前擊鼓二度散。每度各九下。

諸物を貿易する市場の開閉時間は、毎日正午とす、此時に諸商人等集まれ、而して日没前に當りて、開場太鼓三度打ち鳴せば諸買入散せよ、但し太鼓は、一度に九ツ宛叩く事とせよと也、
(第二編職員令第六十七條、京師の城々參看すべし尙委しく想像せんとならば、延喜式第四十二卷、左右京職、東西市司の圖を和合せし)

第十二條

市場條理條

凡市、每肆立標題行名、市司准貨物時價、爲三等。十日爲一簿。在市案記。季別各申本司

市場には、各陳列所毎に標札を立て、相なら相、布なら布と題せ、市場の係り員は貨物の時の

相場直段を三等とせよ、十日毎に帳簿を爲りて市場に備へ置け、一年に四度宛、京ならば市役所地方ならば郡役所へ申達せよと也、

字義 ○肆は、陳也、列也、市廛也、今は青肆酒肆などと云ふて、一軒の店にも此文字を通用して居れ共、コ、ては一小區域内の數店を指したるなり、○廻行名とは、標榜の市ぐら、市の市廛と云ふ事を記す類也、今所謂、銀行、商行、洋行等の行にして商賈と云ふ如し、○三等、は品と價の大別にして、品物にも上中下九等、價にも高中低九級として其中直を標準相場に立て、交易する也、例之は、中等羽二重、一疋拾貳圓と拾四圓と、拾六圓とすれば、其中直が拾四圓であるから、ソレを相場に立る也、上等、下等の品も皆此の如くに相場を立てると云ふ也、○季別は、春夏秋冬也、○本司は、市場を管轄する役所也、

第十三條

官私交易條

凡官與私交關、以物爲價者、准中估價、則懸評贓物二者亦如之。

官物と私物品と交換する價は、ヤハリ前條の如く中直の賣直に准せよ、官の物は大概多くは盗人の贓品であるが、此等の物を官賣にするも亦右の如くせよと也、

字義 ○交關は、交換の如し、○估は、賣也、○懸は、俗言メクラの如し、此末の十五條にゐる懸とは其義異れり、○贓物は、盜品也、贖は、贖員令三十一條及び獄令の始め四ヶ箇條等に解す、

第十四條

權衡度量條

凡官私權衡度量、毎年二月、詣大藏省平校、不在京者、詣所在國司平校、然後聽用。

官私使用の度量衡は、毎年二月今の三月大藏省にて検査の上検印して用へるせ、地方は、地方廳にて検査の上押印して使用せよと也、
字義 ○度量衡は、雜令の第一條より、第四條迄に解せり○平校は、器物の公平正直を檢すると云ふ字義也、故に平と雖も検印を受けざれば筈三十に處せらるゝの律なり、

續紀大寶二年三月乙亥八日、太陰曆四月十二日始めて、度量々天下諸國に頒づ、

第十五條

權衡用法條

凡用稱者、皆懸於格、用斛者、皆以概、粉麵則稱之。

凡て輕重を稱する時は、皆天秤にかけよ、斛を用ふる時は、皆マスカケを用へよ、若し穀物の粉砕したる物は、天秤にかけよと也、

○稱は、輕重を稱量するを云ふ、○鑊は、カケ也、○格は、天秤の竿也、○鐵は、マ
カケ也、○粉麵、米の碎屑を粉と思ふ、麥の碎屑を麵と曰ふ、

第十六條 奴婢賣買條

凡賣奴婢、皆經本部官司、取保證、立券、付價。其馬牛、唯

貴保證、立私券。

奴婢を賣る時は、所轄の役所に書面を以て届出、役所の保證を請け、手形を作りて奴婢の價直を
定め、其許可を得て賣渡せよ、但し、牛馬は扇書に保證を請ふのみにて、直段村の許可に及ば
ぬと也、

○本部官司は、被管役所、○立券は、手形を造り、○賣は、諸と也、

第十七條 賣品條

凡出賣者、勿爲行遣。其橫刀槍鞍漆器之屬者、各令題鑿

造者姓名。

凡て賣品は、粗製品又は廢造物は作る事はならぬ、其内刀、劍、矛の類、馬の鞍、漆造の器具等

には、各製造人の姓名を入れさせよと也、

○行遣、堅牢ならざるを行と爲す也、異ならざるを混と爲す也、唐律に云へり、例之
は鐵に鋼鉄を用ふべき所に柔鋼を使用し、絹織に麻絲を混せし如きを云ふ也、○題鑿は、シ
シ彫る也、鑿は鑿に同じ、説文に木を穿つ也、則落、則格、并に書作、字書に鮮明なる説共し
べり、

第十八條

廢買商賣條

凡在市與販、男女別坐。

市場にて販賣する時は、男女各席を別にせよと也、

○與販、販は方頭切音ハ、説文に、販く買て賣く賣るものとあり、ツバ、又は、ヒサ
グの訓あり、僧尼令第十八條雜令第二十四條參看すべし、

第十九條

不法品條

凡以行遣之物交易者、沒官。短狹不如法者、還主。

粗製品又は廢造物を以て交易せば、其品をば官に沒收せよ、又た寸尺等不足の物ならば、賣主
に還せしと云ふ也、即ち雜物の幅と長さの不足、地質の精粗、器具の粗造、果物の不熟、食物の

凡除官市買者、皆就市交易。不得坐召物主。乖違時價。不論官私、交付其價。不得懸違。

役所の購買を除く外は、皆各市場に於て交易せよ、必ず自家に坐ながら物品主を召び寄せの上、購買して時價（時の相場直段）に相違するやうなる事はならぬ、又た官私を論せず、代り交るに直段を付けよ、物品主と互に價直の合はざる賣買はならぬと也。

○乖は、背きの如し、○懸は、前條十三條にありヨ、では、減法と云俗語の如し、

腐敗に傾きしもの、釀造物の少量、糸綿の目形の不足等を云ふ、
○行違は、前々條にあり、

第二十條

市場定價條

大寶令新解 第九卷

第二十八篇

捕亡令

凡壹拾伍條

本篇は、逃犯逃亡者等を捕獲する法令也、

○捕は、音歩、擒捉也、説文に取也、捕獲、一捉、一糾、追一、逮一のホ也、○人は、逃亡にて、ニグル也、則ち法を犯し令に違ふは、典憲容さず、若し逃亡あらば、其惡行の滋蔓せん事を恐る、故に捕へ繋ぎて以て陳網に置く可し之を捕囚と曰ふ、

第一條

逃亡人追捕條

凡囚、及征人防人衛士仕丁流移人逃亡、及欲入寇賊者、經隨近官司申牒、則告亡者之家居所屬、及亡處比國比郡追捕。承告之處、下其鄉里隣保、令加訪捉。捉得之日、送本司、依法科斷。其失處得處、並申太政官。

既決、未決の囚人、及び出征軍人、其他の兵士、仕丁、流罪人の配所に如く途中の逃亡、又は

謀反人等あらば、最近の役所へ届け出せ、則ち逃ひ者の家は勿論、逃ひたる處の比隣の國郡に通告して追捕せよ、通告を受けたる役所は、其近隣郷里に命令を下して追捕の手傳をさせ、而して捕らひたらば係り役所へ護送し、係り役所は法律に依て裁判せよ、若其人數多なる時は、其捕らひ得たる人數と捕らひ得ざる者、及び取り逃したる數等を本政官に申達せよと也、
附註 ○四は、有罪無罪に限らず、凡て監獄に繋ぎ置く人を云ふ、○征人等は軍防令に詳也、○流移人は、流罪にて配所に移さるゝ人也、○寇賊は、主に謀反人を云ふ、其叛人を捕縛する法は、獄令第三條にあり、然れ共獄令の捕縛は謀反の未だ顯れざる隠秘の中に執行する法にして、こゝは、既に公然叛狀の顯れたるを捕ふる條故に兩條を存立せし也、○比國、比郡は、井比國并比郡也、○隣保は、向ひ三軒兩隣の如し、○訪捉、尋ね捕ふ也、

第二條 盜賊追捕條

凡有盜賊、及被傷殺者、則告隨近官司坊里、聞告之處、率隨近兵及夫、從發處尋蹤、登共追捕、若轉入比界、須共比界追捕、若更入他界、與所部官司對量蹤跡、付訖、然後聽比界者還、其本發之所使人、須待蹤窮、其繼續盡

處官司、精加推討、若賊在甲界、而傷盜乙界、及屍在兩界之上者、兩界官司、對共追捕、如不獲狀驗者、不得則加徵拷。

竊盜及び強盜、時に殺人等あらば、最近の役所、及び町村役場に急報せよ、急報を得たる役所役場は、雄速最近に居る處の兵士、及び人夫等を引率して追跡し、即時追捕の手段を取れ、若し盜賊が隣國等に高飛びしたる其迹あらば、隣國と共同して追捕せよ、又た更に他國に再轉し逃走したる種子ならば、心當りの國の當局者と協議の上搜索追捕を請せよ、協議終了せば、隣國の者を歸國として宜しい、但し初發犯罪地の者は、追跡追捕の奏功有無の片付く迄の時を埃つべし、愈追捕の見込盡きたらば、初發地の者等を歸國さしてよい、然れ共、終りの當局に於て、初發地の人に精細事狀を聞取しおきて、倦まず怠たらず追捕を加へ居れよ、若し又た賊が甲の地界に根據を構へて、乙の界を傷盜するとか、又た殺人の死骸が兩國の境界に跨り在らば兩國の當該官吏は共同して追捕せよ、若し贓品等談順せざる者には、捕捉しても拷問徵物する事はならぬと也、

附註 ○盜賊は、竊盜、○傷殺は、既を附け及び殺すを云ふ、○坊里は、町村の如し、○兵は

兵士也、○夫は、人夫也、○尋賊は、賊を尋める也、○登は、城本にスナハチと傍測せり、

詳分備考に乘船訓に云く、律に登時と云語あり、即時と云ふ事にて、ソノマ、と訓すべし、然れ共一般の字書に此解なし、固に缺章に非ずや、文隱策記に房杜傳登殺用唐律師時爲登即時殺之也登時傳者勿論と、近頃讀史の次にみれば、晉書載記(昌保云く正弘編也)百九卷、登加罪數、又た集異記に諸女驚駭、登棄於路、又云く、及登言於醫工と、此登の字何れも即時の義也、然れば登と云ても、登時と云ても即時の義に通用す、唐代の俗語と見へたり、後世多く見當らず、昌保曰く、登は其始め木豆、瓦豆の豆に同じ、上世に於て一献三酬の習慣ありし時は祭器とはまだ致さざる如し、民間にて今云ふ椀、皿、鉢の如し、故に酒にも用ひ、肉にも用ゆ、菜をも盛れり、此事は方以智密之の通雅卅三卷古器の部に載せて云く、武王陽立に銘を爲も、食自炊、食自炊、戒之備、備則逃、注に成氏云く、無求辭餽、自炊而已、是等に胚胎起因し、轉語せしなるべし、賊盜律に云く、凡そ夜故なくして人家に入る者は皆卅主人登時格殺者勿論、若し侵犯に非るを知りて殺傷する者は、圖殺傷より二等を減すもあり、○比界は、隣國隣郡、○他界は、外の國、○所部官司は、所轄役所、○蹤跡、アト也、○蹤緒、アトのツケ也、○推討、聞れし追捕の如し、○狀驗、証狀證頭の證據、則ち証物證證の如し、獄令三條又た卅條等參考すべし、○微坊、微敗、坊罰の如し、

第三條

罪人追捕條

凡追捕罪人、所發人兵、皆隨事斟酌、使多少堪濟、其當界有軍團、則與相知、隨則討撲、若力不能制者、則告比國比郡、得告之處、審知事實、先須發兵相知除翦、仍馳驛申奏、若其遲緩逗留、不赴機急、致使賊得逃亡、及追討不獲者、當處錄狀奏聞、其得賊、不得賊、國郡軍團皆附考、

凡て犯罪人を追捕せんには、犯罪地の人夫、及び兵士等をは使用するに、其事柄の大小に應じて多寡の數を斟酌使用せよ、若し土地に軍團あらば、共同して捕縛せよ、若し制御するの力が不足と豫想せば、隣國隣郡に通告して加勢を請へ、通告を受けたる國、郡にては、詳細に事實を聞き知り、其上兵士を發して討伐せよ、而して外寇又は謀反人等の多勢なる場合ならば、仍早打を以て來國に達せよ、又た通告を受けたる隣國は、在再遅延して、機急に赴かず、賊をして逃亡し得せしめたとか、又た追討せしに捕獲も出来なかつたとか、等の事あらば、當局に於て具に狀を錄し、早打を以て來國に達せよ、而して、其賊等を捕獲、稽討せしと否とは、

皆國、郡、軍團の人共の年未に具申する功過、行績に關して考叙に附せよと也、

○人は、人夫、○兵は、兵士、○謀は、謀士、○謀は、仕導し得る也、○雅は、明也、細也、○相知は、

相談又は協議の如し、○除算は、去り盡すの如し、○剪は子踐、即淺切、并に首剪、同禮秋官の

注に、剪は斷滅の言也、左傳宣公十二年の注に同襄公十四年の傳に削也、同成公二年の注に重

也、俗に剪に作る、○職譯は、早追也、○考は、功過、行績に依て官位の進降をする也、考課

令第一條、二條、六十六條等を參看すべし、

本條も前條に關く、職令第三條參照すべし、

第四條

入畜貨物凶失條

凡亡失家人奴婢雜畜貨物、皆申官司案記。若獲物之日、

券證分明、皆還本主。

本條は、遺失物の届に關する法令也、

凡て家來、或は奴、婢或は牛馬、或は貨物等を凶失けば、事由及び品目を記して、其筋へ届出

せよ、併し凶失の目録不充分なるも、地に手形等の確實に證明し得る證據のある品は、後日凶

失物發見の日に、凶失者へ還附せよと云ふ也、

案記は、品目記載の如し、○券證は、證券則ち切手又は手形の證據と云ふ如し、

第五條

捉盜給賞條

凡糾捉盜賊者、所徵倍贓、皆賞糾捉之人。家貧無財可徵、

及依法不合徵倍贓者、並計所得正贓、准爲五分、以二分

賞糾捉人、則官人非因檢按而別糾捉、并共盜、及知情主

人首告者、亦依賞例。

本條は、盜賊を捕へたる者に賞を與ふるの法令也、

盜賊を捕へたる者には、盜賊の盜品を徵收する則ち贓品は、皆捕へ人に賞與として給へよ、竊

盜者若し家貧にして徵すべきの財無き時とか、又は法律によりて、倍贓を徵收する事のなら

ぬ場合には、正贓品を計算して五分に作り、其二分を捕へ人に與へ、又は官吏にても、係りの

者に非ざる者にして捕へたる時には賞與せよ、又た共同の盜人とか、或は情を知りし主家の主人

の首告ならば、是亦賞與の例に依れと也、

○糾は、タペシ告し及び捕へたるを云ふ、此末の十三條にあり、○捉は、捕の如し、○

倍贓は、度學指南に、一を盗みて二を徵收する也と、荷田在滿の説にては、正確なれば、他

の物品にて出さしむ、故に倍は充るの義とせり、愚按にては史學指南説を用ふるを可とす、獄令第五十二條の末項に、若し官物を欠負(私費)して、正賊及び贖物を徴すべからむに、以て備ふるに財なくば、官役して庸を折げ、其物多しと雖も五年に限り止め、一人の一日に布二尺六寸を折げ、とあり、竝て參考すべし、金玉掌中抄に、賊盜律に云く、竊盜財を得ざる者は(未遂犯)笞五十、布一尺を盜めば、杖六十、一端毎に一等を加へ、五端を盗まば徒刑一年、五端毎に一等を加へ、五十端毎に加役流とす、右件の罪は、威力を用ひずして、人の物を盗みたる時の事也、(正賊は、不正品則ち盜品也、假令ば布十端を盗みて、捕へられたる時に、現在五端しかなければ、其五端を五分する也、併し全く無時は賞與せざる也)、

第六條

姓名不明死人條

凡有死人、不知姓名家屬者、經隨近官司推究、當界藏埋、立勝於上、畫其形狀、以訪家屬。

本條は、原籍不明なる行路等の死骸取扱方の法令也、

凡て屬籍姓名の知れざる死亡者あらば、最近の役場に届けて穿鑿せよ、而して死骸は其所に埋め、れを其上に建て、老、幼、男、女、の別、及び容貌八相、年齢の見込、其他所特品を記して、

○推究、

往來者にしらしめ、家族の奉訪を待てと也、
立れに繪かく也、

第七條

逃亡奴婢捕獲條

凡官私奴婢逃亡、經一月以上捉獲者、二十分賞一、一年以上、十分賞一。其年七十以上、及癰疾、不合役者、并奴婢走脱前主、及關津捉獲者、賞各減半。若奴婢不識主、勝告。周年無識認者、判入官、其賞直官酬。若有主認、徵賞直還之。

本條は、奴婢の逃亡したる者を取扱ふ法令也、

凡て官有及び個人所有の奴婢が逃亡して、一ヶ月以上を経過したる者を捕へたる者には、其奴婢の價值を半分して、其一分を捕へたる人に賞與せよ、若し一年以上を経たる者あらば、十分の一を與へよ、併し其年齢七十歳以上なるか、又は病身にして使役すべからざる者しか、又た前

主人に捕ひられたる時とか、又は關所或は港津にて其役人に捕へられたる時は、其實與は前記の半額とせよ、若し奴婢が幼稚にして、主人の顔を知らざれば、逃子れの如くにれを附けて置く、而して幼少の奴婢が、一年経過して、尙主の知れざる時は、官に納め入れよ、其時は實與の價は官より下渡せよ、若し持主まの事知れたらば、實の價を償はせ、還してやれと也、**奴婢** ○奴婢は、賣買品と同じく償直に算する也、○癡は、音腫、癡病也、俗に云ふ老衰病の如し、○關津は、關所と港の如し、○幼稚云々は主に子供を連れて逃亡したる奴婢の子供等を云ふ、

第八條

送捕獲奴婢條

凡捉獲逃亡奴婢、限五日內、送隨近官司、案檢知實、平價依令徵實、其捉人欲徑送本主者任之。若送官司、見無本主、其合賞者、十日內、且令捉人送食。若捉人不合酬賞、及十日外主不至、並官給糧、隨能固役。

凡て逃亡の奴婢を捕へたるは、五日の内に最近の役所へ届け送り、若し五日を過れば違令に科すと也、而して檢査するに實正ならば、中直を以て奴婢の價を算し、其割合を以て、持主より

實を與へよ、又た捕へたる者が、直接持主に送還せんとせば、其意に任せよ、若し役所に送致せんとするに際して、現に持主が分らずば、役所へは届け送りて、十日間は捕へた人の家より奴婢の食物を送らしめよ、若し捉へたる人が、報酬に預からざる而已ならず、猶十日の外まで持主來らざれば、其以上は官費を以て給食せよ、其代りに、其者共の逃けて行かぬやうにして、出來得るだけの仕事をさせよと也、

平價 ○平價は、中直の如し、○徵實は、持主より實與を徵收する也、○徑は、直の如し、○合は、合也、○糧は、食物の略、能は、才能也、人々の知り居る仕事也、○固役は、無固

して使役する也、

第九條

賞與條

凡捉逃亡奴婢、未及送官、限內致死失者、免罪不賞、其已入官司、未付本主、而更逃亡、重被執送者、三分、以一分賞前捉人、二分賞後捉人。若走歸主家、猶徵半賞。

凡て逃亡の奴婢を捉へて、また役所へ届け送らざる内、則ち五日を経ざる間に、其奴、又た捕へ死にせせば、逃亡の罪を免ずと共に捉へた人には實與はやらぬと云ふ也、又た既に役所に届け

入れたれ共、また持主に下付にならぬ内に更に再び逃亡し、之を又た重ねて捕へたる時は、賞與は三分して、其一分は前の捉へた人に、二分は後の捕へた者に與へよと也、併し奴婢が逃げ走●て持主(主人)に還らば、半額の賞を持主より徴收せよと也、

第十條

逃亡奴婢犯罪條

凡逃亡奴婢、身犯死罪、爲人捉送、會恩免死、還官主者、依令徵賞。若遂從戮、及得免、賤從良者、不徵賞物。

凡て逃亡の奴婢が、死罪を犯して、人に捉へられて送らるゝに、僥倖にして恩赦にでも逢ふて死を免れ、官奴なれば官に、私有婢ならば持主に還らば、前條々の如く賞與を徴收せよ、若し又遂に死刑に處せられたとか、或は賤民(奴婢の頭)を免れて、良民になりたる者には、賞與を徴收するなと也、

○官主、官は官也、主は私有の持主也、○從良は、良民の戸籍に入りたると云ふ如し、

第十一條

逃亡奴婢償直條

凡平逃亡奴婢償者、皆將奴婢對官司平之。若經六十日、無賞可酬者、令本主與捉人對賣分賞。

凡て逃亡奴婢の償直を定むるは、皆奴婢を携へて役所に往き鼎坐にて定めよ、若し六十日を經過して、持主より報酬すべき物なき時は、持主と捉へた人と相對の上、其奴婢を賣却し、價を分ちて賞に充てよと也、

第十二條

奴婢訴良條

凡奴婢訴良、未至官司、爲人執送、檢究事由、知訴良有實者、雖無良狀、皆勿酬賞。

凡て奴婢の言には、主が妄りに人權を壓制して、我等を賤民にして居ると云ふ理由の本に基きて、良民たらん訴訟を提起するに當り、また役所に到らざる前に、人の爲めに執へられて官に送り來たらば、能く其事狀理由を檢究して、良民たらんと訴ふるの虚偽なりざるを認定せば、良民籍に編入するの事狀なく共、捕へたる人には、賞與をやる事勿れと也、

第十三條

賭博條

凡博戲賭財、在席所有之物、及勾合出九得物、爲人糾告、其物悉賞糺人。則輸物人、及出九勾合容止主人、能自首

者、亦依賞例。官司捉獲者、減半賞之。餘沒官。唯賭得財者自首、不在賞限。其物悉沒官。

凡て賭博は、現場にある物品及び財貨等は、密告者ありて捉得たならば、密告人に賞として與へよ、又た官吏と云へ共、當局の官吏に非ずして捉へ獲たらば、半分だけは賞與として遣せ、餘の半分は、官に沒收せよ、又た賭博をして財を得た者が、或は自首して出たとて、賞與の限でない面已ならず、却て其財物は悉く皆な官に沒收せよと也、

博戲 ○博戲は、雙六、樗蒲の屬を云ふ、(舊唐令九條にもあり、雜律に云く、博戲して財物を賭る者は徒一年、注に奉と射は賭ると雖も論せずとあり、○句合は、義解に、兩人を和合して、相敵對せしむ、是を句合と云ふ、○出九は、九を擧て科を取る、是れを出九と云ふ、潤色類函第三百卅卷、巧藝部の六、樗蒲の二に、樗蒲經に、古へは只木を切りて子と爲し、一具凡て五子、故に五木と名く、(唐代に至りて五木經あり)後世轉じて石を用ふ、玉を用ふ、象牙を用ふ、骨を用ふ、故に列子に之を投擲と謂ふ、法律の文には之を出玖と謂ふ、博物志に、老子胡に入りて樗蒲を作る云々、名物六帖にては其元は天竺とせり、昌黎按するに、一を納れて九を出すに因らるべし、通雅卅五卷に、出玖は骰子也、樗蒲は博の總名也共あり。

凡兩家奴婢俱逃亡、合生男女、並從母、其略盜奴婢、知而故買配奴婢者、所生男女、皆入本主、不知情者從母。

凡て二軒の奴婢が、互に逃亡して、男又は女兒を分婢せば、母の子とせよ、又た人の盗みたる奴婢をば、盗み者なるを知りて、故らに其奴婢を購買して奴婢として使役する内に、男又女兒を分統せば、皆な主人の籍に入れて良民とせよ、併し情を知らざるものは母の子とせよと也、(唐令第四十二條參看すべし)

第十五條

拾得物條

凡得闌遺物者、皆送隨近官司、在市得者、送市司、其衛府巡行得者、各送本衛、所得之物、皆懸於門外、有主識認者、驗記責保還之、雖未有記案、但證據灼然可驗者亦准此、其經三十日無主認者收掌、仍錄物色榜門經一周無人認者、沒官、錄帳申官聽處分、沒入之後、物猶見在、主

來認、證據分明者還之。

凡て遺失物を拾得せば、最近の役所へ届け送れ、又た市場にありて拾得したる品は、市の役所に届け送れ、又た巡回の衙府が拾得したならば、各軍營に送り、而して、拾得品は皆門前に揭示して格し主を待て、遺失者と確認の者願ひ來たらば、密調査の上渡しやれ、又た時により、品によりては、五人組の保貯を以て還付せねばならぬ事もあるぞや、又た未だ遺失届をせざる内にも、確然たる證據があらば、還付してやれ、而して一ヶ月経過して、遺失者なき時は、官にて保管せよ、其時には、其物品を記して、門前に掲示せよ、一ヶ年を経過、尙主なき時は、官に没收せよ、然れ共、一々帳簿に品々を記載し、官に上申して處分を受け、没收の後と雖も、物品が猶現存しある處へ、遺失者尋ね來らば、密調査して、證據分明ならば、還付してやれと也。

○關遺物は、放れ馬牛に、遺失物品の事也、脱故令廿四條に既述す、(職員令第一條刑部省の關司を參看せよ)、○衙府は、五衙府にて職員令五十九條以上、及び軍防令に多く出せり、(本衙は、各衙府を指せり、○廳記は、案記の如し、○保は、保貯也、○資は、求也、取也、○記案は、屬書^{しよ}の如し、○灼然^{しやうぜん}は、明丁^{めいてう}の如し、○物色^{ぶつしき}は、物品と云が如し、○防は、礼也揭示礼を云ふ、○一週は、一年也、○没官は、官に沒收也、○置在は、現存の如し、

大寶令新解 第十卷

第二十九篇 獄 令 凡陸拾叁條

本篇は、現行の刑事訴訟法に監獄法等を増損したる如きの法令也、

○獄は、確也、類聚和名抄卷十三調度部の上、刑罰の具第百七十七の終に、四聲字苑に云く、語欲反、比度夜、罪人を入るる所也、又レシクへと訓み戸令三十三條の義解に、罪を爭ふを獄と云ひ、財を爭ふを訟と云ふとあり、訴訟は罪人を察議するを云ふ、確は義解に、四人の情を確實にせんと欲すといれ共、確は角の如し、勝負を角する意味もある也、則ち前漢書李廣傳に、數虜と確す、注に勝負を競ふ也とあり、職員令第卅條刑部省同二條太政官の辨官の項、同十六條治部省解部^{げいぶ}の項其他諸役所の判官等參考すべし、又た裁判官や檢察官、及び警察官の如き判官等を罪する法は、別に斷獄律ある也、

第一條 裁判於犯罪地依

凡犯罪、皆於事發處官司推斷、在京諸司人、京及諸國人、在京諸司事發者、犯徒以上送刑部省杖罪以下、當司決

其衛府糾捉罪人、非貫屬京者、皆送刑部省。

凡て犯罪者は犯罪地にて判決せよ、但し重罪は上級役所へ送れと云ふ令條也、

凡て犯罪者は、犯罪地の役所に於て裁判せよ、但し在京諸役所の官吏、及び地方人にして、京都内の役所に於て罪を犯し、其罪が、徒刑以上に當るものとせば、先づ太政官の辨官へ上申し、官位利部省に命じて裁判せしむ、杖罪以下は、輕罪であるから、犯罪地の役所に於て裁判をせよとす也、又た憲兵の如き衛府の兵士が犯罪人を捕へたらば、京都内に原籍なきものは、刑部省に送

れと也、

○官司は、役所、○推斷は、裁判にして、犯罪者は、犯罪地の附近役所に於て裁判するものなる國へ歸して裁判するかと云に然らず、假令は播州にて食鹽を竊盜して紀州に逃げ來り、紀州に於て、捕縛されたる時は、捕縛地の最近役所に於て裁判する也、則ち其時には、播州にて盜みたる時の鹽の中値を播州布に引直して罪を決する也、本篇五十二條の本文の如く一日の懲役の仕事は、布二尺六寸と定めあるを以て此の如き法に作組みあると知るべし、尙關市令第十

三條を參考すべし、○新府は、宮衛令廿四條にある、

第二條

笞杖徒流條

凡犯罪、笞罪郡決之、杖罪以上、郡斷定送國、覆審訖、徒杖罪、及流應決杖、若應贖者、則決配徵贖、其刑部斷徒以上亦准此、刑部省、及諸國、斷流以上、若除免官當者、皆遵實案、申太政官、按覆理盡申奏、則按覆事有不盡、在外者、遣使就覆、在京者、更就省覆、

本條は、役所の階級に依て、裁判權に等差あるを示したる令條也、

犯罪の内、笞罪は郡役所にて成決せよ、杖罪以上は、郡役所が裁判して、裁判書類を本人と共に府縣廳に送り、然れば、府縣廳にて再び吟味をして見て、徒罪、杖罪、及び流罪にしても杖罪を以て濟まるべしとか、又た贖罪例にて濟まるべし者は則ち成決せよ、而して刑部省に於ても徒罪以上を判決する時も亦此に准せよと也、

刑部省、及び諸國の裁判にて、流罪以上、若くは官吏の除名、免官、官當を裁斷せば、其吟味の狀況、及び犯罪者の伏罪陳述等の書類を一括し、更に之を寫して裁判の意見書をも添へて本人と共に太政官に申し送り、太政官にては又々吟味して見て、法理に協へ別に審問すべき事なければ、奉上げて天裁を請ふ、併し右の如く再三吟味を遂ぐるも、尙違さる事あらば、地方

ならば、能に其地方へ裁判官及び檢察官を出張せしめて取調へさせよ、京都内ならば、刑部省に命令を下して取調へさせよ也、

第三條 〇決は、判決にて、決、贓并に同じ、贓物は郡に留め、敵のみを録して國廳に上申する也、〇覆審は、再吟味の如し、〇決杖は、徒罪、流罪、の犯罪者に相當の杖を加へて徒又流を杖罪に決してやるを云ふ、〇決配、の決は前項の決にして加杖の事也、配は、流罪の者を罰金、罰、除は除名也、免は免官也、官當は位記を罪の代りに返上する也、詳細は本篇廿八條に所す、〇按覆、も吟味と云ふ如し、〇申奏は、天子へ申し上げて、天子の裁決を請ふ也、〇遣使は、裁判官を出張せしむる事、〇覆は、吟味或は取調へと云ふ如し、一省は、刑部省にして今の司法の如し、

第三條 再審條

凡國斷罪應申覆者、太政官量差使人取強明解法律者、分道巡覆見囚事盡未斷者、催斷則覆、覆訖錄申。若國司枉斷、使人推覆無罪、國司款伏、灼然合免者、任使判放。仍錄狀申、其使

人與國執見有別者、各以狀申。若理狀已盡可斷決、而使人不斷、妄生節目、盤退者、國司以狀錄申、官、附使人考、其徒罪、國斷得伏辨、及贓狀露驗者則役、不須待使、以外待使、其使人仍惣按覆。覆訖同國見者、仍附國配役、

本條は、覆囚使と云ふて、毎年太政官より巡回裁判官とも云ふべき者を五畿七道に派出して、各地方の囚人の状態、地方官の裁判状況等、不都合の有無を巡視する也、併し其覆囚使に不都合の裁判等あらば、地方長官より、太政官に上申して處分さるゝの道をも明けてある也、

凡て地方に發せし犯罪者を再審する爲に、太政官に於ては、法律に明るき適材の人を採用し、巡回裁判官として五畿七道へ差立て、現在未決の徒罪以上の者を裁判致せ、判決終らば太政官に具申せよ、若し地方官に於て、覆日に曲りたる裁判してあるあらば、覆囚使の再吟味にて無罪とし、地方裁判官も亦自ら曲りて居たと理に伏すれば放免せよ、又は覆囚使の裁判と、地方官の意見と衝突を生じたる時は、其理由を官に上申せよ、又た豫審等充分に調べあるに、覆囚使が種々の口實の下に、延と判決を延引する如き事あらば、地方官より覆囚使の非理なる事を太政官に上申せよ、然れば、官に於て年末に至り覆囚使の考に附せよ、

其徒罪は、地方判官の裁判にて、犯罪者伏罪し、盜品等願れ出て、能々罪跡明了ならば、懲役せよ、必ず覆囚使の來るを俟に及ばぬ、然らざる者は、覆囚使の巡回を待て、俟に於て惣て再吟味せよ、覆囚使の再審が、地方判官と同意見ならば、其國に置く懲役せよ也、

七八

○**覆囚**、申は重也、覆はセンヤ又は吟味にして今云ふ再審、量は、ハカル也、○**使人**は、覆囚使の事、○**分遣**は、五條七道を分ちてと云事、○**巡回**は、巡回裁判、○**見囚**は、現在の囚人、○**未斷**は、未だ宣告せず也、○**催斷**は、法廷を開催して裁判すると云ふ如し、○**枉斷**は、非理の裁判、○**權覆**は、再吟味、○**款伏**は、款語又は款んで降伏と云ふ如し、○**灼然**は、明瞭、○**合**は、可なり、○**任**は、隨意、○**使料放**、使は覆囚使、料は判決、放は放免、○**國見**は、地方判官の意見なり、○**節目**は、フシにして、本篇第六十三條にある如き節目より轉用して、種々の口實を設くる形容詞に借用せし語と看做すべし、○**發退**は、メテラシ、シラヅメル也、○**考第**の事は、考課令一、二條を參看すべし、○**伏辨**は、伏罪の陳述書、○**貳狀露顯**は、平たる貳物露顯の如し、○**則役**は、懲役の如し、○**按覆**は、吟味、○**國見**は、地方判官の意見○**附圖配役**は、其地方に授けて懲役と云ふ如し、

第四條

覆囚使條

凡覆囚使人、至日先檢行獄囚、枷杻鋪席、及疾病糧餉之事、

有不如法者、亦以狀申附考、

本條は、巡回判官の事務章程中の要項其云ふべき介條也、

巡回判官が、各地方に至らば、地方の刑政先づ監獄及び囚人を檢閲し、其囚人の頸カゼ、足カゼの刑具は勿論、獄内の敎物、或は囚徒の疾病療養方、糧食等の事に不法あらば、其狀を太政官に具申して、地方當局の年末の考第に附せよと也、

○**檢行**は、檢閲の如し、○**枷杻**、枷は音加首カゼにして、廣袖に頂械也、和名抄刑器具

の爲に、整揃とあり、日本紀私記に久比加之とあり、杻は足カゼにして、又た護語抄にてはカゼの訓あり唐語、集韻共に、桎械也とせり、械を類聚名義抄にアシカゼと訓せり、本條の義解は、足カゼとすれ共、本條の精神は、手足其通の意にて使用したる字と思考す、第六十三條參

看すべし、○**鋪席**は、敎物、○**糧餉**、糧は呂張切、音良、糧に同じカラ也、コ、では今云ふ、シ又は飯米と云ふ如し、餉は姑雨、リ羊切、共に音商、送る食也、コ、では今云ふ辦當の如し、○**不如法**は、不法の如し、考は、考課令の一、二條等を參讀すべし、

第五條

大辟罪三覆奏條

人實令新解 第一卷

第三十九頁

四八

七八

凡決大辟罪在京者、行決之司三覆奏。決前一日一覆奏、決日再覆奏、在外者、符下日二覆奏。初日一覆奏、後日再覆奏。若犯惡逆以上、唯一覆奏。家人奴婢殺主、不須覆奏。其京國決

四日、雅樂寮停音樂。

本條は、死刑を勿論にせず、三回迄も天子に上奏せねばならぬ、と云ふは遠を捨て近に従ふの仁政を旨とすれば也、然れ共、其内も惡逆不道の罪に對しては、倫道を重んぜん爲めに、唯一回の上奏に止めて執行せよと云ふ子命條也、死刑を宣告するには、京都内にて執行するものならば、宣告する所の役所にては、三回迄上奏せよ、第一回の上奏は、宣告の前日にせよ、アト二回の上奏は宣告の當日にせよ、京都外の執行は、太政官より使を以て達する前日に同官より上奏せよ、アト二回は、使の發見せし翌日に上奏せよ、若し惡逆則ち親殺以上の犯罪ならば只一回の上奏に止めよ、又た家來或は奴婢が主人を殺害せし犯罪の如きは、上々に及ばぬ、面して、京及び地方共に死刑決行の日には、雅樂寮は音樂を停止せよと也、

〔註〕決は、宣告、○大辟罪、辟は音へき、君也、明也、法也の文字なれ共、義解の如く、罪と解釋すべし、故に大辟は重罪にして大罪と云ふ如し、○行決は、執行、○三覆奏は、三たび

上奏と云ふ也、○在外は、京外を云ふ、○符下、太政官の達しが下る也、○惡逆は、八刑中の

第四番目の罪名なり、八刑は一に曰く謀反、國事を危くする事を謀る也。二に曰く、謀大逆、山陵及び宮闈を毀る事

を謀る。三に曰く、誅叛、國に背きて外國などに投ぐる事を謀る。四に曰く、惡逆、親父母、父母を毆打殺する也。五に

曰く、不道、死罪に奉る者を死刑に處したとか、又は勳章を還り盡ふたとか、伯叔父母、外祖父母等を殺す事を謀りたとか

四等以上の尊長及び妻を殺したる類。六に曰く、大不敬、大社を毀りしとか、大祀神、御の物、樂典、服飾の物を盗みしとか、

詔書、内帑を竊盗したとか、朝服が調合を本方の如くにてせうとか、天子の御膳を造るに食案の方を誤りしとか、御幸

の船など禁中に違ひなかつたとか、人臣たるの禮を欠きたる類。七に曰く、不孝、親父母、殺戮を告訴したり、隠匿したり

とか、父母の喪に居て婚嫁し或は音樂を作すとか、父母の喪に聞て樂成せうとか、詐りに親父母、父母が死せしと云へ間

らしたとか、父祖の墓に竊せしとかの類。八に曰く、不睦、主人或は國守或は隣所を殺害するとか、或は自害を謀役所にし、

五位以上の官員を殺すとか、又た妻にるもの夫の喪を隔て樂成せぬとか、其中音樂するとか、又た婚嫁するとかの類也。

雅樂寮、は雅樂令第十七條

第六條

斷罪行刑條

凡斷罪行刑之日、並宣告犯狀、決大辟罪囚、皆防援着枷至刑所囚一人、防援二十人、每一囚加五人五位以上、及皇親、聽乘馬、聽親故辭決、仍日未後行刑、則囚身在外者、奏

本條は、徒刑以上の犯罪者に罪狀を宣告し、死刑執行等の手續を制定したる合條也、

凡て徒罪流罪を處斷したる日には、罪狀をば犯罪人に讀み聞かせよ、又た死罪を處決して、死刑執行の日には、皆防援として警衛者を四人一人に附き廿人を處せしめて刑具等を施す手傳等をさせて死刑場に至らしめよ、而して防援の人数は、死刑一人の時には廿人なれ共、二名の時には五名を加へ、三人の時には卅名、以上受刑者一人を増す毎に五名宛の警衛者を増せよ五位以上、又は皇族方ならば、刑場に到る途中は、乘馬を許してやれ、又た親族、知己等にて、受刑者に差別を申し込ば、是亦允許せよ、次に死刑執行の時間は、未の後刻則ち正午と日没の中間頃に行ひよ、又た囚人、京都外に在るならば、死刑執行すると云ふ報告がありて、ソレをば太政官にて上奏し、其奏上の勅可を得たる日に、早業卿などにて、官の達しを下す事はならぬ也、是れ全く人民大切の御精神にて、曠達忽諸を厭ひ、死殺を嫌ふの法意に出る仁政也、
刑罰 斬罪は、流、徒の裁決、行刑は、徒罪以上の執行、宣告は、讀み聞かす也、防援は、警衛者と云ふ如し、刑所は、俗に云ふ獄門所、○皇親は、皇族の如し、○親、故、辭決、親は親族、故は故舊又は知己の事、辭決は決別也、未後は、昔の八ツ過ぎ七ツ時の前にて、今の三、四時頃なれ共、正當に云へば、正午と日没の中央近かに當る、在外は、京外と

凡決大辟罪皆於市、五位以上、及皇親、犯非惡逆以上、聽自盡於家、七位以上、及婦人、犯非斬者、絞於隱處

本條は、死刑執行の場所を示したる合條也、凡て死刑を執行する場所は、皆市に於てせよ、併し其内、五位以上、及び貴族は其犯罪惡逆(五刑より)以上に非ざれば、自宅に於て自殺する事を許せ、又た六位或は七位の者と婦人は、其犯罪が斬罪に非ざる者は、幽隱の僻處に於て絞殺せよと也、

幽隱 (自盡は、自殺にして、古昔の自盡は主に毒藥を服すると、絞死のソにて、近世の如き刑罰などはなき也、○斬は、打首即ち斷頸也、絞は、頸を絞り殺す也、○隱處は、市街熱關に反して幽靜僻隱の地を云ふ、併し斬所は市にて執行したる也、多きとて、左に延寶式載廿九條刑部省の第十九條、死刑執行の條を抄録せん、

凡て死刑を決すれば、當預め彈正衛門に移しされ、且日、市司の衛門に會集し、共に行決を監し、其彈正、左衛門の官人は門外の東に列し、各四、五、七と相去る事一丈許りて、刑部右衛門の官人は門外の西に列す(等々)此上相去る事同一に同じ

入てこそ斬られけるなれ、弓矢とる男の習は、今日ほ人の上、明日は身の上にて有物な、平家のみ願は、上下共にすべて情けなく物も知の者共也云々。

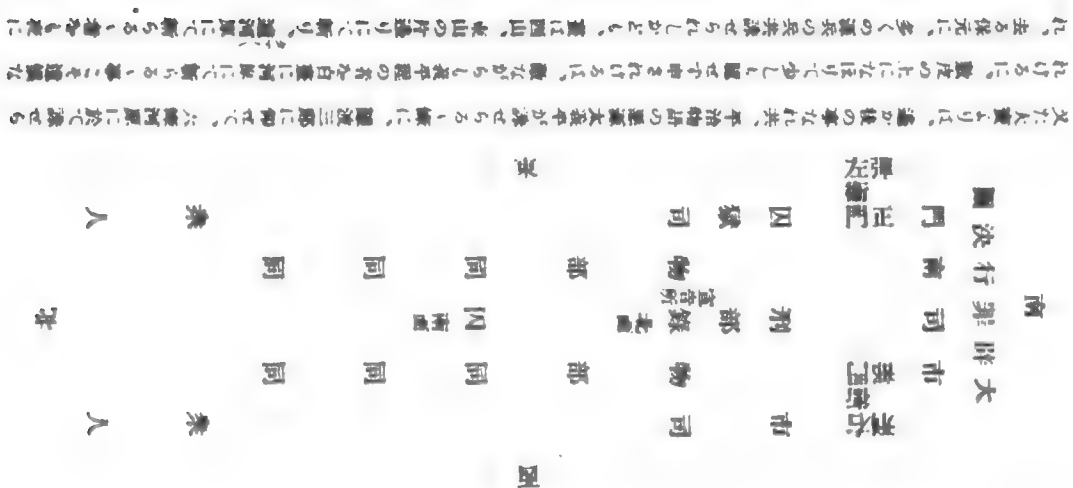
第八條

大辟罪監決錄

凡決大辟罪五位以上、在京者、刑部少輔以上監決。在外者、次官以上監決。餘並少輔、及次官以下監決。從立春至秋分、不得奏決死刑。若犯惡逆以上、及家人奴婢殺主者、不拘此令。其大祀、及齊日、朔、望、晦、上下弦、二十四氣、假日、並不得奏決死刑。在京決死囚、皆命彈正正衛士府監決。若因有冤枉灼然者、停決奏聞。

本條は、死刑執行の際に於ける、死刑場の監督、及び死刑の執行が出来ぬと云ふ期日を決定したる合條也、

死刑を受けた人をして、死刑を執行するに當り、在京中の五位以上の犯人に對しては、刑部省の少輔以上にて刑場へ隨監せよ、若し自盡するならば、其家へ隨監せよ、地方は、地方廳の次官以上にて隨監せよ、六位以下、庶人迄は少輔、及び地方の次官以下にて隨監せよ、



但し立葬より秋分迄は、奉上げて執行する事はならぬと也、若し墓迄(玉無に出でり)以上の距離及び家系或は奴婢が主人を殺害せし者なれば、本命條に拘はらずと也、

右の外に、大祭日、六斎日、及び毎月一日、七日、八日、十五日、廿一、廿二日、ミヅカ、廿四氣の立ち日、毎月五日宛ある既定の休暇には死刑を奉上げて執行する事はならぬ、而して京都内にて死刑執行の時には、彌正達の役人と衛士府の役人とを立會さして臨監せしめよ、若し囚人が冤枉の罪たる事判然知れたらば、死刑の執行を停めて奉聞に達せよと也、

附 ○監決は、死刑場へ臨監と云ふ如し、○在外は、地方を指す、○餘は、六位以下を云ふ○立春は、太陽曆二月の四六日頃、昔の曆みならば、十二月中に立春になる事多し、故に、年内に春は來にけりひと歳を、去年とやいやいはん今年とや云ん、と云ふ吟詠の紐を解かれしある也、○秋分、は今の九月廿四日頃也、○奏決は、奉上の後決するを云ふ、○大祀、は大祭と云ふ如し、大祭祭、神祇令、八、十二、十四條を參看すべし、○春日は、彌令第五條に詳解す、○朔望云々、朔は一日にして月立也、望は、周禮の注に依れば大の月は十六日、小の月は十五日にして昔し月を本としたる曆みにては朔月の日也、晦は、ミヅカ則ち暗夜の日故にクワシと云ふ字にせり、上弦は、七日八日にて上の弓張月と云ふ義也、下弦は、廿一、廿三日にて下の弓張月也、○廿四氣、は立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨、立夏、小滿、芒種、夏至、小暑

大暑、立秋、處暑、白露、秋分、寒露、霜降、立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒、也○假日は、假算令第一條にあり、○衛士府は、非常警備の爲め、○冤枉は、ミヅカ也、○奉聞は、彌正奏聞する也、

第九條

無親戚囚人死亡條

凡囚死無親戚者、皆於閑地權埋、立榜於上、記其姓名。仍下本屬。則流移人在路、及流徒在役死者准此。

本條は、牢死、及び流罪中に死したる者の取扱ひ方を示されたる法令也、

凡て監獄内に居る、既決、未決の囚人、死亡し其爲めに喪服を着用する程の近親なき時は、皆閑地に假埋葬し、其上に姓名を記したる墓碑を立て、而して原籍地へ公文を以て通知をせよ、又た流罪の人にして、途中にて死亡せしか、或は流罪徒罪の者が、服役中に死亡せば、右の牢死に准せよと也、

附 ○無親戚は、有服の親族なき者を云ふ、喪葬令第十七條參看すべし、○閑地は、陶師の地、○權埋、假埋也、○防は、何某の墓とは記さざれば其墓碑と看做して可也、○本屬は、原籍と云ふ如し、

凡犯流以下、應除免官當、未奏身死者、位記不追、則奏時不知身死、奏後云先死者、依奏定、其常赦所不免者、依常例。若難犯死罪、獄成會赦、全原者、解見任職事。

第十條 有位者犯罪未決中死亡條

七九八

本條の兩項は、犯罪の官吏が、奏上勅可前に死亡せば、官位は取上けず、後の項は、赦に遇て死刑を免かるゝも、解官はせよと云ふ事を示したる令條也。
凡て官吏にして、流罪以下の罪を犯し、除名、免官、官當等の處分をせねばならぬ場合に、まだ奏上せざる内に、犯罪者死亡せば、位記は取り上ぐるな、又た奏上の時に、犯罪者、既に死亡し居た事を知らずして、奏上の後に至り、墓已に墓日に死亡した者と云はば、常法の如くにして受すなと云ふ也、又た常赦の免さざる犯罪は、常例によりて免されず、若し難犯の死罪者か、庶刑終結したれ共、まだ奏上のなき内に、赦に會ひて全く免さるる共、現職は解任せよと也、

附例 〇流以下は、流罪以下、〇除、免、官當は、除名、免官、官當にて、考課令、六十二條及び本篇廿七、八條參看すべし、〇依奏定は、除、免、官當並に常の法例に依るを云ふ、〇追

は取り上げ、〇獄成は、庶刑終結と云ふ如し、〇原は、免す也、見任職事は、現職の事也、

第十一條

流罪人に配所條

凡流人、科斷已定、及移郷人、皆不得弃放妻妾至配所、如有、妄作逗留、私還、及逃亡者、隨則申太政官

本條は、流罪と定まりたる者、及び移郷の人は、妻妾を捨て、配所に到る事はならぬ、皆妻妾を攜帶せよと也、若し途中に於て安りに逗留し、或は密かに故郷に還り、或は途中より逃亡する等の者あらば、直ちに太政官に申告せよと也、

附例 〇科斷は、罪科裁斷と云ふ如し、移郷は、假令に、殺人罪にて死刑の判決を受けたる者が、僥倖に大赦に會ふて免され、其者をば本籍地に歸住せしめて、他郷へ移住するを云ふ、是則ち本籍地へ還さば、復讐等の虞れあるを以て也、

流罪の時に、せむし監作する一例を舉れば、續日本紀第七卷、桓武天皇の延暦元年正月、^{（一）}月未の川^{（二）}に亂を謀り、^{（三）}平賀^{（四）}を誘ふ、^{（五）}是に平賀は延擧されず、詔りありて死、等を述し、^{（六）}伴資の國、^{（七）}三島に配す、其時原法連も亦相國とあり、

又た條條の例を續記に取れば、條へ關く今日河内守候資、解官せり、^{（一）}神今食に遇ふて移轉すべしと云ふ、是れ其子が三條殿を殺したる故の緣ゆ也、同七日、夜に入り橋本連發をして河内守陸奥を遣はしとあり、

又だ、今當御勘に、平の城衛が、平の政衛が、平の政衛と合戦して者を殺りたる所に云く、(前略)河津勘へ申と曰く、應打んとしたる政衛が御尤も重し、遂に遠き所に流さるべし、御け暇ひたる政衛が別輕し、郷を移し一年許りして見るべしと云ふに、公家官員を平されて、政衛をば遠く隠岐の國に流さるれ、維新をば淡路の國に移轉せられ。

八〇〇

凡流人應配者、依罪輕重、各配三流、謂近中遠處。

第十二條 流罪二等條

本條は、流罪の等級を制定したる令條也、流刑者の流さるべき場所は、罪の輕重に依て、三等に分ちて流せよ、則ち東さは遠島又は遠國へ、次は中等の遠隔地へ、輕さは近國へと也、
○應配は、ナガス可くと訓じ、○近、中、遠は、京都を路程起算の元とす、
續日本紀に、神龜元年三月庚申に諸流配遠近の程を定む、伊豆、安房、常陸、佐渡、隱岐、土佐の六國を遠と爲し、讃方、伊豫を中と爲し、越前、安藝を近と爲す、延喜刑部式と大同小異にして、讃方を信濃としたると、里程を六十一里の計算にて記しある而して大寶時代は五十一里と此五十一里は現今の六十に當る

第十三條

流移人官量配條

凡流移人、太政官量配。符至、季別一遣。若符在季末至者、聽與後季人同遣。具錄應隨家口、及發遣日月、便下配處。

遞差防援、專使部領、送達配所。付領訖、速報元送處、并申太政官知。若妻子在遠、又非路便、預爲追喚、使得同發。其妻子未至間、以身合役者、且於隨近公役、仍錄已役日月、下配所聽折。

流刑又は移郷者は、太政官に於て、罪の輕重を量り、遠近を斟酌して流し又は移せ、而して刑部省、或は地方廳にては、太政官の達しが各季の末に來らば、些少遅れてもヨイから、次季の者と同時歸めて配所へやれ、若し官の達しが各季の末に來らば、些少遅れてもヨイから、次季の者と同時に遣す事を聽す、皆各携帶の品隨伴の家族、及び發遣の年月日を叙して、配所の當局へ報告せよ、罪人の護衛兵は、沿道の國々にて立替へ、專屬の官使は、罪人を統率し配所送往きて配所の當局に渡せよ、配所の當局、受け終らば、速かに、始め送り遣したる役所へ報告し併して太政官へも申告せよと也、若し妻子等が、犯罪者と其居を異にして遠隔し居るか、又た行路の不便を極むる所ならば、前以て招き寄せて、成べく同時に發足させよ、又た妻子到らざる内に罪人を就役させねばならぬ場合は、最近の地に於て、公役せよ、然れば已に就役せる日數を録して、配所を下して、後日就役の日數に差繼ぎ、算入してやれと也、

大寶令新編 第二十卷 第二十九條 獄令

八〇一

凡遷送死囚者、皆令道次軍團大毅、親自部領、及餘遷送
囚徒應禁固者、皆少毅部領、并差防援、明相付領
○流移は、流罪と移轉、○量配は、斟酌して流せの義、○季別は、春夏秋冬別也、○符は、官の達し、○季末は、春又夏等の末月を指せり、○後季は、次季にして春ならば夏を云ふ、○家口、は家族の如し、○遷は、カヘリ替り、○防援は、警備者、前の六條にあり、○軍使は刑部省より配所へ下す罪人部領の役人也、○付領訖、授け受け終り也、○元は、初め也、○追喚は、呼寄せの如し、合役は、使役すべく也、○公役は、お上の仕事に使用也、○總折は、べり殖すを免せ也、

第十四條

遷送死囚條

本條は、死刑人を遷送する時は、專屬警備者の外に、沿道軍團の大毅をして親自ら旅當引奉せしめよ、其他死刑に非る囚人にして、禁固すべき者には、沿道軍團の少毅をして警備人と共に送すべき處へ確に送り届けて受取らせよと也、

○死囚は、死罪と決したる囚人也、○遷送は、國送りと看做すべし、○軍團大毅、職員
令七十九條、軍防令一條、十三條等にあり、○禁固は、現行法の禁錮刑に非ず、單に堅く禁め

凡流移人在路、皆遞給程糧、每請糧、停留不得過二日、其
傳馬給不、臨時處分。

第十五條

流移人給程糧條

て逃亡せざる様にして置くを云ふ、○防援、前條及六條等にあり、○明相付領、明は、明瞭にして確乎と云ふ如し、付は、授け、領は、受取也、

流罪者及び移郷人の配所に到る道中に在りては、皆沿道の國々にて糧食を給與せよ、但し糧食を請る毎に、滯留は二日間より多くはならぬと也、而して其乗用又は小荷駄の爲めに驛々にて傳馬を給與するとせざるは、臨時の處分とせよと也、

○程糧

は、道中の食糧也、○傳馬は、公式令四十一、四十二條にあり、

第十六條

流移人餐着調食條

凡流移人、至配所付領訖、仍勘本所發遣日月、及到日、准
計行程、若領送使人、在路稽留、不依程限、領處官司、隨
事推斷、仍以狀申太政官。

流罪人及び移郷人を奉ひて、配所に送り住く使者が、配所の當局者に罪人と引渡せば、當局者

に於て、罪人發程の始めより、到着迄の日數を計算し、其路程に費すべき日數と云ふものは、既定の規則があるから、ソレに准じ算積して見て、事故なく道中にて、安りに滞留等ありしものと雖知せば、領送使に尋問して、同使を處分せよ、其上其事由を太政官に申告せよと也、

○本所は、罪人の初置地を云ふ、○行程は、道程也、○稽留は逗留の如し、○程限は、旅行規則の如し、○領威官司は、受取役所役人の如し、○隨事推斷は、事柄に依て尋問處分と云ふ如し、此役人の此處分だけは、特別の例とせり、

第十七條

流移人再仕官條

凡流移人、移人、謂本犯除名者、至配所六載以後聽仕、其犯
反逆緣坐流、及因反逆免死配流、不在此例、則本犯不應流、而
特配流者、三載以後聽仕、有陰者、各依本犯收斂法、其解
見任、及非除名移鄉者、年限准考解例、

流罪者及び移鄉人の本犯が除名罪ならば、配所に至りて滿六年經過の後は、再び仕官する事を許す、
三、蠲赦、因ての流罪人は、根絶せねばならぬ、故に永久仕官を許さず、又た其罪、謀反とて國家を危殆ならしむるとか、又た謀逆として山陵宮闕を破毀せんとせし者か、又た無坐流として

反逆人に興して流罪となりし者か、或は反逆によりて死を免されて、配流に處せらるる者ならば、此例に非ずと也、則ち永久奉職は聽されと云也、又た元來の犯罪が、流刑に非ざれば、犯罪の次第柄に依て流罪にさるる者は、特配流と云ふて、三年の後に再び奉職を許せと也、而して父祖のお蔭のある者共は（這般令無世入職を看す）、其犯罪に依りて、官位返上或は緩葬さるるも、時効の如く或る一定の時に至りて再び發作さるるの法律、故に其法に依れと也（此法は、還赦令第七條にあり）、又た官吏が移郷の罪にて、現職を解官せられたり共、除名罪（這般令廿七條）の移郷でなければ、考解の例（這般令五十六條）に准じて、一ケ年の後に發作する事を聽せと也、

○移人は、官吏の移郷人也、反逆は、八府中の第四迄の類を總稱したる語也、（這般令五十六條）
（移人）を稱せり、縁坐流は、反逆の如き大重罪の正犯者に與みせざるも、亦更に秋毫の末程も犯罪事故を知らざるも一家内の者ならば、從犯同然の處分を受けるを云、有陰は、父祖の高位高官等の庇蔭あるを云ふ、本犯は、コゝでは除名を云ふ、收斂、收は位記返上の如し、叙は後日再び敘位せらるる事、考解は、勤め振にて落第と云ふ如し、（這般令五十六條に詳せり）

流罪及移郷人の事に就ては、先分當てぬる史例に非ざれば、續日本紀廿七卷、桓武天皇の延暦元年閏正月壬寅（紀元八四十二年）の大治流罪三位及伴流罪家持、右衛士の督止、四位上坂の上の大臣等連同職、叙位正四位下伊勢朝臣を人、從五位下大原真人を叙、從五位下藤原朝臣藤原等五人の職事は、其現任を解かれ、叙位は、京外に移せり、并に川關が事に當て也、自外（この）黨集合して三五五人、或は川關が細賊、或は平生の知友并に京外に出せり云々、

凡犯徒應配居役者、畿内送京師、在外供當處官役。其犯流應住居作者亦准此。婦人配縫作及舂。

第十八條 犯徒配居役條

凡て徒罪を犯し、本人居住地の附近に於て、役使さるる者にて、畿内の者ならば京都に送れ、地方ならば其土地の官役の使用せよ、流罪人にして、或は本人居住地の附近に於て、役使さるる者も亦此に准せよ、但し婦人ならば盤縫及び米塲にあこよと也、

○居役、居作、も共に居住地附近に於て役使さるる也、流罪は一年、加役流は三年間役に服く事上達せり、而して男囚の役と云へば、延喜囚絨式を借りて解すれば、土木の工事及び諸般の雜事に使役す、又た囚獄司は、毎月六日毎に、囚人を引率して、宮城の四圍を掃除、或は宮城内の汚穢井に便所、溝渠等を掃除せしむ、其罪人は、現今の懲役人の如く、徒刑以上の者には、三、四人に連鎖を着けて役使す、但し毎日暮、役終らば手カセ、足絛を加へ、明日役に出る時は又たカセを脱せよ、官役、は公役の如く官の使役也、○住は、舊刊本、及び石川本の奏解の職員令囚獄司の件云に、任に作れり、愚按するに何れにても解釋の仕やうによらむ、則ち居作に任すべくと讀むも理あり、又た住解作すべくと讀みたる所が左釋差支もなき如し、○

配は、原本にアテとあり、分配又た配當の配の義なり、

第十九條

流徒人居作條

凡流徒罪居作者、皆著鈇若盤枷。有病聽脫。不得着巾。旬給假一日。不得出取役之院。患假者陪日。役滿、遞送本

凡て流刑、徒罪の居作者（前條にあり）には、足、又た頸に絛を着けよ、併し病囚ならば脱してやれ、然れ共、帽は冠する事はならぬと也、右の罪囚等には、十日に一日宛の休みを給與せよ、休まず其年含の捕の外へは出す事はならぬ、又た病囚ならば無論休みを充てよ、休みだけでは、冬快の後に至りて勤め還させよ、而して徒刑の役、満期に至らば、本籍に驛送りとしてやれし也、

○鈇、大計、時計切、并に音筑、説文に錢鈇也、廣韻に鎖を以て足に加ふる也、増韻に頸に在るを鈇と曰ひ、足に在るを鈇と曰ふ、共に和名抄に、加祭殿の訓あり、祭等にては諸説紛紜たり、愚按するに、我師中の方言に、東縛をカラゲルと云ふ故はカナギに隨ひてい意義亦要ならず、併し説方可に、此利具共を總稱してペンリキ（兩力斬）と云ふ、項に在るを項力、手に在るを手力、足に在るを足力と云ふ、又手鈇

足^{ミツ}、^{ミツ}云ふ、○盤桓は、^{ミツ}カセ也四條、四十二條、六十三條看すべし、○巾は、頭巾又た帽
子也、古は貴殿上下共に各着用せり、四十二條看すべし、○院は、年含の一ト堪へ也、○患
假は、病氣休、○陪日は、役かへす如し、○遞送は、驛送り、如、○本願は、本貫或は本籍
或は原籍と云ふ如し、

朝野群載に、天喜年間に係る、古文書的なる看鉄勘文、五人のあり、新解上必要を認めず、
調査用途に添記す、

第二十條

徒流囚在役條

凡徒流囚在役者、囚一人、兩人防援。在京者、取物部、及
衛士宛、一分物部。在外者、取當處兵士、分番防

凡て徒、流罪囚の役使中は、囚一人に付、看守、押丁の如き警備者二名宛を附けよ、其内京
都内の囚人には、物部、及び衛門府、左右衛士府の三所の兵士則ち衛士を取りて宛てよ、一分
は物部、三分は衛士とせよ、地方は、地方の兵士を取りて、交代に番を立てて看守せよと也、
○防援は、警備者にして、現今の押丁の類なるべし、○物部は、其名義未詳なれ共、武士
部の如く、一部の軍人又は勇者又は健兒の類の如く、部は族類とか或は一族とか云ふ如し、

武勇を以て奉仕する者也、併しコは古代の軍職に非ず、職員令卅二條參考すべし、○衛士は、
職員令第五十九條、同六十一條を參看すべし、

第二十一條

流移人途中分焼疾病條

凡流移囚、在路有婦人產者、并家口、給假二十日。家女及
婢、給假七日。若身及家口遇患、或津濟水長、不得行者、並
經隨近國司、毎日檢行、堪進則遣。若患者件多、不可停待者、
所送使人、分明付屬隨近國郡、依法將養、待損則遣遞送。若祖父
母父母喪者、給假十日。家口有死者、三日。家人奴婢者、
一日。

凡て流罪移郷の囚人が、配所に送らるゝ途中に於て、其攜帶の妻妾が分娩したならば、廿日間の
休取を給與して滞留を許せ、又家來の妻、或は下婢が出産したならば、七日間の休取滞留を給與
せよ、若し本人、及び家族中に病氣に罹りしか、或は渡船地等に向ふて洪水の爲め、河留め
に逢ひし場合などは、最近の地方役所に其旨を届け出よ、届を受たる當局官吏に於て毎日検査

に行け、而して渡船の出来得るに至らば、前方へ進行せよ、若し患者少なくして、同伴者多き場合は、多勢を逗留するに及ばぬ其時には、附添送る使者より、最近の役所、則ち國廳又は郡役所に患者を附托して、所定の法令(五十四條)に依て、療養せしめ、多くの健康者には先きに往かせよ、而して患者を全せよ、沿道各國軍團の大部を(國送り)にせよ、又た途中にて、祖父母、父母、死去せば逗留休暇十日間を給與せよ、家族の死去ならば三日、家來及び奴婢の死亡ならば一日だけ休ませよと也、

附 ○家女は、家來の如し、(家口は、家族と云ふ如し、)過患は、疾病に罹る也、○津濱水長、は渡船場の洪水と云ふ如し、○國郡は、府縣廳郡を云ふ、○將養は、療養せよと云ふ如し、(特損は、全卷を待つ也、但し廿日と一日は、其良民賤民の懸隔甚大なる事の時勢を想察すべし、(戸令第三十二條に、患病の語あり參照すべし)

第二十二條

流移人途中遺喪條

凡流移人、未達前所、而祖父母父母在郷喪者、當處給假三日發哀、其徒流在役、而父母喪者、給假五十日舉哀、祖父母喪、重者亦同、二等親、七日、並不給程、

凡て流罪移郷の人が配所に到着せざる途中に於て、故郷に居る祖父母、父母の死去を聞たらば、休暇滞留三日を給與して哀悼せしめよ、又た役使に就きし上、故郷に居る父母の死去を知たらば、五十日の休暇を給へて哀悼を舉げさせよ、又た祖父母死去して、孫が直接相續する場合も亦兩親同断とせよ、又た二等親の者の死亡の時は、七日の給假とし、共に各養所の外へは出ず事ならぬと也、

附 ○前所は、流刑人にては配所、移郷人に對しては、移住地を云ふ、喪は、死去を云ふ、舉哀は、哀悼を表する禮、假令第三七條及び九條參照すべし、承取は、繼嗣令第三條及び本篇四十八條に同文あり、先祖代々の祭りを承け繼ぎて祭る事を重大とするに因り(二)名なれ其忌按にては「單に相續と看做して穩當ならん」、こゝは祖父より孫が直ちに相續を承けたるの文也、(不給程は、禁所より外へ出ずを許さず也、(本條及び四十六條同文あり)、禁所を假りに牢とせしも移郷人の如きは監獄に非ざるなり餘の條皆斯の如し、程の字は何四十八條に詳解す、

●考 名例律に、八官に非ざる流罪人の祖父、父母、年齡八十以上、又は篤疾に二看護を要する者は、配所へ遣はさず、親死去の後三ヶ月を経て遣はす、之を權留、養親と云ふ、假令、配所に一旦往て居ても、右の如き手續きが出来得る也、名例律は老疾に侍するの意、本令條は侍せざるの人に依りて立たる法也、戸令の十一條をも參照すべし、

凡婦人在禁、臨產月者、責保聽出、死罪、產後滿二十日、

流罪以下、產後滿三十日、並則追禁、不給程。

凡て婦人監獄に在りて、臨月になり、保釋を出願せば、出獄を聽せ、但し五人組の保證を要す、死罪の婦人ならば、分娩後廿日間出獄しこおけ、流罪以下ならば、産後卅日だけ出獄しおけ、右各歸獄せば、獄外へは出す事はならぬと也、

附 二產月、臨月也、責保は、五人組の保釋を願也、(本罰四十二條、公令七十八條、八令九條、十

條、參照すべし) 産出は、出獄を稱す也、追禁は、歸獄則ち牢岸へ返す也、(不給程、前條及

び四十八條にあり、

第二十四條

死罪婦人產子條

凡婦人犯死罪、產子、無家口者、付近親收養、無近親、付

四隣、有欲養爲子者、雖異姓皆聽之

凡て婦人死罪を犯し、死刑の宣告を受けたる後、出産して子供を養ひしに、其婦人の家族として

は祖父母、父母、兄弟姉妹、及び家來奴婢も亦なき時は、其初生児は、婦人の三等親以上の親

族に引取らして養育せよ、若し右の如き近親なくば、向ひ三軒、兩隣に引取らせよ、併し其

内ニ其子を引取り養ふて我子とせんと望む者あらば、他人と雖も許して養育せよ、但し還彼

令第三十條にある如く、凡て人の後たらん者は、兄弟の子(甥、姪)に非ざれば、出身する事を

得ざるもとある如く、父祖のお蔭(蔭位等)等に浴する事はならぬと也、

附 〇家口は、家族全體を云ふ、〇近親は、コでは三等親以上、〇四隣は、俗に所謂向ひ

三軒、兩隣りの如し、〇異姓は、同族に非ざる眞の他人を云ふ、

第二十五條

公坐相連條

凡公坐相連、右大臣以上、及八省卿、諸司長、並爲長官、大納言、及少輔以上、諸司貳、皆爲次官、少納言、左右辨

及諸司糾判、皆爲判官、諸司勘署、皆爲主典、

本條は、公務に關して連坐の時に、首犯、從犯を四等に分ち立たる令條也、

凡て公罪に係る連坐の時は、諸官衙の首官(官司)を四等に分ち立たる事左の如し、

本政官の右大臣以上、及び八省の卿、諸役所の長をば、皆長官とせよ、次に本政官の大納言及

び八省の少輔以上、諸役所の貳(地方官)ならば、大率は大、小貳を云ふをば、次官と立てよ、

次に太政官の少納言、及び左右の辨官、諸役所の札判、地方官ならば大、少總なり、をば判判官とせよ、次に太政官の大、少外記及び八省の大、少録、地方官ならば大、少目、則ち書記とも稱すべき者を主典とせよと也、(第一重官位各の廿七廿八頁の四等四分の圖を參照すべし)

○公坐相連、は公務に係る連罪と云ふ如し、假令は、太政官の外記は官中の積失を檢出する職掌なれば、其務めに就て失あるは、則ち公罪也、因て外記を首更(主犯又正犯)とし、少納言を第二の從犯とし、大納言を第三從犯とし、左右大臣を第四從犯として遂に上官へ及ぼす也、又た之に反して、大臣に過失の有る時は、順に下官へ及ぼす也、唐律の例に據て考れば、少納言過失ある時は、少納言首となり、大納言は第二の從、大臣は第三從、外記は第四從となる、又た大納言過失ある時も亦之に準せよと也、○勸署、は畫面を鞠へ造り鞠へ正を云ふ也、

第二十六條

父祖犯罪條

凡因父祖官蔭、出身得位、父祖犯罪除名罪者、子孫不在追限、若子孫復除名者、後叙之日、則從無蔭法、其父祖因犯罪降叙者、亦從後蔭叙。

凡て父、又た祖父のお蔭に因て、子又た孫が位階を玉はり出身した後に、父又た祖父が除名罪

を犯したる共、子又孫の位階は取り上ぐるに及ばぬ、若し子又た孫も除名犯罪せば、六年の滿期後、再び敘位の恩に浴せらるれ共、此犯罪では、お蔭の位階を玉はる譯にゆかず、無位無官者を除名滿期の法に従へと也、次に父又た祖父が犯罪の應あり、爲めに降して敘位されたる時は後の敘位の位階に従て敘位せよと也、

○蔭は、オカゲ也、還敘令卅八條に詳也、○追限は、取り上ぐる限り也、○後叙は、一旦取上げられたるか、又返上の後再び敘位の事也、還敘令卅七條に詳也、○無蔭は、無位の如し、後蔭は、父祖犯罪後、滿期の上、再び敘位になりし後、子孫が敘位を蒙る時には、父祖が後に敘せられたる位階に因て給はるを云ふ也、

第二十七條

官人移配條

凡官人因犯罪移配、及別勅解見任、若本罪不合除免及官當者、位記各不在追例

凡て官人犯罪ありて、移配せらるるか、又た時別に勅命に因て現在の官を解職されても、本犯が除名、免官、官當でなければ、位記は取上ぐるに及ばぬと也、

○移配、所替又た所籍にして、復讐等を選けさする也、十一條參看すべし、○別勅は、

十七條の特記流を參考すべし、○見任は、現職の如し、○除免、官賞、は次條又た二十八條及び考課令五十一條にあり、○追は、取上ぐる事、

第二十八條

除免官賞條

凡犯罪應除免及官當者、奏報之日、除名者、位記悉毀。
官當、及免官、免所居官者、唯毀見當免、及降至者位記。
降所不至者、不在追限。應毀者、並送太政官毀、式部案注、
毀字、以「太政官印」印毀字上。

凡て官更罪を犯し、除名、免官、及び官當すべき者は、奏上して勅可を蒙りたる日に、除名ならば位記は悉く破り棄てよ、官當し免官免所居官は、唯罪を贖ふだけの位記を毀れ、降所不至は位記を取上ぐるに及ばぬ、而して、位記を破毀するには、式部省に於て毀の字を鑄して太政官に差出せ、然れば、太政官にては、其毀の字の上へ太政官の、太政官と云ふ印文のむる印を捺して毀れと也、本注は、山田以文の説に従ふ也、

○除免は、除名と免官也、除名は、金玉章中抄に、名例律に、凡て除名は、官位並位悉く破さ、課役本色に従へ、六載の後、彼せらるる事を聽す、とあり、免官は、三載の後、先位

より二等を降して彼せよとあり、考課令六十二條、及び公式令八十四條參看すべし、○官當は、官位の價を以て罪の價に當つるを云ふ、名例律に云く、私罪を犯し、官を以て徒に當れば、一品以下三位以上は、一官を以て徒二年に當、五位以上は一官を以て徒二年に當、八位以上は一官を以て徒一年に當、若し公罪を犯さば各二年を加へて當、○免官は、奏上の後、勅可を蒙るを云ふ、免所居官は、居所の、官を免する而已にて、勅位は除かぬ、此罪は滿一年の後、先位に一等を降して彼せらるる也、(還職令三十七條、軍防令三十五條、々參看すべし)

見當免は、現實と現免の二罪也、官當に因て職罪に當べき位階を現實といひ、免所居官によりて、返上すべき位階を現免と云ふ、

降至とは、免官者の、三載の後、先位に二等を降して彼せらるる位階を云ふ、

○降所不至とは、免官者三載の後に彼せらるる位階を云ふ、

歷任位記として、下位より昇進して位記を多く持たる官入程、此の如き犯罪の場合には利益である、則ち突き出し高位に彼せられたる者は、其位記の數寡少なれば也、

正七位上 (見免)

毀位記

正七位下 (降至)

同上

從七位上 (降所不至)

則ち三載の後二等を降して彼せらるる者、

大寶令新解

第二十卷

第二十九篇

職令

八一七

右の圖は、正七位上の犯人ありて、受官に決したる時、其元の出身が、從七位上か、若くは其下階より應任して昇進したる者とせし也、故に降所不至と云へるは、正七位上下二等の外、猶應任したる、從七位上の階を指すなり、

（追陳は、取り上ぐる限り也、頗る後世の事なれ共一例を舉ぐれば、平治物語に云く、去程に被る明ければ、公卿會議あるべしとて、大殿（忠通）關白（基實）太政大臣師賢、左大臣伊通公以下各參内し給へり、是は少納言入道（信西）が子息、僧俗十二人の罪名定め申されん爲め也、左大臣伊通公第の申されけるに依て、死罪一等を減じて遠流に處せらる、俗は位記を停められ、僧は度牒を取りて還俗せらる、

第二十九條

犯罪官人不得入内條

凡犯罪應除免官當者、不得簪事、及朝會、其被勅推、雖非官當除免、徒以上、不得入内、其三位以上、非解官以上者、仍聽簪事、朝會、及入内供奉

本條は、或る程度以上の犯罪官人は參内が出来ぬと云ふ事を示したる令條也、凡て除名免官、官當をされたる官人は、奉職し居たりし役所の職務を執り、及び朝庭の公事節會に參内

はならぬ也、又た勅命にて吟味せらるるものは、除免官當の罪に非ずとも、徒罪以上ならば、是亦參内はならぬ、併し三位以上の人は、解官以上の罪に非れば、或は執務し、或は朝庭の公事節會、及び内裡に入りて供奉する事を許せとも、

〔釋〕 簪事は、事務を執る也、朝會は、朝廷の公事、節會に參内と云ふが如し、勅推は、勅命にて尋問或は吟味と云ふが如し、○入内は、内裡に入る也、○解官は、難犯の死罪が赦に會ふて解任さるゝを云ふ、荷田作滿は、蓋し除名なりの説を立たり、

第三十條

贓狀露驗條

凡犯罪事發、有贓狀露驗者、雖徒作未盡、見獲者、先依狀斷之、自外從後追究

凡て竊盜又詐欺取財の犯罪が發覺して、尙其不正品の發見したるものは、其犯者あるも、既に捕縛したる犯罪者を吟味裁判するに、主從兩犯分明ならざる場合は、從犯として判決を言渡せよ、其内其犯罪も逃じの者は、後日追捕の上裁判せよと也、

〔釋〕 ○贓狀は、本篇三條にあり、○露驗は、顯れ出たる證據物と云ふ如し、○徒伴は、共犯者也、又た同類の如し、○見獲は、現に獲得と云ふ如し、○依狀斷之は、律の共犯罪人逃じの

法に依て裁判と云ふ也、○自外は、ソノ外の者也、○従後は、原本にシテ、ヨリと調みたり
とノチニと調む方經營ならんと小中村消短の説なり余はアト、ヨリと俗讀するも却て分り易し
と思ふ、○追寔、追は其犯者を捕縛するを云ふ、寔は、事狀を訊問するを云ふ、

第三十一條 未斷決逢格改條

凡犯罪未發、及已發未斷決、逢格改者、若格重、聽依犯時。若格輕、聽從輕法

凡て犯罪の發覺前は勿論、發覺後と雖も、未だ判決のなき内に、臨時發布に係る法令の改正等に違ひて、若し其改正令が重きに當るならば、前令に依れ、若し亦改正法が輕くなりてあらば輕きに從ふて判決するを許せと也、

○格は、臨時發布の法令也、

第三十二條

告言人罪條

凡告言人罪、非謀叛以上者、皆令三審。應受辭牒官司、並具曉示慮得反坐之狀、每審皆別日。受辭官人、於審後署記。審訖、然後推斷。若事有切害者、不在此例。切害、

謂殺人、賊盜、逃亡、若強奸良人、及有急速之類、其前人合禁告人亦禁。辦定放之。

凡て人の犯罪を告發告訴し來らば、八箇の中の謀叛以上でなければ、皆日を別にして三回迄、告發告言人の虚實を取り査す爲めに、告訴告發人を取調ふ、則ち告訴告發を受け受理したる警官又當局官は、具さに告訴告發人に告るに、汝の告訴又告發は若し虚妄ならば、却て汝は誹告と云ふ罪に陥らねばならぬと、能く三回まで曉し示せよ、告訴告發を受け受理して取り調ふる當局官は、取調毎に、告訴狀の奥に其事狀を記録し署名せよ、而して取調へ終結の上で裁可せよ、若し告訴の事柄が、殺人、盜賊、逃亡、強姦、及び其他の曠遠を要する事件の類ならば、三回迄取調べに及ばぬと也、而して被告人が、獄に禁せらるれば、告訴又告發人も亦禁せよ、併し辨明せば告訴人を放還せよと也、

○告言は、告訴及び告發也、○謀叛は、五條にあり、○三審は、三回調べにして、現今一般に通用せる三審より其意義狹小なる也、○辭牒、共に告訴狀を云ふ、辭は無位無官則ち庶民よりの告訴狀、假は有位者よりの告訴狀を指す、官司は、判官以上の義解なれ共、今で云へば司法警察官及び檢察官なるべし、反坐は、アベコベの罪と云ふ文字にて誹告を指せり、

○毎季、圖へ毎にひとり○受辭は、告訴狀を受ける也、○署記、署名記録の事、○推斷は、裁判
○切實は、殺人は勿論強盜強姦等をも含有するなり、○良人は今云ふ夫に非ず、古代は良民、
隣民の區別甚しかりし故に、隣民に對する語なり○急速とは、假し盜賊を捕かん爲めに、堤
防を決壊して洪水を放ち、人家を漂し、或は放火をして人家を焼く等の事柄を云ふ、○前人は、
被告人を指す、○禁は、本篇第三十九條四十二條を參看すべし、

第三十三條

密告條

凡告密人、皆經當處長官告、長官有事、經次官告、若長
官次官俱有密者、任經此界論告、受告官司、准法示語。
確言有實、則禁身據狀檢校。若須掩捕者則掩捕。應與餘
國相知者、所在國司、准狀收掩。事當謀叛以上、雖檢校
仍馳驛奏聞。捐斥乘輿、及妖言惑衆者、檢校訖總奏、承
告掩捕者、若無別狀、不須別奏。其有雖稱告密、示語確不
肯道、仍云事須面奏者、受告官司、更分明示語、虛得無密

反坐之罪。又不肯導事狀者、禁身、馳驛奏聞。若直稱是謀
叛以上、不吐事狀者、給驛差使部領送京。若勘問、不道
事狀、因失事機者、與知而不告同。其犯死罪囚、及配流人、告
密者、並不在此限。應須檢校、及奏聞者、准前例。

本條も亦、前條の如く密告に關する手續きを示したる令條也、

其類以上に當る秘密の大事を告發せんとする者は、地方長官に届け告げよ、長官事故あらば次
官に告發せよ、長次官共に連類者の疑あらば、隣國の長次官等に諭告せよ、而して此告發を受
けたる役人は、前條の如く、三日間に三回取調べと云ふ手續き事はして居らずして、即ち三
回迄其實否を取調べ、尤も虚偽ならば汝は誣告罪となる云々を諭し聞かせ、續然虚偽ならざるを
認定せば、告發人を一ト先づ禁固して吟味せよ、若し召捕るべき者あらば、直ちに捕縛に當
りせよ、若し賊黨の如き者多數にして、一國にて捕手が不足と豫想せば、至急隣國に協議して召
捕れよ、而して捕獲して吟味すと雖も、猶早追を以て冬間に達せよ、併し大不敬罪か、又た
奇怪の言觸らし等にて、衆人を迷惑する如きは、吟味し終りたる上にて奏せよ、又た告發
を受け、捕獲して見て別狀なくば奏上するに及ばぬ、又た大秘密の告發と稱へて、當局者が誤聞

するに、口ヲを開かして、天子の御面前でなければ申し上げられぬと申さば、受告の官人更に能々告量人に合點の行くやうに、虚偽の告發は誣告罪となる故にと、又々三回迄も曉し示して、對事狀を言はざれば、告量人をば其所に禁固し置て、皇追を以て其事を奏聞に達せよ、若し又直ちに、謀叛以上と申して、事狀を明かさざる者は、驛馬を給與したる使者を附けて京都に送れ、若し取調をして見て、事狀を言はず、其爲めに事機を失はば、知りて申し上げざる者と同罪とせよ、又た死罪を犯せる囚人、及び配所に居る流罪人等にして、秘密の事件を告發する者は、京都に送るに及ばぬ、又た吟味して見て、奏聞に達せねばならぬ事柄ならば、前諸項に准せよと也。

告密人は、今云ふ密告人也、**富藏**長次官は、今云ふ知事と内務部長の如し、**新比界**は、隣國に告ると云ふ如し、**受告官司**は、告發を受けた役人、**不語**は、詮議の如し、**無身**は、逃れやうにして置く事、**檢校**は、**勘問**の如し、**掩捕**は、召捕也、**獨子方言**卷六に云く、掩は取也、但し一人計りを召捕に非ず、即ち多勢を召捕時に使用する文字なり、**餘國**は、隣國等を云ふ、**相知**は、相談の事、**收掩**は、捕獲と云ふ如し、然れ共掩の字は上述の義あり、**檢校**は、吟味なれ共勘へ同ふなり、**驅解**は、早乘脚也、**公式**令四十六條にあり、**相斥乘輿**は、主上の服御の物を盗むか、奪るとかの義にて、**名例**律の八虎中の第六、大不敬

の罪、**妖言**は、奇怪の言觸らしと云ふ如し、**確不肯落**は、堅く言ふ事を承知せざる也、**匿**の字は堀本立野本等諸本に曾道の字の下に口字を附加してあれ共、**道**の字も同字であると、**集韻**等に載せり、杜略切、音稻、或は口を延りにしたる字も同じと云ふ、併し口ヲを齊にしたる字を撰用ありしは意味のある事とす、**無密反告**は、誣告罪也、**給解**は、解給を給はる也、**公式**令第三十一、廿二、四十一、四十二條に詳解せり、**差使部例**は、使を掌領として附けてやれと云ふ如し、**准前例**は、上文にある數項に準せよと云ふ如し、**捕亡**令第三條參看すべし、

第三十四條

囚逮捕引人爲徒侶條

凡囚、逮捕引人爲徒侶者、皆審鞫由狀、然後追捕。若追而雪放、又更安引、及囚在獄死者、年別具狀、附朝集使、申太政官按覆。

凡て犯罪者が吟味せらるる時に、或人共をも徒侶としたならば、審らかに其由を究問した後に捕縛せよ、若し捕縛引して見て無罪放免となりしを、又た更にドリありても彼は同類なりと強情を張るが如き事あらば、太政官に上申して、官使の下るを待て判決せよ、又た囚人の牢死は年別に狀を具して、年末に上京する朝取使に附して太政官に申して該判官の臨時出張を請へ

と、或は太政官は都合に依て巡回裁判官（覆囚使）の巡回する時に吟味することもありと也、
 ④ 逃引は、及ばし引き入るゝの如し、（徒弟、同類の如し、）審判は、明細に究問と云ふ
 如し、（追察は、召捕也、）追も、亦召捕也、（雪は、明了に黒白をつけて白くなりたる意也
 ○放は、放逐、○妄引は、強情に引き入ると云ふ如し、○朝集使は、職員令二條（太政官大辨
 の項）同十三條式部省、公式令五十一條等外諸殿にあり○按覆は、吟味の如し、

第三十五條

五 聽 條

凡察獄之官、先備五聽。又驗諸證信、事狀疑似、猶不首實者、然後拷掠。每訊相去二十日。若訊未畢、移他司、仍須拷鞠者、囚移他司者、連寫本案俱移。則通計前訊、以宛三度。則罪非重害、及疑似處少、不必皆須滿三。若囚因訊致死者、皆具申當處長官。在京者、與彈正對驗。

凡て吟味役則ち警官及び檢事判官の如き役人は、先づ五聽と云ふて、告訴告發人、及び視陳者
 の言葉づゝ、顔色、服付々、舉動等に就て、其幽微なる點迄をも察知するは勿論、偵察すべき

諸多の證據をも捉へよ、又た事實中に疑の點ある歟、對實を吐かざれば拷問せよ、但し拷問は
 廿日を隔てざれば次回の拷問は出来ぬ、若し訊問終らざるに他の役所へ移して拷問せねばなら
 ぬ時には、口供陳述等の書類を寫して犯人と共に移せ、併し拷問は兼役所を移すとも、前後三
 回よりかなりぬ、斯の如く拷問は、三回よりなりぬ法律なれ共、殺人或は強盜、或は放火等の
 如き、及び疑の少なき者には、必ず三回の拷問を待たずして判決せよ、若し犯罪者が拷問に依
 て死じせば、郡役所ならば府縣知事に具申せよ、京都内ならば、彈正事の役人が、死じせし役
 所に出張して係り官人と立會て取調べよと也、

⑤ 察獄之官は、今の判官檢事、警察官の如し、（五聽は、周禮卅五に、一に曰く辭聽、辭聽
 は其言葉を出すを観るに正直ならざれば煩らひ渡る、二に曰く色聽、色聽は其顔色を観るに、正
 直にあらざれば、多くは赧然、三に曰く氣聽、氣聽は其呼吸を窺ふに、正直ならざれば氣息追樣
 の状態を望す、四に曰く耳聽、耳聽は係り官の訊問等を聞いて惑ふ状態あり、五に曰く目聽、
 目聽は、其眼眸を観るに、虚偽ならば、眸子は勿論眼目の内外何となく移かならざる状態ある
 と也、○驗諸證信は、諸多の證據を調べ得る如し、○疑似は、ニョリ也、○首は、白也、○拷
 掠は、拷問の如し、○他司は、他の役所、○拷鞠、も拷問也拷は苦浩切、音考、打也、掠也、
 ○連寫本案は、口供書類の謄寫と云ふ如し、○重害は、殺され、盜まれ、流され、放火せられ

等を云ふ、○警廳長官は、其廳の役所の長官也、對廳は、立會廳查と云ふ如し。

第三十六條

凡 訊 囚 條

凡 訊 囚、非 親 訊 司、不 得 至 囚 所、聽 聞 消 息。

凡て犯罪者を尋問する時は、吟味する役人の外は一切其室に入りて様子を聞く事はならぬと也。但し刑部省の判事は此限に非る也との義解也。

附 註 ○訊視司は、尋問の役人を云ふ、○消息は、通常安否と云ふ事に使用すれ共、コ、では様子と俗譯する方穩當なるべし。

第三十七條

死 罪 訴 冤 枉 條

凡 死 罪 雖 已 奏 報、猶 訴 冤 枉、事 有 可 疑、可 推 覆 者、以 狀 奏 聞。遺 使 覘 驛 檢 校。

凡て死罪人を裁判して、既に奏聞し動可を得たりと雖も、本人に於ては冤枉なりと訴へ、事狀に於ても疑の處あり、再審すべくは、其狀を奏聞し、地方ならば早速の使者を立て、更に吟味せよと也、

附 註 ○奏報は、奏上動可也、○冤枉、はムソツ也、○推覆は、再審の如し、○馳驛は、早速

なり第二條、及式令の廿一、廿二、四十一、四十二條に既解す、

第三十八條

凡 問 囚 辭 定 條

凡 問 囚、辭 定、訊 司 依 口 實、訛、對 囚 讀 示。

凡て犯罪者を吟味するに、係り官の尋問の語と、犯罪人の陳述とを書記が筆記し、豫審終らば其筆記書を罪人に讀み聞かせて相違なきや否や問へと云ふ也、今の豫審廷の如しと想像すべし、

附 註 ○辭定は、言語決定の如し、○訊司は、吟味役人也、○依口實は、陳述の筆記にして即ち口供也、

第三十九條

禁 囚 條

凡 禁 囚、死 罪、枷 杻、婦 女、及 流 罪 以 下、去 枷、其 杖 罪、散 禁。年 八 十、十 歲、及 廢 疾、懷 孕、休 孺 之 類、雖 犯 死 罪、亦 散 禁。

本條は、罪の輕重等によりて、囚人を禁身するに強弱の差あるを示したる令條也、

凡て死罪と認めたる囚人には、頭がせ足かせをせよ、婦人及び流罪以下には足かせを去れよ、

又た杖罪には、頭足の械を施さるは勿論、牢屋をも自由に出入させよ、又た年寄と子供、及

ひ病身者或は妊婦、或は一寸法師等の類なる片輪は（不具者）死罪を犯したる共、亦片罪と同様の取扱をしてやれと也、

○枷は、字書に諸説あれ共、第四條の義解に頸カセとせり○扭は、四條に足枷とせり、名物六帖に字架を引きて手枷とす、小爾雅に、扭之を桎と云ふ、桎之れを桎と謂ふ、唐六典の六、刑部條、唐の斷獄律疏議も共に同文同様也、四條、十九條、四十二條、六十三條參看すべし、○散禁は、獄具を著けず、獄を安りに出入を免さるも、自由出入を許すを云ふ、○瘡疾は、不治の疾、戸令第七條にあり、○懷孕は、或は懷胎、或は妊娠と云ふ如し、○侏儒は、一寸法師の事なれ共、文飾等の爲めに不具者の總代に此一名を舉たるものなるべし、

第四十條

應入議請條

凡犯罪、應入議請者、皆申太政官。應議者、大納言以上、

及刑部卿、大輔、少輔、判事、於官議定。雖非六議、但本罪應奏、處斷有疑、及經斷不伏者、亦奏議量定。雖非此官司、令別勅參議者、亦在集限。若意見有異者、人別因申其議。官斷簡、以狀奏聞。

皇族或は大御行ある人、或は大才藝ある人、又は三位以上の高位の人が罪を犯さば皆太政官に申せ、太政官は大納言以上、及び刑部省の長次官、判事を以て太政官にて議定せよ、而して右の如き六議の人に非ざるも、本犯が奏上せねばならぬ犯罪なるか、又は裁判に疑あるか、或は判決するも不服にて伏罪せざる者も、亦大臣以下、判事以上の衆議にかけて決り定めよ、右の如き大臣、大納言等の役人に非ざるも、特別の勅命にて參議せしめらるゝ者も亦會議に列せしめよ、則ち臨時任用の議官也、若し此會議に在りて、各自議官の意見區々たらば、人別にして官へ申せ、官はソレを衆所簡擇して衆聞に達せよと也、

附註 議請は、六議とて、六種の中へ入る資格を有する會議を云ふ、六議は、法曹至五位、に名例律に云く、一に曰く、議親、議親とは皇族及び皇帝五等以上の親、及び太皇太后、皇太后、皇后四等以上の親、皇后三等以上の親、二に曰く議故、議故とは故舊を云ふ、則ち久しく接遇を蒙る者、三に曰く議賢、議賢とは大德有るを云ふ、則ち賢人君子の言行、法則と爲すべき者四に曰く議能、議能とは大才藝有るを云ふ、則ち能く軍旅を統ひ、政事に於みて帝道を運轉し、人倫に帥範たる者、五に曰く議功、議功とは大功勳有るを謂ふ、則ち將を斬り旗を奪けて録を萬里に擡ぎ、或は衆を率へて歸化し、一時を寧齊し、艱難を匡救し、達く絶域に使して險難を解決する者、六に曰く議貴、議貴とは三位以上の者を謂ふ、○經斷は、判決の如し、○不伏は、

不服の如く、伏罪せざる也。○參議は、會議に參列と云ふ如し、○斷簡は、裁付し選擇するの如し、唐六典の六議制條の注に所司料簡其狀以聞とあり。

第四十一條

裁付依律令正文條

凡諸司斷事、悉依律令正文。主典檢事、唯得檢出事狀。

不得輒言與奪。

凡諸役所にて裁付するには、皆律令の正文に依て裁付せよ、主典の事を檢察するは、唯其事實を檢出するのみにて、有罪無罪等の事を言ふことならぬと也、
○斷事は、裁付の如し、○律令は、法令刑律の如し、主典、は諸役所の大、少ナクシテ也、檢事は、事柄を圖ぶるを云ふ、○與奪は、アヒクハヒの字なれ共、コニでは有罪、無罪と意釋する方穩當なるべし、

第四十二條

應議請減條

凡應議請減者、犯流以上若除免官當者、並貶替、公坐流、私罪徒、並謂非官當者、責保參對、其初位以上、及無位應贖、犯徒以上、及除免官當者、稽禁、公罪徒、並散禁、不

脱巾。

凡て職請に依て減罪すべき資格のある人、若し流罪以上、又は除名、免官、官當の罪を犯さば、並に貶替して麻繩を以て兩脇を縛りおけよ、又た公職の爲めに連坐となる流罪とか、私罪にての徒罪は、並に官當に非ざる者であるから、保釋を願はして監獄へ入れずして在宅させ、而して訊問の時は、係り役所へ召喚して係り官に對せしめよ、又た議請減に預る資格のない初位以上、及び無位の人は職罪にて免罪となるけれ共、徒罪以上及び除名、免官、官當に當る犯罪ならば手械を着けよ、併し公務の爲めに徒罪となる者は、並に手カセを着けず、監獄を去りてなくて自由に出入らせ、又た帽をも冠らせおけと也、

○議請減、本篇四十條の六議則ち、親、故、賢、能、功、貴、の資格ある爲の減罪を云ふ、○除名等は、二十七、二十八條に詳述せり、○貶禁は、麻繩にて兩脇を束縛すると云ふ、○責保は、保釋を願ふの如し、二十三條、戸令九、十條、公式令七十八條、捕亡令十五條にあり、○參對は、參り赴き對面すると云ふ如し、格替は、手械也、四條、十九條、三十九條、六十三條參看、○散禁は、三十九條にあり、○不脱巾、は十九條にあり、

第四十三條

五位以上犯罪條

大寶令新解 第十卷 第二十九篇 職令 八三三

凡五位以上、犯罪合禁、在京者、皆先奏、若犯死罪、及在外者、先禁後奏。聽別所坐。婦女有位者亦同。若五衛府志以上、及兵衛、犯罪須追者、並聽鞠獄官司經本府追捕、本府即奏執遣。其主帥及衛士者、本府則依執送。

凡て五位以上の人、罪を犯したとありて、獄に入れんとする時は、在京の者ならば、先づ奏上の後と致せ、若し死罪を犯せしか、又はは地方にある者は、先づ獄に入れ置きて奏上せよ、右に並に他の第四と別房に居る事を聴せ、又た婦人にして五位以上の人も亦同断とせよ、若し左右兵衛所、左右衛士府、衛門所則ち五衛府の志以上の者、及び兵衛に犯罪あり、ソレを捕縛せんとする時には、吟味する役所より本府に届けて召捕ることを許せ、本府は奉聞の上、召捕りて吟味役へ送り渡せ、但し衛門所の門部、及び使部、と衛士とは、奉聞に及ばず、本府直ちに捕へて獄官に送れども也。

○五衛府は、職員令第五十九條より六十二條迄に詳か也、○鞠獄官司は、吟味する役所也、○本府は、衛府を指す、○追捕は、追捕の如し、三十三條の追捕を參看すべし、○執遣は、捕へて送る如し、○主帥は、職役令九條の主帥に非ず、こゝは衣服令第十四條、則ち武官の制

服の條に據所に、門部、使部を云ふとあるに同じく門部使部を云ふ

第四十四條

奉使掩捕條

凡奉使有所掩捕、皆告本部本司。不得徑則收捕。若急速密者、且捕獲。取本司公文發遣。

追捕する使者となりて、犯罪者を追捕するに、無役の人ならば本府所管の役所に、又は官吏であらば奉職の役所に照會せよ、直ちに召捕る事はならぬ、若し犯罪事件が急速を要する場合か、或は秘密の事情にてもあらば、直ちに捕縛して後に使者を派遣したる役所の公文を以て、本府所管の役所、或は奉職役所に通知せよと也、
○奉使、ツカヒを承玉はり也、掩捕は、追捕也、追捕を捕と云ふ二字共に取り取るの如し、前條の追捕を參看すべし、本府は、本籍又は寄留地の所管の役所を云ふ、○本司、は奉職勤務の役所を指す、○徑は、直ちなり、諸本官任にかかり、恐らくは誤傳なるべし、○收捕も召捕也、○發遣は、出してやれの如し、

第四十五條

男女別所條

凡婦人在禁、皆與男未別所。

凡て婦人を監獄へ入れたらば、男子と別房にして置く也、

第四十六條

長官檢行條

凡四、當處長官、十五日一檢行。無長官、次官檢行。其囚延引久禁、不被推問、若事狀雖可知、支證未盡、或告一人數事、乃被告人有數事者、重事得實、輕事未畢。如此之徒、檢行官司、並則斷決、

京都ならば、京都市の市長か助役、地方ならば、知事か内務部長の内にて、半ヶ月に一回冤獄を檢察せよ、若し未決囚の久しく獄に繋がれ居て訊問もなく、徒らに日子を遷延し居るか、又は罪囚の事狀の大概は知られたれ共、證據の未だ充分事らざるか、又は一人にて、殺人、強姦、盜馬等の數罪あるなどを訴へ出て、被告人間様、繋がれて居るとか、又だ重き事柄だけは裁判して分りたれ共、輕き事は未だ分明ならざる如きの類あらば、檢察官たる長次官の見込を以て裁判し、或べく四人を遂かに判決し言渡せよと也、

○當所長官は、京ならば左及び右京職の大夫、亮、地方ならば國守と介を指す、職員令第六十六條、同七十條參看すべし、○檢行は、檢察を行ふと云ふ如し、○久禁は、長く禁ぐと

云ふ如し、○推問は、訊問の如し、○支證は、證據に支はる事也、故に畢竟と云ふ如しとわれ共、支は字書に種々の解釋あるも、簡釋すれば枝葉と云ふ如し、故に外細の證據と解釋するは適當なるべしと惟ふ○數事は、數罪の如し、○重事得失は、オモなる事は分りたれ共也、○檢行官司は、檢察の長次官を云ふ○斷決、は判決の如し、

第四十七條

地方盜賊條

凡盜發、及徒以上囚、各依本犯、具錄發及斷日月、年別總帳、附朝集使、申太政官、

凡て地方に發したる強竊盜事件、又は死罪、流罪、徒刑に判決してある囚人等を取調べ、其強竊盜を働かしし月日、又た判決したる月日を具さに錄して帳簿と爲し、毎年十一月に年末年始を遡て上京参内する朝集使に附して、太政官へ上申せよと也、

○本犯は、徒罪、流罪、死罪等を指す

第四十八條

重罪人發哀條

凡犯死罪在禁、非惡逆以上、遭父母喪、婦人夫喪、及祖父母喪承重者、皆給假七日發哀。流徒罪二十日、悉不給程。

主亦同。

本條は、原告又は被告より裁判官を忌避する爲めの令條也、

凡て裁判官は、原被と五等内の親族か、三等以上の婚姻の家か、或は物を教はりたる隣匠か、

又た公私に關せず、嫌み怒みの有る者か、等の如き今の所謂忌避申請せば、其判官を取換ふる

事を許せ、又た皇族及び大臣家の帳内、賁人が、主人に裁判さるる時も亦本令條と同斷にせよ

と也、

○鞠獄官司は、四十三條に、吟味する役所としたれ共、本條では吟味する役人なり、○被

鞠人は、原告及び被告人なり、○五等内親は、五等以内の親族と云ふ如し、儀制令篇廿五條に

詳述す、○婚姻之家、とは婚家姻家の事也、婚家姻家は、爾雅注疏卷之三、釋親第四婚姻の條

に、婦之黨爲^ハ婚、婚之黨爲^ハ姻、又は説文にては姻は婚の家也とあれ共、姻家は婚方の親族也、

婚家は婚方の親屬也、又た釋親の同條に、息子の妻を婦とす、女子の夫を婿と爲す、婿の父を

姻と爲し、婿の父を婿と爲す、婿の父母と婿の父母と相稱して婚姻と爲すとあり、^ハ姪姪は、

仇敵に姪、姪也、現行法文の忌避に當れり、^ハ帳内、賁人は、親王家及び大臣家の舍人也、詳

細は還叙令第三條、軍防令第四十八、四十九、五十條を參看すべし、

第五十條

位記殿案條

凡鞠獄官司、與被鞠人、有五等内親、及三等以上婚姻之家、並受業師、及有嫌疑者、皆聽換推。經爲帳内賁人、於本

第四十九條

忌避申請條

八條、十三條にある程とこ、とは意表相異也、

之準也、親は度量の姓名也、又た爾雅に、親也、式也、限也、増廣に量也、故也、誤也、又た爾雅は還叙也、假令第一條

音聲、禮文に品也、十親を親と爲、十親を分と爲、十分を寸と爲、餘紙曰く、親は婚姻并附屬也、女子政治屬に、親は婦

如く、繋ぎあふ場所より外へ出すを許され也、^ハ原は嫡字にして、原類に直員切、義類、約會に職員切、重に

は、哀悼の禮を行ふ也、假軍令七條、九條、十二條等參看すべし、^ハ不給程は、廿二條に解せし

三條に詳也、○承祖は、相續と云ふ如し、廿二、廿三條、繼嗣令第三條を參看すべし、○喪哀

○惡逆は、八條の第四番目の罪名にて、第五條に載せり、^ハ喪は、死去の如し、假令第一條

れ共悉く監獄の外へは出す事は許されぬと也、

日の喪暇を給へて哀悼せしめよ、流罪、徒罪の者には、廿日の喪暇を給へて哀悼せしめよ、然

夫の喪に還ふとか、又た祖父母より直接に家督相續する孫が、祖父母の喪に遇ふとかは、皆七

凡て死罪を犯して獄に居るもので惡逆以上の罪に非ずして、父母の喪に會ふとか、婦人ならば

本條は、囚人に喪暇を給はるの令條也、

凡犯罪須驗位記、若位記失落、或在遺者、皆驗案

犯罪人の位記を取調ぶべき事ある時、若しくは、紛失したる時、又はは違方に在りて急遽間に合はざる場合には、女官ならば式部省、武官ならば兵部省に就て、其人を敘位せし時の原簿に依りて取調べよ、但し五位以上の人ならば、中務省にも控簿冊がある事と推知せよと也、

〔失落は、紛失、遺失の如し、驗案は、原簿調査と云ふ如し、

第五十一條

國有疑獄條

凡國有疑獄不決者、讞刑部省、若刑部仍疑、申太政官、

地方に疑獄ありて判決し難き者は、刑部省に評議を請へよ、若し刑部省にても仍決し難きは太政官に申せと也、

○疑獄は、疑はしき訴訟にて處斷明すに難きを云ふ、○讞は、職員令三十條、刑部省の

本注に、疑獄を決しとあり、義解に、評也、正也とあれ共充分證據ならずと懸考す、石川分の

刊行せし集解卷之四、十九段の右に、釋云く、讞は獄を正す也、音魚角反、說文に罪を議する也、

廣雅に疑也、中略、案するに疑獄を申す書之れを議と謂也、移、解の如しあり、又た四經類函

百五十一卷政術部の卅に疑議の目われ共、は拷問の如し、其他諸書を總合して按するに、上述

の拷問を除く他、諸子悉皆含著するが如し、

第五十二條

贖死刑條

凡贖死刑、限八十日、流六十日、徒五十日、杖四十日、笞三十日、若無故過限不輸者、會赦不免、雖有披訴、據理不移、前斷者、亦不在免限、若應徵官物者、准直、五十端以上、一百日、三十端以上、五十日、二十端以上、三十日、不滿二十端以下、二十日、若欠負官物、應徵正贓及贖物、無財以備者、官役折庸、其物雖多、限止五年、一人一日、折布二尺六寸、

本條は、贖罪銅を上納する期限と、贖銅の代りに、體役する日限、及び日限を滿時に、贖物を日限に直し當てたる令條也、

凡て死刑の贖罪銅は判決言渡しの日より八十日の間に上納せよ、流罪は六十日、徒罪は五十日、杖罪は四十日、笞罪は三十日の間に、若し事故なくして、右期限中に上納せざれば、假令赦に

會ふ共、罪は赦されぬ、又た如何程の反證がある共、前判決を根本より引續き、續す程の理由がな
くば免す限りに非ずと也、若し官物を費消したる、不正の官吏は、其役所に對して物を贖はす
る時は、布五十端以上ならば百日の懲役に、丹端以上ならば五十日、廿端以上ならば卅日、廿
端未満ならば廿日とす、若し又た官物を費消して缺損を生じたる場合に、其贓品、及び贖罪物
を徵收するに、犯罪者の家に財物なくば、官に於て其者を役使して贖はせよ、併し贖物多きと
雖も、元ケ年の役役に止め、但し一人一日の仕事當りは、布二尺六寸たるべしと也、

○披訴は、申し譯の如し、○前斷は、前裁判也、○缺負は、缺損の如し、倉庫令十三條、
十四條、雜令十九條、出畢の條を、參看すべし、○正贖は、不正品の如し、徵は納む又は取る
の義也、○贖物は、罪を贖ふ食品を指す、○折席、席は租調席の席なり、本條の義解に依れば、
力らを役して直ひを受けるを庸と曰ふとあり、故に人に僱はれて賃金を貰ふの類也、折はヘダ、
ヘダと訓みて穢ぎ出すの意也、則ち一枚の板を一枚にするをヘダと云ふ、一本の木を二ツにす
るを折ると云ふ、故に穢ぎ殖すに轉用したる也、又た之に反して減すの意ともせり、雜令十九
條、等參看すべし、

凡獄皆給席薦。其紙筆、及兵刃杵棒之類、並不得入。

第五十三條

藏省給庫藏條

雖も、五ヶ年の使役に止め、但し一人一日の仕事當りは、布二尺六寸たるべしと也、
 〔考〕 故訴は、申し譯の如し、○前斷は、前盜科也、○缺負は、缺損の如し、倉庫令十三條、
 十四條、雜令十九條、出舉の條を、參看すべし、○正贖は、不正品の如し、徵は納む又は取る
 の義也、○贖物に、罪を買ふ金品を指す、折庸、庸は租調庸の庸なり、本條の義解に依れば、
 力らを役して直ひを受けるを庸と曰ふとあり、故に人に償はれて賃金を貰ふの類也、折はヘグ、
 ヘグと訓みて稜^レぎ出すの意也、則ち一枚の板を二枚にするをヘグと云ふ、一本の木を二にす
 るを折ると云ふ、故に稜ぎ殖すに轉用したる也、又之に反して減すの意ともせり、雜令十九
 條、等參看すべし、

會ふ共、果は赦されぬ、又た如何程の反證がある共、前判決を根本より引續き、獨り程の理由がな
くば免す限りに非ずと也、若し官物を費消したる、不正の官吏は、其役所に對して物を贖はす
る時は、布五十端以上ならば百日の懲役、丹端以上ならば五十日、廿端以上ならば卅日、廿
端未満ならば廿日とす、若し又た官物を費消して餘損を生じたる場合に、其贓品、及び贖罪物
を徵收するに、犯罪者の家に財物なくば、官に於て其者を役使して贖はせよ、併し贖物多きと

監獄の中へは敷物として氈や蓆を入れてやれ、併し筆紙、及び刃物等は押へ、并の類等に入る事はならぬと也、

○庶民、應は之ヲ以て有位の因徒に、コモは無位と庶人の内人に在ると云へり、職員

令三十五條、大藏省の播磨司の検査看すべし、
○兵刃は、刀劍、弓矢は無論、一切の金物刀物等を指す、

第五十四條

獄囚疾病條

凡獄囚有疾病者、主守申牒。判官以下、親驗知實、給醫藥救療。病重者、脫去枷杻。仍聽家內一人、入禁看侍。其有死者、亦則同檢。若有他故者、隨狀推科。

死者、亦則同檢。若有他故者、隨狀推科。

本條は、病囚及び牢死者の取扱を示したる令條也、凡て囚人疾病に罹らは、看守より上官へ上申せよ、然れば判官以下の當局者にて親しく實地に望みて検査の上、醫藥を給與して救療せよ、若し重患ならば、手械、足械を脱去してやれ、猶家族の者一八監獄に入れて看護させよ、若し又病囚死亡せば、死體等を検査し、他の事故則ち不法の取扱にて冤死したるか、又は鬱死したるかならば、看守等を吟味せよと也、

るかならば、看守等を吟味せよと也。

大寶令新編 第十卷 第二十九號 默令



主守は、今の看守の如き、獄囚を管轄する物部也。○申候は、看守より上官へ上申也、○抽廻は、四條、十九、卅九、六十三條等にあり、○番侍は、看護の如し、○隨狀推科は、事狀に隨て吟味と云ふ如し、

第五十五條

獄囚給衣糧醫藥條

凡獄囚應給衣糧薦席醫藥、及修理獄舍之類、皆以贓贖等物宛、無則用官物。

凡て監獄の囚人に供給すべき、被服、糧食、藥物、醫藥、及び獄舍の修繕費等は、皆贓贖司に收める贓品、贖罪銅等を以て充てよ、若し右の役所に物品なくば、別に官物を用ひよと也、
贖藥は、贖贖司の物を以て、里中の貧人則ち今云ふ開業醫師を雇ふて療治せしめ、別に官醫を給はらざる也、○贖贖司は、職員令卅一條にあり、刑部省の所管役所也、

第五十六條

流罪人給官糧條

凡流人至配所居作者、並給官糧。加役流准此。若留住居作、及徒役者、並食私糧。則家貧不能全備者、二等以上親代備五十日糧。隨盡公給。若去家懸遠絕餉、及家人未知

者、官給衣糧。家人至日、依數徵納。其見囚絕餉者亦准此。

流罪人が流されたる處に到りて役使さるる事は一ヶ年であるけれども、加役流罪と云ふ利は三ヶ年である、其間は囚人の衣食は官給なれ共、犯罪者の家に一人前に力役する者がないか、又は天子の殿戸、其他、官の事業をする各種の技術者の類は、他國へ流されて、犯罪地に於て留役させらるる事は本篇第二條の如くであるから、此等の者には、初め五十日間は自辨せしめ、若し囚徒の家、貧にして餉糧困難ならは、二等親以上の近親に於て、更代に餉糧させよ、而して五十日の後は公費にせよ、若し又た家を距る事懸隔して、餉糧に困難し、則ち甲の國の者がこの國にて犯罪したる時の如きは、家族の者共の知る迄は、官に於て糧食を給し置け共、國元の家族等の知る處となりて、家族或は近親の者參看せば、晝日官給の糧食費を上納させよ、又た現在未決の囚人も亦之に準せよと也、

○所作は、シヤトの如く第十八條第十九條にあり、○官糧は、官府の飲食、○留住所作は、犯罪地に留まり居て役使さるゝを云ふ、前十八條參照、私糧は、自分の飯米、○隨盡公給は、五十日經過せば公費と云ふ也、○絕餉は、指入れ辨當を絶つ也、○依數徵納は、精算して納めさせ、受取れの如し、○見囚、は未決囚又は判決言渡し済みしゝ未だ配所に首送せざる者を云ふ也、因に糧と云ふて飯米而已の名を掲ぐれ共、凡て文略義隊の注文なれば、此中に

凡在京繁囚、及徒役之處、恒令彈正月別巡行、有安置役使不如法者、隨事糾彈。

第五十七條 彈正巡行條

は味噌鹽等をも含有しあるものと推知すべし、

凡て在京の監獄、及び懲役人の場所へは、彈正者の役人をして毎月檢察に巡行せしめよ、而して四人の安置及び役使に關して非違不法なる事あらば、事狀に隨て當該官吏を糾彈せよと也、
〔禁囚は、ツナギある罪人と云ふ如し、安置は、居る事、○糾彈、等は職員令五十八條彈正事を參看すべし、

凡犯罪、及欠損官物、經赦降合免、別勅遣推徵者、依赦降例執聞。

第五十八條 官物欠損條

官人、罪を犯し又は官物を棄滅損したる者が、倖免に大赦恩降（恩降は考課令五十四條、六十二條參看すべし）に會ふて免されたるも、其後納損物に就て事故を生じ、別勅を以て取立、に及ぶ場合とならば、既に赦免になりてあると云ふ事狀を據して奏聞せよと也、

○赦損は、五十二條、倉庫令十三、四條、雜令十九條等參看すべし、○赦降は、大赦又は恩赦、恩降にして、赦は申す迄もなく免さるゝを云ふ、恩降は令の義解譯義に、罪人の罪名の等を降すを云ふとあれ共、刑の等級を降して無罪ならば本條に當れ共、否されば多少の利ある間也、故に考課令の五十四條六十二條にある如く、官位を降すと云ふを穩當とせん、○合免は、免すべく也、○推徵は、取立ての如し、
○執聞は、奏聞の如し、

第五十九條 放職條

凡放、賤爲家人及官戶、逃亡經三十日、並追宛賤。

賤民を放免して家人及び官戶となす共、若し逃亡して三十日を經過せば、復た追捕して賤民籍に入れよと也、

戶令第三十五條以下、四十三條迄、及び職員令第四十九條宮内省所管の官奴司を參看すべし、

第六十條 賸財入官條

凡犯罪賸財入官者、若緣坐得免、或依律不坐、各計分法還之、則別勅降罪從輕、物見在者、亦還之、其本罪不合緣

集而別刺破家者、罪止及一房。若受人寄借、及質物之屬、當時則有言請、券證分明者、皆不在錄限。其有競財、官司未決者、依法檢校。

本條は、財産沒收の手続を示したる令條也、犯罪者に對し判決を言渡して、其財産は官へ沒收となりたる後、家族、近親に連坐を免かれたる者か、或は法律上緣坐すまじき者を探み、沒收したる財産の幾分をば子孫へ分配法に准じて還せと也。又た別勅ありて、緣坐の者は罪を降して輕さに從ふ義とならば、其人等の財産未だ諸役所へ分配せずしてあらば、其物品は還せと也、而して本犯が緣坐すべからざるものにて、別勅にて財産沒收の時は、罪は只本人一人に止めて他に及ばすなと也、若し沒收すべき物の中に、他人より預りし物か、又たは質に取りし物坏が混じ有て、預け人又た質入れ人等より申請したる時に、預り證者又は質券等ありて、證據の確實分明なるならば、沒收の物品を記録せし帳簿より其品目を削除せよと也、又た罪人に於て、若し財産に關する訴訟中沒收に會へば、判決の日を待て、罪人の有に歸せば隨て沒收し、相手方の所得とならば、相手方へ渡せ與へよと也、

○資財は、今云財産也、○入官は、沒收の事、○緣坐は、マキ孫也、○分法は、分配法

にして、漢解によれば、律(賊盜律第一、二條)に依るに、一家の資財分配すべくば人の多少に准じて、人別に一子の分法に准じて還す事を得、假有は一老人、年八十なる者あり、三男十孫を有し、其内一人の孫が反逆(死罪)罪に處せられしも、戸令第廿三條の三男分法を作り、ソレに老人一人を添へて、則ち四分に爲る也、若し三男皆死亡して此世に生存し居ざれば、存命の十孫あるに依りて諸子均分すと云ふ戸令に従ひ、老人を加へて十一分に爲りて分配する也、戸令廿三條參考すべし、○物見在は、現在の物品、○破家は、財産全部沒收を云ふ、罪止及一房は 犯罪者の財産而已を沒收して、緣坐の者に及ばざるを云ふ、其財異居も亦然り、同居其財は分法に准ずる也、一房は一室と云ふ如し、○寄借は、預り物の如し、○言請は、申請の如し、○券證は、預り證書及び質札等を云ふ、○不在錄限は、帳簿記載を削除或は消込と云ふ如し、○說財は、財産に係る訴訟を云ふ、○檢校は、處分と云ふ如し、

第六十一條

辯證已定條

凡辯證已定、逢赦更翻者、悉以赦前辯證爲定。

犯罪者數回の裁判にて、犯罪者の辯明、證人の立証等、既に確定して、今や判決あらんとするに際して、赦令の發布に逢ひたるに依て、更に前辯を變更し、更に證人を立て、陳辯立證するも、赦令前の辯證を以て確定とせよと也、假ば、大祭用の神の御物を盗み、且ツ神宮の接近に

於て人殺しをした者あり、係り役人、甲なりと認めて捕縛し吟味すれば、果して甲の所業也、依て裁判所に於て云ふには、如何にも神の御物を盗みよしたれ共、人は殺さぬと、乙の證人を以て立證分明なり、係り官之に依て判決を言渡さんとせし前に當り、教令の量有あり、則ち犯人を法廷に召喚して、係の曰はるゝには、死罪以下は皆悉く教令の爲めに赦免の恩に浴するも、唯汝の如き八虐の罪を犯した者は免されずと、ソコで甲は前辯證は全く虚誣の辯證でゴザイヤシテ、實は人を殺したれ共、神の御物は盗みませぬと言を翻し、其證人として丙の證人を召喚して立證せしむるも、前の辯證を以て判決言渡し、之れを教令の辯證を以て定と爲と云ふ也、○辨證は、辨明と證言、(更調)は前言を取消したる也、大嘗祭等の御物則ち常帛類を盗めば、八座中の第六番目にある大不敬罪なれ共、中等の違罪にして命は助かるに、人を殺したとすれば自分も校又斬罪に處せらるゝなれ共、死罪以下赦免を蒙て、至愚の言を吐きし者也、

第六十二條

傷損誣告條

凡傷損於人、及誣告得罪、其人應合贖者、銅入被告及傷損之家、則兩人相犯俱得罪、及同居相犯者、銅入官。

凡て人に傷損を負はし、又誣告して、罪人とならば贖罪銅を徵收せよ、其贖銅は、負傷者、又た

被誣告者の家へ下渡してやれ、又た甲乙二人爭鬪して、互に負傷をしたる場合は、二人より贖銅を徵して皆官へ沒收せよ、又た同居共財の者共の律圖負傷も亦皆官へ沒收せよと也、本條參十二條、五十二條參看すべし、

第六十三條

刑具及拷訊條

凡杖皆削去節目、長三尺五寸、訊囚、及常行杖、大頭徑四分、小頭三分、笞杖、大頭三分、小頭二分、枷、長四尺以下、三尺以上、桎、長一尺八寸以下、一尺二寸以上、其決杖笞者、臀受。拷訊者、背臀分受。須數等。

本條は刑罰具の構造及び拷法等を制定したる令條也、凡て獄罪に使用する杖は、利の節目を削去し、長さ三尺五寸とす、適當及び拷問の時に用ふる杖は、本の太サ直徑四分、末口三分とす、管に本ト口ニ分に、末口ニ二分、枷は長さ四尺以下三尺以上、桎は長さ一尺八寸以下一尺二寸以上、而して其背又た杖を用へて、拷つ所は、大背部とす、拷問の時は背部と臀部と更代に等分に拷てと也、

○節目は、三條の節目と異也、本のフシメ也、(枷は、四條、十九條、卅九條にあり、(桎は、

は、四十二條にあり、○樽は、甕也、○須數等、叩く數を等分にすべく也、假令は、九十叩くとすれば、甕で十五拷、甕で十五拷、此の如く三回する也、律に云く、囚を拷學三度に遇く可からず、其數總て二百を過すを得ず、二回の拷問は各相去ること二十日、極暑極寒、齊日に拷問はならぬ、二回の拷つ數は、六十五宛二回と七十が一回と也、

八五二

大寶令新解 第十卷

第三十篇 雜 令 凡肆拾壹條

本篇は、前諸篇の如く、各専門的に非ず、頗る班雜なるを以て雜令と云ふ也、則ち、第一條より四條迄は度量衡に係り、第五條は惣論、第六、七、八の三ヶ條は天文曆數に關する如く種々種多の事を混ぜし也、

第一條

度量權衡條

凡度、十分爲寸、十寸爲尺。一尺二寸、爲大尺一尺、十尺爲丈、量、十合爲升。三升、爲大升一升、十升爲斗、十斗爲斛、權衡、二十四銖爲兩、三兩、爲大兩一兩、十六兩爲斤、

本條は、當時の度量衡法也、

度は十分を一寸と爲し、十寸を一尺と爲し、但し大尺は一尺二寸にて一尺とす、十尺を一丈と爲す、銖は十合を一升とし、大兩は三升にて一升と爲す、十升を一斗とし、十斗を一石と爲す、

大寶令新解

第十卷

第三十篇

雜令

八五三

秤は廿四銖を一所と爲し、三兩を大兩の一兩とし、十六兩を一斤とせよと也、

【考證】○度は、古來唐尺、高麗尺採用の二説あり、大寶時代は高麗尺なるを以て、現今の尺度に比較せんに、一尺は曲尺九寸七分八厘に當る、該標準を何より採りしかと云ふに、今の遼東三省邊に産する黑黍の一粒の直徑を以て一分と定めたり、而して北方と云ふ事は何に據りしかと云ふに、遼東律曆志に、子穀拒黍中の者の一粒の廣を以て度とすとあるに基けり、子穀とは、子は十二支の頭らにて方角に充つれば北方になるから、ソコで北方の穀物中の黑黍云々と後世の學者共が解釋をしたと云ふ事を兼燭譚に云へり、

○量は、マヌ也、是亦右の黑黍一萬二千粒を以て一合と定めたり、

○衡は、天秤也、是亦右の黑黍百粒を以て一銖と定めたり、一銖は四分一厘六六、一兩は十銖、一斤は百六十目也、以上度量衡の事に就ては、古來各國各時代に由て、多少の差、名稱の異あり、或は沿革の爲めに相違を生じ、或は其原理も亦各國に依て異にするなり、故に此に關する比較の解釋等殆んど際限なき如し故に略す、

第二條 度地量銀銅穀條

凡度地、量銀銅穀者、皆用大。此外官私悉用小者。

土地を測量し、金屬、穀類を稱り量るには、皆大尺、大斛、大秤を用へ、其餘は官私共に皆な

小器を使用せよと也、

第三條 原器條

凡用度量權官司、皆給樣、其樣皆銅爲之、

大藏省や、地方廳の如き、度、量、衡、必用の役所へは、銅にて造りたる原器的の標本器を一個宛給へと也、

【考證】○樣は、ノリ也、法式也、原器と翻ふべき罐形を指せり、

第四條 步里條

凡度地、五尺爲步。三百步爲里、

地面を測るには、五尺を一間とし、三百間を一里とせよと也、

【考證】○步は、今の間と同じ、此時の一間は五尺なれ共、今の六尺に相當する也、故に三百歩は三百六十歩となり、五町一里が六町一里となる也、

第五條 殺生禁斷條

凡月六齋日、公私皆斷殺生。

凡て毎月の六齋日には、公私共に殺生は禁斷にせよと也、

附四 六斎日は、佛說四天王經、增一阿含經、龍樹の十住毗婆沙論等に掲げり、毎月八、十

十五、廿二、廿九、卅日の六日とす、今四天王經を昌保調釋して左に記さん、四、

壽命は電光朝露の如し、恍惚として消滅す、斎日には心を責め、身を慎み、口を守り、諸天は
齊日に人の善惡を伺ふ、須彌山上則ち忉利天の天帝は、福德親々に由て四天を興主す、四天神
王則ち四鎮に因て各一方を理む、常に毎月八日には、使者を下界に下だして天下を巡察し、帝
王、臣民、龍鬼、蜺蜺、蛟行、魍魎の類迄の心念、口言、身行等の善惡を伺察す。十四日には
太子を下し。十五日には四天王自ら下り。廿三日には、使者代理。廿九日には太子再下。卅日
には四天王再下し。此時日月、五星、廿八宿は勿論、諸の天王皆悉く俱に下る、四天王命じて
曰ふには、勤めて衆生の施行吉凶を見よと、若し斯日に於て、佛に歸し、法に歸し、比丘僧に
歸し、清心守齋貧窮に布施し、持戒、忍辱、精進、禪定、皈依敬愛、眞實を闡化し、両親に孝
順し、三尊に奉事し、稽首受法云云、

第六條

曆本製造條

凡陰陽寮、毎年預造來年曆。十一月一日、申送中務。中務奏聞。内外諸司各給一本。並令年前至所在。

本條は、中務省の所管なる陰陽寮は、毎年十一月の一日迄に、來年の曆を造りて本省に送れ、
本省は太政官に届け出さずして、直ちに奏聞に達せよと也、而して頒曆は八省と國廳に一本宛
下附なる而已にて、諸寮、諸司、郡役所の如きは所管の上司にて寫してやれ、但し何れも年内
に達する様にせよと也、

第七條

陰陽寮諸生條

凡取陰陽寮諸生者、並准醫生。其業成年限、及束修禮一同大學生。

陰陽寮の學生の採用は、醫學生に准じて、先づ占氏及び、世職の家の子弟を先きに採り、不足
ならば庶人の子弟にして、年齢十三歳以上十六歳以下の者にて伶俐なる者を採れと也、其卒業
の年限、及び束修則ち入學の禮式等は、凡て大學に同じよせよと也、
醫疾令の二條、學令、考課令等參考すべし、

第八條

秘書條

凡秘書、玄象器物、天文圖書、不得輒出。觀生不得讀占書。其仰觀所見、不得漏泄。若有徵祥災異、陰陽寮奏。訖

者、季別封送中務省、入國史、所送者、不得載_レ占言。

八五八

通甲、天元、天一、或は大一式に關する書牘、又は天象に係る器械、或は天文の圖書等は、外へ出す事はならぬ、而して天文學生は、占_{イハレ}卜の書を讀む事はならぬ、又た天を觀望して、何か所見あらば漏す事はならぬ、若し吉凶に係る祥瑞等の事あらば、陰陽寮より中務省へ届け、省は奏聞に達するけれ共、寮よりも奏上せよ、觀望の申報は、一年に四回別封にして中務省へ送れ、省は之を國史に編入せよ、但し送る所の書中には、占_{イハレ}卜の言を記載する事はならぬと也、

○玄象器物は、天文の器械と云ふ如し、

○秘書、の書目を左に抄録せんに

國史經籍志卷の四に云く

黃帝陰陽遁甲、六卷

遁甲訣 一卷 伍子胥

遁甲經 廿三卷 伍子胥撰

遁甲九元九局立成法 一卷

遁甲附續立成遁中秘訣 一卷 晉書洪

——立成 六卷

——創三元玉歷立成 一卷 郭璞撰

——立成法 一卷 劉孝慈

黃帝九元遁甲 一卷 王瓊

陽遁甲用局法 一卷 劉孝慈

陰 九卷

三元——圖 三卷 葛洪

——九宮八門圖 一卷

——反覆圖 一卷 葛洪

——支干訣 一卷

——行日時 一卷

——要用 四卷 葛洪

三元—— 六卷 許又六卷 杜仲

三正—— 一卷 杜仲

——三奇 三卷

——推時要 一卷

——萬一訣 一卷 介靖

元中法錄——經 二卷 劉向

——經 一卷 唐劉向

——三元九甲立成 一卷

——九星圖 一卷

三元九宮—— 一卷

——秘要 一卷

—— 三卷

——八門機要 一卷

——年錄 一卷

——附山圖 三卷 樂氏

三元——立成圖局 一卷

陰陽—— 十四卷

陽—— 九卷 劉向撰

黃帝出軍遁甲式 一卷

——穴隱秘處經 一卷

十八局 一卷 廣行

搜玄經 一卷

天一 鈐歷 一卷

符寶萬歲新圖歷 一卷 塔司馬璽

天一 兵機擊要歌 一卷 增補

隨局擊要歌 一卷 通局占

天一 式 一卷

陰陽二局 二卷 牛晴

一局 二卷

九宮亭白姦 一卷

陰陽二遁入式法 一卷

天一 賦 一卷 宋臣清

軍征賦 一卷 吳卓

華奇金合璧 一卷

景祐 玉函符應錄 三卷 楊德輔

陰陽二遁萬 二卷 四卷

元樞 二卷 馬顯明

天一 圖 一卷

天一 陰陽局外圖 一卷

玉女反閉局法 一卷

玄女 秘結 一卷

天一 指陳 三卷

天目圖 一卷 葉洞

歷 一卷

天一 歌 一卷

天元陰陽局 二卷

斗中孤虛圖 一卷

還時圖 二卷

流光王歷 八卷

右通甲（——印はトシカフ也）

太一飛鳥歷 二卷 王環

飛鳥立成 一卷

三合五元要訣 一卷

經 二卷 宋瑛

九宮雜占 十卷

黃帝 雜書 十六卷

太游歷 二卷

式經雜占 十卷

紫微秘訣 三卷 唐王善明

金鏡式經 十卷 王善明

一局通甲經 一卷

時紀陰陽二遁立成歷 二卷 兩漢胡萬頃

中樞秘頌 明鑑法 五卷 宮劉晉明

雜集算草 一卷

集 十卷 杜慎微

細行草 一卷

日遊 五子元出軍勝負七十二局

天寶 震應式記 五卷 唐馬光

天一經 一卷 劉一行

懷育賦 一卷

元鑑 三卷 宋淳風

式經 一卷

玉佐秘珠 五卷 陳傑序

黃帝度厄秘術 八卷

式雜占 十卷

龍首式 一卷 黃註

飛鳥雜談捕盜賊法 一卷

十精飛鳥歷 一卷

廣行

一卷

鈐歷

一卷

塔司馬璽

增補

通局占

牛晴

二卷

一卷

宋臣清

吳卓

一卷

八卷

楊德輔

三卷

玉函符應錄

景祐

一卷

二卷

十六卷

王善明

三卷

十卷

五卷

一卷

十卷

二卷

十卷

三卷

一卷

五卷

二卷

五卷

十卷

第三十篇

總令

八六一

凡國內有出銅錢處、官未採者、聽百姓私採、若納銅錢折宛庸調者聽。自餘非禁處者、山川藪澤之利、公私共之。

凡て國內何れの土地にても、銅或は鐵を産する處ありて、官未だ採取せざる處ならば、人民の採掘する事を許せ、若し其銅塊を以て鹽稅の代納に出願せば許せ、其他特に禁制の場處に非ざる地處にして、山川、藪澤より、利益なる物品を産出すれば、公私共に取り收めよと也。

第十條

異寶異木條

凡知山澤、有異寶異木、及金玉銀彩色雜物處、堪供國用者、皆申太政官、奏聞。

凡て山澤に、馬腦、琥珀の類、又は沉香、白檀、蘇方等の類、或は金銀、及び彩色の美なる物、珠玉等の産出する處を發見して、國用に供するに堪ゆるものは、皆太政官に上申して、官より奏聞に達せよと也。

云ふ也。

第十一條

材木漂失條

大寶令新解

第十卷

第三十篇

雜令

八六三

第九條

鑛山私掘條

右天文

皇官簿覽 十三卷 三云

右太一（——印は太一なり）

黃帝宅心圖 一卷

黃帝降圖 一卷

坎祐——福應集要 十卷 楊維禎

——循環歷 一卷

——神樞長曆 又二卷

——神樞長曆 一卷

——燭幽經 二卷

新修時遊——立成 一卷

十神——巡遊分野立成圖 一卷

——時計鈴 一卷

——舞鑑 一卷 曾孫子

——統宗寶鑑 廿卷

黃帝龍言經 一卷

黃帝集靈 三卷

——淘金 一卷

——秘歌 一卷 廣興

太一歌 五卷

——青虎甲寅經 一卷 宋王禹偁

——陽九百六經 一卷

——陰陽二逐立成 一卷

——蕤甲萬曆時定主客主成談 一卷

陰陽二逐—— 一卷

八六二

凡公私材木、爲暴水漂失、有採得者、並積於岸上、明立標榜、申隨近官司、有主識認者、五分賞一。限三十日外、無主認者、入所得人。

官、公、私の材木が、洪水の爲めに流失したるを拾得せば、拾得したる岸の上に積重ねてれを立て最寄の役所に届け出よ、持主来らば渡しやれ、但し持主は拾得者に五分の一丈ケを賞與として渡せ、若し又拾ひし日より三十日を經過するも持主なければ、拾得者の所得とせよと也、
附註 ○暴水は、洪水の如し
第十二條 取水概田條

凡取水概田、皆從下始。依次而用。其欲緣渠道造堰磴、經國郡司、公私無妨者聽之。一則須修治渠堰者、先役用水之家。

水を取り入れて、水田を作らんとするには、水下へ充分に灌漑するやうに勘定して始めよ、若し用水に依て幾屋の如き水車仕掛の挽々曰、挽々曰等を設けんとせば、管轄役所に出願致せ、

役所では、公私に於て妨害故障のなきものと認定せば許してやれ、又用水及び堰等の修繕を爲む時には用水關係の町村の者共を便役せよと也、

附註 ○概田は、田に水をシ、グ也、○堰磴は、名物六帖に依れば、堰は石の上曰、磴は下タケス、共に挽き目としてある、凡て法文の語故に米換目を載せざるは文飾上の都合なる事諸令條に例あるを知るべし、渠堰は、ミヅセキ也、管轄令十七條を參考すべし、○用水は、水を

使用と云ふ如し、今云ふ用水路に非ず、

第十三條 要路津濟條

凡要路津濟、不堪涉渡之處、皆置船運渡、依至津先後爲次。國郡官司檢校、及差人夫、宛其度子、二人已上、十人以下。每一人、船各一艘。

官道の如き大路に非ざるも、人馬の往來するに至極便宜の處にして、徒渡りの出来ぬ川には皆船を設備して交通に便せよ、而して渡船場の乗降順は、人馬貨物の到着順にて渡らせ、渡船場は、地方の役人が検査をして人夫を差立て船頭に宛てよ、但し二人以上、十人以下とす、二人毎に船一艘とせよと也、

○要路津渡は、聖便の渡り場（ハニ）の如し、○度子は、渡し守（ハニ）にして、船越人夫（ハニ）の如し、

第十四條

五位以上給牀席條

凡廳上、及曹司座者、五位以上、並給牀席。其制從別式。

凡て役所では、各々用部屋、及び五位以上には敷物を給與せよ、其規則は別式に従へとも、

○廳上は、役所内と云ふ如し、○曹子座は、役人の用部屋と云ふ如し、用部屋は一ノ端

宛仕切りてあるを以て、部屋住の人も一ト橋別立的にしてあるから、へや住の人を曹子と稱

用せし也、又た女房のサウジとあるは、局（ハニ）の事也、ツボキはへや也、生若（ハニ）曹子と云ふことゝ

り、人の息子を曹子と云ふもへや住と云ふ事なり、後世の轉用とすべし、

第十五條

主典以上給坐席條

凡在京諸司、主典以上、毎年正月、並給座席、以下隨境

則給。

凡て京都内の諸役所の四等官（主典）以上の官吏には、毎年正月に敷物を給與せよ、以下則ち

史生、官軍（ハニ）の人共には、破損次第給與せよとも、

第十六條

因使得賜條

凡官人等、因使得賜、使事停者、所賜之物、並不、在追限。其有犯罪追還者、所賜物並徵納。

官吏等、使者となりて物を賜はる事あるが、此賜はり物は御用済になりても取上げぬ、併し犯罪事故でもありて、返還せねばならぬ場合は、賜り物は取り納めよとも、

○追限は、取り上げる限り也、○追還は、追は取り上げて上に係る、還は返還にて下

に係る語也、○徵納も、追還に似て、徵は上に係り、納は下に係る字也、

第十七條

訴訟期限條

凡訴訟、起十月一日、至三月三十日檢按。以外不合、若交相侵奪者、不在此例。

金錢の貸借、良民賤民、及び諸第の手ひの如き、並に至急を要せざる訴訟は、毎年十一月一日より、翌年三月三十日迄に致して、其他の月にはならぬ、併し急遽なる強奪侵奪等に関する訴は此限りに非ずとも、

○交は、還（ハニ）の如し、○侵奪、侵は人を侵し損をさするを云ふ、奪は財物を強て取るを云ふ、

凡家長在、而子孫弟姪等不得輒以奴婢、雜畜、田宅、及餘財物、私自質舉、及賣。若不相本問、違而輒與、及買者、依律科罪。

家長則一家の戸主があるに、其家族中なる年少の者共が隨意に奴婢や、牛馬、田宅、及び他の財貨物を以て質に入れ、或は人に貸して利子を取り、或は賣却する事はならぬ、若し家長に問はずして、讓渡賣却等を致さば罪科に處すと也、
附例 〇家長は、戸令第五條にある家長とは異り、コ、は祖父、伯兄の屬を云ふ、〇舉は、利子を取るを云ふ、次條參考すべし、罪科は、唐の戸婚律にては、十四に就て笞十とせり、而して杖一百を限りとす、

凡公私以財物出舉者、任依私契、官不爲理、每六十日取利、不得過八分之一。雖過四百八十日、不得過一倍。家

債者逃避、保人代償

資盡者、役身折酬、不得廻利爲本。若違法責利、契外掣奪、及非出息之債者、官爲理。其質者、非對物主、不得輒賣。若計利過本不贖、聽告所司對賣、則有乘還之。如負

本條は、物品金錢の貸借に關する令條也、

官公私人が、財物を貸して利子を取るには任意に契約を作れ、官物にても官の名辭にて處理するに及ばぬ、利子は六十日毎に取れ、但し八分の一より多くはとられぬ、又四百八十日を過ぐると雖も元金の一倍よりは取る事はならぬ、若し負債者の財産相違て、返辦の見込みなき時は、債務者を聚訟して辨償させよ、但し利子を廻はして元金にする事はならぬ、若し此法に違犯して、高率の利子責取り、或は契約外に乘制強奪的の事あるか、又た正當なる利息外の食りあらば、官にて處理してやれ、又た質物は、オキ主の承諾を待たれば賣却はならぬ、若し利息を計算して元金に過ぎ、則ち四百八十日の上、尙六十日を經過して辨償せざれば、役所に訴へて、債權者が債務の物品を賣却する事を許せ、賣却して剩餘あらば、剩餘だけは債務者に還してやれ、又た債務者逃亡等致さば、保證人に辨償させよと也、

○出、出は多くは稻又米を貸し附るを云ふ、事は私稻、利米を主に云へり、義利至要抄の中卷に、天平七年五月二十二日の格、天平勝寶三年九月四日の格に私稻の出を禁止せり、

任は、任意也、○役身折酬は、俗にカラダを賣りて辨償と云ふが如し、責利は、利を強請すると云ふ如し、取替は、引きウバフ也、○出息之償は、正當の貸借と云ふ如し、○對物主は、質置き主に對該得諾と云ふが如し、○不贖は、辨償せざると云ふ如し、所司は、今は監藏所の如くなれ共、當時は郡役所へ訴へたり、○有無は、剩餘ある也、○保人は、保證人也、

第二十條

以稻粟出舉條

凡以稻粟出舉者、任依私契、官不爲理、仍以一年爲斷、不得過一倍、其官半倍、並不得因舊本更令生利、及廻利爲本、若家資盡、亦准上條、

凡て稻又米を貸出して、利米を取るも、前條の如く私人契約にて、官は處理するに及ばぬ、其返済期限は、一年なれ共、此一ケ年と云ふは春時貸して秋期返済させるのであるから、マツリ年餘の事にて、利米はソレだけの間にて一倍はとられぬ、官の稻又は米ならば、五割だけ返

取りてもよい、併し利米を廻して元米へ入るゝ事はならぬ、若し償還者家資なくば、上條の如くにせよと也、
○稻粟は、田合一條參考すべし、○斷は、期限の如し、○舊米は、元の如し、○准上條は、身を役して辨償するを云ふ、

第二十一條

利物給私人條

凡出舉、兩情和同、私契、取利過正條者、任人私告、利物並給私人、

凡て稻又米を貸して利を取る事は、雙方合意の上、私契約せよ、而して利米が、若し法令の制定せし以上に約束してあるならば、ソレを告發人ありて告發せば、利米は告發人にやれと也、
○正條は、法令の如し、○私告は、告發、○私人は、告發人、

第二十二條

得宿藏物條

凡於官地得宿藏物者、皆入得人、於他人私地得、與地主中分之、得古器形製異者、悉送官酬直、

官有地に於て、埋藏物則ち鏡、劍、金銀等の器具を發掘せば、發掘したる者にやれ、若し他人

の私有地にて發掘したならば、地主と半分宛分配せよ、又た古器にして、其製作の形式等、如

何にも尋常ならざる如き物は、悉く官へ送れ、官に於て相當の價値をやれと也、

附例 ○宿藏物は、埋藏物と云ふ如し、則ち戰亂等に落魄し、地中に埋没して、其時代久遠何物の財寶たるを知らざるものの類也、

○私地とは、口分田、職分田の如し、田令第三條五條參考すべし、(例而は、代價を以て買上げの如し、

第二十三條

畜産害八條

凡畜産、舐人者、截兩角。踏人者、紮之。鬻人者、截兩耳。

其有狂犬、所在聽殺之。

畜産中の牛などが、角にて人を突けば、其兩角を切れ、又た人を踏む様のもものは、嚴重に繋ぐ事とせよ、又た人に噛付くならば、兩方の耳輪を切除せよ、又た狂犬あらば一撲殺せよと也、

附例 ○舐は、音感、舐に同じ、觸也、又た舐の字と同じ、轉意の連聲解に、異觸を排斥し云々、端本にツクと訓ませり、(絆は、縛慢切、音半、説文に馬繫也、増訂に、足をツナグを繋

といひ、首を絡を觸と曰ふとあり、徒然草に、人突く牛をば角を切り、人喰ふ馬をば耳を切りて其しるしとす、印しをつげやして人を嫉らせぬるは、ぬしの咎なり、人を喰ふ犬をば害む飼ふべからず、是皆科あり、律のいしましめなり、

第二十四條

興販條

凡皇親及五位以上、不得遺帳内賣人、及家人奴婢等、定市肆興販。其於市沽賣出舉、及遣人於外處、貿易往來者、不在此列。

位階の有無に關せず、皇族及び五位以上の人は、家來又は奴婢等を市場へ遣し店舗を出さして商賣はさせられぬ、併し店も出さず、市場にて賣却し、又は郷里に於て品物を貸し出して利を取り、及び人を他所へ遣して貿易し往復する者は此例に非ずと也、

附例 ○皇親には、有品無品ある故に、新解は義解に依て有位無位とせり、○帳内、賣人は、皇族及び大臣家等の家來の如き人、○興販は、販賣の如し、已に關市令十八條に詳述す、(沽は、買也、又は賣也、○出舉は、甘條に出せり、

第二十五條

私用旅行條

大寶令新解 第十卷

第二十篇

雜令

八七三

凡私行人、五位以上、欲投驛止宿者聽之。若邊遠、及無村里之處、初位以上、及勳位亦聽之。並不得輒受供給。

凡て公用に非ず、個人の私用旅行にて、五位以上の人、驛に入りて宿泊せんとせば聽ぜ、若し邊鄙にして村里の無き所は、初位以上、及び帶動者にも許せ、但し何れも厚き振舞を受くる事はならぬと也、

○私行人は、私用旅行者、○投驛は、シユクにいと云ふ如し、○村里は、戸令一條にある如く、五十戸を以て里となす則ち其里を云ふ、○供給は、待遇の如し、貳拾令二十二條參考すべし、

第二十六條

文武官進薪條

凡文武官人、毎年正月十五日、並進薪。長七尺、以二十株爲一擔。一位、十擔。二位以上、八擔。四位、六擔。五位、四擔。初位以上、二擔。無位、一擔。諸王准此。無位皇親、不在此例。其帳內資人、各納本主。

在京の諸官員は、毎年正月十五日に、御所へ薪を獻上せよ、其薪は長ク七尺にして、廿本を以て一擔とせよ、一位の人は十荷、三位以上は八荷、以下本文の如し、但し帳内、資人（資人、大人等の家老）は各主人に納めよと也、故に、中宮、及び東宮の舍人も亦其本職本坊に納めよ、

第二十七條

進薪檢査條

凡進薪之日、辨官、及式部兵部宮内省、共檢校、貯納主殿寮。

薪を獻上の日には、太政官の辨官、及び式部、兵部、宮内、の三省共各檢査して、主殿の寮に納入して、積み込ませよと也、

第二十八條

給炭條

凡給後宮及親王炭、起十月一日、盡二月三十日。其薪、知用多少量給。供進炭者、不在此例。
皇后宮の役所、及び親王に炭を給ふは、毎年十月一日より翌春二月三十日迄とす、其薪は使用の多少を量りて給へ、本炭はしからずと也、

第二十九條

番使往還條

大寶令新解 第十卷 第三十條 雜令

凡蕃使往還、當大路近側、不得置當方蕃人、及畜同色奴婢。亦不得宛傳馬子及援夫等。

外國使臣の往復する官道の附近には、我國へ來に已に歸化したる外國人、又は同種の奴婢を置く事はならぬ、又た右の人共をして、傳馬の馬士、及び荷物の人夫等に宛つる事もならぬ也。

○蕃使は、外國の使臣、職員令十六條治部省、同十八條文藝寮、戸令の第十六條、四十圖條等參考すべし、

○大路は、山陽道を云ふ、既牧令第十六條參考すべし、當方蕃人は、已に歸化したる人、○同色は、外國人を云ふ、○傳馬子は、テマのマゴ也、援夫は、人夫の如し、瀬多軍市の校本、頭注に云く援は疑りくば撥之誤とあり、

第三十條 犯罪被戮條
凡犯罪被戮、其父子應配沒、不得配禁內供奉、及東宮所驅使。

犯罪者にして殺戮せられたる者の、父及び子の流さるゝ者は、御所内の内膳の下タ働さや、東宮

御所の小遣の如き者には使ふ事はならぬと也、

○供奉は、コ、では内膳等の下タはたらしの如き者に當る如し、

第三十一條 官戸奴婢死亡條
凡官戸奴婢死、所司檢校、年終惣申。

凡官戸、奴婢死亡せば、當局にて檢査せよ、年末に至て惣て申告せよと也、

○所司は、宮内省を指せり、

○官戸奴婢は、戸令の三十五條以下を參考すべし、

第三十二條 奴婢休暇條
凡官戸奴婢者、毎旬放休暇一日。父母喪者、給假三十日。

産後十五日。其懷妊、及有三歲以下男女者、並從輕役。

凡官戸、奴婢には、十日に一日宛則ち旬暇と云ふ休暇をやり、若し父母死亡せば、廿日の休暇を與へよ、産後の者には、十五日、又は妊婦、及び三歲以下の子供を持つて居る者には、或るべく輕き仕事をさせよと也、

第三十三條 奴婢宛役條

大寶令新解 第十 第三十圖 雜令

八七七

凡官戸奴婢宛役者、本司明立功課案記。不得虛費公糧。

官戸、奴婢の作業は、宮内省にて明細に其功課を日勤簿に記入せよ、必ず安りに空しく官の米を費す事はならぬ也、

○本司は、宮内省を云ふ、○功課は、シエト、○案記は、帳簿に記入、○公糧は、官米を云ふ、

第三十四條

奴婢給衣服條

凡官戸奴婢、三歳以上、毎年給衣服、春、布衫、袴、衫、

裙、各一具。冬、布襖、袴、袴、裙、各一具。皆隨長短量給。

官戸奴婢の子供が三歳以上になつたらは、毎年衣服を給與してやれ、四歳以上には飯米をも與へよ、而して其衣服は、春は布の單衣に單の袴、單衣に單の裳、各一枚宛、冬は布の袴の襖フツ（俗に云ふ素袴の如し）、袴、袴の袴ハカマ、袴各一枚宛、皆體格に應じて尺寸を度りて給へとも、
○衫は、單衣也、衣服令十四條に詳也、○裙は、衣服令の十條にあり、○襪も、衣服令の十四條にあり、○襪は、ジュパンの如き短衣也、

第三十五條

親屬賓客條

凡外官、有親屬賓客經過、不得以官物供給。

地方官の宅へ、親族、故舊、及び賓客等ありて逗留して、官物を以て接待する事はならぬ也、

第三十六條

外任官八條

凡外任官人、不得將親屬賓客往任所、及請占田宅、與百

姓爭利。

地方へ赴任の官員は、親族賓客を率へて任所に往き、又た田宅を請け占めて農人と利を爭ふ事はならぬ也、公式令八十七條參考すべし、

第三十七條

公廩雜物條

凡公廩雜物、皆令本司自勾錄、其費用見在帳、年終一申太政官。隨至勾勘。

凡て官家、公家の雜物は、皆其役所々々として調査記録せしめ、其費用現在の帳は、年末に一同太政官に上申せよ、官にては諸役所から上申ある毎に検査せよと也、
○公廩は、官家公家の如し、勾勘は、精査の若し、

凡僧尼、京國官司、每六年造籍三通、各顯出家年月、夏
臈、及德業、依式印之、一通留職國、以外申送太政官。
一通送中務、一通送治部。所須調度、並令寺准人數出物。

京都市役所及び地方廳は毎六年に一回宛僧尼の戸籍三通を作成せよ、各出家せし年月日、夏
臈、及び學級を記入し、式に依て捺印しおけ、一通は京廳又た各地方廳に留め、其餘は太政官
へ送れ、官はソレを中務省に一通、治部省へ一通を下付する也、さて入用の調度は並に寺をし
て人數に應じて物を出さ令めよと也、

子法 ○夏曆、臘は癸酉朔斷に云く歳の終り也、我國人にても十二月を臘月と云ふ、臘は接也、
新と故との交接也、俗に臘の明日を初歲（元日）と爲す之に因て佛門にては之を法歲と名く、
併し佛家の法歲は四月十六日より七月十六日迄を安居と云ふ、斯七月の十七日が俗人にて云へ
ば元日である、此九十日の間を安居と云ふ、安居は諸説あれ共、單簡に解し易き説にては、四
月十六日より、草木蟲類が繁殖するに依りて、ソレを損傷させぬ爲めに何れの空字にてても
安居して、佛法の修行をして居る事である、初めを結夏と云ひ、七月十六日を解夏と云ふ、又

は總稱して夏臘と云ふ、此夏臘を多く經歷したる僧侶程、上等の僧とせり、故に佛法の重と云
ふなり、日本紀、天武帝の十二年七月、同十四年四月庚子、同持統帝の四年五月庚寅に、宮中
に此安居をさせられたり、臘を佛の文字に大抵替てあれ共、字書を本位とすれば臘は釋尊なら
ず、併し古代よりの慣用なれば取て替むべき事にも非ずとす、

第三十九條

作證罪條

凡作證罪、及施機槍者、不得妨徑、及害人。

獸類を捕獲する爲めに、檻又は落し穴を作り、或はからくり仕掛の檻などを施して、人の往來
を妨げ人を害するやうなる事はならぬと也、

子語 〇檻は、オリ也、〇罪は、落し穴也、〇機槍は、カラクリ仕掛のナリ也、天武紀に、『フ
ムハナチ』の詞を施せり、〇徑は、道也、

第四十條

節日條

凡正月一日、七日、十六日、三月三日、五月五日、七月七
日、十一月大嘗日、爲節日。其普賜、臨時聽勅。

本條は節日の事を示したる令條也、

第四十一條

大射條

凡大射者、正月申旬、親王以下、初位以上、皆射之、其儀式及祿、從別式。

本條は、大射の令條也、當時の別式今傳らず、

大寶令新解附錄

太政官符。

應撰定法律問答私記二事。(結氣、鳥保記入)

右條(彼省、或都)解稱。明法博士外從五位下額田滿造今足解稱。謹檢舊記。律令之興。年代寢遠。沿革隨時。損益因_レ世。應原朝廷御宇(文成)。正一位藤原贈太政大臣(藤原公、男正)奉_レ勅。制令十一等。律六等。博士正四位下(藤原總)下野朝臣古麻呂。贈正五位上調忌寸老人。正五位下守部連大隅(神龜五年二月迄)連(連)正五位下連。公首名。從五位上伊吉連博綱。從五位下伊豫郡連馬甘等。至于大寶元年。修_レ撰_レ施_レ行天下。平城朝廷(元正)耆老年中。同太政大臣復奉_レ勅。刊_レ修_レ令律。各爲三十卷。博士正四位下大和宿禰長岡。從五位下陽胡史真身。從五位下矢集宿禰虫麻呂。從五位下國屋連古麻呂。從五位下山田連白金等。自_レ爾以來。諸博士等相_レ承教_レ授。又_レ路義_レ隊。情_レ還_レ廉_レ通。即_レ無_レ不由_レ先儒舊說。而_レ被_レ舊說。或爲_レ同答。或爲_レ私記。互作_レ異同。未_レ詳_レ誰作。後學者等。屬_レ意彼此。每有_レ論決難塞。夫古之利害。鍾鼎_レ之。金石_レ銘_レ之。所以塞_レ異同_レ絕_レ異理_レ也。望_レ諸_レ命_レ當時博士等。撰_レ先儒之舊說。省_レ被_レ遷說。取_レ此正義。勅_レ成_レ卷帙。以備_レ解釋。庶_レ傳_レ學者_レ易_レ解。與_レ春_レ莫_レ異者。省_レ依_レ解狀。謹請_レ宮_レ藏_レ者。正

三位行中納言兼右近衛大將兼宮大夫良家朝臣安世實。奉勅依請者。省宜承知。依宣行之。

天長三年十月五日 (經元平即寬保三年)
(經元平即寬保三年)

昭。(仁明帝)約三簡軌物。王道所先。制以三度量。息歇斯在。故知例成五教。例三勸萬方。垂扶而運其法。令平。後太上天皇。(清和帝)修三續玄扈。比三德丹陵。事勳三遠圖。慮在三長策。以爲法令文義歷約難詳。前儒莊釋。方圓違執。豈使二家異說。輕重參差。二門殊圖。舞文弄法。永言於此。因切三憂。爰勅三在朝。通令三討取。稽三之於典籍。參之以古今。茲三子淵疑。祇莫三章斷。加減辨析。已盡三會。八三會通。通三載爲三十卷。名三合義解。屬三規龍之妙。而汾陽之實然。未有三施行。觀三之秘府。朕以三旨。隨三取實。思三明讓。導三揚景。宜三宣三天下。首使三達用。畫一之訓。垂三於萬葉。主者施行。

上合義解表。(給與昌保記入)

臣夏野等言。遠三融三列辟。略因三嚴樹。區三歷登。皇。乘三圖稱。帝。莫三不敬。觀施。令。破三經緯。而還。邦。齊三禮長。刑。設三堤防。以濟。代者。也。雖云三兩風異。紀。文質混異。至於制。俗。既。人。殊。違。同。

承和元年十二月十八日 (紀元平即寬保三年)

(紀元平即寬保三年)

致。伏惟憲上。(神地)通光三國政。總波三白王。拱三離處。以聖。衣。福三寶區。而作。鏡。身。傳。故。叙。禮。義。交通。鴻化所。軍。華夷咸悅。然猶有衣三宜室。恐三萬機之有。短。要。食三合宜。念三先施之。不。備。遠。降。冲。旨。搜三揚法。以爲前儒解釋。遂有三乖向。淺深易。混。輕重難。詳。臣等謹。三。奏。非三陳。三。以。庶弊。叨。應三明詔。咸。策。咸。削。一。增。一。損。其。疑。而。不。決。聞。而。未。明。增。仰。東。三。尺。規。斷。三。之。違。覽。據。時。制。變。合。古。使。今。誠。可。改。三。生。靈。之。視。聽。爲。皇。王。之。模。範。者。也。裁。成。三。十。卷。二。名。三。合。義。解。呈。露。五。德。繕寫功遂。拜表呈奏。伏深戰越。臣夏野等誠惶誠恐頓首々々謹言。

天長十年十二月十五日

右大臣從二位兼行左近衛大將臣清原真人夏野上表

合義解序。(給與昌保記入)

正三位守右大臣兼行左近衛大將臣清原真人夏野等奉

勅撰

臣夏野等(此頭三ツナハ臣ノ二字)聞。春生秋殺。刑名與三天地。俱興。陰慘陽舒。法令共三風氣。並用。規。之。必。備。蠟。炷。有。三。烟。燬。之。危。(夏虫飛。火ニ入)燭。之。不。漏。蜂。絲。設。三。點。史。之。禍。昔。釋。繩。以。往。不。嚴。之。教。曷。從。晝。服。而。來。有。耻。之。心。難。格。隆。周。三。典。漸。增。三。其。法。大。運。九。章。違。分。三。其。派。雖。三。復。故。車。改。三。圖。年。市。之。益。不。勝。鑄。三。鼎。銘。三。鏡。滿。山。之。弊。已。甚。降。及。三。淺。季。頹。滯。益。彰。上。任。三。名。器。下。用。三。愛。憎。制。成。分。級。車。條。最。三。刀。斧。之。辭。富。饒。貧。重。憲。法。歸。三。賄。貨。之。家。嚴。科。所。三。枉。罰。發。謝。三。其。銛。利。輕。比。所。三。假。君。父。惡。三。其。

溫曹。故令出不行。不如無法。故之不明。是爲樂刑。伏惟

皇帝陛下。（齊和）遺萬五運。勳烈三獲。類金玉而垂法。布甲乙而施令。生春竹於齊刑。銷秋斧於秦作。凡車望斗之郊。無復冤牢之氣。黃神脫俗之地。唯看香樹之林。猶慮法令製作。文約旨廣。先儒訓註。案據非一。或專守三家義。或固拘偏見。不肯由一孔之中。爭欲出二門之表。遂至同聽之獄生死相半。連雲之斷出入異科。念此辨正。深切神機。爰使臣等集數家之雜說。舉一法之定準。臣謹與參議從三位行刑部卿兼信濃守臣南淵朝臣弘貞。參議從四位下守右大辨兼行下野守臣藤原朝臣常嗣。正四位下行左京大夫兼文章博士臣菅原朝臣清公。從四位下行勘解由長官臣藤原朝臣雄敏。從四位下行刑部大輔兼伊豫守臣藤原朝臣衡。正五位上行大判事臣興宿禰敏久。正五位下行阿波守臣善道宿禰真貞。大宰少貳從五位下臣小野朝臣實。從六位下行左少史兼明法博士勘解由何官臣議。公永直。從八位上守判事少屬臣川枯首勝威。明法得業生大初位下臣漢部松長等。輒應明詔。辨論執議。陳家古壁之文探而無遺。于氏高門之法訪而必重。其善者從之。不以八業言。其逆者略諸。不以名取。實。一加以說。悉依法曹之舊云。乃策乃削。非是臣等之新情。猶有五朝難名兩壁易似。必稟皇用。長風疑滯。有集在昔。大壯威其棟宇。網苦猶秘。重離照其側。今乃成之。取。諸不遺。臣等遠懷三皇。近取五帝。牽抽歷。參。魁使市。分爲三十卷。名曰令義解。凡其篇目條類。具列于左也。淺深水道。共宗於鑿海。小大公行。同歸於天府。謹序。

第一 官位令 職員令 檢校職員令 東宮職員令 家令職員令

第二 神祇令 僧尼令 戶令

第三 田令 賦役令 學令

第四 選舉令 職制令 考課令 雜令

第五 宮衛令 軍防令

第六 刑制令 衣服令 營繕令

第七 公武令

第八 倉庫令 園牧令 鹽鐵令

第九 假寧令 葬殮令 關市令 雜令

第十 職令 雜令

天皇十年二月十五日 明法得業生大初位下臣

漢部

松

從八位上守判事少屬臣

川枯首

勝

從六位下行左少史兼明法博士勘解由何官臣

漢部

松

大宰少貳從五位下臣

小野

實

正五位下行阿波守臣

善道宿禰

真

正五位下行大判事臣

興宿禰

敏

從四位下行刑部大輔兼伊豫守臣

藤原朝臣

衡

從四位下行勘解由長官臣

藤原朝臣

雄

正四位下行左京大夫兼文章博士臣

菅原朝臣

清

參議從四位下守右大辨兼行下野守臣

藤原朝臣

常

大寶令新解 附錄

五

參議從三位行河內縣令兼守臣
正三位守右大臣兼行左近衛大將

南淵朝臣 弘 眞
清原真人 夏 野

右令兼解十卷以紅葉山御文庫古本水戶殿校本松浦家岩城家及稻葉通邦藏本校正之畢。

寛政十二年十二月 日 (紀元二四六) 檢 校 保 己 一

(紅葉山本奥書云)

當憲故清大外史之本令紛失之間以原武衛奉政之本書寫點校了。于時文永三年庚鎮降日 越州刺史平

本奥云

安貞二年九月十一日書寫了。

同十四日安點了。 (紀元一八八)

貞永元年八月下旬以武備家本重見合了。 (紀元一八九)

右衛門 豐原 重

安貞第三之天災饑中甸之候以家說授原右令吾校附了。

御金吾者依東還訓於繁葉之風可堅彌仰於玉條之露而中古以降家門悉廢學久昧翰劄之月父祖共忘遺徒
歌宮樹之花愛校附學始勤學之志尤悠者也因之貳部書_{御授之面已}

整理左宮說判官附法博士愛左衛門少將偏中權掾久

在裏判

(京本序云一次爲抄本)

(大正四年十一月十一日 讀嶋昌保附點)

圖大政大臣兼源公不_{此準} 勅所撰令條者 本朝詳政之常典。而百家職掌無不_{悉覽}。上自公

卿。下至_{三庶人}。堂_是可_{隱明授受}之書軍也。然而此書空傳_{于貴}。獨_下已之士。弗_能容_易覽_聞也。

圖亦_隱有_得之。大率秘而不出。徒爲_竊銀之資_資矣。 本朝有職之學。日_增月_致。顧_此之由_二。然昔時令條註釋。純_駁相_交。憶_說煩_繁。遂_無歸_一之_論。於_是清_家往_祖。右大臣夏野公等。新承_二給_命。筆削增損。作_一書_{十門}。號曰_二令_義解_一。余暇日手_レ之不_レ措。頗考訂焉。略加_三訓_點於其傍。遂_三于衍文錯簡_一。有_レ難_二通_一解_二。蓋_三闕_一如。且又有_三過_一脫_三篇_一。猶_三埃_一七_レ日_一云。

慶安三祀庚寅 (紀元三三〇)

蓬生_レ 老林_レ 鶴

(松岡本奥書云)

令義解通計十卷自壬戌年_至己丑秋以_盡井伊藤荷田之_三賢所校合考索之本_一余_二復再校_一之雖_然風葉塵芥未必足爲_二善本_一矣而_二蕭_一烟傍註_二書_一亦_不爲_レ好說辭說_二交錯_一見者潛心於此書幸甚矣哉

明和六年己丑秋八月中十九日於武州南郊市中書之 (紀元三四二九)

源泰甫翁

(湖多本奥書云)

辛未仲冬初二搜了

大寶令新解 附 錄

件古本八卷也關職員假事版收埋等之令。

文政庚辰孟冬初六以官務以事留職本一校了是大夫外記關所傳借也疑之所附從本書者也。

明治廿六年四月三日病氣之際加書書託。(紀元二五三)

(花押)

湘多草甫翁

後妙善寺殿令開書の奥書及び奥書考、林春聲の後等左の如し、

大正五年五月廿七日

桂美山保記

此抄博陸(公夏)御抄也、福閑(後真公、御法)有御講釋、博陸令聽聞之始、被遊留云云、此道之珍璧、未代之明鑑、無不可及他見、非夢學路、依恐怖紛失也、相繼官相公入道(總と)令審實之、最以可秘之、可貴之而已。

延德四年壬子正月下旬記之(紀元百五十二年)

亞相藤隆量六十歳

奥書寫

福閑愛良公

一條系圖曰、愛良公文明五年六月二十五日、於南京御變、就覺真、就後成願寺。

博陸多良公 僧員公男

公卿補任曰、後土御門院長享二年八月二十八日關白、延德四年當職、明應二年辭退。

吉相公入道顯長卿

吉原系圖曰、參議正二位顯長、文明十三年御變、弑長曾孫、長政子。

亞和藤隆量

公卿補任曰、延德二年五月十一日、前權中納言正三位藤隆量、任權大納言、藤原系圖云、假名流末茂孫、四條隆親八代、隆慶子、權大納言隆量云。

延寶七年己未正月十二日

露峯林叟翁之

右令諱解、以奥書之趣見之、則兼良公口說、冬良公筆抄分明也、一條家累世之秘本也、余有故稱得見之、乃早々寫之、以爲家藏、可堅禁他借也、一枝式者奥書所載、以附卷尾、新立題名、曰博陸殘蹟、取諸兼良號桃華坊之義、爐花等相傳古語。

延寶己未孟春十一日

露峯林叟記之

緒草成題名定後、以令義解校之、則此一帖、惟抄今足解、承和元年詔、夏野表序、官位職員令神祇僧尼令而已、戶令以下者關焉、全部十卷之内、總一卷生存、蓋兼良所滿止於此乎、若羅講全部、第二卷

之末至十年、失於兵亂乎。

己未正月十四日

文化九年十一月

日以成家所藏秘本書寫校正而。納和學所文庫

藏 本 林 雙 再 記

溫 古 堂 讀

訂校 命集解の刊行に就て

我國が支那と交通を開始してより以來、歷朝銳意其文物制度を模倣し採用するにつとめたり。天智天皇の元年に成れる令二十二卷實に我朝令の權輿にして、所謂近江朝廷令なり。天武天皇更に之を修正して新に律をも編纂せられ、持統天皇の三年に至りて諸司に頒れたたり。淨見原朝廷の律令是なり。其後文武天皇の大寶元年に尊ら此令に準據して令十一卷を制定せられたり。之を大寶令といふ。然るに是等の編纂は今皆傳らず。世に今の令を稱して大寶令といふも、實は元正天皇の養老二年に修正して十卷とせられし養老令たるなり。

令の規定は舊敕の法制に亘りて適用の範圍頗る廣汎なりしに似ず、其注文は簡陋に失し、讀者として解し易からざらしむ。此の如きは實に官吏の運用を唯一の目的とせる當時の教育制度に於て明法生の

學修に便ならざらしのみならず、法規の運用に當れる實際家を惑はしむる事亦少しとせざる可。是を以て大寶令の制定以來、學者各一家の見を以て新義の書を著し此闕陋を補ふにつとめ、筆記問答の類相次いで成れり。然るに後の明法家徒らに師承を墨守して解釋の創一を闢き裁判上にも法の適用を二三にするに至り、其弊益よべからざりしかば、天長十年朝廷、明法博士額田國造今足の端を用ひ舊說を取捨して令總解十卷を編纂せられ、承和元年に施行せられたり。此書一たび出で、區々の異論を一掃せる後は、概ひ法文の誤解と認むべきものなきにあらざるにもせよ、彼世専ら其解釋に従ふ事となりたれば、諸家の手に成れる私撰の註釋書は勸助として復顧られず、學者の家を釋義の書に就ひるもの亦殆ど其跡を絶つに至れり。これ東西の法制解釋學史の一致するところなりとはいへ、令研究の一極端たりしこと否定すべくもあらず。惟宗朝臣直本の令集解の編纂は豈此に倣するものありしにあらすや。

本書は本朝書籍目錄に令集解三十卷^{題本}とあるものにして、一に令總記ともいふ。直本は元慶五年中の明法博士にして、帝て宣旨を賜はりて律令を聖略に講ずるの光榮を荷ひし事あり、二中歴に古來の明法家を列舉せる七人中の一人たるを見るも、如何に其律令學に精通したりしかを思ふべし、本書に收むる二十餘種の註釋書は新令即ち養老令に屬するもの其大部分を占めたるも、其中古令即ち大寶令に屬する別記・古記・令釋^{養老令に屬する等あり}等あり。又分義解の後に成れるを以て總には同書の註釋とも云へ、

格式及び八十一例、省例、彈例等の佚書も亦書中に散見せり。而して養老令の編纂後大寶令の實施期間に成れる古記以下の諸註釋書には前後の令制を對照して其異同を指摘せるものあるのみならず、問々令制と慣行との差異に關する貴重な資料を提供す。加ふるに註釋諸書に參照として舉げたる所令格、式、法例等の諸書は支那本國に於てすら既に散佚して傳らざるものなり。されば我が令制と其立法式、法例等の比較研究を試み、立法者が府制を繼受するに當り如何なる點に向つて斟酌するところありしやを見、又大寶令と養老令との異同を辨じて修正の程度をトし、令の編纂及び修正に於ける立法上の主義精神を窺ふと同時に實施後如何なる變化を來すに至りしかを知るに於て、本書は最も力なる參考書として推奨するの價值ありといふべし。

本書に收むる私記・問答等の編者は跡といひ、讀といひ、穴といひ、頌といふの類、皆概ね其氏名の頭字を取りて略符に充てたるものなり。古くは村田春海の讀令筆記、稻葉通邦の神祇令和解、近くは佐藤誠實博士の律令考に其人を擬せるものあるも、當時に在りてすら既に何人たるやを知るべからざりし事、額田今足の天長三年十月の解狀に見えたる如くなれば今に於て其實否を識別するに由なし。而かも共に當代に於ける明法界の明星たりしは疑ふべくもあらず、さるにても其解説多し字句の範疇を出でずして、法理論としても實際論としても遺憾なき能はず、且つ本書は令文の逐條之に該當する註釋斷書の文を抄出せるものなれば、固より其全書にあらす。故に本書の探検に遇れたる是等註釋書の文

参考書として推奨するの価値ありといふべし。

本書に收むる私記・問答等の篇者は跡といひ、讀といひ、六といひ、額といふの類、皆概ね其氏名の頭字を取りて略符に充てたるものなり。古くは村田春海の讀令筆記、稻葉道邦の神祇令和解、近くは佐藤誠實博士の律命考に其人を擬せるものあるも、當時に在りてすら既に何人たるやを知るべからざりし事、額田今足の天長三年十月の解狀に見えたる如くなれば今に於て其實否を識別するに由なし。而かも共に當代に於ける明法界の明星たりしは疑ふべくもあらず、さるにても其解説多し字句の婉轉を出でずして、法理論としても實際論としても遺憾なき能はず、且つ本書は合文の逐條之に該當する註釋新舊の文を抄出せるものなれば、固より其全篇にあらす。故に本書の探検に遇れたる是等註釋舊の文

にして政軍要略合抄の如き古書に載せたるものあり。されど本書の編者が、斯く多数の古註釋書を新編して後世に傳へし賜は多大なりといふべく、殊に令義解施行條に於てせるを傳とせざるべからず。本朝法家文書目録を檢するに、本書に收めたる諸註釋書の中僅かに令釋一部七卷を存するに過ぎず。通志入道藏書目録には又令私記一卷・新令撰撰一卷あるのみ。それすら後世其一部たも傳ふるものなきなり。これ令義解の施行條是等の諸書の世に用ゐられざるが爲め。次第に佚じし去れるに外ならず。若し本書の摘録して後に遺す事なかりせば是等貴重資料は擧げて逐減に補せしならん。

なり。これ令義解の施行後、是等の諸書の世に用ゐられざるが爲め。次第に佚亡し去れるに外ならず。

若し本書の摘録して後に遺す事なかりせば是等貴重資料は擧げて湮滅に歸せしならん。

本書は古來専ら寫本を以て傳へらる。故に金澤文庫本以下本書の跋語には鎌倉時代以後校讎に従へる諸家を具載し、佳本を得るに魚尾せる古人の用意の觀るべきものあり。鎌倉時代には公卿に妙光寺内大臣花山院師繼あり。武井に越後守金澤實時あり。近世に至りては清原・中原兩家の人多く校正の事に従へり。慶安三年立野春節は本書より抄出して今義解を上水せり。故に往々本書の文の混入せるを見

る。然るに本書の校讀以上、新に異兼なる所續の歩武を進めたりしは荷田春暉其人なりとす。翁は本書が我が古法制の研究上無比の寶典たるに着眼して深く研駁する所あり。家に其遺稿として合集解剖

記殘缺一卷を藏す。幕府の書物奉行下田師古嘗つて將軍德川吉宗の旨を承けて爲に質すに貞觀儀式・西宮記に限らず、古書之内に而板行・成而後學者最重寶・可存舊を以てせるに猶ほこれに答へて右貞觀儀式よりも、西宮記よりも、古書之内に而板行・成而後學者の重寶可存舊は今集解二而勅撰候。

集解之文字等時錄之上二面板行ニ成候へ、至極之事實に就可申候と存候といひし事あり。其如何に本書に傾倒せらるかを思ふべし。それかわらぬか、吉宗は人見美在（舊門七郎右衛門林信知又右の三人に會じて）、山田重清（山田重清は現在、今武津の藩邸に在り、有之候、集解は版に無之候、即實記附録に今武津と誤解せらるゝ）、室直清（室直清といへば後醍醐天皇に在り）の三箇に當時未だ校合の業を卒へずと見ゆ。其後完成せしや否や詳かならざるも、竟に刊行を見ずして止めり。明治四年より五年に日、東京の書肆山城屋佐兵衛等、石川介の校本に據りて始めて活刷に附せしもの即ち本書の活字本なり。校者の自跋に曰く、右令集解舊本凡五十卷、今所存三十五卷、有脱文誤字、余活字刷印起辛未四月止壬申正月、非不致其勞、然又不能無錯畫、諸讀者增補校正之、明治五年正月日石川介識と、校者は古本十六種を以て校正を経たりといふ。獨力能く努めたりといふべし。然るに校合の精粗は姑く措き、寫本に於て本文の左右上下に存する多くの倉入を擧げて削除し去れるが如きは看過すべからざる副點といはざるを得ず。

余の本書に據りて令制を研究するや、往々活字本の文字に誤脱あるを發見して轉々其遺漏とし難きに苦めり。法學博士宮崎道三郎氏風に之を慨せられ、談本書に及ぶ毎に讀本を校合して監本を作るの急務を告げられざる事あらず。余即ち博士に謀り、明治三十一年以降毎週一回博士の邸に會して本書の校合を行ひ、讀本の異同を覓出す毎に余の活字本に朱批を加へたり。其初に當りては校合に充てし讀本も數部に達せざりしかど、要四・井上秋野博士等此計畫を贊して各其珍藏の本を提供せらるゝに至

りて頓に校者の不足を感せしかば、同志の士に向つて會同を求め、南条和昭基俊、佐藤誠、文學博士岸月垣、法學博士中田實の諸氏前後交々會讀の目に加はられたり。然るに宮崎博士等公私の故障續出して一時中止の已むなきに至りしが、三十六年余國學院大學の研究科に於て國科學生高橋高次郎、楠木直一、郎兩氏の爲めに日本法制史の指導講師たるに及び、兩氏の同意を得て同年十一月より更に斯業を繼續するに決し、毎週一回私宅に會して校讀せしが、三十九年九月に漸く其業を卒へ一部の校本を得るに至れり。

其間余實の校合に用ひし諸本はすべて監本に屬し、互に出入あるを以て對校の際疑義を生ぜし時はつとめて諸本を參照せり。然るに其白眉とすべきは金澤文庫本・宮崎博士本・楠本等の數本なりき。故に他の諸本中には種々の事情より全文を通じての校合を果さざるものなかりしかど、是等の諸本は終始校訂の料に充てたりき。金澤文庫本に二部あり、一は秘閣本にして現に内閣記録に陳せられ官位合より戸合に至る十卷を存す。關白豐臣秀次より葡萄家に傳はりしを、慶長十九年國家より更に幕府に贈れるものなりと稱せらるゝも、之を閱するに、後世の寫本にして固より原書にあらず。近藤守重は石文故事に金澤本の模寫なりと評せるも、其書風より推せば必ずしも然らざるものゝ如し。一は三十五冊、山田清安の舊藏本を神谷吉楨の影寫せるものにして、其寫本は文學博士井上頼國氏の架閣に歸せり。此書原書には金澤文庫の關印を存し、轉寫の後と雖も、尙は鎌倉時代の書風を殘存せ

三才堂主人
三才堂

大正五年七月一日印刷
大正五年七月十四日發行



東京市文藝館附設印刷部
電話 二八〇九番
地址 東京市神田區表神保町二番地

發行所

目

黑

其

七

著者
出版人
印刷者
印刷所

富山市總曲輪八十番地
富山市總曲輪八十番地
富山市總曲輪八十番地
東京市神田區表神保町二番地

弘

文

堂
耶
良
保

定價金參閱

藤原冬嗣等 撰
植松茂嶽 校

類聚三代格（弘化本）

安政二年（一八五五）跋刊本

據安政二年（一八五五）
跋刊本影印

聚三代格卷第一

序事

齊王事

神社事

神宮司神主祢宜官座格等附錄

神封并租地子事

科校事

祭并幣事

神郡雜務事

神叙位并託宣事

神社公文事

序事

格式序

三代格卷一

大納言三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原冬嗣奉勅撰

蓋聞律以懲肅為宗令以勸誠為本格則量時

立制式則補闕拾遺四者相須足以垂範譬猶

寒暑通以成歲昏旦迭而有物有治有革或輕

或重寔治國之權衡信馭民之轡策者也古者

世質時素法令未彰無為而治不肅而化暨乎

推古天皇十二年上宮太子親作憲法十七箇

條國家制法自茲始焉降至天智天皇元年

制令廿二卷世人所謂近江朝廷之令也爰逮

文武天皇大寶元年贈太政大臣正一位藤原

朝臣不比等奉勅撰律六卷令十一卷養老

二年復同大臣不比等奉勅更撰律令各為

十卷令行於世律令是也故去天平勝寶九歲

五月廿日勅書備項年選人依格結階人々

高位不便任官自今以後宜依新令去養老年

中朕外祖故太政大臣奉勅刊脩律令宜仰

三代格卷一

所司早令施行先帝德合肅載明齊照臨四

海有截八紘無事然而凝情政體騁想治術以

為律令是為從政之本格式方為守職之要方

今雖律令頗經刊脩而格式未加編緝稽之政

道尚有所闕乃詔贈從一位行左大臣藤原

朝臣內麻呂故參議從三位行常陸守菅野朝

臣真道等始令撰定草創未成遭時過密寢而

不為天朝以聖承聖資明繼明敷景化於寮

中暢仁風於海外。然而顧先緒之未遂。切堂構於宸襟。爰降綸言。尋令脩撰。申詔大納

言正三位兼行左近衛大將陸奧出羽按察使臣藤原朝臣冬嗣。故正三位行中納言臣藤原朝臣葛野麻呂參議從三位行近江守臣秋篠朝臣安人參議從四位上行春宮太夫兼行左兵衛督式部大輔臣藤原朝臣三守從五位下守左近衛少將臣橘朝臣常主從五位下守大

三代格卷一

三

判事兼行播磨太掾臣物部中原宿祢敏久等。上遵勅旨下考時宜。採官府之故事。據諸曹之遺例。商畧今古。審察用捨。以類相從。分錄諸司。其隨時制宜。已經奉勅者。即載本文。別編為格。或雖非奉勅。事目稍大者。奏加奉勅。因而取焉。若屢有改張。向背各異者。畧前存後。以省重出。自此之外。司存常復。或可裨法令。或堪為永例者。隨狀增損。惣入於式。若夏類班雜。

不得指附者。各為雜篇。次之。於末。其諸司所行。彼此參差。或曰脩雖久。不便於事。若斯之流。難以取則。具錄其狀。伏聽天裁。至如米塩魚肉。兩數紛紜。及鋪設雜器。功程多少等類。事既輕碎。臣等商量。務從折中。不煩上聞。其朝會之禮。蕃客之儀。頃年之間。隨宜改易。至於有事例具存。記文令之所撰。且以畧諸。又交替式者。延曆年中。勘解由使撰定。奏聞遵行已久。仍舊而存。

三代格卷一

四

不加取捨。但年代浸遠。京都屢遷。諸司文案多或墮失。雖加採索。猶有未備。上起大寶元年。下迄弘仁十年。都為式冊。卷格十卷。辭簡而事詳。文約而旨暢。庶使覽之者易。曉施之者易。行布之象。親與天地而無窮。銘之景鐘。將金石而不朽。臣等學非稽古。才闇當今。猥稟明詔。敢事銓緝。雖罄膚淺。恐多錯紕。凡厥篇目。列之如別。貞觀格序。

大納言正三位兼行皇太子傳臣藤原朝氏宗等奉勅撰

律云斷罪須引律令格式正文令云犯罪未斷

決逢格改者然則格者律令之條流政教之軌

軌君与百姓共之者也君不可失之於上臣不

可違之於下出言而千里斯應含和而万類曲

成時險則峻法以取平時泰則寬繩以將化我

國家遐邇承德天下無虞風教大同車書共道

而未能焚符破璽施無夏於群情設為除刑馳

三代格卷一

五

不犯於比屋故嚮者於仁十一年四月廿一日

施行格十卷此乃公卿百官奉詔簡舊史之

凡要抄新制之大綱推民意而分規量時宜而

立範不刪之典遵行 equal 焉仍舊之圖蹤跡斯在

聖上不出戶而知天下不問教而辨物情以為

虞夏共有其國刑德斯殊秦漢不易其民弛張

非一俗化之本理有固然蓋取義於隨時匪欲

期於相反如今時歷五代年及六旬文質暗遷

備

沿革自至詔草盈於臺閣文案溢於繼囊非所

以法止滋章令除煩變即詔故右大臣贈正

一位藤原朝臣良相等令因脩舊格綜緝新符

未及成功歲月遷往大納言正三位兼行皇太

子傳臣藤原朝臣氏宗等前与右大臣共承

冲旨詳悟深規仍与參議民部卿正四位下兼

行春宮大夫伊豫守臣南淵朝臣年名參議正

四位下行左大弁臣大江朝臣音人從四位上

三代格卷一

六

守刑部卿臣菅原朝臣是善散位從五位下臣

上毛野朝臣永世勘解由次官從五位下臣紀

朝臣安雄太外記正六位上臣南淵朝臣興世

正六位上行左少史臣大春日朝臣安永正六

位上行彈正少忠臣布瑠宿祢道永正六位下

行大學大属臣山田宿祢弘宗等上起弘仁十

載之明年下至貞觀十年之晚節擇成規於州

郡搜故實於官曹芟与先格異者舉而取之理

與舊制同者推而棄之凡格者蓋以立意為宗不以能文為本故省其繁麗之文增其精微之典隨官分類先勅後符概皆據古之前模非為今之新意唯一部之內更有兩存頗涉重撰不以為例勘解由使所奏新定內外官交替式所載數事亦復准之前例不煩取捨臣等雖非明于溫故博於前聞猶欲令之必行禁之必止賞一人而海內欣罰一人而天下懼謹曰詔

三代格卷一

七

撰貞觀格十卷奏聞若理輕作格竟不足為儀專棄之如遺無取之似碎更撰為兩卷同以奏上准開元司格貞觀臨時格并一帙十二卷家十有二月以成歲但前格存而如舊後典續而增新覽古知今斯焉在矣猶恐庸心所集有違於宸襟管見攸裁無協應於睿旨典章不能自舉待教令而舉之教令不能自行待誠信而行之斯文不墜百代可知謹序

三代格卷一
錄第十

延喜格序

左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝時平等奉勅撰易曰天垂象聖人則之又曰大人者與天地合其德乃知陰陽寒溫天道所以成歲政令寬猛人君所以導民隨時立教或革或治觀風制法世輕世重然則金科玉條不可用之於庖廚之俗草纓艾韞不能施之於僇野之人若不達變通之道則何辨理亂之方者乎我朝家道出

三代格卷一

八

混沌境同華胥無為之功未假號令不言之化豈用章條於是朴往彫來少盡驟至前帝後王雖俱存一面之綱重規疊矩不能廢三章之科故教而不誅制甲令於先誅而不怒張丙律於後近者弘仁格十卷貞觀格十二卷然是聖主降其綸言賢臣施其筆削搜舊章於臺閣擇新制於詔命察此民情適彼俗化垂納軌之弘典立經國之太規方今膺千幸之期運承

百主之澆醜時風加而茂草靡震雷動而蟄虫驚將欲禁溢浪以隄防馭要駕以轡策流淳化於比屋之封反薄弊於大連之俗而制格以來歷年漸久或數代之中弛張屢變或一事之上抑揚遞殊或同本而異末或分源而會流斯乃雖愒其時宜匪故相反而綜其事迹無所適從爰詔左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平故從三位守太納言兼右近衛大

三代格卷一

九

將行春宮大夫陸奧出羽按察使臣藤原朝臣定國中納言從三位兼行民部卿春宮權大夫臣藤原朝臣有穗參議正四位下行左兵衛督臣平朝臣惟範參議右大辨從四位上兼行讚岐守臣紀朝臣長谷雄從四位上行式部大輔兼侍從春宮亮備前守臣藤原朝臣管根左京大夫從四位下臣藤原朝臣興範從四位下行文章博士兼備中權守臣三善朝臣清行從四

中
大
辨

位下行民部大輔臣大藏朝臣善行正五位下守右中弁兼行勘解由次官臣藤原朝臣道明從五位下行大內記兼周防權介臣三統宿祢理平外從五位下守大判事兼行明法博士備後權介惟宗朝臣善經正六位下守右大史臣善道朝臣有行正六位上行兵部少錄臣弘世連諸統等憲章前條綜緝此典起自貞觀十一年至于延喜七年其間詔勅官符搜抄撰集

三代格卷一

十

除其滋章刪其煩雜若祖述先格事有增損者撫而無遺若弛張恒規理無補益者廢而不採以官分隸以類相從皆依舊目無加新意亦其條貫樛錯難為區分者准之雜令便号雜格勒為十卷曰延喜格又有理非大典政出權時雖不足為龍斷之銘而猶可恨難勛之弁如此之類別為延喜臨時格二卷合為十有二卷依歲紀而取為法星次而分篇率由前模不敢殊製

專存溫故之意。頗立改弊之文。新舊分條。縱有
吹萬之響。先後同法。庶成畫一之類。但 沖旨
既遜。愚管難覃。招咄同周。鼠之珍懷。慙類遼家
之獻。謹序

類聚三代格卷第一

神弘一
神社事

詔攘灾招福。必弔幽冥。敬神尊佛。清淨為先。今
聞諸國神社。祇社內多有穢死及放雜畜。敬神之

三代格卷一

十一

禮豈如是乎。宜國司長官自執幣帛。慎致清掃。
常為歲事。

神龜二年七月廿日 統紀第九

太政官符

曾課諸祝掃修神社事

右檢案內。太政官去年四月十二日。下諸國符。
併掃修神社。潔齋祭事。國司一人。專當檢校其。
掃修之狀。每年申上。若有違犯。必科違勅之罪。

神弘一

者。今改建例。更重替責。若諸社祝等。不勤掃修。
神社損穢。宜收其位記。差替還本。即錄由狀。便
申上。自今以後。立為恒例。

寶龜八年三月十日

太政官符

應令神戶百姓修理神社事

右奉 勅。諸國神戶例多。課丁供神之外。不赴
公役。宜役其身。修理神社。隨破且修。莫致大損。

三代格卷一

十二

國司每年巡檢修造。若不遵改。更致緩怠者。隨
狀科。被

弘仁二年九月廿三日 六

太政官符

應無封神社。令祇宜祝等修理事

右有封之社。應令神戶百姓修造之狀。下知已。
訖。至于件社。未有處分。今被大納言。正三位藤
原朝臣。園人宣。備奉 勅。宜仰諸國。自今以後。

神弘一

式弘

太政官符

弘仁三年五月三日
後紀卷三

三代格卷一

十五

應以大社封戸修理小社事

四箇條之初條

右撰格所起請。倂太政官去弘仁十三年四月四日下大和國符。倂得彼國解倂檢案內太政官去弘仁三年五月三日符。倂有封之社令神戶百姓修造無封之社令。彌宜祝部等永加修理。國司不存檢校有致破壞者。遷替之日拘其解由者。國依符旨行來尚矣。而今有封神社已有治力。無封神社全無修新。仍貪幣祝部無由

類聚三代格（弘化本）卷一

今謹檢
神名式
天大王
之欠恐
服柳王
二字

修社吏加檢責各規道隱推其苦跡誠有所以
仍檢神苗裔本枝相分其祖神則貴而有封其
裔神則微而無封假令飛鳥神之裔天太玉曰
龍賀屋鳴比女神四社此等類是也望請以無
封苗裔之神分付有封始祖之社則令有封神
主鎮無封祝部然則社有修掃之勤國無崇告
之施者右大臣宣奉勅依請者事施一國遵
行有便伏望下知四畿內及七道諸國者中納

清代格表

十四

言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經宣奉勅依請

貞觀十六年六月廿八日

太政官符

應允行宗像神社修理新賤代徭丁事

從良賤十六人。正丁在筑前國宗像郡金崎。

充行儒士 十 八人。大和國城上郡四人。高

市郡二人。十市郡二人。

右得被社氏人從五位下守右少弁兼大學頭
高階真人忠峯等解狀傳件神坐大和國城上
郡之內与坐筑前國宗像郡從一位勲八等宗
像大神同神也舊記云是天照大神之子也
大神 勅曰汝三神降居道中奉助 天孫為
天孫所崇祭者今國家每有禱請奉幣件神是
其本緣也唯筑前社有封戸神田大和社未預
封例因茲忠峯等始祖太政大臣淨廣壹高市

三代格卷一

十五

皇子命分氏賤年輸物令修理神舍以為永例
而年代遠物情解體氏衰路遙不堪催發須依
貞觀十八年六月廿八日格申請祖神封物以
充修理新而大神宮事既異諸社氏人等狐疑
猶豫空經年序所在神舍既致破壞令件賤同
類蕃息已有其數望請進件賤為良將令備調
庸其氏永請隨近儒丁以充修理新謹請 官
裁者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子

神頁一

傳陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉 勅依
請者仍須件儒丁待彼氏高階真人長者并神
主等共署申請充之差充之後不得輒差他役
但其死闕及耆老之代又同待請充之永以為
例

寬平五年十月廿九日

太政官符

應禁制春日神山之內狩獵伐木事

三代格卷一

十六

右被中納言從三位兼行左兵衛督陸奥出羽
按察使藤原朝臣良房宣傳春日神山四至灼
然而今聞狩獵之輩觸穢齋場採樵之人伐損
樹木神明依怙恐及國家宜下知當國嚴令禁
制者國宜承知仰告當郡司并神宮預殊加禁
制無復勝示社前及四至之塚令人易知若不
遵制旨猶有違犯者量狀勘當不得容隱

承和八年三月一日 陸奥記

神貞

太政官符

應禁制汗穢鴨上下大神宮邊河事

右得彼神宮祢宜外從五位下賀茂縣主廣友等鮮備鴨川之流經二神宮但欲清潔之豈敢汗穢而游獵之伎就屠割事濫穢上流經觸神社因茲汗穢之崇屢出御上雖加禁制曾不忌避仍申送者大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣奉

三代格卷一

十七

神貞

太政官符

承和十一年十一月四日續後紀第十四

應令神戶百姓護鴨上下大神宮邊川原并野事

四至

御祖社

東限寺田 南限故參議左衛門將忠朝臣諸宅北路末西限百姓宅地并公田 北限櫻林下里南畔并寺田

此應

別雷社

東限路并百姓宅地西限鴨川

南限道并百姓宅地公田北限梅原山

右得山城國鮮備依太政官去十一月四日符仰愛宕郡司令禁護件社邊河而郡司鮮備郡中儒丁數少無人差老望請以此郡神戶百姓分番令禁守若致汗穢永出神戶以公戶民相替補入者國加覆審所陳有實證請官裁者左大臣宣依請

承和十一年十二月廿日

三代格卷一

十八

神延一

太政官符

應禁制賀茂神山狩獵事

右右大臣宣奉勅件神山四至之内不可穢瀆之狀制旨間降如聞無賴之輩偷射猪鹿宜嚴加禁止若有犯者五位已上取名奏聞六位已下投進其身依法科處曾不寬宥

元慶八年七月廿九日

太政官符

神延

應元正一位平野神社地一町事

在山城國葛野郡上林鄉九條荒見西河里廿四坪

四至

東限荒見河
西限社前東道

南限典藥寮園
北限禁野地

右得彼社預從五位下卜部宿祢平麻呂解狀
併謹檢舊記延曆年中立件社之日點定四至
奏聞既訖而社預等不詳事意無領此地因茲
嵯峨院去承和五年十月十五日割取八段賜
時統宿祢諸兄其後加野地二段傳給典藥寮

三代格卷一

十九

彼寮本自有藥園地重請神地耕作畠今除件
地之外四方被限禁地無有行神事并走御馬
之處又會集諸司貴賤車馬墳塞社邊無道出
入望請被早返給水為社地謹請 官裁者右

大臣宣奉 勅依請

貞觀十四年十二月十五日

三代實錄卷廿二

太政官符

應禁制大和國丹生川上雨師神社界地事

延二神

四至

東限板塩
西限板波龍

南限大山峯
北限猪鼻龍

右得神祇官解併大和神主大和人成解狀併
別社丹生川上雨師神祝祢宜等解狀併謹檢
名神本紀云不聞人聲之深山吉野丹生川上
立我宮柱以敬祀者為天下降甘雨止霖雨者
依神宣造件社自昔至今奉幣奉馬仍四至之
內放牧神馬禁制狩獵而國柙戶百姓并浪人
等寄夏供御奪妨神地屢觸汙穢動致咎崇爰

三代格卷一

祝祢宜等依稱供御不敢相論既犯神禁何謂
如在望經言上嚴被禁制者所陳有實仍申送
者官依解狀謹請 官裁者大納言正三位兼
行左近衛大將皇太子傳陸奧出羽按察使源
朝臣能宣宣下知彼國令加禁制

寬平七年六月廿六日

神封物并租地子事

詔 伊勢大神宮封物者是神御之物宜准供

弘一神

神事勿令濫穢

大寶二年七月八日 續紀第二

太政官符

應令國司出納八幡太菩薩宮雜物事

右得太宰府解倭太政官去延曆十八年十一月五日符倭府解倭太政官去年十二月廿一日符倭太菩薩并比咩神封一千四百十戶宜納府庫者豐前國解倭神宮司申云比咩神封

三代格卷一

廿一

六百十戶之物与太菩薩封物共納府庫由是春秋祭新無物可用者所申有實謹請處分者右大臣宣奉 勅宜府官檢校割充祭新所殘

神主

雜物便納神宮仍即府官官司相共出納者府依符旨相共出納而道路稍遠有煩遣使加以

檢前例神宮當國等司相共檢掌出納望請准

先例付國与宮共令出納但年終用狀勘錄令

申謹請 官裁者右大臣宣奉 勅依請

藤内啓

神延一

大同三年七月十六日

太政官符

應永附貢綿使運進任吉神社調庸綿事

右得攝津國解倭任吉神社牒倭筑前國封戶調庸承前之例以租穀充賃運進於社而今經數十年曾不送納祭事闕乏職此之由望請被言上令附太宰府貢綿船每年運進充用祭新者國加覆勘所陳有實謹請 官裁者右大臣

三代格卷一

廿二

宣依請

貞觀十三年五月二日 甲辰年五月乙酉丁補以三代實錄

太政官符

應收納神庫充用祭新氣比神宮封租穀事

右得神祇官解倭彼神宮司大中臣安根解倭

檢案内太政官去延曆十二年二月廿七日下午

越前國符倭官司大中臣魚取解倭封租穀須

勘納神庫充用祭新而國更徵納官庫充用他

金應

色臨彼祭時不肯下行度之祭事由其關急望請勘納神庫充用祭新謹請官裁者右大臣宣依請國依符旨行來既尚矣而去弘仁元年介橋朝臣永繼與官司有意相爭專任國行自今以後積習為例充用遠郡運漕之間殆過祭期神事踈略大概在茲貢神之物豈可如此望請徵納神庫以省申請之煩者官檢案內件租穀專盡神用不充他色然則納於官庫還無公

三代格卷一

廿一

益納於神庫尤有便宜望請重仰國宰據准舊例徵納神庫以充祭新謹請官裁者右大臣宣依請但至于出納件物國司官司相共行之

元慶八年九月八日
三代實錄第四六

太政官符

應令停止分神封鄉寄神宮寺事

右得神祇官解俾坐越前國正一位勳一等氣比太神宮司中臣清貞解俾檢舊例太政官去

神延一

神貞一

齊衡三年四月七日下午國符俾寺別當與神宮司共可勘知封物出納者自今以降相共勘知先納神宮後分寺家是官司之處分非國宰之所行而國去九月二日送神宮寺移云依別當僧平鎮膝狀分足羽郡野田村封鄉為神宮寺新者官錄無例之狀副郡司禰宜祝寺申文再移送而曾無封移又未改行因茲平鎮寺入接封鄉徵妨調物供神之物先為僧侶之食後

三代格卷一

廿四

社之輩還稱寺家之人國宰所行官司難制望請官裁被傳分鄉但官司依例惣納封物供神之後隨色領自者中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉勅依請

寬平五年十二月廿九日
五十七

太政官符

應令伊勢太神宮司檢納神郡田租事

右得神祇官解倂承前之例大神宮司檢納伊勢國多氣度會兩郡神田租及七處神戶田等租支用祭祀從來尚矣中間國司預以檢納仍檢案內太政官去延曆廿四年四月七日下午伊勢國符倂得神祇官解倂神宮司解倂伊勢國司移倂太政官去延曆廿年七月一日下諸國符倂令案神祇令云神戶調庸及田租並充造神宮及供佛神調度其神稅者一准義倉皆國

三代格卷一

廿五

司檢校者准據令條既稱檢校至于支用理難專輒宜國司郡司神主等支度祭新并注其殘申上聽裁者國司等勘知用帳報收神物既遠舊例凡此大神者天下貴社如是之類元來所禁也而今准諸神國司檢校於事不穩者右大臣宣宜依例勿預國司者自歛而後宮司檢納充用祭新但物被充造神宮及離宮之用所殘數少祭用有欠仍更請欠新即太政官去弘

下五
四

仁六年六月九日下午神宮并國司符倂得神祇官解倂太神宮司解倂年中神事難一可闕當國神稅所殘數少望請他國神稅充用所欠新者右大臣宣他國所有徒積希用當國所納隨用已盡縱有要須卒尔何支宜以他國神稅一充年中雜用新其當國神稅每年儲置若不得已必可用者先申後用者從此國司始亦預納須依符旨令充用而年中祭用稻合四方一千

三代格卷一

廿六

一百九十束一把今在他國神戶合百廿一烟所輸租五千二百五十束除例用外所遺亦一千五百八十五束亦當國所出租三方五千束爰當國他國神稅合三方六千五百八十五束即共充用猶所欠稻四千六百五十束其代借用正稅雖割所輸租即便填進而每年有殘封納為煩望請停煩預國司令神宮司依舊檢納預以支用濟其祭事但借請正稅充欠新者永

從傳止謹請 官裁者右大臣宣奉 勅依請

弘仁十二年八月廿二日

藤冬嗣

太政官符

不可割取 伊勢大神宮神戶百姓事

右神祇官去閏十月廿九日解備大和伊賀伊勢志摩尾張參河遠江等國司論云去延曆廿年七月二日格云檢案內太政官四月十四日符備自今以後神戶限以二丁田租定十五束

三代格卷一

廿七

者丁減物少供祭應之宜天下諸社同共改張地子事丁并租數一依舊例又養老七年格云神戶增益即減之死損即加之者宜後有增丁隨減之但至于死損取彼加此於事不穩宜勿更加者仍案彼延曆廿年四月十四日格備大神宮封戶非改減之限而件國神戶百姓愁云神戶有死須依實除帳而國司勘返不除帳名雖附帳實無其身因茲丁數字過五六丁爰國司号

弘一
神

除丁即出自神戶貫於官戶至于課役皆悉徵納若致延怠遂加決罰神事難濟職此之由望請件 大神宮封戶丁雖有餘剩永無減省以供 神宮謹請 官裁者右大臣宣奉 勅凡大神宮事異於諸社宜依延曆廿年四月十四日格永無改減若有乖忤科違勅罪 貞觀二年十一月九日 太政官符

三代格卷一

廿八

應収神郡百姓逃亡口分田地子事 右得神祇官解備御下所案多氣度會二箇神郡百姓逃亡口分田地子可為神稅而元來國司混合正稅自今以後擬収神稅者被內大臣宣奉 勅依請施行

藤良雄

寶龜五年八月廿七日

祭并幣事

賀茂神祭日自今以後國司檢察常為年夏

和銅四年四月廿日 統紀第五

勅比年以来祭賀茂神之日會集人馬悉皆禁
斷自今以後任意聽祭但祭礼之庭勿令闖亂

天平十年四月廿二日

太政官符

應科決被差賀茂祭騎兵致拒捍土浪人事

三代格卷一

廿九

右得山城國解倂管八箇郡司解倂件祭騎兵
擇土浪人堪事者差進既畢而寄事高家不順
國仰若不言上恐有後責仍注拒捍人交名申
送者國檢案内承引之輩不及廿人陳列之儀
當到闕急望請官裁如此之類不限土浪不
論蔭賧行齊之外決宮五十以懲將來者中納
言魚右近衛大將從三位春宮大夫藤原朝臣
時平宣可贖之色國司先勘其過依法責賧自

餘依請

寬平九年四月十日

太政官符

應殊加檢察敬礼四箇祭事

右檢案内二月祈年六月十二月次十一月
新嘗祭等者國家之大事也欲令歲灾不起時
令順度預此祭神京畿外國大小通計五百五
十八社因茲之特致潔齊慎令祭礼而敬惟踈

三代格卷一

卅

簡礼非如在每至祭日奸濫雲集至献幣帛老
少攀攬徒有陳設之營曾無供神之實祢宜祝
部須向神祇官敬受幣物虔奉其社而件等人
無致其敬或雇出身代不自參進或雖躬受取
無心奠祭頑愚之輩押贖神禁神靈之崇職此
之由凡祭神之礼以神主祢宜祝部為其齋主
而不勤職掌踈畧神事非唯神主等之急還又
齋官不加糾勘之所致也中納言兼右近衛大

將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉

勅自今以後京内諸國社所帶諸司殊加檢察

畿内外國當國官長相共監臨祭禮之日必致

齊敬若祭事不慎監察有怠者官司處之重責

神主祢宜祝部等科被解職一如貞觀十年六

月廿八日格曾不寬宥

寬平五年三月二日

太政官符

三代格卷一

卅一

改仰齊日事

右據令條凡祭祀所司預申官散齊日平且

頒告諸司其散齊之内不得吊喪問疾食突不

判刑殺不決罰罪人不作音樂不預穢惡之事

今被右大臣宣傳奉勅散齊之日頒告諸司

諸司未承宣之前或有犯禁忌之徒宜改令條

散齊之前一日頒告諸司自今以後永為悛例

弘仁二年二月六日 後紀第廿一

神貞一

太政官符

應奉祈年月次新嘗等祭幣事

右得神祇官解傳檢案内武藏下總安房常陸

若狹丹後播磨安藝紀伊阿波等國神社幣須

依格祝部受取供祭而項年緩急曾不勞受徒

積庫底無由走奉斯固程途遼遠往還難澁之

所致也望請差使令奉謹請官裁者右大臣

宣奉勅依請但自今以後宜附貢調太帳等

三代格卷一

卅二

使送之仍須官長齊敬躬奉不得踈畧

齊衡二年五月廿一日

太政官符

應附送稅帳太帳朝集等使諸社不受祈年

月次新嘗等祭幣帛事

右得神祇官解傳件等祭幣帛依祝部不參納

置官庫謹案齊衡二年五月廿日格傳武藏下

總安房常陸若狹丹後播磨安藝紀伊阿波等

神延一

國不受幣帛自今以後宜附貢調太帳等使送之者而貢調使不着此官但稅帳太帳朝集使等為例來者今如格條外國諸社不受幣帛可附太帳使畿內祝部不受幣帛未被慶分望請畿內外國不受幣物同附件三箇使班送但頒幣帛之日不參祝部者浪依格先科被令慎將來若猶不改將從解却謹請官裁者右大臣宣依請

三代格卷一

卅三

貞觀十七年三月廿八日

太政官符

應二月祈年六月十二日次祭國司一人率祢宜祝部等向神祇官受取幣帛物事右可受取幣物如法慎祭之狀去年三月二日下符五畿內七道諸國已畢今聞國司緩急不勤祝部踈畧無慎中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉勅國之

大事莫過祭祀不守符旨怠在主司須畿內并近江紀伊等國選國司掾目若史生品官之中謹厚恭敬者一人充使者率祢宜祝部等向神祇官受取幣帛物即便每社如法慎祭之畢之物之狀差使言上若致關失殊處科法又其見參祝部夾名者前祭一日使者等進官更據祈福不得乖遠自今以後立為恒例

寬平六年十一月十一日

三代格卷一

卅四

太政官符

應令掃清路次雜穢并目以上祗承事

右得神祇官解屏檢案內奉伊勢大神宮九月十一日神嘗祭并二月四日祈年六月十二日次祭及臨時幣帛使等出宮城之日左右京職主典以上率坊令兵士相迎外門送於京極近江伊賀伊勢等國每至彼塚目以上一人率郡司健兒等相迎祇承而今件等國頃年之

間不勞桓承不掃汗穢路頭多有人馬骸骨既見穢惡豈云清慎望請每遣伴等祭使依例令國司一人桓承并掃清穢惡若有致急准關祭事科上後者右大臣宣依請

貞觀四年十二月五日

神延
太政官符

應令山城國司桓承奉伊勢大神宮幣帛使事

三代格卷一

卅五

右得神祇官解傳謹案格條云奉伊勢大神

宮九月十一日神嘗祭并二月四日祈年六月

十二月^{等案}次祭及臨時幣帛使等出宮城之日

左右京職主典以上率坊令兵士相迎外門送

於京極近江伊賀伊勢等國每至彼堺目以上

一人率郡司健兒等相迎桓承者而令出自京

極至近江堺無人桓承不掃汗穢望請令伴國

司桓承境内謹請官裁者大納言正三位兼

神貞

行只^{神貞}藤原朝臣冬緒宣奉勅依請若致關忌罪如貞觀四年十二月五日格

元慶六年九月廿七日

元寶錄卷第二在十月廿七日條

太政官符

應聽奉諸神社幣帛使出入陸奥國關事

菊田郡一前

磐城郡十一前

標葉郡二前

行方郡一前

宇多郡七前

伊具郡一前

三代格卷一

卅六

日理郡二前

宮城郡三前

黑河郡一前

色麻郡三前

志太郡一前

小田郡四前

牡鹿郡一前

右得鹿嶋神宮司解傳祢宜外正六位上中臣部道繼解傳大神苗裔之神在陸奥國古老傳云延曆以往割大神封物充幣帛新奉伴諸神弘仁以來止而不奉因之茲諸神成崇物恠頻

示仍去嘉祥元年辨備幣帛請當國移文向於彼國而稱無舊例不聽通關爰道繼身留關下不得向社所賣幣物被并河頭空以迴來者頃年夏月寒風秋稼不稔部內疫癘連年有聞宮司卜筮件神成崇仍可奉幣帛之狀禱祈已畢望請下知彼國奉件幣帛但其新用太神宮封物謹請 官裁者右大臣宣依請

貞觀八年正月廿日

三代實錄第十二

三代格卷一

廿七

神叙位并託宣事

太政官符

應國內諸神不論有位無位叙正六位上事

右太政官去年十二月廿八日下五畿內七道

諸國符傳右大臣宣奉 勅特有所思天下大

藤良房

小諸神或本預官社或未載公簿有位更增一

階無位新叙六位唯大社并名神雖云無位奉

授位五位下者而今推量六位之中其階有四

至于奉行必應有疑且除未授五位之外不論有位無位共叙正六位上

嘉祥四年正月廿七日

三代實錄第十三

太政官符

應檢察神託宣事

右被大納言正三位藤原朝臣園人宣傳奉

勅恠異之事聖人不語妖言之罪法制非輕而

諸國信民狂言申上寔繁或言及國家或妄陳

三代格卷一

廿八

福禍敗法亂紀莫甚於斯宜仰諸國令加檢察

自今以後若有百姓輒稱託宣者不論男女隨

事糾決但有神宣灼然其驗尤著者國司檢察

定實言上

弘仁三年九月廿六日

後紀第廿二

齊王事

太政官符

一齊內親王楔用度事

右内親王行禊之日依例神郡供給及儲雜物宜停止之仍齊宮寮每夏儲之其供給新稻二百卅束春備正稅運送寮家但夫并馬依承前例神郡行之

一齊宮寮年料乾葛事

右葛依例令輸神郡百姓所進三十斤而百姓等申云調庸雜徭之外輸件乾葛艱辛殊深者宜停輸葛寮差神戶令納其粮食新充

三代格卷一

神九

用平稅

以前被右大臣宣傳奉勅如右者寮依件施行自今以後永為恒例

延曆十一年七月三日

大政官符

藤原朝臣可多子

右權大納言兼左近衛太將從三位藤原朝臣氏宗宣奉勅件可多子定春日并大原野齊

女畢唯其月新具在別式日酒自來年正月始行

貞觀八年十二月廿五日

三代實錄第十三可多子作須惠子事延曆十年十二月廿日條

神宮司神主祢宜事戶座藤原等附出

太政官符

應任諸國神宮司神主事

右太納言從三位神王宣奉勅掃社敬神銷禍致福令聞神宮司等一任終身侮黷不敬崇

三代格卷一

神

外屢臻宜自今以後簡擇彼氏之中潔清廉貞堪神主者補任限以六年相替

延曆十七年正月廿四日

續東國史第十九

大政官符
齊宮主神司
兼入藏宣諸司部

右被右大臣宣傳奉勅件司令外特置未有

所管考校功過無由取決宜自今以後令神祇

官管攝

延曆十九年十一月三日

又式
神

太政官符

加置伊勢太神宮司負事善入加減官員部

元一人 今加一人

右從三位守太納言兼左近衛大將行陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣奉勅宜依件加置永為恒例

貞觀十二年八月十六日三代實錄第十八

神延

太政官符

三代格卷一

冊一

應定伊勢太神宮司大小負并位階事第八定官位部

太宮司一員 右正六位上官

小宮司一員 右正七位上官

以前得神祇官解解檢案內太神宮司元置從六位官一員而去貞觀十二年更加一員令件兩司太少無別職掌有同各稱受領交為爭論甲之所行乙還妨之執論之間政事擁滯望請定大小負并位階遷代之日分附受領一准長

神弘

官任用者正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣冬緒宣奉勅依請

元慶五年八月廿六日三代實錄第卅

太政官符

神主遭衰解任服闋復任事

右檢案內太政官去延曆十九年十二月廿二日下神祇官符併諸國神宮司等並限以六年補替之事先立例訖右大臣宣件神宮司未滿神王

三代格卷一

冊二

限年若有服解不得補替仍令神主并祝等行事服闋之日復任滿限者令右大臣宣奉勅藤原曆

神主服限年一同宮司服闋復任豈可異例自

今以後宜同復任又或社有任神長事乖通例其有官符任神長者宜改為社主

大同二年八月十一日

太政官符

一應任用神主事四箇條內

神貞

右太政官弘仁十二年正月四日下大和國

律上三張弘仁十二年四月之誤

符傳彼國解傳部內名神其社有數或為農
禱歲或為旱祈雨至排災害存有徵應假令
大和天神廣瀨龍田賀茂穴師等大神是也
而頃年之間事非潔齊不祥之徵間々不息
本尋所由黷依神主太政官延曆十七年正
月廿四日下五畿內諸國符傳奉 勅掃社
敬神銷禍致福今神主等一任終身侮黷不

三代格卷一

冊三

敬崇外屢臻且自今以後簡擇彼氏之中潔
清廉貞堪神主者補任限以六年相替秩滿
之代黜之言上者國依符傳選黜言上而或
黜上之外被任他人愚吏商量事背符旨望
請黜上之人一切任用以尋泊酌之信且待
神聽之聲者右大臣宣奉 勅依請
一應傳官人任諸社神主事

右太政官同日下同國符傳彼國解傳有官

神延

之輩若兼任神主全負本職不勞神社神社
傾覆賊此之由望請擇抽無官一任神主專
事祈禱令修理神社者同宣奉 勅依請
一應令國司定神主考事

右太政官同日下同國符傳得彼國解傳祢
宜祝等考者國司勘定而今至于神主不隸
國司因茲任中功過無由檢覈望請件神主
考國司隨狀褒貶以旌善惡者同宣奉 勅

三代格卷一

冊四

依請

以前撰格所起請傳上件事條遵行有便伏望
下知四畿內及七道諸國者中納言無左近衛
大將從三位藤原朝臣基經宣奉 勅依請

貞觀十年六月廿八日

太政官符

應置石清水山八幡宮神主事

坐山城國
久世郡

從八位上紀朝臣御豐

神延

右得護國寺牒稱去貞觀二年故傳燈大法師位行教奉為國家特以懇誠祈請大菩薩奉移此山宮自今以降道俗男女集會祈祝無非無靈驗仍令件御豐充神主供奉祭事望請准宇佐宮充置件職將增神威者右大臣宣奉勅依請

貞觀十八年八月十三日 三代實錄第九

太政官符

三代格卷一

附五

元幹按此間當有任人姓名

應准筑前國本社置從一位勳八等宗像大神社神主事 坐大和國城上郡登美山

右得氏人內藏權助從五位下高階真人忠峯等解狀稱件社坐大和國城上郡登美山依太政官去年三月廿七日符旨預官社訖自從清御原天皇御世至于當今氏人等所奉神寶并園地色數稍多高階真人累代鱗次執當社事而今經世久遠人意懈緩或不勤守掌紛失

神貞

神寶或彼此相讓闕急祭事如是之故屢致重崇仍可准本社置神主狀去年申官而未蒙裁下件仲天性清廉堪為神主望請早被補任令掌神事但侍氏長舉彼補其替相替之限一依格制謹請 官裁者從二位行大納言兼左近衛大將源朝臣多宣奉 勅依請

元慶五年十月十六日 三代實錄第十

太政官符

三代格卷一

附六

應以女為禰宜事

右撰格所起請稱太政官去天長二年十二月廿六日符旨承前之例諸國小社或置祝無祢宜或祢宜祝並置舊例紛謬准據無定加以或國獨置女祝永主其祭左大臣宣旨自今以後祢宜祝並置社者以女為祢宜但先置者今終其身者諸國依格遵來年久而太政官齊衡三年四月二日符旨得神祇官解得檢案內住吉

類史第十九

信反
士之

三代格卷

排七

祝專主祭事。至于祔宜有職。無務伏望除非先
置社之外。新叙三位已上神社。祔宜依天長二
年十二月廿六日。符傳。挹笏以女補任。然則於
公有益於社無損者。中納言兼左近衛大將從
三位藤原朝臣基經宣奉勅依請。

貞觀十年六月廿八日

勅

戸座

神弘

生

阿波國

阿墨部 壬生 中臣部
右男帝御宇之時供奉

備前國

右女帝御宇之時供奉

備中國

海部首生部首
右皇后宮供奉
笠朝臣

以前戶座等給時服新

各人別豫絕一足錦
六也夏人別豫三丈

月新

个别三
斗六井

天平三年六月廿四日

太政官符

應貢棟女事

三代格卷一

冊八

右得俊四位下行左中弁並攝津守小野朝臣
野主等解稱猿女之興國史詳矣其後不絕今
猶見在又猿女齋由在直江國和通村山脈國
小野鄉今小野臣和迹部臣業既非其氏被供
猿女熟搜事緒上件兩氏貧人利口不顧恥辱
地更相害無加替祭也亂神事於先代穢氏族
於後裔積日經年恐成舊實以請令所司嚴加
捉捕斷用非氏然則祭祀祀奉無濫家門得正キツ謹請ア

官裁者搜檢舊記所陳有實右大臣宣奉勅
宜改正之者仍兩氏孫女從傳廢之孫女公氏
之女一人進縫殿寮隨闕即補以為恒例

弘仁四年十月廿七日甲丁開年月且丙丁補以類聚國史第十九

太政官符

應咸筑紫防人十二人使充在京及府卜部

廂丁事

右得太宰府解倭對馬嶋去年四月廿九日解

三代格卷一

卅九

倭檢案內太宰府天安元年五月八日解倭得
對馬嶋解倭筑紫防人百二人之內十二人使便
充在京及府卜部等廂丁其代以當土人永相
補者而得天安元年稅帳使竿師從六位下日
根造勝繼去年十一月廿九日解稱被官宣稱
件廂丁自今以後本島人充之仍返却者嶋宜
承知依舊充行者須依符旨充行而檢案內嶋
去齊衡四年二月廿一日解倭謹檢案內太政

官去承和八年八月十七日符稱得彼府解倭
對馬嶋解倭去延曆年中以東國人配防人後
以筑紫人配之而並傳廢也當土百姓去弘仁

年中廢疫萬滋發戶口減少忽有寇賊何堪防

禦望請准舊例以陸地人為防人者右大臣宣

奉勅准弘仁年中例以筑紫人依件差遣令

緣邊勤乍候者自承和以來陸地防人百二人每

年來島守非常而風波路嶮動致闕怠或漂

沒不來或中途逃亡仍以當土人擬補彼闕而

三代格卷一

五十

被太宰府去嘉祥三年十二月一日符稱太政

官去承和十一年七月十九日符稱得神祇官

解稱卜部等解稱承前之例件廂丁以當島人

以三箇年嗣綱丁差送而太政官去弘仁十四

年三月廿七日下午太宰府符倭彼府解倭對馬

嶋解倭神祇官卜部等廂丁依例差點進上而

頃年疫死倭丁減少仍請處分者府加覆勘所

頃年疫死倭丁減少仍請處分者府加覆勘所

申有實望請件廩丁咸令陸國差送證請官

裁者右大臣宣依請者自厥以後曾無差送如

以件島近居海中往還希人曰茲本鄉親戚未

由訪育望請復舊被給本島者府官覆辭狀所

陳有實謹請官裁者左大臣宣依請者嶋依

荷肯差點行來而或終身不畝或舉家離散一

人被點一烟永絕差送之弊室家稱小若猶差

送恐無遺民今商量以筑紫人分配防人者依

三代格卷一

五十一

兵不足也以當島人差送廩丁者為恤丁者也

夫丁者雖能知未然而防禦之備尚不如兵望

請特被言上咸筑紫防人百二十人之內十二人

便老在京及府丁部廩丁其代以當土人永相

補之然則彼此得所公私無損仍請府裁者自

尔以降件廩丁無有差定望請以陸地人被充

行之仍請府裁者依解狀請官裁者右大臣

宣依請

雜弘

天安三年三月十三日

太政官符

禁出雲國造託神事多娶百姓女子為妾夏

古被右大臣宣稱奉勅令聞承前國造兼帶

神主新任之日即棄嫡妻仍多娶百姓女子号

為神宮采女便娶為妾莫知限極此是妄託神

事遂扇淫風神道益世豈其然乎自今以後不

得更然若娶妾供神事不得已者宜令國司注

三代格卷一

五十二

名密封卜定一女不得多點如遠此制隨事科

處筑前國宗像神主准此

延曆十七年十月十一日 類聚國史第十九

科祓事

太政官符

定准犯科祓事

一大祓新物廿八種 承前惡祓新物准此重

馬一疋 大刀二口 弓二張

矢二具以十隻為一具已上三種並不限新舊

刀子六枚

木綿六斤 麻六斤

庸布六段

釜六口 鹿皮六張

猪皮六張

酒六斗 米六斗

稻六束

鯿六斤 堅魚六斤

雜腊六斤

塩六升 海藻六斤

滑海藻六斤

食薦六枚 薦六領

坏六口

盤六口

柏十五把枚手六枚新

匏四柄

三代格卷一

五十三

楮四枚長各七 席一領

右關急大嘗祭事及同齊月内吊衰問病判署刑致文書源大嘗食安預穢惡之事者宜科大被所輸雜物具如前件官人有犯並解見任

上被新物廿六種

大刀一口 弓一張

矢一具

刀子二枚 木綿三斤

麻三斤

庸布三段

鋏三口

鹿皮三張

酒三斗

米三斗

稻三束

鯿三斤

堅魚三斤

雜腊三斤

塩三升

海藻三斤

滑海藻三斤

食薦三枚

薦三領

坏四口

盤四口

柏十把枚手六枚新

匏二柄

楮三枚長各七

席一領

三代格卷一

五十四

右關急新嘗祭鎮魂祭神嘗祭祈年祭月次

祭神衣祭等事源歐伊勢大神宮祢宜内人及穢禦膳物立新嘗等諸祭齊日御犯吊衰問疾等六色禁忌者宜科上被輸物如右中中被新物廿二種

刀子一枚

木綿一斤

麻一斤

庸布一段

鋏一口

鹿皮一張

酒一斗

米一斗

稻一束

鯿一斤

堅魚一斤

雜腊一斤

塩一升 海藻一斤 滑海藻一升

食薦二枚 薦二領 坏四口

盤四口 匏一柄 柏五把枚手廿枚

楮二枚長各一丈

右關急大忌祭風神祭鎮花祭三枝祭鎮火祭相嘗祭道饗祭平野祭園韓神春日等祭事。毆物忌戶座御火炬。奸物忌女及觸穢惡事。預御膳所并忌火等祭。齋日毆祝祢宜及

三代格卷一

辛丑

預祭事神戶人犯。喪問疾等。六色禁忌者。宜科中祓輸物如右

一下祓新物廿二種

刀子一枚 木綿六兩 麻六兩

庸布一段 鋤一口 鹿皮一張

酒四升 米四升 稻四把

鰯六兩 堅魚六兩 雜腊六兩

塩四合 海藻六兩 滑海藻六兩

食薦一枚 薦一領 坏二口

盤二口 匏一柄 柏五把枚手廿枚

楮二枚長各一丈

右關急諸祭祀事及齋日毆祝祢宜并預祭神戶人犯諸禁忌者宜科下祓輸物如右。以前被右大臣宣稱承前神事有犯科祓賿罪善惡二祓重科一人。修例已繁輸物亦多事傷苛細深損黎元。仍今改張立例如件其毆傷若

三代格卷一

五十六

重者祓淨之外依法科罪。齋外鬪打者依律科決不在祓限。又祝祢宜等与人鬪打及有他犯事。湏科決者先解其任。即決罰神戶百姓有犯失者行齋之外決罪如法。今具奏狀卷聞奉勅依請

延曆廿年五月十四日

太政官符

應科上祓祈年月次新嘗祭不叅五畿内近

弘仲

江等國諸社祝事

類聚第九第十第十二

右撰格所起請傳太政官弘仁八年二月六日
下諸國符傳得神祇官解傳件等祭日諸社祝
部等理須未祭之前會集官底各請幣帛依例
供祭而比年祝部等怠慢不會集再三教導習
常不慎遂使幣帛一百冊二疊在官庫無人預
付謹案太政官去寶龜六年六月十三日符傳
右大臣宣頒幣之日祝部不恭自今以後不得

三代格卷一

五十七

宣下
恐脫
二奉
字抄

更然若不悛者宜早解替者望請不論有位無
位還本永徵將來者右大臣宣奉詢之礼務在
潔誠關急之使實須科處宜委曲所由縣示要
路覺悟愚輩勿令遠失若猶不慎解却還本者
今案格旨依一度急永停其任更涉苛細理乖
適中伏望先科件被令慎將來若不悛草即從
解却者中納言兼左近衛大將從三位藤原朝
臣基經宣奉勅依請

貞觀十年六月廿八日

神郡雜務事

太政官符

應加決罰神郡司事

右得伊勢國解傳調庸租稅依例勘徵而多氣
度會二郡司獨賴神事數致關急望請神界之
外將加決罪者右大臣宣奉勅依請

延曆廿年十月十九日

類聚國史第四

三代格卷一

五十八

太政官符

應多氣度會兩郡雜務預太神宮司更
一應修理神社玖拾參前

多氣郡五十一前

度會郡四十二前

右得國解傳案太政官去延曆廿年十月廿
九日符稱得彼國解稱調庸租稅依例勘徵
而多氣度會二郡司獨賴神事數致關急望

請神界之外將加決罰者右大臣宣奉勅

依請者國司依此符旨百姓有犯界外決罰

自今行來十六箇年又被同官弘仁三年五

月三日符稱被大納言正三位藤原朝臣園

人宣稱奉勅宜仰諸國自今以後永令祢

宜祝等修理神社每有小破隨即修之不得

延怠令致大破國司每年屢加巡檢若祢宜

祝等不勤修理令致破損者並從解却其有

三代格卷一

五十九

位者即追位記白丁者決杖一百國司不存

檢校有致破壞者遷替之日拘其解由者國

司依格決罪猶多闕急而被同官去年十二

月廿一日符稱神祇官解備依十二月御卜

崇當國司多氣度會二神郡出舉正稅符并

行刑罰事依舊例可停止者今依此符既停

決罰神社破損未知所為終任之後安避其

急者

一應修理溝池十九處

多氣郡九處溝五處池四處

度會郡十處溝六處池四處

右同前解解案太政官去延曆十九年九月

十六日符稱被右大臣宣稱奉勅富國安

民事歸良田之開實存溝池如聞諸國

溝池多有不修田疇荒廢職此之由宜改既

往急成將來勤特立條例以懲遠犯者國宜

三代格卷一

六十

承知存情修理自今以後惣計池堰載朝集

帳每年申官交替國司據帳檢實如有闕急

仍停解由者夫修理溝池者必用民徭而國

司不役神郡亦不行刑罰無便之狀一同神

社之條者

一應理驛家壹處在度會郡

倉一字屋四字

右同前解解案太政官去延曆十九年九月

二日符稱被右大臣宣稱如聞諸國驛家例
多破壞國郡急慢曾不修理既乖公平豈合
吏道自今以後國司存心常加修理勿致損
壞交替之日如有損失前人造畢然後放還
事緣勅語不得闕急者而今國司修理無
便之狀亦同溝池之條者

應催殖束漆廿一万八千七百九十六根

多氣郡十四万七千三百六根

三代格卷一

六十一

束十三万六千五百卅三根

漆一万七千七百七十三根

見實一千百卅根
無實九千六百卅三根

度會郡七万一千四百九十根

束五万八千四百五十根

漆一万三千卅根

見實七百七根
無實一万二千三百卅三根

右同前解稱案太政官去大同二年正月廿

日符稱當道觀察使參議從三位行式部卿

藤原朝臣葛野麻呂奏稱束漆之課具載令

條至于採用公私由之然國郡官司不務催
殖謹案天平二年五月六日格稱諸國所進
束漆等帳或國隨舊案但改年紀或虛作增
減与實不同自今以後嚴加提擲依令殖滿
每年巡檢實錄申之如遣使勘會与實不同
者國司必加貶責郡司解却見任者然猶積
習生常狎法無悛望請下知當道交替令付
若不填數者拘留解由以懲不殖者而今國

三代格卷一

六十二

司催殖無便之條只用驛家之條者

一應修理心倉官舍卅一字

多氣郡卅字

心倉二字

官舍廿八字

度會郡土宇

心倉一字

官舍十字

右同前解稱案太政官去弘仁四年九月廿

三日符稱被右大臣宣稱奉勅心倉官舍

各立條例至有闕急拘以解由者而今國司

修造無便之狀亦同束漆之條者

一應決百姓訴訟事

右同前解稱案太政官去大同元年八月十日符稱檢令條云訴人不服欲上訴者請不理狀以次上陳若經三日內不給聽訴人錄不給官司姓名以訴官司准其訴狀即下推不給所由然後斷決至太政官不理者得上表者當今官司不勞給不理狀訴人無錄官司姓名雖含冤越訴而非合勘問窮弊之

三代格卷一

六三

民徒疲往還疑滯之獄遂無取決右大臣宣一依令條給不理狀若習常不給更致冤滯及越訴之輩妄告虛誣並依法科罪者今神郡百姓等或告強盜竊盜或陳強姦和姦除此以外若杖罪多既不科決安可肅清未辨真偽之意何勞不理之狀者

以前得國解稱被太政官去弘仁四年九月廿二日符稱交替之日所有官舍正倉器仗池堰

國分寺神社等破損宜令後任早加修造其新者作差割留前司生典以上公廨充之如無公廨者徵用私物仍待修理訖乃許解由者而今前司之時神郡官舍正倉池堰神社寺之類破損極多既停刑罰民無怖畏縱有料物難可修營仍案神祇官去延曆廿年九月廿一日下大神宮符稱被太政官去五月十四日符稱被右大臣宣稱承前神事有犯科被賁罪其毆傷若

三代格卷一

六四

重者被清之外依法科罪齊外鬪打者依詳科決不在被限又祝祢宜等與人鬪打及有池犯事須科決者先解其任即決罰神戶百姓有犯失者行齋之外決罰如法立為恒例者今依此符官司不預雜務而得決罰國司不得決罰而不預雜務其上件諸物等延曆之前雖有破損交替無煩頃年之後一物未修必拘解由而神祇官空乞舊例停刑罪之占未知新格留解由

不
予
亦
也

延

延

之苦遂令國司威百姓有怠若依小犯必解郡司補却之勞年無空月給盡郡民更用何人望請自今以後二郡雜務永預大神宮司交替分附然則官物有修造之便國司無遷代之煩仍請處分者令神祇官卜食依國解可行被中納言兼左近衛大將從三位春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣奉勅依下

弘仁八年十二月廿五日

類聚國史第四

三代格卷一

六十五

太政官符

應以伊勢國飯野郡寄大神宮事

右郡依去仁和五年三月十三日勅一代之間奉寄彼宮太納言正三位兼行左近衛大

將藤原朝臣時平宣奉勅自今以後永以奉

寄仍須貢物官舍等之類准弘仁八年十二月

廿五日格行之

寬平九年九月十一日

神延

太政官符

應置伊勢大神宮神郡檢非違使事

右依神祇官奏狀稱大神宮司解稱檢非違使

雖在國內非卜食者無入神郡因茲管度會多

氣飯野三箇神郡諸人或犯禁忌或好濫惠訴

訟之輩州不絕司勤神事無違巡察望請神

民之中轉事者充檢非違使一向令糾犯罪之

人但不給俸料准大內人把笏從事者官錄解

三代格卷一

六十六

狀謹請天裁者權大納言正三位兼行右近

衛大將民部卿中宮大夫菅原朝臣宣奉勅

依請

寬平九年十二月廿二日

寬平九年十二月廿二日類聚大補任云寬平九年十一月廿二日被置大神宮司檢非違使

神社公文事

太政官符

應勘造住吉社神財帳三通事

右檢案內彼社神財觸類有數而前來神主等

下公上
有肥

不勤守掌雖有遷替終無勤發前神主津守公
在任之時多失神財非只親自犯取兼為他
所盜仍加勘責解却已畢今被右大臣宣稱宜
仰國宰國司神主相共勤檢子細勘錄每有遷
替必造三通一通進官一通付國一通留社立
為恒例不得遺漏

元慶三年七月廿二日

太政官符

三代格卷一

六十七

應三年一進諸神祝部氏人帳事

右得伊豫國解稱檢案内太政官去貞觀十年
九月十四日下當道諸國符傳貞觀八年四月
十一日符傳去年五月廿五日符傳右大臣宣
諸社祝部停補白丁擇八位以上及六十以上
人堪祭事者令補之自今以後立為恒例但先
是置者令終其身者令諸國所行專忘本符傳
稱氏并神戶悉擬補課丁論之政途事非公平

大納言云三位藤原朝臣氏宗宣雖是氏人并
神戶百姓而先盡八位已上及六十已上地事
者若無其人乃擬年少但至稱氏人無跡實仍
須神主祢宜祝部等氏每社令勘申細由國司
覆檢造帳申送永備計會者國隨符旨六位以
上社祝部氏人帳每年勘造附朝集使進官今
件帳期限無程煩煩勘造尋據於公無益望請
官裁准郡司譜圖一紀一進以備勘會謹請

三代格卷一

六十八

官裁者後二位行大納言兼左近衛大將源朝

臣多宣奉勅宜三年一進諸國准此

元慶五年三月廿六日

三代實錄卷九

類聚三代格卷第一

右以本府士神谷充搜所傳寫伴信友校本及吉田神人唐部親成所得而
同社鈴鹿氏所藏古本並校訛他卷做之

聚三代格卷第三

佛事下

國分寺事

定額寺事

僧綱自位階并僧位階夏

諸國講誦師夏

僧尼禁忌夏

家人事

國分寺事

勅朕以薄德忝承重任未弘政化寤寐多慙古

之明王皆能光業國泰人樂灾除福至何修何

三代格卷三

務能致此道頃者季穀不豐疫癘頻至慙懼交

集唯勞罪己是以廣為蒼生遍求景福故前年

馳驛增飾天下神宮去年普令天下造報迎牟

尼佛尊金像高一丈六尺者各一鋪并寫大般

若經各一部今春已來至于秋稼風雨順序五

穀豐穰此乃微誠感願靈貺如舊載懷載懼无

以安寧案經云若有國土講宣讀誦恭敬供養

皆使消燼憂愁疫癘互令除去所願遂心恒生

歡喜宜令天下諸國者各敬造七重塔一區并

寫金光明寂勝王經妙法蓮華經各十部朕又

別擬寫金字金光明寂勝王經每塔各令置一

部所冀聖法之盛与天地而永流擁護之恩被

幽明而恒滿其造塔之寺並為國華必擇好處

實可長久近人則不欲薰臭所及遠人則不欲

勞衆歸集國司等各宜務存嚴飾勿盡潔清近

三代格卷三

感諸天庶幾臨護布告遐邇令知朕意又有諸

願等條例如左

一每國僧寺尼寺各可施水田一十町

一每國造僧寺必令有廿僧其寺各為金光明

四天王護國之寺尼寺一十尼其寺各為法

華滅罪之寺兩寺相去且受教戒若有闕者

即須補滿其僧尼每月八日必應轉讀寂勝

王經每至月半誦戒羯磨

一諸國置上件寺者每月六齋日公私不得漁
蕒致生國司等恒加檢校

一願天神地祇共相和順恒將福慶永護國家

一願開闢已降先帝尊靈長幸珠林同遊寶刹

一願太上天皇太夫人藤原氏及皇后藤原氏

皇太子已下親王及正二位右大臣橘宿祢

諸兄等同資此福俱向彼岸

一願藤原氏先後太政大臣及皇后先妣從

三代格卷三

三

位橘氏太夫人靈識恒奉先帝而陪遊淨土

長願後代而常衛聖朝乃至自古已來至於

今日身為大臣竭忠奉國者及見在子孫俱

曰此福各繼前範堅守君臣之禮長紹父祖

之名廣洽郡生通談庶品同解憂惱共出塵

籠

一願若惡君邪臣犯破此願者彼人及子孫必

遇灾禍世々長生無佛法處

治弘

天平十三年二月十四日 續紀第十四卷下

太政官符

應畿内七道諸國之師交替事

右得從四位上守治部卿船王等解任今聞國

師赴任之日受得官府解任之時國司無狀於

理商量寔為未然素緇雖別於政仍同自今以

後新舊交替計會資財同知損益然後與國司

共造帳三通一通僧綱一通三綱一通國司望

三代格卷三

四

請頒下諸國仍以申送者奉勅宜苦國師務

遵行

天平勝寶四年閏三月八日

太政官符

應勤造國分寺并禁犯用寺物事

一諸國之寺年中所造成物費用財物依實勘

錄每年附朝集使申上即令聞奏

一今聞國分寺封田等物或國曾不充造寺亦

無供養僧而國郡司等非理用盡或國雖有可用猶不存心唯收藏中空令朽損自今已後不得更然

一國分寺封并佃稻地子等物宜收納寺家臨應充用國司共知聽國師處分施行

一每年奉施三寶物等必依內教充用及封田并諸財物若有國郡司非理犯用者即解見任官依法科罰永不任用

三代格卷三

五

以前被大納言正三位藤原朝臣永手宣傳奉勅如件

天平寶字八年十一月十一日

太政官符

一國分二寺應買賤寺別奴三人婢三人其年滿六十放免從良若有死關者依數買填若別有身才功能可善者不須待滿六十即須申官從良買替繁息之後不可更買其價直

者使用寺家封物若誤買惡奴婢必返本土以三年為留返之期

一國分二寺田者國司佃收以實入寺下將已畢自今以後宜付三綱耕營又聞彼田或遷徙費佃功得實甚少如是惡田宜更改易便以兼田及沒官田隨近添美者永奉三寶之用

三代格卷三

六

一國分尼寺先度之尼十人後度之尼十人合

廿人布施供養因為十法雖先廿尼之中一人死關即依先勅早滿彼數仍國司國師共簡定申官待報府行但後十尼者不顯此例

一國分寺先經造畢塔金堂等或已朽損將致傾落如是等類宜以造寺新額且加修理之以前被右大臣宣傳奉勅如件

天平神護二年八月十八日

弘治

勅諸國、分寺塔及金堂或朽損、由是天平神護二年各仰所司以造寺料稻、隨即令修、而諸國緩急曾未修造、非唯露穢尊像、實亦輕慢朝命、宜早隨壞修理、不得更怠、又國分僧尼供養除米鹽外、曾無優厚、齊會之道、豈令如此、宜醬酢雜菜、優厚供養、其料度者、用寺田稻、永為恒例、

神護景雲元年十一月十二日

三代格卷平

太政官符

應令諸國講師檢校國分二寺事

右檢案肉、太政官去天平十六年十月十七日、勅傳國師親臨檢校、務令早成、用粮造物、予細勘錄、以申綱所、一切諸寺亦復如之者、自茲以降、遵行既久、至于延曆十四年、改國師稱講師、專任講說、不預他事、堂宇頽壞、不存修葺、尊像損汙、無情改錫、熟論其理事、不容然、今被大納

弘治

言正三位藤原朝臣園人宣、傳奉、勅、自今以後、宜與國司共令依件檢校、其申送用度、并勘解、由一依旧例、

弘仁十三年三月廿日 後紀第廿三

太政官符

應五畿内七道諸國轉讀金剛般若經、夏

右被右大臣宣、傳奉為、崇道天皇令永讀件經者、宜使國分僧春秋二仲月別七日存心奉

泰上
泰初
二半

三代格卷三

讀之經、并僧數、附朝集使言上其布施者、三寶調、綿十比衆僧各調布一端、自今以後立為恒例、

延曆廿五年三月十七日 後紀第廿三

太政官符

應於國分尼寺安居之中、令講法花經事

右被權中納言從三位兼行左衛門督陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣、傳奉、勅、國分二

貞治

寺初建自遠一則名為金光明護國寺一則號

為法華滅罪寺寂勝法華二部經各十部如法

書寫粧飾蘊積及苾芻尼每寺有其負是

則先帝救世利物之法遠傳于今不朽者也

而頃年所行僧寺安居之會設此獨講寂勝王經尼

寺滅罪之場無說法花妙典兩寺所說法設藏

用有不同再宜仰諸國令講讀師安居之會先於

僧寺講寂勝仁王經次於尼寺講妙法華經庶

三代格卷三

幾无二无三之勝理開示郡國除灾植福之大

善廣被衆庶

承和六年六月廿八日續後紀第八

太政官符

應令國分并定額寺僧勤六時修行夏

右被右大臣宣稱先帝創造國分二寺分号

護國滅罪之寺擇苾芻尼殊設觀施具足

之法又於定額寺雖建立有主本願異趣而擁

護國家豈為分別此皆救世利物傳于不朽者

也是以一切刹土常轉法輪百千今天俱蒙解

脫善神滿國惡竜出境而頃年講師之舉不允

格意因分之僧還多放逸福田荒而不耕農畝

競而訟利鐘色絕響六時無聽香火止烟三業

弥倍護國滅罪之理不可焉然拔苦与樂之誠

必須勤慎宜重告知講讀師六時修行同仰定

額寺相共檢察若有遵行者錄名言上

三代格卷三

仁壽三年六月廿五日

太政官符

應定國分寺僧死闕替夏

右檢案内去天平十四年五月廿八日下畿内

及七道諸國符傳奉去天平十三年二月十四

日勅處分每國造僧寺必令有女僧者仍取

精進練行操履可稱者度之其雖可稱不得即

度必須數歲之間觀彼志性始終無變乃聽入

治貞

治弘

有

道者而國司等不精試練每有死關妄令得度

今被大納言正三位藤原朝臣是公宣傳奉

勅國分寺僧死關之督宜當土僧之中擢堪為

法師者補之自今以後不得新度先申關狀得

報施行但尼依旧

延曆二年四月廿八日 續紀第七

太政官符

應自京所入諸國分寺僧路次充供養并

三代格卷三

十一

傳馬夏

五歲及律

右太政官今月三日下午七道諸國符傳依太政

官去延曆二年四月廿八日下午七道諸國符擇

擢京寺之僧補入國分關而頃年間緇徒去日

唯授公驗不充食馬今被右大臣宣傳印傳之

設本備遞送宜自今以後僧身及童子一人令

充供養公乘者諸國承知依宣行之其給法者

僧日米二升鹽二升從日米一升五合鹽五撮

立為恒例

弘仁七年五月三日

太政官符

應補國分金光明寺僧關夏

右案去天平十三年二月十四日格傳每國造

僧寺必令有廿僧若有關者即須補滿延曆二

年四月廿八日格傳今國司等不精試練每有

死關妄令得度理不可然宜死關之督擢當土

三代格卷三

十二

僧之中堪為法師者補之先申關狀待報符行

之自今以後不得新度者頃年傳前件格簡京

諸寺僧心願者補彼關所右大臣宣奉勅如

聞僧等或重在本寺或喜從師主至于入國分

寺心願者蓋寡矣因是法會之場僧負不備

先朝之制於茲有闕夫消禍殖福釋教為本弘

道利物必由其人自今以後心願之外宜擇當

國百姓年紀六十已上心行既定始終無變者

度之

和仁十二年十二月廿六日八丈 類聚國史第百八十七

太政官符

應諸國分寺僧廿口之内令得度年廿五
人夏

右得大宰府解備觀音寺講師傳燈大法師位
光豐牒依太政官去弘仁十二年十二月廿
六日符度六十已上之人既以老耄之極始入

三代格卷三

十三

甚深之道勤學修行更無如何至於梵唄散花
用音之支令會集者掩口大咲加以三綱之職
夏多米鹽修理堂塔料濟供養曾無強堪者破
寺之供莫大於斯望請年廿五以上者五人每
寺聽度固擇才行嚴肅偽監死亡之替相統將
度庶幾駐佛日於欲没建法幢於將倒者府加
覆審所陳有實仍請 官裁者中納言兼左近
衛大將從三位行民部卿清原真人夏野宣奉

勅依請自餘諸國亦宜準此

天長五年二月廿八日

太政官符

應納國庫國分二寺僧尼度緣戒牒夏

右得佐渡國解備被治部省去承和十年六月
十四日符備被太政官今月四日符備檢案内
太政官去弘仁四年二月三日下同省符備右
大臣宣奉 勅僧尼有身死并還俗其度緣戒

三代格卷三

十四

牒早令進省即奉勅申官毀之庶令新入
跡法流自澄者而今諸國請補僧尼死闕之
不進度緣是猶所司疎略所致也今被大納言
正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按
察使藤原朝臣良房宣備補國分二寺僧尼之
闕先進度緣然後補之若非此旨科違勅罪者
今國司等加覆審僧尼度緣或隨身遊行他國
或挾奸偽紛失因此死亡之後無由披求望請

準國司任符統收國庫其身死補替之日隨即
將進官謹請 官裁者同宣依請諸國亦宜準
此

承和十一年十一月十五日

定額寺夏

乾政官符

諸本云天平宝字元年改乾政官為太政官云云而三年六月可勘之

修治諸寺破壞夏

右山階寺玄基法師奏狀偏藏淨國家無過伽

三代格卷三

十五

藍撥却災難宣若佛康今見國此諸寺往
落曾同修治者伏請仰國司檀越等每年漸治
者奉 勅依奏

天平宝字三年六月廿二日

太政官符

可勘定額寺資財并任三綱夏

右被右大臣宣傳奉 勅諸國定額寺資財者

藤純理

國司与三綱檀越共檢校處分其任三綱者依

治弘

治弘

檀越衆僧請國司覆勘充任若寺家破壞及有
餘犯失者推問所舉衆僧檀越等依法料罪自
今以後永為恒例

延曆廿五年三月廿五日

太政官符

應傳定額寺資財帳進官夏

右被太納言從三位神王宣傳奉 勅準例五

畿内七道諸國定額諸寺資財等帳附朝集使

三代格卷三

五

每年進官自今以後宜傳進進祖進替國司相
統檢校其國分二寺一依先例

延曆十七年正月廿日

太政官符

禁斷王臣諸家稱為定額寺檀越夏

右被右大臣宣傳諸寺檀越名載流記已入定

神王

額宣合輒改如聞五畿内及近江丹波等國愚

闇之徒假託權勢以寺私付王臣即詐稱為檀

治弘

越遂乃有犯之僧縱任三經寺由之類恣情賣買賣買更多奸盜深乖道理宜嚴禁斷依舊改正自今以後不得更然若猶不悛錄名言上事緣勅語不得踈略スルヲ

延曆廿四年正月三日 後紀第十二

太政官謹奏

右今聞國寺家堂塔諸寺雖成僧尼莫任礼佛無聞檀越子孫惣攝田畝專養妻子不供衆僧曰作

三代格卷三

十七

治弘

訴訟誼擾國郡自今以後嚴加禁斷其所有財物田園並須國師衆僧及國司檀越等相對檢校分明案記充用之日共判出付不聽依舊檀越專制謹以申聞謹奏奉勅依奏スルヘ

靈龜二年五月十七日 後紀第七

太政官符

應禁制畿内諸寺除檀越之外王臣家預寺事

治弘

右被右大臣宣稱奉勅夫功德之興因心各別何則或甲構堂宇乙寧得為已是以小波大少諸寺每有檀越田畝資財隨分施捨累世相承崇敬至今如聞王臣勢家不顧本願而追放檀越改督網維田園任意或賣或耕各稱己寺還致損穢宜早下知若有斯類者五位已上錄名奏聞六位已下禁身進上又縱雖有愚暗檀越尽舉寺家知意与他而更既乖道不得彼此相與付預其檀越子孫惣攝田畝專養妻子不供衆僧先禁制訖諸蘭氏中情存知道者充之凡此庶更勿致踈略

三代格卷三

十八

大同元年八月廿二日 後紀第十四

太政官符

應禁斷七道諸國諸寺檀越等佃寺田地并費用雜物更

右被右大臣宣稱奉勅如聞檀越等種佃寺

藤内磨

田不納租米或費灯分稻不燃夜灯或賃用錢物經年不還或駁使牛馬兼役家人如此之流觸類繁多加以寺山樹木任意斫燃愛憎自由改補三綱有一於此豈謂檀越從今而後始若有犯者科違勅罪國司三綱衆僧知而容隱亦与同罪

大同元年八月廿七日 後紀第十四

太政官符

三代格卷三

九

應令常住寺十禪師共檢校寺家雜務并糾正監行更

右彼寺十禪師傳灯太法師位願修等表備件寺迫近皇城男女多盤仍去天長年中特簡諸大寺僧始置十禪師尋其本意將警護國家住持伽藍而願年別當三綱主徒混雜各營房舍必無願堂塔破損盤行還汚十師望請自今以後永傳別當十師俱理又其綱維者同共推擇

言上任用者大納言正三位兼行右近衛大將民部卿藤原朝臣良房宣奉勅依請置寺家之事一委十師更相檢察禁督監行永為將律之場使務護國之營

承和十四年閏三月八日

太政官符

應令諸寺三綱檀越禁止秩滿別當恣犯用寺家財物事

三代格卷三

廿

右大臣宣凡寺家流例自在三綱檀越相共行其雜務此外更置別當者尤是為令莊嚴伽藍而赴舉之日巧稱清廉被補之後治迹希聞

只犯用資財破損堂塔伽藍為墟莫不曰斯尋其意况寔由任秩不立定限遷替無責解由也曰茲秩以四年為限任終可責解由之更已存式文然則諸寺別當等須守制旨能治寺家新司到日乃收解由而今有聞新司未到之前競

治貞

治延

治延

治延

犯件物多利己私專營眼前之為益不顧後日之取煩若早不加禁遏恐寺家弥致類損宜早仰下莫令為然其新司未到之間三綱檀越相共勤加檢察若或三綱檀越等不勤檢校令失財物及已同彼有致遠犯者殊處重科曾不寬宥

貞觀十三年九月七日

太政官符

二代格卷三

應師資相傳令領知寺中雜務城本夏

右得圓成寺牒稱去寬平元年七月廿五日下

治部省符稱彼寺別當權律師法橋上人位益

信申狀稱此寺不為僧綱講讀所攝門徒之中

年齒為長大慈悲平等護法勝者以之為有者旨有者臣

為平預令勾當雜務謹請恩裁者左大臣宣奉

勅依請者今檢案內件寺元是故右大臣贈正

二位藤原朝臣氏宗終焉之地故尚侍贈正一

治貞

位藤原朝臣繼子發願建斯仁祠太上法皇御宇之間依尚侍付屬令加修造一同御願彼時亦無大臣之後長大歸道故以寺家委付益信方今太上法皇興隆仰藍太少之夏惣奉

處分大臣之孫僧通通本真修學相無見在寺中然則故僧正益信門徒不可獨領伏望寺中雜夏

專隨處分若及後代以御弟子并僧正門徒大

臣苗裔之中年鵠是高衆望在躬者彼此相定

通令領知又其別當以下之職停止申官隨闕

直補自餘之夏惣如前符謹請處分者左大臣

宣奉勅依請

二代格卷三

其

延喜六年九月十九日

太政官符

應割神封仕丁充八幡彌勒寺夏

右別當觀音寺講師傳灯大法師位光豐三箇條其二也祢勒

寺講師傳灯大法師位光惠等牒稱件寺元來不

寺講師傳灯大法師位光惠等牒稱件寺元來不

有駢仕荆棘滿庭無人掃除況復風雷猛烈誰以防護今有神封仕丁廿四人望請割彼六人永充駢使以前左近衛大將從三位兼守大納言行民部卿清原真人夏野宣奉勅錄請

天長七年七月十一日

太政官符

應令常住肥前國松浦郡弥勒知寺寺知佛ノイ議僧五人事

三代格卷三

中

右得太宰府解偏觀音寺講師傳灯大法師位光豐牒偏依太政官去天平十一年十月廿二日騰勅存件寺始置僧廿口施入水田廿町自介以來年代遙遠緇徒死尽田寺空存修行跡絕望請置度者五人令修治彼寺即鎮國家魚救遊靈者府依牒狀謹請官裁者右大臣宣宜選心行無變精進不倦堪任持佛法鎮護國家之僧以令常住

治貞

承和二年八月十五日

太政官符

應修理鹿嶋神宮寺事

右得常陸國解偏講師傳灯大法師位安原藤偏檢案内去天平勝宝年中始建件寺承和四年預定額寺須依格國司講師相共檢校而今此寺雖預定額無有田園并修理新因茲三綱檀越等不堪修造破損物者國司熟檢舊記件

三代格卷三

中

寺元官司從五位下中臣鹿嶋連大原太領中臣連千德等与修行僧滿願所建立也今所有祢宜祝等是太宗之後也累代所任官司是同氏也望請官裁令神宮司并件氏人等永修理檢校謹請官裁者右大臣宣依請但令國司且加檢校若氏人等無力修理者以三寶布施充用其新事須随損即加修理其所修用物數附朝集使言上

天安二年六月十六日

太政官符

諸國定額寺灯分稻可使預講師三綱夏

右被右大臣宣傳奉勅國內庶務觸事繁多

宜其灯分新稻傳預國司便令講師三綱依件

出舉省寮依例勘之僧綱亦加檢校立為恒例

不得漏失

大同三年七月四日

三代格卷三

太政官符

應令四年一進諸國定額寺資財帳夏

右撰格所起請傳太政官去天長二年五月廿

五日符傳勘解由使起請傳太政官延曆十七

年正月廿日格傳五畿內七道定額寺資財等

帳附朝集使每年進官自今以後宜傳進之但

遷替國司相統檢校者自今以降不進件帳今

諸國言上不與解由狀多載部內定額寺資財

堂舍無實破損等夫有司勘夏文書為本無其

帳何并真偽望請六年一申以擬勘據者右大

臣宣奉勅依請者凡六年一申為期遷替而

今祇歷之期改定四年資財之帳猶指六年去

任後申不便勘據伏望四年一申以適勘會者

中納言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經

宣奉勅依請

貞觀十年六月廿八日 三代實錄第十五

三代格卷三

僧綱負位階并僧位階事

勅大僧都良弁少僧都慈訓律師法進等奏傳

良弁等聞法界混一凡聖之差未著斷證以降

行位之科始異三賢十地所以開化衆生前佛

後佛由之勸勉三乘良知非酬勲庸无用證真

之識不差行位詎勸流宕之徒今者像教將季

緇侶稍怠若无褒貶何顯善惡望請制四位十

三階以拔三學六宗就其十三階中三色師位

并大法師位準勅授位記式自外之階準奏授位記式然則戒定惠行非獨昔時經論律旨方盛當今庶息永息盤位之機以興敦善之隆良并等學非涉獵業惟淺近輒以管見略事採擇叙位節目具列別紙勅省來表知具示其旨勸誠緇徒實應利益分置四級恐致煩勞故其修行位誦持位唯用一色不為數名若有誦經忘却戒行過失者得衆人知然後改正但師位

三代格卷五

廿七

等級持し獨如奏狀且告僧綱知朕意焉

天平寶字四年七月廿三日 續紀第廿三

治弘
太政官符

定僧綱位階事

右被藤良相右大臣宣稱奉勅國典所載僧位之制

本有三階滿位法師位大法師位是也僧綱凡僧同授此階位号不分高卑無別論之物意實不可然仍三階之外更制法橋上人位法眼和

治弘

上位法印大和尚位等三階以為律師已上之位且法印大和尚位為僧正階法眼和上位為僧都階法橋上人位為律師階

貞觀六年二月十六日 三代實錄卷八

太政官符

定威儀法師負事

右得治部省解稱威儀師其員不定比年之間猶有增減望請準法行大僧正之律時定補六只若

三代格卷五

其闕隨即申官者官判依請永為恒例

延曆五年三月六日

太政官符

定律師以上員數并從儀師數更

僧正一人 大僧都一人 少僧都一人

律師四人 從儀師八人

右造式所起請僧伏奉僧尼人云任僧綱律師以上必須用德行能化徒衆道俗欽仰綱維法務者

治貞

所舉徒衆皆連署牒官一任以後不得輒換者
今案此令簡任僧綱直稱律師以上不顯其号
及負仍須具載式條以令補闕者大納言正三
位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝
臣冬嗣宣奉勅宜依件定永為恒例但威儀
師負者依去延曆五年三月六日符

弘仁十年十月廿五日

太政官符

三代格卷三

廿九

傳灯大法師位正儀

年六十
一十一

藥師寺

傳灯大法師位延壽

年六十
一十一

興福寺

右被右大臣宣傳奉

藤良相

勅件等僧宜定太威儀

師

天安三年四月廿七日

丙本云本月十五日改元貞觀而今曰
廿七日未勘

太政官符

應供養禪師十人

童子廿人

每師二人

師日米二升

童子日米一升五合

額應

右奉勅古人云人能弘道非道弘人宜分省
營稻供禪師割正稅稻給童子以息乞食之營
其畿内外國者用正稅所在國司隨師情願若
米若額領送住處必使清潔
寶龜三年三月廿一日

太政官符

定僧綱并十五人

大寺三綱法華寺鎮等從
僧并可充童子食夏

三代格卷三

廿

大少僧都各從僧四人沙弥三人童子六人

律師各從僧三人沙弥二人童子四人

威儀師各從僧一人沙弥一人童子二人

從儀師各從沙弥一人童子二人

大安元興弘仁藥師四天王興福法隆崇福

東大寺西大寺三綱并法華寺鎮二人各沙

弥一人童子二人

以前被太政官今月六日符傳大納言從三位

神王宣旨奉勅件等綱衆置定從僧數兼給

童子食者省宜承知依件為定童子各米一升

二合鹽五勺充之自今以後永為恒例

延曆十七年六月十四日

太政官符

應擇老僧充童子新米事

右被右大臣宣旨奉勅宜擇十五大寺僧年

八十已上者日別充童子一人新米一升傳但

三代格卷三

廿一

停止待後符

仁壽三年二月廿日

諸國講讀師更

太政官符

應簡任諸國講讀師及相替六年為限更

右得綱藤保業太政官去延曆十四年八月十

三日符傳右大臣宣奉勅如聞諸國師任

限六年兼預他更煩以解由自今以後宜改國

師曰講師每國置一人舉才堪講說為衆推讓

者申官奏聞然後聽補一任之後不得輒替但

三代格卷三

廿二

讀師者國分寺僧依次請之者今檢諸講師或

身期老死或情無知足則自供講席何堪誨導

遂使汚法隨罪背師矣資加以當國司等檢掌

伽藍諸寺綱維超走府廳此非道俗異形象鳥

殊性之意伏望簡大智而任講師舉少識而補

讀師限以六年為秩滿期其部內寺寄附件師

然則用人之榮永存媚俗之辱自息謹請處分

者右大臣宣奉勅所以撰用講師特居外任

神王

者本欲人能弘道教以利民也而今名應簡擢實非委寄然則昧進之可責豈非採擢之乖方宜準所請折中處分其講師年限一依來請但淺學之輩未練戒律年少之人時聞違犯宜簡年卅五以上心行已定始終不易者補之簡才用讓申官經奏等一同前格若有自事衡賣妄求信舉者永從擯出以懲後輩如僧綱受囑接情論之其講師者依舊用之又部內諸寺者講

三代格卷三

卅三

師國司相共檢校不得獨恣

延曆廿四年十二月廿五日 後紀第十三

太政官符

應定試業之階補任諸國講讀師夏

講師五階 試業後維摩 義夏講供講

讀師三階 試業後維摩 摩立義

右案太政官去延曆廿四年十二月廿四日下治部省符備僧綱牒備太政官延曆十四年八

月十二日符備右大臣宣奉勅改國師曰講師每國置一人舉才堪講說為衆推讓者申官奏聞然後聽補但讀師國分寺僧依次以請之者伏望簡大智而任講師舉少識而補讀師謹請處分者右大臣宣奉勅講師依請但淺學之輩未練戒律年少之人時聞違犯宜簡年卅五已上心行已定始終不易者補之其講師者依舊用之者又案太政官去天長二年五月二

三代格卷三

卅四

日下同省符備僧綱牒備檢案內諸國講師夏中死去無人修法檢知諸事隨且為急伏請擇有能者補任讀師者右大臣宣奉勅依請者今被右大臣宣備補講讀師具存前格而選舉之日未必其人因去承和四年十一月廿六日仰僧綱必令盡署加以頃年之例別立五階三階令補講讀師是協格意量才委任也而今有司稱格無試業之階任意恣舉少智之輩已乖

制音多フ、少シ、濫吹リ。凡厥諸國置講讀師者，將令邦家照於戒珠之光，天下護於禪行之化。若非智非行如此道，何且自今以後緣件業階，俾申補任。

齊衡二年八月廿三日

治貞
太政官符

應以滿位已上僧擬補諸國講讀師事

右被右大臣宣稱自今以後依件行之

藤原良相

三代格卷三

冊五

貞觀七年四月十五日

治貞
太政官符

應功德安居講為五階中夏講業，夏

右得法隆寺牒，備檢案內有功德安居官安居

二色講師功德安居講者，上宮太子之本願官

安居講者，勝寶感神天皇之本願也。昔日僧

等件二色講，豆當其次則為得業而依登義，真

人藤津解，天長二年以降延曆寺僧為官安居

講師，亦來功德一講依次充之，即為夏講業而

太政官去齊衡二年八月廿二日，符備補任諸

國講讀者，以五階僧為講師，以三階僧為讀師

者，有司案此格云，所謂夏講已請延曆寺僧專

寺僧等所請功德講是格外之色，不可為夏講

業，今諸太寺惣有其色，成五階業，至法隆寺既

無其色，何以立業，望請件功德講為夏講業，下

知所司以為永例，然則先聖本願證於万代

三代格卷三

冊六

傳灯，未學紹於億劫，謹請官裁者，右大臣宣

奉勅依請

貞觀二年十月廿五日 三代實錄第四

治貞
太政官符

應令天台宗傳於諸國事

右傳灯太法師位義真表，備檢案內太政官去

延曆廿五年正月廿二日，下治部省符，備攘灾

殖福，佛教尤勝，誘善利生，无如斯道，夫衆生之

類聚國史第百七十九

機或利或鈍故如來之說有頓有漸開門雖異
遂期菩提凡諸宗業廢一不可花嚴天台等七
宗年分度者受戒之後各試其業依次差任立
儀複講及國講師者今天台一門已立圓宗大
衆三學流轉未周望請別當簡堪為講讀師者
各一人每年申官補之令演傳件宗其一任之
內每年安居法服施新依先大法師取證所奏
年分之式便即收納當國官舍國郡官司相共

三代格卷三

附七

檢校將用國內修池溝耕荒廢造船橋殖樹木
蔣麻紵之新然則皇風速振慧日再明宣揚
像教弘闡妙法作菩提之由漸為彼岸之良田
謹請官裁者權中納言從三位兼行左兵衛
督藤原朝臣良房宣奉勅依請

承和二年十月十五日

太政官符

應真言宗僧每年任諸國講讀師事

治貞

右被權中納言從三位兼行左兵衛督藤原朝
臣良房宣奉勅真言法教雖始行京城而
未遍邊境被撰彼宗僧堪講讀及修法者任諸
國講讀師依法薰修但其僧不限年臘選堪能者
承和四年八月五日類聚國史第百十九但本文不見

太政官符

應補任大隅薩摩壹岐等國嶋講師夏

右得太宰府解備件二國一嶋司等解備建國

三代格卷三

附八

府裁

任職大小是同除禍祈福彼此一揆如今
皆有斯職修正月安居等法而此國嶋既无講
讀之職還失鎮護之助加以國分二寺雜物觸
類夥多既无綱維令誰主掌望請準諸國例置
講讀師仍請裁者府司商量所陳有理望請準
據管内諸國博士醫師之例府司於觀音寺与
彼講師共簡試部内僧精進練行智德有聞堪
任講讀始終无變者將補任之謹請官裁者

治貞

大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥
出羽按察使藤原朝臣良房宣奉 勅講師依
請讀師莫置但安居齋會之日依延曆廿五年
三月十七日格以國分寺僧次第請用

承和十一年四月十日 續後紀第十四

治貞
太政官符

應置對馬嶋講師夏

右得大宰府解傳嶋司解傳依取部省去十月

三代格卷三

佛九

十六日符停止大隅薩摩對馬壹岐多樞等國
嶋講師自尔以降百餘歲徒有嶋分寺曾无修
善根空聞六時之鍾聲希見一乘之說法方今
大隅薩摩壹岐等國嶋依舊各置講師始勤薰
修望請此嶋同亦置講師令修御願其供養新
以國官新不仕人糧内因準品官每月充叔二
斛五斗但法服布施新準壹岐島以陸地物被
施免者府依解狀謹請 官裁者右大臣宣奉
藤良房

勅依請但依承和十一年四月十日格以彼府
管内之僧選補

齊衡二年十一月九日

治貞
太政官符

應置下野國茶師寺講師夏

右得彼國解傳檢案内件寺 天武天皇所建
立也坂東十國得度者盛萃此寺受戒今再建
立之由与大宰觀音寺一揆也而只有別當无

三代格卷三

佛

講師令國講師勿當雜夏求諸故實求觀
由望請準彼觀音寺簡擇戒壇十師之中智行
具足為衆所推者充任件職便為授戒之阿闍
梨謹請 官裁者右大臣宣奉 勅講師依請
藤良房
任之其秩限并布施供養準國講師用寺家物
但讀師臨夏次第充用彼寺僧中智行兼備者
別當職早從停止

嘉祥元年十一月三日 續後紀第十八

治延

太政官符

應補安房國講師傳灯法師位增允

年五十三
萬廿九

真言宗東大寺

右得僧綱牒傳謹檢案內彼國定國分寺已置
十僧至一修御願部內僧以為講師其施供立
用官帳明白也凡擬補諸國講師此僧綱之
最皆據行格式而今件國奉立其例如以外國
浮宕僧者闕修學之勤近或行之操有何者

三代格卷五

十一

治延

太政官符

得預講讀今此增允修學匪懈智行兼備堪為
國師望請始以件僧任彼國講師令勤修御願
其秩滿後準諸國例簡定補任謹請 官裁者
右大臣宣奉 勅依請

源多
仁和二年六月廿二日
大寺

應置十一箇國讀師事

山城國

攝津國

伊賀國

參河國

伊豆國

若狹國

加賀國

能登國

越中國

丹後國

淡路國

右得僧綱牒傳謹案齊衡二年八月廿三日格
併項年之例立五階三階令補講讀師是協格
意量才委任凡厥諸國置講讀師者將令邦家
照於戒珠之光天下護於禪定之他非智非行
如此道何宜自今以後緣件階業俾申補任者

三代格卷三

十一

而今至件等國只補講師不任讀師每修御願
以國分寺僧為之讀師件僧等既無階業安有
智行又立用施供不異正職加以七大寺外加
來立義得業者其數不少階業之人八宗是多
補任之國七道數少或年及七十僅任讀師或
等至八十被補講師遂衰老之身亡於中路者
年之暇暗於說經望被補任件等國讀師以修
御願然則講讀之任自協格制修學之輩莫愁

身老謹請左官裁者源光右大臣宣奉勅除和泉志摩飛驒隱岐等國之外依請

延喜三年六月廿日

太政官符

應天台真言兩宗定次擬補諸國講讀師夏右從二位行大納言善左近衛大將源朝臣多宣奉勅雖天台真言各号有異而冥助潛衛勳驗惟同如聞件兩宗僧等至擬補諸國講讀師

三代格卷三

冊三

各爭宗業已致謚諱論之彼道豈謂平昔異類次第相承彼此遞補絕其競情勿令違越縱雖國有甲乙人有優劣然猶初之講讀以天台共補後之講讀以真言同任自今以後如此代補永為常事

元慶五年九月十六日

太政官符

應元慶寺度者經階業并補任年中所闕講

讀師中一人事

右權僧正法印大和尚位遍照奏狀備伏檢案內依太政官去元慶元年十二月九日膝旨胎藏金剛頂止觀業學生等試度受戒其來尚矣凡授業選人是興法利邦之由也故諸寺皆令經階業以備器用望請此寺年分僧等複試夏講於當寺令行之立義一階於延曆寺六月法花會令行之階業方畢準諸國宗例即叙滿位

三代格卷三

冊四

既有出身之始豈无擢用之終縱割諸寺之分頗有人法之煩今案舉用之閑地唯有年闕之講讀然檢太政官去元慶六年六月三日符備年中所闕講讀師者將令僧經因次薦舉補任者今案夏意年闕不定若无闕之時雖一年空過而多闕之年應諸綱頻舉細想朝恩猶有餘慶至割一人更有何愁仍須前件年中所闕之內或講師或讀師取初闕者每年隨割一人

治延

以此寺階業僧依次申官補任然則不減僧綱
恒例之簡定永建當寺授業之始終佛日再中
扶衛寶祚聖化遠傳彌鎮國家謹請恩
裁者正三位行中納言兼民部卿陸奥出羽按
察使在原朝臣行平宣奉勅依請

仁和元年三月廿一日 三代實錄卷七

太政官符

應以元慶寺有勞三綱并久住僧等預階業

三代格卷三

批五

補年闕講讀師事

右得權僧正法印大和尚位遍照牒偁依太政
官今年三月廿一日符旨應令此寺年分僧經
階業補任年中所闕講讀師既畢更須依官符
以舉申之而業齊衡二年八月廿三日格偁太
政官去延曆廿四年十二月廿五日符偁右太
臣宣奉勅簡年卅五以上心行已定始終不
易者補講讀師者如今當寺年分僧等年膺淺

治延

少未合格意爰件僧等或任用三綱日夕奔波
或久往加藍傳灯無倦望請以件等僧令經階
業一如去三月廿一日試年分之符縱雖年膺

已滿而未受菩薩大戒者須先令受天台大乘

戒而後經階業但不遷本寺又年分僧等待年

膺滿相繼舉用夫諸宗僧等受戒之後配入七

大寺兼學三業教此寺年分僧獨未有本寺兼

隨其意樂今延曆寺及七大寺以兼學諸宗謹

請處分者右大臣宣依請

三代格卷三

批六

請處分者右大臣宣依請

仁和元年五月廿三日 三代實錄卷七

太政官符

應諸國講讀師階業內通用最勝立義得第

者事

右得治部省解偁謹檢天長七年九月十四日

格偁中納言從三位行中務卿直世王奏狀偁

藥師寺是淨御原天皇之所建立封物田地

觀施有數僧供雜費觸用有剩而學徒稍多說
法猶少伏請每年設取勝王經講會護國隆法
招彼耆宿立義弘道庶扇彼覺風奉酬先靈
飛此慈雲將延聖壽者左近衛大將從三位
兼守大納言行民部卿清原真人夏野宣奉
勅依請夫立義者議其優劣便為諸國講師之
試者仍頃年取勝維摩兩會立義者通用為五
階之內行來已久而舊衡平年八月廿三日格

三代格卷三

七

偶試業後維摩立義夏講供講以此五階為講
師之階試業後維摩立義以此三階為讀師之
階者爰或有司論云取勝立義者雖載天長格
階業之通用無在齊衡格比年之例夏頗違格
者因茲件立義者愁吟不斷望請準舊通用令
得並進謹請官裁者右大臣宣奉勅依請

元慶七年六月二日

源多

太政官符

應依階業次第簡定諸國講讀師夏

右延曆廿四年十二月廿五日齊衡二年八月
廿三日格偶五階者為講師三階者補讀師者
格旨所指不敢乖違而頃年雖果階業者有其
先後而簡定擬補不依次弟或停甲乙薦舉丙
丁或抑耆老推較年少才不超偏名無叶實昇
降任意愛憎專私如此之漸弥致人愁僧綱等
寄言本寺不忍糾察怨結之至動訴公庭論之

三代格卷三

八

政途尤是違濫中納言兼右近衛太將從二位
行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉勅自今以
後重仰本寺不亂階業之次簡定擬補其絕望
固辭觸夏越次者補任之下具令注奉賜并辭
退抑留之由若僧綱知情不糾殊加科責

寬平七年七月十一日

太政官符

應充八幡祓勒寺講讀師法服布施夏

三箇條
初文也

貞治

右別當觀音寺講讀師傳灯大法師位光豐弥勒寺講師傳灯大法師位光慧牒傳件寺元無置講讀師依太政官去年二月一日五月十日兩度符始被補任望請正月并安居等法服布施準諸國例始從當年以大神封物被充行者以前事依如件光左近衛大將從三位兼守大納言行藤那卿清原真人夏野宣奉勅依請

天保七年七月十一日

三代格卷三

太政官符

應依實放生事 二條之初條也

右權僧正法印大和尚位遍照奏狀傳謹案奏政官去天平實字三年六月廿三日符傳得唐曇靜法師奏狀傳夫蠢々昆蚊誰無畏死振翮走咸有愛身故敎生招短命之報救死保長年之福伏請遍勅諸國立放生池嚴加禁斷不許捕漁者奉勅依請者自尔而降每國置

放生由以其獲稻充贖死之資而今聞諸國臨放生之時兩三日下符諸郡司百姓等聚不要之蟲介候示國吏之臨視比及數日死者過半夫放生者所以活欲死之命續當絕之生也今如所聞名稱放生實似殺生伏望自今以後使講讀師若部內淨行僧臨漁釣之江海尋田獵之山林贖懸魚於網罟之中救窮獸於弓矢之下但其新物者歲始令件等僧一向領之即年

三代格卷三

年

終具注形贖之色附帳言上

以前條實如件右大臣宣奉勅依請 二條之一

元慶六年六月三日 三代實錄第廿二

僧尼禁忌事

詔釋典之道教在甚深轉經唱礼先傳恒規理事合衆遵承不須輒改比者或僧尼自出方法妄作別音遂使後生之徒積習成俗不肯要正恐濫法門從是始乎宜依漢沙門道榮學問僧勝曉

治弘

等轉經唱禮餘音並傳

養老四年十二月廿五日 雜記第八

太政官符

僧尼悔過用音夏

右奉今月廿六日 勅仰修善之道攝心為先
精進之行正念為本比年之間僧尼穢座妄發
哀音鵠送高叫非但厭俗中之耳抑亦乖真隆
之趣如不改正何肅法門宜仰有司遏彼濫唱

三代格卷三

五十一

延曆二年十一月六日

太政官謹奏

垂化設教資章程以方通道俗訓人違尋典而
即防比年在京僧尼不練戒律淺識輕智巧說
罪福之因果門底墨頭訟誘都裏之衆庶內黷
聖教外虧皇猷遂令人之妻女動有辜故自剃
須髮輒離室家無懲綱紀不顧親夫或於路衢
負經捧鉢或於坊邑害身燒指聚宿為常妖訛

成群初似循道終為奸亂永言其弊特須禁制

望請京城及諸國分遣判官一人監當其事

嚴加捉搦若有此色所由官司即解見任其僧

尼一同詐稱聖道妖惑百姓依科罪其犯者即

決百杖勒還鄉族主人隣保及坊令里長並決

杖八十不得官當蔭贖罪狀如前伏聽 勅裁

謹以申聞謹奏奉 勅依奏

養老六年七月十日 雜記第九

三代格卷三

五十二

乾政官符

禁斷私度僧事

右元興寺教玄法師奏狀稱竊惟私度僧者深
乖佛法更作亡命伏請須天下勿住國內彼此
共檢勒逐本邑者奉 勅依奏

天平寶字三年六月廿二日

太政官符

禁斷僧尼入里舍夏

治弘

治弘

治弘

右奉勅出家之人本夏行道今見衆僧多非法旨或私定擅越出入閭巷或誣稱佛驗有也誣誤愚民非唯比丘之不慎教律抑是所司之不勤捉擲不加嚴禁何整緇徒自今以後如有此類擯出外國安置有供養定額寺

延曆四年五月廿五日 續紀第八

太政官符

禁斷諸尼競入法華寺夏

三代格卷三

五

治弘

右被太納言正三位紀朝臣古佐美宣稱奉勅今聞諸尼競入件寺自今以後一切禁斷非勅處分不得輒入

延曆十六年二月三日

太政官符

應教正僧徒事

右被太納言正三位神玉宣稱奉勅沙門之行護持戒律苟乖斯道豈曰佛子而今不崇勝

治弘

業或事生產周旋閭里無異編戶凡庶以之輕慢聖教由其陵替非只黷亂真諦同齊固亦違犯國典自今以後如此之輩不得住寺以充供養凡厥齋會勿闢法筵三綱知而不糾者與同罪自餘之禁一依令條若有改過修行者特聽還住使夫住法之侶務篤精進之行狀道之徒更起慚愧之意所司承知立為恒例

延曆十七年四月十五日 類聚國史第百八十七

三代格卷三

五

太政官符

應僧尼犯依令條勘夏

右被太政官去六月廿三日符傳檢案內太政

類聚國史第百八十六

官大同元年十月五日下午彼省符傳奉勅內

典之門持戒為首苟有犯破誰弘厥道然則道之盛衰良由其人保護國家莫不率斯故緇徒之禁具載科條凡在非違準法應勘今得少僧都忠芬狀傳僧尼行業咸不如法即律教中已

設明制禁斷之事請準教旨夫緇素異形內外殊趣宜依所請仕令遵行但敎人奸盜此是不輕隨犯還信一如外法者今右大臣宣奉勅如聞頃者僧尼多犯法禁所司專任律教不加推勘朝憲稍絕犯犯為弊良深宜自今以後僧尼犯罪不論輕重一依僧尼令勘

弘仁三年七月十日 後紀第二

太政官荷

三代格卷三

五十五

應許晝日男入尼寺女入僧寺夏

右太政官去五月廿八日下左右京五畿內七

後紀第二

道諸國府備太政官去弘仁三年四月十六日

符備太納言正三位藤原朝臣園人宣奉勅

僧尼之制夏明令條男女之別非無礼法項者

諸寺僧尼其數寔多外託勝因內虧戒律精進

之行無顯淫犯之狀屢聞僧綱顏面不加提擷

官司寬容無心糾正又法會之時懺悔之日男

女混雜彼此無別非礼之行不可勝論敗道傷俗莫甚於斯永言其弊理合懲肅宜牒示諸寺

并道場令加禁斷若不遵承輒容受一人已上

者三綱並入者等並科違勅罪所司不糾亦与

同罪其病者可就寺治病并請僧看病者經僧

綱若講師聽其處分可寺內檀越有可寺內當寺家雜事者

聽令暫入不得因茲經宿留連其寺家奴婢及

尼寺鎮不在禁限者今敕右大臣宣備奉勅

三代格卷三

五十六

立制之心為察法門如聞士女縱慕礼佛怕畏

皇憲不得向寺是以慈悲之道一子猶違圍繞

後紀第二

之場四衆半教宜在白晝任令出入但至夜時

固加禁止俾彼修善者遂其善途途者絕其迷

又緇徒志道須勤清靜而或住閭里未免軒疑

凡僧綱講師者僧尼之師表也殷勤教喻誰不

順行自今而後若有此類舉衆白堂咸令懺悔

三告不悛依法還俗自餘之事一同先符

弘仁九年五月廿九日

治貞
太政官符

應禁斷僧不能之行并三綱之外更置雜職事

右檢案內太政官去弘仁十年十二月廿五日下治部省符傳威儀師六人從儀師八人者延曆四年五月廿五日符傳出家之人本支行道今見衆僧多乖法旨或私定檀越出入闍里或

三代格卷三

五十七

誣稱有驗註誤愚民非唯比丘之不慎教律抑是所司之不勤提擲不加嚴禁何整緇徒自今以後如有此類擯出外國者右大臣宣夫僧綱者僧尼之師範也慇懃教喻誰不順從而今綱所從儀僧真諸寺雜職刺置又大中少鎮檢校目代等之類其數猥雜因是監臨已多勞煩費其旅繁此則肆侵格制无意從行若違使巡檢有違犯者據法科罰下知諸寺速令改糾

承和二年十一月七日

治貞
太政官符

應禁制僧俗飲酒及贈物更

右被從三位守權大納言兼右近衛大將藤原朝臣氏宗宣傳奉勅頃年習俗澆薄飲宴無度損人費物職此之由也是以今年正月廿三日殊施嚴科重加禁止唯為俗人制茲滯費即於僧侶有何嫌疑然恐有破戒監行之輩違佛

代格卷三

五十八

教乖王法非因療病妄自飛觴不知有識之朝無顧護法之厭條宜令所司牒示僧綱下知諸寺嚴加禁遏勤致清慎若有違越者必錄其名令送所司科罰一如法條又出家之人理無生產唯仰一鉢續當有何蓄而今或聞復試業之時資供豐盈贈遺煩費是以身素清貧無階營設者雖有高才難果其業其宣云秋迦之元意緇徒之漸行乎自今而後亦宜同禁猶有慙猶有犯其

及雜抄
八字目
餘如印

罪準上僧綱三綱知聞不糾及隱忍不言即與同罪曾不寬宥

貞觀八年六月四日 三代實錄第十三

家人事

勅藥師寺奴婢等季滿六十并才能勇勤悉役良

天平神護二年五月十一日

太政官符

三代格卷三

二十九

應奴婢生益附帳之日令注父母名事

右得勘解由使解僱案延曆八年五月十八日
疑犯著錄
格併案令條良賤通婚明立禁制而天下士女及冠蓋子弟或貪艷色而新婢或挾嬌奔而通奴遂使氏族之亂沒為賤隸公民之徒變作奴婢不革其弊何導迷方自今以後婢之通良之嫁奴所生之子並聽從良其寺社之賤如有此類亦準上例放為良人者據檢此格須奴婢

相生乃以為賤方今格出以樂殆八十年父奴母婢所生之子方令格一猶以稀有而今諸國言上不與解由狀注載部內定額寺奴婢無實逃亡其數不少因檢資財帳多附生益奴婢凡厥下民為体不恥名賤詐遁重課謀就輕役爰知公民之輩求媚婚姻忘黷彼族奸作此賤非唯違格兼損課調論之政途豈非公平望請彼格後奴婢為例顯其父母名若有違犯者依法

三代格卷三

六

科罪者右大臣宣依請

藤原相

貞觀五年九月廿五日

類聚三代格卷第三

聚三代格卷第四

佛事中

年分度者事

年分度者事

太政官并

應分定年分度者數并學業事

華嚴業二人並令讀五教指歸經目

天台業二人並令讀摩訶心觀

三代格卷四

律業二人並令讀梵網經若瑜伽觀地

三論業三人並令讀三論

法相業三人並令讀唯識論

右被右大臣宣傳奉勅撰災殖福佛教尤勝

誘善利生無如斯道但夫諸佛所以出現於世

欲令一切衆生悟一如之理然衆生之機或利

或鈍故如來之說有頓有漸件等經論所趣不

同開門雖異遂期菩提譬猶太醫隨病與藥設

方萬殊共在濟命今欲興隆佛法利益群生凡

此諸業廢一不可宜准十二律定度者之數分

業勸催共令覽學仍須各依本業疏讀法華金

光明二部經漢音及訓經論之中問本義十條

通五以上者乃聽得度縱如一業中無及第

者闕除其分當年勿度省察僧總相對案記待

有其人後年重度遂不得令彼此相棄廢絕度

業若有習義殊高勿限漢音受戒之後皆令先

三代格卷四

必讀誦二部戒本諸案一卷鞞磨四分律鈔更

試十二條本業十條戒律二條通七以上者依

次差任享義復講及諸國講師雖通本業不習

戒律者不聽任用自今以後永為恒例

延曆廿五年正月廿六日

太政官謹奏

應令度者聞誦法華寂勝兩經事

佛教流傳必在僧尼度人才行實蘭所司比來

出家不審學業多由囑請甚乖法意自今以後
不論道俗所舉度人唯取身才闇誦法華經一
部或寂勝王經一部兼解任禮佛淨行三年以
上者令得度者學問弘長囑請自休其取僧尼
兒詐作男女令得出家者准法科罪所司知而
不正者與同罪得度者還俗朝議商量具如前
件謹錄事狀伏聽 天裁謹以申聞謹奏

天平六年十一月廿日

三代格卷四

三

奉勅依奏

續紀第十一

太政官符

應任理試年分度者事

右去延曆廿五年三月廿六日谷格云各依本
業疏讀法花金光明二部經漢音及訛經論之
中間太義十條通五以上者乃聽得度縱如一
業中無及第者闕除其分當年勿度省察僧
經相對案記待有其人後年重度遂不得令彼

此相案廢絕其業者又式云試年分度者遣音
博士一人就僧經所令試漢音須隨彼格式勤
加課試而今被中納言兼左近衛大將從三位
行陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣佩奉
勅頃年如聞愛憎任意選擇失方漢音廢之而
無試太義問之而不精高才含鵬退之歎淺識
懷鴻漸之喜一則違如來之幽禁一則乖皇王
之顯法非唯愁吟切於人心兼復喧訟驚於物

三代格卷四

四

聽不張嚴制何遏枉盤宜下知所司莫令更然
若有積習不悛猶致違越者處之重科不曾寬
宥

貞觀十一年五月七日

太政官符

應令得度年分度者二人事

右被太納言云三位兼行右近衛大將民部卿
陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣佩奉勅

護持國家利益群生妙法軍勝尤居其先。因茲
自去延曆年中以降二十二人分配五宗使之
得度。於是天台花嚴分響並馳。三論法相舉翅
競飛。演說者衆。誦者寡。宜承前十二人之外
妙法蓮花經軍勝王經。別一人每年聽度。隨
業各入在近江國妙法并軍勝等寺。其試定者
始從序品盡令誦誦。若一句半偈不分明者並
為不策。綴二業中無及第者。闕如待後歲之能

三代格卷四

五

者

承和九年十二月廿七日

續後記第十三
類聚圖史第百七十九

太政官符

應改試花嚴宗年分度者論疏事

法華經一部

依正
疏令讀

軍勝王經一部

依勝法師
疏令讀

大興法界無差別論卷

花嚴五教三卷

大乘起信論一卷

右得權少僧都傳燈太法師位道雄等。膝偁如

來之教有頓有漸。所以八宗義趣不同而
先師等假法相之疏傳。二部之經。緣指劫後旨歸。總目
開簡試之道。曰。茲本業不勤斯。宗將絕。望依件
疏誦試。年分輩謹請。官裁者。右大臣宣奉
勅。依請。

仁壽元年五月廿一日

太政官符

應一據舊例得度者受戒事

三代格卷四

六

右得少僧都法眼和尚位惠運。膝偁伏。檢舊例
凡有得度者。先與度緣。次令入寺。就中年分度
者。經二箇年。臨時度者。經三箇年。令練沙弥之
行。然後初聽受戒。今乃每年三月以前。僧總放
牒。諸寺令進當年可受戒者。夾名會集。總所治
部玄蕃共勘名籍。並試法花軍勝威儀三部經。
即簡定。年六十已下。廿五以上。學得前件三部
經者。更牒本寺。三箇七日。令脩悔過。四月十五

日以前定其受戒日請集傳戒大小十師於東太寺戒壇院依教法問十三難并十遮然後令登壇受戒即受戒畢後安置戒壇院差教授師夏月之間令脩學比丘二百五十戒三千威儀誓護國家或在各本寺請依心師細學律相同以誓護其年不滿廿若七十已上并國家不放之人債負之人黃門奴婢之類非是戒器故佛不聽受戒頃年之間非唯忘却舊例第復違背

三代格卷四

七

佛教或臨受戒日纔下官符新剃頭髮初着袈裟冠幘之痕頭領猶存或十四已下年少之人空有貪名之外謀曾無慕道之中誠皆是未練沙弥之行況於懺悔之事乎加以結番之場覺上下而鬪亂登壇之次爭先後而拏攫遂則罵詈有司陵轢十師濫惡之甚不可勝計夫受得表無表戒名曰受戒於三師七證前殷勤至誠敬礼乞戒之下茲得防非止惡之功能名曰表

或羯磨之下茲得非色非心成佛殊勝之功能名曰無表戒既無至誠礼敬之心安得表戒表戒未得何得無表既不得表無表戒何名得戒登壇已後不學律相故不知持犯不知持犯故不脩安居何稱比丘乎望請愍舊例第遵佛教然則緇徒感激濫惡自止戒壇清静佛法興隆國土之豐樂不期而來内外灾障不攘而去謹請 處分者右大臣宣依請

三代格卷四

八

貞觀七年三月廿五日

三代實錄第十

太政官符

應改定得度者受戒事

右少僧都法眼和尚位益信等奏狀稱謹檢貞觀七年三月廿五日格傳故少僧都惠運藤原檢舊例凡有得度者先与度緣次令入寺就中年分度者經二箇年臨時度者經三箇年令練沙弥之行然後初聽受戒者今出格以降雜經

卅餘年而未有遵行伏案物情二年練行三年練未明其由允檢受戒儀軌沙弥等後師之後發心年久是一練行次於三師七證前受三歸五戒十善畢是二練行次將授木戒而問遮難之日簡捨根關選留根機然後授之是三練行加以檢本律云授戒以後五年律學度者練行前後共具何必局限二三箇年又提謂經云允說授戒緣三種所以一者調和四時寒陰故

三代格卷四

九

二者不違日月元陽故三者令就年中教實故受戒緣起勇由祈年禱請豐稔當在歲首望請度者受戒無別年分臨時不經數年練行即聽授戒已授之後一依律文令勤五年律學便於各本寺令課試所學文義具錄其由以經三司傳於不朽恒三月內使畢授戒四月中結夏安居祈禱年穀擔護國家伏請 慶分者太納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳陸奥出羽

按察使源朝臣能有宣奉勅依請者若度者多數限內不授畢後年三月同共授畢又五年律學之後三司勘知之由具注其狀即申送官
寬平七年三月六日
太政官符

應度真言宗年分者三人事

一金對頂業一人

應學十八道一尊儀軌及守護國界主陀羅

三代格卷四

十

尼經一部十卷

一胎藏業一人

應學十八道一尊儀軌及六波羅密經一部十卷

右二業人應勇學卅七尊禮懺經一卷金剛頂發菩提心論一卷釋尊摩訶衍論一部十卷

一般明業一人

應書誦梵字真言太佛頂及隨求等陀羅尼

右一業人應兼學太孔雀明王經一部三

卷

以前太僧都傳燈太法師位空海表倂花嚴天
台律三論法相等七宗之教皆是先代 聖帝
賢臣建立十三太寺賜十二人年分度者廣入
田園利稻死講說經論新各令分業習學是故
後昔迄今人法興師資不絕今真言十宗人

三代格卷四

十一

法新起流傳年淺猶漏天恩後字無漏謹案太
政官去弘仁十四年十一月十日并倂右大臣
宣奉 勅真言僧五十人自今以後令住東寺
者伏望准彼七宗例蒙賜年分者後二位行太
納言兼皇太子傳藤原朝臣三守宣奉 勅如
來之教廢一不可宜准三密法門每年度三人
承和二年正月廿三日 續後紀第四
太政官符

應試真言宗年分度者學業并定得度日處
事

右少僧都傳燈太法師位真濟表倂 先帝
去承和二年正月廿三日殊賜年分度者每年
九月廿四日於金對峯寺試定課業令得度今
如天台業花嚴宗亦被加益伏望准依不度加
度三人即於神護寺寶塔所試業剃髮奉護
聖躬增長寶壽伏請 天恩允許宣付所司者

三代格卷四

十二

權中納言後三位兼行春宮太夫左近衛中將
陸奥出羽按察使藤原朝臣良相宣奉 勅真
言秘教至理幽邃尋其門者罕究闢奧挹其流
者難測根源活師志深弘道心在利生嗟太法
之未廣憂學徒之猶少寫出款誠以表懇懇宜
依來請並令得度羨也功德收覃宇內殷富人
物穩快福祚長久宗社遠存宜令所由詳知此
趣但金對峯寺道程稍遠往復艱險試業阿闍

真福寺
所藏
字者

同書
下有
今以
立為
例
者

梨多生疲倦今須傳法阿闍梨傳與附法證師三

人於東大寺不論前後同共二月以前試畢父

義通通五以上者以為及第即具狀申官依例下

符其分配宗業習讀經論一同兼和二年正月

廿三日符但前三人者改先定日先帝國忌

御齋三月廿一日於金剛峯寺度之後三人者

每年四月三日於神護寺度之受戒之後各住

兩寺六年之後聽出山焉行即聽授戒已授之

三代格卷四

十三

後一依律文令勸五年律學便於各本寺令課

試所學文義具錄其由以徑三司傳於不朽俱

三月內使畢授戒四月中結夏安居祈禱年穀

擔護國家伏請處分者大納言正三位兼行

左近衛大將皇太子傳陸奧出羽按察使源朝

臣能有宣奉勅依請者若度者多數限內不

授後年三月同共授畢又五年律學之後三司

勘知之由具注其狀即申送官

仁壽三年四月十七日

寬平七年三月六日

伴本圖十行奉本点不加心真福寺所藏
官符無者微焉

太政官符

應加置真言宗年分度者四人事

右太上法皇勅命曰伏檢案內真言宗年分

惣六人其三人者依太僧都宰海上表去兼和

二年正月廿三日置之同年八月廿日更亦上

表於金剛峯寺試之所謂高野年分是也其三

三代格卷四

十四

人者依少僧都真濟上表去仁壽三月四月十

七日置之即於神護寺寶塔所試之所謂高雄

年分是也受戒之後各栖二寺出山之期令終

六年爰二師沒後衆論逸起或謂初稱宗分須

於東寺試之或執既有本願何於他處行之各

有所由時議難定數遷旦改彼兼此愁遂依權

太僧都益信申請可於東寺試度之狀去寬平

九年六月廿六日下符已畢願後至今十有餘

麻姑

年稚云公議一定更無二論然而不平之聲新
聽聞開難抑之訟故山猶滿伏以相尋宗分永
付一寺則二師遺跡應含埋沒之悲更隨本願
欲返兩山則三密根源恐失興隆之望後顧岐
路漸思失遺非申公家何得全濟伏望恩議依
件處分舊來六人各返本山之分便於彼山試
之新加四口將為東寺之新即於其寺試之仍
須一人為胎藏界業令讀六波羅密經十卷一

三代格卷四

十五

人為金剛界業令讀守護國界主陀羅尼經十
卷各亦加新翻仁王經二卷同為兩部界兼學
業二人為聲明業二人為聲明業令讀孔雀經
三卷太佛頂真言一卷太隨求真言一卷及十
八道真言兼令書梵字其試度之法准例不改
實得其人然後則授戒之後殊亦加試不
闕三時作法之勤奉為一人令祈其福增功
德於功德金輪化祿長加善根於善根寶曆之

運無極者左大臣宣奉勅依御願特置之

延喜七年七月四日

太政官符

應試業年令度者事

右太政官去年六月十一日下治部省符傳
燈太治師位寂澄表傳夫如來制戒隨機不同
衆生發心太小亦別所以冬殊夏盧上座異位
一師十師羯磨各別望請天台法花宗年令度

三代格卷四

十六

者二人於比叡山每年三月先帝國忌日依
法花經制令得度受戒仍即一十二年不聽出
山四種三昧令得修練然則一乘戒定永傳聖
朝山林精進遠勸塵劫謹副別式謹以上奏者
右大臣宣奉勅宜依來表者今案式意應試
業者先申別當聽彼處分試業已訖亦別當
執奏仍國忌日便令得度不可更經治部
僧總其應試議條一依太政官去延曆廿五年

正月廿六日下治部省有旨於彼寺試得度既畢別當申官勘籍并与度緣然後下治部省

弘仁十四年二月廿七日

太政官符

應准舊例令受戒事

右得延曆寺牒傳謹案弘仁十四年二月廿七日格傳傳燈大師師位寂澄表傳天台法華宗年分度者二人每年春三月先帝國忌日於

三代格卷四

十七

比穀山令得度受戒便十十年不聽出山謹副別式上聞者右大臣宣奉勅宜依來表者今准格文年分得度受戒此長例之事也亦聲聞僧迴受太戒同載別式立為恒例是以僧并沙弥應受戒狀申官即被裁下以令受戒而頃年寺家更申宣旨事既重疊物煩相荐望請自今以後准舊例令受戒但進解文二紙一紙留官一紙下寺以舊為長例謹請官裁者中納言

弟左近衛太將從三位行陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣依請

貞觀十一年四月十六日

太政官符

應令迴心受戒僧進印驗預戒事

右得延曆寺牒傳案祖贈法印和尚位寂澄去弘仁十年三月十五日所奏年分式傳誠願天台活花宗年分學生并迴心向大初修業者

三代格卷四

十八

授大乘戒將為太僧即十十年不聽出山令修三昧者蒙同十四年二月廿七日官牒傳右大臣宣奉勅宜依來表者今檢案內迴心者本有所管領請戒之日據於本實而不持公驗私來自受見聞律事非無偽濫懲愼將來可有其驗如當寺戒牒既請官印何以輕忽望請自今以後在京者待本寺印文并僧總押署外國者責講讀師等及國司明牒式以狀言上而後

登壇然則偽盪自絕戒珠增光謹請官裁者

左大臣宣依請

藤基經

貞觀十六年四月十五日

太政官符

應增加年分度者二人

右十禪寺傳燈太師位圓仁表傳天台宗鑒心之明鏡衛國之秘術桓武天皇遣使西隣特令尋訪先師啣命涉海搜求聖情崇重永

三代格卷四

十九

賜年分度者兩人以令修學四種三昧餘風遠扇于今繼踵太行皇帝置新院於維嶺亦為光飾前蹤故也圓仁庇體緇林志期弘闡入唐歷祀尋教歸朝幸遇明時顯揚斯教擬陳誠素龍駕早遷意願未敷舉仰無極然朗月西移朝陽東照兼明之慶中外同懷圓仁所求胎藏金剛并蘇悉地三部大法教廣義豐雖粗弘傳猶未獲大展矣遂曆聖皇賜山家年分二人一

人分觀業一人真言胎藏業跨世填遵各勤其業至於金剛界蘇悉地兩部大法雖令兼學而人志有限教門浩博稟學之徒未能窮其微細伏望恒例年分度者二人之外更蒙賜兩人各令習學一業令一人學金剛頂經為業兼讀法花金光明兩部經令一人學蘇悉地經為業兼讀法花金光明兩部經並使精進通文義嚴試其業預得度之例不出山門守紀修行始于我

三代格卷四

十

聖御宇長為永代之恒式然則陛下威德遐流塵劫龍宮秘藏窮奧不遺所有修傳之洪福將用薰資皇祐伏乞聖慈特垂明許者右大臣宣奉勅圓仁法師遠涉滄溟求來太教禪風浩卓花燭幽奇才行之至天人所歸實是釋氏之棟梁朝家之鎮衛也勸人弘道功德無涯宜准來表乞其款情所冀以此功業迴向大梵天王三十六天主帝釋天王四方之四王三界

或三或二或一
張字五

之諸天閻魔法王天神地祇一切護法共成隨
喜咸倍威光冥翊所薰即歸先帝逾增福善
速混菩提復乃覆護國家扶持人物天家快穩
寶祚延長宗社鴻基期無盡而遠存空王正法
化有情而久住宜仰所由明知此意者事須每
年四月三日並令得度自餘事條一同前度之
例

嘉祥三年十二月十四日

三代格卷四

壬

太政官符

應依前後格每年春秋各試度年分者六人
事

一人依延曆廿五年正月廿六日符所度

一人遮那業 一人心觀業

一人依嘉祥三年十二月十四日符所度

一人金耐頂業 一人蘇志地業

一人依同年十二月十六日符所度

並心觀業

右得延曆寺座主傳燈太法師位圓玢牒傳延
曆末創建天台宗緣事新開年分數少代々
聖王弘道之故更加四人當寺須准格意簡試
數人取優長者度之而年來八月下旬臨國忌
時召學生六人即加簡試若及第者無復試他
人便度四人為當時分留著二人置明春分爰
修學之徒或嫌不進朝憲所仰何其如此望請

三代格卷四

壬

吉下德
還衛大
將徒二
位行後
典出利
按察使
字十七

自今以後先格度者起從三月十四日始試十
七日得度後格度者起從八月廿三日始試廿
七日得度然則允覽學之詔致後生之勤謹請
處分者中納言藤原朝臣基經宣依請

貞觀十一年二月一日

太政官符

應試度延曆寺年分者二人事

一人奉為賀茂名神可令讀太安樂經一

部廿八卷

一人奉為春日名神可令讀維摩詰所說經十部三卷

並可加試法花金光明經二部

右十禪師傳燈大法師位惠亮表倂惠亮以去嘉祥三年陛下御東宮之上啓所願已畢頃年殊垂恩感每降誕日臨時得度于今箇年伏冀天慈幸降恩勅不改素願每年年用

三代格卷四

壬子

比其判各任官本如令

下旬於茲敷山西塔寶幢院將試度之然後准太政官於仁十四年符令受太戒之後依先師式十二箇年不出山門一日不闕長講件經利益名神奉護聖朝惠亮等師資相兼修此佛業但件人等得業以後僧中諸事准天台真言等宗一同用之者右大臣宣奉勅宜依來表貞觀元年八月廿八日三代之實錄卷三
日類聚國史卷七十九太政官符

應令延曆寺寶幢院別當定行試西塔院年今度者雜事更

右去貞觀元年八月廿八日初立試度年分之例元慶七年十月十日更置彼院別當是知院中庶事惣歸伊人而今得別當傳燈大法師位觀栖申狀倂伏檢案內件年今度者是故大法師惠亮所申置也彼本誓云於西塔寶幢院師資相兼永修道業者大法師逝去之後門徒

三代格卷四

壬子

貫首常濟法師行表尚矣常濟已沒之後西塔院司等去貞觀三年式牒云西塔院司勾當其更然則簡定學生一向可知者爰八僧等惡邪本師之雅意謬以小僧奏為別當今攝院事而去年西塔院司改革舊例勾當此事既違本懷亦妨道業望請簡定學生請證師試業師等之事別當皆定行申送寺家候候勅使試定并剃頭令受小戒又八僧闕所撰定被衆握者同申

送寺家被下官牒不更經西塔院司又貞觀元年官牒傳件人等得業以後僧中諸事准天台真言等宗一同用之者今或僧等論云所學之宗已是天台也而稱准之其義迂遠如此云爲其端非一望□依心觀真言等業行之者右大臣宣依請抑所以置別當者將令其兼行庶務而偏執前牒却忘後變宜重仰知依件令行

仁和三年三月廿一日

三代格卷

二十五

太政官符

應令受戒年分度者事

右得延曆寺去年四月十一日牒傳左辨官令月九日宣旨傳太政官去三月十五日下午治部省符傳檢舊例年分度者經二箇年臨時度者經三箇年令練沙弥之行兼試法花軍勝威儀三部經然後令受戒者寺宜依件行之者今案彼格最有理致弘道之輩誰不遵行但此寺年

分者惣八人也就中六人是 先皇御願國忌之日同令得度今二人即 今帝御願臨降誕之日奉為賀茂春日兩處名神亦令得度非唯未度以前練沙弥行乃受戒以後不出山門十二箇年慎守公制勤修三昧警護國家皆是先師遺誡也先師之戒既異諸宗所有行業不同他類得業以後何更經年若兩箇年不聽受戒恐於御願致闕斷欵凡年試度年受戒

三代格卷

二十六

謂之年分若不介者亦恐有所闕欵伏其不違先師之戒當年受戒則開山門警護國家其沙弥威儀經一准官符試業之日同加試練又難臨時度者不必經三箇年何者人有利鈍學有優劣況有入道之前後練行之淺深乎或幼年從師修學年深或長後出俗味法流或入道如昨才學優長或出家經年身才猶疎得失如斯何得一准望請才與年長行將齡積之輩准

官符宜先勘度緣三月之內試三部經若無擁
滯者聽其受戒縱雖少年而廿歲以上才行兼
脩堪為僧者方加試練同聽登壇然則玉石同
分修學無怠謹請 處分者右大臣宣奉 勅
年分度者依請自餘一同去年三月十五日格
貞觀八年閏三月十六日
太政官符

應加試年分度者二人事

三代格卷四

二十七

一人為大比般明神分太毗盧遮那經業
一人為小比般明神分一字頂輪王經業
右延曆寺座主法眼和尚位圓珍表偁故祖師
法印太和尚位寂澄延曆末年奉使入唐求法
事訖臨迴請當州公馮且明州主朝議郎使持
節明州諸軍事守明州刺史上柱國榮陽鄭審
則批判求法目錄稱寂澄闇梨性稟生知之才
來自禮義之國南登天台之嶺窮智者之法門

西泛鏡湖之水探灌頂之神秘可謂法門龍象
青蓮出池者然則西朝重我國家稱為禮義之
鄉當寺法主大比般小比般兩所明神陰陽不
測造化無為弘誓亞佛護國為心所傳真言灌
頂之道所建太乘戒壇之檢祖師創開專賴主
神若不然者何立此業永鎮國家頃年度僧惣
八箇人其六人者於東塔院春秋試度惣為鎮
國不捐其分其二人者於西塔院春秋試度

三代格卷四

二十八

就中一人為賀茂明神分一人為春日明神分
主神獨無其分貞觀二年擬奏斯由依違不言
然而至此自彼以來冥崇稍頻遂不言者恐神
明怒且夫毗盧遮那經者八万法藏之肝心陀
羅尼教之梁棟也隨經義釋七百餘紙文理甚
深局智難會而舊置年分只是一人學徒之少
大道猶哽又頂輪王經者真言之樞機法城之
門戶也所以祖師積年耽習甚得咒驗仍於

延曆天子聖躬不豫之時依經修法奉資寶祚山家之開泰莫不賴此功是以東西弟子至今勤修圓瓊伏見佛法中興莫過養和之聖代山神寶慶偏仰當時之鴻慈伏望蒙加度者二人為兩神之分鮮地主之結恨增護國冥威即以三月十七日与元初二人同共試度自餘事條准延曆弘仁兩朝之格又授戒之後每日讀金剛般若經各一卷誓願兩山奉護一天十二年

三代格卷四

二十九

末恒奏卷數復試之日除金光明經並讀六卷止觀者中納言從三位藤原朝臣山陰宣奉勅宜依來表須准去延曆廿五年正月廿六日格永以行之

仁和三年三月十四日

三代實錄第五十
類聚國史卷百十九

太政官符

應四月十五日以前行授戒事

右得延曆寺牒傳被太政官今年三月七日下午

當寺牒傳如聞「寺他宗應得度者各就便宜勞下宣旨直預彼寺授戒論之」道理不可然太納言三位兼行左近衛太將皇太子傳陸奧出羽按察使源朝臣能有宣奉勅九天台宗年分之外臨時度者寺家具注官并日月依止師主二月以前直申送官更待并到三月之內令授戒畢自今以後永為恒例者謹案牒自二月言上之制難限臨時度者而三月授戒之

三代格卷四

三十

期未降年分度者若以年分准臨時者授戒之期太早若令臨時隨年分者舊格之旨得宜伏檢去貞觀八年閏三月十六日格云寺家牒傳太政官去年三月十五日下午治部省并傳檢舊例年分度者經二箇年臨時度者經三箇年然後令受戒者然而山家年分既異諸宗得業以後何更經年九年試度年受戒謂之年分若不允者恐有所闕伏冀依先師式當年授戒

則開山門誓護國家。又雖臨時度者不必經三年綴。雖少年而廿歲以上才行兼備堪為僧者方加試練。同聽登壇謹請。處分者右大臣宣奉勅。年分度者依請。自餘一同去年。三月十五日。符者寺依格旨行來。無關。又於臨時度者應受戒者皆依宣旨。乃聽登壇。而今官縣下寺制依宣旨而授戒。禁過三月以後授戒。官縣之旨最有理致。但三月受戒之期於當寺甚早也。

三代格卷四

十一

所以然者當寺年分惣一十人皆是。先皇所願也。就中二人奉為大小比叡兩神。三月十七日試度之。二人奉為賀茂春日兩神。三月廿五日試度之。然則餘程無幾。式月已迫。九年分學生等幼稚離鄉長大住山。各勤學業更無他計。纔預度例乃求戒具。染縫三衣買脩一鉢。非是當。二十日之功授戒何畢。三月之內。因是欲令二人待後年者得度既畢。屬神分授戒豈闕年。

新望請官裁當寺授戒之事。准於貞觀七年三月十五日格。四月十五日以前定戒且行之。又臨時度者與年分度者同日令受戒。並十六日結夏安居。鎮護國家者。大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅。依請。

寬平七年十月廿八日

太政官符

三代格卷四

十二

應試度金勝寺年分者二人事

一人奉為甲賀郡飯道名神坂田郡山津

照名神

一人奉為野洲郡三上兵主兩名神

可試法化經一部八卷寬勝寺經一部

十卷並法相宗

右得近江國解倭甲賀野洲兩郡解倭謹尋金勝寺之古跡。昔有應化聖人。子金肅菩薩。朝

庭尊崇黎民歸依金肅尸解之後興福寺故傳燈木法師位願安禪居此山脩練無比至弘仁年中奉為國家建立伽藍於是唱導嚴價都鄙騰躍厚休朝恩開此勝地捐造精舍安置佛像別建八宗院書寫一切經論并一千一百部法花經朝誦法花夕演寂勝号之長誦更占一堂殊定七僧始從明旦至于晚際轉讀法花稱之三昧於是兼和聖帝殊降綸旨施入燈令即

三代格卷四

三十一

改金肅賜額金勝智行者繼踵研學者並肩是以二時長誦逐日無缺終日三昧守時匪休今件甲賀郡飯道名神坂田郡山津照名神野洲郡三上兵主兩名神等國家所尊崇人民所歸仰感山門之精勤為護法之鎮主吏民之祝必有感驗因茲彼寺既作國中郡內攘禍招福之境亦已久矣就中三箇郡尤是為近隣常蒙擁護故每有灾變共仰斯寺欲使祚增威光以加

冥助殊振神力而添鎮護望請速經言上奉為彼四所名神被賜件二人度者唯兩郡例輸之外每年各加課丁一人今有調庸之益所試之年分者專請京戶之人不度外土之民其年分試業准諸寺例於彼寺課試得度之後六箇年間不出山門便各轉讀本業經專誓願彼名神鎮衛國家覆護村邑者國如覆審事非虛妄仍錄事狀謹請官裁者從三位守權大納言弟

三代格卷四

三十四

右近衛太將行民部卿菅原朝臣道真宣奉勅依請

寬平九年六月廿三日

新書類從卷四百十五

太政官符

豐前國八幡神戶人出家事

右奉今月廿二日勅件神戶人每年一人宜令得度入彼國祢勒寺

天平勝寶元年六月廿六日

律本天平勝寶元年七月甲午元為天平勝寶元年此著既曰勝寶不審

太政官符

應以高雄寺為定額并定得度經業等事

右五位下行河內守和氣朝臣真經等上表
并昔景雲年中僧道鏡辱僭法王之号遂懷窺
覷之心遍邪幣於群神行權譎於佞黨爰八幡
大神補天嗣之頌弱憂狼奴之將興神兵交鋒
鬼神連年彼衆我寡邪強正弱大神歎自威之
難當仰佛力之奇護乃曰御夢請使者有勅

三代格卷五

三十五

嗟臣等故考後三位行民部卿清麿面宣御夢
之事仍以天位讓道鏡之事令言大神清麿奉
詔旨向宇佐神宮于時大神託宣夫神有大小
好惡不同善神惡淫祀實神受邪幣我為紹隆
皇緒扶濟國家偶造一切經及佛諷讀充勝王
經一万余卷建伽藍除凶逆於一旦固社稷於
萬代汝秉此言莫有遺失清麿對大神誓云國
家平定之後必奏後帝奉果神願粉身殞命不

錯神言還奏此言遭時不遇身降刑獄遂配荒
隅幸蒙神力再入帝都寶龜十一年敷奏此事
天皇感歎親制詔書未行之間遇讓位之事天
應二年亦奏之 柏原先帝即以前 詔書普
告天下至延曆年中私建伽藍名曰神願寺
天皇追嘉先功以神願寺為定額今此寺地勢
沙泥不宜壇場伏望相替高雄寺以為定額名
曰神護國祚真言寺佛像一依大悲胎藏及金

三代格卷四

三十六

剛界等蘭解真言僧二十七人永為國家修行三
密法門其僧有闕者擇有道行僧補之又蘭貞
操沙弥二十七人令轉讀守護國界主經及調和
風雨成契五穀經等晝夜更代不斷其殷七年
之後預得度例一則果大神之大願二則除國
家之災難者右大臣宣奉 勅得度一代之間
每年聽度一人自餘依請

天長元年九月廿七日

類聚國史卷百廿

太政官存

應試度八幡、勒寺年分者事

五箇條之第一

右別當觀音寺、講師傳燈、大法師位光豐、勒寺、講師傳燈、大法師位光惠等、牒、保護宗廟、鎮社稷、大神之威、無二、助、神靈增威勢、太覺之德、寬一、是以、聖朝建立、勒寺、度年分一人、以酬彼神靈、理、須、蘭、智行者、羯磨、剃頭、請師授戒、而、兼前、官司不、經、試練、任、情、度補、法會之、違、法

三代格卷四

三十一

用有、闕、轉、經之日、經文訛雜、徒免、課役、不曾、住持、聖願既闕、神感何有、望、請、蘭、住、神山若、勒寺、經三年已上、六時行道、心行已定之人、講師、官司共、試、讀、經、然後、度補者、左近衛太將、後三位兼守太納言行民部卿清原真人夏野宣奉、勅、依、請

天長七年七月十一日

速事第卅八

太政官存

應隨、闕、度補、鹿島神宮寺僧五人、事

右、檢、案內、太政官去、養和三年六月十五日、下、治部省、符、得、當、陸國解、得、神宮司、後、八位上、大中臣朝臣廣年、解、得、去、天平勝寶年中、修行、僧滿願、到來、此部為神、茲、願、始、建、件、寺、奉、寫、大般若經六百卷、畫、畫、佛像、住持、八箇年、神以、感、應、而、滿願去、後、年代已久、無人、住持、伽藍荒蕪、今、部內、民、大部、須、勒、磨等五人、試、練、讀、經、良、堪、

三代格卷四

三十八

為、僧、望、請、特、令、得、度、住、件、寺者、權中納言、後三位兼行左兵衛督藤原朝臣良房、宣、奉、勅、依、請者、今、被、右、大臣、宣、奉、勅、件、僧等、若有、闕者、國司、并、別當、僧、簡定、百姓之中、堪、為、僧者、隨、闕、度補、但、度、緣、戒、牒、一、准、國、令、寺、僧

嘉祥三年八月五日

太政官存

應海印三昧寺、預、定、額、置、別當、亦、定、年分、度

者事

右權少僧都傳燈太法師位道雄表傳花嚴經宗者毗盧舍那十身佛於海印三昧之內普賢文殊等太菩薩常演恒說其本有十此十本之內上中下三本秘在龍宮龍樹菩薩誦出下本流傳人間今准圓滿經修海印三昧恒說行願道雄為修習此道兼鎮護國家山城國乙訓郡本於山峯建立十院於是習學七家八宗業道

三代格卷四

壬九

修行世間出世行願是十院惣名海印三昧寺凡厥堂塔尊像皇家建作亦在其中伏望為定額寺公卿恒為別當每年例度者二人之外持於此寺度年令二人受戒了則還住此寺一十二年不許出山今修練花嚴三昧一紀之後智行優者當時簡用其座主者師資相傳過彼梵進晝夜演說永不退轉修傳之德廣利有衆秘藏之力速及無邊皇天后土二社神祇共長

福業同增威光然則雪山之教久住輪王之化克隆無為至治与天地相比有情快樂与日月共懸者右大臣宣奉勅道雄法師思弘聖教之深明應致國家之利益殊立此一宗創起彼十院所請數事理趣有切宜依未表早以施行者但可試經數并令得度者依別式

嘉祥四年三月廿二日

太政官并

三代格卷五

甲

應得度嘉祥寺五年分者三人事

右得大僧都傳燈太法師位真雅表傳夫嘉祥寺者先帝奉為深草天皇所建也舊跡風流宛然在目伏願便於彼寺永賜三人度者教以悉曇文相學以梵字之義是則聲明之業法門之要是故真言宗以此為要道應學法門其類最多今取尤要者配於三人也將使一人諳書大佛頂梵字一人諳書大隨求梵字一人諳書

惡景章梵字亦其護身則摩由之力殊高存命則尊勝之助最深即使此三人兼讀太孔雀明王經三卷并佛頂尊勝梵字一道每年三月上旬試定上件三人當於今上降誕之日度之其得度之後為持念之僧住嘉祥寺西院轉孔雀尊勝特令弟子之中貫首者永代相承行此白業者右大臣宣奉勅宜依來表

天安三年三月十九日三代實錄卷二十二 類聚國史卷百七十九

三代格卷四 聖一

應改嘉祥寺年分度者為貞觀寺年分事右得貞觀寺降傳天安三年三月十九日格傳大僧都傳燈太法師位真雅表傳件年分三人得度之後為持念之僧住嘉祥寺西院轉孔雀尊勝特令弟子之中貫首者永代相承行此白業者右大臣宣奉勅宜依來表者夫貞觀寺建立之初未定其名曰茲假嘉祥寺年分即号稱西院令住度者貞觀四年七月廿七日應以

嘉祥寺西院号貞觀寺之狀下知既訖而年分之号仍舊不改恐後代人還致疑殆望請官裁早被改定者從三位守大納言兼左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣宜依件改之

貞觀十四年七月十九日三代實錄卷二十二

太政官符

應改定試度貞觀寺年分者日事

三代格卷四 聖一

右得彼寺降傳依天安三年三月十九日格以三月廿五日試度年序已久望請改彼日以十月四日試度永為恒例謹請處分者中納言從三位兼行左衛門督源朝臣能有宣奉勅依請

元慶七年十二月五日

太政官符

應得度安祥寺年分者三人事

試經論

太孔雀明王經一部三卷

太佛頂真言一道

大隨求真言一道

菩提心論一道

右件經論等度者須先依真言宗誦習而

後讀他經論

妙法蓮華經一部八卷

金光明寂勝王經一部十卷

右件經度者須先習自宗而後兼學但其

三代格卷四

聖

論疏道於七宗之中任度者之意其課試之法各依所兼之宗本法複試豎義亦復如是

以前得彼寺條傳 皇太后宮御願去仁壽年中初建此伽藍所願每年度此三人代身修道將除三毒夫真言教門諸法之肝心如來之秘要凡在佛子必可修習仍課度者以為自宗自餘七宗皆為兼學度者必須兼學一宗立此兼

潛之道示彼不別之心仍試度之後便七年之間不聽出山專勤精進晝則講所兼之經論夜則念所宗之經咒又令此度者每年相次夏中三月誦演法花寂勝仁王等經其誦師者寺家簡定條送經所將令死行但法花寂勝年相替令誦一部至仁王經每年加誦住山限滿當行利他須准新藥私福法隆崇福等寺之例預維摩寂勝會豎義之列其年次者在崇福寺下

三代格卷四

聖

但複以下之業本寺據例課試又每年至八月起廿一日盡廿七日令七箇日殊奉為田邑天皇令修尊勝法凡厥試度之事令權律師傳燈太法師位惠運專一勾當師資相傳不關別人其行事者一任寺記若有臨時應以俗為勾當者專依寺家所請不更雜用他人先帝平生之日具狀奏聞許可已畢未及施行請也下知彼寺及所司俾勤遵行勿致違乖者右大臣

蘇良相

宣奉 勅依御願

貞觀元年四月十八日 三代實錄卷二 類聚國史卷百七十九

太政官存

應以元慶寺為定額置年分慶者三人事

大悲胎藏業一人 金剛頂業一人

摩訶訶觀業一人

右法眼和尚位遍照上表俾此寺中宮有身之日今上降誕之時至心發願始以草創自

三代格卷四

四五

胎藏

後堂宇漸攝佛像新成見聞隨喜道場正脩夫增寶祚於長代真言之力也消禍胎於未萌心觀之道也是以奉祈仙齡以此冥助修練之誠年月差積方今皇基肇開万物荷慶道之將隆幸遇此時謹檢案內依去天安三年三月十九日貞觀元年四月十八日格嘉祥安祥兩寺各置三人年分望請准彼二寺置件年分遠傳兩宗之玄教永為國家之鎮護其試業經

典類文

一類文

書等一准天台宗年分每年十二月上旬特請勅使對讀課試通五以上以為及第即當今

上降誕之日剃頭得度但受戒之儀於延曆寺

戒壇令受菩薩大衆戒受戒之後更歸本寺於

五太菩薩前使心觀業者轉讀仁王般若經真

言業者三時念持不斷又為定額寺於增興隆

上誓護聖期下福利億兆者太納言心三位

兼行左近衛太將陸奥出羽按察使源朝臣多

三代格卷四

四六

宣奉 勅依來表

元慶元年十二月九日 三代實錄卷二

太政官存

應置元慶寺傳法阿闍梨教授真言業年分者事

傳燈大法師位惟首 年六十 延曆寺

傳燈大法師位安然 年卅四 同寺

右得權僧心法印大和尚位遍照上表俾謹檢案

內常寺依太政官去元慶元年十二月九日^條牒旨毗盧遮那金剛頂摩訶心觀等業各一人每年十二月十六日試度矣夫以顯教宗者不蘭授業之師至真言教若未灌頂者不能讀一句除非阿闍梨不聽輒傳授所謂毗盧遮那金剛頂等經尤是真言之秘藏密教之根本也不置傳教阿闍梨使誰人傳此教件僧等智行勇資精進無倦堅持利物之擔漸積傳燈之德年來

三代格卷四

四十七

就遍照之邊稟學胎藏金剛兩部太法既畢方今夏藕已積器堪為師範望請^奉旨准延曆寺例特蒙^奉處分授傳法阿闍梨位敷演秘教試度學生謹請^奉官裁者大納言平三位兼行右近衛太將太皇太后宮太夫陸奧出羽按察使藤原朝臣良世宣奉^奉勅依請

元慶八年九月十九日^奉三代實錄卷六

太政官符

應令元慶寺度者受戒後六年住寺兼修法花阿弥陀等三昧事

右得彼寺牒併檢案內寺家依去元慶元年十二月九日官符令毗盧遮那金剛頂兩業度者於五太尊前每日念讀不動真言止觀業度者轉讀仁王般若爰寺家亦從去寬平元年加法花金光明等經令惣讀三部經從今以來件三人年分者等試度初年如法勤修奉^{護脫}國家

三代格卷四

四十八

一歲之後移次年人留住遊行左右随心昨日出乎九鄙之鄉今日入於真如之界度脫未幾自由^留之連擬之道理事不可然謹檢諸寺例延曆寺十二年海印寺亦十二年安祥寺七年金剛峯寺六年得度之後不許出寺各曰教法鎮護國家彼寔報國救世之道也今此寺從去仁和二年以降所修法花三昧阿弥陀三昧等故僧心法印和尚位遍照為國土豐樂法界利

益起太公願所始行也。即製花山元慶寺式云：兩寺各用六箇之僧。當十二時輪轉。過修所用之僧入局之後。出入舉動。寺置四至。不許他行。不指年限。專用心願常住之人。無採徃來不定之客者。望請准金剛峯寺例。今年令者六箇年間住。寺兼修件三昧法。然則知恩之思。無有懈怠。謹戒之心。自致堅固。須緣莊嚴。御願之勤重得支持宿誓之便者。尤太臣宣奉勅依請。

三代格卷四

四九

寬平四年七月廿五日

太政官并

應置仁和寺年分度者二人。事

毗盧遮那業一人。摩訶止觀業一人。

並可兼學法苑經一部。八卷。金光明經

一部。四卷。

右彼寺別當權律師法橋上人位。幽仙奏狀。併幽仙謹緣。勅命。勿當寺家。而建立年淺。止住

人之何況。伽藍在山陵內。諸人去來。不必內由。夫以法不自私。之在人。不孤立之緣法。二人兩存。乃得興隆。凡伽藍者。翻衆園。是則所以太衆共住。修學佛法者矣。如今聖王陛下。近為莊嚴山陵。遠為興隆佛法。建立精舍。於山陵奉迴白業。於聖靈迴向之志。既期。万劫紹隆之誠。豈限一代。謹檢代御願例。皆有年分度者。幽仙昔就師緣。久住穀山。頗以稟學真言。

三代格卷四

五十

心觀等。雖未探其深奧。而恒致歸命之誠。且夫大日經者。真言根源秘藏。至極其心觀者。禪門玄樞。惠藏明鏡。安鎮國家之基。興顯心教之設。莫如此二法。望請天裁建斯兩宗。於件御願寺。每年試練。當於先帝登遐之日。授沙旃戒。得度之後。於天台戒壇。受增太戒。受戒之後。還住本寺。晝則令轉讀金光明妙法苑。專以護誓。聖王寶祚。夜則念持旃陀。真言等。一向奉迴。

先帝聖魂件，年分僧等中，若有才學優長者，預
延曆寺階業，同以向□太乘鎮護國家，同以菩
薩戒力福利群生，謹錄事狀聽伏奉。天裁者，心三
位行中納言兼右近衛太將民部卿源朝臣能
有宣奉，勅宜依來奏。

寬平二年十一月廿三日

太政官符

應置仁和寺圓堂院，分殷明業，年分度者一

三代格卷四

五二

人事

右彼寺別當傳燈太法師位觀賢，奏狀，得此寺
舊被給二人，年分一人，學天台摩訶心觀一人，
學真言毘盧遮那經，今件殷明者，是即五明其
一也。諸佛之教，以此為本，詮名顯義，唯在此業。
況復習梵字，轉梵真言義，非殷明之精微，誰能
詳其宗乎？望請被加給件一人，永為圓堂院之
分。然則遮那心觀，依舊奉，仁和聖靈。

殷明梵文之旨，惟新奉祈禪定法儀，其學生
可習學者，孔雀經三卷太佛頂真言太隨求真
言佛頂尊勝真言悉曇字母也。此中孔雀經披
文奉讀，自餘真言皆可暗誦，但選其練學之人
課試言上者，兼手太臣宣奉，勅依請。

昌泰三年十一月廿九日

太政官符

應置圓成寺，年分度者二人，並許維摩寂勝

三代格卷四

五二

輪轉堅義事

金剛界業一人 胎藏業一人

右彼寺別當權律師法橋上人位益信，奏狀，得
竊以三尊心智者，遣我之蠟蛾三歲，聖教者
擯有之夢庸，是以香城折骨，顯求法之誠，雪
嶺投身，表開偈之慶，遂使出三界之樊籠，踏三
身之寶位矣。方今欲使顯教之業，邈傳於無盡
之劫，秘密之宗，遠扇於不朽之風，望請准貞觀

安祥元慶寺例賜度者三人長為年分但其所業者令二人者專學真言宗之教一人者學法相花嚴律三論成實俱舍天台七宗之教常住伽藍練其宗學厥試條者三部經文義及各本宗論書文義也上件八宗課試並十條通五以上為得第每年三月試定出家授以三歸五戒令精進練行待東大寺授戒時乃令受比丘大戒又准新藥本元興崇福海印寺等例被許維

手格卷五

五三

摩寂勝兩會輪轉堅義但年次置於海印寺下然僧之得業具有五階其試複二業者於圓成寺真言阿闍梨為首諸宗智者以為證師嚴試文義碩學成功將進彼會堅義之後即配請去年所申當寺安居講師前件四階畢者次死傳法供講便以第五階滿畢委錄所業經論并年月日各移本寺附學生帳又以辨史置俗別當上件數事不勝丹誠伏聽 天裁者正三位

行中納言兼右近衛大將民部卿源朝臣能有宣奉勅宜依來奏但顯教業度者不在許限寬平二年十一月廿三日
太政官符

應置淨福寺年分度者二人事

一人天台宗

可讀法花經一部金光明經一部摩訶心觀經一部

三代格卷五

五四

一人法相宗

可讀法花經一部寂勝王經一部瑜伽

論一部

右得中宮職解俾謹奉 今古如聞解脫煩惱究竟涅槃歸佛理其道不行結緣真如薰修淨業靡託仁祠其更無階是以至心發願於山城國葛野郡建立道場有勅賜額曰淨福寺下知國司列于定額安置尊像收藏經典施捨

燈令佛僧供修理等之祈所住者僧徒老少繼踵所修者學業師資相傳由是顯密二教相並今學仍每年二人可度之狀奏聞先訖往日

太皇太后創建安祥寺年分度者三人試其才令得度受戒之後歷六年亘夜迄晨轉經誦咒即復以下業於寺家果之維摩寂勝兩會之場依次豎義傳之不朽今此淨福寺學徒有數成業無聞思欲被淮安祥寺年分度者二人永以

三代格卷四

五五

為例建天台法相兩宗各令讀經論三部凡其複試豎義等之業一同安祥寺之例然則道在人之私人賴道而達緣此願力擔護聖朝者仍錄事由謹請官裁者中納言兼右近衛太將從三位行春宮太夫藤原朝臣時平宣奉勅依請

寬平八年三月二日

太政官并

應以勸修寺為定額寺并置年分度者二人

真言宗教明業一人

可讀習梵字卷墨及諸書兼學太孔雀明王經一部三卷尊勝真言一卷十八道一卷菩提心論一卷卅七尊禮懺文一卷法苑經一部八卷取勝王經一部十卷仁王經一部二卷

三代格卷五

五五

三論宗一人

可讀法苑經一部八卷取勝王經一部十卷仁王經一部二卷中觀論一部四卷百論一部二卷十二門論一卷

右律師法橋上人位兼俊奏狀併件寺贈皇后存生之日為令擔護天皇陛下所建立也而先后坤位永隆陰儀早遷少僧兼俊蒙彼遺令勾當寺家雖草創之功歎其無遂然林衡

之攝追稍有成。自尔「降御願尊像有勅安
置方今修學之徒接影嵐窓祈念之侶連踵皆
任若廢勤導於當時恐致退轉於後代伏願
天裁准淨福寺例置年分度者二人每年十月
試定所業通五以上以為及第即正月十八日
宸儀降誕之日剃頭授沙弥戒得度之後於東
太寺戒壇受具足戒受戒之後住於伽藍令精
練各本業上擔護聖朝下利益國家亦以件

三代格卷四

五七

伽藍列之定額不為僧經并讀講師之所攝者

左大臣宣奉勅依請

延喜五年九月廿一日

太政官符

應正月御齊會講師給度者一人事

右大臣宣奉勅件御齊會是先聖之時
始修也德厚利民設齊會之法座慮深護國誦
寂勝之經王才名拔萃智德出群請為講師其

來尚矣是即釋門之棟梁法流之舟楫者也宜
給度者一人以代扶老之杖立為恒例

仁和元年閏三月九日

三代實錄卷第七
類聚國史卷百七十七

太政官符

應賜遣唐使度者事

右彼使奏狀稱渡海之際險難巨虞雖皇德
所覃自天祐之而利涉之資亦弗冥力望請錄
事已上特賜度者各代其身以令精進者被右

三代格卷四

五八

大臣宣奉勅依請

兼和二年二月七日

類聚三代格卷第四

右第四卷年分度者部者齊部親成所得古本之殘篇而以村井古
藏本伴信友所校本訂正刻之凡經殘篇者有第四卷第十四
十六卷升合五卷與今本今卷不同此第四卷當在今本第三卷上第十五
第十六兩卷今刻之第十四卷升之兩卷者在既刻第八卷十二卷中
嘉永五年正月十日
植松茂吉等謹識

聚三代格卷第五

分置諸國事

加減諸國官員并廢置

定官員并官位事

定内外五位等級事

定秩限事

交替并解由事

分置諸國事

太政官符

應停攝津職為國司事

右被右大臣宣稱奉勅難波大宮既停宜改

三代格卷五

職名為國其二季祿及月新並從停止

延曆十二年三月九日

太政官謹奏

割越前國江沼加賀二郡為加賀國事

守一人 椽一人 大目一人

少目一人 史生三人 博士一人

醫師一人

右得彼國守從四位下紀朝臣末成等解稱加

賀郡遠去國府往還不便雪零風起難苦殊甚

加以途路之中有四大川每遇洪水經日難涉人

馬阻絕動擁滯又郡司鄉長任意侵漁民懷

冤屈路遠無訴不堪深酷逃散者衆又部內闊

遠多煩巡檢官舍之損農桑之急莫不由此伏

請別建伴國名曰加賀國者夫調琴瑟者終待

改張之功行政化者必資權變之道彼越前國

民俗凋弊非息何息境內闊遠本号難治臣等

三代格卷五

商量所申合宜伏聽 天裁謹以申聞謹奏聞

弘仁十四年二月三日

太政官符

加賀國定上國事

右太政官去弘仁十四年三月一日下式部省

符稱依太政官去二月三日論奏割越前國江

沼加賀二郡為加賀國又定中國者今伴國准

諸上國課丁田疇其數差益被右大臣宣稱奉

貞式
中三

勅宜改為上國

天長二年正月十日

太政官謹奏

省太宰府監典各二員置筑前國司事

守一員 介一員 掾一員

大少目各一員

右謹案令條太宰府帶筑前國自今已來或別或隸至延曆十六年又廢國隸府今得府解俱

三代格卷五

王

臨交替事細加檢校未進調庸并欠兵正稅器

伏我具等類每物有數此是攝行之日彼此相

讓無心國政之所致也望請分置官人以為別

當專一其心令濟國務然則帶國之名不乖令

條欠員之煩絕於國內者臣等商量承前府帶

之時或下官符而定別當或府司相量分置其

人同僚之官兼預國務勘責雜急不同比國望

請省太同元年所增監典便充補國司庶令所

守有別各濟繁劇謹錄事狀伏聽 天裁謹以
申聞謹奏聞

大同三年五月十六日

太政官謹奏

停多祢嶋隸大隅國事

右參議大宰太貳從四位下小野朝臣峯守等
解備謹檢案內太政官去二月十一日符備件
嶋南居海中人兵之弱在於國家良非扞賊又

三代格卷五

四

嶋司一年給物准稻三万六千餘束其嶋貢調

鹿皮一百餘領更無別物可謂有名無實多損

少益右大臣宣奉 勅宜勘利害言上者南濱

隸無國無敵有損無益一如符有須停嶋隸

大隅國計其課口不足一鄉量其土地有餘一

郡能滿合於馭謨益救合於熊毛四郡為二於

事得便者聖帝登樞事期濟世明王布政理貴

適時臣等商量昔漢元帝納賈捐之言罷珠崖

重

郡前史以為美談後世稱其英烈雖建國重墻非無分野而卹民救急猶矣州郡况溟海之外費損如此加以往還之吏漂亡者多運送之民蕩沒不少守無益之地損有用之物求之政典深迂物議伏望依件停絲以省邊弊伏聽 天裁謹以申聞謹奏聞

天長元年九月三日

加減諸國官員并廢置事 雜任附出

三代格卷五

五

太政官符

應親王任國守事

上総國 常陸國 上野國

右檢中納言從三位兼行左兵衛督清原真人夏野奏狀稱設置八省職察相縣百官守職庶務俱成一事有關萬事皆緩今親主任八省卿此人地望素高不得就職無知碎務仍官事自懈政迹日蕪非是庸愚之所致因地勢使之然

居恐

也凡官人遷代必署解由至有欠物不免償物居此之費見其如此望請點定數國為親王國迭任彼國身留京都意欲居京官者一兩人將聽若有守關者不補他人其新物者納置別倉支无品親王之要伏聽 天裁者正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峯朝臣安世宣奉 勅依奏但件等國守官位卑下宜改定正四位下官以為勅住号稱太守限以一代不

三代格卷五

六

可永例

天長三年九月六日

太政官謹奏

定陸奥國官負事

按察使一人 記事一人 守一人

介一人 大掾一人 少掾一人

大目一人 少目二人 博士一人

醫師一人 東生五人 守僅伏二人

右上位官負臣等商量所定如右伏聽 天裁謹以申聞謹奏聞

延曆十七年六月廿八日

太政官符

應加置陸奥國少掾一負事

右得彼國守從五位下藤原朝臣興世解俚此國所部多道有司少負春舉秋收事難兼濟望請加掾一人以濟庶務者右大臣宣奉 勅依

三代格卷五

七

請

仁壽四年八月一日 文德實錄第六

太政官符

定鎮守府官負事

將軍一負 軍監一負 軍曹二負

醫師弩師各一負

右被右大臣宣傳奉 勅鎮兵之數減定已訖其鎮官負數宜依前件

弘仁三年四月二日 後紀卷廿二 三律
太政官謹奏

增加出羽國官負事

大少目各一負 元負一人 今加一人

史生四負 元負三人 今加一人

右得彼國守從五位上勳六等少野朝臣宗成等解俚此國頃年戶口增益倉庫充實稽于遂初寔為殷繁又雄勝秋田等城及國府戎卒未息

三代格卷五

八

關門猶閑配此數處國司少負方今雖干戈不勳過城靜謐而豺狼野心不可不慎望請准人數增加官負者聖人垂教沿革在於適時元后臨民法令貴於便物然則雖設職合官既煥乎舊典而權宜改易事歸乎財成臣等商量所定如右伏聽 天裁謹以申聞謹奏聞
天長七年閏十二月廿六日
太政官謹奏

佐渡國今置掾一員

隱岐國今置掾一員

右件兩國僻在邊遠官負之少居上之人若有
事故者則典代之掌印求之道理良不穩便伏
乞更置件員以備職務謹錄事狀伏聽 天裁
謹以申聞謹奏聞

大同四年二月十九日 後紀第十七

太政官謹奏

三代格卷五

九

加增駿河安藝紀伊三箇國目各一員事

元一員今加一員

右案令條太國大少目各一人上國目一人而
檢案內尾張參河豐前豐後等惣廿七箇國並
居上國有大小目是則時々議奏所加置也而
今件三箇國猶依舊無加國掌執申散用不足
因茲計校田疇編戶与彼諸國無別伏望依件
加置以令齊同雖設官分職實有前規而隨時

制且豈關當代臣等商量所定如件伏聽 天
裁謹以申聞謹奏聞

仁壽三年六月八日 或本承和三年

太政官符

應加置周防國目一員事

右彼國守從五位下丹墀真人弟梶解備此國
与阿波國共上國而彼國有大小目此國只有
一員望請置大少目相濟公務謹請 官裁者

二代格卷五

十

右大臣宣奉 勅依請

嘉祥二年三月廿八日

太政官符

應加置甲斐國目一員事

右得彼國守從五位下少野朝臣貞樹解備周
防阿波等上國皆有大小目而至此國唯置一
員衆務斯多從事人少望請准彼兩國加件官
員謹請 官裁者右大臣宣奉 勅依請

藤良房

貞六
中三

仁壽二年二月廿二日 大德實錄第四

太政官符

應加置下野國掾一員事

右大臣宣奉 勅如聞此國地勢曠遠人居
疎闊至于巡檢官負數少宜加置件員為大小
掾

天安二年四月十四日 文德實錄第十

太政官謹奏

三代格卷五

十一

置加諸國介掾事

甲斐國 周防國

右十國今置介

能登國 丹後國 石見國 長門國

土左國 佐一手 日向國

右中國今置介

飛驒國

右下國今置掾

以前謹案令條上國有介中國無介下國無掾

今件等國或前為上國未備介職或國務稍繁

官負猶少或長官有故主典執印論之政途事

非穩便伏請甲斐周防新備介職自餘中國同

置介下國又置掾以適變通但至于安房若狹

佐渡大隅薩摩志摩等國雖有中下之名不足

備介掾職仍不入此例臣等商量具件如前伏

聽 天裁謹以申聞謹奏聞

三代格卷五

十一

貞觀七年三月十九日 三代實錄卷廿二五月十六日條載之但十九日作十日

勅如聞頃年諸國博士醫師多非其才託請得

選非唯損政名無益民自今以後不得更然其

須讀經生者三經傳生者三史醫生者太素甲

乙脉經本草針生者素問針經明堂脉決天文

生者天官書漢晉天文志 已北 三家薄讀韓楊要集

陰陽生者周易新撰陰陽書黃帝金遺五行大

義曆竿生者漢晉律曆志大衍曆議九章六章

周髀定大論並應令任用送被任之後所給公
廨一年之分必應令送本受業師如此則有尊
師之道終行教資之業永繼國家良政莫要於
茲宜告所司早令施行

天平寶字元年十一月九日

延紀第廿

太政官符

應明法生試通六七條任國博士事

右被右大臣宣稱奉勅明法出身与他業異

藤園人

三代格卷五

十三

通八已上乃預叙例七條已下皆為不第學者
於是倦習其業自今以後宜通件條任國博
士以勸生徒

弘仁四年三月廿六日

太政官符

應任國博士不限年紀事

右得式部省解僱太學寮解僱彼省去延曆八
年正月廿八日符僱鄉宣奉勅諸學生等年

不滿卅不得任用國博士者寮依符旨脩行久
矣今學生等志仰儒風勤求聖教借餘照於隣
壁競分陰於流年功成業畢不免貧寒而朝
制有限往年不任昔賈誼十八世稱才子漢文
召以除博士不疑十三人号神童魏武聞之拜
議郎唯論人才何拘年齒望請准據前典依件
任用仍請處分者右大臣宣奉勅依請

天長元年八月十六日

三代格卷五

十四

太政官符

一應傳非受業人任當國博士醫師事

六箇初

右諸國史生不任用當土之人及无位之輩

既存憲章件非業博士醫師依度格責解

由没公解用四年秩限傳受業師新等事一

同史生而至補任偏託令文尚依受業之例

無嫌當國之人名与實違事与情展自今而

後宜件色補任一准史生

延式
中三

以前被右大臣宣稱奉勅宜令依件遵行

元慶七年十月廿五日 三代實錄卷第四

太政官符

應大學典藥諸生若住學舍并鴻儒名醫子

孫依薦舉任諸國博士醫師事

右大納言正三位源朝臣能有宣奉勅如聞

年來諸國博士醫師從事之間或非其人今須

內藥生年勞一人之外及大學典藥諸生不經

三代格卷五

十五

課試者不得輒任之唯若住學舍頗堪採用者

雖非得試間以舉補勿令遂作空歸之恨又鴻

儒名醫子孫去親不遠等實無疑之輩假令不

得傳習祖業特修舉狀奏權任然則教授療治

之職無有非業碩德名士之後猶賴餘慶

寬平七年二月一日

太政官符

應省史生二人置博士醫師各一人事

貞式
中三

右得大和國解俣檢案內承前之例博士醫師

並補任而依太政官去延曆十六年四月六日

符俱從停止自今以後學道久廢救疾無望

請省史生二員依舊永置博士醫師者右大臣

宣奉勅依請五畿內諸國准之

弘仁十二年十二月二日

太政官符

應補五畿內并志摩伊豆飛驒佐渡隱岐淡

三代格卷五

十六

路等國博士醫師事

右被左近衛大將從三位兼守大納言行民部

卿清原真人夏野宣稱奉勅大學典藥生等

年卅一以上不而遂業者自今以後課試自讀

補上件十一箇國博士醫師庶幾無惟之操慰

穿壁之勞但卅歲以下不在此限

天長七年十一月十五日

太政官符

應傳對馬嶋史生置博士事

右得大宰府解傳嶋司解傳此嶋僻居溟海之外遙接隣國之場所任之史才非其人為政之要多蒙滯接陸之國皆備彼任絕域之嶋猶闕此官無師質疑不隣往問縱令諸蕃之客卒尔著境若有書契之問誰以通答望請特置件博士且以教生徒且以備專對者府加覆審所申有理謹請官裁者右大臣宣奉勅宜停史

三代格卷五

十七

生一員改置博士

弘仁十六年三月二日

弘仁十六年三月二日
弘仁十六年三月二日
弘仁十六年三月二日

太政官符

應補筑後肥前肥後豐前豐後五箇國醫師事

右得大宰府解傳謹案去神龜五年八月九日格云博士者惣三四國一人醫師者每國一人者又寶龜十年六月七日格云太政官去開五

貞式
中三

學生及第者補之

承和十二年七月十七日

續後紀第十五

太政官符

應置陰陽師一員事

右得出羽國解傳太政官去年六月十一日符傳國解傳遣要之事備豫為本不虞之儲知機為元此國與陸奧共為邊我雖復國有大少官負有降差而至決嫌疑何彼有此無也假令國

三代格卷五

十八

延式

內非無恠異占候吉凶曾無其人望請永減史生負殊置陰陽師謹請官裁者右大臣宣奉勅依請者而今雜務繁多官負減少望請不省史生置件員但考選俸新准博士醫師者同宣奉勅依請

嘉祥四年二月廿一日

太政官符

應置鎮守府陰陽師事

三代格卷五

九

右得陸奧國解倂鎮守府藤軍團之用卜筮尤要漏刻之調夕在其人而自昔此府無陰陽師每有恠異向國令占往還十日僅決吉凶若有機急何知物變請被言上將置件職者國加覆覈事誠可然望請始置其員令備占決謹請官裁者大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣冬緒宣奉勅依請

元慶六年九月廿九日

延式

太政官符

應改權史生為陰陽師事

右得中務省解倂陰陽寮解倂武藏權史生屋代直行款狀倂謹檢案內出羽武藏等國元來無陰陽師而依國解狀以陰陽生始置件職出羽号陰陽師武藏稱權史生靜尋事意理不可然望請准出羽國号陰陽師者寮依款狀申送者省依解狀謹請官裁者從三位守大納言

三代格卷五

廿一

弟左近衛大將行陸奧出羽按察使藤原朝臣基經宣奉勅依請

貞觀十四年五月二日

太政官符

應減史生一員置陰陽師事

右得下総國解倂此國接近邊要安不忘危不虞之戒非占難決望請減史生一員置陰陽師謹請官裁者右大臣宣奉勅依請

藤基經

貞觀十八年七月廿一日

延式上

太政官符

應傳史生一員置陰陽師事

右得常陸國解倂決疑之要必用占筮望請准武藏下總等國之例減史生一員置陰陽師謹請官裁者右大臣宣奉勅依請

寬平三年七月廿日

弘格式上

太政官符

壬代格卷五

世一

更加太宰府筆師一員

右得府解倂管内公文觸類繁多見任一人專勞勘會入部都之使遂差他官至被勘出不堪辨申望請蒙天裁旁加一人前件官負每年相換將令向京者右大臣宣奉勅宜依請

弘仁五年正月十三日

藤園人

弘格式上

太政官符

應太宰府省史生置弩師事

貞九兵式

太政官符

應補鎮守府弩師事

右檢案內件弩師寶龜以來式部補任始自大同二省牙補今被中納言兼左近衛大將從三

壬代格卷五

世一

位行民部卿清原真人夏野宣傳奉勅文武之職執掌各異鎮守之官須兵部補

天長五年正月廿三日

貞三中式

太政官符

陸奥國

應補弩師事

右得陸奥國解倂弓馬戰鬪夷狄所長平民數十不敵其一但至于弩戰雖有万方之獷賊不當一箭之機發尤是威狄之至要者也今在庫

中弩機牙差誤若有警急何忽調備望請准鎮
守府置件弩師其公解准一分給更不加舉謹
請官裁者推中納言從三位兼行左兵衛督
藤原朝臣良房宣奉勅依請

承和四年二月八日 續後紀第六

太政官符

應廢史生一員置弩師事

右得大宰府解備壹岐嶋解備此嶋所設器仗

三代格卷五

三三

之中有弩百脚而無人機調難備非常今新羅
商人往來不絕警固之事不可以暫忘望請廢
史生一員將置弩師仍請府裁者府加覆審所
申有理謹請官裁者右大臣宣奉勅依請

承和五年七月廿五日 藤三守

太政官謹奏

廢品官一員

大丰城 正七位上官一員

右檢案內依去和仁十四年正月廿九日論
奏傳主厨主船始置主船二員而今得大宰
府解備自傳主厨以來例貢御贄并諸供具
事觸類多闕望請省主船置主厨令各得其
所者伏望省大丰城永定一員但官位為正
八位上官

置品官二員

主厨一員 正八位上官

三代格卷五

四四

右制令之日肇置主厨所掌之職寢在蕃客
加以供御之儲不可闕之而依同前論奏既
從傳止伏望依彼府解更置件職

主船一員 正八位下官

右創法之時置主船吏而依同前論奏既從
傳廢如今得彼府解備案警固式云簡練舟
楫備於不虞者加以年中例貢絢綿并御贄
別貢物每年有數仍常雇民船多費正稅又

遣唐迴使、所乘之新羅船、授於府衛、令傳彼樣、是尤主船之所掌者也、其大唐通事有職、無掌望、請更置主船、俾兼通事、即充保人、令護其舟、然則公家無損職、掌有愁者、伏望更置件官、令攝兩職、

以前太宰大貳從四位上南淵朝臣永河等所請如件、夫觀時革制、為政之要、樞論代立、規格民之本務、是以明主、馭俗術非一途、哲后治邦、

壬代格卷五

第五

豈拘膠柱、臣等商量廢置、如右、伏聽、采裁、謹以申聞、謹奏、聞、

養和七年九月廿三日 續後紀第九

太政官符

應傳史生一負置弩師事

右得越前國解倂、此國西帶大海、遠向異方、戎器之具、不可暫緩、望請被給弩師、備之不虞、謹請、官裁者、大納言正三位兼行左近衛、大將

延式
上二

皇太子傳陸奧出羽、按察使源朝臣能有宣奉、勅依請、

寬平七年七月廿日

太政官符

應傳史生一負置弩師事

右得能登國解倂、此國獨出北、海東西不隣、若有非常、誰備防禦、望請准越後佐渡等國、被置件職者、大納言正三位兼行左近衛、大將皇太

壬代格卷五

廿六

子傳陸奧出羽、按察使源朝臣能有宣奉、勅依請、

寬平六年八月廿一日

太政官符

應省史生一負置弩師事

右得越中國解倂、此國有弩無師、不習機發、若有不虞、卒尔何為、望請省史生一負置弩師者、大納言正三位兼行左近衛、大將皇太子傳民部

延式
上二

延式
上二

卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請

寬平七年十二月九日

太政官符

應省史生一員置弩師事

右得越後國解倂此國東有夷狄之危北伺海外之賊防敵之兵弩是為勝望請省史生員永置件師教習其道以備不虞謹請官裁者從

三代格卷五

二位行太納言兼左近衛大將源朝臣多宣奉勅依請

元慶四年八月十三日

太政官符

應置弩師一員事

右得佐渡國解倂此國本夷狄之地人心強暴動忘礼義常好斂傷望請准出雲隱岐等國置弩師一員謹請官裁者下三位行中納言兼

延式
上二

延式
上二

延式
上二

民部卿藤原朝臣冬緒宣奉勅依請

元慶四年八月七日

太政官符

應減史生一員置弩師事

右得因幡國解倂被太政官去二月十二日符倂有堪弩師者擇定言上者因搜求部内黃文真泉元直宿衛能習弩術望請補之弩師勤備武衛者後三位守太納言兼左近衛大將行陸

三代格卷五

奥出羽按察使藤原朝臣基經宣奉勅宜減史生一人依請補之

貞觀十二年七月十九日

太政官符

應傳史生一員置弩師事

右得伯耆國解倂太政官去年二月十二日符倂堪弩師者擇定言上者謹依符旨歷試其術高市金守誠堪為師望請以件金守補任弩師

延式
上二

者從三位守太納言兼左近衛大將陸奥出羽
按察使藤原朝臣基經宣奉 勅依請但傳史
生一員永置師

貞觀十三年八月十六日

上延式
二

太政官符

應以權史生鴈高松雄遷補師事

右得出雲國解解謹案太政官去二月十二日
下當道符得大宰府解得大鳥集于兵庫樓

三代格卷五

廿九

上訪之ト茲當有隣國兵事者以聞新羅商船
時ト到着假令託事商賈來為侵暴忽无其備
恐同悞藏右大臣宣奉 勅居安慮危有國所
先慎先微防防南安民急務宜仰緣海國勤修武衛
屢加察俾慎慎作候又作候候調習以備機急兼
有堪為師者點定言上者今件松雄昔備宿衛
能習兵兵弩見其才略良堪為師望請遷補師
令傳其術秩限六年俸准一分謹請 官裁者

從三位守太納言兼左近衛大將行陸奥出羽
按察使藤原朝臣基經宣奉 勅宜依請補之
但史生一人待闕停止永補師

貞觀十二年五月十九日

三代實錄第十八

上延式
二

太政官符

應傳史生一員補師事

右得石見國解解被太政官去二月七日符得
津守稻利湊去二月廿二日任彼國師者國依

三代格卷五

三十

符旨任用已畢而今件師是新置之職至于
俸新未知據行望請准出雲伯耆等國例傳史
生一人充給其公廨謹請 官裁者右大臣宣
奉 勅依請

貞觀十七年十一月十三日

上延式
二

太政官符

應傳史生一人補師事

右得隱岐國解解被太政官去貞觀九年五月

廿六日符得新羅凶醜不顧恩義早懷毒心常為咒咀延者北卦之繇數告兵革卜筮之識不可不慎右大臣宣奉勅彼國地在邊要場近新羅警備之謀當異他國宜早下知殊令警護者此國素無弩師具又無其師望請省史生任弩師少大之賊應機討滅謹請官裁者中納言兼左近衛大將從三位行陸奧出羽按察使藤原朝臣基經宣奉勅依請

三代格奉五

批一

貞觀十一年三月七日 三代實錄第十六

太政官符

應傳史生一人任弩師事

右得長門國解得此國素置軍團調習兵戎而有弩機無其師若有不虞何得適用望請傳史生置弩師謹請官裁者大納言正三位兼行皇太子傳藤原朝臣氏宗宣奉勅依請

貞觀十一年十一月廿九日 三代實錄第十六在十二月二日條

延式
上二

太政官符

應傳史生一員補弩師事

右得伊豫國解得夫兵器之要莫先於弩而所有之弩機才差誤望請廢史生一員置弩師者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳民部卿陸奧出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請

寬平七年十一月二日

三代格奉五

批二

太政官符

應傳史生一員加置弩師事

右得大宰府解得謹檢案內格條去弘仁五年五月廿一日除史生一人置弩師一人若有病故誰補其闕望請重減史生加置弩師謹請官裁者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳陸奧出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請

延式
上

寬平六年九月十三日

延式
上二

太政官符

應傳史生一人置弩師事

右得太宰府解倂肥前國解倂凡器仗之威以
弩為本防衛之要莫不由斯望請傳史生一員
任弩師者府加覆審理誠可然謹請 官裁者
大納言云三位兼行左近衛大將陸奥出羽按
察使源朝臣多宣奉 勅依請

三代格卷五

廿三

元慶三年二月五日

太政官符

應傳史生一員置弩師事

右得太宰府解倂肥後國解倂此國地接海崖
防備隣賊雖有弩機無師講習望請省史生置
弩師者府依解狀謹請 官裁者左大臣宣奉
藤時平九
勅依請

昌泰二年四月五日

太政官符

應傳對馬嶋史生一員置新羅譯語一人事

右得太宰府解倂新羅之船來着件嶋言語不
通來由難審彼此相疑盤加致害望請減史生
一人置件譯語者右大臣宣奉 勅依請

加仁四年九月廿六日

藤國人

太政官符

置甲斐國牧監事

三代格卷五

廿四

右得彼國解倂此國所領牧与信濃國同頃年
蕃息漸多擊餉歲倍牝牡之數于今千余而至
當監事品秩稍卑按檢馬政於事無勢望請准
信濃國同置牧監謹請 官裁者云三位行中
納言兼右近衛大將春宮太夫良峯朝臣安世
宣奉 勅依請

天長四年十月十五日

太政官符

貞
九

應復舊加直信濃國牧監丁負事

右牧監元置二負而依太政官去天長元年八月廿日符減一負置一負今被右大臣宣稱奉勅宜復舊置二負其歷限并責解由等一依元符

天安二年五月十一日

勅給僉伏^二大宰帥八人大貳四人其事力及

新田并考選竝准史生例

三代格卷五

兼五

和銅元年三月廿二日^{統紀第四}

太政官符

加減僉伏負事

陸奥出羽按察使四人^{元三人今加一人}

鎮守將軍三人^{元減一人}

右被右大臣宣稱奉勅僉伏之數依件加減

弘仁三年四月七日

太政官符

延式
二上

貞兵
九

應停止遙授陸奥出羽按察使大宰帥等僉伏事

右中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉勅遙授官負不赴關府凡其僉伏於事無益自今以後宜從停止

寬平七年十一月七日

太政官符

應補鎮守將軍僉伏事

三代格卷五

兼六

右得式部省解稱補僉伏者此省所掌夫文武分職執當殊貫鎮守將軍兵部所任僉伏隨則彼省可補而被拘式自此省獨補論之理致可謂相違望請件僉伏令兵部省補然則各守其局不為違越謹請官裁者大納言從三位兼行右近衛大將民部卿藤原朝臣良房宣奉勅依請

承和十四年閏三月廿五日

貞式
中二

太政官符

應置出羽守僅伏一負事

右陸奥出羽邊要之地廣俗難馴古來有稱而陸奥守殊給僅伏出羽守獨無其負兵革之事先聲後實縱有警急何以威之被太納言正三位勇行右近衛大將良峯朝臣安世宣倂奉勅宜准陸奥之例補之

天長五年四月十四日

三代格卷五

弘格
下三

太政官符

應選白丁補太宰府使部事

右檢案內太政官寶龜四年八月十六日符倂太宰府使部自今以後宜取外散位補之若有不堪驗使者選用白丁不得過廿人者今被太納言從三位神玉宣倂奉勅改前負定世人

延曆十六年四月十三日

官負并官位事

勅中納言准格正四位上此則職掌既重尚少自今以後宜改為從三位官

天平寶字五年二月一日 統紀第廿三

勅准令彈正尹者從四位上官之位已輕人不敢畏自今以後改為從三位官王者施行

天平寶字三年七月三日 統紀第廿二

定官位事

此四字應在太政官謹奏次

三代格卷五

弘格
細八

太政官謹奏

近衛府

大將一負

右元正四位下官今定從三位官

衛門府

督一負

右元正五位上官今定從四位下官

佐一負

右元從五位下官今定從五位上官其左
右兵衛等府伏請一准此府

左右兵衛府

今加少尉各一員少志各一員

右件任居禁衛職資警守部統之方無異庶
府而官員是少行事稍多伏請加置件員充
理府事其官位者前後一准衛門府

以前雖設官分職令負有限而斟酌閑繁取捨

三代格卷五

廿九

時宜恒典通論善政所先今者衛府寄隆職務
尤重伏請使昇量品員爵秩相當臣等商量所
定具件如前謹錄事狀伏聽 天裁謹以申聞
謹奏聞

延曆十八年四月廿三日 後紀第八

太政官謹奏

擬定位階事

內侍司

尚侍二人

右件祿令准從五位今准從三位官

典侍四人

右件祿令准從六位今准從四位官

掌侍四人

右件祿令准從七位今准從五位官

右謹檢令條尚侍者供奉常侍奏請宣傳典侍
者若無尚侍代掌宣傳掌侍者雖不得奏請而

三代格卷五

臨時處分得預宣傳由茲准量所務是重而准
位猶卑祿賜欠少伏望昇進爵級品秩相當臣
等商量所定如前謹錄事狀伏聽 天裁謹以
申聞謹奏聞

大同二年十二月十五日 類聚國史卷十

太政官符

改定左右京職大夫官位事

右案官位令云五位上官今被右大臣宣稱奉

貞式
上二

勅宜為從四位下官

加仁十三年正月廿六日 類聚國史第百七

太政官謹奏

按察使

令准正五位階祿純五正
綿五正布十二端銀廿一口

記事

令准正七位正
綿二正布四端銀十五口

右國郡官人漁獵黎元靈害政法故置件司

彈非違肅清新詐既定官位宜令有祿新其按

察請准正五位官記事准正七位官給祿謹置

三代格卷五

議如前伏聽 勅裁謹以申聞謹奏

養老五年六月十日

奉 勅朕之股肱民之父母獨在按察不可同

等宜更加祿一倍仍隨風土所出通融相折餘

依奏自今以後永為恒式 統紀第八

太政官謹奏

應增陸奧出羽兩國按察使位階事

右謹檢案內去養老五年六月十日奏用件官

加格三
式下上

私式格
三下

品准正五位上亦來流行以至今日臣等商量

方面之任威風所存夷囚之侶瞻仰是賴然則

職重階輕管大勢少伏望增階品為從四位下

官將優賜守且鎮物情臣等商量具件如前伏

聽 天裁謹以申聞謹奏聞

加仁三年正月廿六日 後紀第十二

太政官符

應改大宰大貳官位事

三代格卷五

兼主

右被右大臣宣稱奉 勅准令太宰大貳是正

五位上官自今以後宜改為從四位下官

延曆廿五年二月十三日 後紀第十三

太政官符

定文章博士官位事

右依去天平二年三月廿七日格置件官自定

正七位下官今被右大臣宣稱奉 勅案唐令

國子博士正五品上官其文章博士宜改易前

貞式
上二

加格三
式下

格定從五位下官

弘仁十二年二月十七日

太政官符

應加增等博士位階事

右得主稅頭從五位上兼行等博士家原宿祢氏主等解狀保謹案令條音書等三道博士並置從七位上官去神龜五年初置律學為正七位下官其職田明法四町音書等各三町因茲

三代格卷五

事

去仁壽元年五月十七日准明法加等博士職

田惣為四町至于位階未有加進望請准明法

博士加增位階列明法次謹請官裁者從三位

守大納言兼左近衛大將行陸奥出羽按察使

藤原朝臣基經宣奉勅依請

貞觀十三年十二月廿七日

太政官謹奏

大外記二人

右二員元正七位上官今為正六位上官

少外記二人

右二員元從七位上官今為正七位上官

以前項年之間前件一官職務繁多觸途急劇

詔勅格令自此而出至於官品實令昇進臣等

商量改張具如前件謹錄事狀伏聽天裁謹

以申聞謹奏奉勅依奏

延曆二年五月十一日 統紀第八

三代格卷五

太政官符

今定內記四人

大內記二人

右依舊正六位上官

少內記二人

右定正七位上官

以前右大臣宣奉勅如件

大同元年七月廿一日

續後園史第百七有兼中內記之云而關此事

貞式
上二

太政官符

應增勘解由使官人位階事

長官一員

元從五位官今定從四位下官

次官一員

元正六位官今定從五位下官

判官三員

元正七位官今定從六位下官

主典三員

元從八位官今定從七位下官

右彼使奏狀併謹檢案內太政官去延曆十七

年七月廿日下式部省符併被太納言元正位

三代格卷五

神

王宣併奉勅使人等職是要重宜依件官

位永賜季祿者然而未嘗有以五位任長官以

六位補次官是實職掌不疎拘放事重之故也

以此觀之拜除已違先符位階猶據舊例因茲

四位之人還守五位之職五品之輩更居六位

之官論之官位誠不相當使等伏請加增位階

依件被定謹聽 天裁者右大臣宣奉勅依

請

藤原相

貞式
上二

太政官符

天安元年十一月十日

應定巡察屬官位并預馬新事

大屬元六位上官 少屬大初位上官

右得禪正堂解併依太政官去年十二月廿九

日符新置巡察大少屬各一員而未定官位亦

不預馬新望請准例被定官位并預馬新謹請

慶分者中納言兼左近衛太將從二位行民部

三代格卷五

卿

清原真人夏野宣奉勅其依件定之但馬

新給八位官一人新

天長四年八月廿八日 類聚國史卷百七

太政官符

定修理職官位事

右太政官去延曆十五年七月廿四日下式部

省符併造官職官位宜准中宮職但大屬特為

七位官其馬新者少屬已上人別給之又和仁

延式
上二

延式
上二

九年七月十九日符傳修理職官位馬新季祿
等准廢造官職者右大臣宣奉勅件職官位
宜仍舊貫

寬平三年八月三日

太政官符

應定伊勢太神宮司大少負并位階事

太宮司一員

右正六位上官

三代格卷五

少宮司一員

右正七位上官

以前得神祇官解傳檢案內太神宮司元置從
六位官一員而去貞觀十二年更加一員今件
兩司大少無別職掌有同各稱受領交為爭論
甲之所行乙還妨之執論之間政事擁滯望請
定大少負并位階遷替之日分付受領一准長
官任用者正三位行中納言兼民部卿藤原朝

弘式
下三

臣冬緒宣奉勅依請

元慶五年八月廿六日 三代實錄第卅

太政官符

炊部司長官主典官位事

右得齊宮寮解傳件司元長官一人而今改置

長官主典未審官位仍請處分者右大臣宣奉

勅宜准舍人藏部等司官位

大同三年八月三日 後紀第十七

三代格卷五

太政官符

准陸奥國博士醫師官位事

右被太納言正三位紀朝臣古佐義宣傳奉

勅上件二司自今以後宜准少目

延曆十五年十月廿八日 後紀第五卷廿二已卯條

太政官符

定太宰府明法博士官位事

右得彼府解傳去延曆十八年始置件官而未

弘式
中三

弘式
式上

定官位謹請 官裁者左大臣宣奉 勅宜為
後七位下官

天長二年五月廿五日 類聚國文第百七

太政官謹奏

應以坊令准初位官事

右謹案令條左右京職每條置令一人督察所
部惟人是囑而任居要籍秩无徵俸至于除補
競事辭通伏望准少初位下官給祿優恤其身

三代格卷五

九

令勤職掌臣等商量如前伏聽 天裁謹以申
聞謹奏聞

延曆十七年四月五日 類聚國文第百七

定内外五位等級事

太政官謹奏

内外五位不合同等事

右謹案官位令外名之興者自五位上階
訖後五位下階於内相當惣是四階又援選

弘格三

令應

叙令云凡内外五位以上勅授者准祿令云
五位以上不在食封之例直稱正屯之數則
知内外之目舊來殊号祿新之色未有處分
禮數等級豈令同科自今以後隨名異秩以
外則別姓高下以內則擇家門地其五位以
上子孫歷代相襲冠盖相望并明經秀才堪
國家大儒後生袖領者即選内位餘選外位
但得外位後積其功效應入内位者便叙當

三代格卷五

五

位當階不須連延日時其別勅特授不拘此
式

外五位

右考限選叙一依令條其緣神祇官事雖有
卜食者不合免充 伊勢神宮奉幣帛使
忌部不若因公使應給驛傳者驛馬四疋傳
馬六疋如非元日有應致敬者内八位外七
位并拜外五位若有步行僧尼忽逢道路者

下馬過去其每年進薪以三荷為限欲令家人奴婢居住市廛興販即聽其有斷罪行刑之日不得乘馬辭決及自盡私家自餘依令位祿位田贖物

右內位祿折減半給之如元故不上經一年者傳給女減三

位分資人

右外五位五人外從五位四人女五

三代格卷五

十一

蔭其子事

右外五位嫡子從八位上庶子大初位上外從五位嫡子從八位下庶子大初位下並嫡子補大舍人并大學生不得任內舍人其庶子補二宮舍人及諸司史生帳內職分資人等之色即有犯罪者准犯配決不須蔭贖夫並

父妻

右其父從免課役之例妻者得外命婦之号夫並

不入朝參之例

以前奉勅刪定內外五位貴賤差別臣等商量具件如前謹以申聞謹奏奉勅宜依前件永為恒式歲本有年考

神龜五年三月廿八日 續紀第十

勅惟王建國制軒冕而旌賢惟帝念功設爵賞以御衆用能翼亮洪基弼諧斯業詳觀列代咸皆由之省去神龜五年奏五位已上子孫累世

三代格卷五

十一

冠蓋及明經秀才堪為儒者即叙內位自餘先叙外位積勞入內其外位祿位田贖物者給內位之半女減三蔭子之階正五位嫡子從八位上庶子大初位上從五位嫡子從八位下庶子大初位下並補大舍人不任內舍人位分資人正五位五人從五位四人女並是所以別內外差降品秩也其自外入內叙當位之階則優昇超次會議未允至於行刑之日不聽辭決論

不恐以
呼朕上

五十三

太政官謹奏

真式
中三

統紀第

七代摺卷五

承和五年七月三日

真式
中三

遠遊人

不可通計前歷者而今備前國守從五位下橘朝臣海雄去年二月十一日遷左少弁未預參間更復本職欲計前歷已出遷任內官之詔將為新任未有向京預參之勞凡為外國司立其歷限通計前歷者計人功效欲均勞逸而偏依式文更為新任實非立限之意論之理致甚無公平又交替式云遷代之人必付解由然則非被放還無須預參繇此言之自非豫參之徒何

三代格卷五

五十五

入新任之貫望請雖遷內官未豫參前更任外職通計前歷其得放還入京豫參同新任例尚如式文如此則秩限自分勞逸將均謹請官裁者右大臣宣奉勅依請

承和十五年三月廿二日

統後紀第十八

太政官謹奏

加增府官及管内諸國司相替年限更

右筑紫大宰遠居邊要常警不虞兼待蕃客所

弘格正
弘格二

中書
右省
左省

有執當遠殊異諸道而官人相替限以四年送故迎新相望道路府國困弊職此之由加以所給厨物其數過多每年守舊例死給或關蕃客之儲於事商量甚不穩便臣等望請且停交替新無官人歷任增為五年然則百姓有息肩之娛庖厨無懸磬之乏謹具錄狀伏聽天裁謹以申聞謹奏聞

寶龜十一年八月廿八日

統紀第廿六

三代格卷五

五十六

太政官符

應鑄錢司秩定六年更

右太政官去天長八年三月五日下午式部省符偁大納言三位無行左近衛大將民部卿清原真人夏野宣奉勅件司遠置周防赴任之吏不異國司自今以後秩滿解任一准國司但鑄錢師等非此限者今被右大臣宣偁奉勅鑄錢司職此異國司四年為限多累交替宜前

貞式
上二

府司
心史

司府更定六年

二續文

承和二年三月十五日

續纂國史第百七本史關此事

太政官符

應周防國守兼任鑄錢司長官者四年為秩限事

貞式
上二

右撰格所起請備太政官承和二年三月十五日符備件司遠置周防秩歷之期宜定六年者如今國守為例兼任彼司長官於是國守秩限

三條卷五

五十一

四年長官歷期六年然則國守秩滿長官亦傳格文与夏誠有相違伏望令國守帶長官者以四年為限者中納言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經宣奉勅依請

貞觀十一年二月廿八日

日本書紀三代實錄作十年六月廿八日

太政官符

應才長上秩六年為限事

鑄錢師一人 作錢形師一人

右得鑄錢司解備件長上是終身之任无有秩限任此職者亦無他望今作鑄之生望在長上

守待終身闕恨無所進望請以六年為秩限以勤後生謹請 官裁者右大臣宣奉勅依請

齊衡二年九月十九日

藤原房

太政官符

立施藥院使歷限事

右被右大臣宣備奉勅夫歷限任終身人僕

貞式
上二

三條卷五

五十一

成功今件使等未立歷秩之限恐有怨望以四年為限

嘉祥三年七月廿六日

太政官符

應乳長上歷六年為限事

右得宮内省解備典藥寮解備檢案内難波長柄豐前宮御宇 天皇御世大山上和藥使主福常習取乳術始授此職自斯以降子孫相承

貞式
上二

貞式
中三

世此居此任至今不絕而今終身在職漸致懈怠
急望請簡補氏中韓了者以六箇年為限者大
納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察
使藤原朝臣冬嗣宣奉勅依請

弘仁十一年二月廿七日

太政官符

應鎮守府醫師秩六年為限事

右先例以五年為限今被右大臣宣稱奉勅

三代格卷五

五十九

宜改彼例六年為限

貞觀八年十二月五日

太政官符

應諸國檢非違使立秩限并傳補无位人更

右檢案内把笏帶劍威儀不輕糾察追捕職掌

惟重而年來所任不必其人官縱雖卑選何疎

略者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子

傳陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅宜

弘式
式上

自今以後傳補无位人并以六年為一秩准職
非永例隨時廢置先任之輩秩限滿則不待替
人直從解任

寬平六年九月十八日

太政官符

應延陸奥國史生并醫師歷事

右按察使正四位下藤原朝臣續調奏稱鑑檢

案內太政官去大同二年十月二日符傳初

三代格卷五

六

位已上長上官遷代皆以不考為限又同年十

一月廿三日符傳史生不改此例者而此國去

京眇遠公辭數少在國殊營防戎歸家既乏路

糧臣請此一國改史生歷六年為限者右大臣

宣奉勅准西海道諸國五年為限醫師准此

大同五年三月一日

太政官符

應出羽史生并醫師歷五年為限事

弘仁三年十一月十五日

弘仁三年十一月十五日

右得參議從三位行大藏卿陸奧出羽按察使
勲四等文室朝臣綿麻呂奏狀稱被太政官去
大同五年六月廿二日符傳陸奧國史生之歷
宜准西海道諸國五年為限努師准之者陸奧
出羽俱是邊要望請件人等歷五年為限者大
納言正三位藤原朝臣園人宣奉勅依請
弘仁三年十一月十五日 後記第三
太政官符

三代格卷五

十一

國司并史生歷五年為限事

右太政官今月十一日下陸奧出羽兩國符傳
中納言兼右近衛大將從三位行陸奧出羽按
察使勲三等巨勢朝臣野足奏狀稱謹檢案內
依太政官去弘仁三年十一月十五日符件兩
國史生歷任五年為限而據去年七月十七日
論奏四年為限唯西海一道五年如常愚臣商
量邊要之設東西是同伏望兩國司等皆准西

弘仁七年正月十二日

三代格卷五

十一

海道五年相替廢令忌遠路之疲專邊守之勤
者右大臣宣奉勅依請

弘仁七年正月十二日

太政官符

努師歷任五年為限事

右太政官今月十一日下陸奧出羽兩國符傳
中納言兼右近衛大將從三位行陸奧出羽按
察使勲三等巨勢朝臣野足奏狀稱謹檢案內

依太政官去弘仁五年十一月十五日下陸奧
努師歷任五年為限而據去年七月十七日論
奏四年為限唯西海一道五年如常愚臣商
量邊要之設東西是同伏望兩國努師皆准西海
道五年相替廢令忌遠路之疲專邊守之勤者
右大臣宣奉勅依請

弘仁七年正月十二日

太政官符

弘仁七年正月十二日

應諸國弩師秩限一准史生事

右得式部省解倂檢案內弩師之興始自遼要陸奧出羽大宰府及壹岐對馬皆准史生限五年伯耆隱岐二國各准史生限四年而因幡出雲長門等國偏國解徒限六年伏尋物情陸奧出羽之在絕遠尚限五年因幡出雲之居中國何得六年求之物情竊所不安望請件等弩師一准史生以為秩限望請官裁者正三位行中

三代格卷五

六十五

納言兼右近衛大將皇太后宮大夫藤原朝臣良世宣奉勅依請

元慶二年二月三日

交替并解由事

太政官符

應令權任官長待受領之人事

右得勘解由使解倂檢案內太政官去嘉祥元年十二月十四日下諸國符倂權官秩滿年終

貞式
中三

待所司申下解任符其延歷者更不下符而或

漏失不行使人致疑或稽延未到於事成累誠遷替之限憲章已明至於權任何煩仰下右大臣宣奉勅且傳下符直令去任唯獨為官長者可待受領之人若介在任便即勘付者據檢此格事不穩便何者一國之政上下共行勘知之後更有何疑而長官秩滿之日勘付同任之介事非法式理不可然望請雖介在任至獨為

三代格卷五

六十四

官者待受領之人謹請官裁者中納言從三位兼行左近衛大將藤原朝臣基經宣奉勅依請

貞觀九年十一月十一日

三代實錄第十四

太政官符

應內外官交替限內量付領并所執寫署程

右交替之政式文具存分付受領前後無爭而

雜延

頃年人心多岐遵行失旨或新司造不与解由
狀限日促迫乃示前司ハハ無程所執不進其
署因茲爭論自發經年成煩人多愁訴政致擁
滯中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫
藤原朝臣時平宣奉ハハ勅自今以後宜ハハ六分交
替之程四分ハハ為付領之期一分ハハ為所執之程一
分ハハ為繕寫署印之限然則彼此無訟公務不滯

寬平七年七月十一日

三代格卷五

六十四

太政官符

應聽交替一度延期事

右國司交替不論大小皆定百廿日令終其付
領是乃朝章畫一牧宰奉法之意也而前後司
稱有病故申延期狀事不獲已時聽所請國掌
偏鼎申請之被許還忘交替之有限遂使五六
箇度頻經言上論之公途理不可然者左大臣
宣奉ハハ勅若有申請須聽一度在京諸司外宜ハハ

准此

延喜二年三月十三日

太政官符

諸國所申交替之政延期解文事

右承前之例前件解文收於解官即仰於省今
被大納言正三位兼行左近衛大將陸奧出羽
按察使藤原朝臣冬嗣宣備宜自今以後辨官
判下於省

三代格卷五

六十六

弘仁九年六月十三日

太政官符

應進解由事

右被右大臣宣備奉ハハ勅如聞在京諸司紛失
公文不檢孔目或館舍破損或公廨欠失自今
已後遷替之人須責解由其件三色之物付分
受領過限等類准狀科罪一同國司自今以後
永為恒例

式弘

兵弘

大同四年十一月十三日

類聚國文第八十

太政官符

應收解由事

右太政官去大同四年八月廿九日下彼省解由樣云得替解任遷任遭喪卒死等類若乖違者必擬却者頃年省勘一守此格今檢案內諸國司等任符之例只錄後司不注前人因茲在外之官不知前案之遷至於解由猶注解任實

三代格卷五

六十七

以違樣遂從勘返改正之間使移日月蒙奪職祿今被右大臣宣稱務崇簡易古今通論宜諸司遷他國及京官之人解由者解遷兩字相通收之

弘仁七年五月十五日

太政官符

畿內七道諸國司解由狀事

右案公式令云官人判事案成自覺不盡者聽

弘雜

舉牒追改又名例律云公吏失錯自覺舉者原

其罪因茲准量雖前司既得解由後人若不盡而覺舉者無妨追返頃年所行良無法意而檢去延曆廿三年勘解由使所奏交替式云新任國司檢物違法今須交替之日欠負之物令細搜勘一度申畢若有遺漏事須覺舉一舉之後不許更申如猶不謹再三追申此乃受領之後更致欠損仍須物徵後人罪同前格以此觀之

三代格卷五

六十八

交替之日須一覺舉與解由後卒不可舉然則使奏之日已破法意破法之後何乖式旨今被右大臣宣稱奉勅隨時制宜古來攸同自今

以後覺舉之事一依式例若與解由之後猶有遺漏雜事即罪署人再令填償其前任勘付新司受領務從精細勿致疎畧

大同四年二月二日

太政官符

應前後國司共署不与解由狀事

右得山陰道觀察使近衛中將從四位下安陪朝臣兄雄解併國司交替式例具備決付領之煩以斷新舊之論也而比年諸國司等交替之時彼此相論各是已言申請諱譁或稱新任之官所勘乖理解任之人尚被抑屈或稱分付受領是非其任同時之官託言一人如此之類觸途繁多聽訟之官時勞勩鞠成案之吏徒煩刀

三代格卷五

五十九

筆若殊不立例監訴難過今須交替對檢之日情有不安甄錄所執載不与解由之狀前後共署限內言上不得彼此違各申請然則是非之端已明割斷外無稽擁望請下知當道依件令行如慣常不悞尚致違犯置之恒典不可寬宥者被右大臣宣併依請其餘道并五畿內亦准此

藤内唐

大同二年四月六日

式弘

太政官符

應前後官人共署不与解由狀事

右太政官去大同二年四月六日下五畿內七道諸國符併交替對檢情有不安甄錄所執之旨載不與解由狀前後共署限內言上不得彼此各通申請者今被右大臣宣併諸司准此

弘仁六年十月四日

藤内人

太政官符

三代格卷五

六十

應申請釐務未得解由人解任事

右得式部省解併檢案內被太政官去弘仁十三年八月廿八日符併得省解併去天應二年二月五日左大臣宣諸司官人兼帶國司解國司任之後百廿日內不進解由者不得預釐務又未得解由人任諸司官有宣許釐務者釐務之後百廿日內不進解由且申送之者自介以來未得解由之輩申官解文注云應停釐務今

藤内名

案交替式云遷任國司及新任之人分付受領
 過百廿日解却見任并奪俸折但五位以上未
 得解由一依勅文重奪位祿食封者先宣後格
 輕重不同復須准式文申解任但未得解由新
 任職者更計百廿日猶獨從前宣謹請 官裁
 者右大臣宣依請者熟案前解頗有不盡何則
 任遷任未得解由之輩省申解任之後彼輩有
 所執未勘定之間官告知狀若知之彼國司

三代格卷五

十一

百廿日京官六十日過此程限獨不報解者
 解任是承前之例也因茲每過程限重申解任
 弁官緣非格旨後排却若不覆申恐乖公平望
 請猶從前例以為後式謹請 官裁者心三位
 行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峯朝臣
 安世宣依請

天長三年十月七日

太政官符

應立依理不盡返却京官不与解由狀程限
 事

右得勘解由使解偏太政官去承和九年八月
 廿二日下諸國符併案交替式凡國司交替官
 符到後百廿日內付畢歸京若違此傳留灼然
 合解又雖交替訖未得解由遷任之人不得居
 官無職之徒不許直寮令諸國所色進不与前
 司解由之狀依理不盡返却而或國司事辦申

三代格卷五

十一

經年不進或國僅雖違之理亦不盡國事辦申
 未免抑屈之愁後司衛終四年之秩右大臣宣
 自今以後除行程外限廿箇日早令弁申若過
 限不進罪同前格又在无職人同立格文而曾
 不遵行若令此徒同致其愁五位則奪俸祿云
 位則奪公解三分之一者今格當立外國之例
 未見京官之程朝章所施內外何異望請在京
 諸司十箇日內即令辦申若過此限者不論上

下奪其季祿謹請 官裁者中納言從三位兼
行左近衛中將藤原朝臣基經宣奉 勅依請

貞觀九年十一月十一日 三代實錄第十四

太政官符

應立依理不盡返却京官不與解由狀程限
事

右太政官去貞觀九年十一月十一日下諸司
符解得勘解由使解解太政官去承和九年八

三代格卷五

七十五

月廿二日下諸國符解案交替式凡國司交替
官符到後百廿日內付畢歸京若違此停留灼
然合解又雖交替訖未得解由遷任之人不得
居官无職之徒不許直寮今諸國所進不與前
司解由之狀依理不盡返却而或國寄事辨申
經年不進或國僅進上理不盡因茲前司未
免抑屈之愁後司衛終四年之秩被右大臣宣
解自今以後除行程外限廿箇日早令辨申若

式延

式延

過限不進罪如前格又在无職人同立格文而
曾不遵行若令此徒同致其愁五位則奪位祿
六位則奪公解三分之一者今格當立外國之
例未見京官之程朝章所施內外何異望請在
京諸司十箇日內即令弁申若過此限者責同
外國但六位奪其季祿者今檢撰格之日頗有
增損若過此限之下那除責同外國之句奪其
季祿之止改作不論上下之辭雖一句半辭改

三代格卷五

七十四

易是少而解官奪奉科費不同者從二位行太
納言兼左近衛太將源朝臣多宣奉 勅宜依
彼本符更令改行

元慶四年十月七日 三代實錄第十八

太政官符

應行雜事二條

一應不依前司以往雜事未辨濟拘絆後任人
事

右得大宰大貳從四位上藤原朝臣保則解
狀傳管内諸國調庸未進租稅未納及所司
勘出種々雜怠觸類繁多前司分付之日後
司具注不与解由狀言上勘解由使勘判云
前司同伍後任相共辨濟者謹案勘判旨雖
以往之急在各時吏而勘判之例延及後任
者為令後任之吏兼濟以往之事也而今當
時庶務尚難營辦往年雜怠何暇究成靜尋

三代格卷五

年五

事理知吏難堪何者或國司悉身徇國無有
闕政然而去任之日猶糾前事遂使勤惰相
混功過不朋良吏沈滯職此之由或國司到
任之初見舊累難可脫已愛勤王之節還成
顧私之慮望其清慎不可得今反覆事意
討論利害与其空責以往之急不如先勸當
時之績望請國司若有任中雜務并濟無闕
者特寬以往之急勿令拘絆其身但調庸租

稅國之大事其租稅者元有徵率之例調庸
未必有例重望准租稅徵率以為當時之務
又若有當時之外更濟舊事及過徵率分者
隨其功效將進爵級
一應進解由吏有任中調庸雜物未進者返却
解由事

右同前解狀傳貢進調庸既有程限吏度國
用家為太要因茲違期廢惡等之責載在格

三代格卷五

年五

條而或國司頻致未進動關國用至于遷督
通被放還承前之例所以知其有怠猶收解
由者為令後任之吏相代辨填然而當任之
務每多擁滯以往之事不遑兼濟是以調庸
未進逐年根積公家支用臨事闕乏論之政
途理須乖例望請國司進解由之日若有任
中調庸雜物未進者返却解由令慎將來
以前左大臣宣奉勅依請自餘諸國亦宜准

此

仁和四年七月廿三日

太政官符

應勅却不受調庸惣返抄國司解由事

右太政官去仁和四年七月廿三日下五畿内七道諸國符傳國司進解由之日若有任中調庸雜物未進者返却解由令慎將來者而諸國或偏進調庸二色未必責例進雜物或僅勅納

三代格卷五

廿七

官新遂無勞封家調庸如是之漸積習成常論之政途理不可然大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅不受任中調庸惣返抄諸國官長解由自今以後從返却但前司任終年返抄者依寬平三年九月十五日符令後任之吏辨濟受取

寬平八年六月廿八日

太政官符

應依舊遷替吏隨填交替差分放解由事

右得駿河國解傳太政官去年七月十一日符傳任用之吏政無自由而其不与解由狀載國中前後諸未辨濟事詳檢事意曾無益中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉勅自今以後且諸國任用之吏被申不与解由狀只令載其預事及身死但至

三代格卷五

廿八

犯用官物則一人有犯餘官同坐仍如格或又受領卒死之間任用行事若有借判署犯用之色者後司進實錄帳之日不待犯人解退細錄其狀直以申官其待裁之間莫預釐務者謹案交替式云任中未納雜官指觸色有數國司史生以上共作差法各填已分且給解由者又既庫律云財物安置不如法若曝涼不以時致損敗者計所損敗坐贓論減二等注云皆以官長

為首以下節級為從者又云舊說云國司郡司共糾同罪其備償之法中分其物半分國守以下作差填之半分郡領以下作差填之者今如官符任用之吏非有預事及身犯者皆可與解由至于未納官稻損敗財物惣可負官長一人若所負數多則填進無期官物自失望請前後未辦濟事依新制而可免多少交替欠物存舊典以不改然則奸避之輩自絕官物之類無有

三代格卷五

主

謹請官裁者左大臣宣奉勅依請諸國准此

寬平八年九月五日

太政官符

應立拘放諸國任用吏解由例事

右勘解由使奏狀備謹檢太政官去寬事七年七月十一日符傳諸國任用之吏被申不與解由狀只令載其預事及身犯但至犯用官物則

若預事及身犯者皆可與解由至于未納官稻損敗財物惣可負官長一人望請前後未辦濟事依新制而可免多少交替欠物存舊典以不改然則奸避之輩自絕官物之類無有

大下
悉脫
物字

一人有犯餘官同坐仍如格式者又去年九月五日符傳得駿河國解備今如官符任用之吏非有預事及身犯者皆可與解由至于未納官稻損敗財物可負官長一人望請前後未辦濟事依新制而可免多少交替欠物存舊典以不改謹請官裁者右大臣宣奉勅依請諸國准此者謹案交替式致調庸雜采未連燒亡官物官舍器仗破損者奪國守以下公廩調庸奉

三代格卷五

十

惡違期者名長官以下節級低坐然則除預事身犯一人有犯餘官同坐填交替欠差分之外猶有此累載式之事或存式傳至于拘放當致疑殆又貞觀十四年七月廿九日格云所欠之物相共填納所坐之罪獨科其身者而新格云一人有犯餘官同坐仍如格式者交替式與貞觀格其趣是殊而今如格式當有一定若為處分者同宣奉勅前後之格指歸不同雖多變

改未究情實何則雖延曆立犯用餘官同坐之
格與貞觀有欠物共填罪科犯人之符至于寬
平七年不詳改張之由更引延曆之符今須復
貞觀格行之不可依寬平符坐之加以出舉收
納計帳朝集之政非獨長官之所行皆遣僚下
分頭巡檢租稅雜米官舍驛家之類不是受領
之自為各差任用為之專當粗舉大綱自餘可
知然則一為專當之官預分頭之務四度公文

三代格卷五

八十一

難避失錯一國雜急豈得免脫況乎在任之日
既得公解秩滿之時何許負累而寬平七年符
唯舉預復與身犯同八年格偏指交替之欠員
調庸雜米未立其制為政之道理不令然今須
若申不與解由狀者注載雜急勘留公解一如
前例若與解由者唯令所司勘申奉使專當急
何則與解由時尋其關急勘沒公解徵用私物
至于不取返抄不勘公文則急在長官責非任

私物二字

用私物至于不取返抄不勘公文則急在長官
責非任用故也立此一例以明受領任用之別
寬平九年四月十九日
太政官符

應進會赦帳之後放解由事

右被大納言心三位兼行右近衛大將民部卿
陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣備奉勅
如聞會去年七月十四日八月廿七日兩度恩

三代格卷五

八十二

赦諸國未得解由之輩或新司偏緣洪恩只
放解由至于造會赦帳令加其名寄交彼此拒
以不署此則乖詔書所指復似隱舊茲須彼
帳進官之後乃與解由但後司所勘更有不平
准不與解由狀加所執不前被放許之類奸遁
不署錄狀言上其未署之間五位已上不論京
官外任及散位惣奪位祿六位以下同沒季祿
公解無職之人不預叙用

承和十年七月九日 續後紀第十三

太政官符

應定造大輪田泊使遷替年限事

右被太納言三位弟行左近衛大將民部卿清原真人夏野宣傳奉勅件使一任永用既倦成功自今以後六年遷替功過灼然置事褒貶其替之日宜責解由

天長八年四月廿一日

三代格卷五

太政官符

應停止未得解由五位以上入京夏

右得勘解由使解傳被太政官去年十二月十三日符傳大政官承和九年八月十五日下午太

後紀第十三

宰府符傳太貳從四位上藤原朝臣衛奏狀傳交替務畢未得解由之徒寄事於符肯留住管

三位紀

內常好農商侵漁百姓巧為奸利之謀未觀填納之物望請交替畢更早從入京者右大臣宣

源常

第七
物作爲
懸

奉勅依請但勘修不与解由狀之日欠負官

物灼然令填見賊在身奪令填償其所填之物

具錄言上者今檢案內太政官弘仁十三年八

月廿五日符傳右大臣宣奉勅諸國司等在

任之吏只拘解由無意徵物去職之人自推難

填不愁拘留官倉罄空職此之由今須交替之

日犯用欠負損失之物隨即徵物使身勿更延

引物填侵畢仍聽放還者然則欠負之輩未得

三代格卷五

八十四

解由之間不可輒得入京若為處分謹請官

裁者左大臣宣奉勅宜停止後符依前格行

之但情樂留住不填欠負所行乖憲為拘所悉

具狀言上隨即處分

五一本

承和十五年五月十四日

太政官符

應左右坊城使并侍從尉防鴨河葛野河兩

所五位以下別當四年遷替弟責解由夏

右太政官去。天長元年六月十九日下民部省。
符傳參議左大臣從四位上眞世王奏狀傳侍
從尉并防鴨川葛野河兩所五位以下別當等
永預其事曾無交替河多奉繼有欠損何以拘稽之
公途理不可然望請自今以後限三箇年更相
遷替付領官物即責解由謹錄事狀伏聽。天
裁者右大臣宣奉藤冬嗣勅依奏者今被大納言正
三位兼行左近衛大將民部卿清原真人夏野
宣傳奉勅三年之歷從事迫促宜自今以後
四箇年為遷替期左右防城使同准之

天長八年十二月九日

類聚三代格第五

日本漢文史

籍叢刊

漢書

政書史評

[General Information]

□ □ =14664154

SS□ =14664154